

成塚向山古墳群

太田地域における前期古墳の調査

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

東日本高速道路株式会社
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

なり づか むけ やま

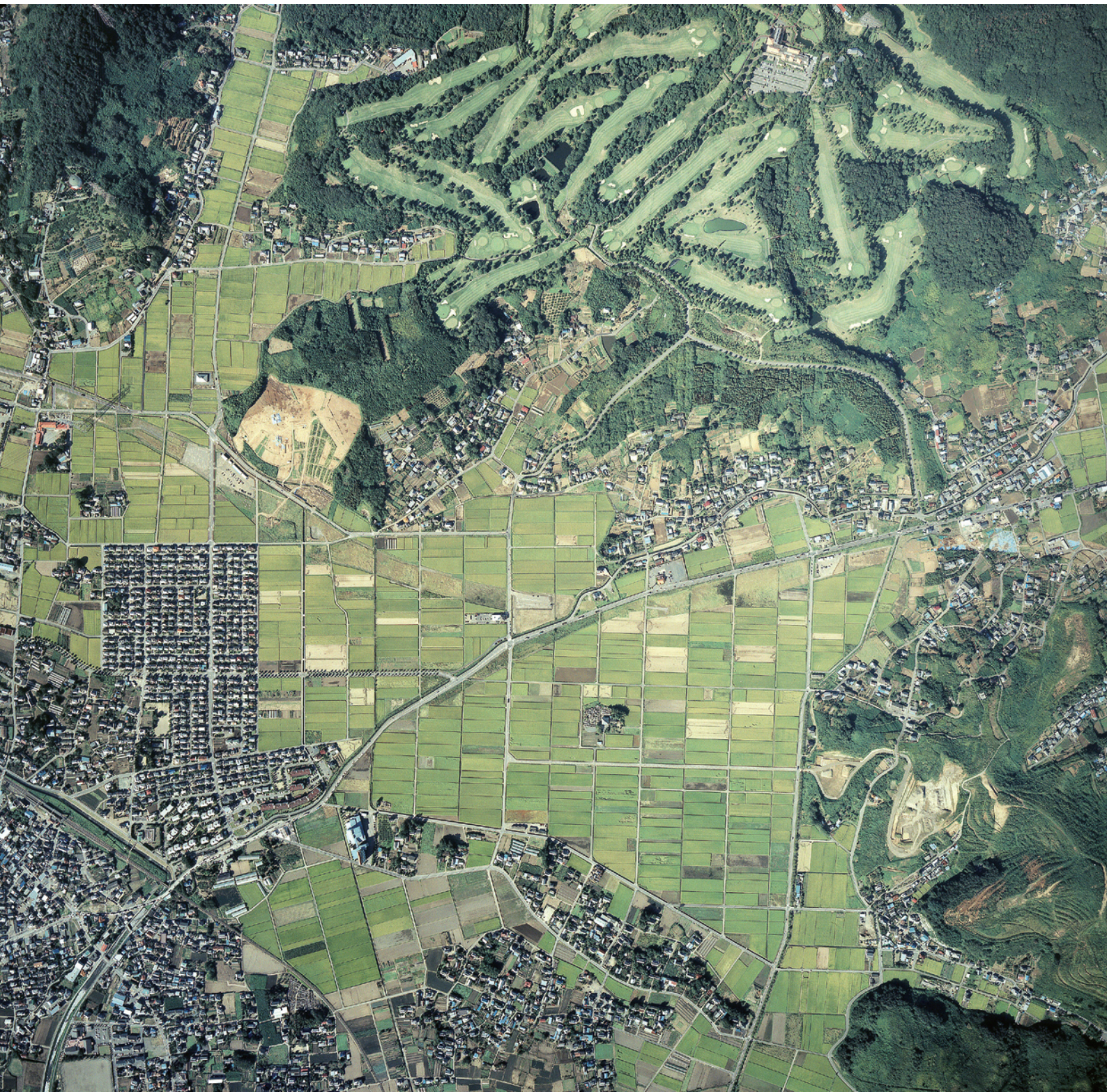
成塚向山古墳群

太田市域における前期古墳の調査

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

東日本高速道路株式会社
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



八王子丘陵および金山丘陵は桐生市南西部から太田市北部にわたって連なる低丘陵である。そしてこの丘陵の南西（写真左）は大間々扇状地・扇端部付近にあたり、それに接して広大な沖積低地（写真中央）が広がる。

4世紀の世。それ以前には実現し得なかった、大規模な低地開発がこの地で推し進められるようになった。そして、同じ頃、成塚向山1号墳は、これらの開発領域を眼下におくような丘陵先端部に築かれた。





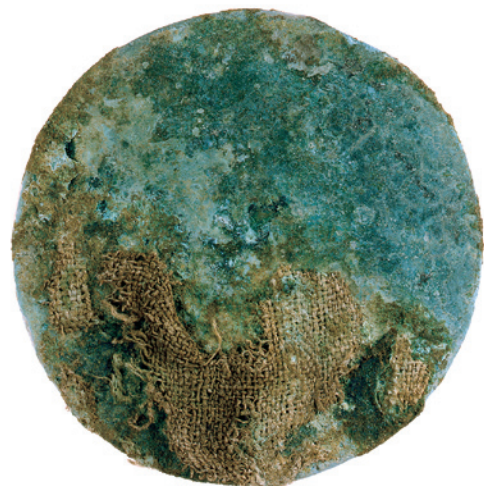
両鑄造柳葉式銅鏃 (第 1 主体部)



翡翠製勾玉 (第 1 主体部)



文様面



鏡面

小型重圈文鏡 (第 2 主体部)



鉞 2

鉞 1

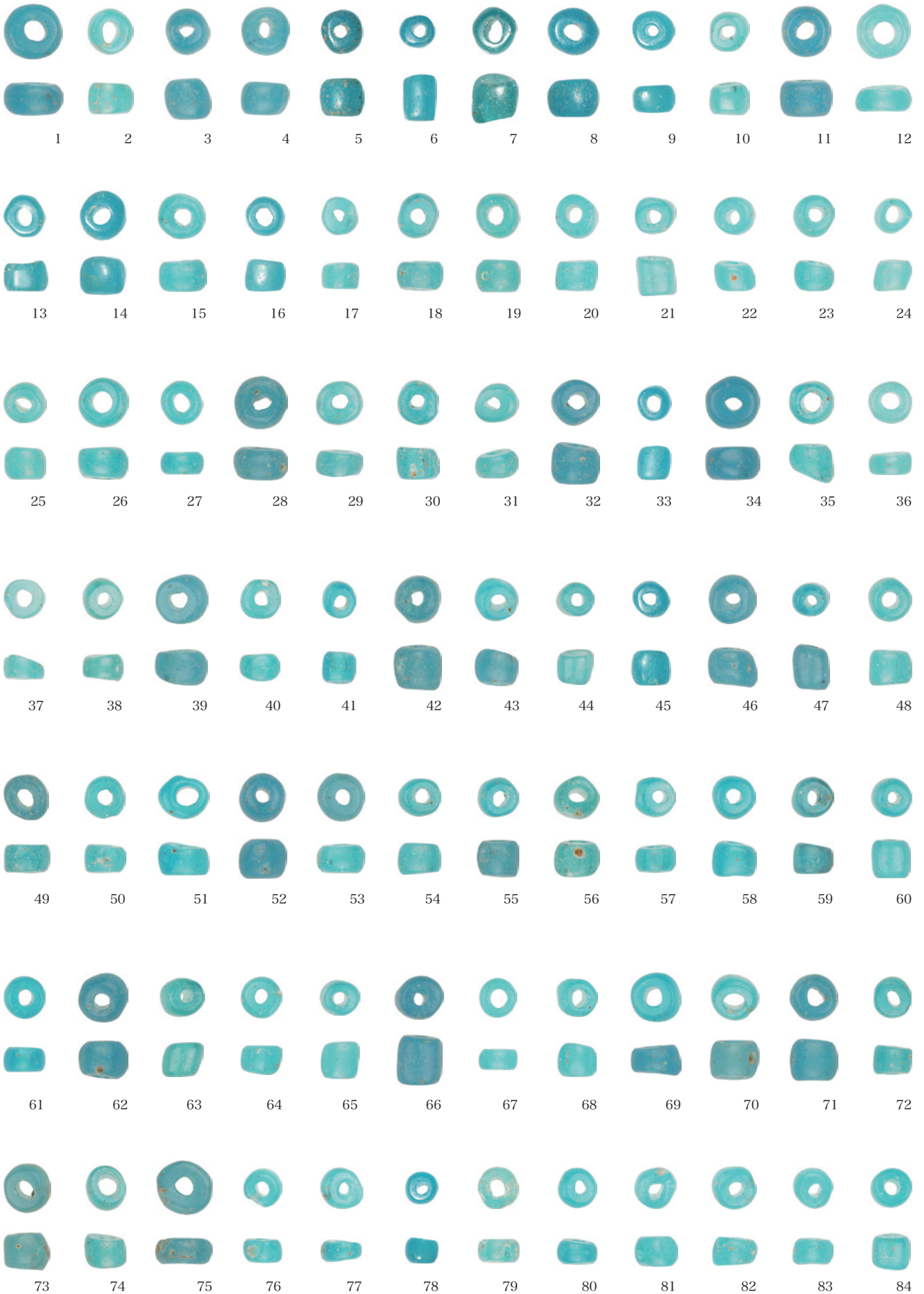
劍 1

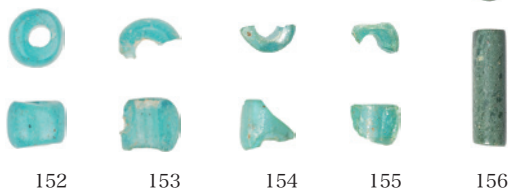
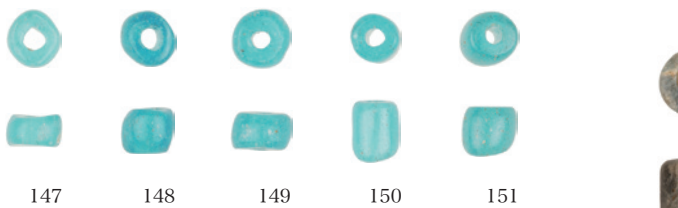
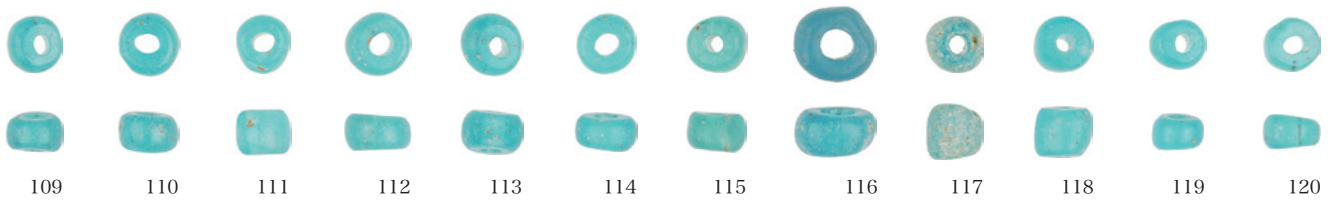
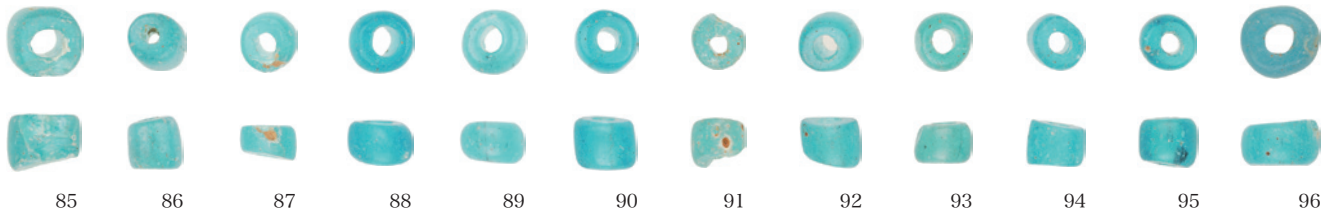
槍 1

槍 2

槍 3

鉄鉞・鉄劍・鉄槍 (第 1 主体部出土)

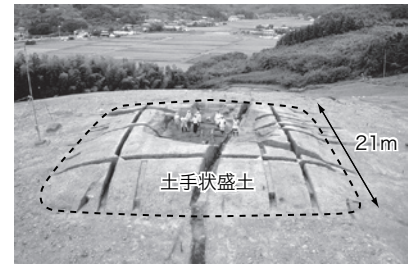






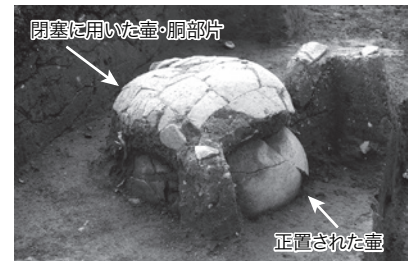
構築墓墳の検出

一辺 21 m の方墳である 1 号墳には、規模と形状を規定するように「土手状盛り土」が構築された。そして、その中央部の凹地の中に、被葬者の棺は埋置された。



盛土下から出土した壺

墳丘盛土下の地表面からは 1 個の壺が別の壺破片で蓋をされた状態で出土した。興味深い点は、この閉塞された破片が二重口縁壺の胴部であったことである。



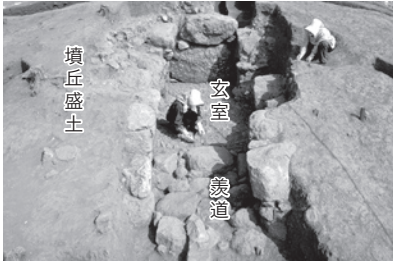
墳丘構築前に埋没した竪穴住居

墳丘下の旧地表面からは埋没した竪穴住居が検出された。20号住居と称したこの住居は浅間C軽石降下後に構築され、1号墳構築以前には埋没凹地化していることが判った。



横穴式石室の調査

一辺 18 m の円墳である 2 号墳では、埋葬施設である無袖型横穴式石室が調査された。石室内からは鉄鏃やガラス玉などの副葬品が出土し、年代決定の手がかりとなった。



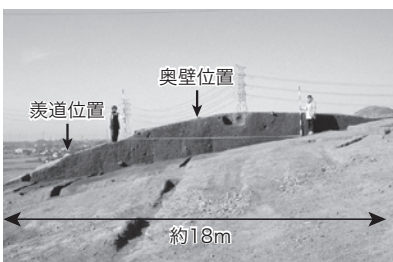
墳丘を周回する埴輪列

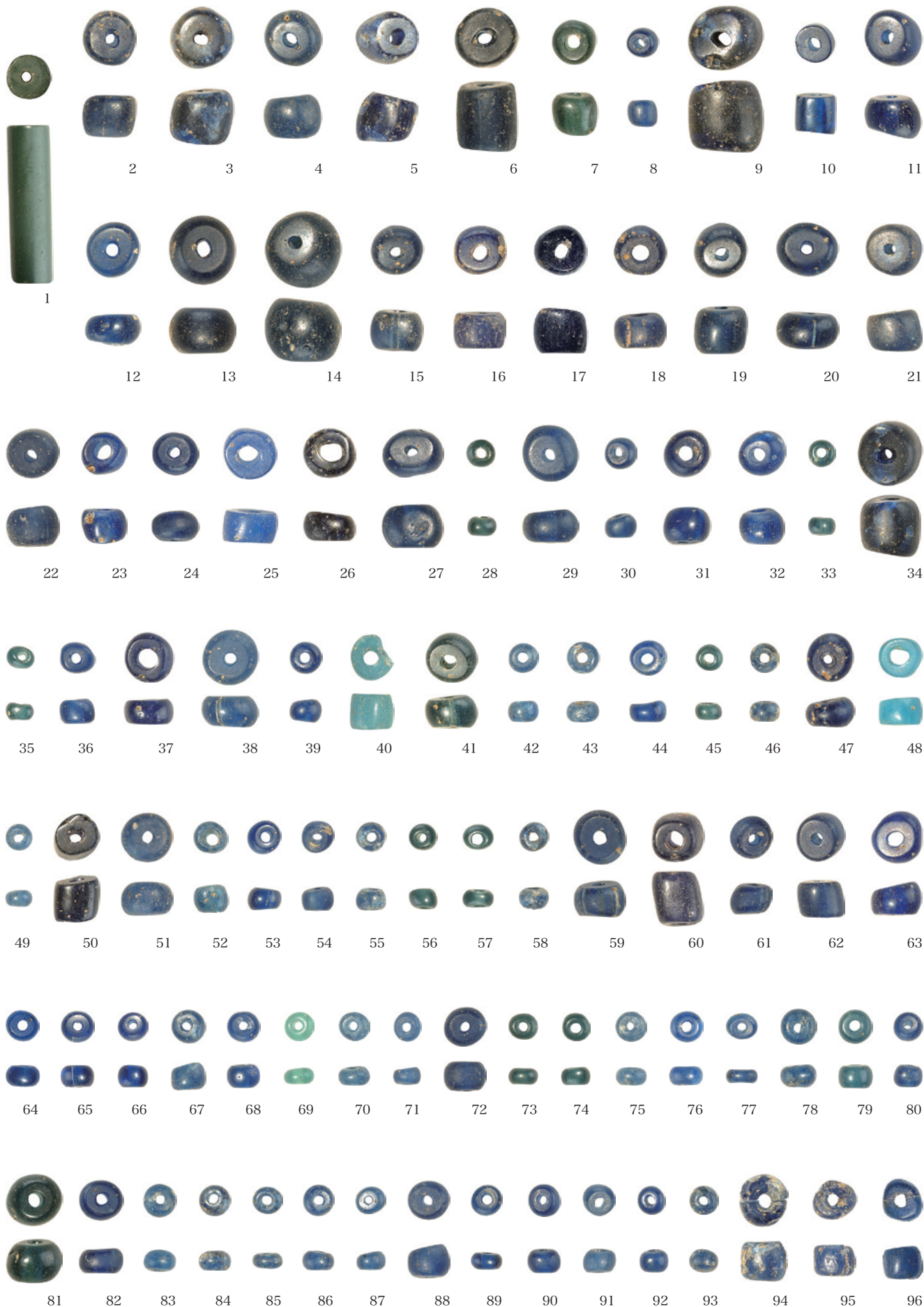
墳丘裾からは、古墳を廻るように埴輪列が、当時のままの位置で出土した。調査整理の結果、人物埴輪や馬形埴輪が一定の約束事に基づいて、配列されていることが判明した。



斜面に構築された墳丘盛土

墳丘盛土は急斜面の大幅な造成事業を行うことなく、ほぼそのままの斜面に構築されていた。なお、石室奥壁は墳丘のほぼ中心に位置していた。





序

成塚向山古墳群は、北関東自動車道太田パーキングエリアの建設工事に先立って、平成15・16年に発掘調査が行われた古墳群です。

古墳時代の群馬県地域は東国の中において傑出した繁栄を成し遂げた地域でしたが、とりわけ太田一帯は、その繁栄ぶりが際立った地域でした。その有様は、東日本最大の前方後円墳・太田天神山古墳や重要文化財の埴輪群を出土した塚廻り古墳群を筆頭に、数多くの古墳や同時代の遺跡を通して、現在を生きる私たちに語りかけています。

こうした繁栄の地にあった太田に所在する成塚向山古墳群ですが、この地の古墳にふさわしい内容が発掘調査によって明らかになりました。

特に、4世紀の築造とされる成塚向山1号墳からは、銅鏃・鉄槍・鉄剣・銅鏡・翡翠勾玉・ガラス小玉など、時代の雄のみが保有できる副葬品が多数出土しました。

この発掘成果については、平成15年12月と平成16年8月に2度の発掘調査現地説明会を開催し、県内外から訪れたのべ2,300名を超える見学者の皆様にも、その貴重な調査成果を知っていただくことができました。そして、これらの発掘調査成果は報告書作成段階の分析によって、その内容がより具体的になり、注目される副葬品は近畿地方さらには朝鮮半島からもたらされたことが明らかになりました。

1辺が20mほどの小さな方墳である成塚向山1号墳ですが、発掘調査の成果からは、この古墳の被葬者がヤマト政権との政治的関係を保持しつつ、この太田地域の開発リーダーとして、その任務を全うした人物のひとりであったことが想像されます。

発掘調査から報告書作成にいたるまで、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、地元関係者の方々には多くのご指導・ご協力を賜りました。報告書の上梓に際し、関係者の皆様には心から感謝を申し上げるとともに、併せて本書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い、序とします。

平成20年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例言

- 1 本書は、北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された「成塚向山古墳群」の発掘調査報告書である。なお、当遺跡は太田パーキングエリアの予定地に当たる。
- 2 「成塚向山古墳群」は群馬県太田市成塚町・北金井町・大鷲町に所在する。
- 3 遺跡の発掘調査及び整理事業は、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 発掘調査は、平成15年8月18日から平成17年3月31日まで実施した。また、整理事業は、平成17年4月1日から平成19年7月31日まで実施した。
- 5 発掘調査及び整理事業体制は次の通りである。

発掘業務管理指導…小野宇三郎・住谷永市・神保侑史・平野進一・真下高幸
整理事業管理指導…小野宇三郎・高橋勇夫・木村裕紀・津金澤吉茂・矢崎俊夫・萩原勉・中束耕志・佐藤明人

発掘事務担当…笠原秀樹・佐藤明人・藤巻幸男・柳岡良宏・今泉大作・北野勝美・清水秀紀・中澤恵子・金子三枝子

整理事務担当…笠原秀樹・宮前結城雄・相京建史・関晴彦・竹内宏・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・齋藤恵利子・今泉大作・齋藤陽子・栗原幸代・矢島一美・清水秀紀・佐藤聖行・今井もと子・内山佳子・若田誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・武藤秀典

発掘調査担当…坂井隆・大澤務・本間昇・深澤慶一・須田正久・齊田智彦・深澤敦仁・橋本淳・山田精一・長澤典子

整理事業担当…深澤敦仁・五十嵐由美子・横坂英実・牧野裕美・鬼形敏美・石田弘子・山田優子・林陽子・下川陽子・高梨由美子・小川直子

保存処理担当…関邦一・土橋まり子・小材浩一・津久井桂一・多田ひさ子・長岡久幸・森田智子・小池緑・田中のぶ子・生方茂美・野沢健

機械実測担当…友廣裕子・廣津真希子・酒井史恵・田所順子・伊東博子・岸弘子
- 6 本書の編集・執筆・写真撮影・組版は以下の通り、行った。

編集…深澤敦仁

執筆…「第1章 環境」から「第7章 歴史時代以降の遺構と遺物」までの事実報告については、佐藤明人・大木紳一郎・山田精一および深澤が主に行った。さらにこれらの事実報告のうち、成塚向山1号墳の鉄製品に関しては菊地芳朗氏（福島大学）、成塚向山1号墳および成塚向山2号墳の玉製品に関しては大賀克彦氏（島根県古代文化センター）、成塚向山1号墳の銅鏃に関しては杉山秀宏氏（群馬県立歴史博物館）、成塚向山1号墳の重圏文鏡に関しては林原利明氏（日本考古学協会）、縄文土器に関しては小川卓也氏（前橋市役所）、中近世遺物に関しては中島直樹氏（玉村町教育委員会）、竪穴住居調査所見に関して矢島博文氏より玉稿を賜った。

・「第8章 分析報告」については、淀川奈緒子氏（別府大学）・渡辺智恵美氏（別府大学）・平尾良光氏（別府大学）・谷水雅治氏（海洋研究所開発機構）、大澤正己氏（九州テクノリサーチ・

TAC センター)、藁科哲男氏 (遺物分析研究所)、田村朋美氏 (京都大学大学院)・大賀克彦氏、(島根県古代文化センター)・肥塚隆保氏 (奈良文化財研究所)、佐藤昌憲氏 (奈良文化財研究所)、飯島静男氏 (群馬地質研究会)、榑崎修一郎氏 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団) より玉稿を賜り、加えて株式会社古環境研究所、株式会社パレオ・ラボの一部を委託した。

・「第9章 考察」については、菊地芳朗氏 (福島大学)、大賀克彦氏 (島根県古代文化センター)、林原利明氏 (日本考古学協会会員)、沢田むつ代氏 (東京国立博物館)、田村朋美氏 (京都大学大学院)・大賀克彦氏 (島根県古代文化センター)・肥塚隆保氏 (奈良文化財研究所)、杉山秀宏氏 (群馬県立歴史博物館)、山賀和也氏 (長岡市教育委員会) より玉稿を賜り、一部は深澤が執筆した。

・「第10章 まとめ」については、深澤が執筆した。

(※なお、各執筆箇所の文頭または文末に記名あり)

写真撮影… (遺構写真) 坂井隆・大澤務・本間昇・深澤慶一・須田正久・齊田智彦・深澤敦仁・橋本淳・山田精一・長澤典子

(遺物写真) 深澤敦仁・牧野裕美・下川陽子・小川忠博・山際哲章・株式会社アルケ・リサーチ

組 版…深澤敦仁・五十嵐由美子・牧野裕美・山際哲章・割田博之

7 本古墳群の図面・写真・出土遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターが保管している。

8 発掘調査・報告書編集に際しては、下記の方々・機関には有益なご教示をいただいた。記して感謝します。

青木敬・阿佐見悦子・飯島義雄・石部正志・市橋一郎・今尾文昭・梅澤重昭・遠坂純伸・大澤伸啓・大竹弘之・太田博之・大塚初重・大道和人・加部二生・河内一浩・河野一隆・小菅将夫・小林修・小宮豪・小林孝秀・小宮俊久・今平利幸・齋藤和行・島田孝雄・志村哲・須藤宏・須永光一・清喜裕二・高橋一夫・田口一郎・玉田芳英・塚本敏夫・辻秀人・豊島直博・長井正欣・中里正憲・南雲芳昭・西川修一・西村健二・土生田純之・原田昌幸・坂靖・比佐陽一郎・日高慎・廣瀬覚・藤田典夫・藤野一之・古谷毅・北條芳隆・前原豊・松崎茂樹・松島栄治・右島和夫・宮田毅・柳沢一男・山内紀嗣・横澤真一・若狭徹 (五十音順)
東日本高速道路株式会社 群馬県教育委員会 太田市教育委員会 群馬県立歴史博物館 財団法人元興寺文化財研究所 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 別府大学

凡例

1 図中に使用した方位は、全て日本平面直角座標系 (世界測地系) の北を使用している。なお、遺構図中に表記したグリッド名称は、日本平面直角座標系 (世界測地系) の下3桁を用いて表記した。

(例: X=37500、Y=-43300 の場合は「500-300」)

2 遺構図・遺物図とも、縮尺は図毎にその縮率を表記した。

3 本書で掲載した国土地理院発行の地形図については、掲載図毎に地形図名を表記した。

4 遺構土層および遺物の色調表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1993年度版に準拠した。

5 本文及び図中におけるローマ数字を用いた層位名称は、全てが基本土層 (図5) を示す。

(例: XII層=基本土層のXII層=チャート層)

抄録

書名ふりがな	なりづかむけやまこふんぐん
書名	成塚向山古墳群
副書名	北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	426
編著者名	深澤敦仁・佐藤明人・大木紳一郎・榎崎修一郎・山田精一・山賀和也・杉山秀宏・菊地芳朗・林原利明・小川卓也・中島直樹・矢島博文・平尾良光・淀川奈緒子・渡辺智恵美・谷水雅治・大澤正己・沢田むつ代・藁科哲男・肥塚隆保・大賀克彦・田村朋美・飯島静男・佐藤昌憲・株式会社古環境研究所・株式会社パレオ・ラボ
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080118
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	なりづかむけやまこふんぐん
遺跡名	成塚向山古墳群
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしなりづかまち・おおわしまち・きたかないまち
遺跡所在地	群馬県太田市成塚町・大鷲町・北金井町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0111
北緯（日本測地系）	362015
東経（日本測地系）	1392105
北緯（世界測地系）	362026
東経（世界測地系）	1392053
調査期間	20030818-20050331
調査面積	46,800
調査原因	道路（パーキングエリア）建設工事
種別	古墳 / 集落 / 包蔵地
主な時代	古墳前期 / 古墳後期
遺跡概要	古墳 - 古墳前期 - 方墳 1 + 古墳後期 - 円墳 1 / 集落 - 古墳前期 - 竪穴住居 17 - 土師器 + 土製品 / 集落 - 平安 - 竪穴住居 2 - 土師器 + 須恵器 / 集落 - 平安～中世 - 溝 2 + 土坑 10 + 集石 3 - 土師器 + 須恵器 / 集落 - 近世 - 溝 15 + 井戸 3 + 土坑 4 + 集石 12 + 道 2 + テラス面 3 + 炭窯 2 - 陶磁器 + 瓦 + 古銭 / 包蔵地 - 旧石器 - 石器 / 包蔵地 - 縄文早期～中期 - 土器 + 石器 / 包蔵地 - 弥生中期 - 土器
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> 成塚向山 1 号墳古墳時代前期の方墳（一辺 21 m）であり、その墳丘構造や埋葬施設を調査。出土遺物は、副葬品として、銅鏃・鉄槍・鉄剣・鉄鉈・重圏文鏡・翡翠勾玉・ガラス小玉、水銀朱が出土している。 古墳時代前期の竪穴住居は成塚向山 1 号墳築造以前に形成された集落であり、出土した土師器の年代観からは、太田地域における最古段階の古墳時代集落と位置づけられる。 成塚向山 2 号墳は古墳時代後期の円墳（直径 18 m）であり、埋葬施設は横穴式石室である。石室内からは鉄鏃・ガラス小玉が出土しており、墳丘周囲からは埴輪（形象・円筒）が数多く出土している。

目 次

巻頭図版

序・例言・凡例・抄録

第1章	環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1	地勢的環境	2
2	歴史的環境	3
3	周辺の古墳について	
第2章	経緯・方法・経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
1	調査に至る経過	2
2	基本土層	3
3	名称について	
4	調査の方針・方法・経過	5
5	整理の方法と経過	6
6	普及活動	
第3章	調査報告1 古墳時代前期の竪穴住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・	15
1	概要	2
2	各竪穴住居について	3
3	出土遺物について	
第4章	調査報告2 成塚向山1号墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	81
1	調査前の状況	2
2	墳丘・周堀の調査	3
3	第1主体部の調査	
4	第2主体部の調査	5
5	墳丘盛土下の状況	6
6	出土遺物について	
第5章	調査報告3 成塚向山2号墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	163
1	調査前の状況	2
2	墳丘・周堀の調査	3
3	墳丘における埴輪樹立	
4	墳丘に伴う遺物の出土状況	5
5	横穴式石室	6
6	墳丘・石室の解体	
7	出土遺物について	
第6章	調査報告4 旧石器・縄文・弥生時代の遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・	285
1	旧石器時代の遺物	2
2	縄文時代の遺物	3
3	弥生時代の遺物	
第7章	調査報告5 歴史時代以降の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・	315
1	検出遺構について	2
2	出土遺物について	
第8章	分析報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	367
1	群馬県成塚向山1号墳から出土した銅鏃と仿製重圏文鏡の自然科学的調査	
2	成塚向山1号墳出土鉄槍の金属学的調査	
3	成塚向山1号墳出土ヒスイ製勾玉の産地分析	
4	成塚向山古墳群出土ガラス小玉の非破壊材質調査	
5	成塚向山1号墳出土の繊維材質分析	
6	成塚向山1号墳周辺の礫層について	
7	成塚向山1号墳出土人骨	
8	成塚向山古墳群の火山灰分析	
9	成塚向山1号墳における植物珪酸体分析	
10	成塚向山古墳群出土炭化材の樹種同定	
11	成塚向山1号墳第1主体部出土赤色塊の顔料分析	
12	成塚向山古墳群出土埴輪・土器の材料分析	
13	放射性炭素年代測定	

第9章 考察・・447

- 1 太田地域における古墳時代前期の土器編年試案
- 2 両鎬造柳葉式銅鏃について ～群馬県内の資料を中心に～
- 3 成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳
- 4 成塚向山1号墳出土の玉類 ～滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に～
- 5 成塚向山1号墳出土の重圏文鏡について
- 6 成塚向山1号墳出土遺物に付着する繊維について
- 7 成塚向山1号墳出土土器の検討 ～墳丘構築工程を関連づけた編年的検討の試み～
- 8 成塚向山2号墳出土の玉類
- 9 成塚向山2号墳出土鉄鏃について
- 10 成塚向山2号墳・横穴式石室の検討

第10章 まとめ・・553

- 1 古墳時代前期集落の形成要因
 - 2 成塚向山1号墳の築造時期について
 - 3 成塚向山2号墳の築造時期について
- 結

写真図版

挿図目次

図 1	成塚向山古墳群の位置	2	図 65	搬入路 検出前 (左)・検出時 (右) 平面図	94
図 2	成塚向山古墳群周辺の地形分類図	3	図 66	搬入路 閉塞土 断面図 (上)・遺物出土状況 平・断面図 (下)	95
図 3	成塚向山古墳群周辺遺跡分布図	6	図 67	構築墓壇 平・断面図	96
図 4	成塚向山古墳群周辺の古墳分布図	8	図 68	盛土および墳裾堆積土 土層分離模式図	97
図 5	基本土層 模式図	10	図 69	墳丘盛土および墳裾 遺物出土図	98
図 6	調査範囲全体図	11	図 70	墳裾エリア 1・2 遺物出土状況図	99
図 7	古墳時代前期住居分布図	16	図 71	底部穿孔 or 二重口縁壺のグリッド別分布状況図	100
図 8	3号住居 (1)	23	図 72	手焙形土器片 出土状況図	102
図 9	3号住居 (2)	24	図 73	墳丘盛土層位区分図	103
図 10	4号住居 (1)	25	図 74	第1主体部被覆土 断面図	105
図 11	4号住居 (2)	26	図 75	第1主体部 平面図	106
図 12	5号住居	27	図 76	第1主体部 断面図	107
図 13	6号住居 (1)	28	図 77	第1主体部 遺物出土状況 平・断面図	109
図 14	6号住居 (2)	29	図 78	第1主体部 副葬品出土状況 拡大図	110
図 15	7号住居 (1)	30	図 79	第2主体部 位置図および遺物出土位置図	111
図 16	7号住居 (2)	31	図 80	墳丘盛土下旧地表面 平・断面図	113
図 17	7号住居 (3)	32	図 81	墳丘盛土下地表面 遺物出土分布図	115
図 18	8号住居	33	図 82	墳丘盛土下平坦面エリア A 拡大図及び据え置き壺出土状況図	116
図 19	9号住居 (1)	34	図 83	墳丘盛土下平坦面エリア B 拡大図	117
図 20	9号住居 (2)	35	図 84	墳丘盛土下平坦面エリア C 拡大図	118
図 21	9号住居 (3)	36	図 85	墳丘盛土下平坦面 エレベーション図	119
図 22	10号住居	37	図 86	第1主体部出土 鈿 1・2	120
図 23	11号住居 (1)	38	図 87	第1主体部出土 剣 1	121
図 24	11号住居 (2)	39	図 88	第1主体部出土 槍 1	123
図 25	12号住居 (1)	40	図 89	第1主体部出土 槍 2	124
図 26	12号住居 (2)	41	図 90	第1主体部出土 槍 3	125
図 27	12号住居 (3)	42	図 91	第1主体部出土 銅鏃	126
図 28	14号住居 (1)	43	図 92	第2主体部出土 重圏文鏡	127
図 29	14号住居 (2)	44	図 93	1号墳出土玉製品 (1)	131
図 30	15・18号住居	45	図 94	1号墳出土玉製品 (2)	132
図 31	16号住居 (1)	46	図 95	古墳時代土器 実測図凡例	134
図 32	16号住居 (2)	47	図 96	成塚向山 1号墳 出土土器 (1)	151
図 33	19号住居 (1)	48	図 97	成塚向山 1号墳 出土土器 (2)	152
図 34	19号住居 (2)	49	図 98	成塚向山 1号墳 出土土器 (3)	153
図 35	19号住居 (3)	50	図 99	成塚向山 1号墳 出土土器 (4)	154
図 36	20号住居 (1)	51	図 100	成塚向山 1号墳 出土土器 (5)	155
図 37	20号住居 (2)	52	図 101	成塚向山 1号墳 出土土器 (6)	156
図 38	20号住居 (3)	53	図 102	成塚向山 1号墳 出土土器 (7)	157
図 39	20号住居 (4)	54	図 103	成塚向山 1号墳 出土土器 (8)	158
図 40	21号住居	55	図 104	成塚向山 1号墳 出土土器 (9)	159
図 41	古墳時代前期住居 出土土器実測図 凡例	57	図 105	成塚向山 1号墳 出土土器 (10)	160
図 42	古墳時代前期住居 出土土器 (1)	70	図 106	成塚向山 1号墳 出土土器 (11)	161
図 43	古墳時代前期住居 出土土器 (2)	71	図 107	成塚向山 1号墳 出土土器 (12)	162
図 44	古墳時代前期住居 出土土器 (3)	72	図 108	調査着手前の現況地形図	164
図 45	古墳時代前期住居 出土土器 (4)	73	図 109	墳丘 平・断面図	165
図 46	古墳時代前期住居 出土土器 (5)	74	図 110	墳丘裾・周堀 確認トレンチ 平・断面図	167
図 47	古墳時代前期住居 出土土器 (6)	75	図 111	埴輪樹立状況 平面・見通し図	169
図 48	古墳時代前期住居 出土土器 (7)	76	図 112	円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (1)	170
図 49	古墳時代前期住居 出土土器 (8)	77	図 113	円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (2)	171
図 50	古墳時代前期住居 出土土器 (9)	78	図 114	円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (3)	172
図 51	古墳時代前期住居 出土土器 (10)	79	図 115	円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (4)	173
図 52	古墳時代前期住居 出土土器 (11)	80	図 116	円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (5)	174
図 53	調査着手前の現況地形図	82	図 117	円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (6)	175
図 54	平成 11 年度調査時/平・断面図 (左) および出土遺物図 (右)	83	図 118	円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (7)	176
図 55	墳丘 平・断面図	84	図 119	円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (8)	177
図 56	墳丘盛土構造模式図	85	図 120	人物と想定される形象埴輪基部	178
図 57	墳裾確認トレンチ 平・断面図 (1)	86	図 121	人物 (?) 埴輪樹立状況 平・断面図	179
図 58	墳裾確認トレンチ 平・断面図 (2)	87	図 122	馬形埴輪および人物 (?) 埴輪基部樹立状況 平・断面図 (1)	180
図 59	周堀確認トレンチ 配置図	88	図 123	馬形埴輪および人物 (?) 埴輪基部樹立状況 平・断面図 (2)	181
図 60	周堀確認トレンチ 断面図 (1)	89	図 124	グリッド別 埴輪出土量	183
図 61	周堀確認トレンチ 断面図 (2)	90	図 125	人物埴輪片 グリッド別分布図	184
図 62	墳丘断割ライン平面位置図	91			
図 63	墳丘盛土 断面図 (1)	92			
図 64	墳丘盛土 断面図 (2)	93			

図 126	馬形埴輪片	グリッド別分布図	185
図 127	形象埴輪 (鈴片)	グリッド別分布図	186
図 128	家形埴輪片	グリッド別分布図	187
図 129	軛形埴輪片	グリッド別分布図	188
図 130	鞍形埴輪片	グリッド別分布図	189
図 131	盾および大刀形埴輪片	グリッド別分布図	190
図 132	不明埴輪片	グリッド別分布図	191
図 133	石室平面図および羨道部閉塞状況平・断面図		192
図 134	石室内遺物出土状況図		193
図 135	石室床面	平・断面図	194
図 136	石室舗石面	平・断面図	195
図 137	石室	展開図	197
図 138	墳丘断ち割り断面図 (1)		198
図 139	墳丘断ち割り断面図 (2)		199
図 140	墳丘断ち割り位置ポイント図		200
図 141	石材番号・積み方模式図		201
図 142	石室根石	平・断面図	202
図 143	石室掘り方平面図および出土遺物		203
図 144	墳丘下地山面	平面図	204
図 145	墳裾部出土	円筒埴輪 (1)	212
図 146	墳裾部出土	円筒埴輪 (2)	213
図 147	墳裾部出土	円筒埴輪 (3)	214
図 148	墳裾部出土	円筒埴輪 (4)	215
図 149	墳裾周辺部出土	円筒埴輪 (1)	216
図 150	墳裾周辺部出土	円筒埴輪 (2)	217
図 151	墳裾周辺部出土	円筒埴輪 (3)	218
図 152	墳裾周辺部出土	円筒埴輪 (4)	219
図 153	墳裾周辺部出土	円筒埴輪 (5)	220
図 154	墳裾周辺部出土	円筒埴輪 (6)	221
図 155	墳裾周辺部出土	円筒埴輪 (7)	222
図 156	墳裾部出土	形象埴輪基部 (1)	237
図 157	墳裾部出土	形象埴輪基部 (2)	238
図 158	墳裾部出土	形象埴輪基部 (3)	239
図 159	墳裾部および墳裾周辺部出土	形象埴輪基部	240
図 160	墳裾部および墳丘周辺部出土	人物埴輪 (1)	241
図 161	墳裾部および墳丘周辺部出土	人物埴輪 (2)	242
図 162	墳裾部および墳丘周辺部出土	人物埴輪 (3)	243
図 163	墳裾部および墳丘周辺部出土	人物埴輪 (4)	244
図 164	墳裾部および墳丘周辺部出土	人物埴輪 (5)	245
図 165	墳裾部および墳丘周辺部出土	人物埴輪 (6)	246
図 166	馬形埴輪 (1)		247
図 167	馬形埴輪 (2)		248
図 168	馬形埴輪 (3)		249
図 169	馬形埴輪 (4)		250
図 170	馬形埴輪 (5)		251
図 171	馬形埴輪 (6)		252
図 172	馬形埴輪 (7)		253
図 173	馬形埴輪 (8)		254
図 174	馬形埴輪 (9)		255
図 175	馬形埴輪 (10)		256
図 176	形象埴輪 (鈴片)		257
図 177	家形埴輪 (1)		258
図 178	家形埴輪 (2)		259
図 179	家形埴輪 (3)		260
図 180	家形埴輪 (4)		261
図 181	家形埴輪 (5)		262
図 182	軛形埴輪 (1)		263
図 183	軛形埴輪 (2)		264
図 184	鞍形埴輪 (1)		265
図 185	鞍形埴輪 (2)		266
図 186	鞍形埴輪 (3)		267
図 187	鞍形埴輪 (4)・盾形埴輪		268
図 188	大刀形埴輪 (1)		269
図 189	大刀形埴輪 (2)・形式不明形象埴輪 (1)		270
図 190	形式不明形象埴輪 (2)		271
図 191	形式不明形象埴輪 (3)		272
図 192	形式不明形象埴輪 (4)		273

図 193	形式不明形象埴輪 (5)		274
図 194	形式不明形象埴輪 (6)		275
図 195	鉄鏃計測位置 凡例		276
図 196	石室内出土 鉄製品 (1)		278
図 197	石室内出土 鉄製品 (2)		279
図 198	石室内出土 玉製品 (1)		282
図 199	石室内出土 玉製品 (2)		283
図 200	墳丘盛土下および周辺部		284
図 201	旧石器 (1)		286
図 202	旧石器 (2)		287
図 203	縄文時代石器 (1)		293
図 204	縄文時代石器 (2)		294
図 205	縄文時代石器 (3)		295
図 206	縄文時代石器 (4)		296
図 207	縄文時代石器 (5)		297
図 208	縄文時代石器 (6)		298
図 209	縄文時代石器 (7)		299
図 210	縄文時代石器 (8)		300
図 211	縄文土器 (1)		300
図 212	縄文土器 (2)		301
図 213	縄文土器 (3)		302
図 214	縄文土器 (4)		303
図 215	弥生土器 (1)		309
図 216	弥生土器 (2)		310
図 217	弥生土器 (3)		311
図 218	弥生土器 (4)		312
図 219	弥生土器 (5)		313
図 220	弥生土器 (6)		314
図 221	成塚向山古墳群 遺構全体図		316
図 222	1号住居 (1)		324
図 223	1号住居 (2)		325
図 224	12・13号住居		326
図 225	1～3・5号土坑		327
図 226	6～11号土坑		328
図 227	12～15号土坑		329
図 228	1～5号溝		330
図 229	6～9号溝		331
図 230	10・11・13～16号溝		332
図 231	12・15号溝セクション		333
図 232	17号溝		334
図 233	1・2号井戸		335
図 234	3号井戸		336
図 235	1～4号集石		337
図 236	5号集石		338
図 237	6～10号集石		339
図 238	11～16号集石		340
図 239	1・2号炭窯		341
図 240	1号道路・1～3号テラス		342
図 241	瓦溜まりセクション		343
図 242	2号道路		344
図 243	1・13号住居 出土遺物		353
図 244	15・17号溝・2・4・5号集石 出土遺物		354
図 245	井戸出土 陶磁器 (1)		355
図 246	井戸出土 陶磁器 (2)		356
図 247	井戸出土 陶磁器 (3)		357
図 248	井戸出土 陶磁器 (4)		358
図 249	井戸出土 陶磁器 (5)		359
図 250	井戸出土 陶磁器 (6)		360
図 251	井戸出土 陶磁器 (7)		361
図 252	1・2号井戸出土 瓦		361
図 253	2号井戸出土 瓦		362
図 254	瓦溜まり出土 瓦 (1)		362
図 255	瓦溜まり出土 瓦 (2)		363
図 256	瓦溜まり出土 瓦 (3)		364
図 257	井戸出土 木製品		365
図 258	石製品		366
図 259	古銭		366

第8章

1 群馬県成塚向山1号墳から出土した銅鍔と仿製重圏文鏡の自然科学的調査

図1 成塚向山1号墳から出土した銅鍔と銅鏡が示す鉛同位体比 (A式図) 372

図2 成塚向山1号墳から出土した銅鍔と銅鏡が示す鉛同位体比 (B式図) 372

図3 群馬県成塚向山1号墳と愛知県朝日谷古墳出土銅鍔の鉛同位体比 (A式図) 373

図4 群馬県成塚向山1号墳と愛知県朝日谷古墳出土銅鍔の鉛同位体比 (拡大図) 373

3 成塚向山1号墳出土ヒスイ製勾玉の産地分析

図1 ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類使用遺跡分布圏 390

図2 成塚向山1号墳出土ヒスイ製勾玉の元素比値 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分析値 392

図3 成塚向山1号墳出土ヒスイ製勾玉の元素比値 Ca/Sr 対 Sr/Fe の分析値 392

図4 成塚向山1号墳出土ヒスイ製勾玉の元素比値 Na/Si 対 Mg/Si の分析値 393

図5 成塚向山1号墳出土勾玉 (95429) の蛍光 X線スペクトル 393

4 成塚向山古墳群出土ガラス小玉の非破壊材質調査

図1 1号墳出土ガラス小玉のCR画像からの画像強調処理 395

図2 1号墳出土ガラス小玉のAR画像 395

図3 2号墳出土ガラス小玉のAR画像 395

5 成塚向山1号墳出土の繊維材質分析

図1 出土繊維試料の赤外スペクトル 402

8 成塚向山古墳群の火山灰分析

図1 成塚向山古墳群 分析地点セクション柱状図 412

図2 成塚向山古墳群 1号墳の重鋳物組成ダイヤグラム 413

図3 成塚向山1号墳 分析資料採取地点 413

9 成塚向山1号墳における植物珪酸体分析

図1 成塚向山1号墳 Aセクションにおける植物珪酸分析結果 415

10 成塚向山古墳群出土炭化材の樹種同定

図1 住居出土 炭化材 (1) 423

図2 住居出土 炭化材 (2) 424

図3 住居・土坑・炭窯出土 炭化材 425

11 成塚向山1号墳第1主体部出土赤色塊の顔料分析

図1 赤色塊の蛍光 X線スペクトル図 430

12 成塚向山古墳群出土埴輪・土器の材料分析

図1 太田市周辺の地質概略図 440

13 放射性炭素年代測定

図1 暦年代正較結果 446

第9章

1 太田地域における古墳時代前期の土器編年試案

図1 甕 分類図 451

図2 甕 分類図 453

図3 高坏・器台・鉢・有孔鉢・片口・蓋 分類図 455

図4 太田地域における集落遺跡出土甕の編年案 464

図5 太田地域における集落遺跡出土壺の編年案 465

図6 太田地域における集落遺跡出土高坏・器台・鉢・有孔鉢・片口・蓋の編年案 466

図7 太田地域における墳墓出土土器の編年案 467

図8 太田地域と類似様相を呈する地域 469

図9 群馬地域南部編年との併行関係案 469

2 両鎬造柳葉式銅鍔について ～群馬県内の資料を中心に～

図1 県外主要両鎬造柳葉銅鍔図 474

図2 県内両鎬造柳葉銅鍔図 (その1) 475

図3 県内両鎬造柳葉銅鍔図 (その2) 476

図4 県内両鎬造柳葉銅鍔図 (その3) 477

図5 凡例 銅鍔計測値 482

3 成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳

図1 長茎短剣の諸例 485

図2 栃木県山王寺大榎塚古墳 (粘土椀) 出土の刀剣と鉈 487

図3 古墳時代中期における槍の柄構造の変化 491

図4 関連する槍 491

図5 鉄装槍の諸例 492

4 成塚向山1号墳出土の玉類 ～滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に～

図1 滑石製管玉の法量分布 505

5 成塚向山1号墳出土の重圏文鏡について

図1 重圏文鏡の諸例 520

7 成塚向山1号墳出土土器の検討 ～墳丘構築工程を関連づける編年的検討の試み～

図1 成塚向山1号墳と隣接する堅穴住居群 527

図2 成塚向山1号墳の築造選地 527

図3 第2工程における整地面 (上・右) と焼土集中地点 (右) 528

図4 第3工程における破砕土器片分布 (左) と設置された壺 (右) 529

図5 第4工程における土手状盛土構築 (左) と第5工程における第1主体部の設置 (右) 530

図6 第7～8工程における墳丘盛土構築 (左) と第10工程における第2主体部の設置 (右) 531

図7 各構築工程と対応する盛土の分層模式図 532

図8 墳丘盛土下の時期推定のための基準土器 533

図9 7層およびM4層からの出土土器とその傾向 534

図10 M2層・M3層・M5層およびM6層からの出土土器とその傾向 535

図11 M1層からの出土土器とその傾向 536

図12 1～4層からの出土土層とその傾向 537

図13 各層位出土土器の編年的位置 539

9 成塚向山2号墳出土鉄鍔の検討について

図1 成塚向山2号墳出土鉄鍔関連鉄鍔図 546

10 成塚向山2号墳・横穴式石室の検討

図1 成塚向山2号墳 横穴式石室 (1/100) 548

図2 分析対象の古墳分布図 549

図3 東毛地域における横穴式石室編年 551

第10章

図1 成塚向山古墳群周辺地形の鳥瞰CG図 553

図2 成塚向山古墳群における古墳時代住居出土遺物の太田編年における位置 556

図3 時期別の住居分布状況 557

図4 北関東における土器動態概念図 559

図5 墳丘構築工程を基準とした出土土器と副葬品の時系列位置 564

図6 群馬県地域の区分図 566

図7 群馬県地域 (足利を含む) の前期墳墓編年表1 566

図8 群馬県地域 (足利を含む) の前期墳墓編年表2 567

図9 成塚向山2号墳の埴輪配列推定模式図 569

図10 群集墳の主な属性の変遷 569

表目次

表 1	成塚向山古墳群周辺遺跡一覧表	7
表 2	調査経過表	13
表 3	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (1)	58
表 4	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (2)	59
表 5	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (3)	60
表 6	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (4)	61
表 7	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (5)	62
表 8	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (6)	63
表 9	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (7)	64
表 10	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (8)	65
表 11	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (9)	66
表 12	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (10)	67
表 13	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (11)	68
表 14	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (12)	69
表 15	古墳時代前期住居 出土土器観察表 (13)	70
表 16	墳丘表面及び墳裾出土遺物の傾向グラフ	101
表 17	盛土中遺物出土傾向グラフ	103
表 18	盛土中遺物層位別出土傾向グラフ	104
表 19	墳丘盛土下平坦面出土遺物の傾向グラフ	114
表 20	成塚向山 1 号墳 玉製品観察表 (1)	128
表 21	成塚向山 1 号墳 玉製品観察表 (2)	129
表 22	成塚向山 1 号墳 玉製品観察表 (3)	130
表 23	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (1)	135
表 24	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (2)	136
表 25	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (3)	137
表 26	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (4)	138
表 27	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (5)	139
表 28	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (6)	140
表 29	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (7)	141
表 30	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (8)	142
表 31	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (9)	143
表 32	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (10)	144
表 33	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (11)	145
表 34	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (12)	146
表 35	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (13)	147
表 36	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (14)	148
表 37	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (15)	149
表 38	成塚向山 1 号墳 出土遺物観察表 (16)	150
表 39	石室石材 計測表	201
表 40	円筒埴輪 観察表 (1)	206
表 41	円筒埴輪 観察表 (2)	207
表 42	円筒埴輪 観察表 (3)	208
表 43	円筒埴輪 観察表 (4)	209
表 44	円筒埴輪 観察表 (5)	210
表 45	円筒埴輪 観察表 (6)	211
表 46	成塚向山 2 号墳出土 形象埴輪・基部 観察表	224
表 47	成塚向山 2 号墳出土 鉄鏃計測表 (1)	276
表 48	成塚向山 2 号墳出土 鉄鏃計測表 (2)	277
表 49	成塚向山 2 号墳出土 玉製品計測表 (1)	280
表 50	成塚向山 2 号墳出土 玉製品計測表 (2)	281
表 51	成塚向山 2 号墳出土 土器観察表	284
表 52	旧石器 観察表	286
表 53	縄文石器 観察表 (1)	288
表 54	縄文石器 観察表 (2)	289
表 55	縄文土器 観察表 (1)	289
表 56	縄文土器 観察表 (2)	290
表 57	縄文土器 観察表 (3)	291
表 58	縄文土器 観察表 (4)	292
表 59	弥生土器 観察表 (1)	304
表 60	弥生土器 観察表 (2)	305
表 61	弥生土器 観察表 (3)	306
表 62	弥生土器 観察表 (4)	307
表 63	弥生土器 観察表 (5)	308
表 64	歴史時代遺構 出土土器観察表 (1)	345
表 65	歴史時代遺構 出土土器観察表 (2)	346
表 66	陶磁器 観察表 (1)	348
表 67	陶磁器 観察表 (2)	349
表 68	陶磁器 観察表 (3)	350
表 69	陶磁器 観察表 (4)	351
第 8 章		
1 群馬県成塚向山 1 号墳から出土した銅鏃と仿製重圏文鏡の自然科学的調査		
表 1	成塚向山 1 号墳出土青銅製品の鉛同位体比	370
2 成塚向山 1 号墳出土鉄槍の金属学的調査		
Table 1	供試材の履歴と調査項目	375
Table 2	出土遺物のビッカース断面硬度	377
Table 3	出土遺物の調査結果のまとめ	378
3 成塚向山 1 号墳出土ヒスイ製勾玉の産地分析		
表 1	ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準 (1)	390
表 2	ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準 (2)	391
表 3	成塚向山 1 号墳出土のヒスイ製勾玉の元素分析値と比量の結果	391
表 4	成塚向山 1 号墳出土のヒスイ製勾玉の原材産地分析結果	391
4 成塚向山古墳群出土ガラス小玉の非破壊蛍光 X 線分析		
表 1	成塚向山 1 号墳出土ガラス小玉の非破壊蛍光 X 線分析結果	400
表 2	成塚向山 2 号墳出土ガラス小玉の非破壊蛍光 X 線分析結果	400
7 成塚向山 1 号墳出土土人骨		
表 1	成塚向山 1 号墳出土下顎右第 1 大臼歯歯冠計測値及び比較表	405
8 成塚向山古墳群の火山灰分析		
表 1	テフラ検出分析結果	411
表 2	重鉱物組成分析結果	411
9 成塚向山 1 号墳における植物珪酸体分析		
表 1	成塚向山遺跡における植物珪酸体分析結果	416
10 成塚向山古墳群出土炭化材の樹種同定		
表 1	成塚向山古墳群出土炭化材の樹脂同定結果一覧	421
表 2	成塚向山古墳群出土炭化材の樹脂同定結果一覧	422
表 3	成塚向山古墳群出土炭化材の遺構・時期別の検出分類群	422
11 成塚向山 1 号墳第 1 主体部出土赤色塊の顔料分析		
表 1	分析試料とその詳細	429
表 2	分析結果と顔料の種類	429
12 成塚向山古墳群出土埴輪・土器の材料分析		
表 1	胎土材料を検討した埴輪および土器試料とその特徴	432
表 2	埴輪および土器胎土の粘土および砂粒物の特徴	438
表 3	試料中の岩石片の分類と組み合わせ	439
13 放射性炭素年代測定		
表 1	測定試料及び処理	445
表 2	放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果	445
第 9 章		
1 太田地域における古墳時代前期の土器編年試案		
表 1	集落遺跡出土土器における共伴関係	458
表 2	墳墓出土土器における共伴関係	459
表 3	集落遺跡出土土器における形式毎の消長	460
表 4	墳墓出土土器における形式毎の消長	460
表 5	群馬県各地域との併行関係	469
表 6	県外他地域との併行関係 (案)	470
2 両鎚造柳葉式銅鏃について ～群馬県内の資料を中心に～		
表 1	群馬県出土銅鏃一覧表	472
表 2	主要両鎚造柳葉式銅鏃法量一覧表	483

表3 群馬県内出土両鎚造柳葉式銅鏃法量一覧表・・・・・・・・ 484

3 成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳

表1 成塚向山1号墳と共通する鉄製品を副葬する古墳・・・・ 486

表2 東日本における被破壊鉄器とみられる事例・・・・・・・・ 488

表3 東日本における4点以上の刀剣類を副葬する前期古墳・495

4 成塚向山1号墳出土の玉類 ～滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に～

表1 滑石製品と三角縁神獣鏡の相伴状況・・・・・・・・ 501

表2 (1) 西日本を中心に分布する滑石製玉類出土一覧(1) 508

表2 (2) 西日本を中心に分布する滑石製玉類出土一覧(2) 509

表3 古墳時代前期の滑石製白玉出土一覧・・・・・・・・ 511

表4 北関東における前半期古墳出土玉類の構成・・・・・・・・ 516

7 成塚向山1号墳出土土器の検討

表1 出土遺物の層位別出土傾向比較・・・・・・・・ 538

8 成塚向山2号墳出土の玉類

表1 成塚向山2号墳出土ガラス小玉の観察結果・・・・・・・・ 544

10 成塚向山2号墳・横穴式石室の検討

表1 横穴式石室集成表・・・・・・・・ 549

表2 階層性・・・・・・・・ 550

表3 無袖型石室比率表・・・・・・・・ 552

第10章

表1 古墳時代住居の帰属時期(案)・・・・・・・・ 559

表2 群馬県内柳葉形銅鏃の編年案(杉山案)・・・・・・・・ 564

写真目次

写真1 八王子丘陵と成塚向山古墳群・・・・・・・・ 1

写真2 調査中の成塚向山古墳群・・・・・・・・ 9

写真3 デジタル編集作業データ・・・・・・・・ 14

写真4 調査報告書 デジタル編集業務・・・・・・・・ 14

写真5 第1回現地説明会・・・・・・・・ 14

写真6 現地説明会資料・・・・・・・・ 14

写真7 古墳時代前期の竪穴住居群・・・・・・・・ 15

写真8 成塚向山1号墳の調査前状況・・・・・・・・ 82

写真9 平成11年度調査前現況・・・・・・・・ 83

写真10 調査前状況・・・・・・・・ 164

写真11 調査前状況・・・・・・・・ 164

第8章

1 群馬県成塚向山1号墳から出土した銅鏃と仿製重圏文鏡の自然科学的調査

写真1 群馬県成塚向山1号墳 銅鏃 No. 1・・・・・・・・ 374

写真2 群馬県成塚向山1号墳 銅鏃 No. 2・・・・・・・・ 374

写真3 群馬県成塚向山1号墳 銅鏃 No. 3・・・・・・・・ 374

写真4-1 群馬県成塚向山1号墳 銅鏡(鏡面)・・・・・・・・ 374

写真4-2 群馬県成塚向山1号墳 銅鏡(文様面)・・・・・・・・ 374

写真4-3 群馬県成塚向山1号墳 銅鏡(側面)・・・・・・・・ 374

2 成塚向山1号墳出土鉄槍の金属学的調査

Photo. 1 成塚向山1号墳出土槍1 (NTM-1)の顕微鏡組織 380

Photo. 2 成塚向山1号墳出土槍3 (NTM-2)の顕微鏡組織 381

Photo. 3 マクロ組織・・・・・・・・ 382

Photo. 4 NTM-1(槍1)の顕微鏡組織・・・・・・・・ 383

Photo. 5 NTM-3(槍3)の顕微鏡組織・・・・・・・・ 384

Photo. 6 EPMA 調査結果反射電子像 (COMP) および定量分析値・・・・・・・・ 385

4 成塚向山古墳群出土ガラス小玉の非破壊材質調査

写真1 成塚向山1号墳 ガラス・・・・・・・・ 398

写真2 成塚向山2号墳 ガラス(1)・・・・・・・・ 398

写真3 成塚向山2号墳 ガラス(2)・・・・・・・・ 399

5 成塚向山1号墳出土の繊維材質分析

写真1 実体顕微鏡写真(1)・・・・・・・・ 402

写真2 実体顕微鏡写真(2)・・・・・・・・ 402

写真3 実体顕微鏡写真(3)・・・・・・・・ 402

6 成塚向山1号墳周辺の礫層について

写真1 墳丘南側 周辺礫検出状況・・・・・・・・ 403

7 成塚向山1号墳出土人骨

写真1 成塚向山1号墳第2主体部出土 下顎右第1大臼歯咬合面観・・・・・・・・ 405

9 成塚向山1号墳における植物珪酸体分析

写真1 植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真・・ 417

10 成塚向山古墳群出土炭化材の樹種同定

写真1 成塚向山古墳群出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真・・・・・・・・ 426

写真2 成塚向山古墳群出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真・・・・・・・・ 427

写真3 成塚向山古墳群出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真・・・・・・・・ 428

11 成塚向山1号墳第1主体部出土赤色塊の顔料分析

写真1 主体部土壌中の水銀朱の塊の産出状況写真・・・・ 430

12 成塚向山古墳群出土埴輪・土器の材料分析

写真1 土器胎土中の粒子顕微鏡写真(スケール;500 μ m) 441

写真2 土器胎土中の粒子顕微鏡写真(スケール;500 μ m) 442

写真3 土器胎土中の粒子顕微鏡写真(スケール;500 μ m) 443

写真4 土器胎土中の粒子顕微鏡写真(No.は試料No.に対応) 444

第9章

6 成塚向山1号墳出土遺物に付着する繊維について

写真1 鉄ヤリ1 茎部分・・・・・・・・ 524

写真2 同 部分拡大・・・・・・・・ 524

写真3 同 巻き糸部分拡大・・・・・・・・ 524

写真4 鉄ヤリ2 茎部分・・・・・・・・ 524

写真5 同 巻き糸部分拡大・・・・・・・・ 524

写真6 鉄ヤリ3 茎部分・・・・・・・・ 524

写真7 同 茎部分(反対側)・・・・・・・・ 524

写真8 同 柄口近くの巻き糸部分(反対側)・・・・・・・・ 524

写真9 同 茎尻近くの巻き糸部分(反対側)・・・・・・・・ 525

写真10 同 巻き糸部分拡大・・・・・・・・ 525

写真11 鉄ヤリガンナ2 握部・・・・・・・・ 525

写真12 同 身部に遺る繊維(平絹)・・・・・・・・ 525

写真13 同 平絹拡大(写真の左右が経紡向)・・・・・・・・ 525

写真14 重圏文鏡 鏡面・・・・・・・・ 525

写真15 同 鏡面に付着する繊維(麻布)・・・・・・・・ 525

写真16 同 縁側面・・・・・・・・ 525

第10章

写真1 調査中の成塚向山古墳群・・・・・・・・ 576

写真2 調査後の成塚向山古墳群・・・・・・・・ 576

写真図版

PL. 1	1	成塚向山古墳群 古墳時代初頭の住居群と成塚向山1号墳 (西→)	3	14号住居 遺物出土状況 (北東→)	
	2	丘陵上の竪穴住居群と沖積低地 (南東→)	4	14号住居 覆土B-B' (東→)	
PL. 2	1	3号住居 全景 (北西→)	5	14号住居 貯蔵穴 (北東→)	
	2	3号住居 炭化材・土器出土状況 (西→)	6	14号住居 炉 覆土F-F' (北西→)	
	3	3号住居 覆土A-A' (南東→)	7	15号住居 全景 (南西→)	
	4	3号住居 覆土B-B' (南西→)	8	15号住居 遺物出土状況 (北西→)	
	5	3号住居 貯蔵穴 遺物出土状況 (北西→)	PL.10	1	16号住居 全景 (北東→)
	6	3号住居 貯蔵穴 (南西→)		2	16号住居 遺物出土状況 (南西→)
	7	3号住居 貯蔵穴 覆土K-K' (南西→)		3	16号住居 覆土A-A' (南西→)
	8	3号住居 炉 (北西→)		4	16号住居 遺物出土状況 (南西→)
PL. 3	1	4号住居 全景 (北西→)		5	16号住居 炉2 (南東→)
	2	4号住居 遺物出土状況 (北西→)		6	16号住居 炉1 (北西→)
	3	4号住居 遺物出土状況 (南東→)		7	16号住居 貯蔵穴 遺物出土状況 (北西→)
	4	4号住居 東壁炭化物分布状況 (北西→)		8	16号住居 貯蔵穴覆土I-I' (西→)
	5	4号住居 覆土B-B' (南西→)	PL.11	1	18号住居 全景 (北西→)
	6	4号住居 焼土(炉) (南西→)		2	18号住居 炭化材出土状況 (北西→)
	7	5号住居 遺物出土状況 (南西→)		3	19号住居 全景 (南→)
	8	5号住居 覆土B-B' (南→)		4	19号住居 遺物出土状況 (南→)
PL. 4	1	6号住居 全景 (北西→)		5	19号住居 覆土A-A' (南→)
	2	6号住居 遺物出土状況 (南西→)		6	19号住居 覆土B-B' (西→)
	3	6号住居 遺物出土状況 (北西→)		7	19号住居 炉 (南→)
	4	6号住居 遺物出土状況 (南東→)		8	19号住居 貯蔵穴 (南→)
	5	6号住居 覆土A-A' (南→)	PL.12	1	20号住居 平面プラン検出状況 (北→)
	6	6号住居 貯蔵穴 覆土G-G' (南西→)		2	20号住居 覆土中 礫出土状況 (北→)
	7	6号住居 貯蔵穴 (南東→)		3	20号住居 炭化材・焼土出土状況 (北→)
	8	6号住居 炉(焼土) 検出状況 (北西→)		4	20号住居 遺物出土状況 (北→)
PL. 5	1	7号住居 全景 (北西→)		5	20号住居 床面全景 (北→)
	2	7号住居 遺物出土状況 (南西→)		6	20号住居 ベッド状遺構 (西→)
	3	7号住居 覆土A-A' (南→)		7	20号住居 覆土A-A' (西→)
	4	7号住居 炉 (北西→)		8	20号住居 覆土B-B' (南→)
	5	7号住居 貯蔵穴 (北西→)	PL.13	1	20号住居 覆土中遺物出土状況 (北→)
	6	7号住居 貯蔵穴 覆土I-I' (南西→)		2	20号住居 遺物出土状況 (南東→)
	7	8号住居 全景 (南西→)		3	20号住居 ベッド状遺構焼土化状況 (南→)
	8	8号住居 覆土A-A' (南西→)		4	20号住居 炭化材出土状況 (東→)
PL. 6	1	9号住居 全景 (西→)		5	20号住居 貯蔵穴 覆土中炭化材出土状況 (西→)
	2	9号住居 遺物出土状況 (西→)		6	20号住居 貯蔵穴 (南→)
	3	9号住居 遺物出土状況 (北西→)		7	20号住居 炉 (西→)
	4	9号住居 遺物出土状況 (北東→)		8	21号住居 (推定) 検出状況 (南西→)
	5	9号住居 覆土A-A' (南→)	PL.14	1	成塚向山1号墳 全景 (構築墓壙検出時) (南→)
	6	9号住居 東壁際周溝 (南→)		2	成塚向山1号墳 全景 (構築墓壙検出時) (上か北)
	7	9号住居 覆土G-G' (北→)	PL.15	1	調査前の成塚向山1号墳 (南東→)
	8	9号住居 炉 (西→)		2	調査着手初期の成塚向山1号墳 (北→)
PL. 7	1	9号住居 貯蔵穴 (西→)		3	1号墳 墳丘西側 周辺礫検出状況 (西→)
	2	9号住居 貯蔵穴 覆土P-P' (南→)		4	1号墳 墳丘南側 周辺礫検出状況 (東→)
	3	10号住居 全景 (北西→)		5	1号墳 墳丘検出状況 (西→)
	4	10号住居 遺物出土状況 (南西→)		6	1号墳 墳丘検出状況 (南東→)
	5	10号住居 貯蔵穴 (西→)		7	1号墳 墳丘検出状況 (北西→)
	6	10号住居 焼土(炉?) (西→)		8	1号墳 墳丘検出状況 (南→)
	7	11号住居 全景 (北西→)	PL.16	1	1号墳 墳丘南裾 遺物出土状況 (南→)
	8	11号住居 覆土B-B' (南→)		2	1号墳 墳丘南裾 遺物出土状況 (南→)
PL. 8	1	11号住居 遺物出土状況 (西→)		3	1号墳 墳丘東裾 墳裾エリア1 遺物出土状況 (南東→)
	2	11号住居 貯蔵穴 覆土L-L' (北西→)		4	1号墳 墳丘東裾 墳裾エリア2 遺物出土状況 (西→)
	3	12号住居 全景 (北西→)		5	1号墳 墳丘東裾 盛土 遺物出土状況 (東→)
	4	12号住居 遺物出土状況 (北西→)		6	1号墳 墳丘南裾 遺物出土状況 (南西→)
	5	12号住居 覆土B-B' (南→)		7	墳裾確認断面A (西→)
	6	12号住居 南壁際覆土D-D' (北西→)		8	墳裾確認断面B (西→)
	7	12号住居 貯蔵穴 (北西→)	PL.17	1	墳裾確認断面C (西→)
	8	12号住居 炉 (南西→)		2	墳裾確認断面D (西→)
PL. 9	1	14号住居 全景 (北西→)		3	墳裾確認断面E (東→)
	2	14号住居 遺物出土状況 (南東→)			

	4	墳裾確認断面 F (東→)			
	5	墳裾確認断面 G (北→)			
	6	墳裾確認断面 H (北→)			
	7	墳裾確認断面 I (北→)			
	8	墳裾確認断面 J (北→)			
PL.18	1	墳裾確認断面 K (北→)	PL.25	1	1号墳 第1主体部 遺物出土状況：調査初動時 (北→)
	2	墳裾確認断面 L (南→)		2	1号墳 第1主体部 遺物出土状況 (南→)
	3	墳裾確認断面 M (東→)		3	1号墳 第1主体部北部分 鉄製品出土状況 (北→)
	4	墳裾確認断面 N (東→)		4	1号墳 第1主体部北部分 鉄製品出土状況 (東→)
	5	墳裾確認断面 O (西→)		5	1号墳 第1主体部北部分 鉄製品出土状況 (東→)
	6	墳裾確認断面 P (西→)		6	1号墳 第1主体部南部分 鉄製品出土状況 (南→)
	7	墳裾確認断面 Q (西→)		7	1号墳 第1主体部南部分 鉄製品出土状況 (西→)
	8	墳裾確認断面 R (西→)	PL.26	1	1号墳 第1主体部 銅鏃出土状況 (東→)
PL.19	1	墳裾確認断面 S (北→)		2	1号墳 第1主体部 銅鏃出土状況 (西→)
	2	墳裾確認断面 T (北→)		3	1号墳 第1主体部 勾玉出土状況 (北→)
	3	墳裾確認断面 U (北→)		4	1号墳 第1主体部 ガラス玉出土状況 (北→)
	4	墳裾確認断面 V (北→)		5	1号墳 第1主体部 ガラス玉出土状況 (北→)
	5	a トレンチ (東→)		6	1号墳 第1主体部 ガラス玉出土状況 (南東→)
	6	b トレンチ (南西→)		7	1号墳 第1主体部 赤色顔料出土状況 (北→)
	7	c トレンチ (南→)		8	1号墳 第1主体部 白色粘土出土状況 (北→)
	8	d トレンチ (南西→)	PL.27	1	1号墳 第1主体部 全景 (南→)
PL.20	1	e トレンチ (西→)		2	1号墳 第1主体部 棺被覆土断面 A-A' (南→)
	2	f トレンチ (北→)		3	1号墳 第1主体部 全景 (北→)
	3	g トレンチ (西→)		4	1号墳 第1主体部 全景 (南西→)
	4	h トレンチ (南→)		5	1号墳 第1主体部 棺中央付近 (西→)
	5	i トレンチ (南→)		6	1号墳 第1主体部 北側小口付近 (東→)
	6	j トレンチ (北→)		7	1号墳 第1主体部 南側小口付近 (北→)
	7	k トレンチ (北→)	PL.28	1	1号墳 第1主体部 粘土床断面 a-a' (西→)
	8	l トレンチ (北西→)		2	1号墳 第1主体部 粘土床断面 a-a' (西→)
PL.21	1	1号墳 盛土断面 A-A' (西→)		3	1号墳 第1主体部 粘土床断面 a-a' (西→)
	2	1号墳 盛土断面 B-B' (東→)		4	1号墳 第1主体部 粘土床断面 b-b' (北→)
	3	1号墳 盛土断面 C-C' (南→)		5	1号墳 第1主体部 粘土床断面 c-c' (南→)
	4	1号墳 盛土断面 D-D' (北→)		6	1号墳 第1主体部 粘土床断面 d-d' (南→)
	5	1号墳 盛土断面 D-D' 20号住居との関係 (西→)		7	1号墳 第1主体部 粘土床断面 e-e' (南→)
	6	1号墳 盛土断面 E-E' 北半部 (南西→)		8	1号墳 第1主体部 粘土床断面 f-f' (北→)
	7	1号墳 盛土断面 E-E' 南半部 (西→)	PL.29	1	1号墳 第1主体部 粘土床除去状況 (南→)
	8	1号墳 盛土断面 F-F' 西半部 (南→)		2	1号墳 第1主体部 粘土床除去状況 (北→)
PL.22	1	1号墳 盛土断面 F-F' 構築墓壇内 (南→)		3	1号墳 第2主体部 被覆土断面 (南西→)
	2	1号墳 盛土断面 F-F' 構築墓壇内 (南東→)		4	1号墳 第2主体部 重圏文鏡出土状況 (南東→)
	3	1号墳 盛土断面 G-G' 西半部 (南→)		5	1号墳 第2主体部 重圏文鏡出土状況 (南東→)
	4	1号墳 盛土断面 G-G' 構築墓壇～東半部 (南→)		6	1号墳 第2主体部 人骨・歯出土状況 (南西→)
	5	1号墳 墓道 全景 (南東→)		7	1号墳 盛土表面 壺 (10) 出土状況 (西→)
	6	1号墳 墓道 全景 (北→)		8	1号墳 盛土表面 壺 (10) 出土状況 (西→)
	7	1号墳 墓道 全景 (南→)	PL.30	1	1号墳 盛土内 手焙形土器片 (31) 出土状況 (北→)
	8	1号墳 墓道 閉塞土断面 A-A' (西→)		2	1号墳 盛土内 手焙形土器片 (31) 出土状況 (東→)
PL.23	1	1号墳 墓道 閉塞土断面 A-A' 下層 (南西→)		3	1号墳 盛土内手焙形土器片 (31)・壺 (1) 出土状況 (北→)
	2	1号墳 墓道 閉塞土断面 B-B' (南→)		4	1号墳 盛土内手焙形土器片 (31)・壺 (1) 出土状況 (北東→)
	3	1号墳 墓道 閉塞土断面 C-C' (南→)		5	1号墳 盛土下層 遺物出土状況 (東→)
	4	1号墳 墓道 閉塞土断面 D-D' (南→)		6	1号墳 盛土上層遺物出土状況 (北東→)
	5	1号墳 墓道 遺物出土状況 (東→)		7	1号墳 盛土上層 遺物出土状況 (西→)
	6	1号墳 墓道 遺物出土状況 (南→)		8	1号墳 盛土内 S字鏢片 出土状況 (北→)
	7	1号墳 墓道 遺物出土状況 (南→)	PL.31	1	1号墳 盛土下地表面 壺 (1) 出土状況 1 (東→)
	8	1号墳 墓道 遺物出土状況 (南→)		2	1号墳 盛土下地表面 壺 (1) 出土状況 2 (北東→)
PL.24	1	1号墳 墓道 遺物出土状況 (北→)		3	1号墳 盛土下地表面 壺 (1) 出土状況 3 (南東→)
	2	1号墳 墓道 遺物出土状況 (北→)		4	1号墳 盛土下地表面 壺 (1) 出土状況 4 (北東→)
	3	1号墳 構築墓壇 全景 (東→)		5	1号墳 盛土下地表面 壺 (1) 出土状況 5 (南東→)
	4	1号墳 構築墓壇 全景 (南→)		6	1号墳 盛土下地表面 壺内土層状況 (北東→)
	5	1号墳 構築墓壇 内側東部分 (西→)		7	1号墳 盛土下地表面 壺 (1) 設置状況断割 (南東→)
	6	1号墳 構築墓壇 内側南部分 (北西→)		8	1号墳 盛土下地表面 壺 (1) 設置凹み (南東→)
	7	1号墳 構築墓壇 内側西部分 (北東→)	PL.32	1	1号墳 盛土下地表面 遺物出土状況 (南→)
	8	1号墳 構築墓壇 内側南～西部分 (北東→)		2	1号墳 盛土下地表面 遺物出土状況 (北→)
				3	1号墳 盛土下地表面 遺物出土状況 (北→)
				4	1号墳 盛土下地表面 遺物出土状況 (西→)
				5	1号墳 盛土下地表面 遺物出土状況 (北→) 5
				6	1号墳 盛土下地表面 遺物出土状況 (南東→)

	7	1号墳	盛土下地表面	遺物出土状況 (北→)		7	2号墳	埴輪列 22	掘り方断面 (北東→)
	8	1号墳	盛土下地表面	遺物出土状況 (北→)		8	2号墳	埴輪列 23	掘り方断面 (南西→)
PL.33	1	1号墳	盛土下地表面	全景 (南→)	PL.41	1	2号墳	埴輪列 24	掘り方断面 (南→)
	2	1号墳	盛土下地表面	全景 (南西→)		2	2号墳	埴輪列 25	掘り方断面 (南→)
	3	1号墳	盛土下地表面	焼土-1 (南→)		3	2号墳	埴輪列 26	掘り方断面 (西→)
	4	1号墳	盛土下地表面	焼土-2・3 (南→)		4	2号墳	埴輪列 27	出土状況 (西→)
	5	1号墳と20号住居の平面的関係		(上か南)		5	2号墳	埴輪列 28	掘り方断面 (西→)
	6	1号墳盛土と20号住居の層位的関係		(北→)		6	2号墳	埴輪列 30	掘り方断面 (西→)
	7	1号墳と20号住居の層位的関係		(西→)		7	2号墳	埴輪列 31	掘り方断面 (北西→)
	8	盛土と20号住居と浅間C軽石の層位的関係		(西→)		8	2号墳	埴輪列 32	掘り方断面 (北西→)
PL.34	1	成塚向山2号墳	埴輪樹立状況時	全景 (南→)	PL.42	1	2号墳	埴輪列 33	掘り方断面 (北西→)
	2	2号墳	調査前の状況	全景 (南→)		2	2号墳	埴輪列 34	出土状況 (北→)
	3	2号墳	埴輪樹立状況時	全景 (北→)		3	2号墳	埴輪列 35	掘り方断面 (北→)
	4	2号墳	埴輪樹立状況時	全景 (東→)		4	2号墳	埴輪列 36	掘り方断面 (北→)
	5	2号墳	埴輪樹立状況時	全景 (西→)		5	2号墳	埴輪列 37	出土状況 (北→)
PL.35	1	2号墳	第1トレンチ (墳丘南)	土層断面A-A' (東→)		6	2号墳	埴輪列 38	掘り方断面 (北→)
	2	2号墳	第1トレンチ (墳丘北)	土層断面B-B' (北東→)		7	2号墳	埴輪列 39	掘り方断面 (北→)
	3	2号墳	第4トレンチ土層断面	C-C' (南→)	PL.43	1	2号墳	埴輪列 41	掘り方断面 (南東→)
	4	2号墳	第5トレンチ土層断面	D-D' (南→)		2	2号墳	埴輪列 42	掘り方断面 (南東→)
	5	2号墳	第6トレンチ土層断面	E-E' (西→)		3	2号墳	埴輪列 43	掘り方断面 (北東→)
	6	2号墳	第7トレンチ土層断面	F-F' (北→)		4	2号墳	埴輪列 44	掘り方断面 (北東→)
	7	2号墳	第9トレンチ土層断面	G-G' (南東→)		5	2号墳	埴輪列 45	掘り方断面 (北東→)
	8	2号墳	第10トレンチ土層断面	H-H' (南東→)		6	2号墳	埴輪列 46	掘り方断面 (北東→)
PL.36	1	2号墳	第11トレンチ土層断面	I-I' (南東→)		7	2号墳	埴輪列 47	掘り方断面 (北東→)
	2	2号墳	第13トレンチ土層断面	J-J' (南→)		8	2号墳	埴輪列 48	掘り方断面 (北東→)
	3	2号墳	第15トレンチ土層断面	L-L' (南西→)	PL.44	1	2号墳	埴輪列 49	掘り方断面 (東→)
	4	2号墳	第16トレンチ土層断面	M-M' (南西→)		2	2号墳	埴輪列 50	掘り方断面 (北東→)
	5	2号墳	埴輪列 3~12・14~20	樹立状況 (南→)		3	2号墳	埴輪列 51	掘り方断面 (東→)
	6	2号墳	埴輪列 3~12	樹立状況 (南西→)		4	2号墳	埴輪列 52	掘り方断面 (東→)
	7	2号墳	埴輪列 14~27	ほか 樹立状況 (南→)		5	2号墳	埴輪列 54	掘り方断面 (南→)
	8	2号墳	埴輪列 14~20	樹立状況 (南西→)		6	2号墳	埴輪列 55	掘り方断面 (南東→)
PL.37	1	2号墳	埴輪列 21~26	ほか 樹立状況 (南東→)		7	2号墳	埴輪列 58	掘り方 (南西→)
	2	2号墳	埴輪列 21~26	ほか 樹立状況 (北東→)		8	2号墳	埴輪列 59	掘り方断面 (北西→)
	3	2号墳	埴輪列 21・58	樹立状況 (南西→)	PL.45	1	2号墳	石室 全景 (南→)	
	4	2号墳	埴輪列 22・54	樹立状況 (南西→)		2	2号墳	石室閉塞状況 (北→)	
	5	2号墳	埴輪列 23・24	樹立状況 (南西→)		3	2号墳	石室閉塞状況 (南→)	
	6	2号墳	埴輪列 25・26	樹立状況 (西→)		4	2号墳	玄室 遺物出土状況 (南→)	
	7	2号墳	埴輪列 32~39	樹立状況 (東→)		5	2号墳	玄室 鉄製品出土状況 (南東→)	
	8	2号墳	埴輪列 42~48	樹立状況 (北西→)		6	2号墳	玄室 鉄製品出土状況 (東→)	
PL.38	1	2号墳	埴輪列 47~52	樹立状況 (南東→)		7	2号墳	玄室 玉製品出土状況 (西→)	
	2	2号墳	墳丘南東部	埴輪片出土状態 (東→)		8	2号墳	玄室 玉製品出土状況 (西→)	
	3	2号墳	墳丘南西部	埴輪片出土状況 (南西→)	PL.46	1	2号墳	石室 奥壁 (南→)	
	4	2号墳	墳丘南東部	埴輪出土状態 (南東→)		2	2号墳	玄室 奥壁と西側壁の接地状況 (南東→)	
	5	2号墳	埴輪列 3	掘り方断面 (南東→)		3	2号墳	玄室 奥壁と東側壁の接地状況 (南西→)	
	6	2号墳	埴輪列 4	掘り方断面 (北東→)		4	2号墳	石室 西側壁 (南東→)	
	7	2号墳	埴輪列 5	掘り方断面 (東→)		5	2号墳	石室 東側壁 (南西→)	
	8	2号墳	埴輪列 6	掘り方断面 (東→)		6	2号墳	玄室 全景 (北→)	
PL.39	1	2号墳	埴輪列 7	掘り方断面 (東→)		7	2号墳	羨道 全景 (南→)	
	2	2号墳	埴輪列 8	掘り方断面 (北東→)		8	2号墳	羨道 全景 (北→)	
	3	2号墳	埴輪列 9	掘り方断面 (北東→)	PL.47	1	2号墳	墳丘盛土 断面 a-a' (南東→)	
	4	2号墳	埴輪列 10	掘り方断面 (東→)		2	2号墳	墳丘盛土 断面 a-a' (東→)	
	5	2号墳	埴輪列 11	掘り方断面 (北東→)		3	2号墳	墳丘盛土 断面 b-b' (西→)	
	6	2号墳	埴輪列 12	掘り方断面 (北東→)		4	2号墳	墳丘盛土 断面 b-b' (西→)	
	7	2号墳	埴輪列 14	掘り方断面 (東→)		5	2号墳	墳丘盛土 断面 c-c' (南→)	
	8	2号墳	埴輪列 15	掘り方断面 (東→)		6	2号墳	墳丘盛土 断面 c-c' (南→)	
PL.40	1	2号墳	埴輪列 16	掘り方断面 (東→)		7	2号墳	墳丘盛土 断面 d-d' (南東→)	
	2	2号墳	埴輪列 17	掘り方断面 (南東→)		8	2号墳	墳丘盛土 断面 d-d' (南西→)	
	3	2号墳	埴輪列 18	掘り方断面 (南東→)	PL.48	1	2号墳	墳丘盛土 断面 d-d' (南東→)	
	4	2号墳	埴輪列 19	掘り方断面 (東→)		2	2号墳	墳丘盛土 断面 d-d' (南東→)	
	5	2号墳	埴輪列 20	掘り方断面 (東→)		3	2号墳	墳丘盛土 断面 e-e' (北西→)	
	6	2号墳	埴輪列 21	掘り方断面 (南西→)		4	2号墳	墳丘盛土 断面 e-e' (北東→)	

- 5 2号墳 墳丘盛土 断面 e-e' (北西→)
6 2号墳 墳丘盛土 断面 e-e' (北西→)
7 2号墳 墳丘盛土 断面 f-f' (南→)
8 2号墳 墳丘盛土 断面 f-f' (南→)
PL.49 1 2号墳 墳丘盛土 断面 f-f' (南→)
2 2号墳 墳丘盛土 断面 f-f' (南→)
3 2号墳 石室 石積み背面状況 (北→)
4 2号墳 石室西側壁 石積み背面状況 (西→)
5 2号墳 石室東側壁 石積み背面状況 (東→)
6 2号墳 石室 奥壁 石積み背面状況 (東→)
7 2号墳 石室 根石検出状況 (上が西)
8 2号墳 石室 根石検出状況 (北→)
PL.50 1 2号墳 石室 東側壁根石背面状況 (東→)
2 2号墳 石室 西側壁根石背面状況 (西→)
3 2号墳 石室 奥壁 下段石材背面状況 (北→)
4 2号墳 石室 根石除去状況 全景 (南→)
5 2号墳 石室奥壁下 鉄製品出土状況 (南→)
6 2号墳 掘り方 土層断面 (東→)
7 2号墳 掘り方 土層断面 (南→)
8 2号墳 盛土下地表面 全景 (南→)
PL.51 1 1号住居 全景 (西→)
2 1号住居 カマド 全景 (西→)
3 13号住居 全景 (北西→)
4 1号土坑 全景 (東→)
5 2号土坑 全景 (東→)
6 3号土坑 全景 (南西→)
7 5号土坑 全景 (南→)
8 6号土坑 全景 (西→)
PL.52 1 7号土坑 全景 (東→)
2 9号土坑 全景 (西→)
3 10号土坑 全景 (西→)
4 12号土坑 全景 (西→)
5 13号土坑 全景 (東→)
6 14号土坑 全景 (西→)
7 15号土坑 完掘 (東→)
8 15号土坑 遺物出土状況 (東→)
PL.53 1 1号溝 全景 (西→)
2 2号溝 全景 (北→)
3 3号溝 全景 (西→)
4 4・5号溝 全景 (東→)
5 4・5号溝 全景 (西→)
6 6号溝 全景 (西→)
7 6～8号溝 全景 (北西→)
8 9号溝 全景 (北西→)
PL.54 1 10・11・13～15号溝 全景 (東→)
2 15号溝 遺物出土状況 (東→)
3 12号溝 全景 (北→)
4 16号溝 全景 (西→)
5 17号溝 全景 (南東→)
6 1号井戸 全景 (北→)
7 2号井戸 全景 (北→)
8 3号井戸 全景 (南→)
PL.55 1 1号集石 (東→)
2 2号集石 (南→)
3 3号集石 (北→)
4 4号集石 (西→)
5 5号集石 (東→)
6 6号集石 (東→)
7 7号集石 (東→)
8 8号集石 (東→)
PL.56 1 9号集石 (東→)
2 10号集石 (東→)
3 11号集石 (北東→)
4 12号集石 (東→)
5 13号集石 (東→)
6 14号集石 (東→)
7 15号集石 (東→)
8 16号集石 (東→)
PL.57 1 1号炭窯 全景 (北西→)
2 1号炭窯 掘り方断面 (南西→)
3 2号炭窯 全景 (南西→)
4 2号炭窯 炭化材出土状況 (北西→)
5 1号道 全景 (北→)
6 2号道 上層小礫面 (東→)
7 1号テラス 全景 (南東→)
8 2・3号テラス 全景 (北西→)
PL.58 3～6号住居出土遺物
PL.59 6・7号住居出土遺物
PL.60 7～12号住居出土遺物
PL.61 14～16・18～21号住居出土遺物
PL.62 成塚向山1号墳出土銅鏃・重圈文鏡・鉈・劍・槍
PL.63 成塚向山1号墳出土槍
PL.64 成塚向山1号墳出土土師器
PL.65 成塚向山1号墳出土土師器
PL.66 成塚向山1号墳出土土師器
PL.67 成塚向山1号墳出土土師器
PL.68 成塚向山2号墳出土円筒埴輪
PL.68 成塚向山2号墳出土円筒埴輪
PL.69 成塚向山2号墳出土円筒埴輪
PL.70 成塚向山2号墳円筒埴輪・形象埴輪基部
PL.71 成塚向山2号墳形象埴輪基部・人物埴輪
PL.72 成塚向山2号墳人物埴輪
PL.73 成塚向山2号墳人物埴輪・馬形埴輪
PL.74 成塚向山2号墳馬形埴輪
PL.75 成塚向山2号墳馬形埴輪
PL.76 成塚向山2号墳形象埴輪 (鈴片)・家形埴輪
PL.77 成塚向山2号墳家形埴輪・鞆形埴輪
PL.78 成塚向山2号墳鞆形埴輪・盾形埴輪
PL.79 成塚向山2号墳大刀形埴輪
PL.80 成塚向山2号墳大刀形埴輪・墳丘内出土遺物
PL.81 成塚向山2号墳出土鉄製品
PL.82 成塚向山古墳群出土石器
PL.83 成塚向山古墳群出土石器
PL.84 成塚向山古墳群出土石器・縄文土器
PL.85 成塚向山古墳群出土縄文土器
PL.86 成塚向山古墳群出土弥生土器
PL.87 成塚向山古墳群出土弥生土器
PL.88 歴史時代住居・土坑・溝出土土器
PL.89 歴史時代集石出土土器・井戸出土陶磁器
PL.90 歴史時代井戸出土陶磁器
PL.91 歴史時代井戸出土陶磁器・木製品、成塚向山古墳群出土石器製品

第1章 環境



八王子丘陵は桐生市南西部から太田市北部にわたって連なる、200万年前に形成された低丘陵である。丘陵の南西（写真手前）には大間々扇状地が広がり、また、丘陵の北東（写真奥）には渡良瀬川の現流路がある。

成塚向山古墳群はこの八王子丘陵の突端部に位置し、まさに眼下に広がる平野部を一望できるような高台に立地している。なお、この丘陵における発掘調査の事例は数少ないが、まだ多くの遺跡が地中に眠っていると思われる。

写真1 八王子丘陵と成塚向山古墳群

1 地勢的環境

(1) 成塚向山古墳群の位置

成塚向山古墳群がある八王子丘陵は、関東平野の北西部、群馬県桐生市から太田市にかけての渡良瀬川右岸に沿って連なる、細長い丘陵である。標高は丘陵北西に位置する茶臼山の293.9mを最高とし、海拔200m前後の峰々により主稜線が形成されている。標高のわりには比較的急峻な谷が主稜線に直交するように発達しており、成塚向山古墳群も丘陵

南東部に位置する、所謂「北金井の谷」の左岸（東岸）先端部に張り出した尾根上に立地している。

この尾根一帯の最高標高は107.2mで、周辺地との最大比高差は約40mとなっている。このように成塚向山古墳群が立地する尾根は、北・西側には谷が巡り、また南側には沖積低地が広がっており、いずれの方向からも見上げるような場所に位置している。周囲のどの地点からもその威風揚々たる山容をうかがい知ることができる場所に成塚向山古墳群は立地している。（山田精一）



(国土地理院 20万分の1「宇都宮」を使用し、縮尺を改変)

図1 成塚向山古墳群の位置

(2) 成塚向山古墳群周辺の地勢

八王子丘陵は3億数千万年前の古生代の海底に堆積した岩石が、その後の地殻変動で隆起して陸地化したものである。その後、1500万年前の第三紀中新世の始め頃から再び火成活動が始まり、海進などもあり、溶結凝灰岩・砂岩・粘板岩・チャートなどを多く含む礫層が堆積した。そして200万年前の第四紀に入ると、赤城、榛名、浅間などの火山活動による火山灰が噴出し、ローム層が形成されることとなり、現在の地形に至っている。

この八王子丘陵の西には渡良瀬川が更新世に形成した「大間々扇状地（Ⅱ面）」が展開するが、成塚向山古墳群の眼下に広がるエリア、標高50～60m付近はその扇端部に相当する。この扇端部一帯は大間々扇状地の自由地下水が地表面に排出され、扇端湧水帯を形成している。なお、本地域の基幹河川の1つ、蛇川の元々の源流はこの扇端湧水であると言われている。さらに、八王子丘陵西裾部とこの大間々扇状地の東扇側部との間には、南北に細長く展開する沖積低地が存在している。（山田）

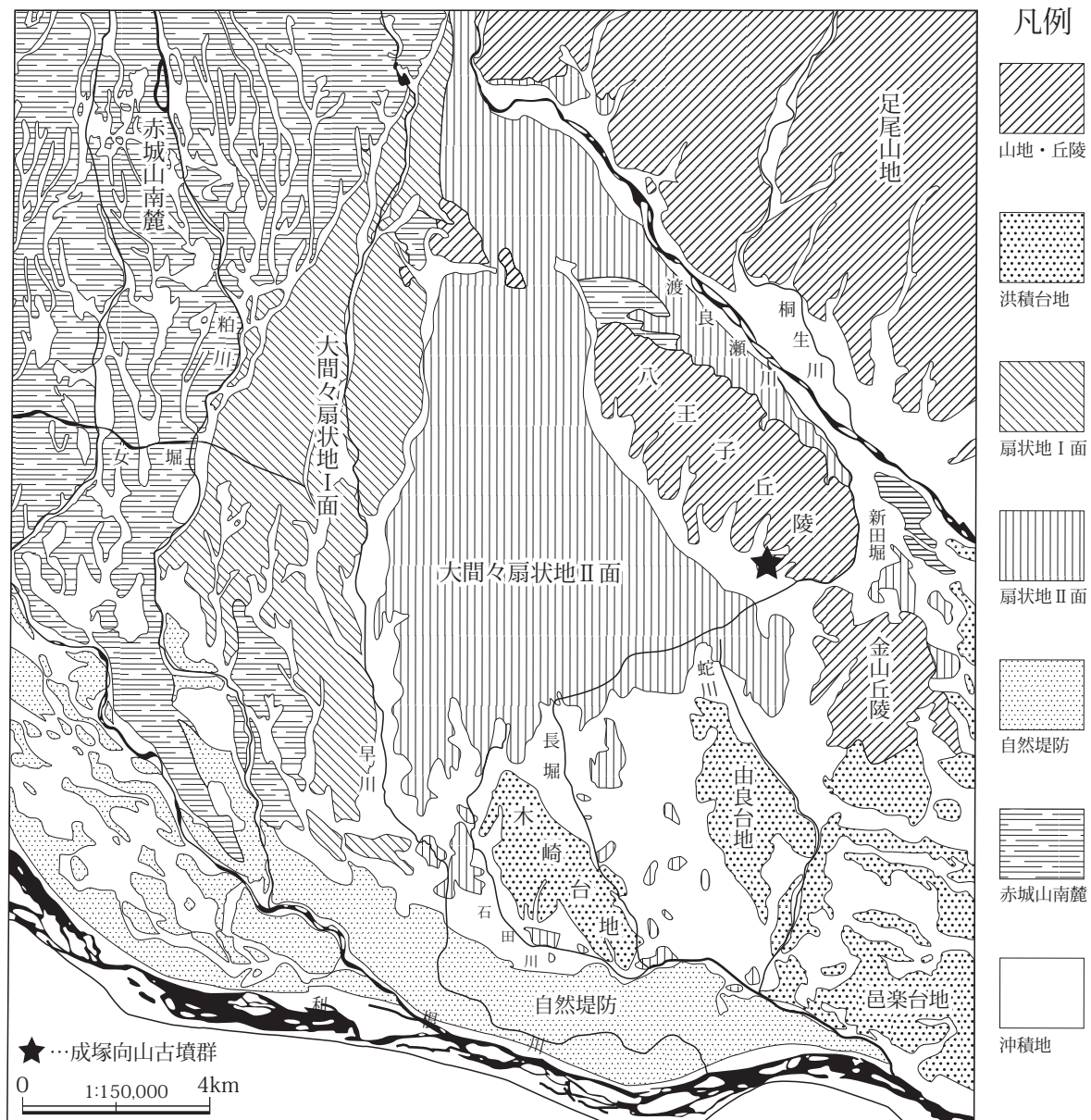


図2 成塚向山古墳群周辺の地形分類図

2 歴史的環境

(1) 概要

成塚向山古墳群の周辺地域には、旧石器時代以降、各時代の遺跡が存在していた。しかし、遺跡分布量は各時代とも等量ではなく、その状況から見る限り、この地域への大々的な開発は古墳時代前期以降と考えられる。

以下、時代毎に概観する。

(2) 旧石器時代

八王子丘陵や金山丘陵周辺に遺跡が分布する。金山丘陵上に位置する峯山遺跡(29)では浅間板鼻褐色軽石(As-BP)層～暗色帯上部の間でまとまった旧石器資料が出土している。さらに、こうした丘陵上には村上遺跡(15)、強戸口峯山遺跡(31)、大島口遺跡(89)などが分布するほか、沖積地内へのこのころローム層低台地には成塚住宅団地遺跡(20)、堂原遺跡(82)、西長岡横塚古墳群(R)などにおいてもその存在が認められる。

(3) 縄文時代

草創期・早期の遺跡は八王子丘陵や金山丘陵周辺、沖積地内の低台地部に分布するものが多い。草創期の資料は峯山遺跡で認められ、早期・貝殻条痕文系土器は由良台地上にある堂原遺跡で出土している。前期の遺跡としては、諸磯期の土器を出土する遺跡として堂原遺跡があげられるほか、三枚橋駅の西方、大間々扇状地扇端部付近に位置する低台地上に位置する前沖遺跡(66)など、多数存在する。中期前半の遺跡は由良台地上に存在するとされているが、希薄な状況である。しかし、中期後半、加曾利E式期の遺跡としては堂原遺跡や成塚住宅団地遺跡のほか、三枚橋駅周辺の三枚橋南遺跡(65)などでも認められる。後期の遺跡は、堂原遺跡にその存在が顕著であり、称名寺式、堀ノ内式、加曾利B式土器が多く認められる。晩期の遺跡は太田市域全体においてもその分布が少ない。

(4) 弥生時代

太田地域全体にわたって弥生時代の遺跡は少な

い。その中において、金山丘陵や八王子丘陵周辺や沖積地内の低台地上において、中期の資料が散見される。西野原遺跡(1)では中期後半の良好な資料が出土しているほか、成塚向山古墳群(A)・西長岡東山古墳群(C)でも同時期の資料が認められる。

(5) 古墳時代

弥生時代中～後期において極めて希薄な遺跡分布の様相を呈していたのに対し、古墳時代前期になると遺跡の分布は急激に増加する。太田地域においては東海系土器のスタイルを受容・在地化させた土器様式「石田川式」が存在することは周知のことであるが、それに象徴されるように前期の遺跡から出土する土師器には外来要素が多い。しかし、その一方で、調査事例は少ないものの、樽式系や吉ヶ谷式系の甕・壺を器種構成に取り入れて存在する遺跡もある。これらの前期集落の2相は、遺跡の立地環境の相違と同じ傾向をみせる。

外来系土器を器種構成の主体におく遺跡は沖積低地内の低台地やその周辺に形成されることが多い一方で、樽式系や吉ヶ谷式系土器を一定量伴う遺跡は、丘陵上やその周辺に形成される傾向にある。

前者の遺跡としては、成塚住宅団地遺跡、大鷲遺跡群(23)、脇屋深町遺跡(79)、唐桶田遺跡(80)新田東部遺跡群(81)などがあり、一方で、後者の遺跡としては、成塚向山古墳群・西長岡東山古墳群(※両古墳群ではいずれも群内に前期集落があり)などがある。両者の存在比率は前者の方が圧倒的に多い。とりわけ新田東部遺跡群の中にある中溝・深町遺跡では井泉祭祀遺構を伴う方形区画遺構が検出されており、前期社会において熟成したシステムが存在していたことがうかがい知れる。

前期の墳墓としては、古墳と周溝墓の両者が存在する。成塚向山古墳群周辺において、現在知ることのできる古墳は成塚向山古墳群中の1号墳と寺山古墳(Q)および太田八幡山古墳(図外)である。寺山古墳は全長約60mの前方後方墳であり、太田八幡山古墳は全長84mの前方後円墳である。それに成塚向山1号墳を加えると、いずれも丘陵先端

部に占地築造されている。また、方形周溝墓は、成塚住宅団地遺跡、唐桶田遺跡、新田東部遺跡群（槍花遺跡など）、堂原遺跡、西長岡東山古墳群など多数ある。なお、西長岡東山古墳群・成塚住宅団地遺跡には円形周溝墓も存在する。

中期の遺跡は、その立地においては前期集落が形成された沖積地内の低台地やその周辺地域と同じ場合が多く、成塚住宅団地遺跡をはじめ、成塚石橋遺跡（21）、鳥山下遺跡（64）、前沖遺跡（66）、新田東部遺跡群、堂原遺跡などが挙げられる。これらの遺跡においては、前期よりも中期における集落の方が、むしろ遺跡規模や成熟度合いにおいて際立っている。特に、成塚住宅団地遺跡における居館関連遺構と推定される方形区画遺構や出土した古式須恵器などからは、水利権を掌握した地域統括の姿が浮かび上がってくる。

中期古墳は前期古墳とはその占地を異にしており、丘陵部には築かず、沖積地の低台地上に築くようになる。太田地域全体をみると、中期前半には墳丘長 168 m の前方後円墳である別所茶白山古墳、中期中葉には墳丘長 210 m の前方後円墳である太田天神山古墳や 96 m の帆立貝形古墳である女体山古墳など、東日本屈指の大型墳が築造される。一方、成塚向山古墳群周辺地域においては中期後半になってから、墳丘長 95 m の前方後円墳である鶴山古墳（d）や円墳または前方後円墳の可能性をもつ亀山古墳（e）が築かれ、中期末には墳丘長約 66 m の前方後円墳である鳥崇神社古墳などが築造される。とりわけ、鶴山古墳からは副葬品として多量の武器・武具などが出土しており、特質される。

後期には、金山丘陵や八王子丘陵地域における埴輪・須恵器の窯業遺跡が多く分布するようになる。埴輪窯としては、駒形神社埴輪窯跡（10）、成塚住宅団地遺跡があげられ、須恵器窯としては、金山丘陵窯跡群があげられる。特に、金山丘陵窯跡群における須恵器生産は極めて大規模化し、後期におけるこの地域性を象徴する存在となる。

後期の集落としては成塚住宅団地遺跡、成塚石橋

遺跡、新田遺跡（49）などが挙げられる。

後期の古墳は、後期後半に墳丘長 74 m の前方後円墳である二ツ山 1 号墳（V）と墳丘長 45 m の前方後円墳である二ツ山 2 号墳（W）が築造される。また、直径 36 m の円墳であるオクマン山古墳（m）もこの時期に築造され、成塚向山古墳群中の成塚向山 2 号墳もこの時期の築造である。また、この時期から終末期にかけては、八王子丘陵・金山丘陵上や、沖積地内の低台地上に多くの群集墳が形成される。大鷲梅穴古墳群（L）、北金井御嶽山古墳群（J）、上強戸古墳群（P）、成塚街道北古墳群（U）貧乏塚古墳群（h）、三枚橋南古墳群（j）など、枚挙にいとまがない。

（6）飛鳥・奈良・平安時代

7 世紀後半の創建と考えられる寺井廃寺（46）や新田郡衙の郡庁の可能性が極めて濃厚である天良七堂遺跡（41）、東山道駅路（42）など、新田郡の中核域を象徴する遺跡が数多く存在する。また、7 世紀末～8 世紀にかけては新たな産業もおこることがこの地域の特質点であり、製鉄遺跡である、西野原遺跡、峯山遺跡がそれにあたる。また同じ時期に、窯業関係では、須恵器窯跡としては金山丘陵窯跡群の中でも高太郎 I 遺跡（72）や山去窯跡群（75）などが本格的に操業を開始し、さらに八王子丘陵にある萩原窯跡（17）などでは瓦生産が須恵器生産とともに行われるようになる。

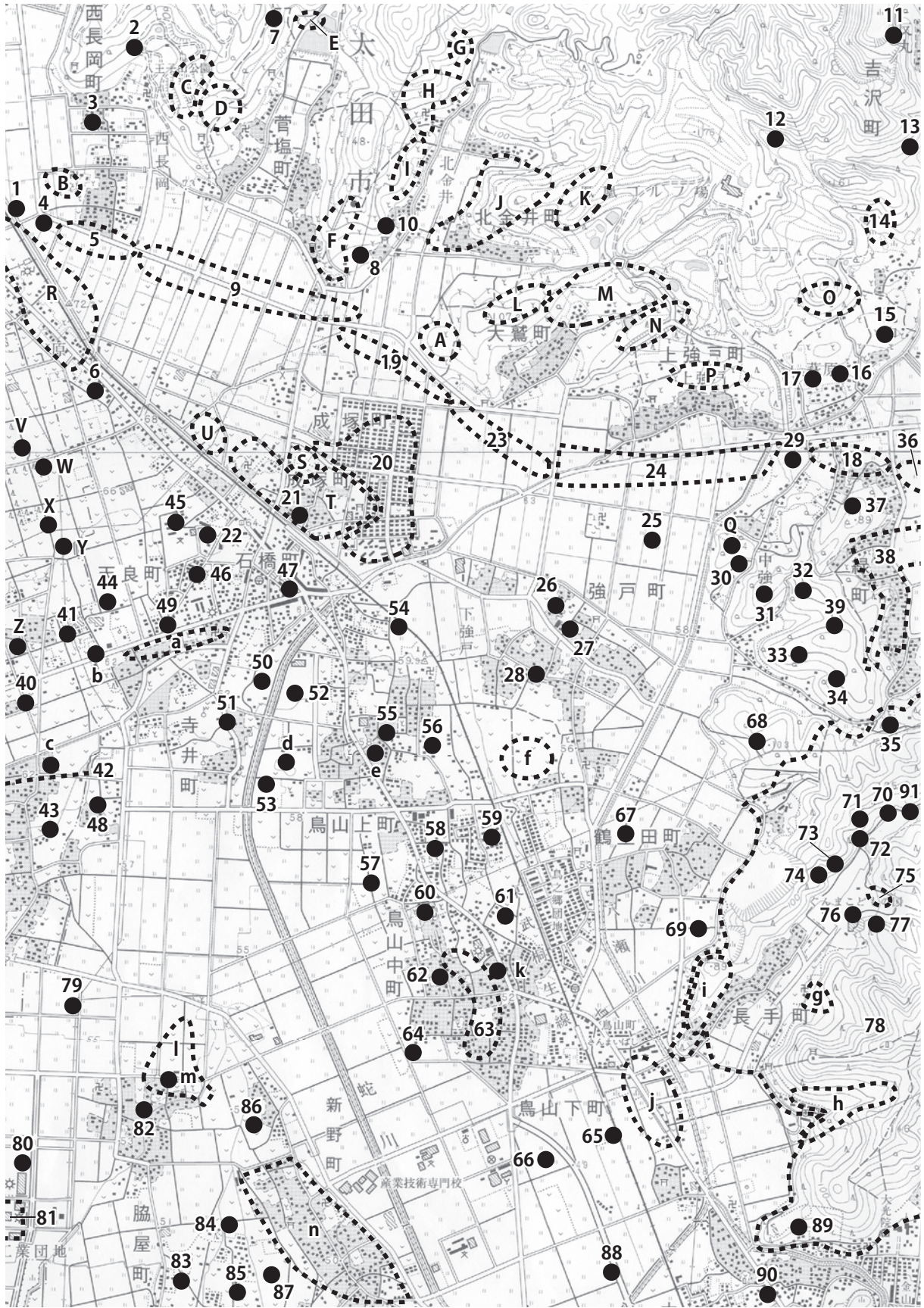
この他にも、7 世紀～12 世紀にかけての水田遺構が大規模に検出された上強戸遺跡群（24）もある。

（7）鎌倉時代以降

中世城館跡が多く存在する。典型的な山城・山城跡（78）をはじめ、鳥山環濠遺構群（63）、大島館跡（90）などがある。（深澤敦仁）

参考文献・HP

- ・太田市教育委員会 1995 『太田市の文化財』
- ・太田市 1996 『太田市史 通史編 原始古代』
- ・亀山幸弘 2003 『年保遺跡・鳥山下遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・酒井清治 2007 『群馬・金山丘陵窯跡群 I』駒澤大学考古学研究室
- ・群馬県教育委員会文化課 2002 『群馬県文化財情報システム』web 版



(国土地理院 1/50,000 「深谷」「桐生及足利」を使用)

图3 成塚向山古墳群周辺遺跡分布图

表 1 成塚向山古墳群周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥 平安	中近世
A	成塚向山古墳群	○	○	○	○	○	○
B	西長岡宿古墳群				○		
C	西長岡東山古墳群			○	○	○	
D	菅塩西山古墳群				○		
E	菅塩祝入古墳群				○		
F	菅塩山崎古墳群				○		
G	西高坪古墳群				○		
H	北金井西山古墳群				○		
I	北金井川西古墳群				○		
J	北金井御嶽山古墳群				○		
K	北金井東浦古墳群				○		
L	大鷲梅穴古墳群				○		
M	大鷲大平古墳群				○		
N	大鷲向山古墳群				○		
O	吉沢古墳群				○		
P	上強戸古墳群				○		
Q	寺山古墳				○		
R	西長岡横塚古墳群	○	○		○	○	○
S	業平塚古墳群			○	○	○	
T	成塚古墳群				○		
U	成塚街道北古墳群				○		
V	二ツ山古墳 1 号墳				○		
W	二ツ山古墳 2 号墳				○		
X	天良蛇塚古墳				○		
Y	新生割古墳				○		
Z	堀廻古墳				○		
a	寺井古墳群				○		
b	寺井境古墳				○		
c	松尾神社古墳				○		
d	鶴山古墳				○		
e	亀山古墳				○		
f	鶴生田・下強戸古墳群				○		
g	式反田古墳群				○		
h	貧乏塚古墳群				○		
i	長手口古墳群				○		
j	三枚橋南古墳群				○		
k	鳥崇神社古墳				○		○
l	脇屋古墳群				○		
m	オクマン山古墳				○		
n	新野古墳群				○		
1	西野原遺跡		○	○	○	○	○
2	愛宕山遺跡				○	○	
3	長岡城跡						○
4	鳥谷戸遺跡		○		○	○	○
5	西長岡宿遺跡		○		○	○	○
6	愛大塚遺跡				○		
7	菅塩祝入窯跡					○	
8	菅塩田谷遺跡		○				
9	菅塩遺跡群		○		○	○	○
10	駒形神社埴輪窯跡				○		
11	岩神遺跡	○	○				
12	落内沢窯跡					○	
13	落内遺跡				○	○	
14	吉沢窯跡群					○	
15	村上遺跡	○					
16	萩原館跡						○
17	萩原窯跡	○				○	
18	萩原遺跡	○	○		○	○	
19	成塚遺跡群					○	
20	成塚住宅団地遺跡群	○	○		○	○	
21	成塚石橋遺跡				○		
22	寺井庵寺東遺跡				○	○	
23	大鷲遺跡群				○	○	○
24	上強戸遺跡群				○	○	○
25	寺の東遺跡		○				
26	強戸の寄居						○

遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥 平安	中近世
27	強戸宮西遺跡		○		○		
28	畑中遺跡				○		
29	峯山遺跡	○	○		○	○	○
30	鶴巻西遺跡				○		
31	強戸口峯山遺跡	○			○	○	
32	鶴巻遺跡		○		○		
33	越々山遺跡	○	○		○		
34	笹ヶ入北遺跡		○		○		
35	笹ヶ入窯跡					○	
36	古水条里制水田址					○	
37	雷電山遺跡		○		○	○	
38	古水郡衙跡					○	
39	堂ノ北西遺跡				○	○	
40	笠松遺跡				○	○	
41	天良七堂遺跡				○	○	○
42	推定東山道駅跡 新田地区					○	
43	七堂遺跡					○	
44	上根遺跡		○		○		
45	寺井庵寺北遺跡				○	○	
46	寺井庵寺跡					○	
47	石橋地藏久保遺跡				○	○	
48	寺井本郷遺跡				○	○	
49	新田遺跡				○	○	
50	鷲ノ宮遺跡					○	
51	久保畑遺跡				○	○	
52	久保遺跡					○	
53	八幡遺跡				○	○	
54	寺裏遺跡				○	○	
55	上遺跡				○		
56	鳥山寺中遺跡				○		
57	大光寺跡						○
58	上泉開戸遺跡				○		
59	中道遺跡				○		
60	鳥山宿屋敷遺跡		○				
61	鎧着遺跡				○		
62	鳥ヶ谷戸遺跡				○		
63	鳥山環濠遺構群						○
64	鳥山下遺跡				○		
65	三枚橋南遺跡		○				
66	前沖遺跡		○		○	○	○
67	中妻遺跡				○		
68	鶴生田口遺跡		○		○		
69	間々下遺跡		○		○		
70	カニガ沢遺跡				○	○	
71	高太郎III遺跡				○		
72	高太郎I遺跡				○	○	
73	鍛冶ヶ谷戸遺跡				○	○	
74	高太郎II遺跡					○	
75	山去窯跡群					○	
76	山去・十八曲遺跡		○		○		○
77	長手口砦跡						○
78	金山城跡						○
79	脇屋深町遺跡				○		
80	唐桶田遺跡				○		
81	新田東部遺跡群				○		
82	堂原遺跡	○	○	○	○	○	○
83	岡原遺跡				○		
84	脇屋中原遺跡					○	
85	観音免遺跡 (脇屋義助館跡)						○
86	釣堂遺跡				○	○	
87	下原遺跡				○		
88	年保遺跡		○		○		
89	大島口遺跡	○	○		○		
90	大鳥館跡						○
91	堤入遺跡				○		

3 周辺の古墳について

「成るように塚がたくさんあった」ことが「成塚」町の地名の由来であったという考え方もあるように成塚向山古墳群が所在する八王子丘陵の上強戸地区一帯には多くの古墳の存在が確認されている。

1938（昭和13）年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、旧上強戸村・旧北金井村においても多くの古墳が報告されている。これらは発掘調査を伴わなかったため、現在となつては誤認のものも含まれている。

成塚古墳群は後期古墳を主体とする古墳群で、扇状地内の低台地上に分布する一大古墳群である。

北金井御嶽山古墳群・大鷲梅穴古墳群・大鷲大平古墳群・大鷲向山古墳群・上強戸古墳群はいずれも、八王子丘陵の各支丘の尾根から南斜面にかけて分布する古墳群である。調査は一部の古墳にみであるが、総体的には後期を主体とする群集墳と考えられる。

駒形神社埴輪窯跡は、6世紀後半を主体とする一大埴輪生産地である。近隣の群集墳とはほぼ同時期に存座していることから、両者の有機的関係が想定される。（深澤）

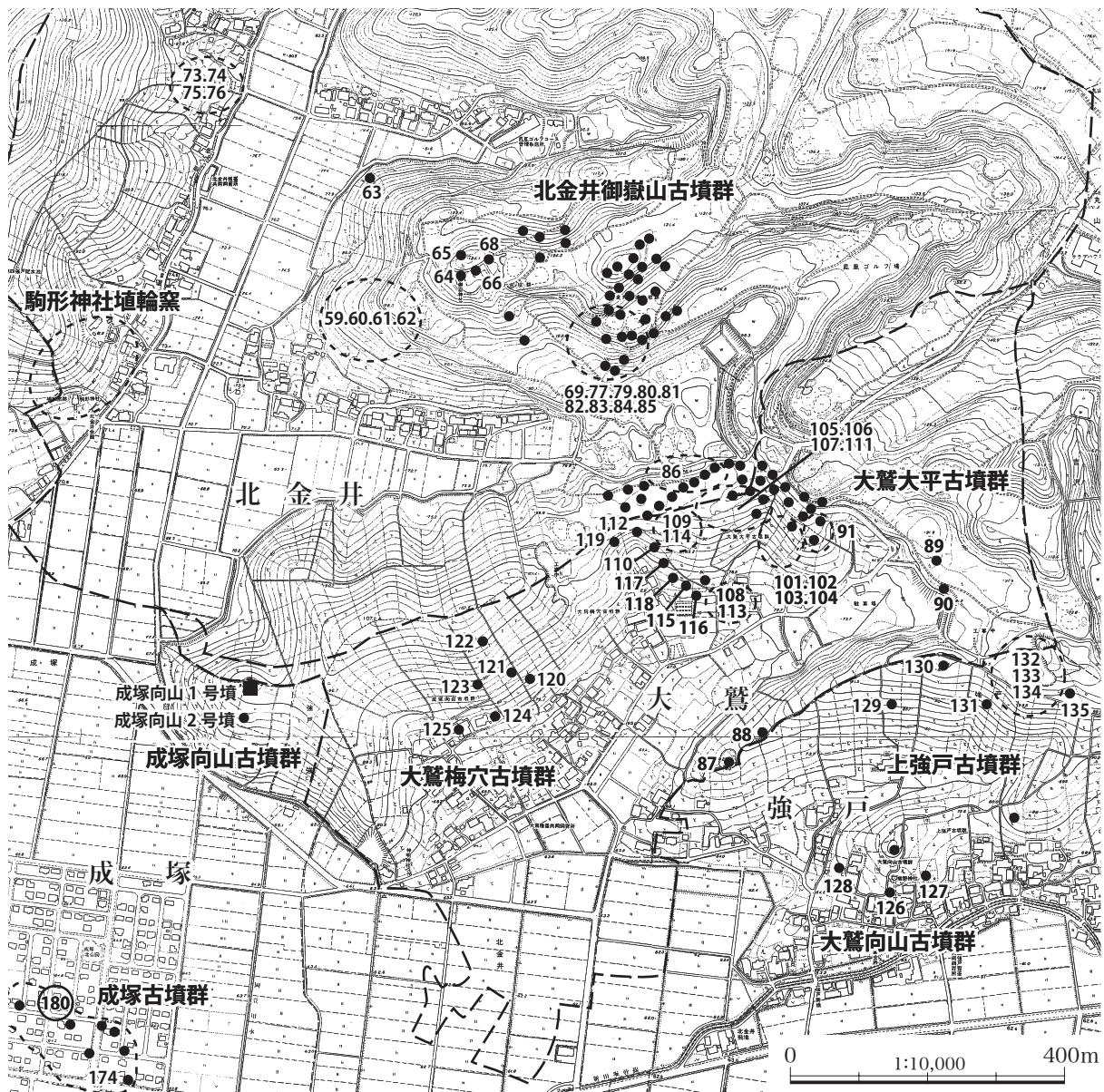


図4 成塚向山古墳群周辺の古墳分布図

第2章 経緯・方法・経過



成塚向山古墳群は八王子丘陵の桐生市南西部から太田市北部にわたって連なる「八王子丘陵」南端の支丘上に位置する。この支丘は舌状に飛び出した形状を呈しており、支丘頂部と周辺の沖積地との比高差は20～30mほどある。

発掘調査は北関東自動車道・太田パーキングエリア建設に伴い、のべ48,600㎡の面積について実施された。

写真2 調査中の成塚向山古墳群（平成16年8月撮影）

1 調査に至る経緯

北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設に伴う伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmの発掘調査が開始されたのは平成12年度である。平成12年6月、日本道路公団、群馬県土木部、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者による協議において、公団から橋梁下部工事等の工事優先区間の一部について、平成12年8月から発掘調査実施の要請があった。当事業団は、用地解決状況、残土場の確保、側道と本線の調査地区分の検討等、調査の準備を進めた。平成12年8月1日、日本道路公団・群馬県教育委員会・当事業団の3者による「北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、また協定書に基づく公団と事業団による平成12年度発掘調査の契約が結ばれ、発掘調査は着手となった。

成塚向山古墳群が所在する太田市成塚町地内の八王子丘陵南端の丘陵地は太田パーキングエリア計画地である。この計画は、ハイウェイオアシス構想に基づき日本道路公団と太田市が共同で開発する事業で、道路公団が施工する北関東道本線に連続する道路部分ならびに関連施設部分と、これに太田市が併設施工する公園的ヤードとからなる総面積約20ヘクタールにのぼる開発計画であった。

パーキングエリアの計画地は成塚向山古墳群が立地する周知の遺跡であったことから、これら古墳の残存状況ならびに重要度の確認を目的とした試掘調査が平成11年10月に太田市教育委員会により実施されている。調査結果に基づく、その取り扱いについての協議では記録保存の措置をとることでやむを得ないこととして合意された。

平成15年8月5日、道路公団と事業団との工程調整の会議において、成塚向山古墳群の発掘調査実施について、一部未買収地が残る状況下での、発掘調査の実施計画、工程等の協議が行われた。発掘調査は同年8月18日に着手した。（佐藤明人）

2 基本土層

成塚向山古墳群の存在する八王子丘陵では地点によって異なるものの、縄文時代以降に降下した5つのテフラが確認された。そして、これらを目安として、基本土層をI～XIII層に分層した。なお、最下層のXIII層は溶結凝灰岩の岩盤層であり、その生成時期が約1,500万年前と考えられるため、この層を調査の到達層とした。（深澤）

- I層 褐色土（表土）
- II層 黒褐色土 浅間A軽石（As-A）を含む
浅間A軽石は1783年に噴出
- III層 黒色土 浅間B軽石（As-B）を含む
- IV層 浅間B軽石（As-B）層 1108年に噴出
- V層 黒色土 榛名伊香保テフラ（Hr-FP）
または榛名渋川テフラ（Hr-FA）を含む
- VI層 榛名起源のテフラ層 Hr-FPまたはHr-FAの堆積層。Hr-FPは6世紀中頃、Hr-FAは6世紀初頭の噴出
- VII層 黒褐色土 浅間C軽石（As-C）を含む
- VIII層 浅間C軽石層 3世紀後半～末に噴出
- IX層 黒色土層 硬質でAs-Cを含まない
- X層 黄褐色ローム層 ソフトローム層
- XI層 黒褐色土 暗色帯
- XII層 チャート礫凝集層
- XIII層 溶結凝灰岩層

I	I 表土
II	II 浅間A軽石混入黒褐色土
III	III 浅間B軽石混入黒色土
IV	IV 浅間B軽石
V	V 榛名テフラ混入黒色土
VI	VI 榛名テフラ(Hr-FAまたはHr-FP)
VII	VII 浅間C軽石混入黒色土
VIII	VIII 浅間C軽石
IX	IX 砂質黒色土
X	X 黄色ローム
XI	XI 暗色帯
XII	XII チャート層
XIII	XIII 溶結凝灰岩層

図5 基本土層 模式図

3 名称について

遺跡名称について 北関東自動車道（伊勢崎～県境）・太田パーキングエリア建設事業に伴う埋蔵文化財調査（以下、「成塚向山古墳群調査」）の範囲は、太田市成塚町・北金井町・大鷲町にまたがる。

この古墳群については、昭和 50 年代に太田市史編纂室によって古墳の存在が確認され、平成 11 年度の太田教育委員会による確認調査（以下、「平成 11 年度調査」）時に、「成塚向山古墳群（市町村遺跡番号 T0111）」の呼称で調査報告がなされていることから、本調査でも同名を用いることとした。

古墳名称について 成塚向山古墳群では「平成

11 年度調査」で調査を実施した 2 基の古墳について、「成塚向山第 1 号古墳」「成塚向山第 2 号墳」という名称を用いている。しかし、本調査ではこれら 2 基の調査古墳に対して、「成塚向山 1 号墳」「成塚向山 2 号墳」の名称を用いることとし、調査及び報告を行った。

グリッド名称について 成塚向山古墳群調査では 46,800 m²の調査範囲に共通するグリッドを設置した（図 6）。このグリッドは 5 メートル四方を一単位とし、各グリッド名称は、日本平面直角座標系（世界測地系）の下 3 桁（例：X=37500、Y=-43300 の場合は「500-300」）を用いて表記した。

（深澤）



図 6 調査範囲全体図 (1/3,000)

4 調査の方針・方法・経過

(1) 調査の方針

成塚向山古墳群においては、本調査着手以前より、2基の古墳については、墳丘の高まりが明瞭に認識できたり（成塚向山1号墳）、石室の一部が露出していたり（成塚向山2号墳）と、残存状況を良好であることが判明していた。

そこで、調査方針として次のことをあげた。

「2基の古墳調査は墳丘及び埋葬施設の解体調査まで実施することを調査方針とする。」

そして、その目的を『「構造物としての古墳」を理解するための属性を抽出し、それらの記録保存を実施すること』においた。（深澤）

(2) 調査の方法

上記の方針にあげた通り、原則的には2基の古墳とも「墳丘及び埋葬施設の解体調査」を実施する体制をとった。

基本となる調査工程は次の通りである。

第1段階 現地地形測量・表土の除去

（調査範囲の確定／埋葬施設残存状況の確認）

第2段階 墳丘及び外表施設の調査

（盛土や外表施設の検出と記録／出土遺物の記録と取り上げ）

第3段階 周堀の有無確認

（周堀の有無の確認（あれば調査）／出土遺物の記録と取り上げ）

第4段階 埋葬施設の調査

（埋葬施設の種類や構造の確認／副葬品などの記録と取り上げ）

第5段階 墳丘及び埋葬施設の解体

（古墳築造に関する情報の抽出と記録）

この調査工程は、古墳の残存具合などの状況に応じて、工程の追加・変更を行っている。その点については、各古墳の調査報告で示してある。

※

なお、墳丘以外の遺構調査については、一般的な遺構調査・記録方法を採用した。

(3) 調査の経過

成塚向山古墳群の調査は、平成11年度の太田市教育委員会の試掘調査の結果を受けて、平成15年8月から着手し、平成17年3月に終了した。発掘調査期間内の個別進行状況は表2の通りである。

48,600㎡の調査区はその大半が傾斜面であり、頂部からの流土及び包含遺物等が中腹付近に多く存在し、遺構の有無の認定が困難であり、調査初期段階からこの認定作業が難航した。本古墳群調査において、その調査期間に比して検出遺構数量が比較的低調な主な原因はこのことにある。

一方、その存在が既に確認されていた2基の古墳については、調査当初に予想していた以上に、遺構・遺物ともに残存状況が良好であった。そのため、先述した古墳調査段階の第2～4段階を何度も繰り返す調査方法を選択し、数多い調査メニューの効率的な遂行を実施した。

成塚向山1号墳に関しては、未盗掘古墳であり、群馬県内においても希有な「木棺」の調査であったこと、さらには墳丘内や墳丘下からの遺物出土が想定以上に多かったことが主な原因となり、調査期間の多く要すこととなった。

また、成塚向山2号墳に関しては、古墳自体が斜面地形に立地しているため作業に伴う足場の確保が容易でなかったこと、さらには石室石材の崩落等に起因する人身事故を未然に防ぐ観点から、墳丘・石室解体調査には安全が確保される少人数のみで調査を進行させた。そのため、それが要因となり、調査期間を多く要すこととなった。

調査記録は、実測図は平板による手実測図と、専用機材による機械実測、さらにはラジコンヘリによる航空測量を併用した。一方、写真記録は、銀塩カメラを用いて、35mmカラーポジ及びモノクロネガフィルム、ブローニー版カラーポジで撮影した。また、一部についてはデジタルカメラを用いて、デジタルデータの保存も実施した。（深澤）

表2 調査経過表

年度	平成15(2003)年度												平成16(2004)年度											
	平成15(2003)年						平成16(2004)年						平成17(2005)年											
	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月				
	18日~	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後			
調査開始準備																								
1号墳	墳丘の現況測量																							
	試掘トレンチの再掘																							
	表土の除去																							
	周堀・周縁の確認調査																							
	墳丘裾部の確認調査																							
	墳丘外表の調査																							
	埋葬施設の調査																							
	構築墓壇の調査																							
	墳丘の解体調査																							
	埋葬施設の解体調査																							
	旧地表面の調査																							
	出土遺物の取り上げ																							
	写真撮影・図化記録																							
	2号墳	墳丘の現況測量																						
試掘トレンチの再掘																								
表土の除去																								
周堀・周縁の確認調査																								
埋葬施設の調査																								
墳丘外表の調査 (樹立埋輪の精査含)																								
墳丘の解体調査																								
埋葬施設の解体調査																								
旧地表面の調査																								
出土遺物の取り上げ																								
写真撮影・図化記録																								
表土掘削(古墳以外)																								
住居		精査																						
		写真撮影・図化記録																						
土坑	精査																							
	写真撮影・図化記録																							
溝	精査																							
	写真撮影・図化記録																							
集石	精査																							
	写真撮影・図化記録																							
井戸	精査																							
	写真撮影・図化記録																							
炭窯	精査																							
	写真撮影・図化記録																							
道	精査																							
	写真撮影・図化記録																							
テラス	精査																							
	写真撮影・図化記録																							
旧石器試掘																								
現地説明会																								
調査撤収作業																								

現地説明会※1…平成15年12月14日(日)開催/※2…平成16年8月29日(日)開催

5 整理の方法と経過

成塚向山古墳群の整理業務は平成17年4月から平成19年7月まで行われた。業務着手時より、デジタル編集の方針が採られ、その効率的運用を実現させるためのワークフローに基づいて実施された。

平成17年度は遺物接合・復元・実測など手作業による業務（アナログ業務）を主とし、遺構図面編集・遺構写真加工などのパソコン活用による業務（デジタル業務）を従とした。

平成18年度は遺物実測・採拓などのアナログ業務を完了させ、遺物図トレース・拓本加工・遺物写真撮影や本文組版などのデジタル業務に主業務を移行させた（写真3）。

平成19年度はデジタル業務のみを実施し、遺物図トレース・拓本加工・諸図版作成加工や本文・写真図版の組み版などの出稿に向けた仕上げ業務を実施し（写真4）、本書を刊行した。（深澤）

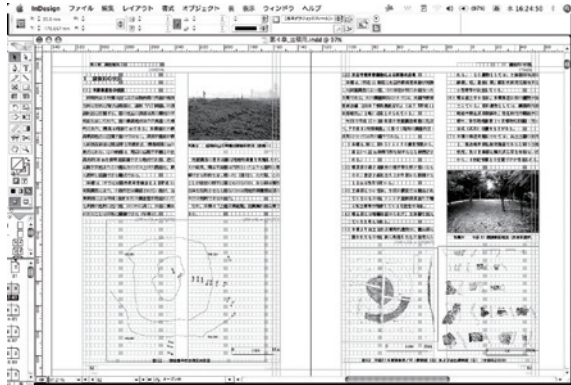


写真3 デジタル編集作業データ



写真4 調査報告書 デジタル編集業務

6 普及活動

発掘調査期間中、群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団共催で2度の現地説明会を開催した。平成15年12月14日の第1回説明会では快晴の下、約1,500名、平成16年8月29日の第2回説明会では降雨の下、約700名の見学者が成塚向山古墳群を訪れた（写真5・6）。さらに、平成16年7月13日～同年8月31日の間、文化庁・群馬県立歴史博物館の共催事業「第77回企画展 新発見考古速報展群馬地域展示-群馬発掘情報-」に成塚向山1号墳出土遺物の一部が出品された。

整理業務期間中、平成19年1月13日には財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団主催の「平成18年度整理成果発表会」において、発掘調査以後、整理業務の中で明らかになった成果について発表を行い、併せて接合・復元が完了した出土品の一部を公開した。（深澤）



写真5 第1回現地説明会（2003年12月14日）

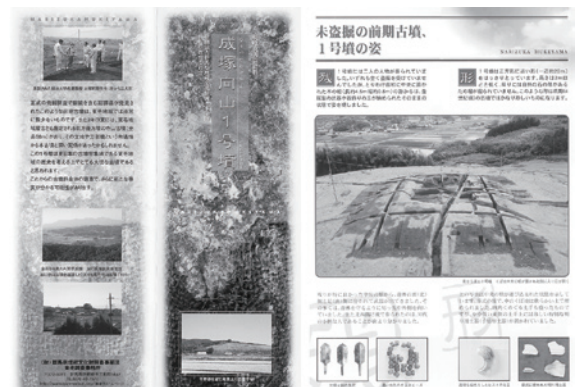


写真6 現地説明会資料（左：第1回 / 右：第2回）

第3章 調査報告 1

古墳時代前期の竪穴住居



丘陵の北西斜面からは、古墳時代前期の竪穴住居群が検出された。この住居群からの出土土器は、樽式土器や吉ヶ谷式土器などの弥生時代後期後半以来の伝統様式の流れをくむものが主体となっていた。古墳時代の幕開けの頃、これら伝統的土器様式を保持する集落は、その生活領域を沖積地でなく、丘陵上などの山麓部に求めたとされるが、成塚向山古墳群において検出された住居群はそのあり方を如実に示している。

写真7 古墳時代前期の竪穴住居群（平成16年8月撮影）

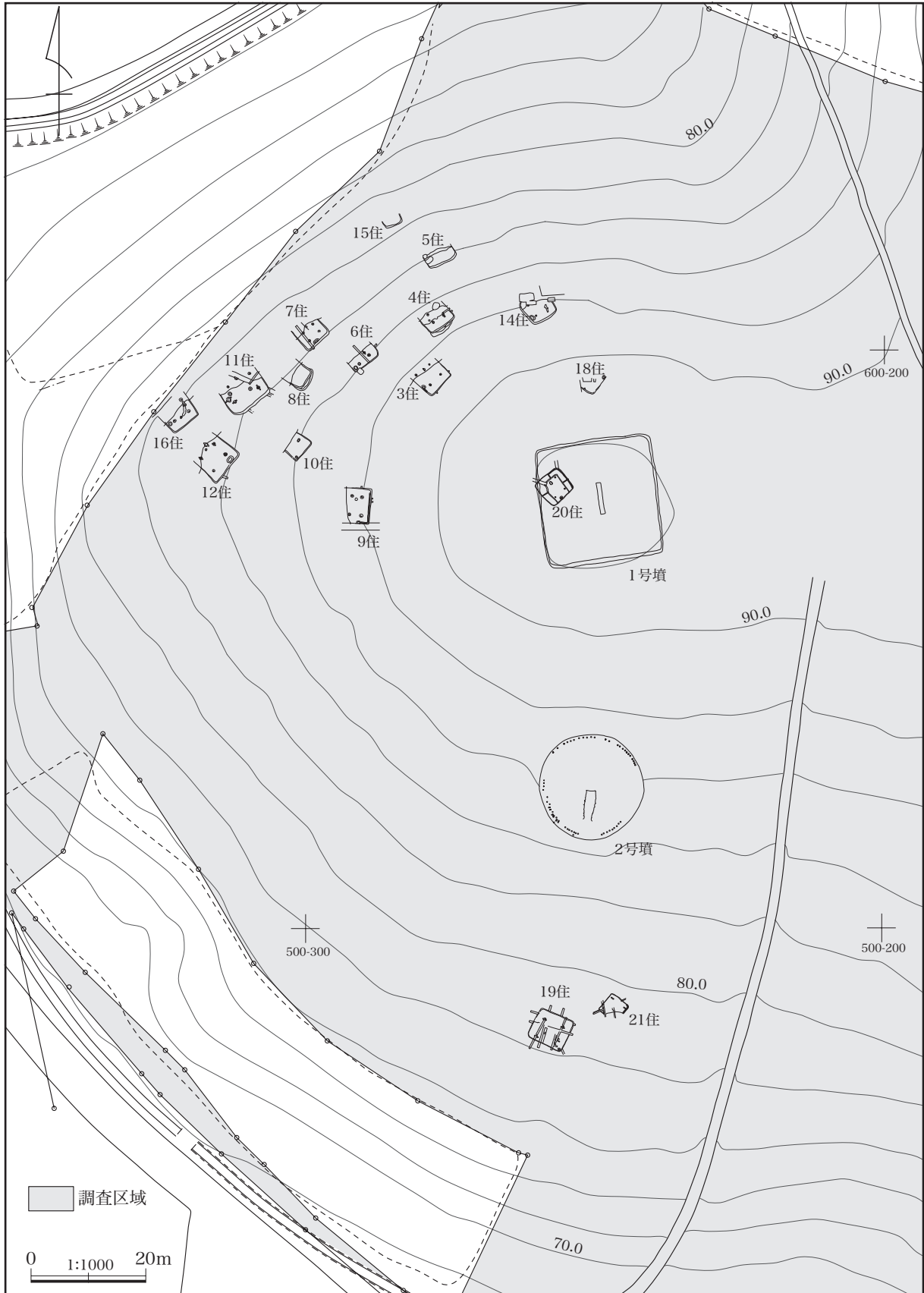


图7 古墳時代前期住居分布图

1 概要

(1) 検出された軒数 (図7)

成塚向山古墳群では古墳時代前期の竪穴住居が17軒検出された。これらの住居はそれぞれ重複なく存在することが確認された。

なお、2号・17号住居と調査時に呼称したものは、遺構でないことが判明したため、欠番とした。また、1号住居・13号住居については、歴史時代住居のため別章(第7章)に報告記載した。(深澤)

(2) 選地状況

17軒のうち、15軒(3～12・14～16・18・20号住居)は丘陵の尾根頂部から北西斜面に選地し、ほか2軒(19・21号住居)は丘陵の南斜面の中途にあるやや平坦な場所を選地している。(深澤)

(3) 住居規模と施設について

17軒の竪穴住居のうち、竪穴全体が調査できたものは19・20号住居の2軒のみである。それ以外の住居は後世の崩落等によって竪穴の一部が失われている。だが、残存する竪穴の状況から推測する限り、平面プランは方形を呈すると思われる。住居の平面規模は、残存する長さでみると、一辺長は3.32mの竪穴から7.90mの竪穴まで存在するが、最も多い規模としては一辺5.5m程度の竪穴といえる。

住居内施設については、4本柱穴と、貯蔵穴・炉が備えてある住居が標準といえる。但し、屋内施設が認められない住居もあり、こうした竪穴は小規模である傾向がうかがえる。(深澤)

(4) テフラや他遺構との先後関係について

竪穴住居群の構築時期に関連すると思われるテフラは浅間C軽石である。そして、このテフラとの先後関係が認められた住居は20号住居のみであるが、浅間C軽石降下後に竪穴の掘削が開始されたことが判明した。なお、ほかの住居では覆土中に微量の浅間C軽石の混入が認められるのみであった。

また、他遺構との先後関係としては、やはり20号住居において確認され、20号住居埋没後に成塚向山1号墳が築造されたことが判明した。(深澤)

2 各竪穴住居について

(1) 3号住居 (図8・9 / PL. 2)

検出状況 本住居は傾斜面の下方、北西1/3程度の床面がすでに失われていた。しかし、柱穴は4箇所とも検出することができたため、全体を推定することが可能となった。平面規模 5.30m×4.48m～。平面形状 方形。残存深度 0.30m。住居覆土 褐色粘質土。床面状況 ほぼ平坦。柱穴 4箇所 / P-1:(長軸)34cm×(短軸)30cm×(深さ)42cm / P-2:(長軸)42cm×(短軸)34cm×(深さ)48cm / P-3:(長軸)40cm×(短軸)34cm×(深さ)52cm / P-4:(長軸)30cm×(短軸)26cm×(深さ)28cm 炉 北西部(P-3とP-4の中間位置)に1箇所あり。直径約40cm、深さ2cmの円形の掘り込み内に焼土が残存する。

貯蔵穴 南西壁に接し、P-2に近い位置に平面卵形を呈するものが1箇所あり / 長軸70cm×短軸58cm×深さ18cmである。埋没状態 自然堆積。

出土遺物 土器が4点ある。床面からは甕(3住1)と壺(3住2)が出土、貯蔵穴内からは甕(3住3)、甕?(3住4)が出土した。出土炭化材 屋根材と思われる炭化材が出土した。その分布は南西壁～南東壁附近の壁際から柱穴までの間で集中している。これらの樹種はクヌギ節とムクロジである(「第8章10」参照)。なお、炭化材が放射状に出土し、数点は貯蔵穴の底面に横たわっていたことから、住居廃絶後、すぐに焼失したと考えられる。

(矢島博文)

(2) 4号住居 (図10・11 / PL. 3)

検出状況 本住居は傾斜面の下方、北西1/4程度の床面がすでに失われていた。しかし、柱穴は3箇所確認することができたため、全体を推定することが可能となった。平面規模 5.10m×3.50m～。

平面形状 方形。残存深度 0.46m。住居覆土 褐色粘質土が主体。床面状況 わずかに凸凹があるが、ほぼ平坦。柱穴 3箇所(本来4箇所確認されるはずだが、うち1箇所は攪乱坑により

第3章 調査報告1

喪失) / P-1:(長軸)36cm×(短軸)30cm×(深さ)40cm / P-2:(長軸)50cm×(短軸)38cm×(深さ)46cm / P-3:(長軸)38cm×(短軸)34cm×(深さ)32cm 炉 南西部(P-2とP-3の中間位置)に1箇所あり。直径約28cmの円形範囲に焼土ブロックが残存する。貯蔵穴 未検出。埋没状況 自然堆積。出土遺物 土器が15点ある。床面からは甕(4住1・2)、甕または壺(4住3・4)、高坏(4住5・6・9)、高坏または器台(4住7)、片口(4住8)が出土している。さらに、覆土中からは、甕(4住10~13)、壺(4住14)、器台(4住15)の破片が出土している。出土炭化材 屋根材と思われる炭化材が出土した。その分布は南東壁付近の壁際から柱穴までの間で集中している。これらの樹種はクヌギ節とムクロジである(「第8章10」参照)。 (矢島・深澤)

(3) 5号住居 (図12/PL.3)

検出状況 本住居は斜面地の下方、北西1/2以上の床面がすでに失われていた。平面規模 5.25m×2.15m~。平面形状 方形(推定)。残存深度 0.45m。住居覆土 暗褐色~褐色粘質土。床面状況 ほぼ平坦。柱穴 なし(未検出)。炉 なし(未検出)。貯蔵穴 なし(未検出)。埋没状態 自然堆積。出土遺物 土器が12点ある。床面からは台付甕(5住1)、甕(5住2・4・5・8)高坏(5住6・7)、器台(5住3)が出土している。さらに、覆土中からは、甕(5住9・11・12)、高坏または器台(5住10)の破片が出土している。出土炭化材 なし(未検出)。(深澤)

(4) 6号住居 (図13・14/PL.4)

検出状況 本住居は傾斜面の下方、北西2/3以上の床面がすでに失われていた。しかし、柱穴は2箇所が検出することができたため、辛うじて全体を推定することが可能となった。平面規模 5.40m×4.35m~。平面形状 方形(推定)。残存深度 0.38m。住居覆土 褐色粘質土が主体。床面状況 ほぼ平坦。柱穴 2箇所 / P-1:(長軸)50cm×(短軸)44cm×(深さ)28cm / P-

2:(長軸)48cm×(短軸)46cm×(深さ)30cm。

炉 北東部(P-2に近い位置)にあり。直径約38cmの平面楕円形で、深さ5cmである。炉はよく被熱を受け硬く焼けしまっている。貯蔵穴 南東隅に位置する。楕円形で、平面規模は72cm×60cm、深さ20cmである。埋没状態 自然堆積。出土遺物 土器が13点ある。床面からは、甕(6住1~5)、壺(6住6・7)、高坏(6住8・9)、高坏または器台(6住10)、甕?(6住11)が出土している。さらに、覆土中からは、甕(6住12・13)の破片が出土している。出土炭化材 なし。 (矢島・深澤)

(5) 7号住居 (図15~17/PL.5)

検出状況 本住居は傾斜面の下方、北西1/3以上の床面がすでに失われていた。しかし、柱穴は4箇所が検出することができたため、全体を推定することが可能となった。平面規模 5.14m×3.88m~。平面形状 方形(推定)。残存深度 0.68m。住居覆土 黒褐色~暗褐色粘質土が主体。床面状況 ほぼ平坦だが、南東から北西に向かってわずかに下り傾斜。柱穴 4箇所 / P-1:(長軸)44cm×(短軸)40cm×(深さ)54cm / P-2:(長軸)40cm×(短軸)38cm×(深さ)50cm / P-3:(長軸)42cm×(短軸)34cm×(深さ)62cm / P-4:(長軸)40cm×(短軸)38cm×(深さ)54cm 炉 北東部(P-3とP-4の中間位置)に1箇所あり。南西半分は削平により失われているが、直径約37cmの円形範囲に焼土ブロックが残存したと推定できる。火床面は良く被熱を受け硬く焼けしまっている。貯蔵穴 南東壁中央に位置する。楕円形で、平面規模は1.16m×48cm、深さ18cmである。埋没状態 自然堆積。出土遺物 土器が20点、土製紡錘車が1点出土している。床面からは、甕(7住1・8~10・18)、甕?(7住17)、壺(7住2~7・16)、高坏(7住11・12)、器台(7住13)、鉢(7住14・15)、および土製紡錘車1点(7住19)が出土している。さらに、覆土中からは甕(7住20)、高坏または器台片

(7住21)が出土している。出土炭化材 屋根材と思われる炭化材が出土した。その分布状況は南西壁～南東壁附近の壁際から柱穴までの間である。これらの樹種はケンボナシ属である(「第8章10」参照)。(深澤)

(6) 8号住居(図18/PL.5)

検出状況 本住居は傾斜面の下方、北西1/2以上の床面がすでに失われていた。平面規模 4.00m×3.24m～。平面形状 方形(推定)。残存深度 0.60m。住居覆土 褐色粘質土が主体。

床面状況 ほぼ平坦だが、南東から北西に向かってやや傾斜。柱穴 なし。炉 不明確だが、検出範囲の北西端(中央部よりやや西位置と推定)に平面40cm×50cm範囲で焼土が存在する。貯蔵穴 なし(未検出)。埋没状態 自然堆積。付帯施設 南東壁に棚状施設と推定される段がある。

出土遺物 土器が6点出土している。床面からは、甕(8住1～5)が出土して、覆土中からも甕片(8住6)が出土している。出土炭化材 床面から炭化材片がまばらに出土している。(矢島)

(7) 9号住居(図19～21/PL.6・7)

検出状況 本住居は緩傾斜面の下方、西1/3程度の床面がすでに失われていた。しかし、柱穴は4箇所が検出することが出来、全体を推定することが可能となった。平面規模 6.20m×4.25m～。平面形状 長方形(4箇所の柱穴の位置から推定)。

残存深度 0.65m。住居覆土 褐色～暗褐色粘質土が主体。床面状況 ほぼ平坦。柱穴 4箇所/P-1:(長軸)54cm×(短軸)48cm×(深さ)60cm/P-2:(長軸)50cm×(短軸)44cm×(深さ)52cm/P-3:(長軸)47cm×(短軸)45cm×(深さ)48cm/P-4:(長軸)62cm×(短軸)55cm×(深さ)52cm 炉 床面の中央部(推定)よりやや北側(P-1とP-2の中間位置)に1箇所あり。直径約45cm、深さ4cmの円形の掘り込み内に焼土が残存する。貯蔵穴 南壁中央にあり。平面規模は62cm×46cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。壁溝 東壁際と南壁際で確認された。幅8～

25cm、深さは3～5cm。底面からはピット列等は検出されなかった。埋没状態 自然堆積。出土遺物 土器が8点ある。全て床面からの出土であり、甕(9住1・7・8)、壺(9住2・5・6)、器台(9住3)、鉢(9住4)である。出土炭化材 なし(未検出)。(矢島・深澤)

(8) 10号住居(図22/PL.7)

検出状況 本住居は傾斜面の下方、西1/3程度の床面がすでに失われていた。平面規模 4.30m×3.20m～。平面形状 方形(推定)。残存深度 0.40cm。住居覆土 褐色粘質土。柱穴 なし。壁溝 なし。床面状況 ほぼ平坦だが、南東から北西に向かってわずかに下り傾斜。柱穴 なし。炉 床面の中央部(推定)よりやや北側に1箇所あり。平面規模 60cm×38cm、深さ4cmの楕円形の掘り込み内に焼土が残存する。貯蔵穴 南東隅にあり。平面規模は48cm×38cm、深さ12cmのほぼ円形を呈する。埋没状態 自然堆積。出土遺物 土器が2点ある。いずれも床面出土で、高坏(10住1・2)である。出土炭化材 床面、貯蔵穴内から小片が出土した。(矢島)

(9) 11号住居(図23・24/PL.7・8)

検出状況 本住居は傾斜面の下方、北西1/2程度の床面がすでに失われていた。しかし、柱穴は4箇所が検出することができ、全体を推定することが可能となった。平面規模 7.82m×4.90m～。

平面形状 方形(推定)。残存深度 0.52m。住居覆土 褐色粘質土が主体。床面状況 ほぼ平坦。柱穴およびピット 7箇所あり。うち、P-1～4が主柱穴と推定/P-1:(長軸)60cm×(短軸)43cm×(深さ)44cm/P-2:(長軸)38cm×(短軸)34cm×(深さ)46cm/P-3:(長軸)49cm×(短軸)40cm×(深さ)40cm/P-4:(長軸)60cm×(短軸)45cm×(深さ)48cm/P-5(長軸)70cm×(短軸)58cm×(深さ)35cm/P-6:(長軸)62cm×(短軸)60cm×(深さ)27cm/P-7:(長軸)48cm×(短軸)22cm×(深さ)58cm。炉 不明(未検出)。貯蔵穴 南西壁面中央付近

第3章 調査報告1

にあり。平面規模 90cm×80cm の楕円形を呈し、深さは 32cm。壁溝 なし。埋没状態 自然堆積。出土遺物 土器が 11 点ある。床面からの出土は、甕 (11 住 7)、甕? (11 住 5・6)、壺 (11 住 4)、高坏 (11 住 2・8)、器台 (11 住 1)、高坏または器台 (11 住 3) であり、覆土中からの出土は甕片 (11 住 9～11) である。出土炭化材 屋根材と思われる炭化材が南西～南東壁付近の床面から出土した。これらの樹種はマツ属である (「第 8 章 10」参照)。(深澤)

(10) 12 号住居 (図 25～27 / PL. 8)

検出状況 本住居は緩傾斜面の下方、西 1/3 程度の床面がすでに失われていた。加えて、南側で 13 号住居 (平安時代) が重複していた。しかし、柱穴は 4 箇所が検出することが出来、全体を推定することが可能となった。平面規模 6.50 m × 5.40 m 。

平面形状 方形 (推定)。残存深度 0.63 m。住居覆土 黒褐色粘質土が主体。床面状況 ほぼ平坦。柱穴およびピット 5 箇所あり。うち、P-1～4 が支柱穴と推定 / P-1 : (長軸) 43cm × (短軸) 41cm × (深さ) 52cm / P-2 : (長軸) 49cm × (短軸) 47cm × (深さ) 45cm / P-3 : (長軸) 50cm × (短軸) 44cm × (深さ) 51cm / P-4 : (長軸) 60cm × (短軸) 58cm × (深さ) 42cm / P-5 : (長軸) 65cm × (短軸) 60cm × (深さ) 33cm 炉 北西部 (P-2 と P-3 の中間位置) に 1 箇所あり。直径約 38cm、深さ 8 cm の円形の掘り込み内に焼土を多く含む土が残存する。

貯蔵穴 東壁際に位置する。楕円形で、平面規模は 130cm×90cm、深さ 28cm である。壁溝 なし。

埋没状態 自然埋没。出土遺物 土器が 6 点ある。全て床面からの出土であり、甕 (12 住 1～3)、器台 (12 住 4・5)、高坏または器台 (12 住 6) がある。出土炭化材 屋根材と思われる炭化材が南東壁付近の床面から出土した。この樹種はクヌギ節である (「第 8 章 10」参照)。(深澤)

(11) 14 号住居 (図 28・29 / PL. 9)

検出状況 本住居は緩傾斜面の下方、北 1/4 程

度の床面がすでに失われていた。しかし、柱穴が 3 箇所が検出することができ、全体を推定することが可能となった。平面規模 5.10 m × 4.80 m 。

平面形状 方形 (推定)。残存深度 0.46 m。住居覆土 暗褐色～褐色粘質土が主体。床面状況

ほぼ平坦だが、部分的に南から北にむかってわずかに下り傾斜。柱穴 3 箇所 / P-1 : (長軸) 25cm × (短軸) 13cm × (深さ) 33cm / P-2 : (長軸) 22cm × (短軸) 21cm × (深さ) 32cm / P-3 : (長軸) 30cm × (短軸) 22cm × (深さ) 22cm 炉 中央よりやや北東位置に 1 箇所あり。52cm×38cm の楕円形を呈し、深さ約 10cm の凹みに焼土を多く含む土が残存する。また、炉内からは長さ 28cm、厚さ 12cm の安山岩垂角礫が 1 点出土した。貯蔵穴 南東壁際に位置する。楕円形で、平面規模は 110cm×72cm、深さ 16cm である。

壁溝 なし。埋没状況 自然埋没。出土遺物 土器が 12 点ある。床面からは、甕 (14 住 1・4・7～9)、壺 (14 住 2)、高坏 (14 住 5)、有孔鉢 (14 住 6)、不明破片 (14 住 3) が出土している。さらに、覆土中からは、甕 (14 住 10～12) の破片が出土している。出土炭化材 屋根材と思われる炭化材が P-1 付近の床面から出土した。これらの樹種はクヌギ節である (「第 8 章 10」参照)。(矢島・深澤)

(12) 15 号住居 (図 30 / PL. 9)

検出状況 本住居は緩傾斜面の下方、北 1/2 以上の床面がすでに失われていた。平面規模 3.32 m × 1.70 m 。

平面形状 方形 (推定)。残存深度 0.36 m。住居覆土 にぶい黄褐色粘質土。床面状況 ほぼ平坦。柱穴 なし (未検出)。

炉 なし (未検出)。貯蔵穴 なし (未検出)。埋没状態 自然埋没。出土遺物 土器が 7 点出土している。全てが床面出土であり、甕 (15 住 1～3)、壺 (15 住 6・7)、高坏 (15 住 4)、器台 (15 住 5) がある。出土炭化材 なし。(矢島)

(13) 16 号住居 (図 31・32 / PL. 10)

検出状況 本住居は緩傾斜面の下方、北西 1/2 程度の床面がすでに失われていた。しかし、柱穴を

3箇所で確認することができ、全体を推定することが可能となった。平面規模 5.70 m × 4.26 m 。

平面形状 方形(推定)。残存深度 0.30 m。
住居覆土 褐色砂質土が主体。床面状況 ほぼ平坦。柱穴 3箇所／P-1:(長軸)56cm×(短軸)44cm×(深さ)40cm／P-2:(長軸)56cm×(短軸)50cm×(深さ)40cm／P-3:(長軸)58cm×(短軸)54cm×(深さ)43cm 炉 2箇所／炉-1:P-2とP-3の中間位置にあり。平面規模が60cm×50cmの楕円形を呈し、深さ10cmの掘り込み内に焼土が残存する／炉-2:P-1とP-2の中間位置にあり。平面規模は45cm×34cmの楕円形を呈し、深さ4cmの掘り込み内に焼土が残存する。貯蔵穴 南西壁際にあり。円形で、平面規模は69cm×68cm、深さは36cmである。埋没状態 自然埋没。出土遺物 土器が10点と、土製紡錘車1点がある。全て床面からの出土であり、甕(16住1～5)、壺(16住7・8)、壺?(16住6)、高坏または器台(16住9・10)、土製紡錘車(16住11)がある。出土炭化材 なし。

(矢島・深澤)

(14) 18号住居 (図30 / PL.11)

検出状況 本住居は傾斜面に、住居南隅のみが、わずかに残存するのみであった。おそらく大半は傾斜面のため、崩落したものと考えられる。平面規模 3.90 m × 2.50 m 。

平面形状 方形(推定)。残存深度 0.36 m。住居覆土 黒褐～暗褐色土。床面状況 ほぼ平坦。柱穴 1箇所。但し、南西壁際に位置するため、支柱穴とは考えられない／P-1:(長軸)20cm×(短軸)16cm×(深さ)23cm 炉 なし(未検出) 貯蔵穴 南西壁際に1箇所あり。住居跡の北東隅に位置する。平面規模は60cm×46cmの楕円形を呈し、深さは22cm。埋没状態 自然埋没。出土遺物 床面からは土製紡錘車(18住1)が出土した。また、覆土中からは甕または壺の破片(18住2)が出土した。出土炭化材 住居南隅、南西～南東壁際の床面から多量の炭化材が出土した。壁面に対して垂

直または平行方向で出土するものも多く、垂木や横木といった屋根材と推定される。これらの樹種はクヌギ節がほぼ全てであり、わずかにススキ属を含んでいる(「第8章10」参照)。(矢島)

(15) 19号住居 (図33～35 / PL.11)

検出状況 南斜面の中でも平坦面に近いごくわずかな緩斜面にある。緩斜面下方(南側)をわずかに削平されてはいるが、平面プランは明確に確認された。平面規模 6.60 m × 5.86 m。平面形状 方形。残存深度 0.48 m。住居覆土 黒褐色土が主体。床面状況 ほぼ平坦だが、北から南にむかいわずかに下り勾配をなす。柱穴 4箇所／P-1:(長軸)37cm×(短軸)34cm×(深さ)27cm／P-2:(長軸)38cm×(短軸)36cm×(深さ)34cm／P-3:(推定直径)約30cm×(深さ)41cm／P-4:(推定直径)約30cm×(深さ)56cm 炉 住居中央よりやや南、支柱穴より内側に1箇所あり。規模は約30cm×約20cmの範囲に、硬く締まった焼土ブロックが分布することから、炉と推定した。貯蔵穴 南東隅に1箇所あり。平面規模が直径約42cmの円形を呈し、深さは34cmである。埋没状態 自然埋没。出土遺物 土器が12点ある。全て床面からの出土であり、甕(19住1・2・11・12)、壺(19住3・4・10)、高坏(19住5)、器台(19住6・8)、高坏または器台(19住7)、鉢(19住9)である。出土炭化材 住居の北側と北西部から焼土とともに長さ5cm以下の小片や炭化物がわずかに出土している。炭化材の樹種は全てモミ属である(「第8章10」参照)。(深澤)

(16) 20号住居 (図36～39 / PL.12)

検出状況 本住居は成塚向山1号墳の墳丘盛土下から検出された住居である。詳細内容は後述(「第4章5」参照)するが、本住居は成塚向山1号墳築造時には廃絶されており、すでに凹地化していたものと考えられる。また、住居構築は浅間C軽石層を掘削している状況も確認された。なお、成塚向山1号墳の墳裾の一部の削平に伴い、住居の一部が削平されていたものの、平面形状と床面情報はほぼ完全

第3章 調査報告1

に得られる状態であった。平面規模 5.36 m × 5.20 m。平面形状 方形。残存深度 0.50 m。

住居覆土 暗褐色～にぶい黄褐色土が主体。床面状況 ほぼ平坦だが、北東～北西～南西壁にかけて、壁際より幅 0.85～1.40 m、高さ 0.10 m のベッド状遺構が存在する。柱穴 4箇所／P-1:(長軸)24cm×(短軸)20cm×(深さ)58cm／P-2:(長軸)20cm×(短軸)18cm×(深さ)34cm／P-3:(長軸)22cm×(短軸)20cm×(深さ)56cm／P-4:(長軸)25cm×(短軸)23cm×(深さ)48cm

壁溝 北東壁際の全てと北西壁面の一部で、幅 15～25cm、深さ 4 cm の周溝が検出された。なお、周溝底面からのピット列の検出は認められなかった。炉 床中央よりやや北西位置、P-3・4の中間位置に付設。平面規模は 60cm×42cm の楕円形を呈し、深さ 3 cm の掘り込みの中に、焼土が充填してあり、炉と認定した。なお、炉内には扁平なチャート礫が 2石並んで出土した。貯蔵穴 南東壁際のほぼ中央位置に付設。平面規模は 54cm×46cm の楕円形を呈し、深さは 40cm である。埋没状態 焼失によって廃棄されたものと考えられるが、覆土上層(住居覆土の2層)チャート礫が多量に存在することから、成塚向山1号墳の構築に伴い、すでに凹地化した本住居を完全に平坦になるまで人為的に埋め戻した可能性が考えられる。また、本住居が丘陵の頂上部に位置していることから、自然に礫が埋没することは考えがたく、その点からも、焼失後に人為的に埋められたと考えられよう。出土遺物 土師器片が 25点と、土製紡錘車1点が出土している。床面からは甕(20住1～5)、壺(20住6)、高坏(20住8)、高坏または台付甕(20住7)壺・口縁部片1点(20住9)、および土製紡錘車(20住10)が出土している。さらに、覆土中からは、甕(20住11・17～20・22～24)、壺(20住12～16・21・26)、高坏?(20住25)が出土している。

出土炭化材 床面から約60本の炭化材が出土し、炭化物も面的に多量に出土している。最大の炭化材は長さが80cm程度であり、横木・垂木・梁桁といっ

た部材の特定も可能な残存状況である。なお、主柱と棟木と思われる材は確認されなかった。炭化材の方向はおおむね中央部から放射状である。炭化材の樹種はクヌギ節が大半であるが、アカガシ亜属、モミ属も若干含まれる。また、炭化物は全てカヤである。備考 他の住居とは異なり、コの字状の段差を有する床面を持つ点は本住居群の中においては、特異である。(深澤)

(17) 21号住居(図40/PL.13)

検出状況 南斜面の中でも平坦面に近いごくわずかな緩斜面にある。緩斜面下方(南側)約1/4を削平されてはいるものの、平面プランは明確に確認された。平面規模 3.94 m × 3.78 m。平面形状 方形。残存深度 0.06 m。住居覆土 暗褐色土。床面状況 北から南へのごく緩やかな下り傾斜を呈する。柱穴 なし。炉 なし(未検出)。貯蔵穴 なし(未検出)。埋没状態 自然堆積(推定)。出土土器 床面より、有孔鉢(21住1)が出土している。出土炭化材 なし。但し、床面から焼土が多量に出土している。範囲は大きく3箇所であるが、まとめると規模は 1.20 m × 1.00 m の範囲内でおさまる。(矢島)

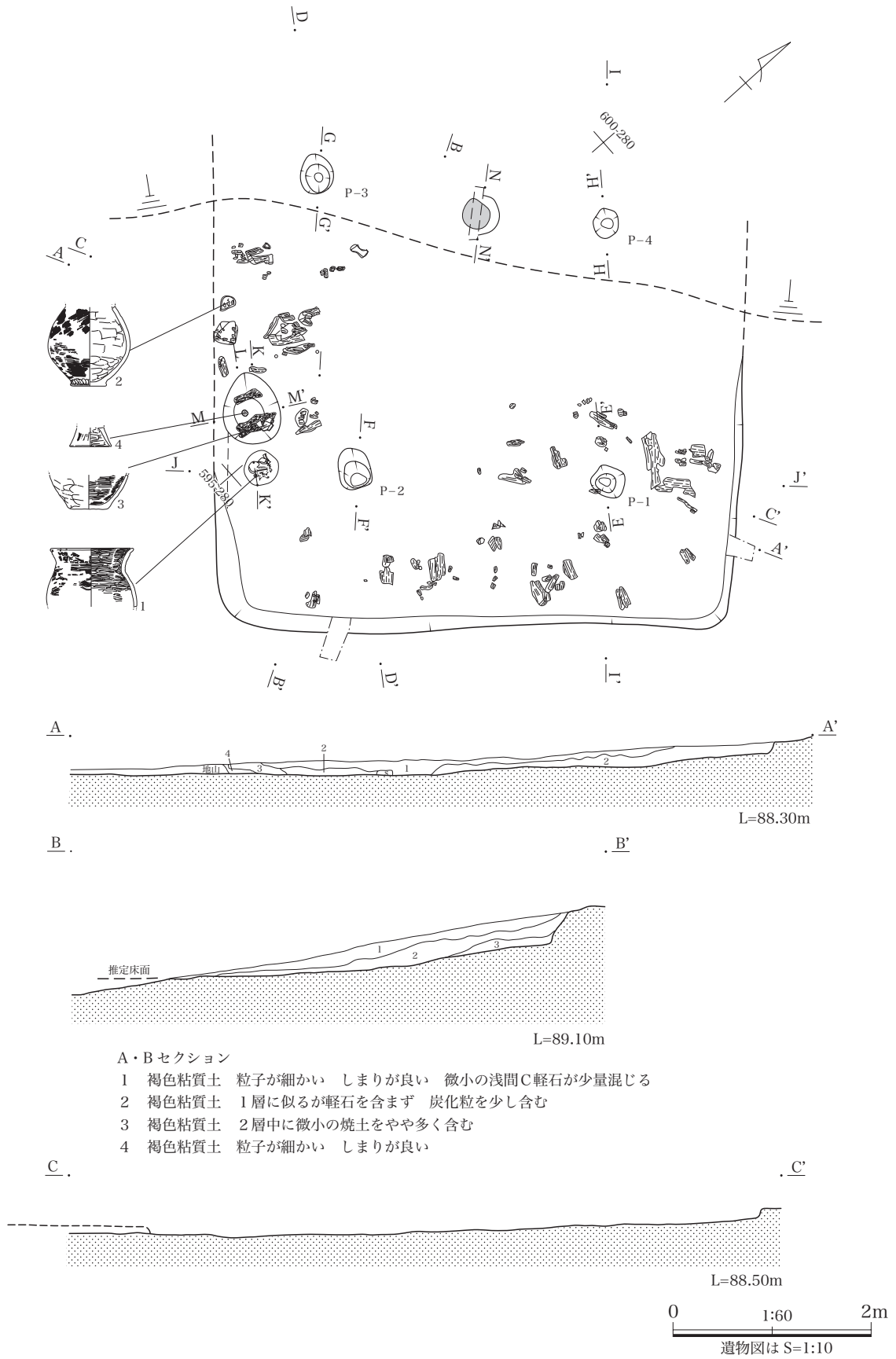
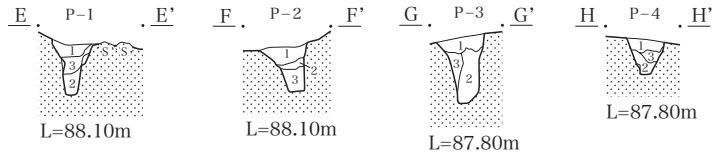
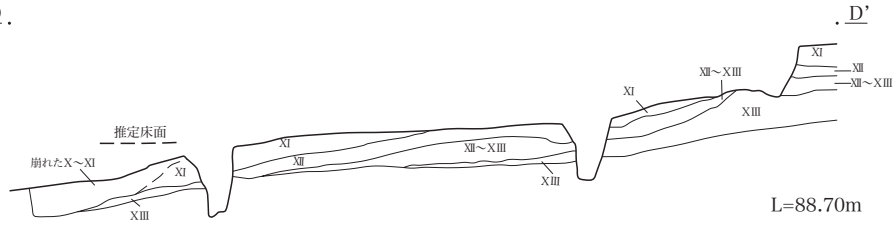


図8 3号住居 (1)

第3章 調査報告 1

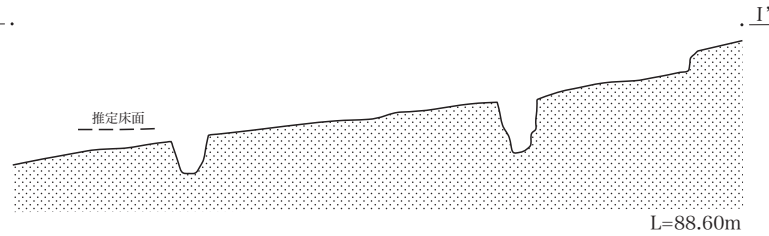
D.



E・F・G・H・セクション

- 1 黄褐色土 ソフトロームが主体 カーボンを含む しまりが弱い
- 2 暗褐色土 ソフトロームを含む チャート礫をわずかに含む しまりが弱い
- 3 褐色土 黒色土粒を含む しまり有り

I.



J.

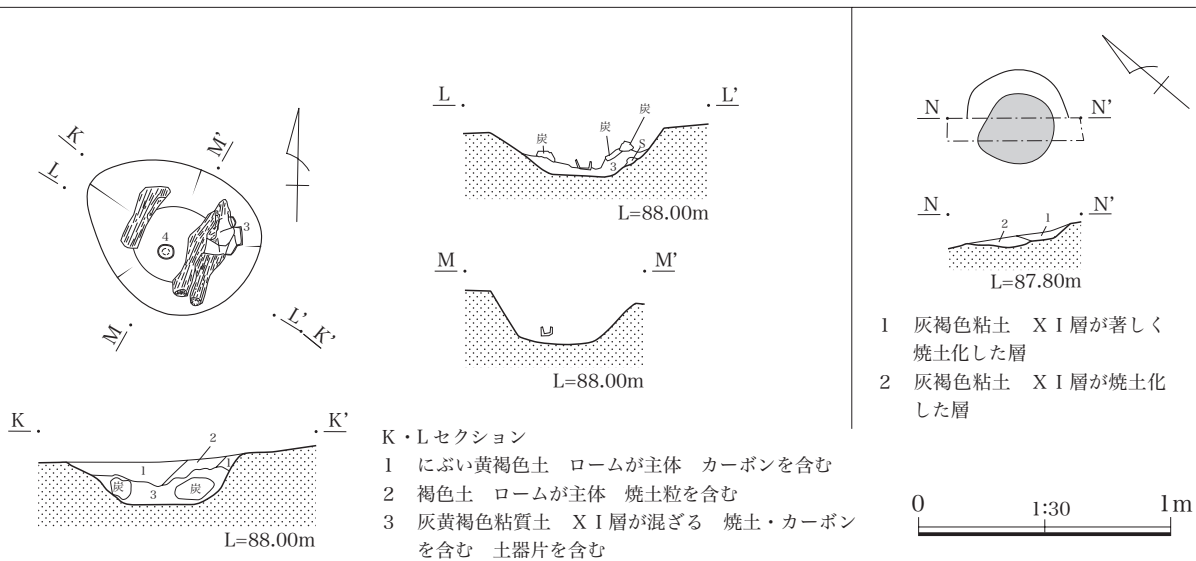
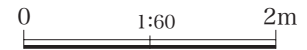
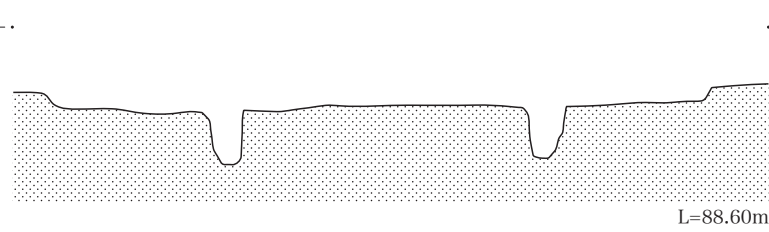


図9 3号住居 (2)

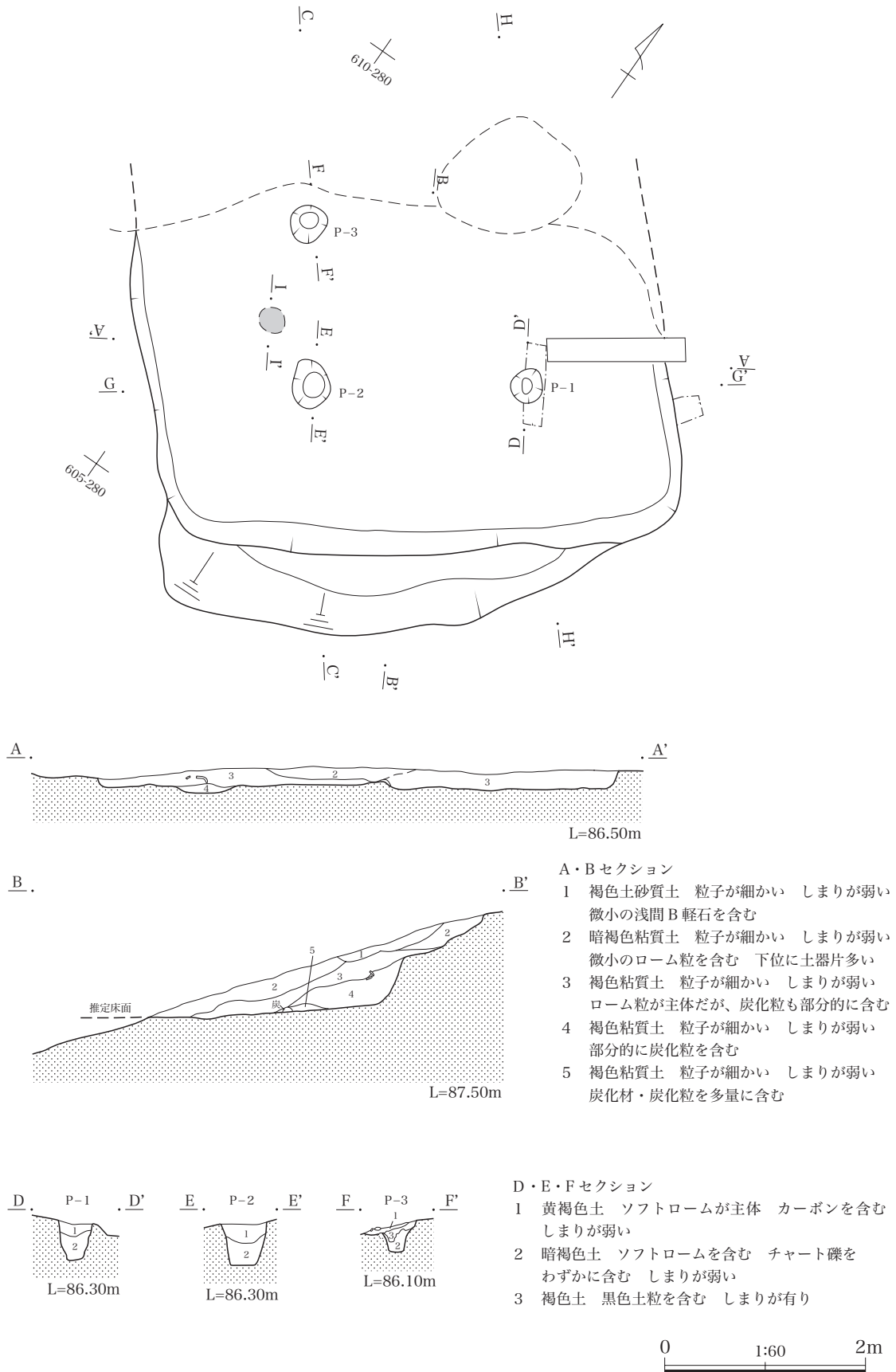


図10 4号住居(1)

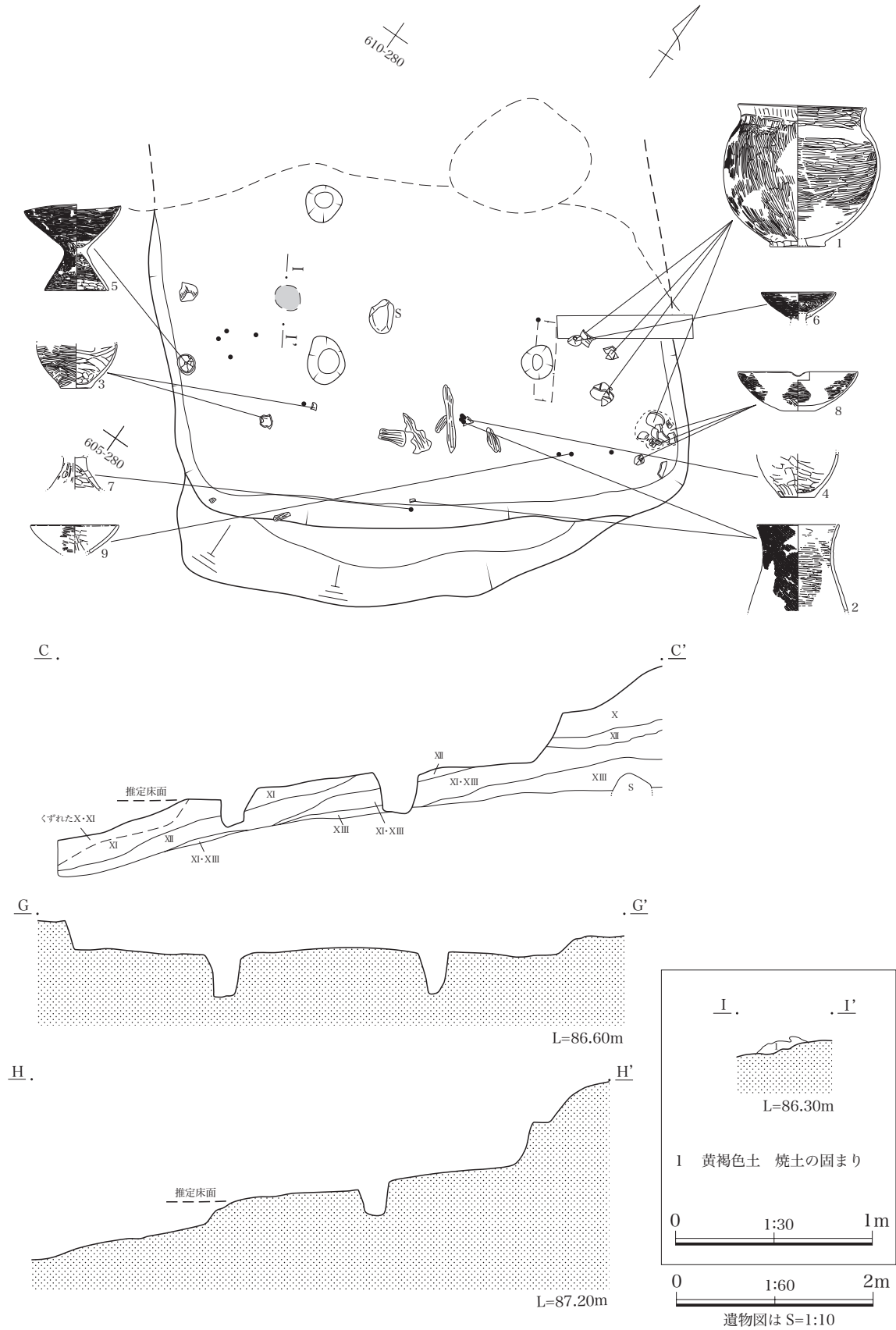
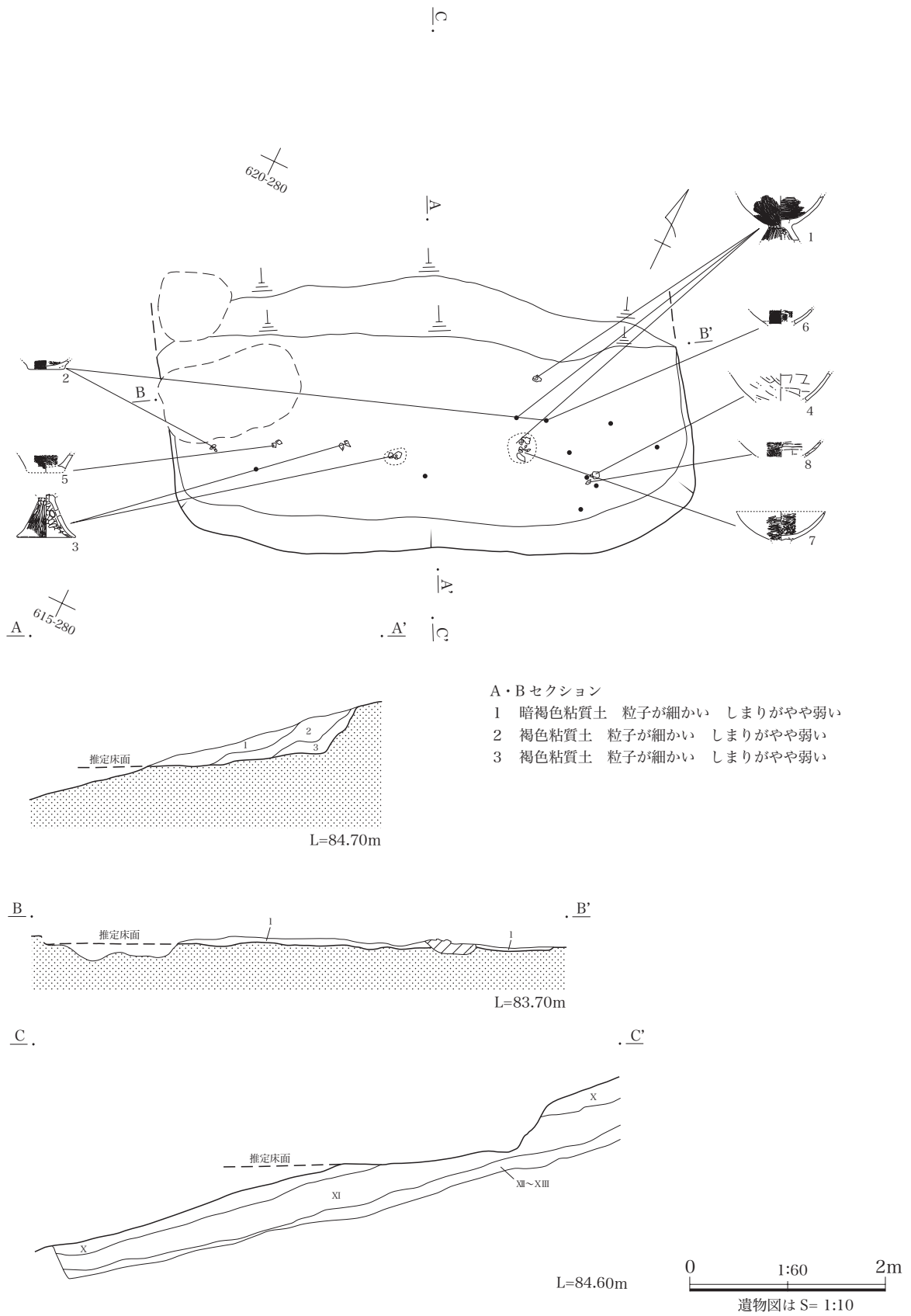


図11 4号住居(2)



12 図 5号住居

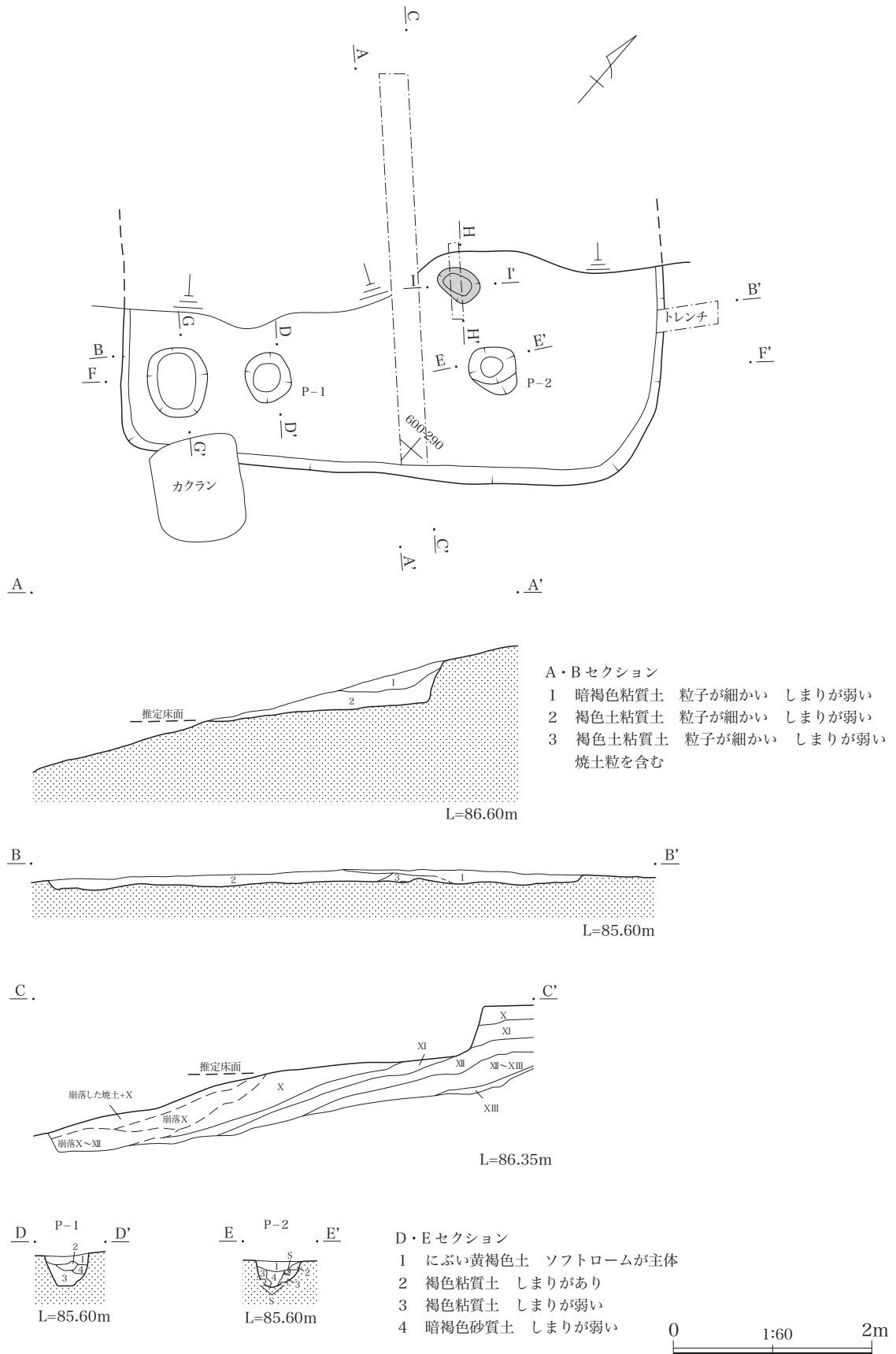


図13 6号住居(1)

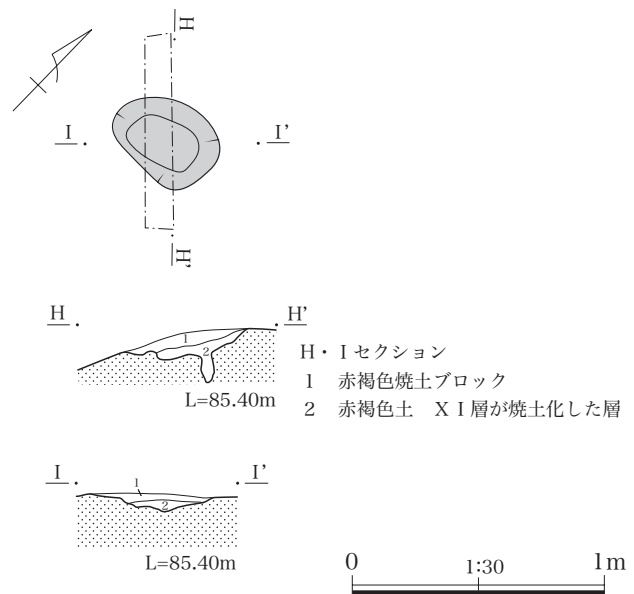
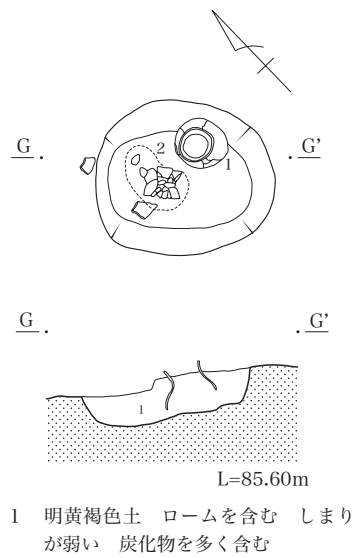
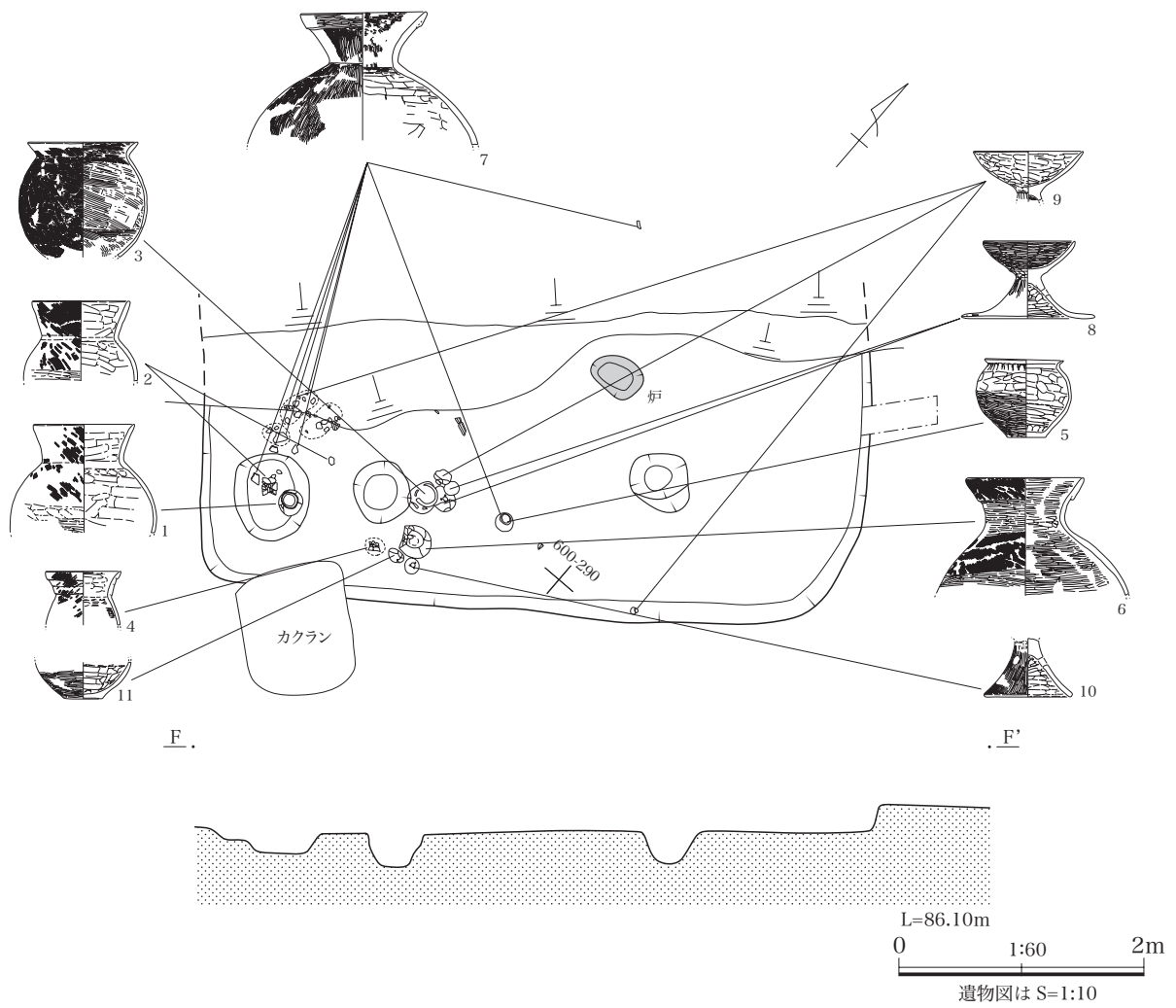


図 14 6号住居 (2)

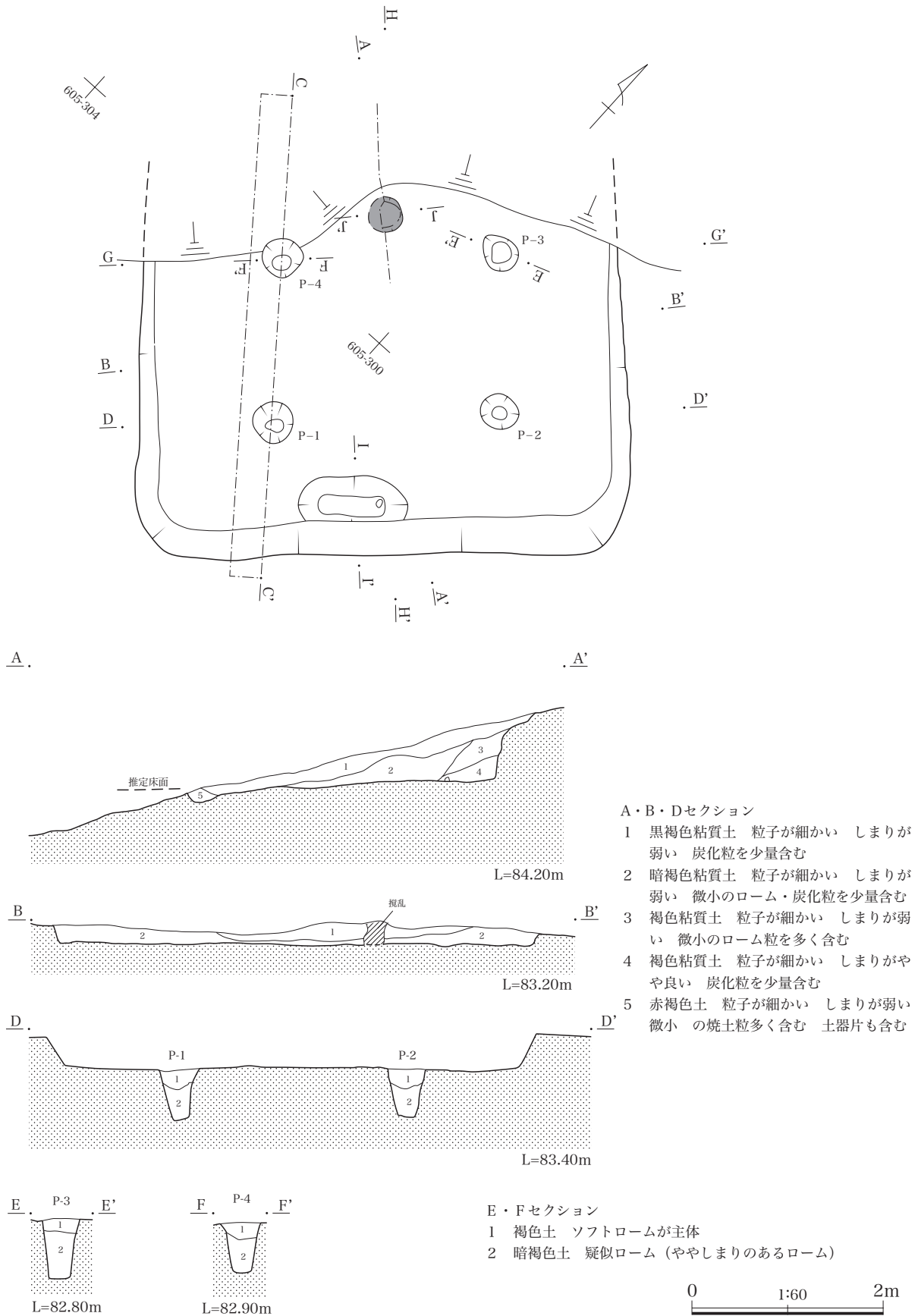
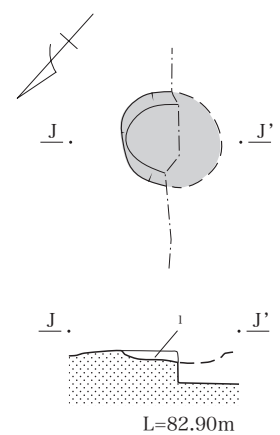
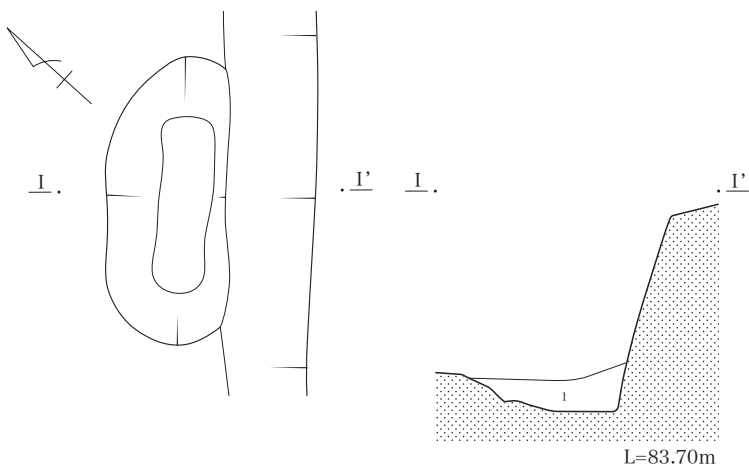
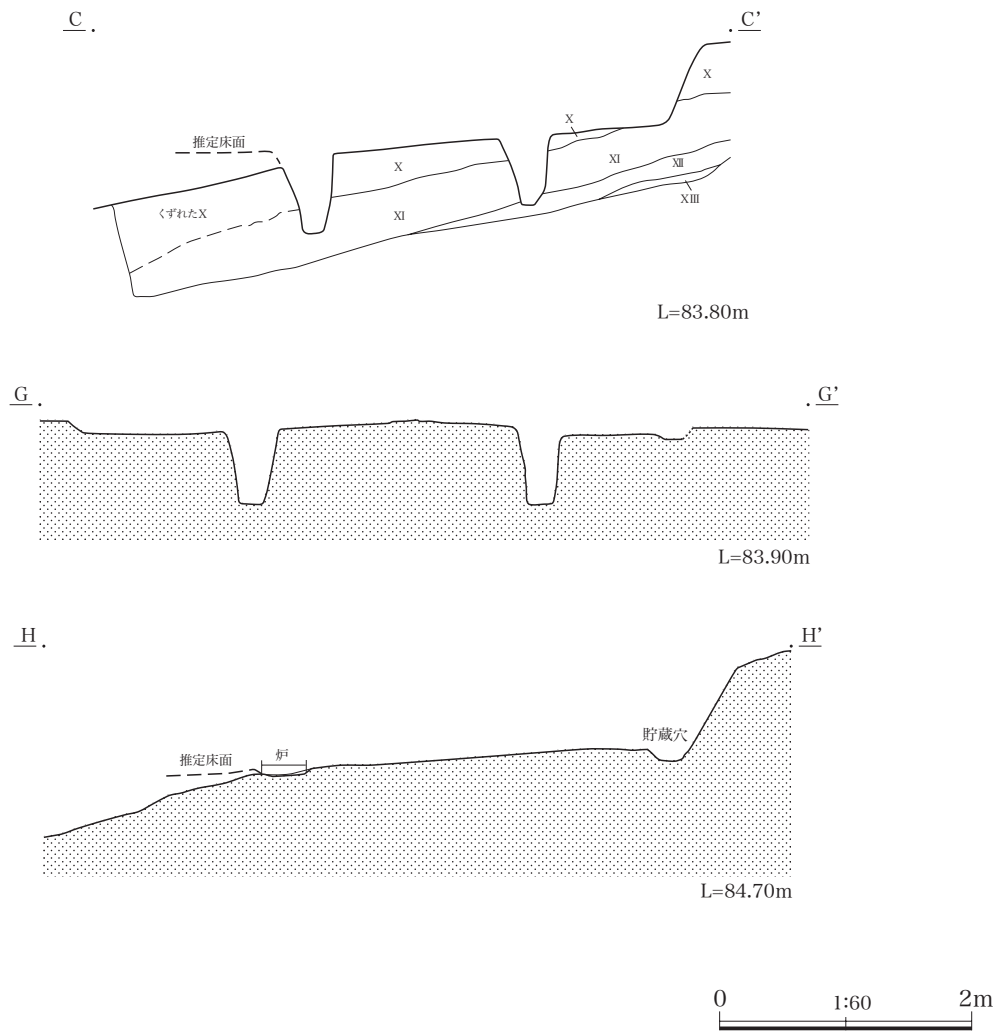


図15 7号住居(1)

2 各竪穴住居について



1 暗褐色粘質土 粒子が細かい 炭化粒・凝灰岩粒を含む

1 赤褐色土 硬くしまっている

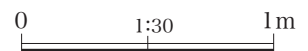


図16 7号住居(2)

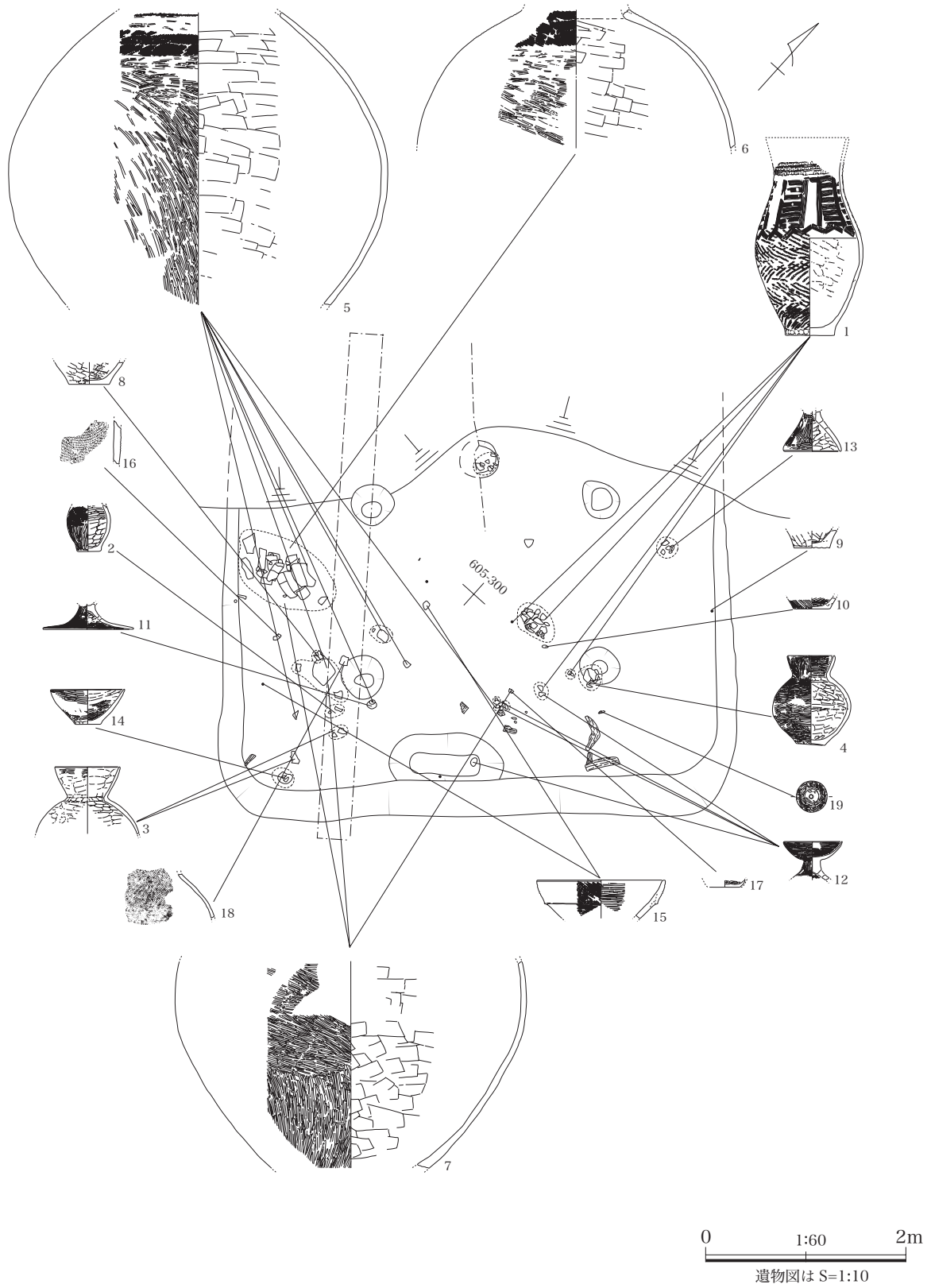


図17 7号住居(3)

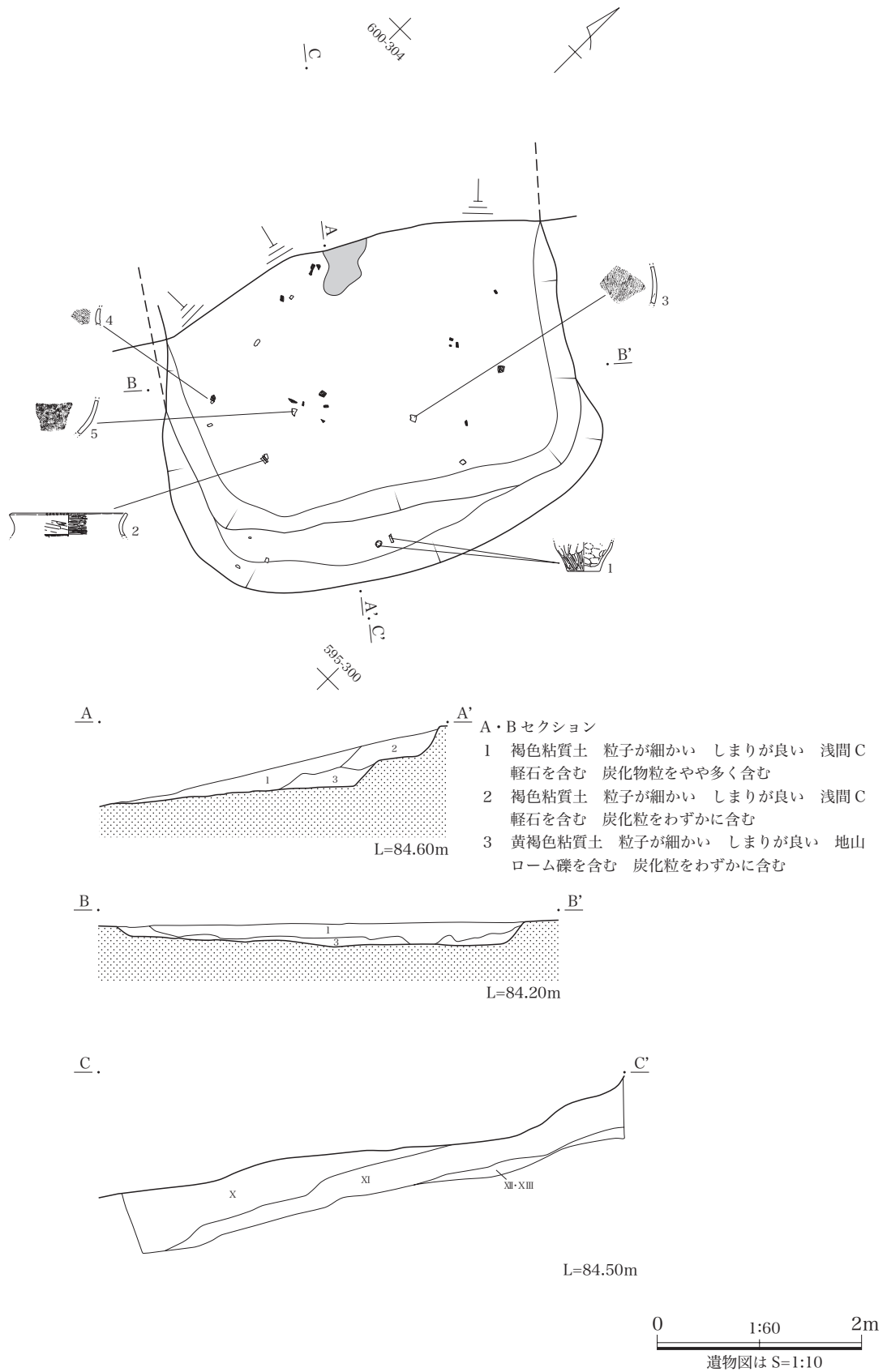


図 18 8号住居

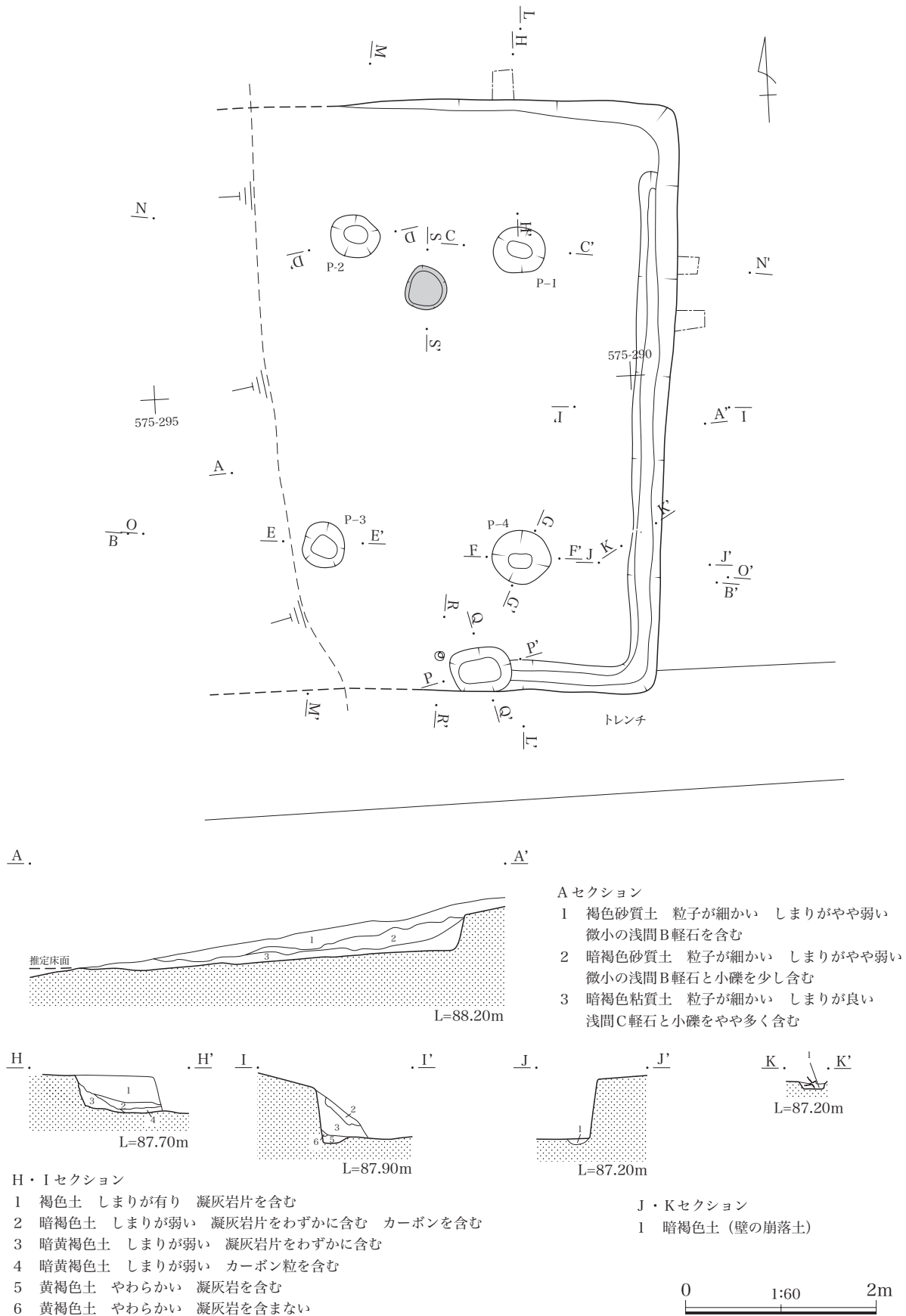
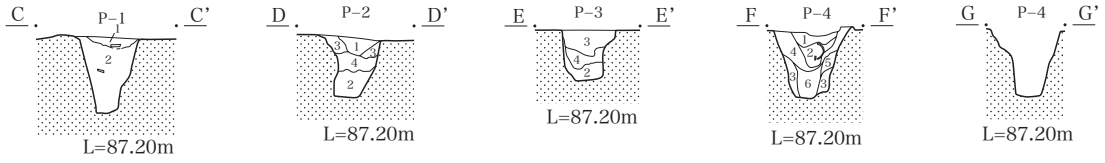


図 19 9号住居 (1)



C・D・E・Fセクション

- 1 暗褐色土 浅間C軽石を含む しまりが有り
- 2 黒褐色土 砂質(浅間C軽石?) 粒子が細かいやわらかい
- 3 暗褐色土 しまりが有り 溶結凝灰岩を含む
- 4 褐色土 しまりが有り 砂を含む
- 5 明黄褐色土 溶結凝灰岩が主体 黒色土も混ざる
- 6 黄褐色土 しまりが弱い XI層と溶結凝灰岩を含む

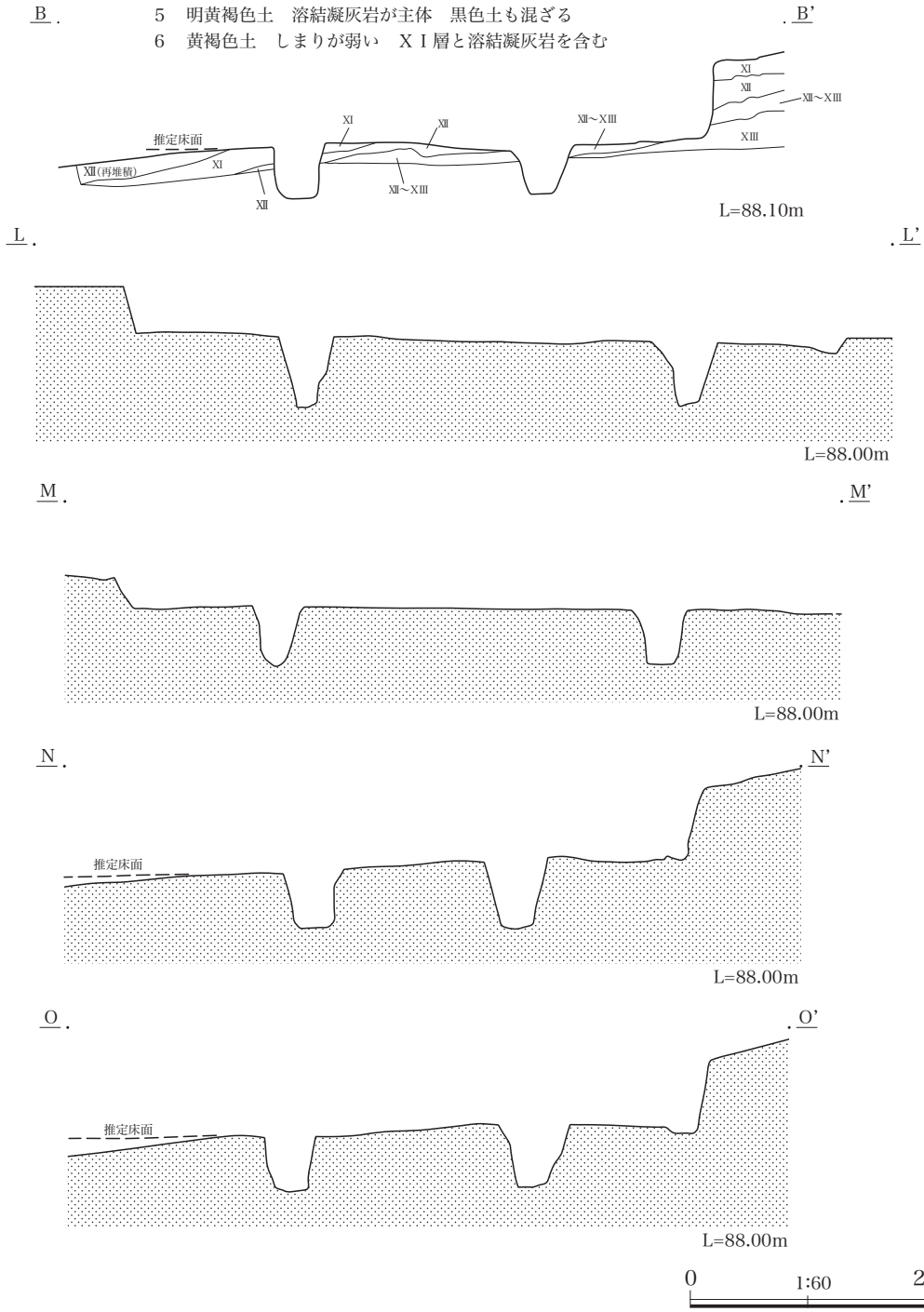
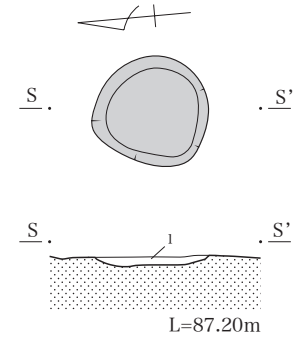
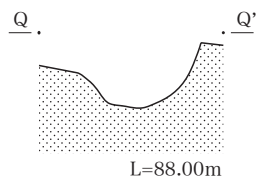
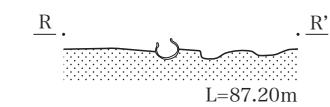
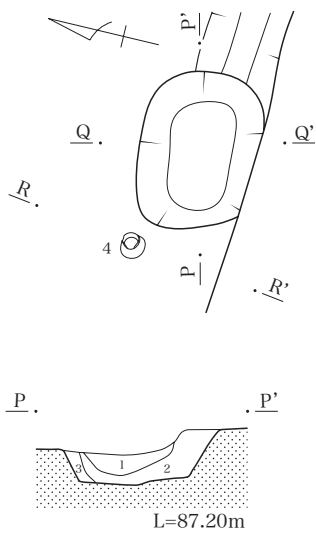
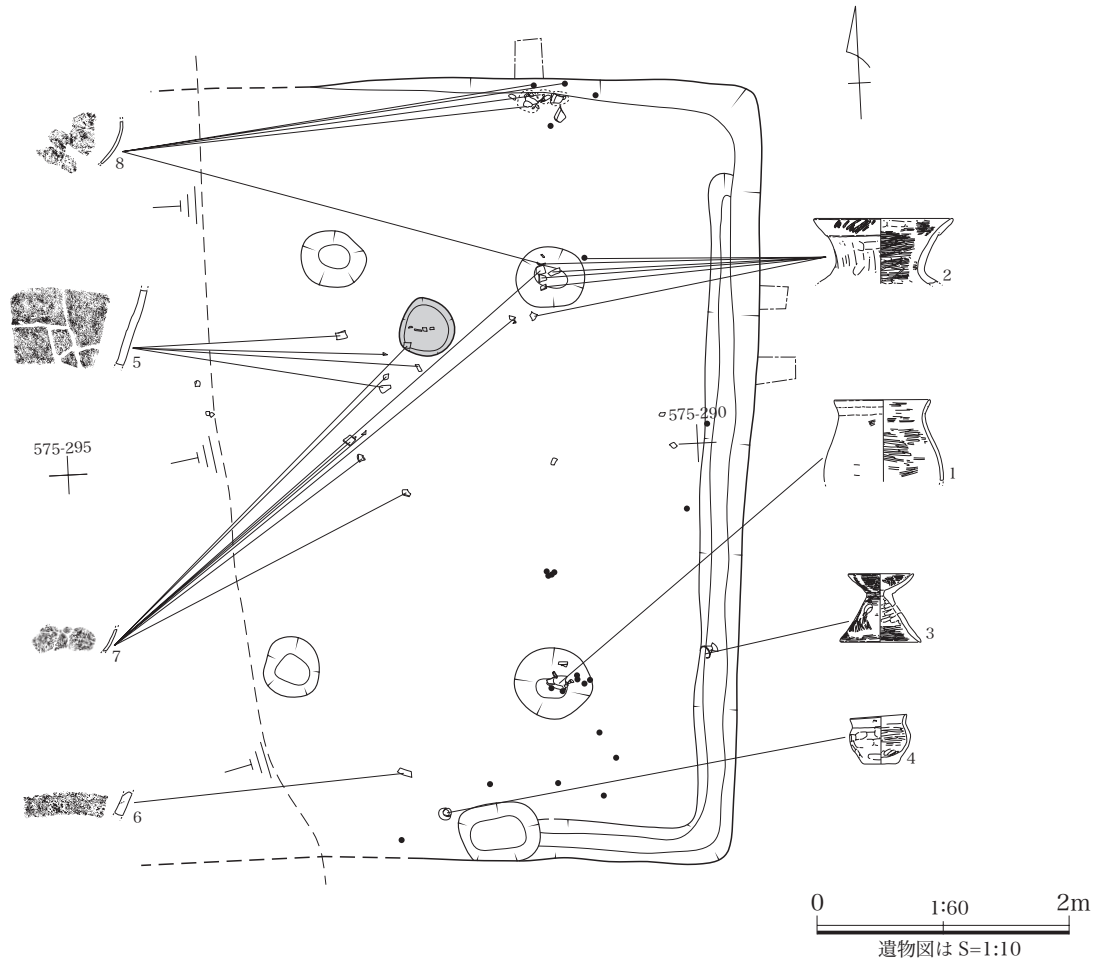


図20 9号住居(2)



1 暗褐色土 焼土粒を含む
(但し、焼土化は弱い)

- 1 暗褐色土 X I層が主体 しまりが弱い
溶結凝灰岩片を含む
- 2 黒褐色土 黒色土が主体 しまりが弱い
溶結凝灰岩片を含む
- 3 凝灰岩の崩落層 (地山の崩れ)



図21 9号住居(3)

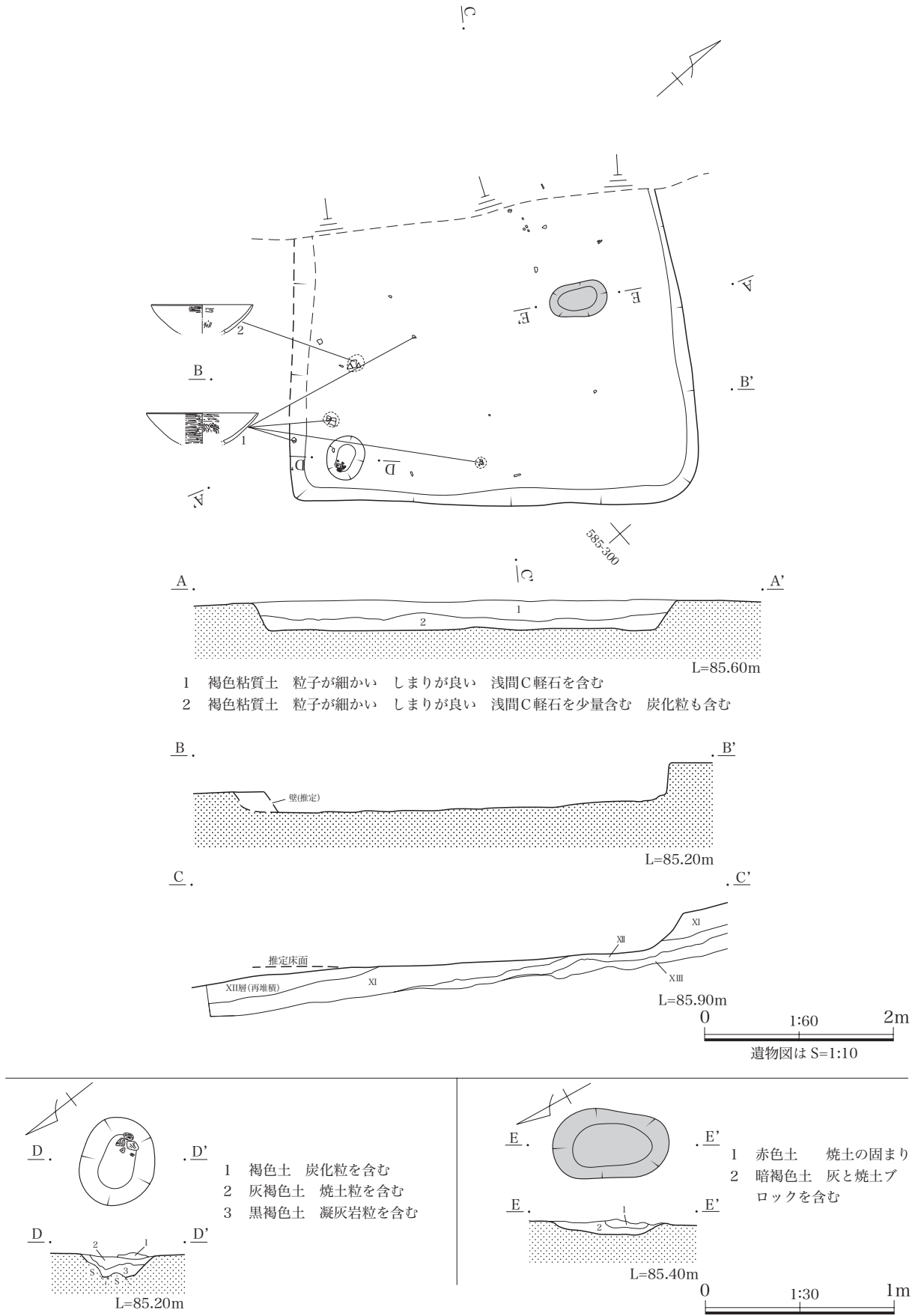


図 22 10号住居

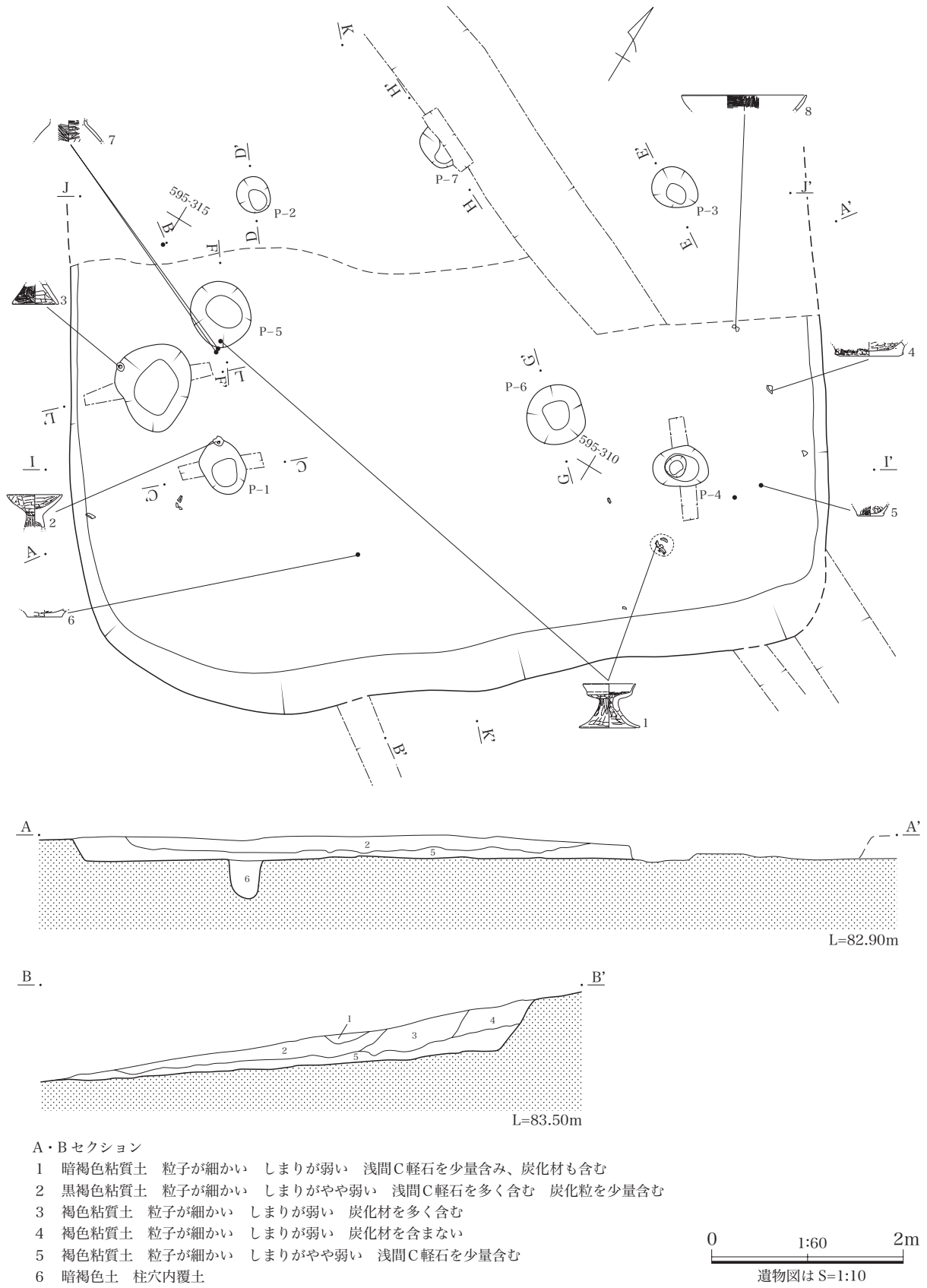
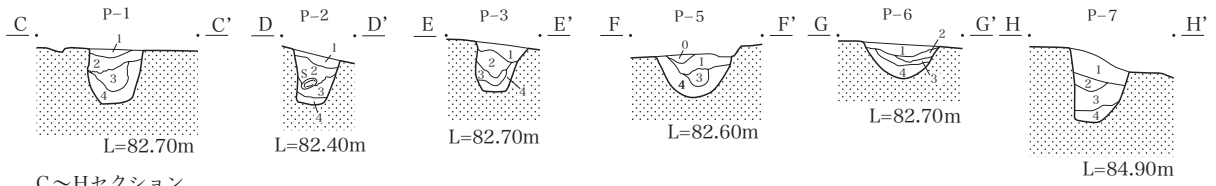


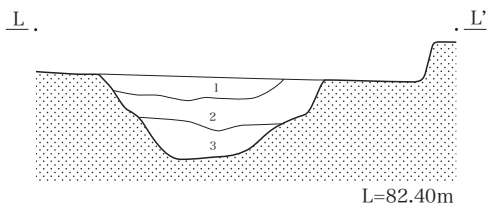
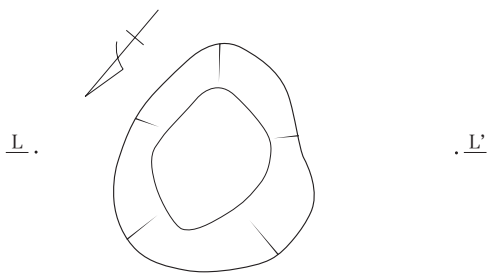
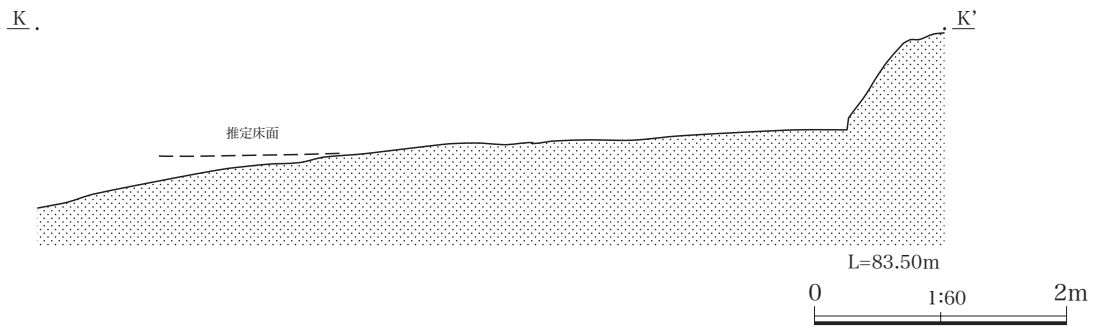
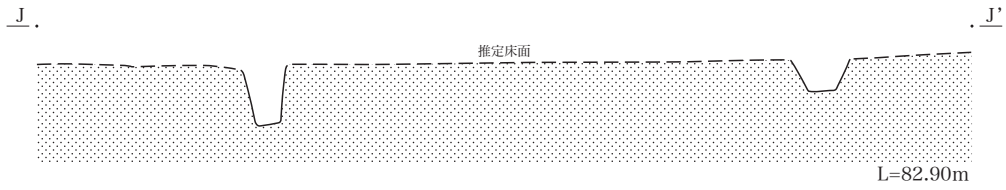
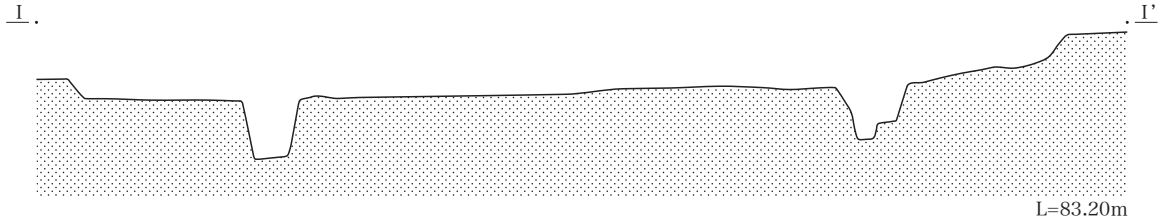
図23 11号住居(1)

2 各竪穴住居について



C~Hセクション

- 0 暗褐色土 粘性あり しまりあり パミス含む
- 1 灰褐色土 砂質しまり弱い ソフトローム主体
- 2 黄褐色土 砂質しまりあり ソフトローム主体
- 3 暗褐色土 粘質あり ソフトローム含む
- 4 灰褐色土 粘質あり ソフトロームを多く含む



- 1 灰褐色砂質土 しまり弱い ソフトローム主体
- 2 黄褐色砂質土 しまりあり ソフトローム主体
- 3 灰褐色粘質土 ソフトロームを多く含むXI層を含む

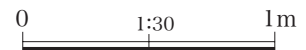
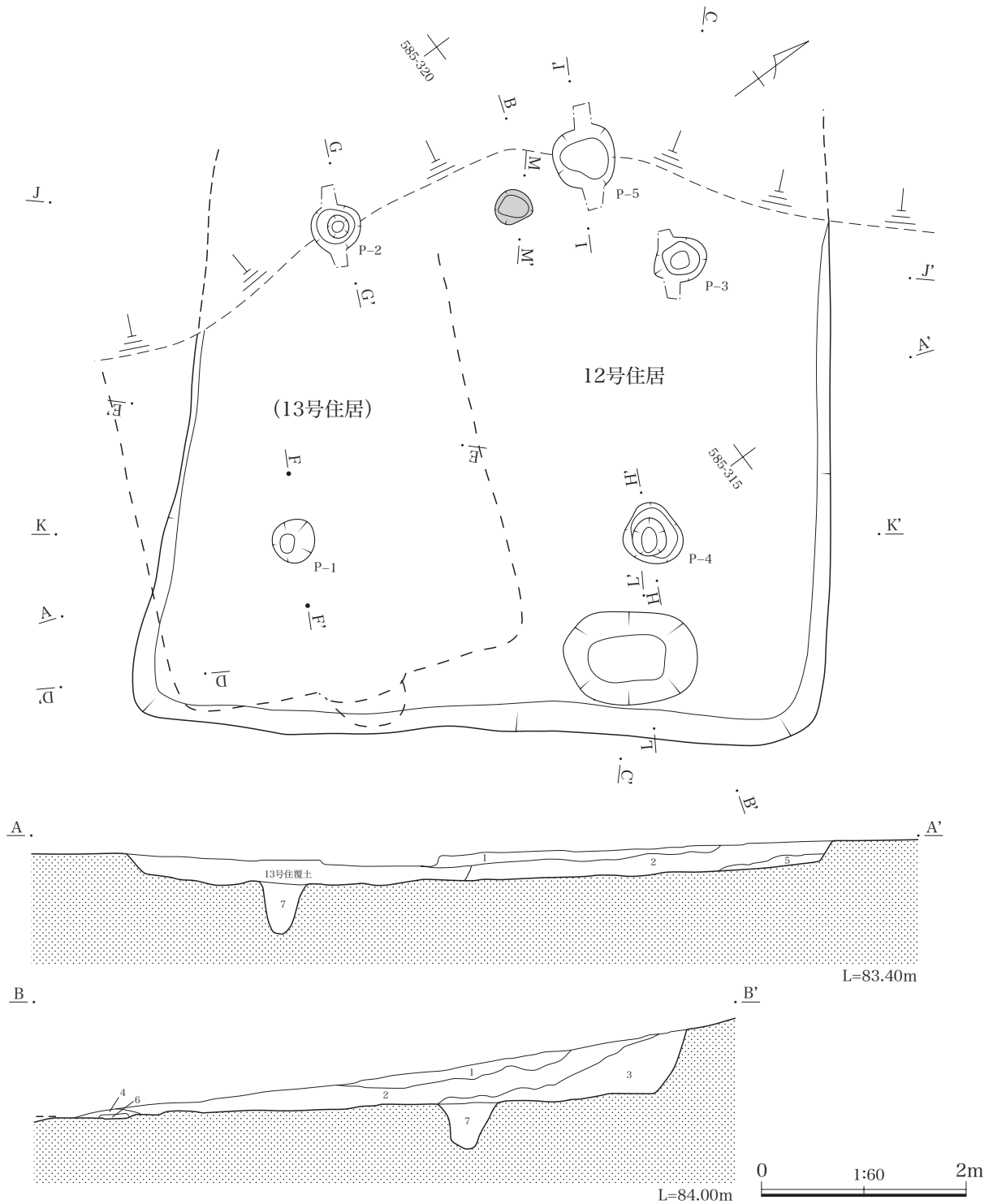


図 24 11号住居(2)



A・Bセクション

- 1 褐色砂質土 粒子がやや粗い しまりがやや弱い 浅間B軽石を含む
- 2 黒褐色粘質土 粒子が細かい しまりが良い 浅間C軽石を含む 礫も少量含む
- 3 黒褐色粘質土 粒子が細かい しまりが良い 浅間C軽石を含む 礫も多量に含む
- 4 暗褐色粘質土 粒子が細かい しまりが良い 浅間C軽石を含む 焼土粒を多く含む
- 5 褐色粘質土 粒子が細かい しまりが良い 浅間C軽石を含む ローム粒多量に含む
- 6 赤褐色土 炉の焼土
- 7 暗褐色土 柱穴覆土

図25 12号住居(1)

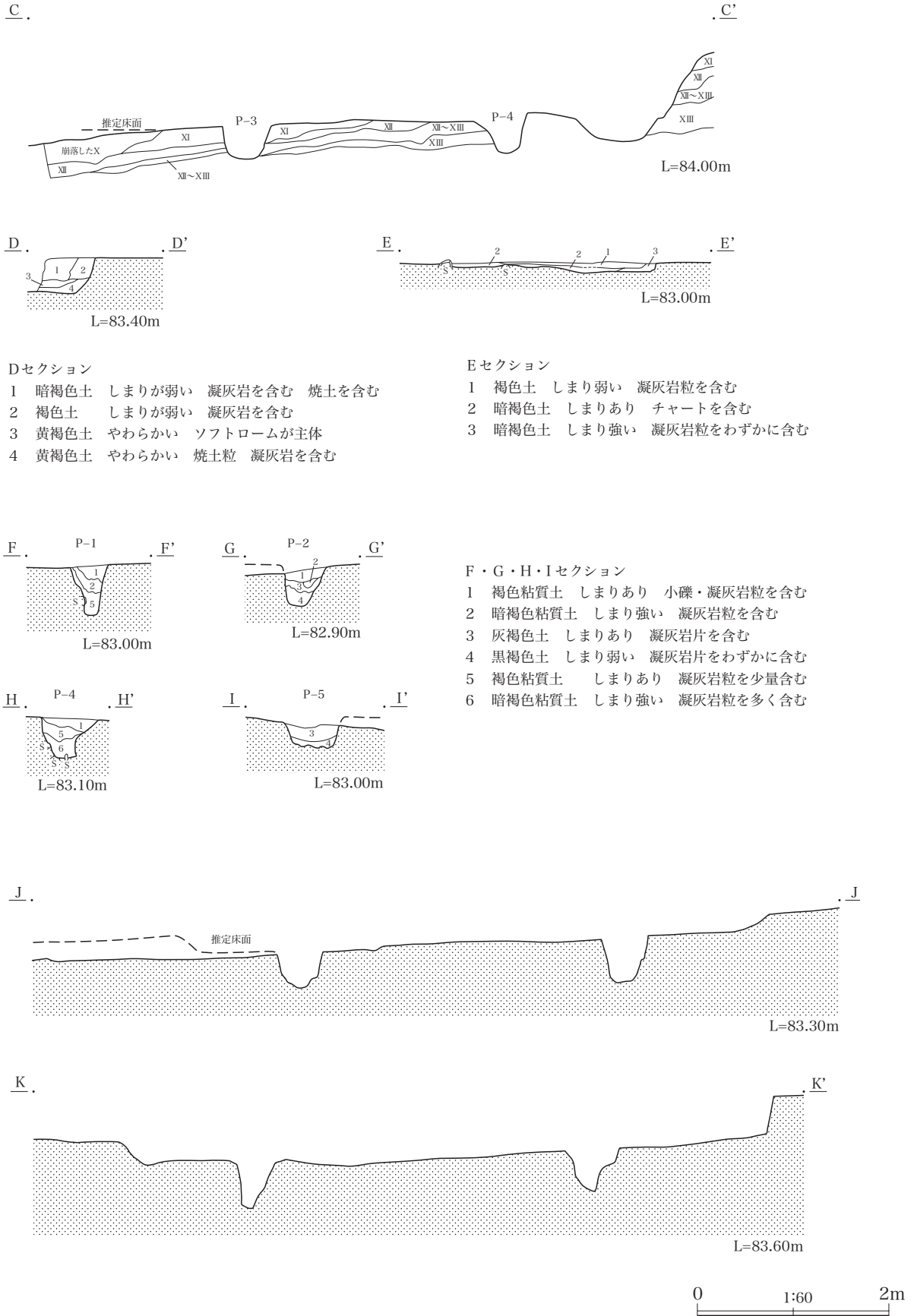


図 26 12号住居 (2)

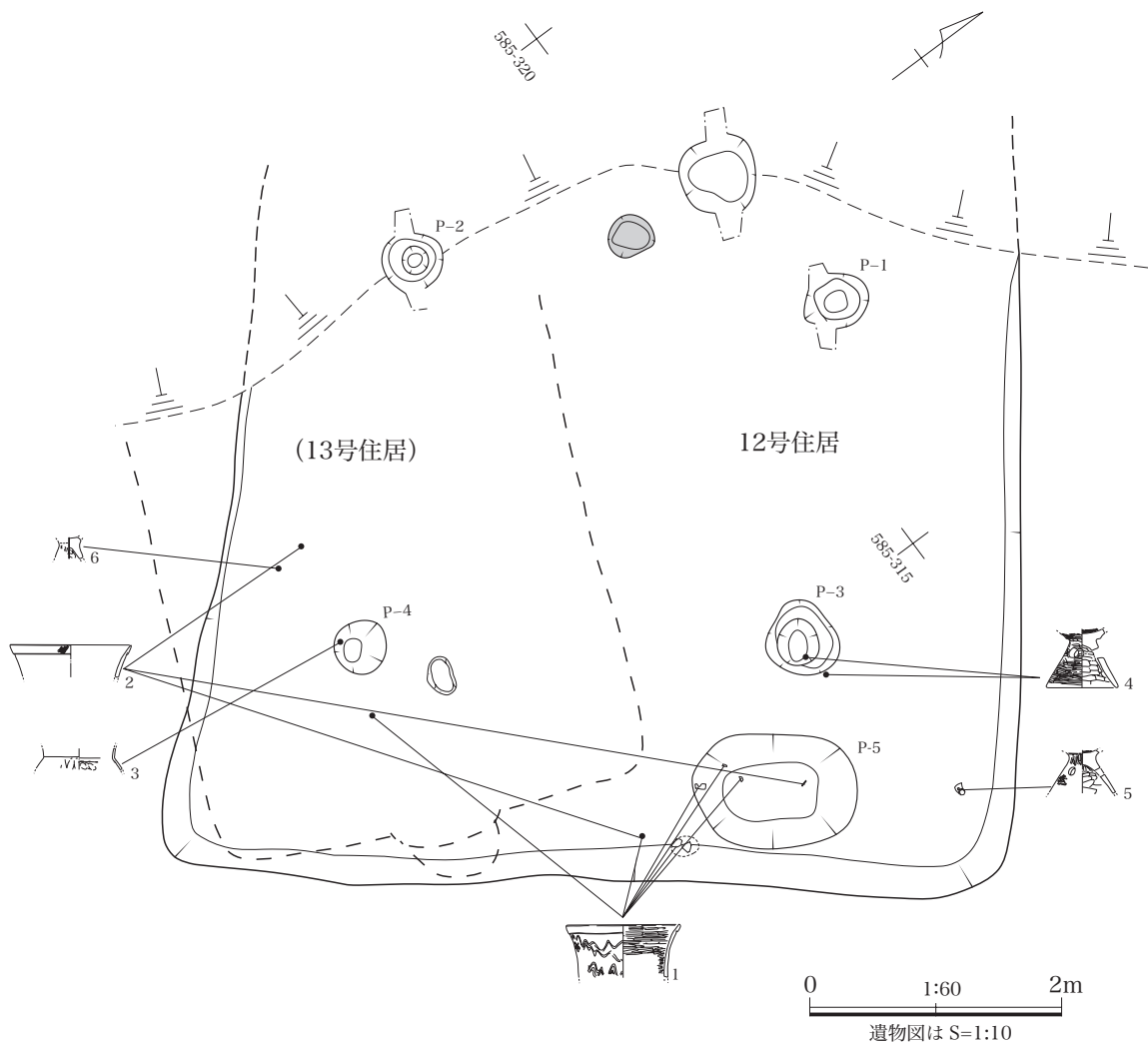
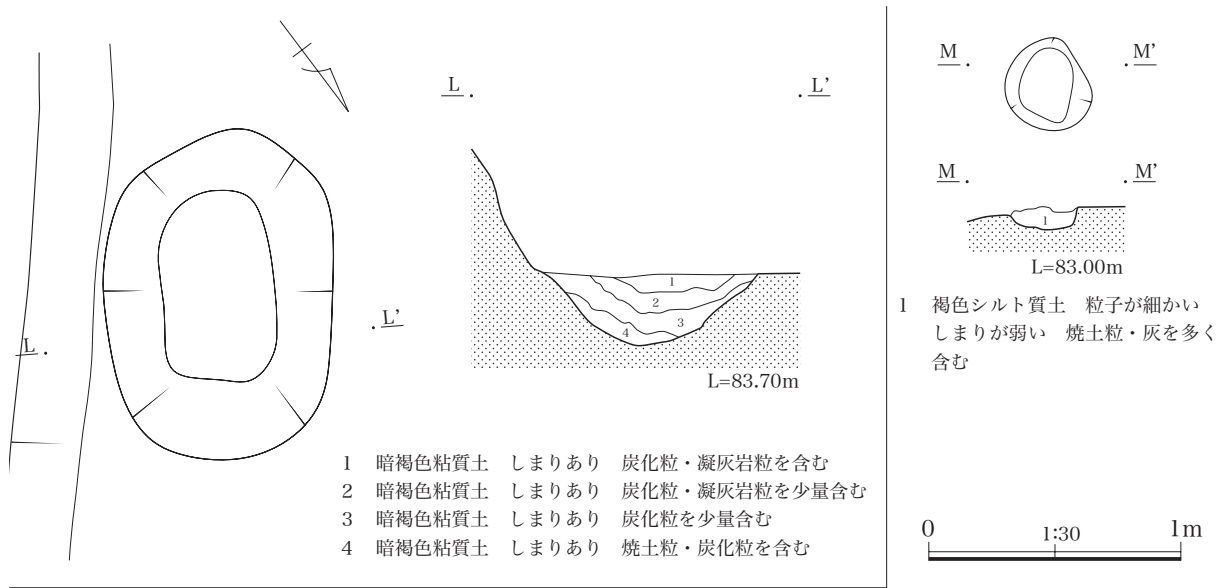


図 27 12号住居 (3)

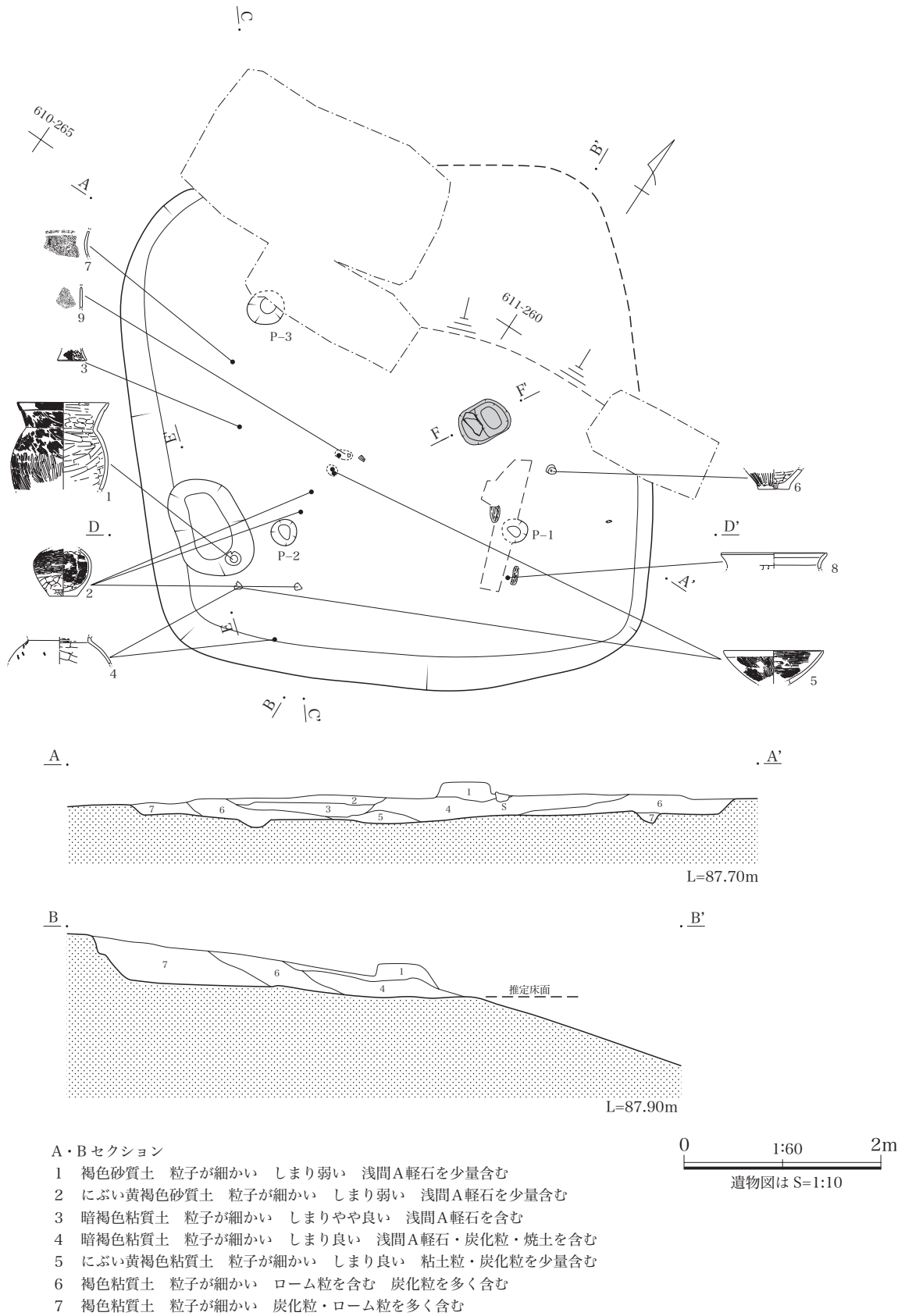
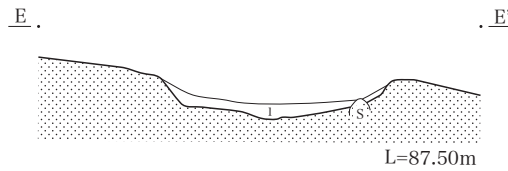
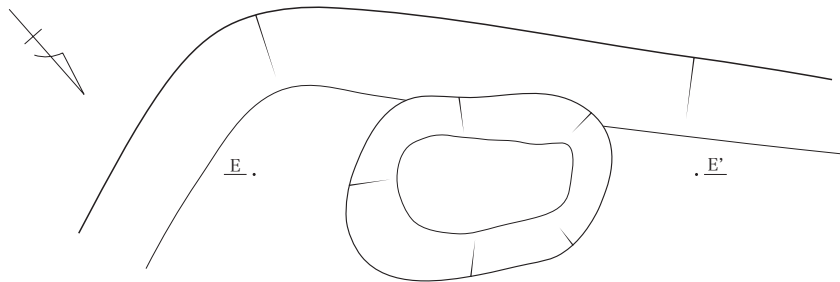
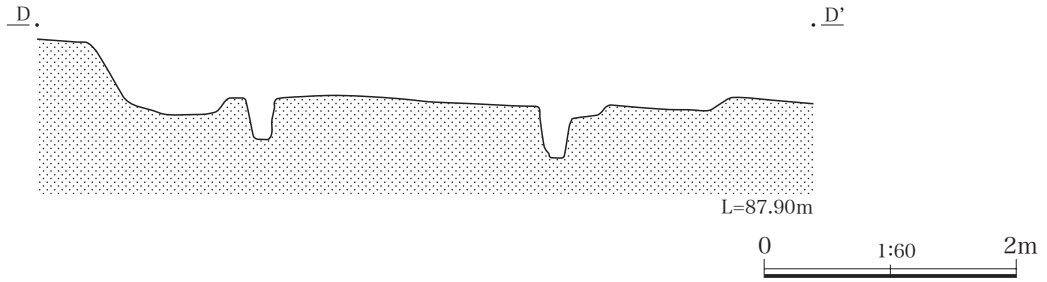
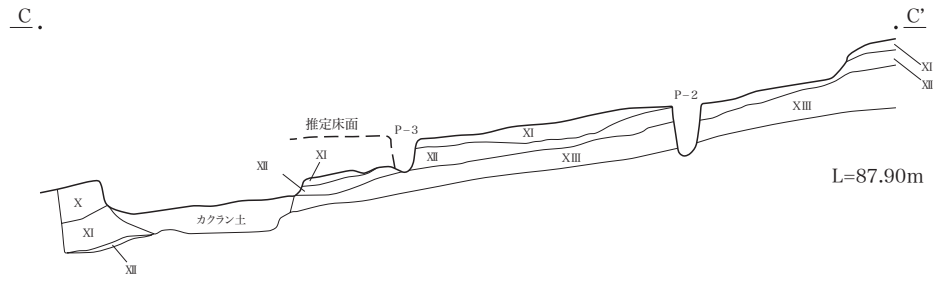
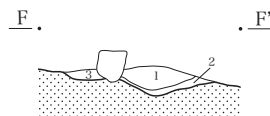
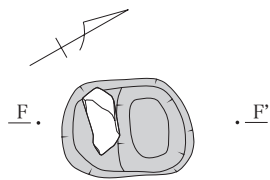
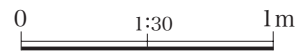


図 28 14号住居 (1)

第3章 調査報告 1



1 暗褐色粘質土 しまり弱い 溶結凝灰岩片を含む



- 1 褐色シルト質土 粒子がやや粗い しまりが弱い 微小の焼土粒を多く含む 炭化粒も少し含む
- 2 褐色粘質土 粒子が細かい しまりがやや弱い 焼土粒を含む
- 3 褐色粘質土 粒子が細かい しまりがやや弱い ローム粒を含む

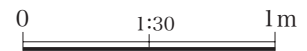
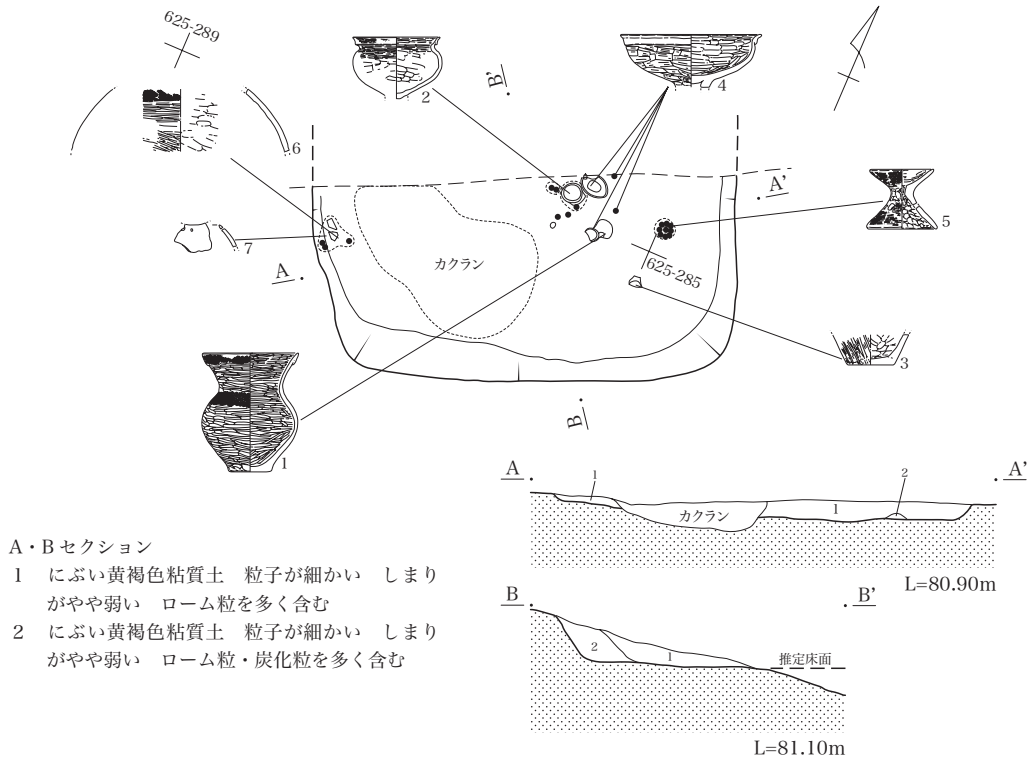
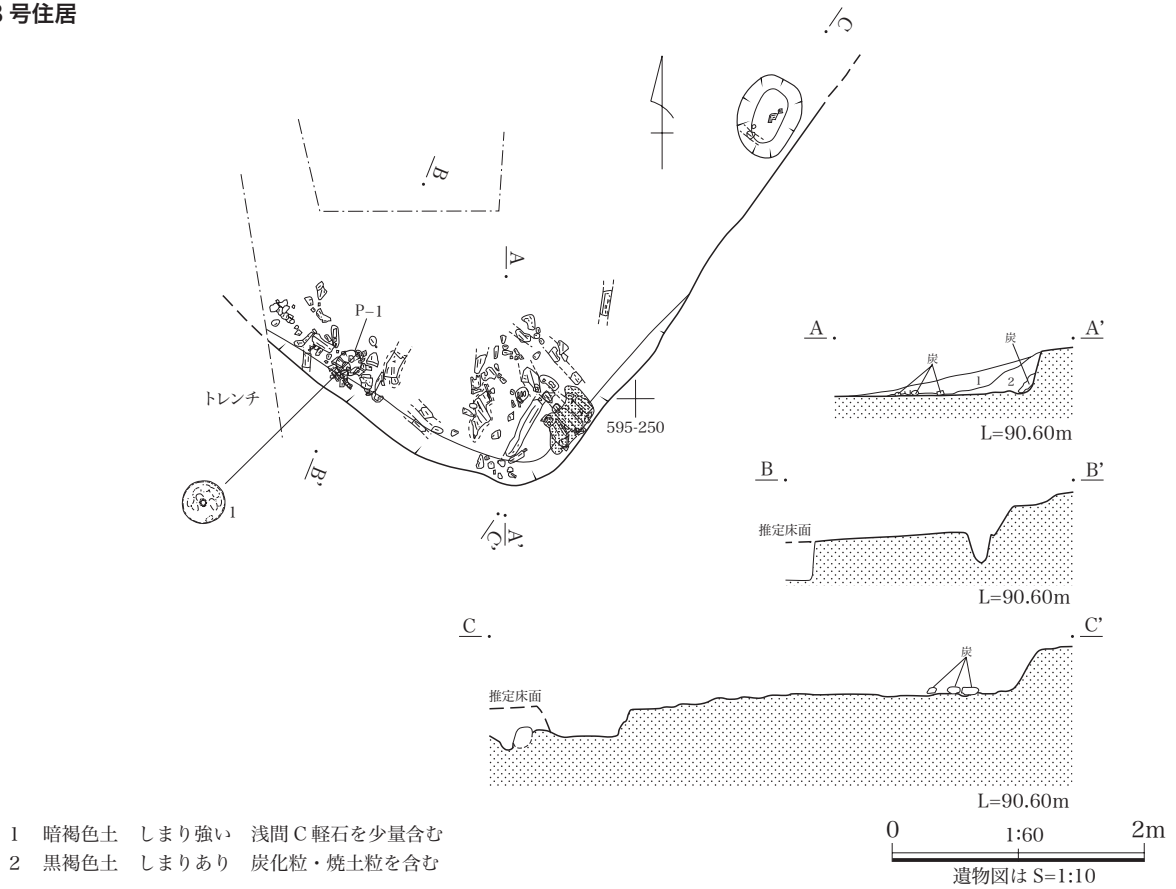


図 29 14号住居 (2)

15号住居



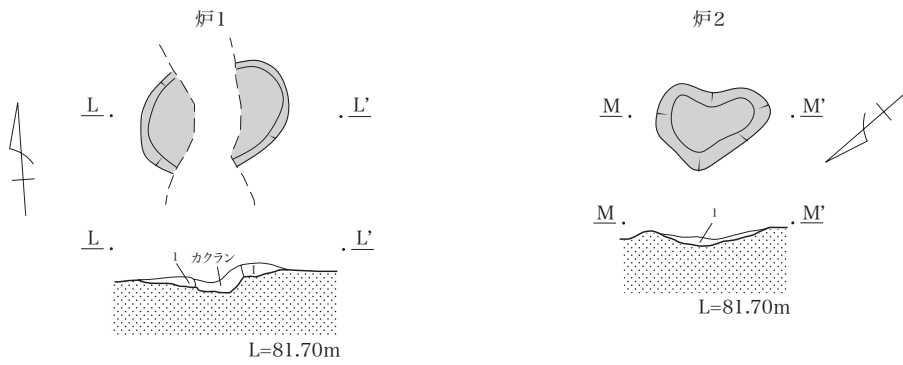
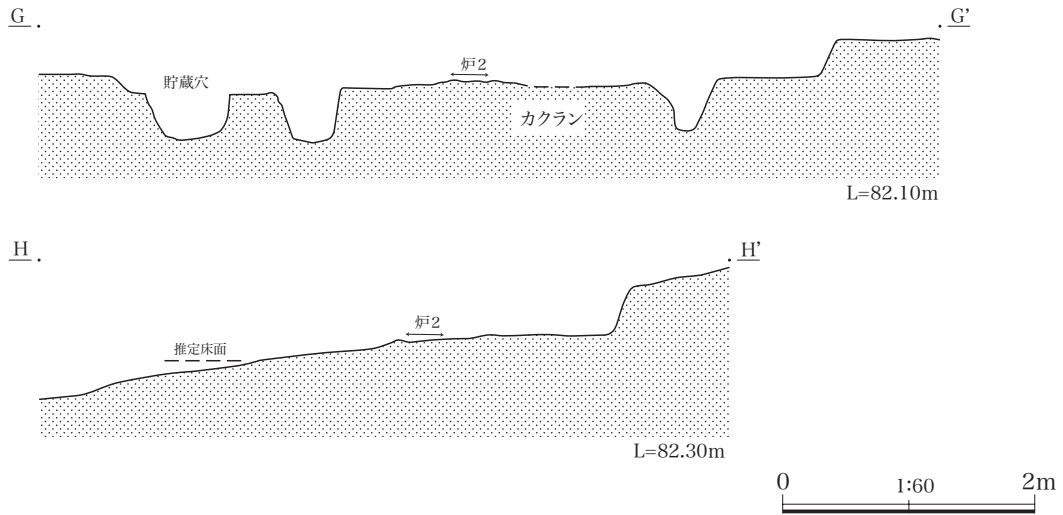
18号住居



- 1 暗褐色土 しまり強い 浅間C軽石を少量含む
- 2 黒褐色土 しまりあり 炭化粒・焼土粒を含む

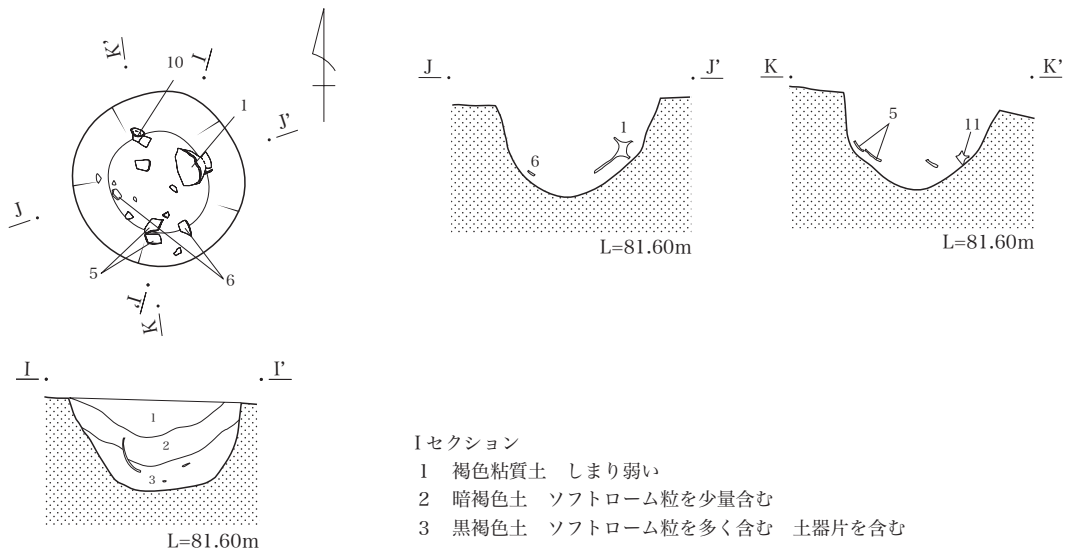
図30 15・18号住居

2 各竪穴住居について



L・Mセクション

1 にぶい赤褐色土 焼土粒を多く含む



Iセクション

1 褐色粘質土 しまり弱い
 2 暗褐色土 ソフトローム粒を少量含む
 3 黒褐色土 ソフトローム粒を多く含む 土器片を含む

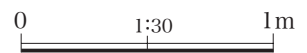
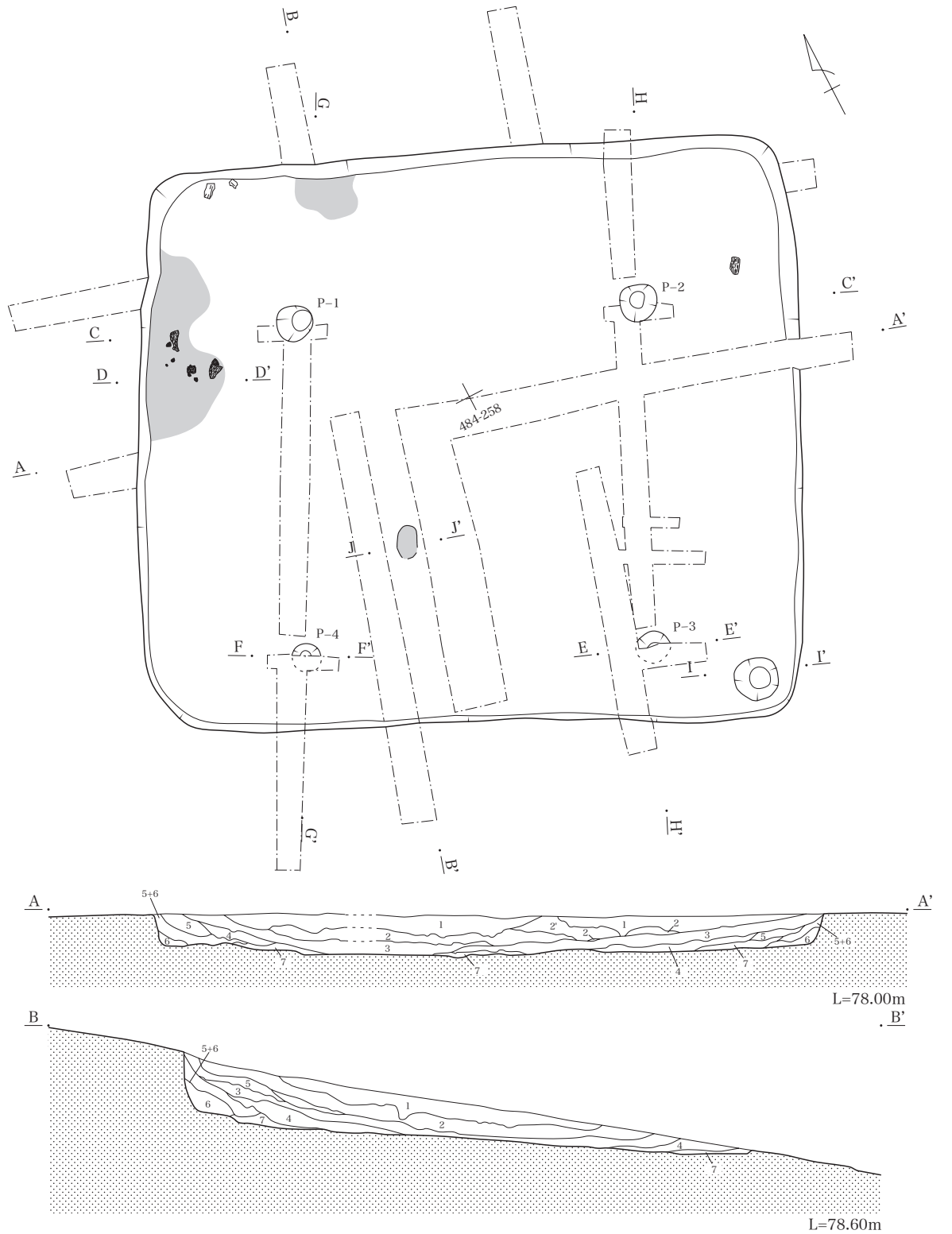


図 32 16号住居 (2)



A・Bセクション

- | | | | | | | |
|-----------|-------|-----------|-----------|-------|------------|--------|
| 1 暗褐色砂質土 | しまり弱い | パミスを含まない | 5 褐色粘質土 | しまりあり | X層が多い | 炭化粒を含む |
| 2 黒褐色粘質土 | しまりあり | パミスを含まない | 6 灰黄褐色粘質土 | X層が多い | 炭化粒・焼土粒を含む | |
| 2' 黒褐色砂質土 | しまり弱い | パミスを含まない | 7 黒褐色粘質土 | X層を含む | パミスを含む | 炭化粒を含む |
| 3 黒褐色粘質土 | しまり強い | パミスを多量に含む | | | | |
| 4 黒褐色粘質土 | しまりあり | パミスを少量含む | | | | |

0 1:60 2m

図33 19号住居(1)

2 各竪穴住居について

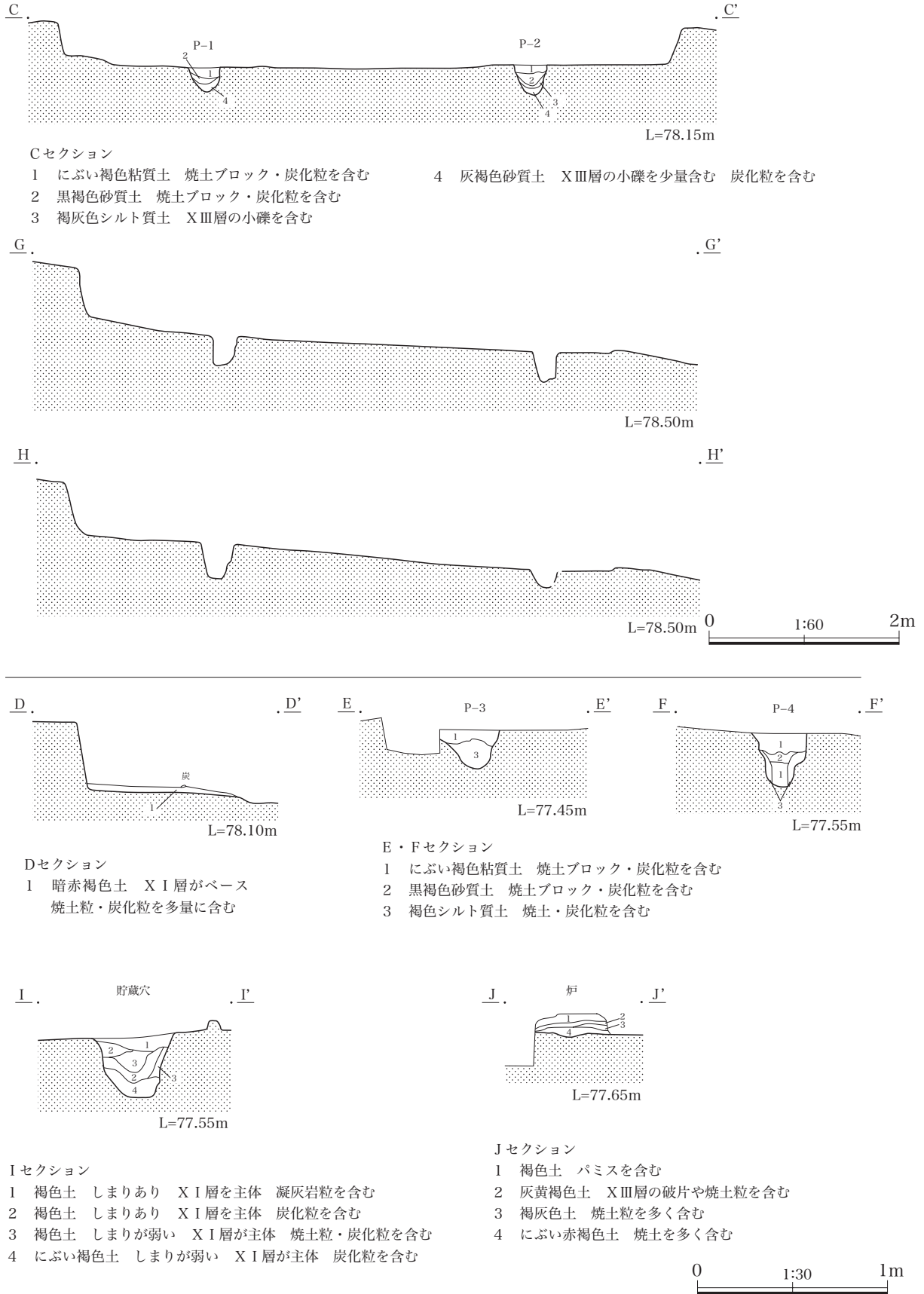


図34 19号住居(2)

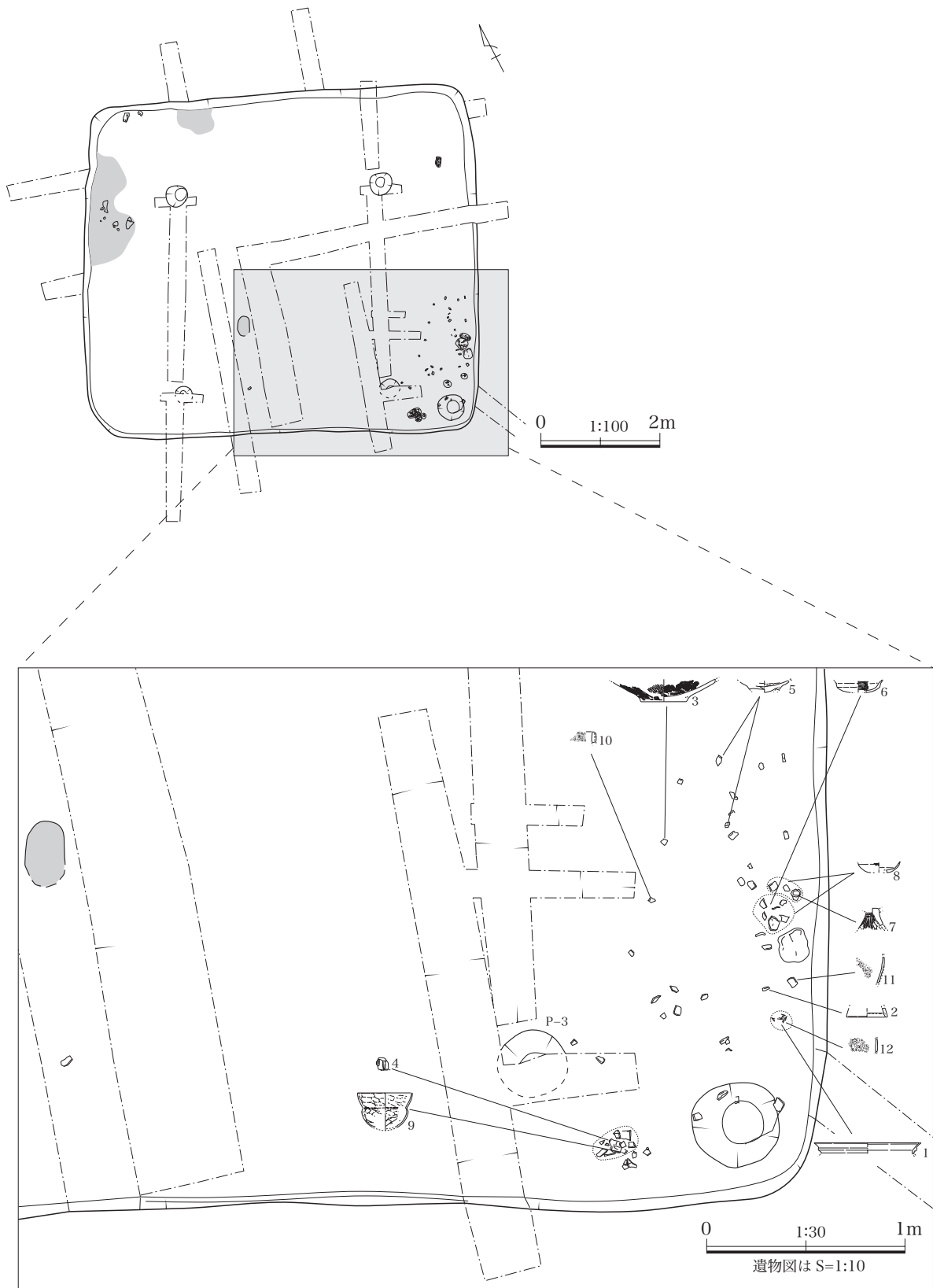


図 35 19号住居 (3)

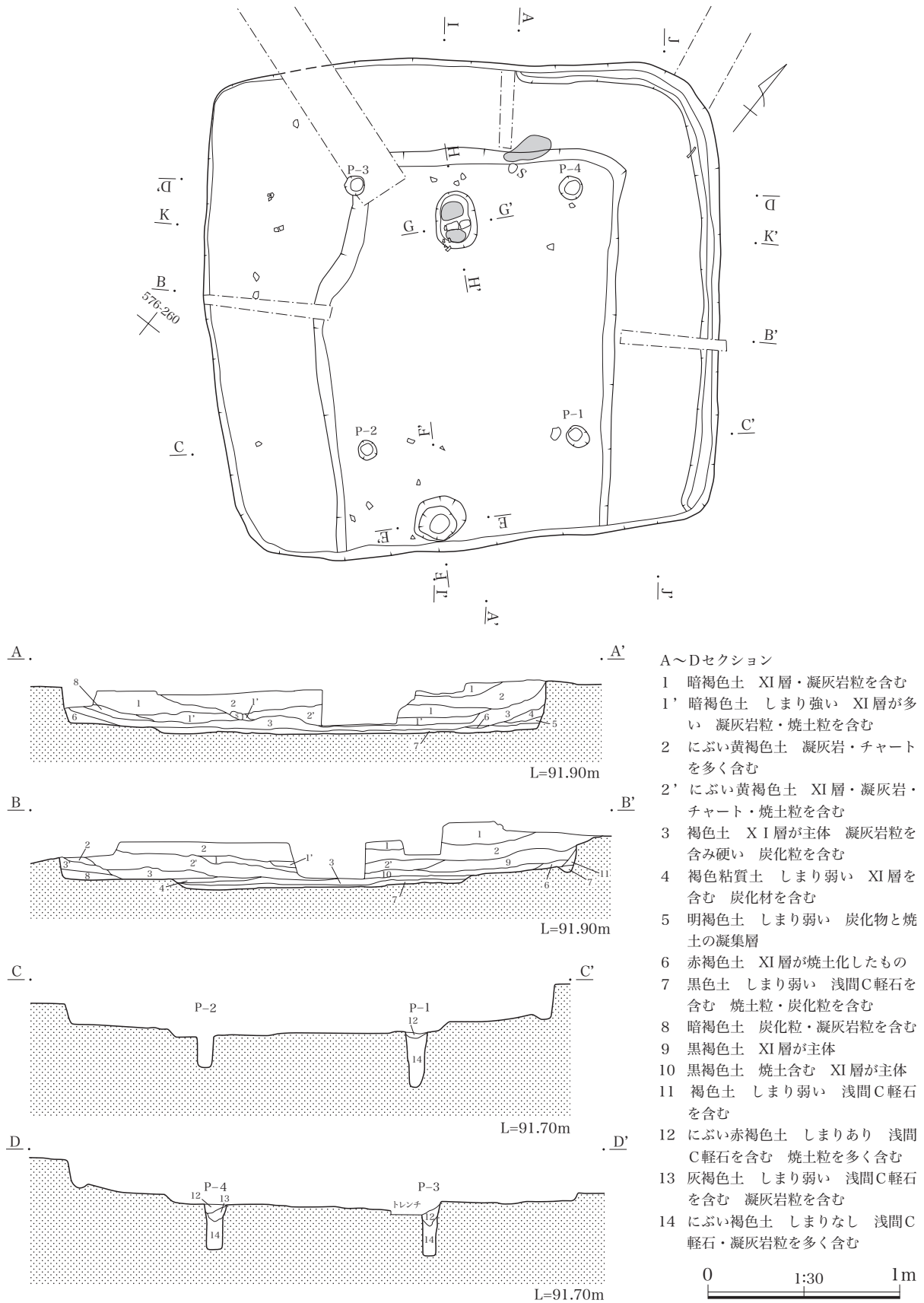


図 36 20号住居 (1)

床面遺物出土状況

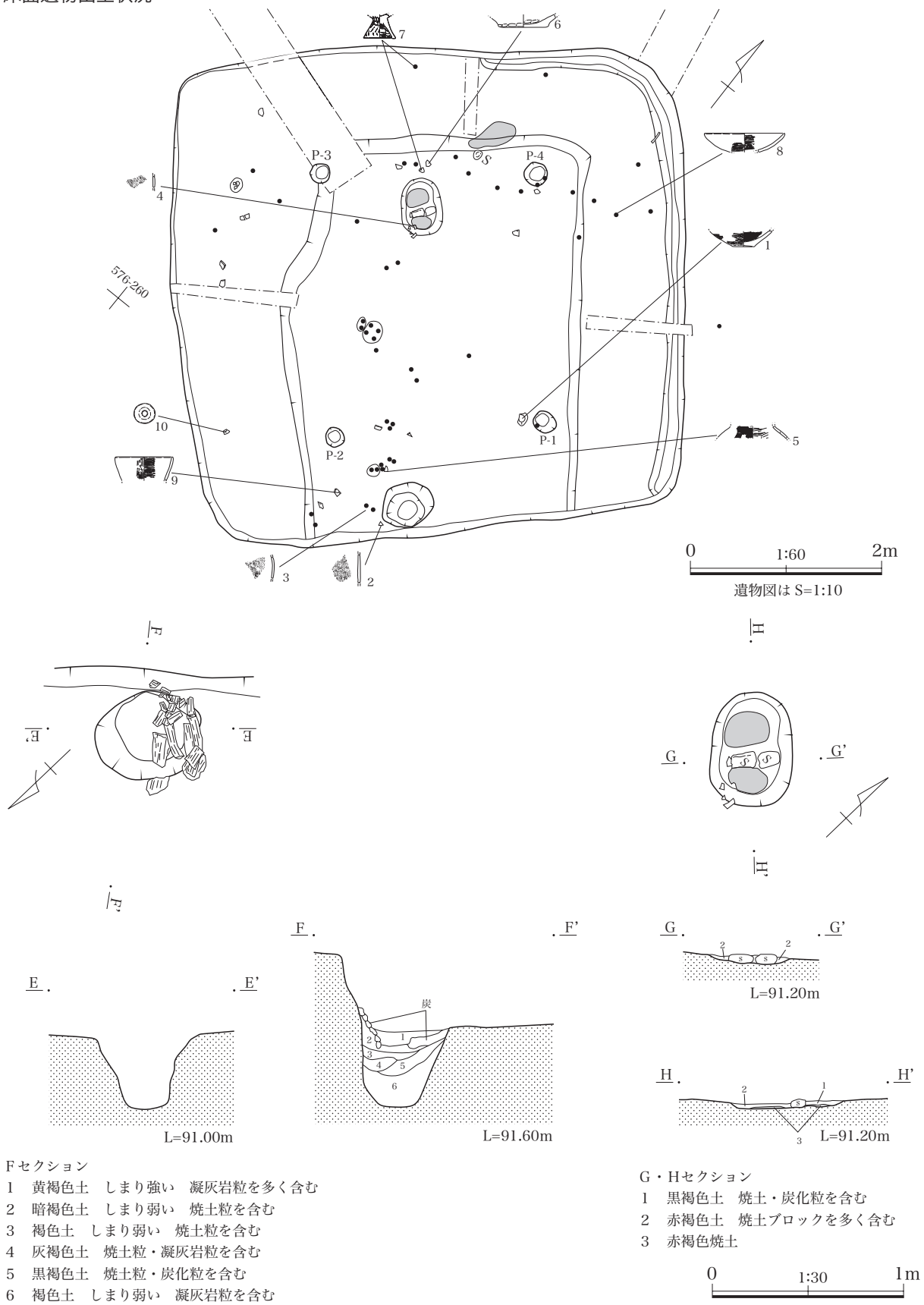


図37 20号住居(2)

炭化材及び焼土出土状況

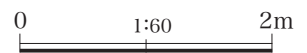
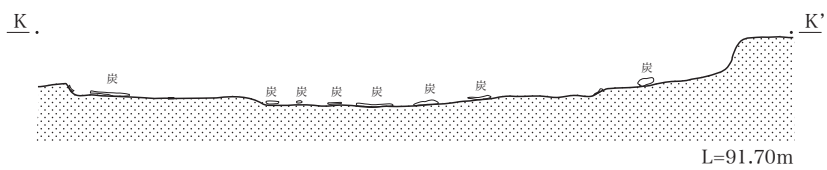
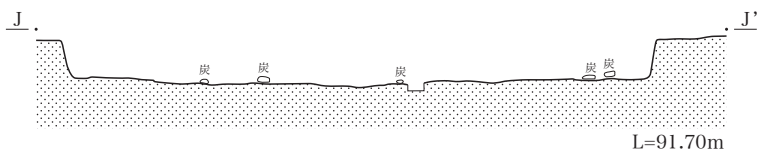
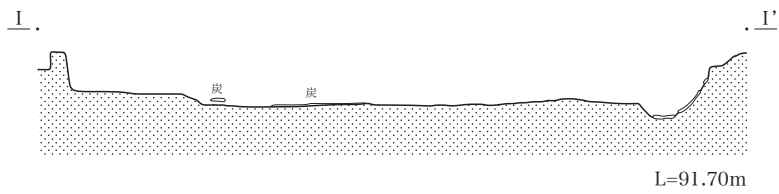
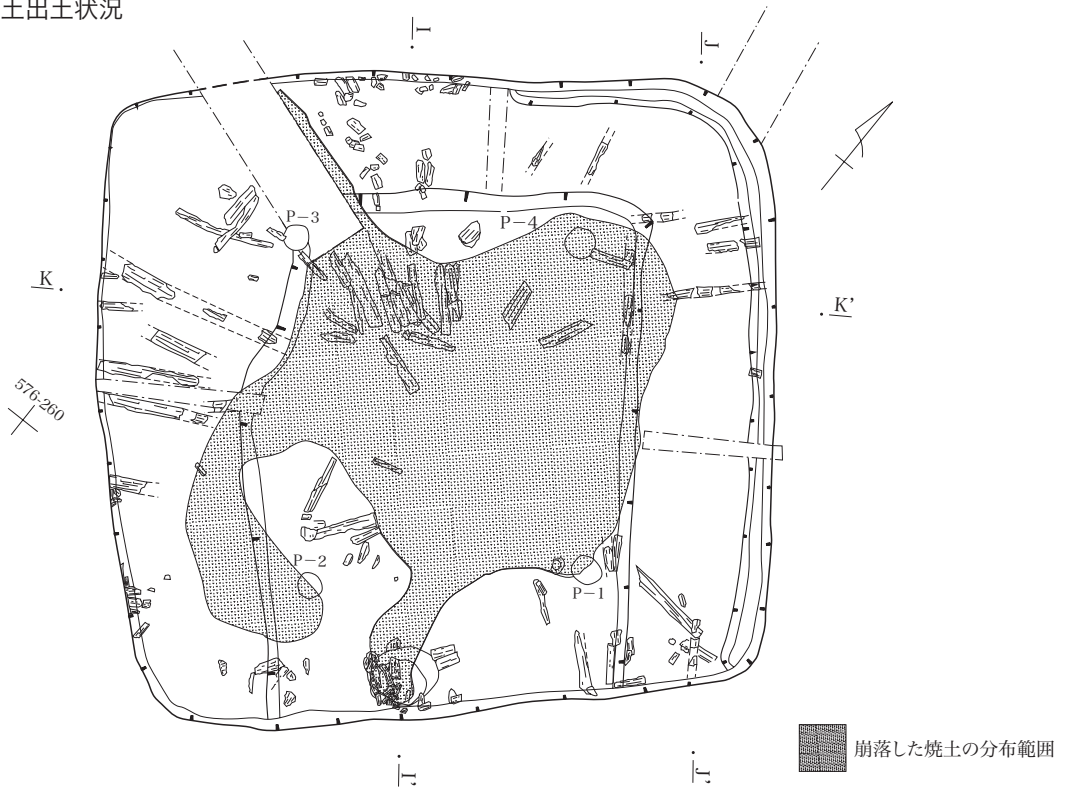


図 38 20号住居 (3)

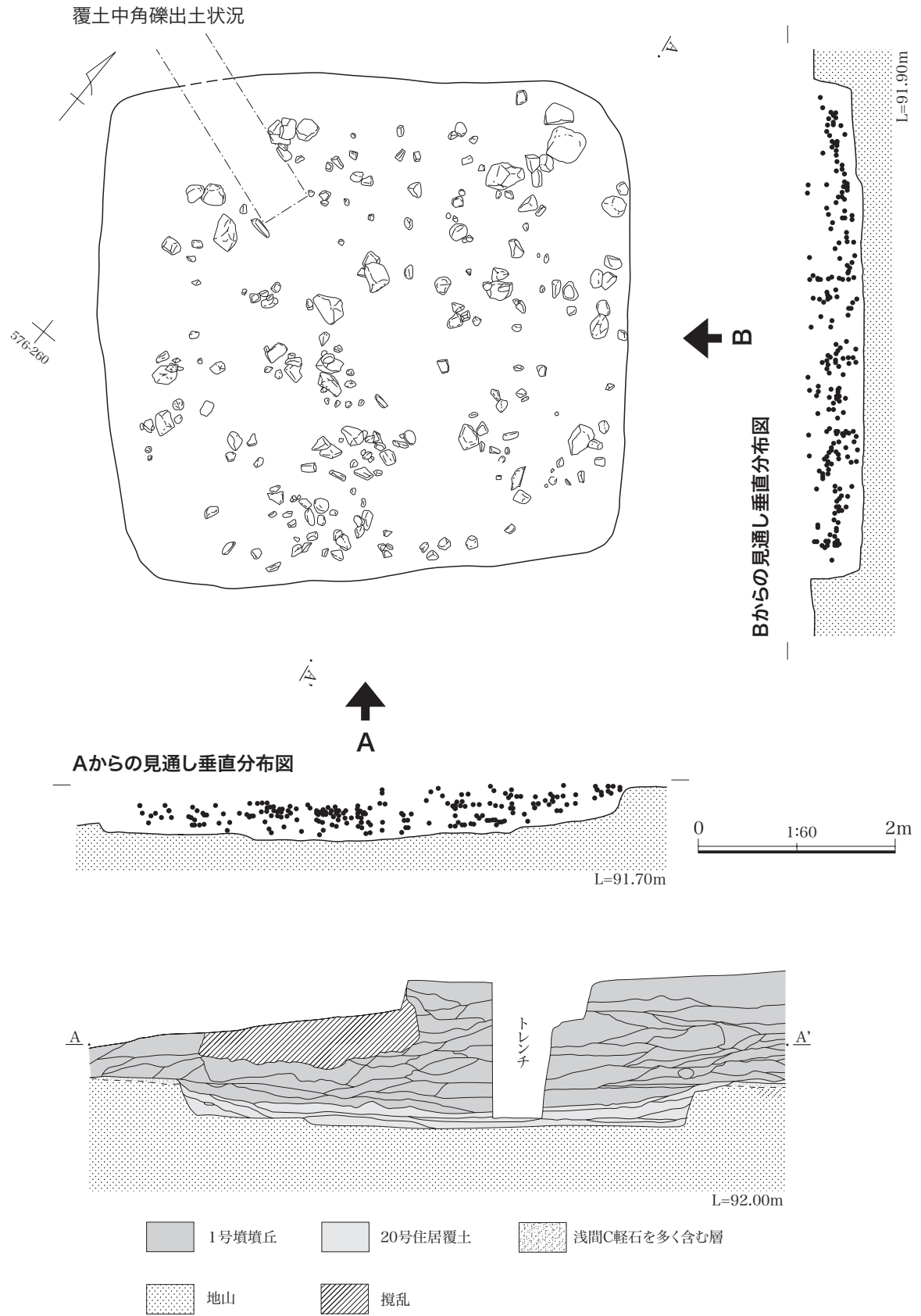
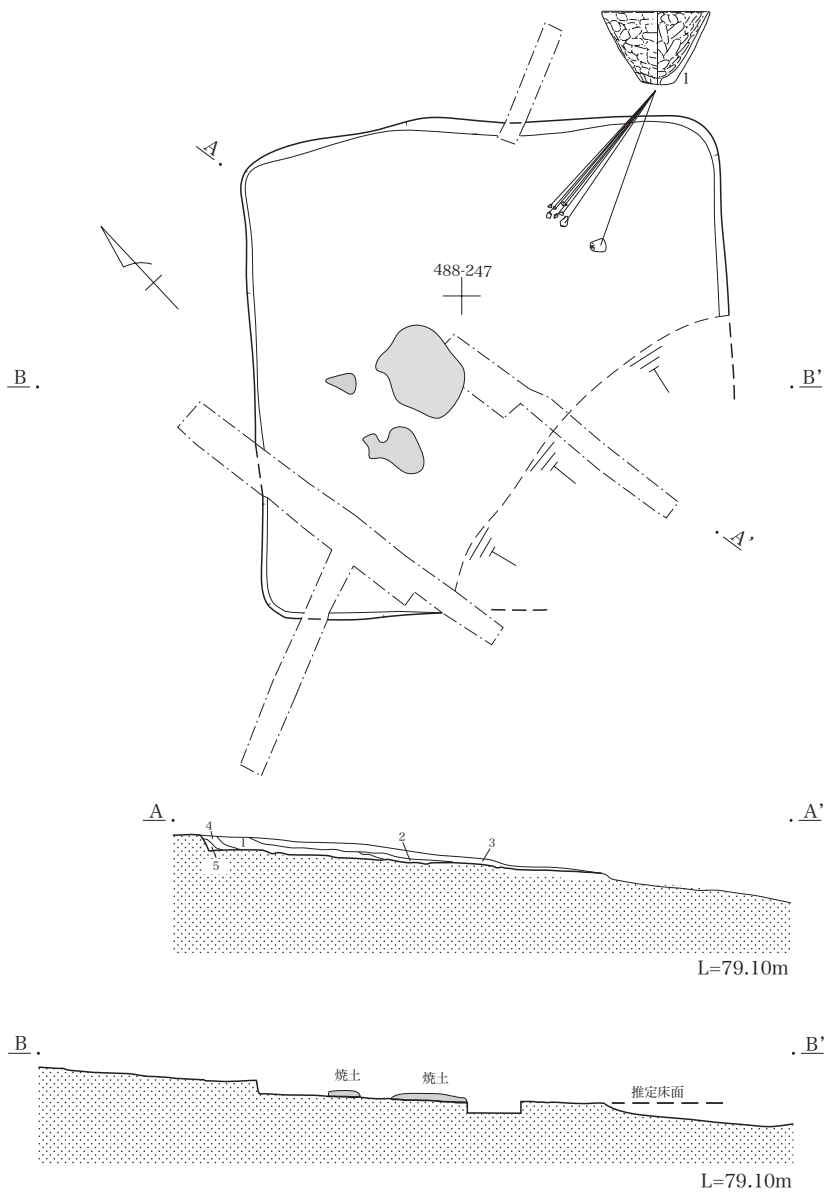


図39 20号住居(4)



- 1 褐色土 パミス含む 硬い
- 2 暗褐色土 パミスをわずかに含む
- 3 灰褐色土 パミスを含む 砂礫わずかに含む カーボン粒をわずかに含む
- 4 黒褐色土 パミス含まない しまり弱い
- 5 黒褐色土 パミス含む しまり弱い

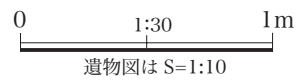


図 40 21号住居

3 出土遺物について

(1) 土師器

古墳時代前期の各竪穴住居からは古式土師器が出土している。各土師器に関する詳述は観察表に記載することにする。ここでは、その表凡例という意味合いで、各項目についての説明を記述する。

遺物番号…各竪穴住居での遺物番号を示す。この番号は、遺構图中的の遺物の出土位置を示すものとも同一である。

図版番号…上段の記載は本文図版番号を示す。下段のPL番号は写真図版のPL番号を示す。

器種…形式を示す。甕・壺・高坏・器台・鉢・有孔鉢・片口がある。

出土層位…各遺物の出土した層位を記載した。発掘調査時の取り上げデータに基づき、「床面」「覆土」に区分して記載した。

残存…掲載遺物には破片資料が多いため、各遺物の残存部位を記載した。

法量…各計測値を記載した。なお、口径・頸径・胴径・体径・裾径・底径の数値表記が斜字の場合は復元推定値を示す。また、器高の数値表記が斜字の場合は残存高の値を示す。

形態の特徴…各遺物の形態的特徴を記載する。なお、各器種における部位名称は図41の通りである。

技法の特徴…各遺物の技法的特徴を「外面」「内面」「底部」に分けて記載する。

竪穴住居出土土師器において確認できる技法には次のものがある。

櫛描文…櫛歯工具によって施された文様である。

縄文…単節縄文・0段多条縄文・附加縄文が確認できる。

輪積み装飾…成形時の輪積みではなく、整形時に意図して残す輪積みであることを示す。なお、十王台式系統の土器の場合、類似するものを「隆帯」とした。

ミガキ…棒状工具による器面整形に採用された技法である。特に外面へのミガキは器面の研磨効果が顕著である。

ナデ…ユビによるものと、ヘラ状工具を用いてのものがあ。前者は器面外面や内面の一部（口縁～頸部）に採用されることが多いのに対し、後者は器面内面に採用されることが多い。

ハケ…櫛歯状と思われる工具での器面調整で、器面外面の整形時に採用されることが多い。内面にも時折、認められる。

ケズリ…板状と思われる工具での器面調整で、器壁が十分乾燥する前に施した調整である。調整面における胎土中砂礫の移動が明確に認められる箇所について認定した。

ユビオサエ…指頭圧で、器面を押さえつけた痕跡が認められるものを示す。

穿孔…器壁にあいた孔を示す。特に記載のない限り、焼成前穿孔とする。

赤彩…器面にその痕跡が明確なものについて記載した。

色調…色調については、外面において主体を占める色調を記載した。なお、表記基準は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1993年度版に準拠した。

焼成…焼成は、「良→やや良→やや不良→不良」の4段階を設定し、識別して記載した。

胎土…胎土については、「緻密→やや緻密→やや砂質→砂質」の4段階を設定し、識別して記載した。さらに胎土に関しては、肉眼において目立つ混入物がある場合は併記した。なお、混入物記載に関しては、本地域の胎土中混入物として特徴的な、チャートや凝灰岩の有無を重視した。

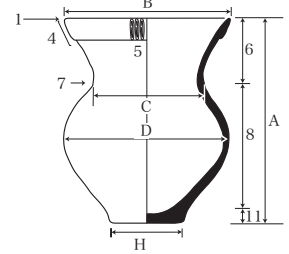
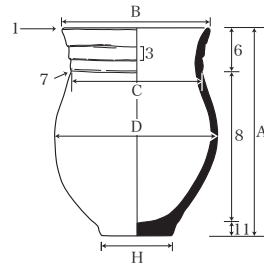
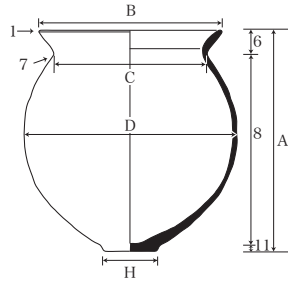
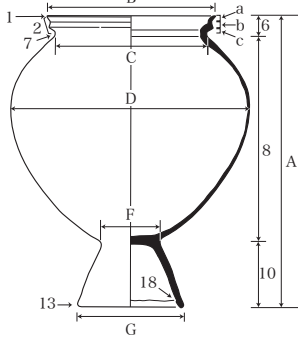
その他…その他については、土器に特記すべき内容がある場合はそれを記載したが、それ以外にも、胎土分析資料の場合は、それも記載した。（深澤）

(2) 土製品

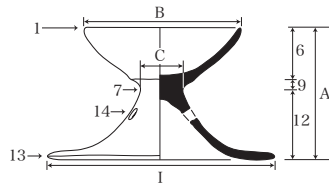
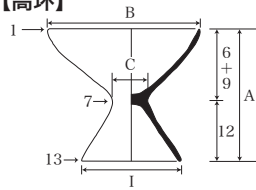
先述の土師器と共に、土製紡錘車が出土している。観察表の内容は概ね土師器の場合と同じである。但し、法量については直径と厚みを記載した。（深澤）

《部位の名称・計測の位置》

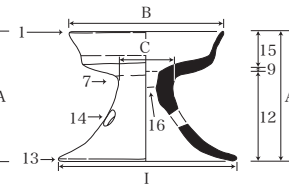
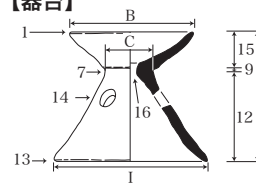
【甕・壺】



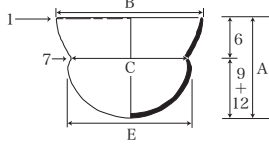
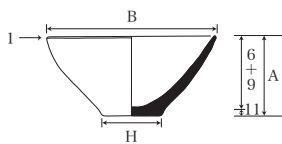
【高坏】



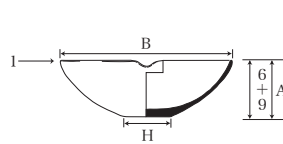
【器台】



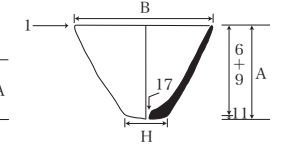
【鉢】



【片口】



【有孔鉢】



1. 口縁端部 2. S字状口縁 (a. 上段 b. 中段 c. 下段) 3. 輪積み 4. 折り返し部 5. 棒状浮文 6. 口縁部 7. 頸部 8. 胴部
9. 体部 10. 台部 11. 底 12. 脚部 13. 裾部 14. 脚部孔 15. 受け部 16. 受け部孔 17. 底部孔 18. 裾部内面折り返し
A. 器高 B. 口縁部径 C. 頸部径 D. 胴部径 E. 体部径 F. 台部底径 G. 台部裾径 H. 底部径 I. 裾部径

《技法の表現》

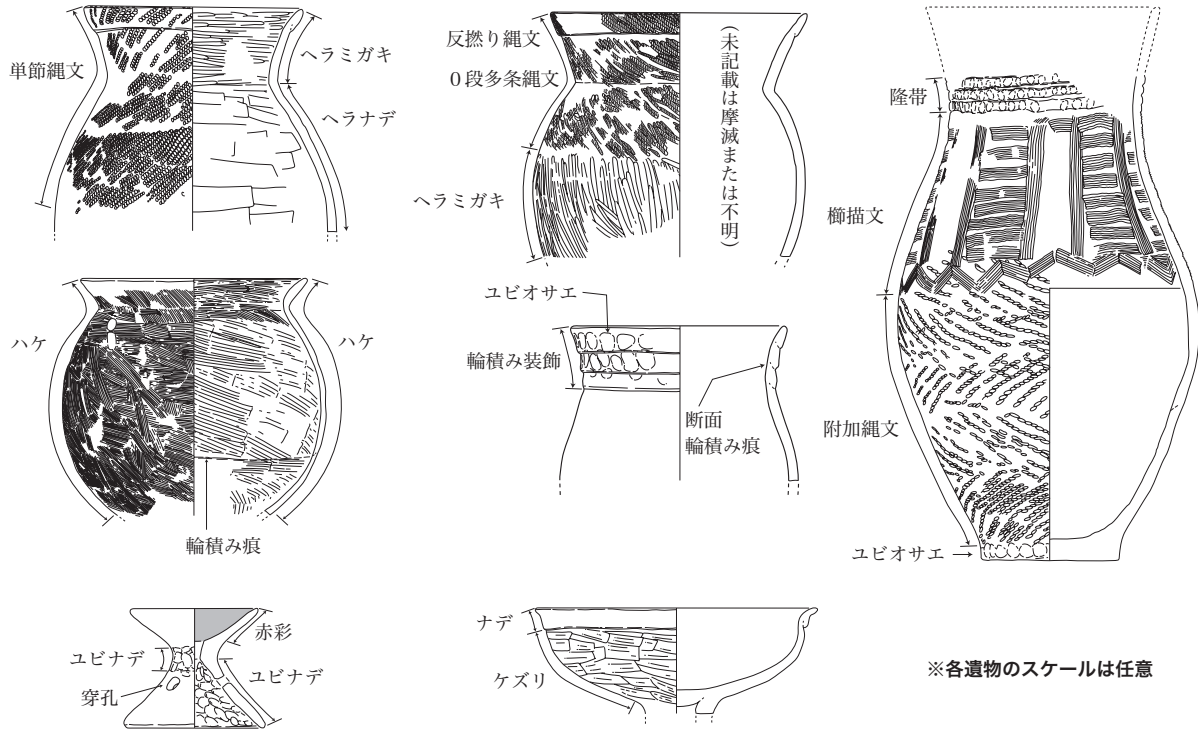


図 41 古墳時代前期住居 出土土器実測図 凡例

表3 古墳時代前期住居 出土土器観察表(1)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
3住1	図42 PL58	甕	床面	口縁部 胴部	口径 14.1 頸径 11.9 胴径 15.4 残高 9.9	・口縁部は短く、やや外反気味に開き、端部は丸く収まる。頸部は緩やかに屈曲する。胴部は球胴を呈するが、やや肩部が張る形状を呈する。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭である。頸部に櫛描籬状文を施文し、その後、口縁部と胴部(肩部)に櫛描波状文を施文している。これらの櫛描文は極めてラフな施文である。(内面) 横位ミガキを全面に施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
3住2	図42 PL58	小型壺	床面	胴部 底部	胴径 13.8 底径 6.0 残高 13.5	・胴部は球胴を呈し、中位やや下に最大径をもつ。底部は平底であり、胴部からは明確に張り出す。	(外面) 胴部上位に単節LR斜縄文を施文する。中位から下位にかけては横位ミガキを施す。胴部と底部との境にはユビナデを施す。底部にはナデを施す。(内面) 丁寧な斜横位ヘラナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや緻密。輝石・砂礫の混入がある。
3住3	図42 PL58	甕	貯蔵穴	胴部 底部	胴径 - 底径 6.5 残高 5.8	・胴部はやや縦長の球胴を呈すると推定。底部はわずかに丸みをもつ平底で、胴部からわずかに突出する。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭であるが、ナデ後ミガキを施したと推定。底部はナデを施す。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
3住4	図42 PL58	甕?	貯蔵穴	台部	台裾径 7.1 残高 3.2	・僅かに外反気味にハの字状に開く。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭であるが、縦位ナデまたはケズリを施したと推定。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
4住1	図43 PL58	甕	床面	復元 完形	口径 21.6 頸径 20.7 胴径 26.3 底径 9.3 器高 24.0	・口縁部は短く開き、端部は丸く収まる。頸部は緩やかに曲がる。胴部は球胴を呈し、中位に最大径をもつ。底部は平底で、胴部から明確に突出する。	(外面) 口縁部は斜縦位ナデを施す。頸部は短いピッチの横位ナデを施す。胴部は斜縦位ミガキを密に施す。底部付近はユビナデを施す。底部はナデを施す。(内面) ほぼ全面に、ナデを施した後に、横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 胎土分析 No.37
4住2	図43 PL58	甕	床面	口縁部 胴部	口径 14.1 頸径 11.9 胴径 - 残高 14.6	・口縁部はやや直立気味に開く。頸部のくびれは極めて弱く、胴部にいたる。胴部は縦長のあまり張りのない球胴を呈すると推定。	(外面) 口縁部から頸部にかけては幅1.0~1.3cmの輪痕痕装飾を施す。さらに口縁部から胴部まで、単節RL斜縄文を施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施文する。(内面) 横位ミガキを密に施す。	(色調) 明黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
4住3	図43 PL58	甕? 壺?	床面	胴部 底部	胴径 13.8 底径 5.2 残高 7.5	・胴部は球胴を呈する。底部は平底で、胴部からの突出はよわい。	(外面) 胴部は斜横位ミガキを施す。底面にもミガキを丁寧に施す。(内面) 斜横位ヘラナデを施し、底部付近のみ、ユビナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・石英・輝石・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 胎土異質。
4住4	図43 PL58	甕? 壺?	床面	胴部 底部	胴径 - 底径 5.9 残高 7.4	・胴部は球胴を呈する。底部は平底で、胴部からの突出はよわい。	(外面) 胴部は斜横位ナデを施す。底面にもナデを施す。(内面) 斜横位ヘラナデを施し、底部付近のみ、ユビナデを施す。	(色調) 明褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
4住5	図43 PL58	高坏	床面	復元 完形	口径 16.4 頸径 3.8 裾径 10.8 器高 14.6	・坏部は直線的に開き、口縁部付近で僅かに内湾し、丸く収まる。頸部は緩やかに屈曲する。脚部はわずかに内湾気味にハの字状に開く。	(外面) 坏部は横位ミガキを施す。頸部から脚部上半は斜縦位ミガキ、脚部下半は斜横位ミガキを施す。(内面) 坏部は斜横位ミガキを施すが、坏底部はナデを施す。脚部上半は斜横位ミガキ、脚部下半はナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) 緻密。砂礫の混入が目立たない。
4住6	図43 PL58	高坏	床面	坏部	口径 12.6 頸径 2.6 器高 4.8	・坏部はやや内湾気味に開く。坏部下位では明確な稜をもち、頸部にいたる。	(外面) 坏部は斜横位ミガキを密に施す。頸部はユビナデを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 胎土分析 No.38
4住7	図43 PL58	器台? 高坏?	床面	脚部	頸径 3.8 裾径 - 残高 5.3	・頸部は屈曲し、脚部は外反して開く。脚部中位上に径1.2cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 脚部はナデ後、斜縦位ミガキを施す。(内面) 脚部上位にはユビナデを施し、脚部下半は斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫・石英の混入が目立つ。
4住8	図43 PL58	片口	床面	口縁部 体部	口径 20.5 残高 6.7	・口縁部から体部にかけてはやや内湾気味に開く。口縁部端部に口部をもつ。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩の混入がやや目立つ。
4住9	図43 PL58	高坏	床面	坏部	口径 15.0 残高 4.8	・坏部はやや内湾気味に開く。口縁部内面には面をもつ。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、斜横位ナデ・ミガキを施したと推定。	(色調) 褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩の混入が少し目立つ。

表4 古墳時代前期住居 出土土器観察表(2)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
4住10	図43 PL58	甕	覆土	頸部 胴部	頸径 10.0 胴径 15.0 残高 7.2	・頸部は緩やかに括れる。胴部は球胴を呈する。	(外面) 胴部上半には単節LR斜縄文を施す。胴部中位にはナデを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 灰黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 4住11と同一?
4住11	図43 PL58	甕	覆土	口縁部	口径 14.1 残高 7.5	・口縁部はやや外反気味に開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 単節LR斜縄文を施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 灰褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 4住10と同一?
4住12	図43 PL58	甕	覆土	口縁部 頸部	口径 14.2 頸径 10.5 残高 7.0	・口縁部はやや外反気味に開く。口縁端部は折り返す。頸部は緩やかに括れる。	(外面) 口縁端部の折り返し部分に単節RL斜縄文を施す。それ以下は器面の荒れがひどく不明瞭だが、斜横位ナデを施したと推定。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、斜横位ナデ後、ミガキを施したと推定。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
4住13	図44 PL58	甕	覆土	台部	台裾径 8.8 残高 4.6	・直線的にハの字状に開く。裾端部に稜を持つ。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) ユビナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャートの混入がある。
4住14	図44 PL58	壺	覆土	胴部	胴径 - 残高 8.7	・球胴を呈すると推定。	(外面) 上位に単節LR斜縄文を施す。その下位に斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
4住15	図44 PL58	器台	覆土	受け部	口径 9.4 残高 2.2	・受け部はやや内湾気味に大きく開く。明確な稜をもち、端部で直立気味に屈曲する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。端部は横位ナデを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。輝石の混入がやや目立つ。
5住1	図44 PL58	台付甕	床面	胴部 台部	胴径 - 台上径 4.0 台裾径 - 残高 7.6	・胴部は球胴を呈すると推定。台部は胴部との境で明確に屈曲し、ハの字状に開く。	(外面) 胴部は斜縦位ミガキを施す。胴部と台部の境はユビナデを施す。台部はハケ後、縦位ミガキを施す。(内面) 胴部は斜横位ミガキを施す。台部はナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。凝灰岩・砂礫の混入がある。
5住2	図44 PL58	甕	床面	底部	底径 6.3 残高 1.5	・平底で、胴部からの突出がある。	(外面) 横位ミガキを施す。底面にはミガキを施す。(内面) 斜位縦位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入がある。
5住3	図44 PL58	器台	床面	脚部	頸径 2.8 裾径 10.0 残高 7.3	・頸部は屈曲し、脚部はハの字状に開き、裾近くで大きく開く。頸部芯部に径1.1cm、長さ1.1cmの孔があく。脚部の中位やや上には径1.1cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 頸部はユビナデを施す。脚部は斜縦位ミガキを施す。(内面) 受け部は斜横位ミガキを施す。頸部芯部から脚部上半にかけては斜縦位ナデを施し、脚部下半は斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫の混入がある。
5住4	図44 PL58	甕	床面	胴部	胴径 - 残高 4.7	・球胴を呈すると推定。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、斜位ナデまたはケズリを施したと推定。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
5住5	図44 PL58	甕	床面	底部	底径 - 残高 2.3	・平底と推定。	(外面) 横位ミガキを施す。底面は不明。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 黄灰色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫の混入がある。
5住6	図44 PL58	高坏	床面	坏部	口径 - 残高 2.5	・坏部はやや内湾気味に開くと推定。	(外面) 斜横位ミガキを施した後、赤彩する。(内面) ハケ状工具によるナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入がある。(備考)
5住7	図44 PL58	高坏	床面	坏部	口径 15.2 残高 5.0	・坏部はやや内湾気味に開く。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) ハケ状工具によるナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
5住8	図44 PL58	甕	床面	胴部	胴径 - 残高 2.6	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜横位または斜縦位ミガキを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入がある。
5住9	図44 PL58	甕	覆土	胴部	胴径 - 残高 3.0	・最大径が胴部上位にある、球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 明褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
5住10	図44 PL58	器台? 高坏?	覆土	脚部	頸径 3.3 裾径 - 残高 6.0	・脚部は外反して、ハの字状に開く。脚部の中位やや上に径1.0cmの孔が等間隔に4孔あく。	(外面) 脚部は斜縦位ミガキを施す。(内面) 脚部上位にはユビナデを施し、脚部下半は斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表5 古墳時代前期住居 出土土器観察表(3)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
5住11	図44 PL58	甕	覆土	胴部	胴径 - 残高 4.7	・最大径が胴部上位にある、球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
5住12	図44 PL58	甕	覆土	胴部	胴径 - 残高 2.5	・S字甕の胴部。最大径が胴部上位にある、球胴を呈すると推定。	(外面) 斜位ハケを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入がある。
6住1	図44 PL58	甕	床面	口縁部 胴部	口径 14.1 頸径 11.2 胴径 20.1 残高 15.0	・口縁部は直立気味開き、端部でごく僅かに内屈する。頸部は屈曲する。胴部は球胴を呈し、中位に最大径をもつ。	(外面) 口縁部から胴部上半にかけては単節RL斜縄文を施し、口唇部にも縄文を施す。胴部中位は器面の摩滅が激しく不明瞭だがミガキを施したと思われる。(内面) 口縁部から胴部にかけて斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
6住2	図44 PL58	甕	床面	口縁部 胴部	口径 13.5 頸径 10.5 胴径 15.7 残高 11.0	・口縁部は直立気味開く。頸部は屈曲する。胴部は球胴を呈し、中位に最大径をもつ。	(外面) 口縁部から胴部上半にかけては単節RL斜縄文を施し、口唇部にも同じ縄文を施す。胴部中位は器面の摩滅が激しく不明瞭だが、ナデまたはミガキを施したと思われる。(内面) 口縁部から胴部にかけて斜横位ナデを施す。	(色調) 黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。(備考) 胎土分析No.25
6住3	図44 PL58	甕	床面	口縁部 胴部	口径 15.1 頸径 12.7 胴径 17.5 残高 15.7	・口縁部は短く開き、端部は丸く収まる。頸部はくの字状に屈曲する。胴部はほぼ球胴を呈する。	(外面) 口縁部は横位ナデを施す。口縁部から胴部までは短いビッチの斜位ハケを施す。(内面) 口縁部から頸部までは斜位の細かいハケを施し、胴部は斜位の粗いハケを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。砂礫・白色粒子の混入が目立つ。(備考) 胎土分析No.39
6住4	図44 PL58	甕	床面	口縁部 胴部	口径 10.3 頸径 7.6 胴径 - 残高 7.3	・口縁部は直線的に開く。頸部は明確に屈曲する。胴部は張りの少ない球胴を呈する。	(外面) 口縁部は幅1.0~1.2cmの粘土帯3条を輪積み装飾とし、その表面に胴部にまでLR斜縄文を施す。なお、口唇部には同じ縄文を施す。(内面) 口縁部から胴部はナデ後、横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
6住5	図45 PL58	甕	床面	完形	口径 10.8 頸径 9.8 胴径 12.9 底径 5.3 器高 10.6	・口縁部は極めて短く、開く。頸部は明確に屈曲する。胴部は球胴を呈し、中位やや上に最大径をもつ。底部は平底で、胴部からの突出はほとんどない。	(外面) 口縁部は横位ナデを施す。頸部はユビナデ・ユビオサエを施す。胴部は横位ナデ後、斜横位ミガキを施す。底面は不明瞭だがナデを施したと推定。全面に赤彩を施す。(内面) 口縁部から頸部までは横位ナデを施す。胴部は斜横位ナデを施す。口縁部から頸部にかけて赤彩を施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
6住6	図45 PL58	壺	床面	口縁部 胴部	口径 16.3 頸径 10.9 胴径 - 残高 16.3	・口縁部はやや外反気味に開き、口縁端部は3.5cmの幅で折り返す。頸部は緩やかなくの字状に括れる。胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 折り返し口縁部は単節RL斜縄文を施す。それ以下から頸部までは横位ミガキを施す。胴部上半は単節RL斜縄文を施す。それ以下は横位ミガキを施す。(内面) 口縁部から胴部まで斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
6住7	図45 PL59	壺	床面	口縁部 胴部	口径 17.4 頸径 9.3 胴径 - 残高 18.0	・口縁部はやや外反気味に開き、口縁端部は幅約3.0cmの範囲で断面三角形に肥厚させる。頸部はやや鋭く括れる。胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 口縁部は端部の肥厚範囲は横位ミガキを施し、それ以下は縦位ハケ後、縦位ミガキを施す。胴部も縦位ハケ後、縦位ミガキを密に施す。(内面) 口縁部は上半ではハケ後に横位ミガキを施し、下半ではハケ後に縦位ミガキを施す。頸部は横位ハケを施す。胴部は斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。(備考)
6住8	図45 PL59	高坏	床面	完形	口径 12.5 頸径 3.4 裾径 18.2 残高 10.5	・坏部は内湾気味に開き、端部は丸く収まる。坏部下端には稜をもち頸部に至る。頸部は緩やかに屈曲する。裾部は大きく外反して開く。脚部の中位やや上には径1.1cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 坏部は横位ミガキを密に施す。頸部はナデを施す。裾部は斜縦位ミガキを施し、裾端部付近は横位ミガキを施す。なお、坏部・裾部ともに赤彩を施す。(内面) 坏部は斜横位ミガキを施す。裾部は上半はユビナデを施し、下半は斜横位ナデを施す。なお、坏部には赤彩を施す。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・輝石・砂礫の混入が極めて目立つ。
6住9	図45 PL59	高坏	床面	坏部 頸部	口径 15.0 頸径 3.4 残高 6.7	・坏部はやや内湾気味に開き、端部で丸く収まる。坏下部で明確な稜はないが、頸部との境で段を持つ。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデ後ミガキを施したと推定。頸部は縦位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデ後ミガキを施したと推定。	(色調) 明黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表6 古墳時代前期住居 出土土器観察表(4)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
6住 10	図45 PL59	器台? 高坏?	床面	頸部 脚部	頸径 裾径 残高 3.3 12.1 8.0	・脚部はやや外反気味に開く。脚部の中位や上には径1.1cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 頸部はユビナデを施す。脚部は斜縦位ミガキを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入が極めて目立つ。
6住 11	図45 PL59	甕?	床面	胴部 底部	胴径 底径 残高 - 5.2 5.0	・胴部は球胴を呈すると推定。底部は平底を呈し、胴部からの突出はほとんどない。	(外面) 胴部は斜横位ミガキを施す。底面はミガキを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
6住 12	図45 PL59	甕	覆土	台部	台裾径 残高 - 1.6	・S字甕の台部。直立気味に開くと推定。	(外面) 斜縦位ハケを施す。(内面) ユビナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
6住 13	図45 PL59	甕	覆土	口縁部	口径 残高 - 4.2	・口縁端部は折り返す。	(外面) 0段多条RL斜縄文を施す。口唇部にも縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入が目立つ。
7住 1	図45 PL59	甕	床面	頸部 底部	頸径 胴径 底径 残高 11.6 18.2 8.4 29.4	・頸部は緩やかに括れる。胴部は縦長球形で、中位に最大径をもつ。底部は平底で、胴部からの突出は明確に認められる。	(外面) 頸部には3条の隆帯があり、それぞれにユビオサエを施す。胴部上半にはナデ後、櫛歯(6本1単位)による縦区画充填波状文を施す。縦位区画の中を7~8条の細かい波状文で充填する単位が6単位ある。なお、この縦区画充填波状文の下端では、同じ櫛歯による鋸歯状区画文を施す。胴部下半には附加条(第2種)縄文を4段施す。胴部の底部付近にはユビオサエが施されている。底面には布目痕が施される。外面の施文順は、附加条縄文(下から上へ)→鋸歯条区画文→縦位区画文→充填波状文である。(内面) 斜位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。(備考) 胎土分析No.24
7住 2	図46 PL59	壺	床面	胴部 底部	胴径 底径 残高 7.3 4.1 7.7	・胴部は倒卵形を呈し、中位やや上に最大径をもつ。底部は平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) 胴部上半は単節LR斜縄文を施す。胴部下半は斜縦位ミガキを施す。底面はナデを施す。(内面) 胴部上半は斜横位ミガキを施す。胴部下半は斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫の混入がある。
7住 3	図46 PL59	壺	床面	口縁部 胴部	口径 頸径 残高 10.9 6.7 11.1	・口縁部は僅かに内湾気味に開く。頸部は明確に屈曲する。胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、口縁部から胴部はナデまたはミガキを施したと推定。なお、頸部にはユビオサエを施す。(内面) 口縁部は横位ナデを施す。胴部は斜横位ナデを施す。	(色調) 明黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。輝石・砂礫の混入が目立つ。
7住 4	図46 PL59	壺	床面	復元 完形	口径 頸径 胴径 底径 残高 8.0 6.2 13.0 4.8 14.9	・口縁部は僅かに内湾し直立気味に開く。頸部は屈曲する。胴部は球胴を呈し張りのある最大径を中位にもつ。底部は平底でやや上げ底気味である。	(外面) 口縁端部は横位ミガキ、口縁部は縦位ミガキを施す。胴部はナデまたはケズリ後、斜横位ミガキを施す。底面にもミガキを施す。(内面) 口縁部は横位ミガキを施す。胴部は、斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入が目立つ。
7住 5	図47 PL59	壺	床面	胴部	胴径 残高 63.0 49.0	・球胴を呈すると推定。	(外面) 肩部に単節LR斜縄文の帯縄文を2段以上施す。帯縄文間と胴部上位は斜横位ミガキを施す。胴部中位以下は斜縦位ミガキを施す。(内面) 斜横位ヘラナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
7住 6	図47 PL60	壺	床面	頸部 胴部 (肩部)	頸径 胴径 残高 18.0 - 23.2	・球胴を呈すると推定。	(外面) 頸部から肩部にかけて単節RL斜縄文を施す。それ以下は斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ヘラナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 7住-7と同一?
7住 7	図47 PL60	壺	床面	胴部	胴径 残高 58.8 34.5	・やや縦長球胴を呈すると推定。	(外面) 胴部上位は斜横位ミガキを施し、胴部下位は斜縦位ミガキを施す。(内面) 斜横位ヘラナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入が目立つ。(備考) 7住-6と同一?
7住 8	図46 PL59	甕	床面	胴部 底部	胴径 底径 残高 - 6.7 3.7	・胴部は不明。底部は平底で、胴部からの突出は僅かである。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭であるが、斜位ナデを施したと推定。底面もナデと推定。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。

表7 古墳時代前期住居 出土土器観察表(5)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
7住9	図46 PL59	甕	床面	胴部 底部	胴径 底径 残高 - 6.0 2.9	・胴部はやや縦長球胴を呈すると推定。底部は平底で、胴部からの突出はない。	(外面) 胴部は斜位ナデを施す。底面は網代痕がつく。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
7住10	図46 PL59	甕	床面	底部	底径 残高 6.2 1.9	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) 斜横位ミガキを施す。底面はナデを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
7住11	図46 PL59	高坏	床面	脚部	頸径 裾径 残高 - 15.1 4.3	・脚部は大きく外反しハの字状に開き、裾端部は水平になるほど開く。脚部中位に径0.6cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 脚部上半は斜縦位ミガキを施し、下半は斜横位ミガキを密に施す。その後、赤彩する。(内面) 脚部上半はナデを施し、下半は斜横位ミガキを施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
7住12	図46 PL59	高坏	床面	坏部 脚部	口径 頸径 裾径 残高 9.8 2.7 - 6.4	・坏部は内湾気味に開き下部で稜をもち屈折する。口縁端部は丁寧につまみ上げ、内面に1.5mmの面を有する。頸部は明確に屈曲する。脚部は頸部直下から僅かに開くが中位で外屈し、以下は大きく開く。脚部中位に径1.1cmの孔が等間隔に3孔あく。裾部は欠損する。	(外面) 坏部は斜横位ミガキを密に施す。脚部は斜縦位ミガキを密に施す。(内面) 坏部は斜横位ミガキを密に施す。脚部は斜縦位ミガキを密に施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
7住13	図46 PL59	器台	床面	脚部	頸径 裾径 残高 2.8 9.6 6.7	・脚部はやや内湾気味にハの字状に開き、裾端部で僅かに内屈する。頸部芯部には頸1.0cm、長さ1.3cmの孔があく。脚部上位に径1.1cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 脚部には斜縦位ミガキを施し、裾部付近のみ横位ミガキを施す。(内面) 頸芯部には斜縦位ナデを施す、脚部には斜横位ナデを施す。	(色調) ぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
7住14	図46 PL59	鉢	床面	復元 完形	口径 底径 器高 12.4 4.4 5.8	・坏部はやや内湾気味に開き、口縁端部は丸く取まる。底部は平底で、坏部からの突出は弱い。	(外面) 坏部は斜横位ミガキを施し、底部付近のみナデを施す。底面はナデを施す。(内面) ナデ後、斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
7住15	図46 PL59	鉢	床面	口縁部	口径 残高 21.5 6.4	・やや内湾気味に開き、口縁端部は幅約4.0cmを肥厚させる。	(外面) 口縁肥厚部には単節RL斜縦文を施す。それ以下は、横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
7住16	図46 PL60	壺	床面	胴部?	胴径 残高 - 6.5	・小片のため、形態は不明。	(外面) ナデ後、LR斜縦文の施す。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャートの混入がやや目立つ。
7住17	図46 PL60	甕?	床面	底部	底径 残高 - 1.1	・平底を呈する。	(外面) 底面には木葉痕がつく。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。石英・砂礫の混入目立つ。
7住18	図46 PL60	甕	床面	胴部 (肩部)	胴径 残高 - 7.4	・球胴を呈すると推定。	(外面) 肩部には単節LR斜縦文を施す。それ以下は斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) ぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。輝石・砂礫の混入目立つ。
7住19	図46 PL60	紡錘車	床面	完形	上辺径 下辺径 厚さ 2.6 5.1 1.7	・平面は円形を呈する。断面系は扁平な台形を呈する。中心に直径0.65cmの孔があく。	・上面及び斜面部は斜横位ミガキを施す。下面は器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデまたはミガキを施したと推定。孔内面は横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
7住20	図46 PL60	甕	覆土	口縁部 胴部 (肩部)	口径 頸径 残高 10.8 9.5 7.7	・口縁部は直立気味に開く。頸部は緩やかに括れる。胴部は張りの弱い球胴を呈すると推定。	(外面) 口縁部は幅1.0~1.2cmの粘土帯3条を輪積み装飾とし、それぞれにユビオサエを施す。胴部は斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 胎土分析No.41
7住21	図46 PL60	高坏? 器台?	覆土	脚部	裾径 残高 11.7 5.1	・脚部はハの字状に開き、裾部で外反して大きく開く。脚部中位に径1.2cmの孔が多分4孔あく。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
8住1	図48 PL60	甕	床面	胴部 底部	胴径 底径 残高 - 5.3 4.6	・胴部は球胴を呈すると推定。底部は平底を呈し、胴部からの突出はほとんどない。	(外面) 胴部は斜縦位ケズリ後、斜縦位ミガキを施す。底面は木葉痕がつく。(内面) 斜位ナデを施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・輝石・砂礫の混入が目立つ。

表8 古墳時代前期住居 出土土器観察表(6)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
8住2	図48 PL60	甕	床面	口縁部	口径 19.2 頸径 17.5 残高 3.7	・口縁部は短く、外反気味に開く。頸部は緩やかに括れる。	(外面) 口縁部は斜横位ケズリおよびナデを施す。口唇部は面取りをし、連続刺突を施す。頸部は櫛描簾状文を施すかと思われる。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。石英・砂礫の混入がやや目立つ。
8住3	図48 PL60	甕	床面	胴部	胴径 - 残高 6.0	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜縦位ハケを施す。(内面) 斜位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
8住4	図48 PL60	甕	床面	胴部	頸径 - 残高 2.5	・緩やかな括れを呈すると推定。	(外面) 単節 RL 斜縦文を施す。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜位ナデまたはミガキを施すと推定。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
8住5	図48 PL60	甕	床面	胴部	胴径 - 残高 5.5	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜位ナデ後、斜縦位ミガキを施す。(内面) 斜位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。輝石・砂礫の混入が目立つ。
8住6	図48 PL60	甕	覆土	胴部	胴径 - 残高 3.6	・球胴を呈すると推定。	(外面) 単節 RL 斜縦文を施す。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。石英・砂礫の混入がある。
9住1	図48 PL60	甕	床面	口縁部 胴部	口径 12.9 頸径 11.6 残高 11.0	・口縁部は短く、開く。頸部は緩やかに括れる。胴部は、張りの弱い球胴を呈し、最大径を中位にもつ。	(外面) 器面の荒れが極めて激しく不明瞭だが、口縁部は2~3段の輪積み痕装飾を施したと推定される。胴部はナデ後、斜位ミガキを施したと推定。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。石英・砂礫の混入がある。
9住2	図48 PL60	壺	床面	口縁部 頸部	口径 18.5 頸径 11.8 残高 8.7	・口縁部は外反して開き、口縁端部は折り返す。頸部は緩やかに屈曲する。	(外面) 器面の荒れが極めて激しく不明瞭であるが、口縁部は、折り返し部では LR 斜縦文を施し、それ以下では縦位ケズリまたはナデを施したと推定。(内面) 口縁部はナデ後、斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
9住3	図48 PL60	器台	床面	復元 完形	口径 8.7 頸径 3.4 裾径 10.8 器高 9.1	・受け部は僅かに内湾気味に開き、端部は丸く取まる。受け部下端には弱い稜をもつ。頸部は緩やかに屈曲し、裾部は僅かに外反気味に開く。頸部芯部に径1.0cm、長さ0.9cmの孔があく。脚部中位に径1.5cm程の孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 受け部は斜横位ミガキを施す。頸部も横位ミガキを施す。裾部は斜縦位ミガキを施し、頸部付近の一部と、裾端部には横位ミガキを施す。(内面) 受け部は斜横位ミガキを施す。頸部芯部から脚部上半にかけては斜縦位ナデを施し、脚部下半は斜横位ミガキを施す。	(色調) 明黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・石英・砂礫の混入が極めて目立つ。
9住4	図48 PL60	鉢	床面	復元 完形	口径 7.6 頸径 7.1 胴径 8.1 底径 4.7 器高 6.5	・口縁部は短く、開く。頸部は緩やかに屈曲する。胴部は縦詰まり気味の球胴を呈し、最大径を中位にもつ。底部は平底で、胴部からの突出はほとんどない。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭であるが、口縁部は横位ナデを施し、胴部は斜横位ナデ後、ミガキを施したと推定。底面はミガキを施したと推定。(内面) 口縁部は横位ナデを施す。胴部は斜横位ミガキを施し、底部付近のみユビナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
9住5	図48 PL60	壺	床面	胴部	胴径 - 残高 10.0	・大型壺の胴部片と思われるが、形状は推定困難。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭であるが、ナデを施したと推定。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭であるが、ナデを施したと推定。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 9住6と同一?
9住6	図48 PL60	壺	床面	胴部	胴径 - 残高 3.2	・大型壺の胴部片と思われるが、形状は推定困難。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭であるが、ナデを施したと推定。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭であるが、ナデを施したと推定。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 9住5と同一?
9住7	図48 PL60	甕	床面	胴部	胴径 - 残高 2.9	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜横位ナデを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 明赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 9住8と同一?
9住8	図48 PL60	甕	床面	胴部	胴径 - 残高 5.5	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜横位ナデを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 明赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 9住7と同一?

表9 古墳時代前期住居 出土土器観察表(7)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
10住1	図48 PL60	高坏	床面	坏部	口径 19.7 残高 5.4	・坏部は僅かに内湾気味に、大きく開く。	(外面)斜横位ミガキを施す。(内面)上半は横位ミガキを施し、下半は斜縦位ミガキを施す。	(色調)にぶい黄橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャートの混入が目立つ。
10住2	図48 PL60	高坏	床面	坏部	口径 18.0 残高 5.0	・坏部は僅かに内湾気味に、大きく開く。	(外面)器面の荒れが激しく不明瞭であるが、斜位ミガキを施したと推定。(内面)上半は横位ミガキを施し、下半は斜縦位ミガキを施す。	(色調)黄褐色。(焼成)やや不良。(胎土)砂質。チャート・砂礫の混入が極めて目立つ。
11住1	図49 PL60	器台	床面	復元完形	口径 9.2 頸径 3.4 裾径 10.5 器高 7.7	・受け部口縁部は直立気味に外反して開く。受け部口縁部下端では稜をもって屈曲する。頸部は明確に屈曲する。脚部は外反気味にハの字状に開く。頸部芯部には頸1.1~1.5cm、長さ1.0cmの孔があく。脚部中位に径0.8cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面)受け部口縁部は横位ナデを施し、受け部体部は斜位ナデを施す。脚部は、器面の荒れが激しく不明瞭であるが、ナデ後、斜縦位ミガキを施したと思われる。(内面)受け部口縁部は横位ナデを施し、受け部体部は斜位ナデを施す。頸部芯部から脚部にかけては斜横位ナデを施す。	(色調)橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。輝石・砂礫の混入が目立つ。
11住2	図49 PL60	高坏	床面	坏部 脚部	口径 9.7 残高 2.9 5.7	・坏部は僅かに内湾して開く。頸部は緩やかに屈曲する。脚部は直立気味に開き、中位で屈曲すると推定。	(外面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、坏部はナデ後、ミガキを施したと推定。頸部はユビナデを施す。脚部は斜縦位ミガキを施す。(内面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、坏部はナデ後、ミガキを施したと推定。脚部はナデを施す。	(色調)橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。輝石・砂礫の混入が目立つ。
11住3	図49 PL60	高坏? 器台?	床面	脚部	裾径 8.0 残高 3.4	・直線的にハの字状に開く。	(外面)脚部中位は斜縦位ミガキを施し、裾付近は横位ミガキを施す。(内面)斜横位ナデを施す。	(色調)橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
11住4	図49 PL60	壺	床面	底部	底径 11.9 残高 2.3	・平底で、胴部からの突出が僅かにある。	(外面)底部に近い胴部は縦位ハケとユビナデを施す。底面はナデを施す。(内面)斜位ナデを施す。	(色調)橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
11住5	図49 PL60	甕?	床面	底部	底径 4.7 残高 1.8	・平底で、胴部からの突出が僅かにある。	(外面)底部に近い胴部は斜縦位ミガキとユビナデを施す。底面はナデを施す。(内面)ユビナデを施す。	(色調)橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
11住6	図49 PL60	甕?	床面	底部	底径 6.2 残高 1.2	・平底で、胴部からの突出がほんの僅かにある。	(外面)底部に近い胴部はユビナデを施す。底面はナデを施す。(内面)斜横位ミガキを施す。	(色調)にぶい赤褐色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
11住7	図49 PL60	甕	床面	胴部(肩部)	頸径 6.5 残高 - 3.7	・胴部は球胴を呈すると思われる。	(外面)斜位ミガキを施す。(内面)ナデ後、横位ミガキを粗く施す。	(色調)にぶい赤褐色。(焼成)良。(胎土)緻密。
11住8	図49 PL60	高坏	床面	口縁部	口径 21.9 残高 2.6	・大きく開き、口縁端部が僅かに内屈する。	(外面)横位ミガキを施す。(内面)縦位ミガキを施す。	(色調)にぶい黄橙色。(焼成)良。(胎土)やや砂質。チャートの混入が目立つ。
11住9	図49 PL60	甕	覆土	胴部	胴径 - 残高 5.9	・球胴を呈すると推定。	(外面)斜縦位ハケを施す。(内面)ナデを施す。	(色調)にぶい黄橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや緻密。砂礫の混入がある。
11住10	図49 PL60	甕	覆土	胴部	胴径 - 残高 2.3	・球胴を呈すると推定。	(外面)斜縦位ハケを施す。(内面)ナデを施す。	(色調)にぶい褐色。(焼成)やや良。(胎土)やや緻密。砂礫の混入がある。
11住11	図49 PL60	甕	覆土	胴部(肩部)	胴径 - 残高 1.8	・球胴を呈すると推定。	(外面)器面の荒れが激しく不明瞭であるが、RL斜縄文を施すと思われる。(内面)横位ミガキを施す。	(色調)にぶい褐色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
12住1	図49 PL60	甕	床面	口縁部	口径 15.2 残高 7.0	・口縁部は直立気味に外反して開く。口縁端部は折り返す。	(外面)器面の荒れが激しく不明瞭であるが、櫛描波状文を雑に施す。(内面)斜横位ミガキを施す。	(色調)明褐色。(焼成)やや良。(胎土)砂質。チャート・砂礫の混入が極めて目立つ。
12住2	図49 PL60	甕	床面	口縁部	口径 15.9 残高 4.2	・口縁部は外反して開く。口縁端部は折り返す。	(外面)器面の荒れが激しく不明瞭であるが、折り返し部にRL斜縄文を施すと思われる。(内面)器面の荒れが極めて激しく不明。	(色調)橙色。(焼成)やや不良。(胎土)砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表 10 古墳時代前期住居 出土土器観察表 (8)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
12住 3	図 49 PL60	甕	床面	頸部	頸径 12.7 残高 3.8	・頸部は鈍角に屈曲する。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、ナデを施すと推定。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、ナデを施すと推定。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。砂礫の混入が目立つ。
12住 4	図 49 PL60	器台	床面	受け部 脚部	口径 - 頸径 3.5 裾径 9.5 残高 7.8	・受け部下端には弱い稜をもつ。頸部は緩やかに屈曲する。裾部はハの字状に開く。脚部上位には径1.3cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 受け部は斜横位ミガキを施す。頸部はユビナデを施す。裾部は斜横位ミガキを施す。(内面) 受け部は斜横位ミガキを施す。脚部は斜横位ナデを施す。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入が目立つ。
12住 5	図 49 PL60	器台	床面	頸部 脚部	頸径 3.5 裾径 - 残高 5.8	・頸部は緩やかに屈曲する。裾部はハの字状に開くと推定。脚部上位に径約1.2cmの孔が等間隔に3孔あくと思われる。	(外面) 頸部は斜縦位ミガキを施す。脚部は斜横位ミガキを施す。(内面) 受け部は斜横位ミガキを施す。脚部は斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
12住 6	図 49 PL60	高坏? 器台?	床面	頸部 脚部	頸径 2.7 裾径 - 残高 2.9	・頸部は緩やかに屈曲すると推定。裾部はハの字状に開くと推定。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、脚部は縦位ミガキを施すと推定。(内面) 脚部は斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
14住 1	図 49 PL61	甕	床面	口縁部 胴部	口径 16.0 頸径 12.4 胴径 17.0 残高 15.4	・口縁部は直線的に開き、端部は折り返す。頸部は明確にくの字状に屈曲する。胴部は球胴を呈し、最大径を中位に持つ。	(外面) 口縁部から胴部上位にかけてはRRの反撚縄文(Rの0段多条縄文)を施す。なお、口唇部に縄文を施す。胴部中位以下は斜縦位ミガキを施す。(内面) 口縁部は横位ナデを施し、胴部上位は斜位ケズリを施し、それ以下は斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・輝石・砂礫の混入が極めて目立つ。
14住 2	図 49 PL61	壺	床面	胴部 底部	胴径 9.8 底径 4.7 残高 8.1	・胴部は球胴を呈し、上位に最大径をもつ。底部は平底で、胴部からの突出はない。	(外面) 胴部は斜位ナデの後、上半のみに斜横位ミガキを施す。底面はミガキを施す。(内面) 胴部は斜横位ハケを施し、胴部上位と底部付近のユビナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入がある。
14住 3	図 49 PL61	?	床面	台部	台下径 8.3 残高 3.1	・台部は直線的に開く。	(外面) LR斜縄文を施した後、部分的に斜縦位ミガキを施す。(内面) ユビナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・石英・砂礫の混入がある。
14住 4	図 49 PL61	甕	床面	頸部 胴部	頸径 10.7 胴径 - 残高 4.7	・頸部は明確に屈曲する。胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、胴部はRL斜縄文を施すと思われる。(内面) 口縁部には横位ミガキを施し、胴部は斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
14住 5	図 49 PL61	高坏	床面	坏部	口径 16.9 残高 5.7	・坏部は大きく開き、端部付近でほんの僅かに内屈する。	(外面) 口縁部付近のみ、横位ナデを施し、それ以下は斜縦位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
14住 6	図 50 PL61	有孔鉢	床面	胴部 底部	胴径 - 底径 5.2 残高 3.4	・胴部は直線的に開く。底部は平底で、中心部に0.9cmの孔があく。	(外面) 胴部は縦位ミガキを施す。底面はナデを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。孔内面も斜位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
14住 7	図 50 PL61	甕	床面	胴部	胴径 - 残高 4.0	・球胴を呈すると推定。	(外面) 単節RL斜縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) 緻密。
14住 8	図 50 PL61	甕	床面	口縁部	口径 17.8 頸径 15.7 残高 2.7	・口縁部は短く、外反して開く。内面に面と稜をもつ。	(外面) 横位ナデを施す。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。
14住 9	図 50 PL61	甕	床面	胴部	胴径 - 残高 3.5	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜位ハケを施す。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫を含む。
14住 10	図 50 PL61	甕	覆土	胴部 底部	胴径 - 底径 7.5 残高 4.3	・胴部は縦長球胴形を呈すると推定。底部は平底で、胴部からの突出は弱い。	(外面) 胴部は縦位ミガキを施し、底部付近はユビナデを施す。底面はナデを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫を含む。
14住 11	図 50 PL61	甕	覆土	胴部	胴径 - 残高 6.3	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜位ハケを施す。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入がある。

表 11 古墳時代前期住居 出土土器観察表 (9)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
14住12	図50 PL61	甕	覆土	胴部 ↳ 底部	胴径 - 底径 5.5 残高 3.2	・底部は平底で、胴部からの突出は僅かにある。	(外面) 斜位ナデ後、斜縦位ミガキを施す。底部には布目匠痕がつく。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入がやや目立つ。
15住1	図50 PL61	甕	床面	復元 完形	口径 12.7 頸径 8.4 胴径 12.7 底径 5.7 器高 15.8	・口縁部は外反気味に開き、端部は折り返す。頸部は緩やかに屈曲する。胴部は球胴を呈し、中位に最大径をもつ。底部は平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) 口縁部折り返し部分に単節LR斜縄文を施す。また口唇部にも縄文を施す。折り返し部分以下は斜横位ミガキを施す。胴部上位は単節LR斜縄文を施す。胴部中位以下は斜横位ミガキを施し、底部付近はユビナデを施す。底面はミガキを施す。(内面) 全面に斜横位ミガキを施す。	(色調) 黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
15住2	図50 PL61	台付甕	床面	口縁部 ↳ 胴部	口径 11.6 頸径 10.0 胴径 11.9 残高 8.2	・口縁部は短く外面下半はほぼ直立し、上半で僅かに外反して開く。口縁部内面は外面の屈曲に合わせて緩やかに屈曲し、端部に面をもつ。頸部は緩やかに屈曲する。胴部はやや潰れた球胴を呈し、中位やや上に最大径をもつ。台部欠損のため不明。	(外面) 口縁部は粘土を貼り付けて肥厚化させている。口縁部は横位ナデ後、横位ミガキを施す。頸部から胴部上位にかけても横位ミガキを施す。胴部中位以下においては、斜横位ナデを施す。(内面) 口縁部は横位ナデを施す。頸部は横位ミガキを施す。胴部は斜横ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入が目立つ。(備考) 胎土分析 No.20
15住3	図50 PL61	甕	床面	胴部 ↳ 底部	胴径 - 底径 6.1 残高 4.0	・底部は平底で、胴部からの突出はない。	(外面) 胴部は斜縦位ケズリを施す。底面には木葉痕がつく。(内面) 斜位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・輝石・砂礫の混入が目立つ。
15住4	図50 PL61	高坏	床面	坏部	口径 18.6 頸径 4.5 残高 7.0	・坏部は内湾気味に開く。口縁端部は折り返し、外面では下半は直立気味に開き、上半で外反して開く。坏部脚部は欠損する。	(外面) 口縁部折り返し部分は横位ナデを施す。それ以下は斜横位ケズリを施す。(内面) 口縁折り返し部分から体部上位は横位ナデを施し、それ以下は斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
15住5	図50 PL61	器台	床面	復元 完形	口径 8.5 頸径 3.0 裾径 9.4 器高 7.9	・受け部は直線的に外斜して開き、端部は丸く収まる。受け部下端に稜はない。頸部は緩やかに屈曲する。裾部は僅かに外反気味に開く。頸部芯部に径0.6~1.1cm、長さ1.2cmの孔があく。脚部中位に径1.1cm程の孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 受け部は斜横位ミガキを施す。頸部はユビナデを施す。脚部は斜横位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、受け部は斜横位ミガキを施したと思われる。頸部芯部はナデを施す。脚部は斜位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・輝石・砂礫の混入が極めて目立つ。
15住6	図50 PL61	壺	床面	胴部 (肩部)	胴径 - 残高 8.4	・球胴を呈すると推定。	(外面) 胴部肩部に単節RL斜縄文を施す。それ以下は斜横位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜横位ナデを施したと思われる。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
15住7	図50 PL61	壺	床面	口縁部	口径 - 残高 2.8	・無頸壺と思われる、口縁端部は内斜し丸く収まる。口縁端部直下には径0.2cmの孔があく。胴部は球胴と推定。	(外面) ナデ後、赤彩を施す。(内面) ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
16住1	図50 PL61	台付甕	床面	胴部 ↳ 台部	胴径 - 台上径 6.5 裾径 - 器高 10.5	・胴部は長球胴を呈すると推定。台部は、直立気味に開く。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、胴部から台部にかけては斜縦位ハケを施す。(内面) 胴部は斜位ハケを施す。台部は斜位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
16住2	図50 PL61	甕	床面	口縁部	口径 13.0 頸径 11.2 器高 3.0	・口縁部は短く開き、端部で折り返す。頸部は緩やかに屈曲する。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、櫛描文が施された可能性がある。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
16住3	図50 PL61	甕	床面	頸部	頸径 13.4 器高 3.2	・頸部は緩やかに屈曲する。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭であるが、斜横位ナデを施すと推定。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表 12 古墳時代前期住居 出土土器観察表 (10)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
16住 4	図 50 PL61	甕	床面	口縁部	口径 器高 17.1 3.0	・口縁部は短く、外反して開く。中に弱い稜をもつ。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、横位ナデを施すと推定。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
16住 5	図 50 PL61	甕	床面	胴部	胴径 器高 - 6.4	・球胴を呈すると推定。	(外面) 横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 明黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
16住 6	図 51 PL61	壺?	床面	胴部	胴径 器高 - 5.6	・球胴を呈すると推定。	(外面) 上位に RL 斜縄文を施し、下位に斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
16住 7	図 51 PL61	壺	床面	口縁部	口径 器高 17.9 6.2	・僅かに外反して開き、端部に弱い面をもつ。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜縦位ナデ後ミガキを施すと推定。(内面) 上半は横位ミガキを施し、下半は斜縦位ミガキを施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
16住 8	図 51 PL61	壺	床面	口縁部	口径 器高 20.0 4.2	・僅かに外反して開き、端部を幅 3.5cm の範囲で肥厚させる。また肥厚部に対応した内面は僅かに内湾する。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、LR 斜縄文を施すと推定。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭であるが、斜縦位ナデを施すと推定。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
16住 9	図 51 PL61	器台? 高坏?	床面	脚部	頸径 裾径 残高 3.1 11.7 7.2	・脚部は外反してハの字状に開く。脚部中位やや上に径 1.1 ~ 1.3cm の孔が等間隔に 3 孔あく。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) 上位にはユビナデを施し、下半は斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
16住 10	図 51 PL61	器台? 高坏?	床面	脚部	頸径 裾径 残高 3.1 6.6 5.2	・頸部は緩やかに湾曲し、脚部は僅かに外反気味に開く。	(外面) 頸部はユビナデを施し、斜位ナデを施す。(内面) 脚部上位にヘラナデを施し、下半は斜横位ナデを施す。	(色調) ぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
16住 11	図 51 PL61	紡錘車	床面	半存	器径 器厚 4.4 1.3	・平面はほぼ正円形を呈し、断面は長方形を呈する。平面中心に 0.7cm の孔があく。	全面にナデを施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
18住 1	図 51 PL61	紡錘車	床面	完形	器径 器厚 5.7 1.4	・平面はほぼ正円形を呈し、断面は長方形を呈する。平面中心に 0.6cm の孔があく。	全面にナデを施す。	(色調) 淡黄色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
18住 2	図 51 PL61	甕? 壺?	覆土	口縁部	口径 残高 - 1.7	・ほぼ直立する口縁端部と推定。	(外面) RL 斜縄文を施す。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) ぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
19住 1	図 51 PL61	台付甕	床面	口縁部	口径 残高 18.1 1.8	・S 字状口縁の下段は外斜し、上下段境で屈曲し、上段は短く、外反して開く。口縁内面には極めて弱い屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まるが、内面上端には面を持つ。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、横位ナデを施すと推定。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、横位ナデを施すと推定。	(色調) 灰黄色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
19住 2	図 51 PL61	台付甕	床面	台部	裾径 残高 7.0 1.5	・直立気味に開く形状を呈し、裾部内面で折り返す。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、ナデを施すと推定。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、ナデを施すと推定。	(色調) ぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
19住 3	図 51 PL61	壺	床面	胴部 底部	胴径 底径 残高 - 7.7 3.8	・胴部は球胴を呈すると推定。底部は低い輪台痕があり、胴部から僅かに突出する。	(外面) 胴部は斜位ハケ後、斜縦位ミガキを施す。底部は木葉痕がつく。(内面) 斜位ハケを施す。	(色調) 明黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。輝石・砂礫の混入がやや目立つ。
19住 4	図 51 PL61	壺	床面	口縁部	口径 残高 - 2.1	・肥厚する口縁端部であり、ほぼ垂直に立ち上がる。その面に幅 0.4cm の棒状浮文が 2 条 (以上) がある。	(外面) ナデ後、棒状浮文を貼付する。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
19住 5	図 51 PL61	高坏	床面	坏部	口径 残高 - 2.0	・脚部との接合部であり、はめ込み部が丸底状に半円球を呈する。	(外面) 剥落のため不明。(内面) 器面の荒れが激しく不明。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表13 古墳時代前期住居 出土土器観察表(11)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
19住6	図51 PL61	器台	床面	受け部	口径 残高 2.0	・体部は浅く、やや内湾気味に開く。口縁部は直立気味に、やや外反して開く。	(外面)器面の荒れが激しく不明。(内面)斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 19住8と同一?
19住7	図51 PL61	器台? 高坏?	床面	頸部 脚部	頸径 裾径 残高 2.3 3.6	・脚部は僅かに外反気味に開く推定。脚部中位付近に孔が等間隔に3孔あ	(外面)縦位ミガキを施す。(内面)斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
19住8	図51 PL61	器台	床面	受け部	口径 残高 1.7	・体部は浅く、やや内湾気味に開く。口縁部はやや外反して開くと推定。	(外面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、ミガキを施したと推定。(内面)器面の荒れが激しく不明。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 19住6と同一?
19住9	図51 PL61	鉢	床面	口縁部 胴部	口径 頸径 胴径 残高 9.3 7.4 7.8 5.8	・口縁は僅かに内湾して開く。頸部は明確に屈曲する。胴部は球胴を呈し、最大径は上位にもつ。底部は残存しないが、丸底と推定。	(外面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜横位ナデ後、ミガキ施すと思われる。(内面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜横位ナデ後、ミガキを施すと思われる。	(色調) 明黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
19住10	図51 PL61	壺	床面	口縁部	口径 残高 1.8	・口縁端部であり、ほぼ垂直に立ち上がる。その面に幅0.4cmの棒状浮文が1条(以上)がある。	(外面)ナデ後、棒状浮文を貼付する。(内面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、横位ナデを施すと推定。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
19住11	図51 PL61	台付甕	床面	胴部	胴径 残高 4.3	・球胴を呈すると推定。	(外面)斜位ハケを施す。(内面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜横位ナデを施すと推定。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がある。
19住12	図51 PL61	台付甕	床面	胴部	胴径 残高 2.1	・球胴を呈すると推定。	(外面)斜位ハケを施す。(内面)斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がある。
20住1	図51 PL61	甕	床面	胴部 底部	胴径 底径 残高 3.8 2.7	・胴部は球胴を呈すると推定。底部はやや上げ底気味の平底を呈し、胴部からの突出はない。	(外面)胴部は斜横位ミガキを施す。底部もミガキを施す。(内面)斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
20住2	図51 PL61	台付甕	床面	胴部	胴径 残高 5.0	・球胴を呈すると推定。	(外面)斜横位ハケを施す。(内面)斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい褐色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
20住3	図51 PL61	台付甕	床面	胴部	胴径 残高 3.7	・球胴を呈すると推定。	(外面)ヘラケズリ後、斜横位ハケを施す。(内面)斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい褐色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
20住4	図51 PL61	台付甕	床面	胴部	胴径 残高 1.8	・球胴を呈すると推定。	(外面)斜横位ハケを施す。(内面)斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
20住5	図51 PL61	甕	床面	胴部	胴径 残高 2.1	・球胴を呈すると推定。	(外面)縦位ハケを密に施す。(内面)斜横位ケズリを施す。	(色調) 灰褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫が混ざる。
20住6	図51 PL61	壺	床面	底部	底径 残高 8.8 2.2	・平底を呈し、胴部から明確に突出する。	(外面)胴部の底部付近はユビナデを施す。底部はナデを施す。(内面)斜位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
20住7	図51 PL61	高坏? 甕?	床面	脚部	頸径 裾径 残高 2.5 5.6 4.1	・頸部は緩やかに湾曲し、脚部は僅かに外反気味に開く。	(外面)頸部はユビナデを施し、斜位ナデを施す。(内面)脚部は斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
20住8	図51 PL61	高坏	床面	坏部	口径 残高 14.0 3.3	・やや内湾気味に開き、口縁端部は丸く収まる。	(外面)斜横位ミガキを施し、赤彩を施す。(内面)斜横位ミガキを施し、赤彩を施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
20住9	図51 PL61	壺	床面	口縁部	口径 残高 10.2 4.2	・やや内湾して、直立気味に開き、端部は丸く収まるが、端部内面に弱い稜をもつ。	(外面)斜横位ミガキを施し、赤彩を施す。(内面)斜横位ミガキを施し、赤彩を施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表 14 古墳時代前期住居 出土土器観察表 (12)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
20住 10	図 51 PL61	紡錘車	床面	完形	器径 器厚 3.7 2.5	・平面はほぼ正円形を呈し、断面は台形を呈する。平面中心に0.9cmの孔があく。	器面の荒れが激しく不明瞭だが、全面にナデ後、ミガキを施すと推定。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
20住 11	図 51 PL61	甕	覆土	頸部 胴部	頸径 胴径 残高 11.9 - 6.7	・頸部は緩やかに屈曲する。胴部は球胴を呈すると思われる。	(外面) ナデ後、単節 RL 斜縄文を施す。(内面) 斜横位ナデ後、横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・石英・砂礫の混入がやや目立つ。
20住 12	図 52 PL61	壺	覆土	口縁部 頸部	口径 頸径 残高 16.5 11.4 6.5	・口縁部は外斜して開く。口縁部は肥厚させ、頸部との境には稜を有する明確な段をもつ。なお口縁部内面には段がない。頸部はやや緩やかだが明確に屈曲する。	(外面) 口縁部から頸部まで、縦位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
20住 13	図 52 PL61	壺	覆土	胴部	胴径 残高 - 12.0	・球胴を呈する。	(外面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、ミガキを施すと推定。(内面) 器面の荒れが激しく不明。	(色調) 灰白色。(焼成) 不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が極めて目立つ。
20住 14	図 52 PL61	壺	覆土	胴部	胴径 残高 - 12.2	・球胴を呈する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜位ナデを施すと推定。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
20住 15	図 52 PL61	壺	覆土	胴部	胴径 残高 - 7.2	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜位ケズリを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
20住 16	図 52 PL61	壺	覆土	底部	底径 残高 7.1 1.5	・平底を呈し、胴部から突出はない。	(外面) 胴部の底部付近は斜横位ミガキを施す。底面もミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
20住 17	図 52 PL61	甕	覆土	口縁部	口径 残高 16.0 4.2	・口縁部は外反して開く。	(外面) 4段の輪積み装飾を施し、その上に、単節 RL 斜縄文を施す。口唇部にも縄文を施文する。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・砂礫の混入が極めて目立つ。
20住 18	図 52 PL61	甕	覆土	胴部	胴径 残高 - 4.8	・球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を雑に施す。(内面) 斜位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
20住 19	図 52 PL61	甕	覆土	口縁部	胴径 残高 - 3.2	・口縁端部は折り返す。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) 斜位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
20住 20	図 52 PL61	甕	覆土	胴部	胴径 残高 - 5.2	・球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を雑に施す。(内面) 斜位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
20住 21	図 52 PL61	壺	覆土	胴部	胴径 残高 - 5.9	・球胴を呈すると推定。	(外面) 上位は単節 RL 斜縄文を施す。下位は斜横位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れが激しく不明瞭であるが、斜位ナデを施すと推定。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) 良。やや不良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
20住 22	図 52 PL61	甕	覆土	底部	底径 残高 6.3 1.5	・平底を呈し、胴部から突出はない。	(外面) 胴部の底部付近はナデを施す。底面もナデを施す。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
20住 23	図 52 PL61	甕	覆土	底部	底径 残高 5.8 1.7	・平底を呈し、胴部から突出はない。	(外面) 胴部の底部付近はナデを施す。底面もナデを施す。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
20住 24	図 52 PL61	甕	覆土	底部	底径 残高 4.6 1.5	・平底を呈し、胴部からわずかに突出する。	(外面) 胴部の底部付近は斜横位ケズリを施す。底面はミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入がある。
20住 25	図 52 PL61	高坏?	覆土	坏部	口径 残高 - 3.4	・小片のため不明。	(外面) 斜横位ミガキを施し、赤彩を施す。(内面) 赤彩を施す。	(色調) 灰褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表 15 古墳時代前期住居 出土土器観察表 (13)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
20住26	図52 PL61	壺	覆土	口縁部 頸部	口径 8.5 頸径 7.4 残高 5.2	・口縁部はやや内湾して、直立気味に開き、端部は丸く収まる。頸部は屈曲する。	(外面)斜縦位ミガキを施す。(内面)横位ミガキを施す。	(色調)浅黄橙色。(焼成)やや良。(胎土)砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
21住1	図52 PL61	有孔鉢	床面	復元 完形	口径 14.4 底径 4.3 器高 9.7	・体部はほぼ直線的に開き、端部は丸く収まる。底部は僅かに丸底気味の平底を呈し、中心に径1.2cmの孔があく。	(外面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜位ナデを施すと思われる。(内面)器面の荒れが激しく不明瞭だが、斜位ナデを施すと思われる。	(色調)橙色。(焼成)やや良。(胎土)砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表採1	図52 PL65	甕	600-250	口縁部 頸部	口径 10.0 底径 8.3 残高 3.2	・口縁部は短く、やや内湾気味に開く。口縁端部は丸く収まるが、丁寧な仕上げ処理をする。頸部は緩やかに屈曲し、内面に明確な稜線をもつ。	(外面)口縁部は斜縦位ミガキを施す。胴部は縦位ミガキを施す。(内面)口縁部は斜縦位ミガキを施す。胴部はケズリを施す。	(色調)橙色。(焼成)良。(胎土)やや緻密。砂礫が混入。(備考)器壁は薄い。
表採2	図52 PL65	器台	表採	受け部 脚部	口径 6.8 頸径 2.6 残高 3.6	・受け部は外反気味に開き、内外面に稜をもって屈曲し、端部の面をつくる。頸部は屈曲する。脚部はハの字状に開くが、下位については欠損のため不明。脚部には孔が3つあくと推定。	(外面)受け部は屈曲部から上位については横位ミガキ、それより下位については斜縦位ミガキを密に施す。頸部から脚部にかけては斜縦位ミガキを密に施す。(内面)受け部は斜横位ミガキを密に施す。脚部は横位ナデを施す。	(色調)にぶい赤褐色。(焼成)良。(胎土)やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。(備考)器面に赤彩の可能性有り。
表採3	図52 PL65	甕	表採	口縁	口径 23.0 頸径 20.5 残高 5.0	・受け口状を呈する。口縁部は直線的に短く外斜する。口縁下端で明確に屈曲し、頸部にいたる。頸部は屈曲し、胴部との境で弱く屈曲する。内面においても外面と同じ位置で明確な屈曲を呈する。	(外面)器面の荒れがひどく、不明瞭であるが、口縁部から頸部にかけてはナデを施したと思われる。(内面)器面の荒れがひどく、不明瞭であるが、口縁部から頸部にかけてはナデを施したと思われる。胴部ではヘラケズリが施されている。	(色調)にぶい黄褐色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考)北陸系礫の可能性有り。胎土分析 No.27

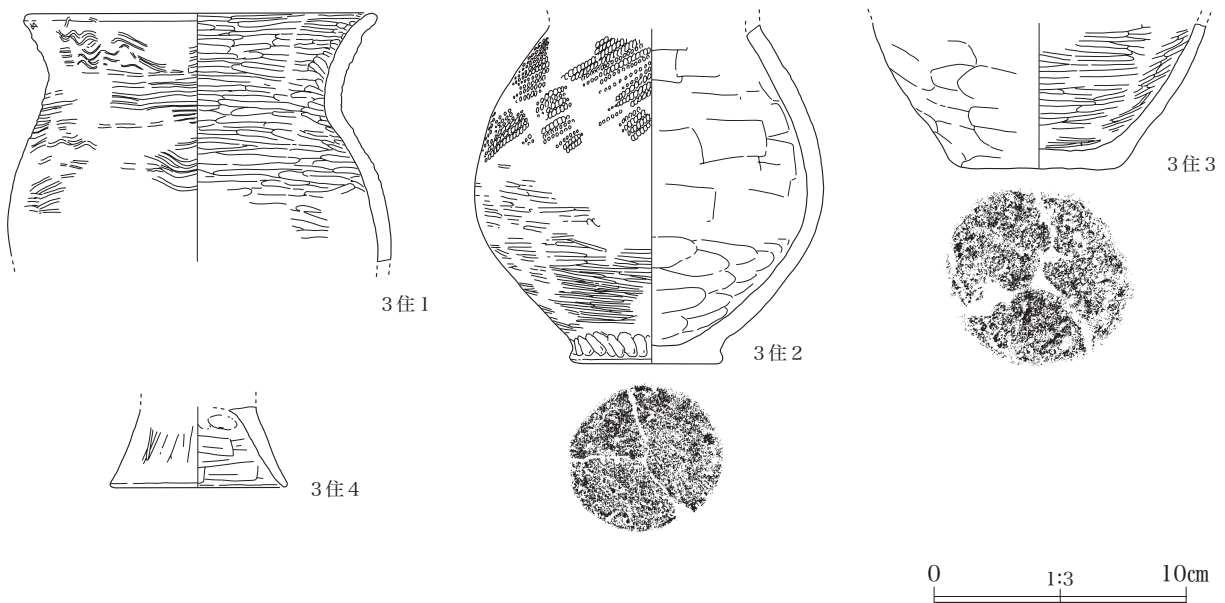


図 42 古墳時代前期住居 出土土器 (1)

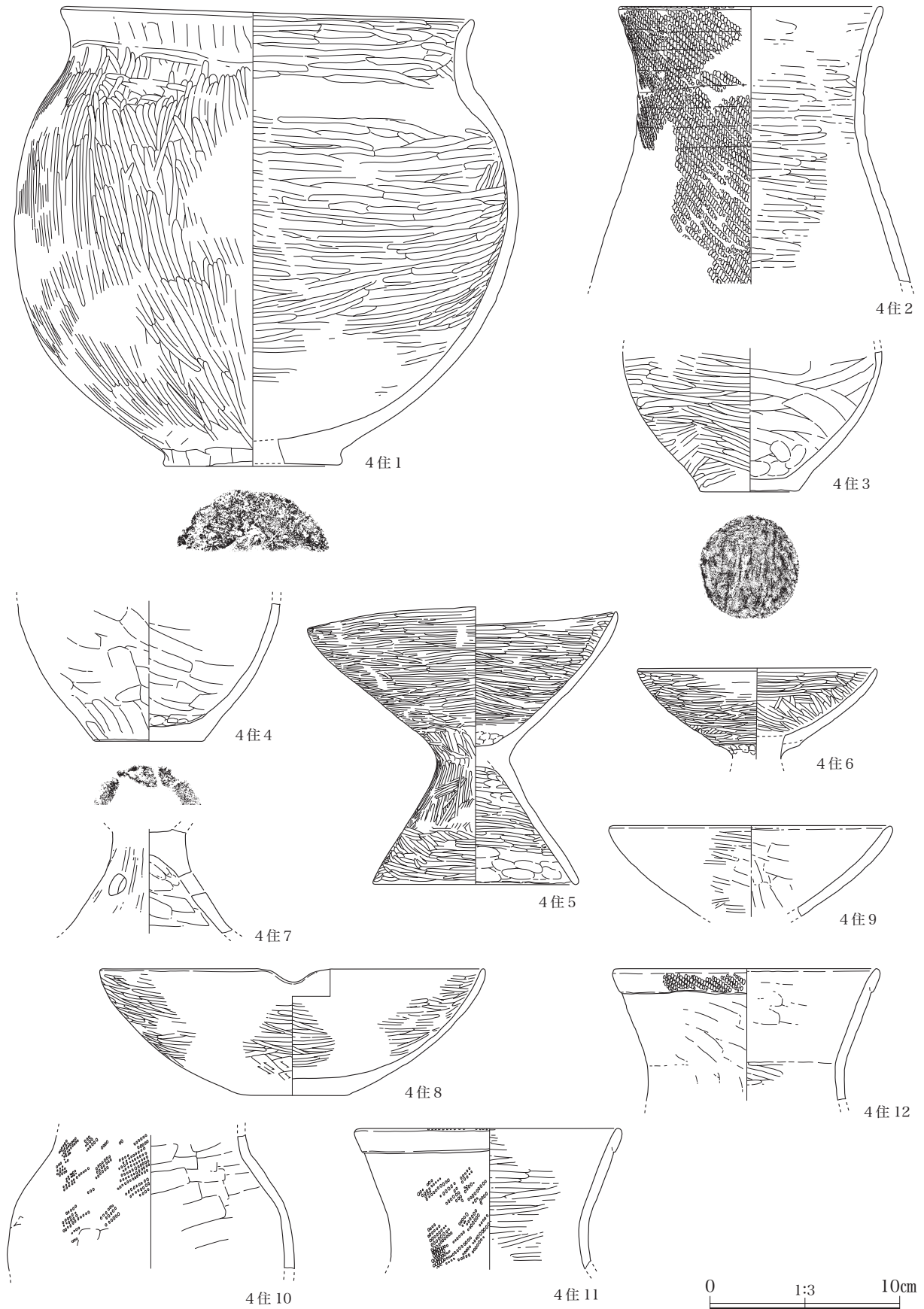


図43 古墳時代前期住居 出土土器(2)

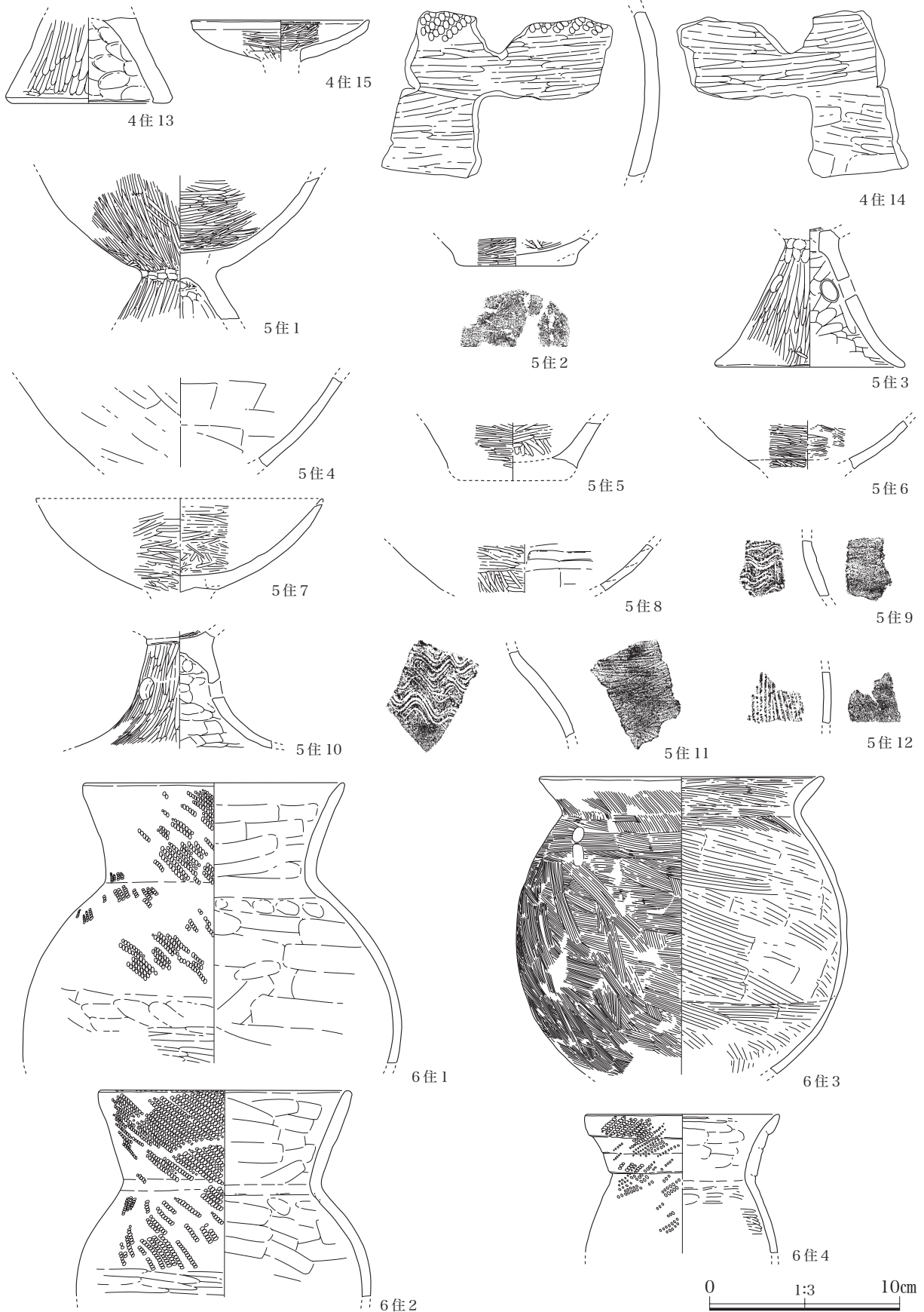


図44 古墳時代前期住居 出土土器 (3)

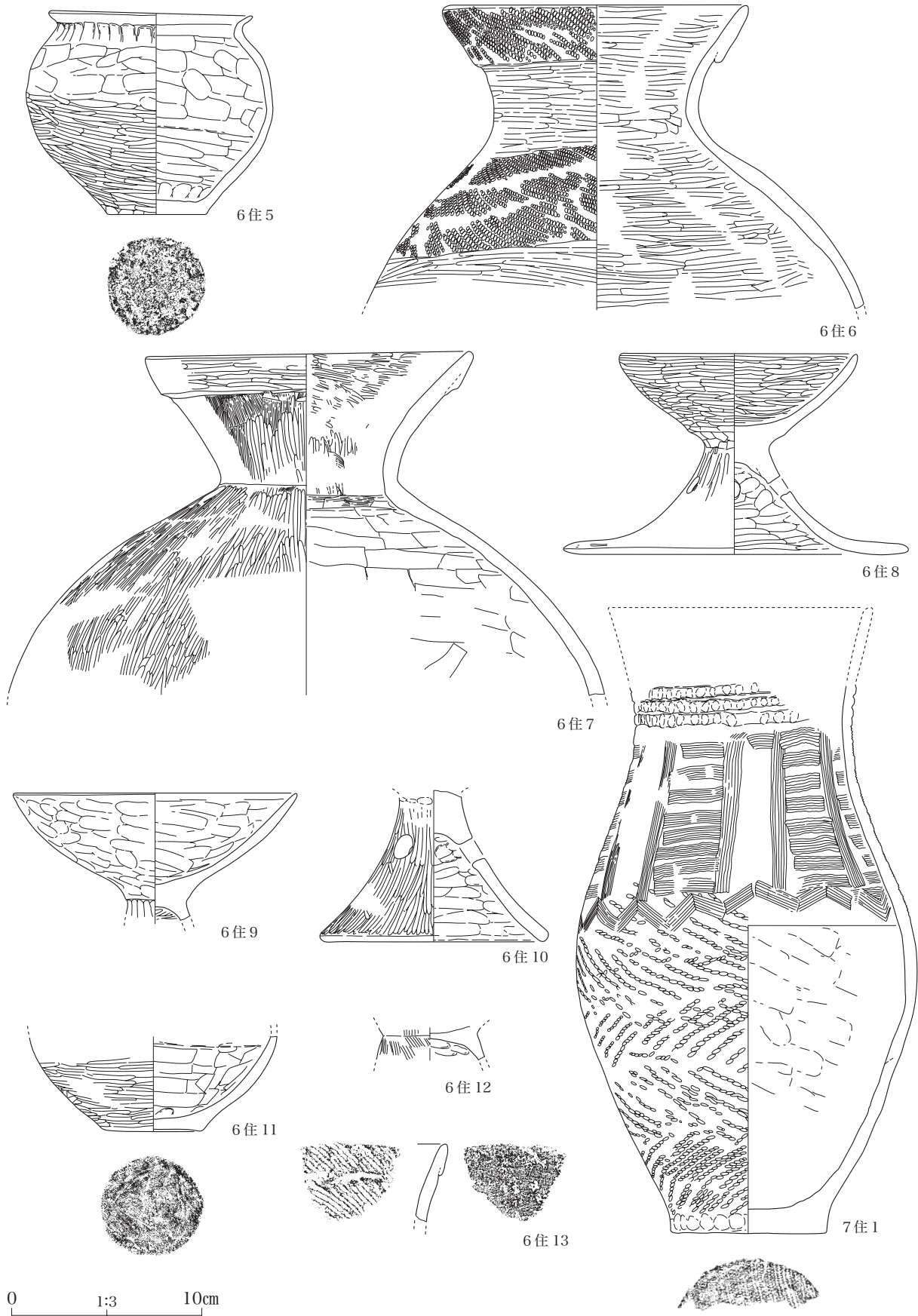


図45 古墳時代前期住居 出土土器(4)

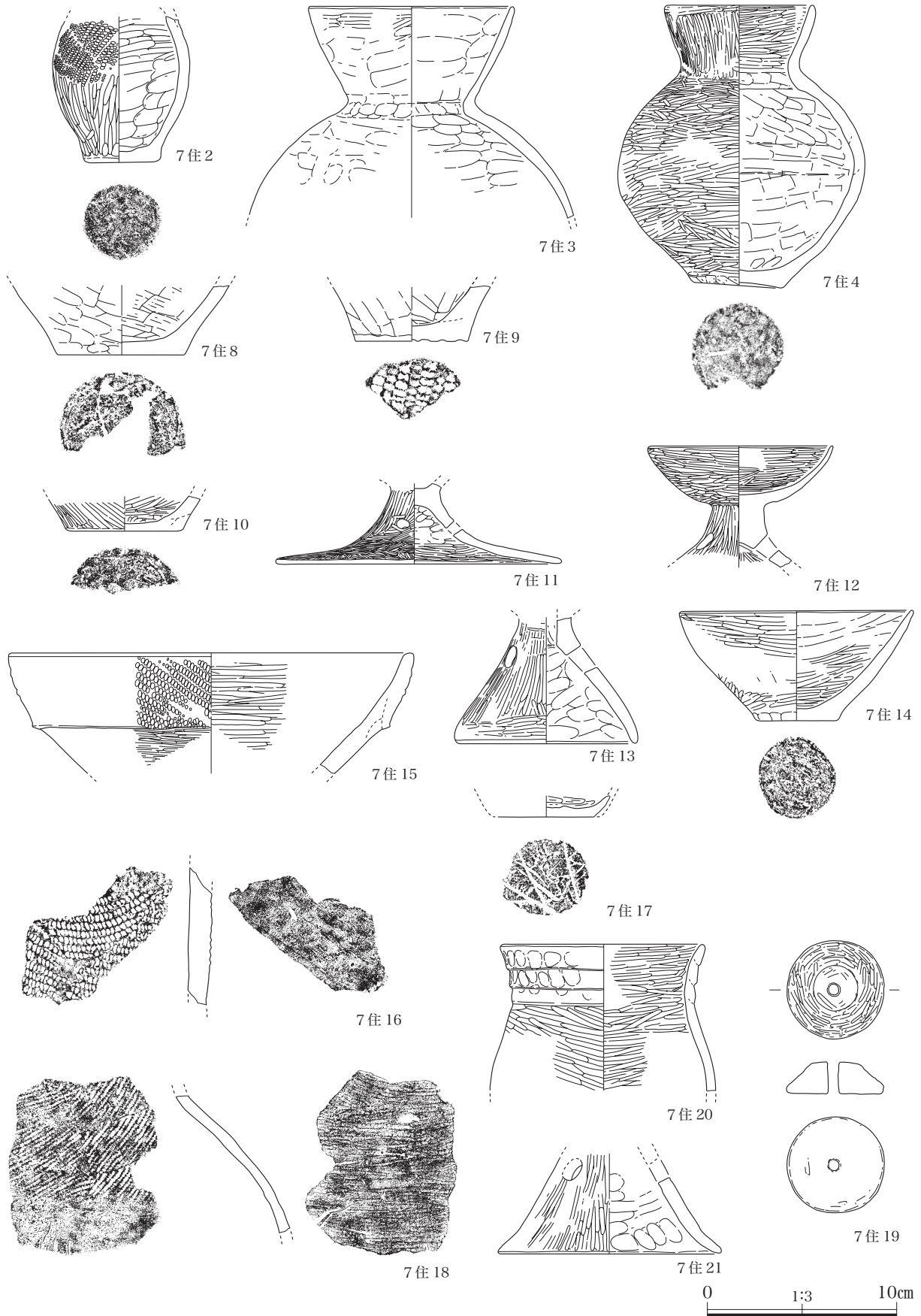


図46 古墳時代前期住居 出土土器(5)

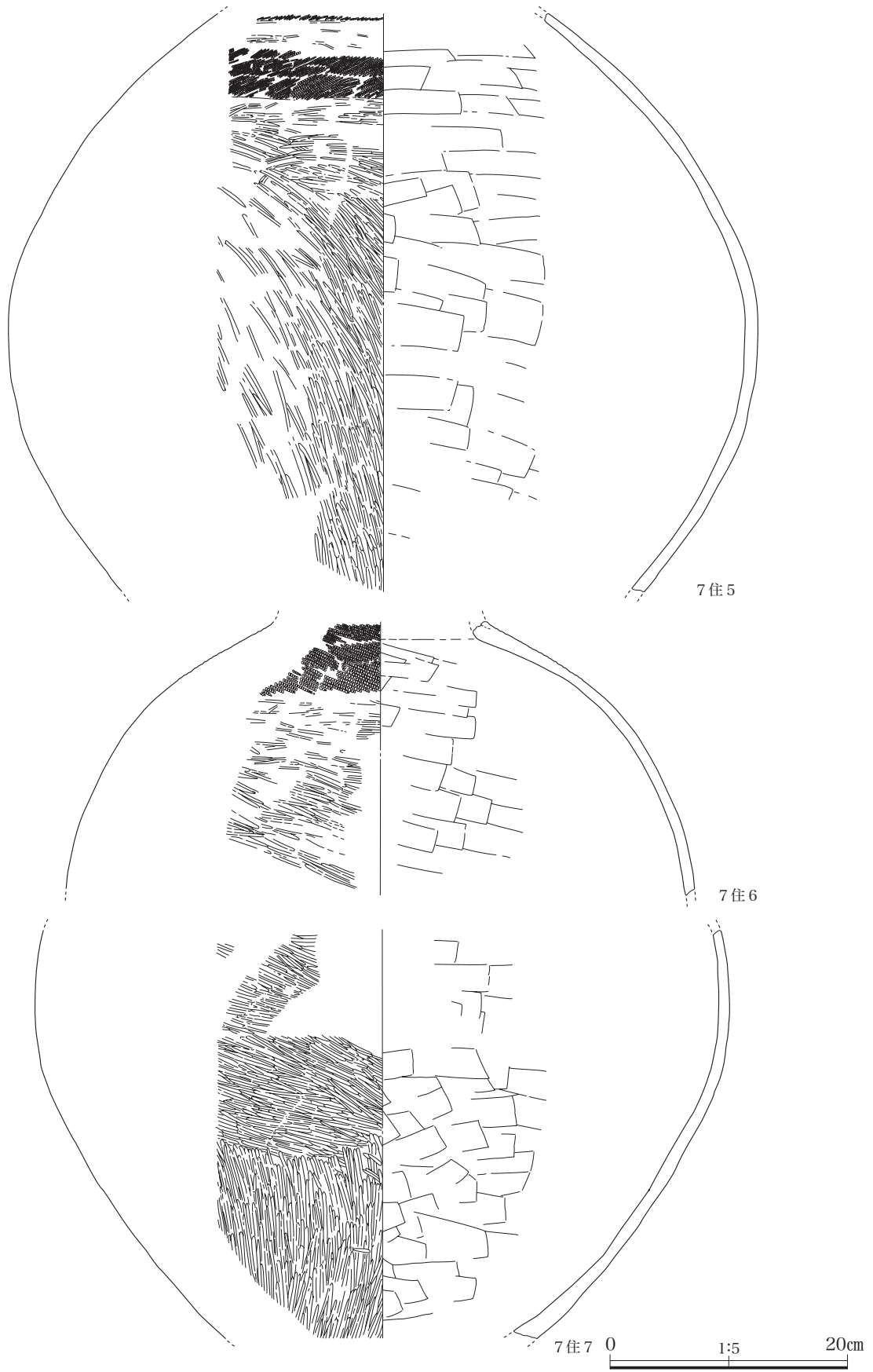


図47 古墳時代前期住居 出土土器(6)

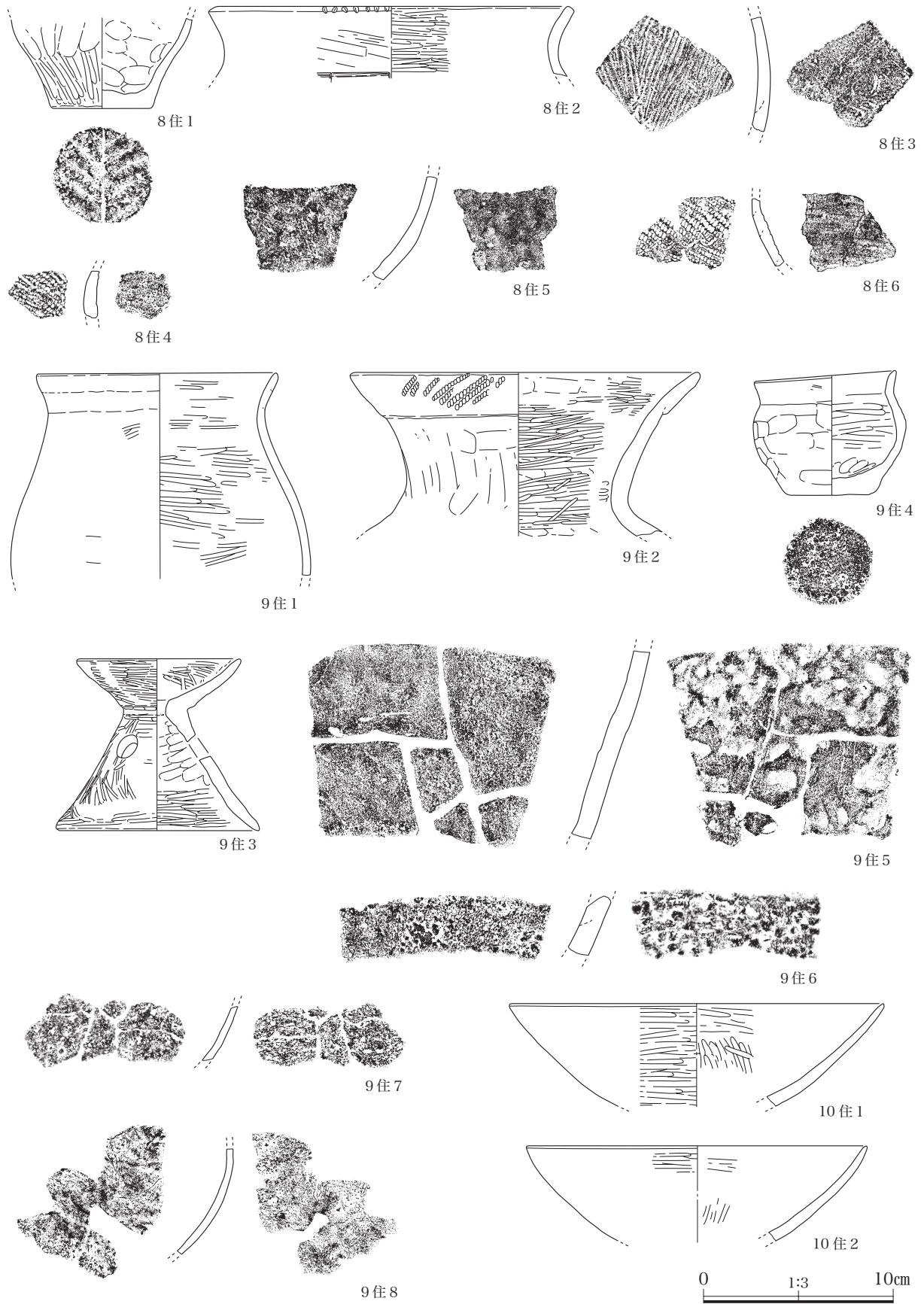


図48 古墳時代前期住居 出土土器 (7)

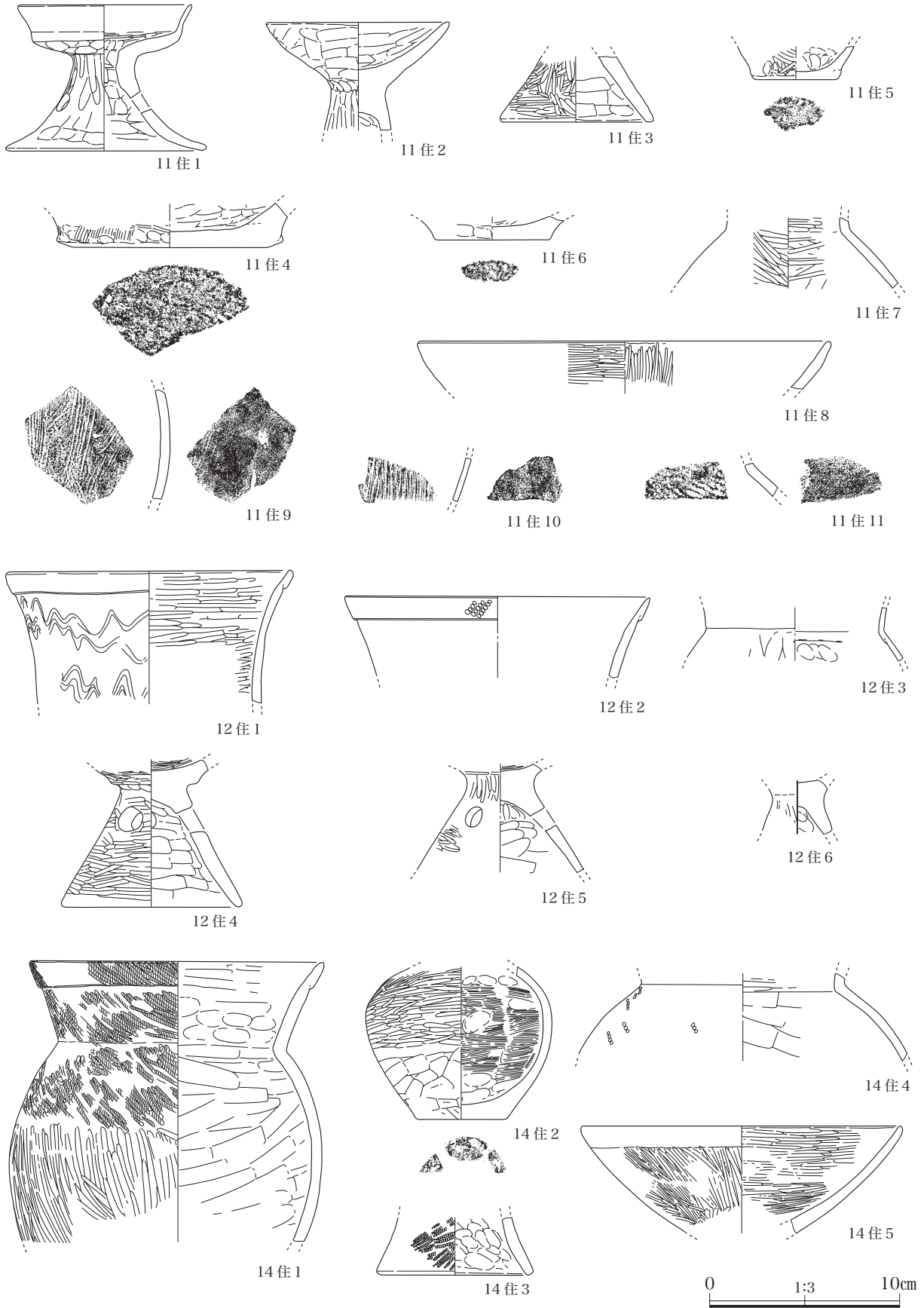


図49 古墳時代前期住居 出土土器(8)

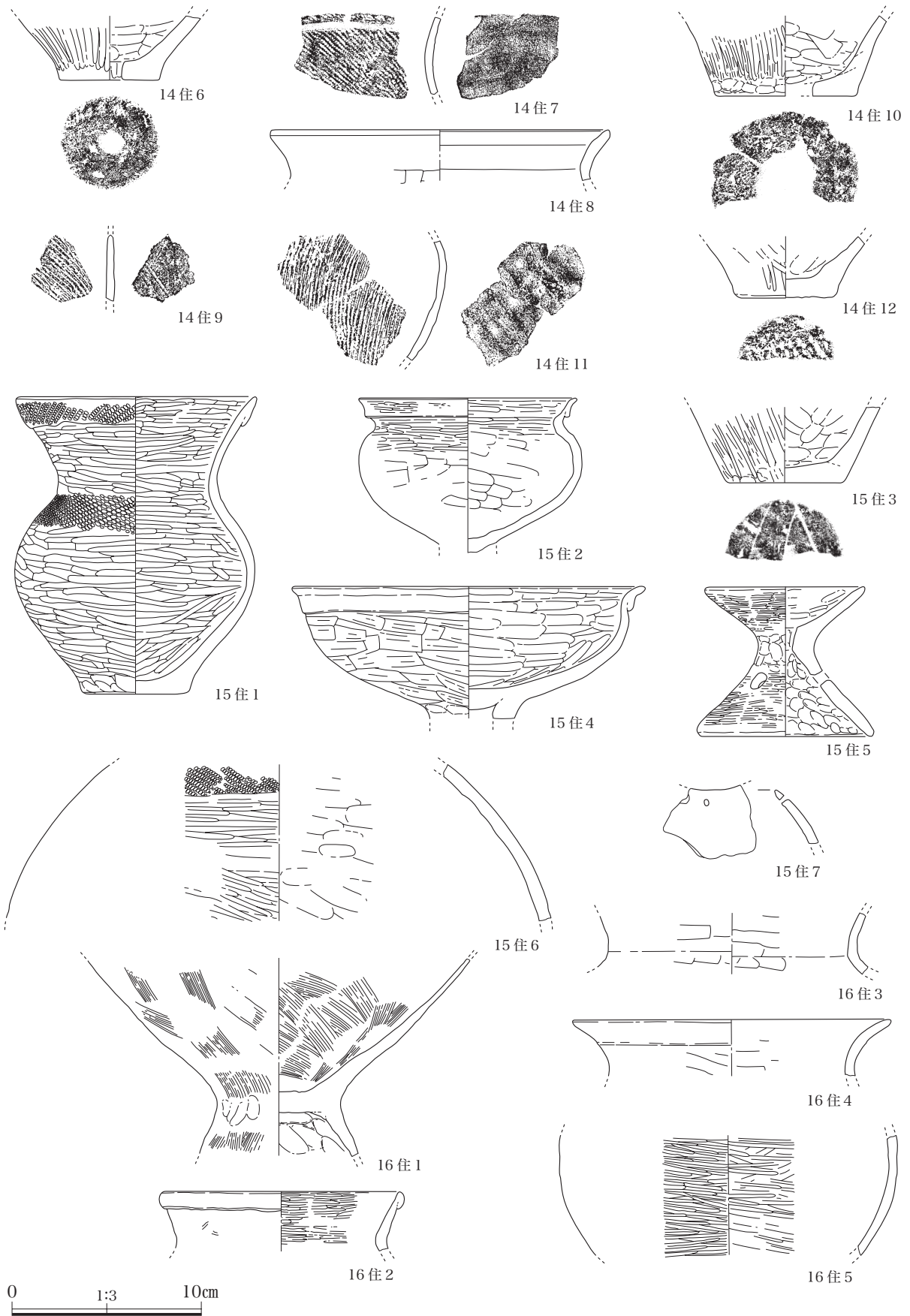


图50 古墳時代前期住居 出土土器(9)

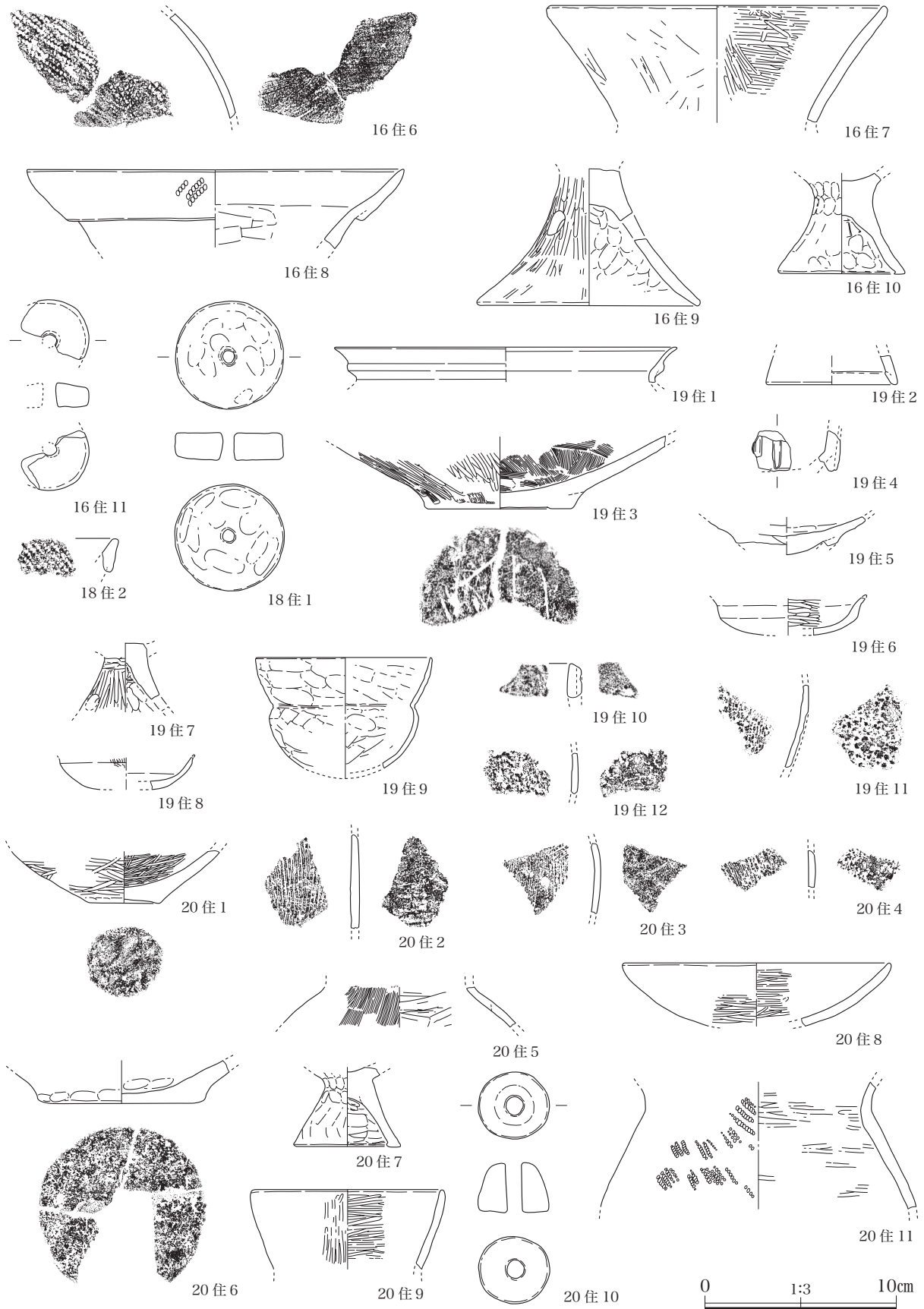


図 51 古墳時代前期住居 出土土器 (10)

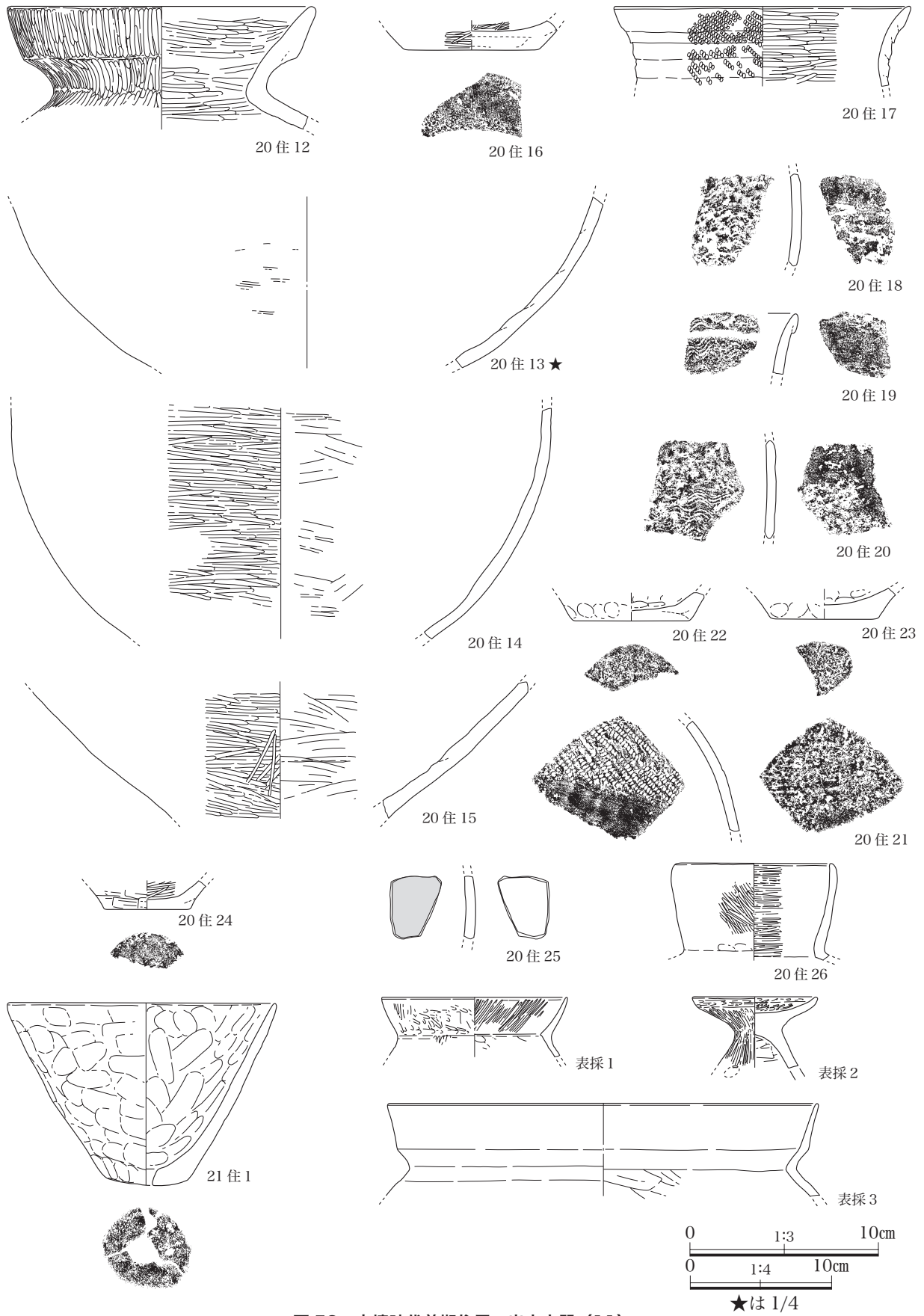


図52 古墳時代前期住居 出土土器(11)

第4章 調査報告2

成塚向山1号墳

- 1 調査前の状況
 - (1) 本調査直前の状況
 - (2) 太田市教育委員会による試掘の成果
- 2 墳丘・周堀の調査
 - (1) 規模・形状・外表施設に関する概要
 - (2) 調査着手時の状況
 - (3) 外表施設および墳丘裾部について
 - (4) 周堀の有無とその認定
 - (5) 墳丘盛土の状況
 - (6) 搬入路の確認とその認定
 - (7) 堤状盛土および構築墓壇
 - (8) 墳丘・墳裾および盛土からの遺物出土状況
- 3 第1主体部の調査
 - (1) 第1主体部に関する概要
 - (2) 規模・構造・形状について
 - (3) 掘り方・被覆土の有無とその認定
 - (4) 粘土床について
 - (5) 副葬品の出土状況
- 4 第2主体部の調査
 - (1) 構造・規模・形状について
 - (2) 人歯の出土状況
 - (3) 副葬品の出土状況
- 5 墳丘盛土下の状況
 - (1) 墳丘盛土下地表面に関する概要
 - (2) 墳丘盛土下地表面の状況
 - (3) 浅間C軽石・20号住居・墳丘盛土の関係
 - (4) 遺物の出土状況
- 6 出土遺物について
 - (1) 鉄製品
 - (2) 銅鏃
 - (3) 重圈文鏡
 - (4) 玉製品
 - (5) 顔料
 - (6) 土師器

1 調査前の状況

(1) 本調査直前の状況

成塚向山1号墳は、八王子丘陵南端の支丘が南西方向に舌状に飛び出た部分、通称「八丁岡山」の頂部附近に位置する。この支丘の頂部は馬の背状の平坦面を呈しており、その最高地点はやや奥まった場所にあり、標高は約107mである。本墳はその最高標高地点に位置するのではなく、頂部平坦面が最も南西急斜面に接近する突端附近、標高約93mの地点にある。この地点は周辺の丘陵下低地との比高差が30m程あり、眼下に低地部を一望できる地点であり、逆に丘陵下低地よりこの支丘を見上げた際にも、本墳位置が最も高所と認識できる地点である。

本墳は、すでに太田市教育委員会による平成11年度調査によってその概要は確認されており、当事業団による平成15年8月の調査着手時においても周囲の地形に比べて、ほのかに高く、そこに墳丘があることは容易に認識できた(写真8)。



写真8 成塚向山1号墳の調査前状況(北東→)

発掘調査の着手以前に現地地形測量を実施したが、その結果、墳丘平面形は円形というよりも方形と理解できる形状を呈していた(図53)。ただし、このことが後世の削平によるものなのか、あるいは墳形自体を反映させたものなのかは現地地形測量平面図のみでは判断できなかった。なお、本墳は「上毛古墳総覧」記載漏れの古墳である。

(深澤)

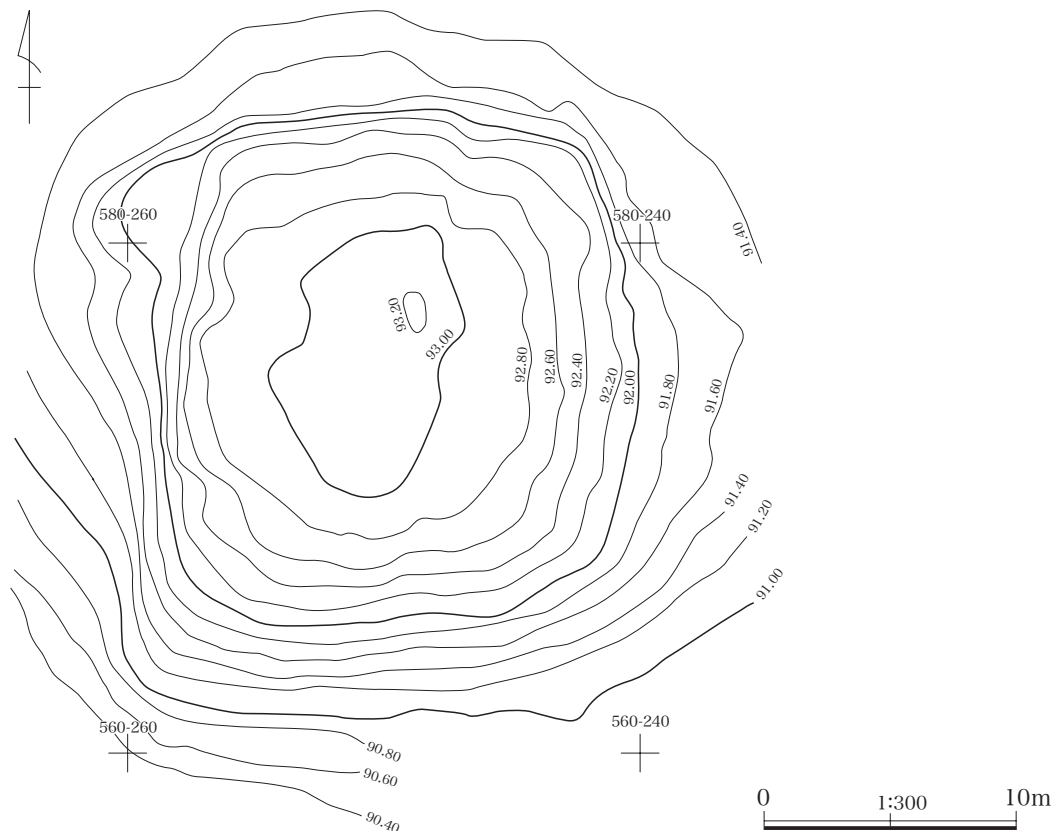


図53 調査着手前の現況地形図

(2) 太田市教育委員会による試掘の成果

本墳は、平成 11 年度に太田市教育委員会が実施した試掘調査によって、その概要が明らかになった古墳である。その調査報告については、太田市教育委員会編 2000『市内遺跡 XVI』（以下『平成 11 年度報告』、と略）にまとめられている。

今回の平成 15～16 年度の発掘調査報告に先立つ、『平成 11 年度報告』に基づく既知の調査内容・成果については次の通りである（図 54・写真 9）。

- (1) 本墳は、第 1、3～5 トレンチの調査所見から、径 21～22 m の楕円形を呈すると想定される。
- (2) 墳頂部の高さは後世の削平等を受けているものの、想定される立ち上がり部から計測すると 2 m は残存している。
- (3) 主体部については、今回の調査では検出されていないものの、トレンチ掘削深度より下層に粘土槲等が残存している可能性がある。
- (4) 墳丘部には埴輪は認められず、土師器を据えていたと考えられる。
- (5) 本墳より出土した古墳時代遺物は、墳丘部に置かれたものが、後に転落したものと考えられる。その遺物としては、土師器・有段口縁壺、

埴、器台、壺、綾杉状刺突文を有する小型壺等がある。

- (6) 墳丘盛土中からは、本墳築造以前の遺物が出土している。その遺物としては、縄文時代前期前半関山式の深鉢片、弥生時代中期後半の壺片、弥生時代後期（～古墳時代初頭）・吉ヶ谷式（式系）の甕片などがある。

- (7) 本墳の築造時期については、出土土器の年代と、築造場所が丘陵突端部であるという占地状況、及び主体部に横穴式石室を有しない点から、4 世紀中頃との位置づけが考えられる。（深澤）



写真 9 平成 11 年度調査前現況（太田市提供）

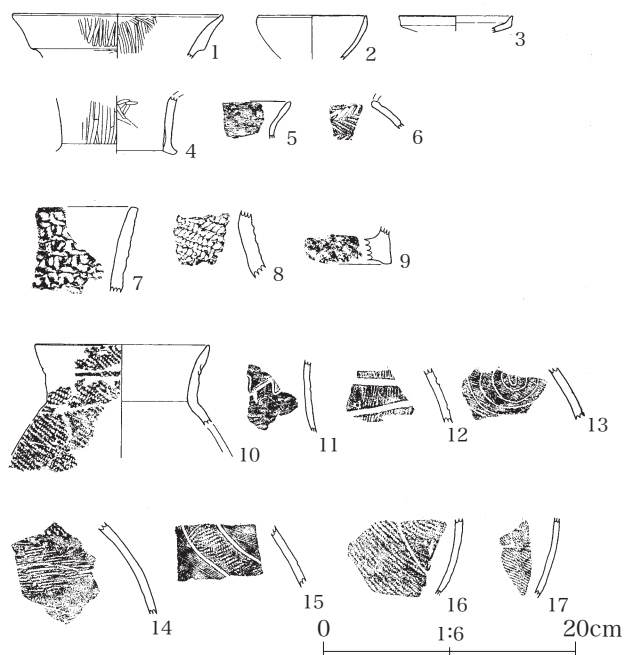
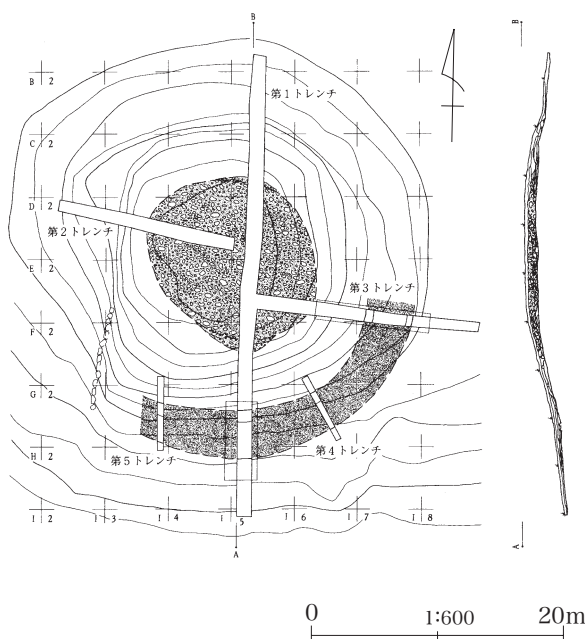


図 54 平成 11 年度調査時／平・断面図（左）および出土遺物図（右）（太田市 2000）

2 墳丘・周堀の調査

(1) 規模・形状・外表施設に関する概要 (図55)

本墳は一辺21mの方墳である。古墳の主軸はN-3°-Wであり、墳丘高は最高で約2.5mを計る。葺石が存在せず、明確な周堀も伴わない。(深澤)

(2) 調査着手時の状況

本墳は、明らかに後世の所作と考えられる石垣列などを除去した状態で墳丘測量をした結果、方墳と認識できた。墳丘の一部(西斜面と東斜面のそれぞれ一部)は後世の削平を受けていたが、形状認識に

は概ね良好な残存状況といえた。(深澤)

(3) 外表施設および墳丘裾部について

葺石の有無 墳丘には葺石と想定できる礫は全く存在せず、加えて、墳丘裾部付近にも葺石と思われる崩落石は認められなかった。よって、古墳築造時には葺石は存在していなかったと考えた。

テラス・墳頂平坦面の有無 墳丘斜面部は緩やかな傾斜を呈しているが、その中途にはテラス面は認められなかった。一方、墳丘頂部は、一辺約10mの方形範囲が比較的平坦化しており、築造時の状態を反映したものと考えた。

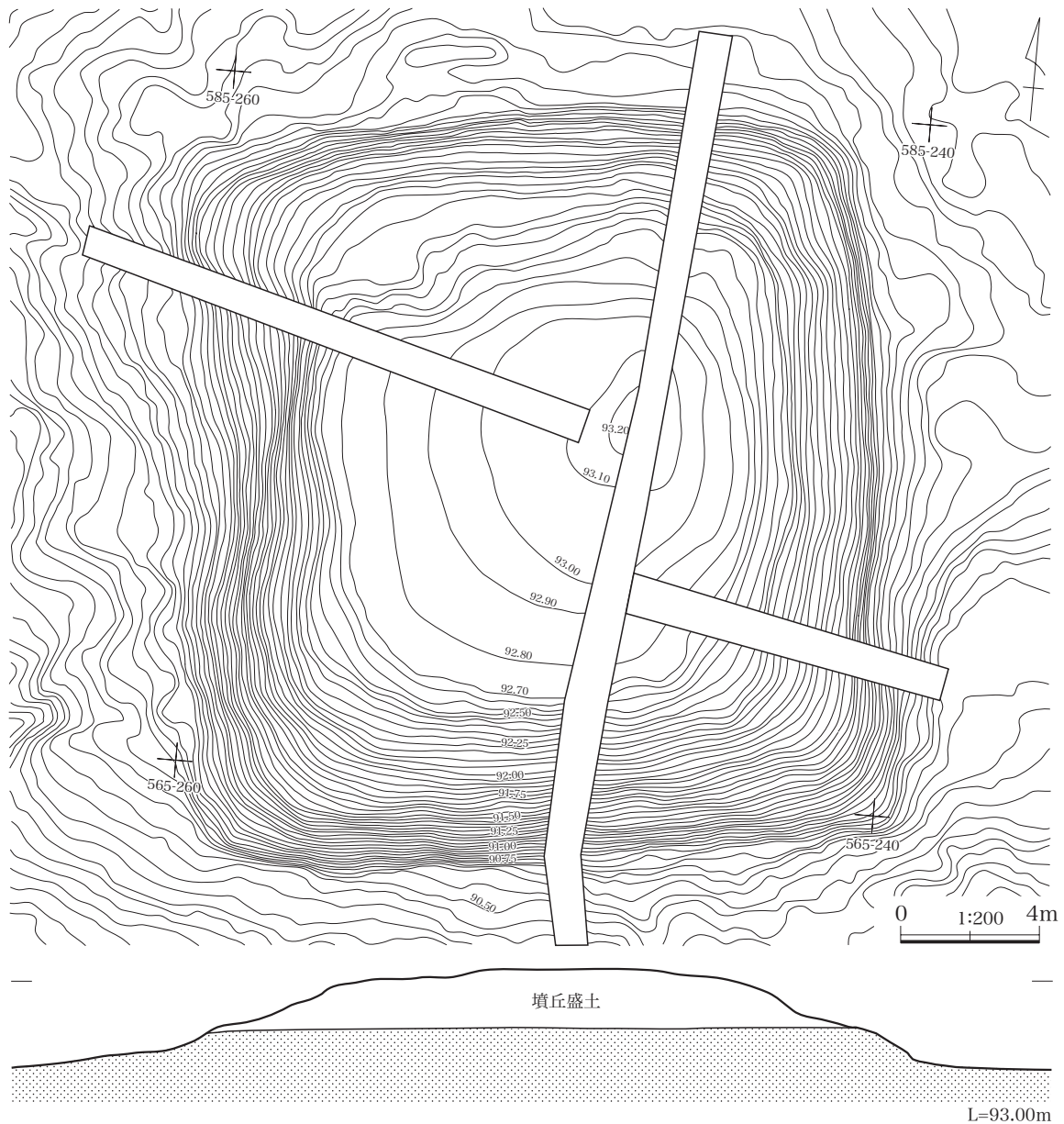


図55 墳丘 平・断面図

墳丘裾部の確認とその認定 本墳の場合、葺石が存在しないため、墳丘の裾部の認定が容易でなかった。現況地形図（図53）において概ね一辺20mと想定できたが、正確な墳丘規模を知るためには、これだけでは不十分だった。そこで、墳丘裾部を認定する手段として、墳丘裾部と想定される範囲にトレンチを設定し、墳丘の断割を行った（図57）。

各トレンチの断面を観察すると、ほぼ全ての断面で、地山である「黒色土（IX層）」「褐色粘質土（XI層）」「チャート・凝灰岩層（XII～XIII層）」が連続して削られている土層ラインを確認できた（※本文中のローマ数字表記の層名は基本土層を示す）。さらに、その土層ライン（カット面）は墳丘盛土と同質土で覆われていることから、この土層ラインを墳丘位置と想定した。また、そのラインには下方部で斜度を変化させ、土層ラインが屈曲している箇所（図56の★位置）が存在することが判明した。そして、この屈曲箇所が、明らかな後世の削平を受けているところ以外では、ほぼ直線的に確認できることから、この箇所を墳丘裾部と想定した。

北辺の認定 北辺については、6箇所のサブトレンチ（A～Fトレンチ）を設定して、その確認を行った。A～Eトレンチについては、いずれも、凝灰岩層（XIII層）にいたり、土層ラインの屈曲点が認められ、5箇所の屈曲点がほぼ直線上に並ぶことから、この位置を墳丘北辺裾部と認定した。なお、Fトレンチについては、屈曲点が想定する北辺墳裾ラインより内側に0.8mほど入り込んでいるが、これについては削平されたものと考えた。

東辺の認定 東辺については、6箇所のサブトレンチ（G～Lトレンチ）を設定して、その確認を行った。G～Jトレンチについては褐色粘質土層（XI層）中で、また、Kトレンチでは、凝灰岩層（XIII層）にいたり、土層ラインの屈曲点それぞれ認められた。そして、これらの5箇所の屈曲点がほぼ直線上に並ぶことから、この位置を墳丘東辺裾部と認定した。なお、Lトレンチについては、盛土と地山の境界点については他の5箇所のトレンチとの連続性が認め

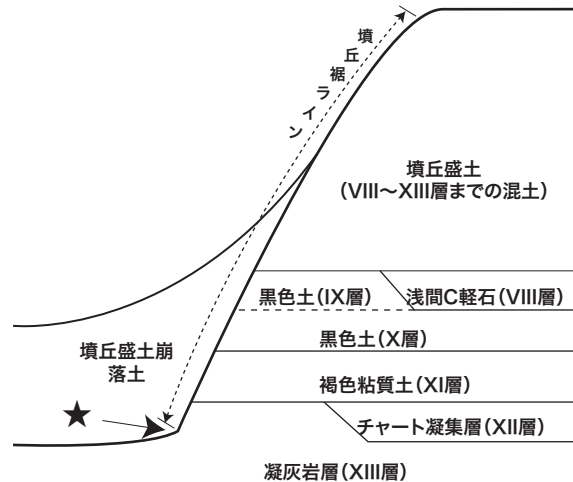


図56 墳丘盛土構造模式図

られたが、屈曲点の位置については不明瞭であった。この不明瞭さの原因については、後世の削平等が影響したものと解釈した。

南辺の認定 南辺については、6箇所のサブトレンチ（M～Rトレンチ）を設定して、その確認を行った。Mトレンチでは褐色粘質土層（XI層）中で、N～Rトレンチでは凝灰岩層（XIII層）にいたり、土層ラインの屈曲点がそれぞれ認められた。そして、これらの6箇所の屈曲点がほぼ直線上に並ぶことから、この位置を墳丘東辺裾部と認定した。

西辺の認定 西辺については、4箇所のサブトレンチ（S～Vトレンチ）を設定して、その確認を行った（なお、西辺については、その北半の大部分が大きく削平されたことから、他辺より設定トレンチの数が少なくなっている）。Vトレンチについては褐色粘質土層（基本土層XI層）中において、Sトレンチでは、凝灰岩層（XIII層）中において、土層ラインの屈曲点がそれぞれ認められた。

この2点の屈曲点を結ぶラインを西辺裾部と想定した。T・Uトレンチについては、ともに褐色粘質土層（XI層）中で屈曲点が見いだされたが、この2つのトレンチの位置は後世の削平域内であり、加えて、その屈曲点が想定する西辺裾ラインよりも、0.7～1.0mも内側に存在することから、本来の墳裾を示す屈曲点ではないと判断した。（深澤）

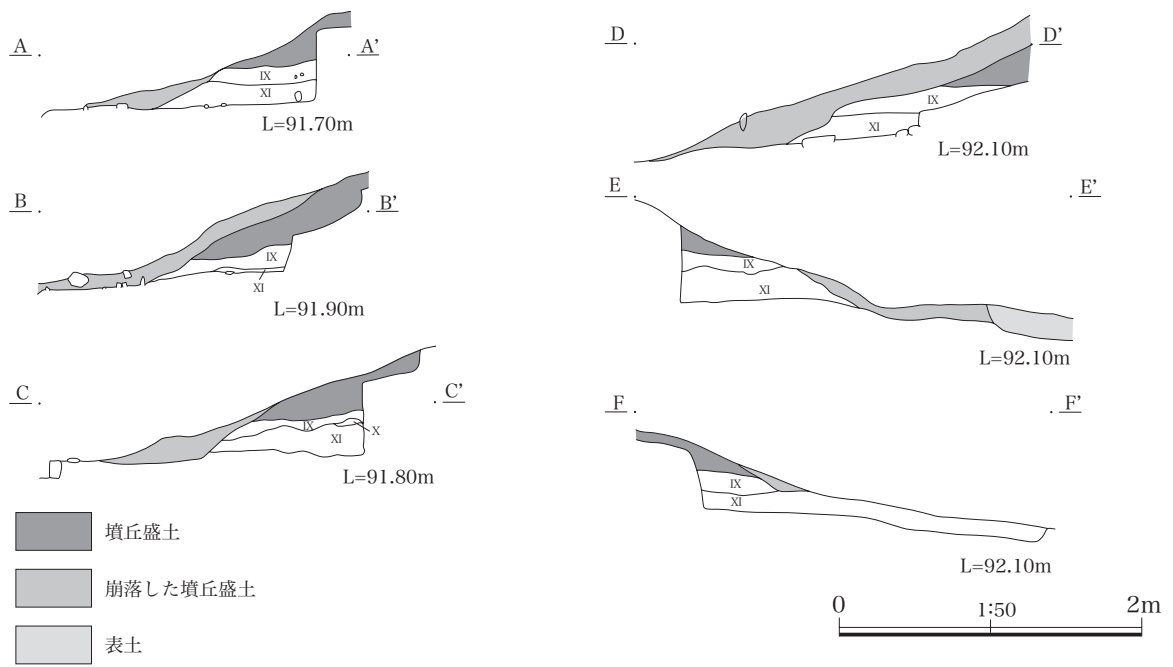
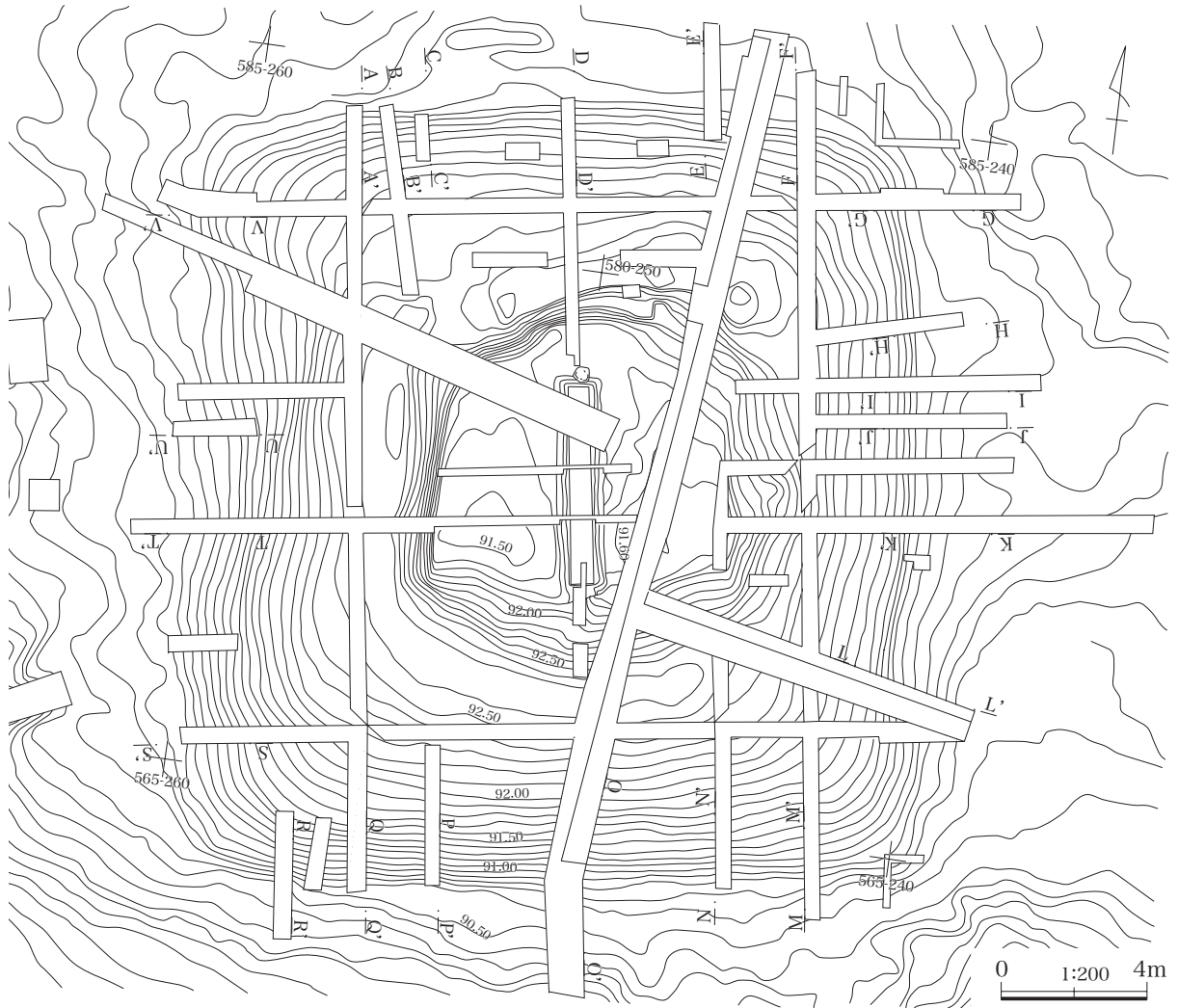


図57 墳裾確認トレンチ 平・断面図(1)

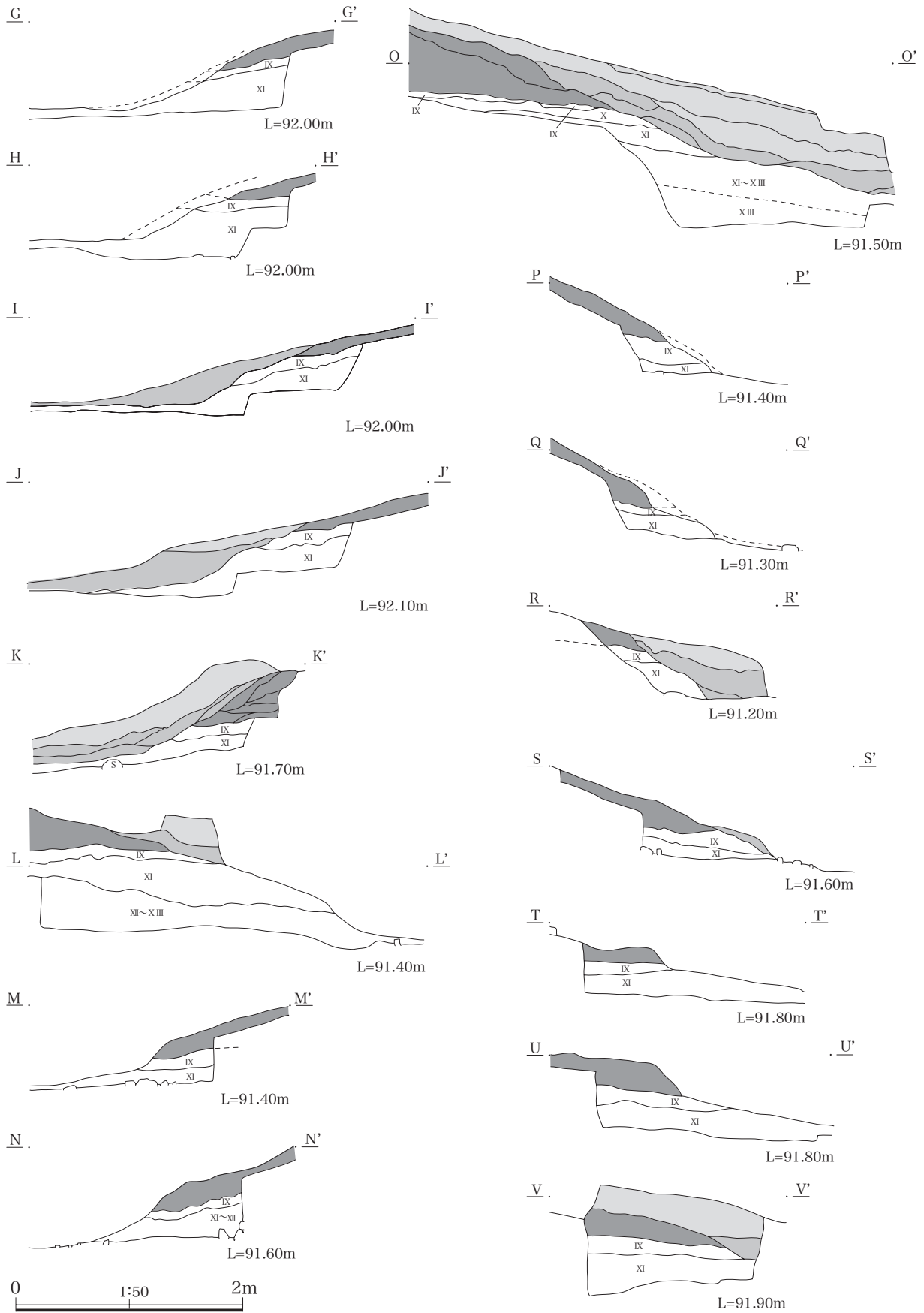


図 58 墳裾確認トレンチ 平・断面図 (2)

(4) 周堀の有無とその認定

本墳の場合、明確な周堀は存在しない。

以下、その認定のための調査内容を示す。

現地地形からの確認 墳丘裾部の想定位置が判明した後、その周囲に存在が予想される周堀に関しては、現地形での変化を確認した。しかし、そこから読み取れるような周堀状の凹みは存在しなかった。

トレンチによる確認 確認用トレンチ（周堀確認トレンチ）を墳丘周囲に任意に13箇所設置し、土層断面でから、周堀の有無確認を計った。

墳丘裾部から周辺部への土層が連続的に観察可能な6つのトレンチ（a～fトレンチ）および墳裾に隣接するトレンチ（gトレンチ）では、I・II層下においてはVII～X層がほとんど存在せず、墳丘崩落土やXI～XIII層（「地山層」）が存在することが確認でき、とりわけXI～XIII層がI・II層に直接覆われている箇所が際立っていた。ところが、これ

らの「地山層」には、周堀に相当するような明確な凹みは存在しなかった。もちろん、辛うじてそれを想定しようと思える緩やかな凹地も存在している。しかし、こうした緩やかな凹地については、墳丘から3～12m離れた箇所に設置した6つのトレンチ（h～mトレンチ）における土層断面にも同様な凹地も存在することからして、明確な周堀を示すものとは言い難い。よって、これらのことから本墳には明確な周堀が存在しないと想定した。

盛土確保に起因する「地山層」の不在 ところで、これらの土層断面には、VII～X層がほとんど皆無に近いほど存在しない。このことは、墳丘盛土にVII～XI層が多量に利用されていること（詳細は後述）と関係する状況であり、おそらく盛土確保のためにこれらの層の土壌が掘削されたものと考えられる。そして、その際に部分的にはXIIまたはXIII層の深度まで掘削されたのだと想定できる。（深澤）

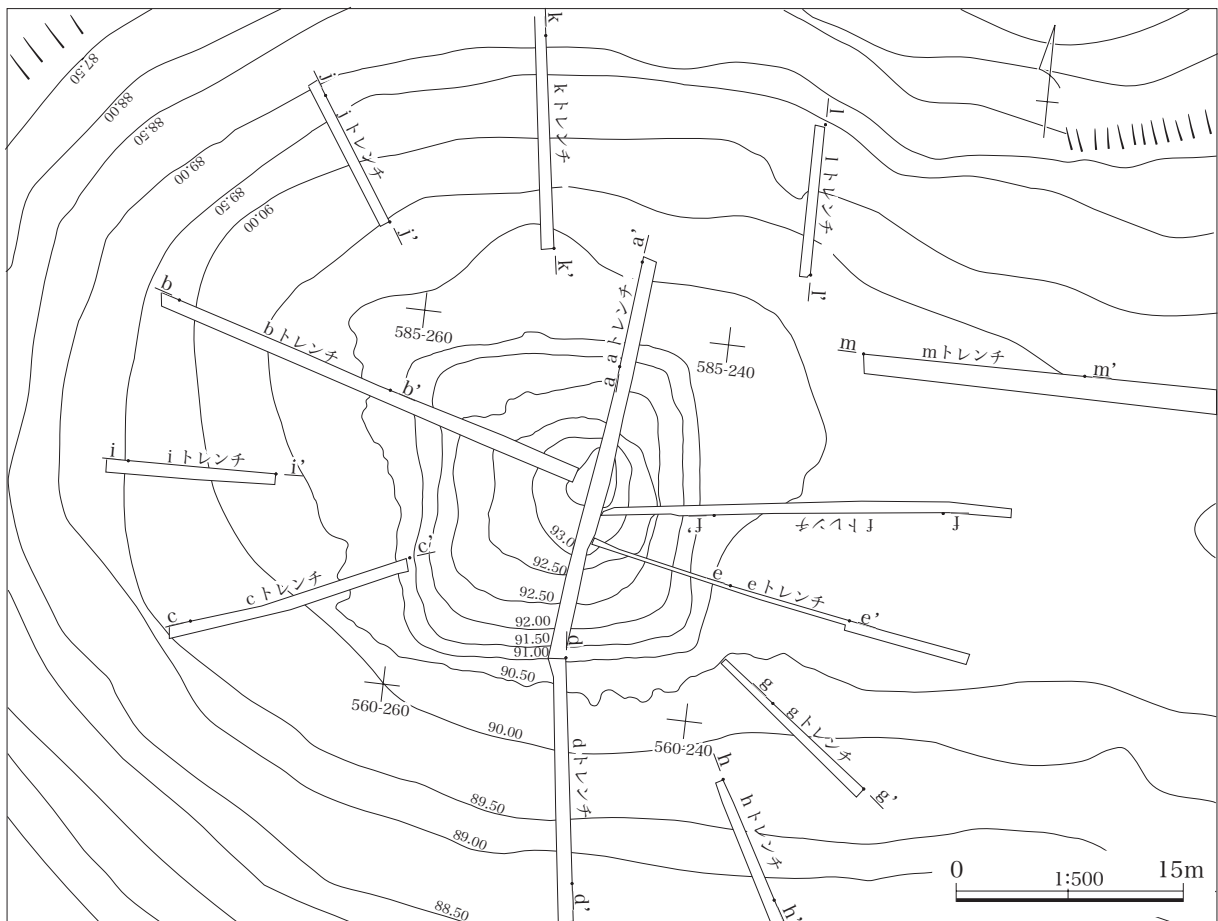


図59 周堀確認トレンチ 配置図

2 墳丘・周堀の調査

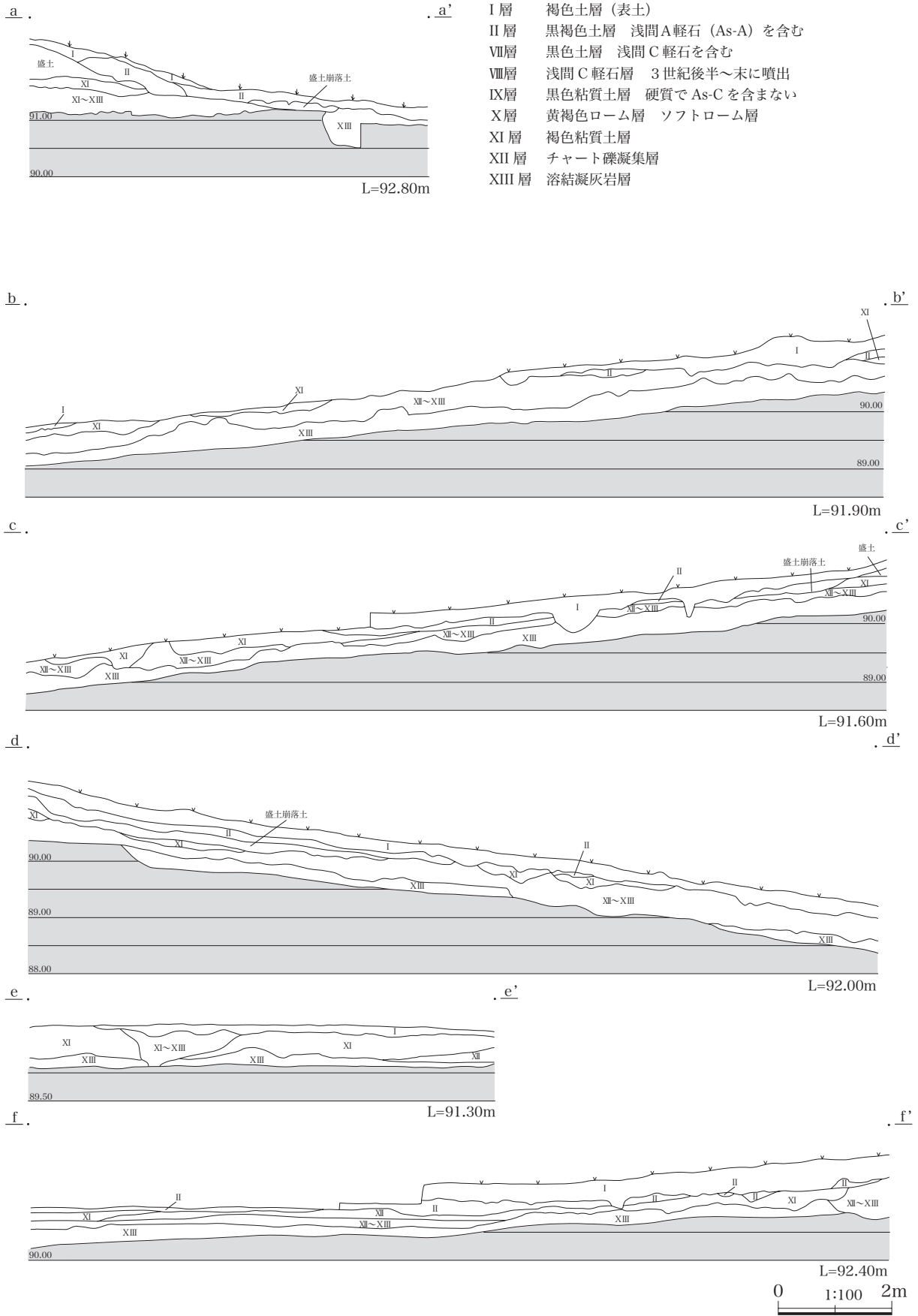


図 60 周堀確認トレンチ 断面図（1）

第4章 調査報告2

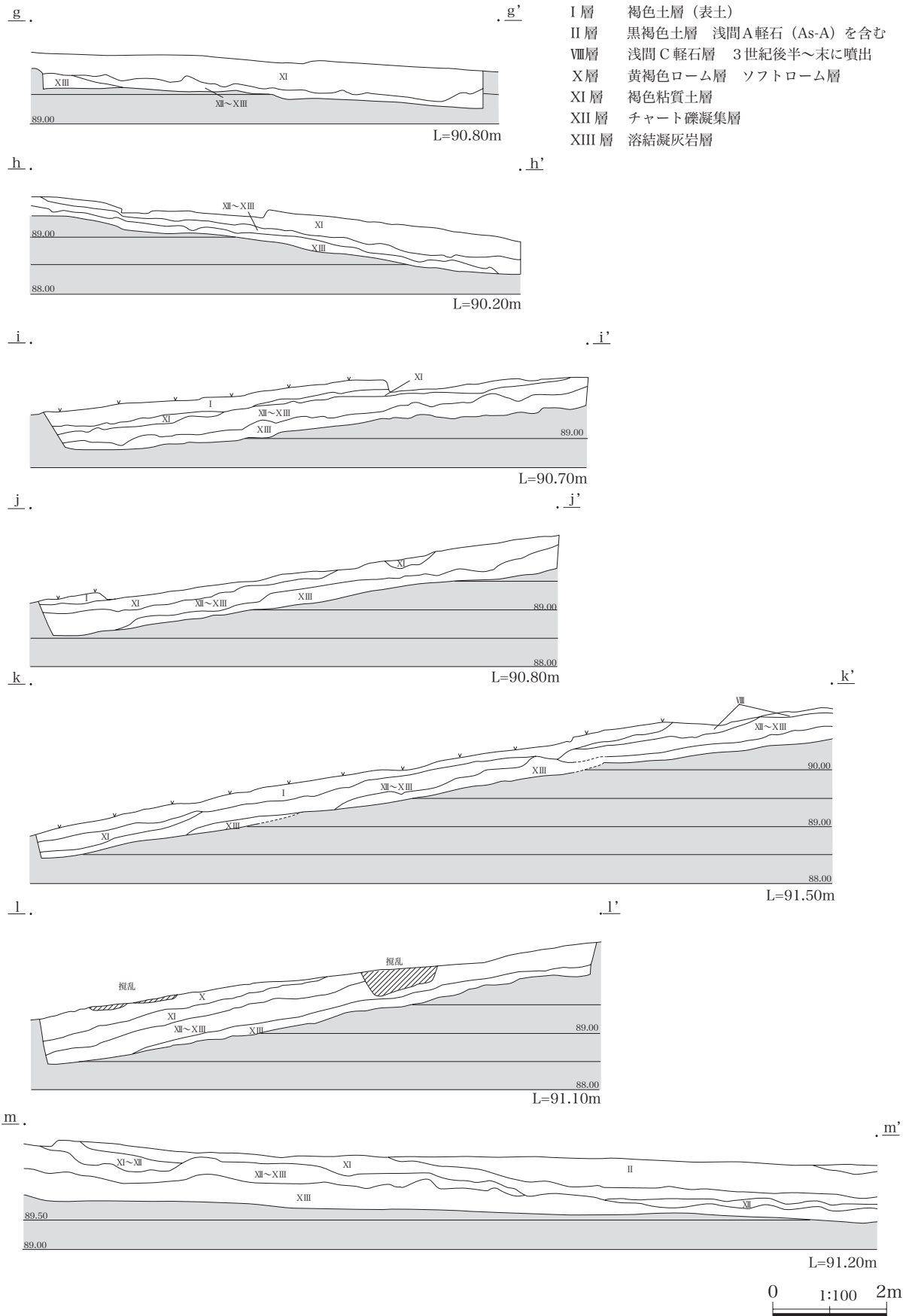


図61 周堀確認トレンチ 断面図(2)

(5) 墳丘盛土の状況

本墳では、墳丘構築状況を把握するために墳丘の断割調査を実施し、盛土構造の把握を行った。第1主体部の主軸方向を基準とし、南北方向に3箇所、東西方向に4箇所設置し、盛土の状況を確認した。

その結果、盛土は所謂「構築墓壙」を形成して形作られており、その形成に際して場所毎に土質の傾向が異なる事も明らかになった。

盛土の種類 「にぶい褐色土」「黄褐色土」「黒色土」「褐色・白色粘土」に概ね4つに分離でき、さらに含有物やしまり方（土質の硬軟具合）の差違によって、12細部できる。いずれも、丘陵を形成する地山の表層部に存在する種類の土であることから、周

囲の地山を掘削して、盛土としたことが考えられる。

盛土の単位 一単位の層厚は2～40cmと、様々である。しかし、いずれもラミナ状の単位での堆積状況が観察でき、所謂「土嚢積み」と思われる堆積状況は認められない。

盛土の質 盛土は構築墓壙を形成する箇所（後述「M-5層」）および墳丘表層土（後述「M-1層」）は硬質土を主体に使用している。一方で、構築墓壙内への充填土（後述「M-2～M-4」）は軟質土を主体に使用している。なお、棺床には灰白色粘土を用いている。このように、土質の差異を盛土形成に際して意識し、区別利用していることは確実である。 (深澤)

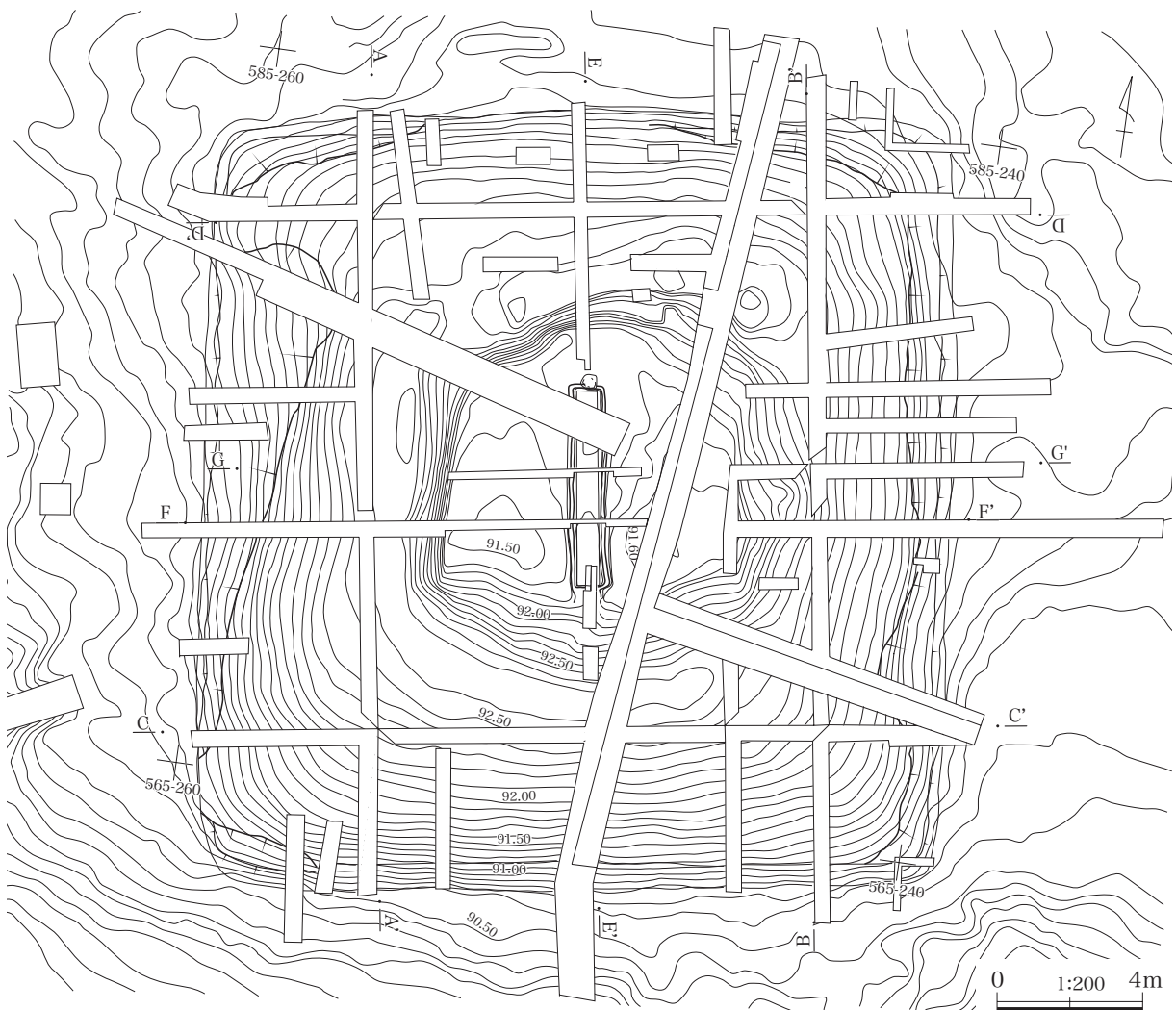


図 62 墳丘断割ライン平面位置図

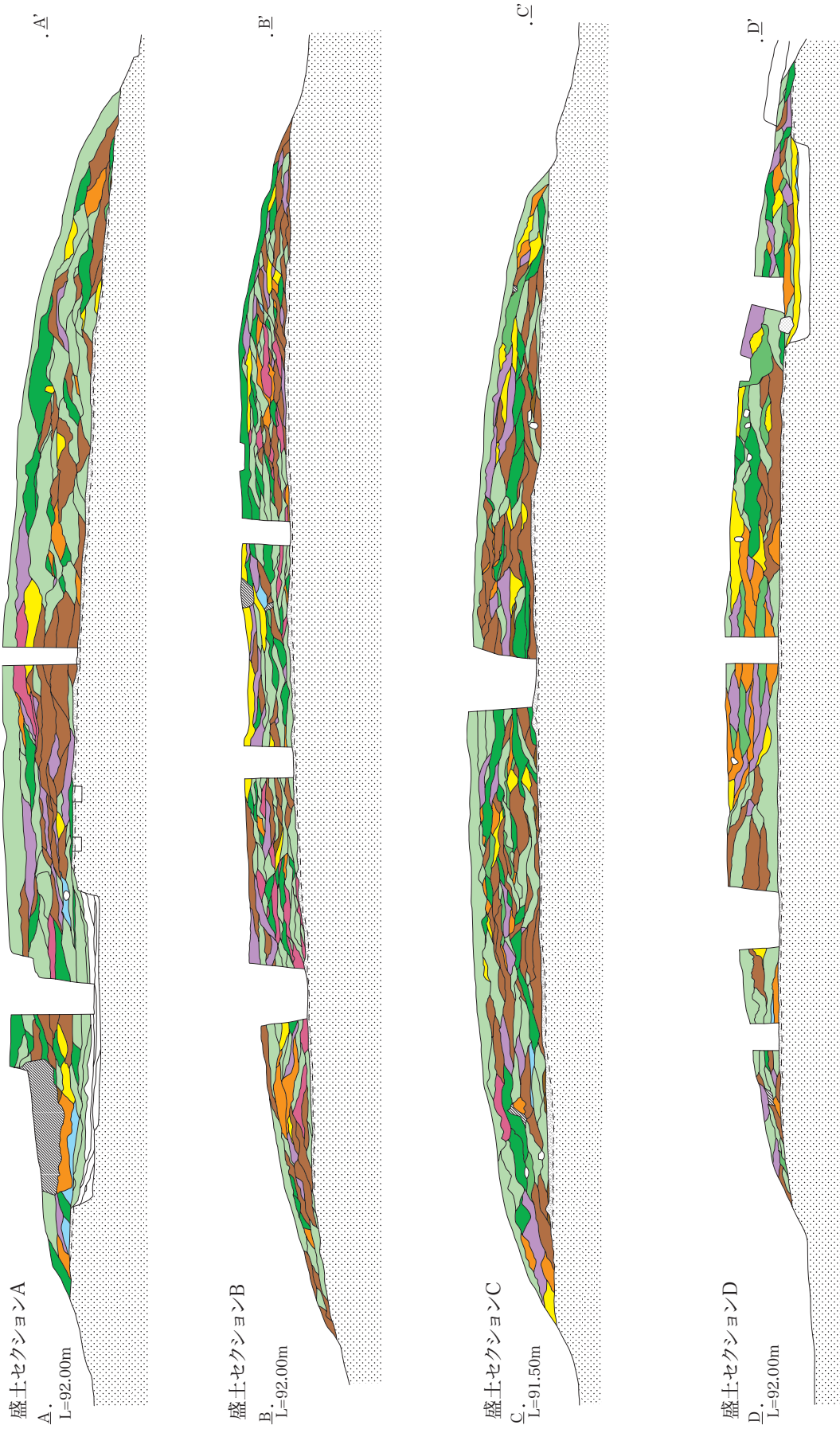


図63 墳丘盛土 断面図(1)

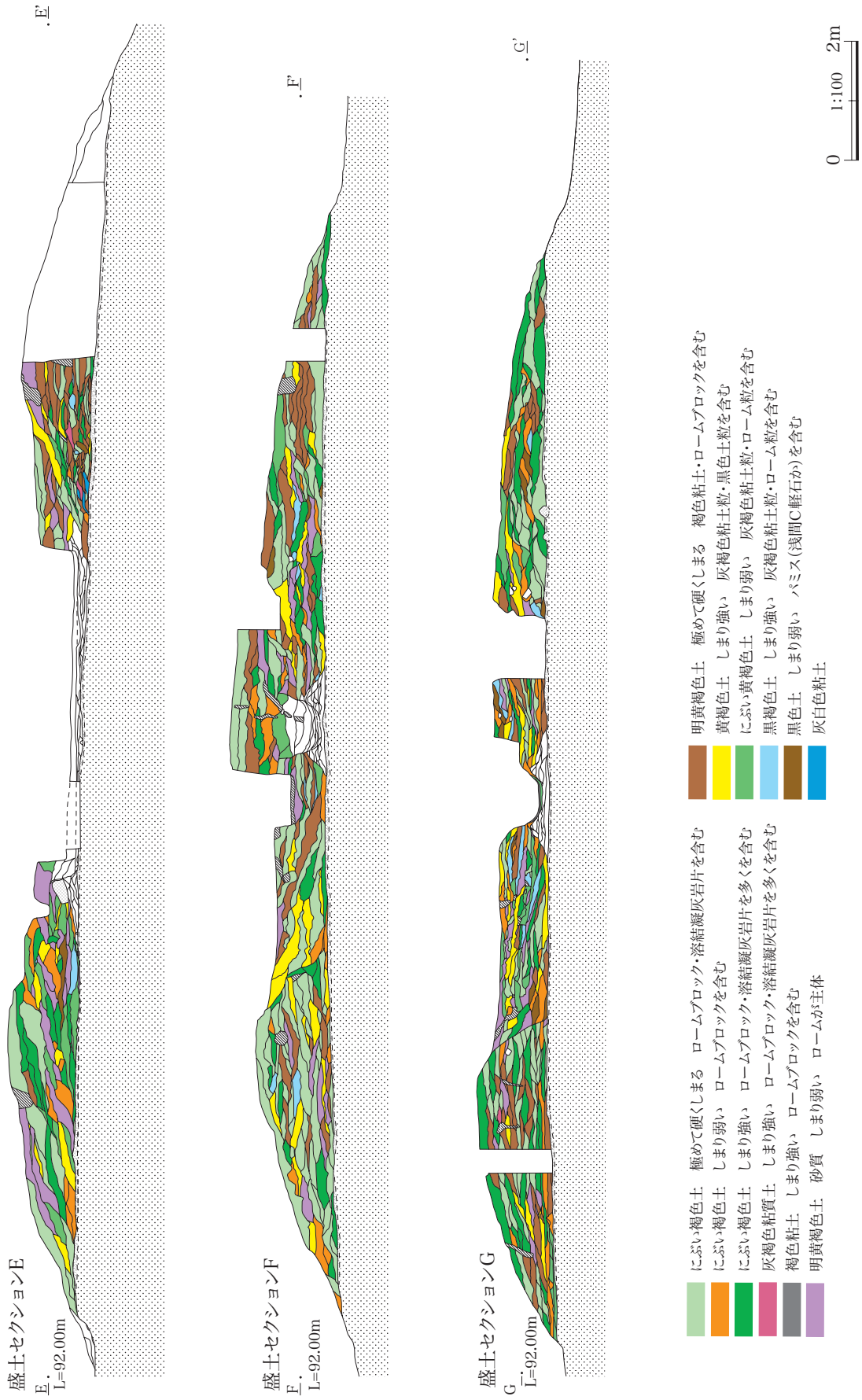


図 64 墳丘盛土 断面図 (2)

(6) 搬入路の確認とその認定

本墳では、構築墓壇の一部、北側に切り通し状の遺構を検出した。そして、これをその位置と形状から「(棺の) 搬入路」と認定した。以下に、それについて述べる。

墳丘表面の状況 搬入路は墳丘完成時には完全に埋められており、完成時の墳丘表面においてはその存在は確認できない状態にある。

搬入路の認定 土手状盛土を形成する土(M-5層)は、褐色粘質土が主である。この土は極めが細かく、水分を含むと粘性の強い土質を呈するが、乾燥するとブロックのように硬くなる性格を有する。一方で、土手状盛土内に設置された第1主体部(木棺)の直接の埋土(M-3層)は比較的軟質のロームや褐色土である。この相違が明確になっている中で、ドーナツ状を呈する土手状盛土形成土(M-5層)が認められない箇所を検出された。そして、その箇所が通路状に、土手状盛土の内側から墳丘北辺中央付近に連続していることから、これを構築墓壇内と墳丘外部とを連結する通路であると認定した。

規模・形状 長さ6.50m、幅3.00～3.40mを

呈する。通路の走行方向は墳丘主軸とほぼ同じく、南北方向に走行する。搬入路の底面は墳丘盛土直下の平坦面に連続するが、その間層には粘土層が存在する。なお、盛土セクションD(図63)における盛土の断面を見る限り、搬入路の設置に際しては盛土を一部削平して側面を整形していることが判る。

覆土の状況 搬入路の覆土は褐色粘質土が主体である。その土質は、大局的には中～下位層については軟質土が多く、上位層については高質土が多く認められた。また、墳丘主軸部分の南北方向のセクションA(図66)においては、土層堆積のラインが南に向かって上がっていることから埋土が外側から内側に向かって行われたことが判る。こうした埋土の堆積ラインからは墳丘外部から内部に向かって埋土が行われたことが理解できる。

遺物の出土状況 底面からは土器が出土したが大半は細片となつての出土であつた。このうち、器台(118)と高坏(21)については接合率が高く、この場で破碎された可能性が高い。なお、細片も含めて、器種としては、器台や高坏などの、小型の供献器種が多い。(深澤)

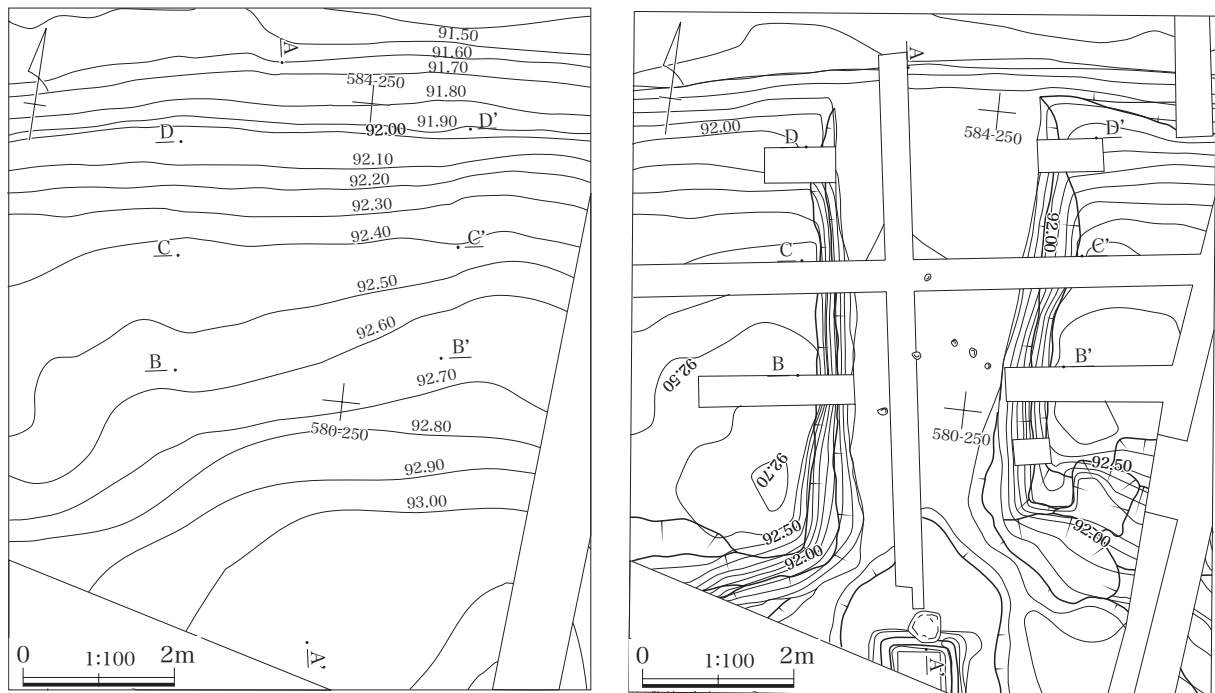


図65 搬入路 検出前(左)・検出時(右) 平面図

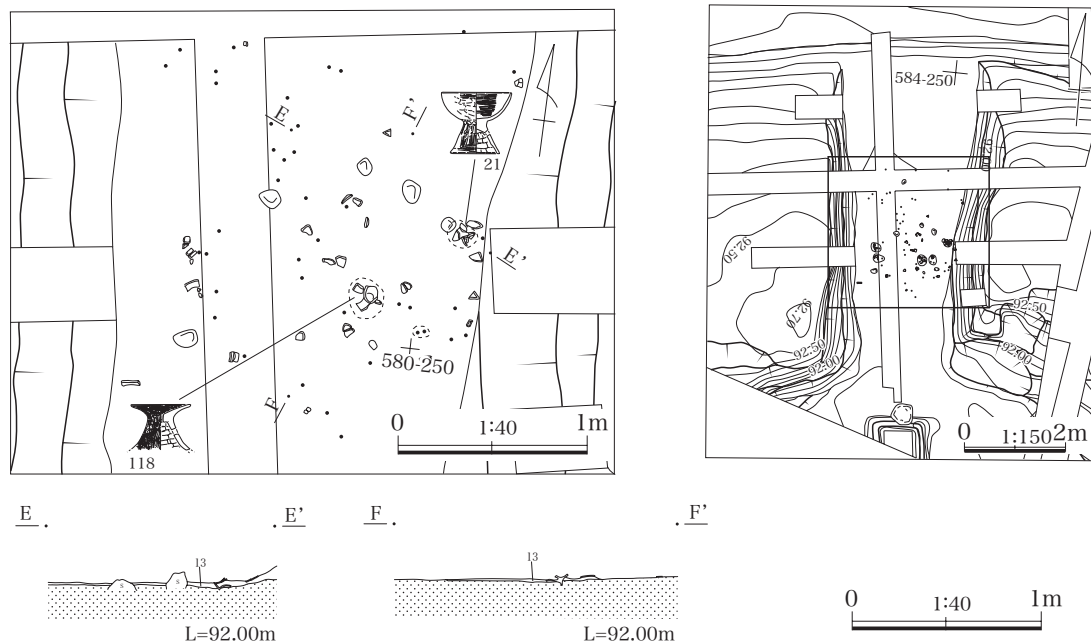
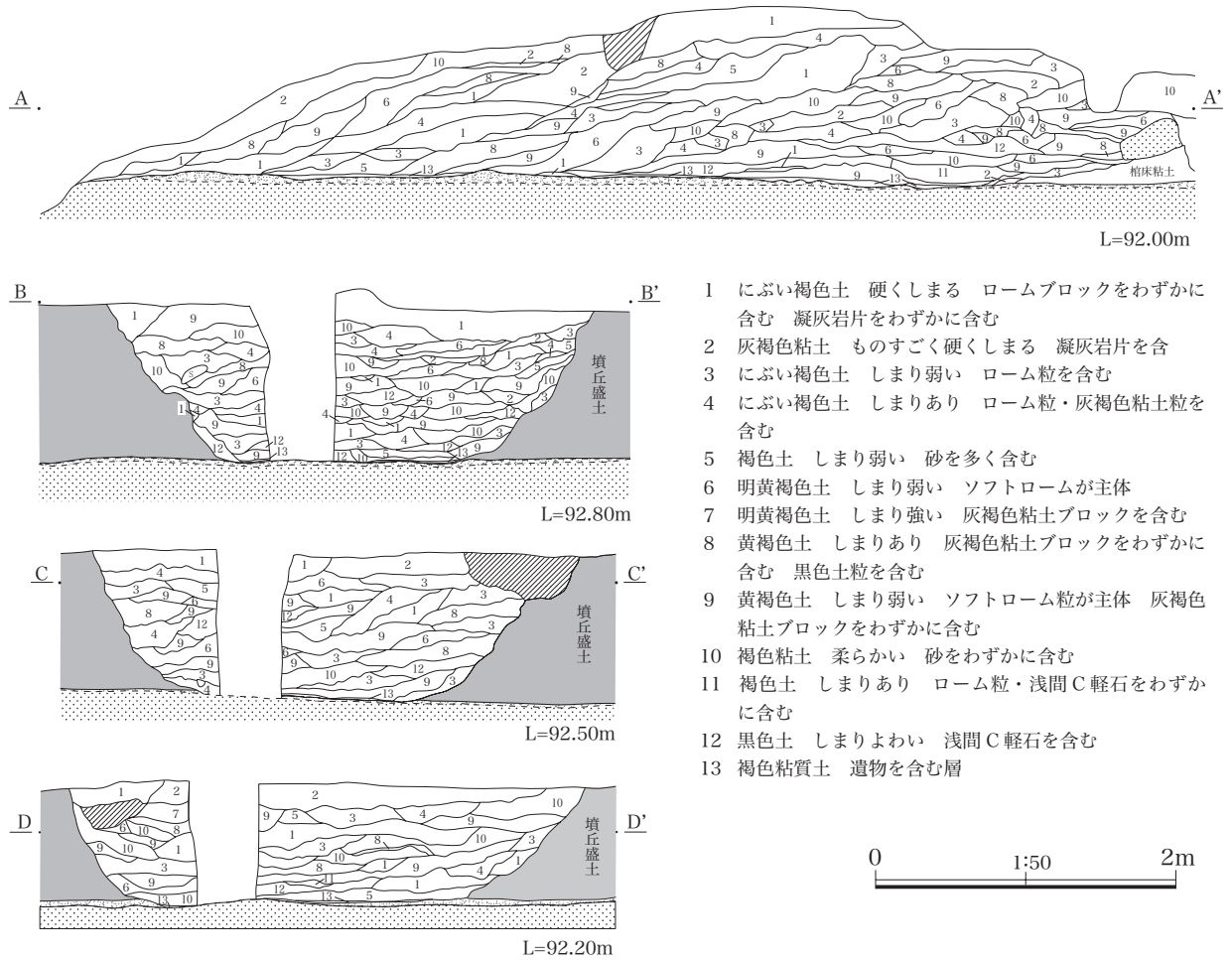


図66 搬入路 閉塞土 断面図(上)・遺物出土状況 平・断面図(下)

(7) 堤状盛土および構築墓壇

墳丘盛土断面の状況から、本墳には堤状盛土とそれによって形成された構築墓壇の存在が判明した。

堤状盛土の形状・規模 平面形状は、方形のドーナツ状を呈する。搬入路がある北側中央部は一部が断絶するが、それ以外の部分は四方を囲むように盛土が形成されている。平面規模は外縁部の南北辺が19.8～20.1 m、東西辺が19.1～20.0 m、内縁部の南北辺の南北辺が5.5～5.6 m、東西辺が6.8～7.9 m、また、堤の幅は5.8～6.6 mをそれぞれ計る。

断面形状は、山形を呈するが、外縁部に沿う斜面は比較的緩斜面を呈し、内縁部に沿う斜面は急斜面を呈する。堤の残存高は最大1.5 mを計る。

堤状盛土の構造的特徴 盛土は強い粘性と硬くしまりをもった粘質土を主体に用い、あたかも堅牢な方形土手を形作っている状況にあった。その盛土は版築ではないものの、層厚2～10㎍程度の単位の土を幾重にも重ね合わせている。なお、土嚢を用いた痕跡は認められなかった。

構築墓壇の形状・規模 構築墓壇は堤状盛土の内縁部の形状・規模と一致する。平面形状はやや丸みをもった不整の方形であり、その規模は南北辺長約7.5 m、東西辺長約8.1 mを計る。

構築墓壇の構造的特徴 構築墓壇はその底面が旧地表面と一致しており、わずかな掘り込みも認められない。
(深澤)

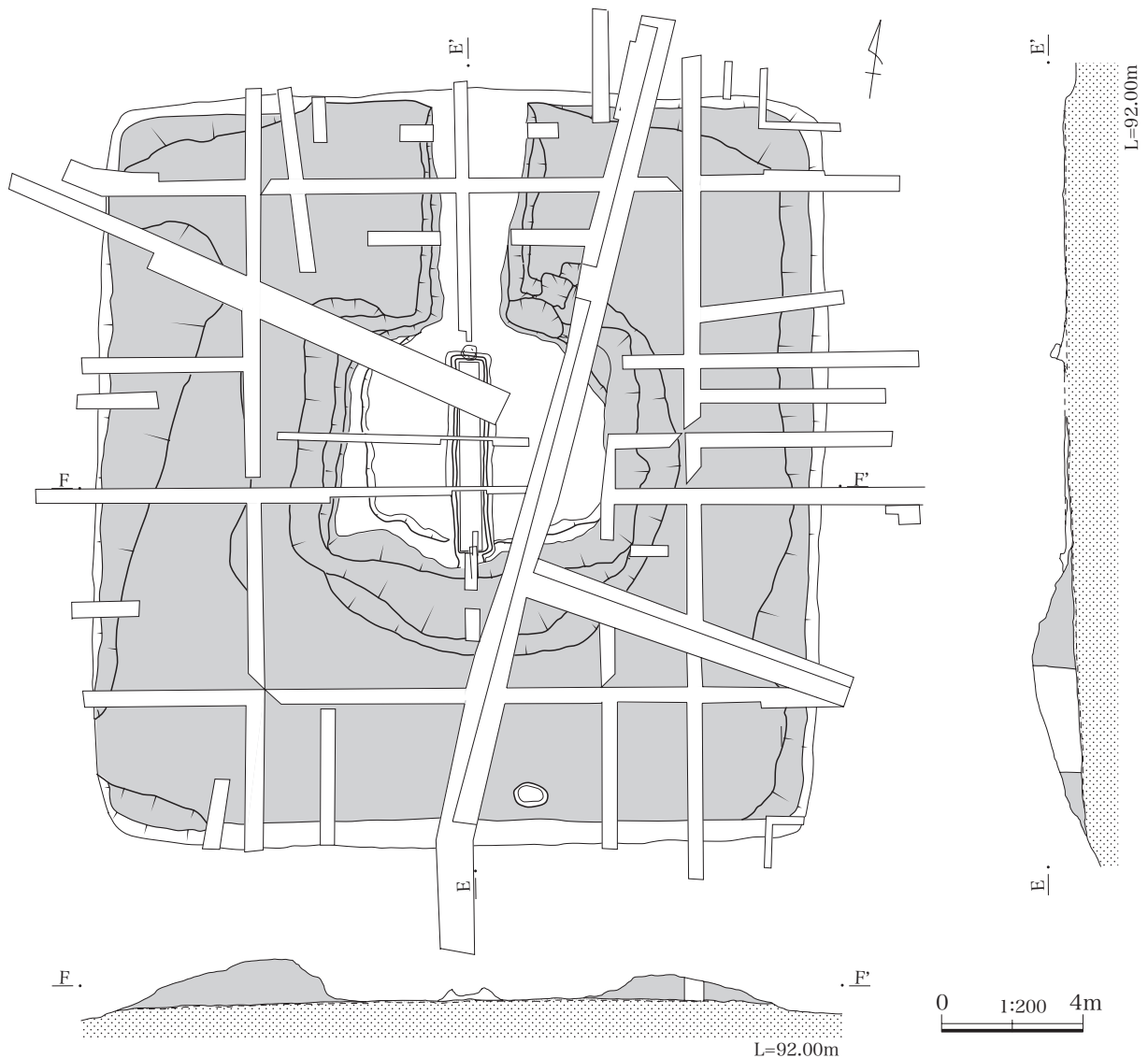


図 67 構築墓壇 平・断面図

(8) 墳丘・墳裾および盛土からの遺物出土状況

本墳の場合、墳丘・墳裾および盛土から多くの遺物が出土している。その総量は、200kgを超える。これらの中には、土師器のほか、旧石器・縄文・弥生時代の各石器・土器も多数含まれているが、これらについては第6章で別途報告することとする。

ここでは、古墳時代前期の土器のみについて中心に報告する。

出土層位の分離 本墳は墳丘盛土に関して解体調査を実施しており、構築工程がおおよそ判明している。そして、それぞれ盛土の質が異なることから、層位の分離が可能となり、遺物の出土層位分離が大半のものについて実現した。ここでは、その分離した層位について、まずは墳丘盛土について述べる。

M1層は墳頂平坦部において、表面（調査時）に露出した層である。約5cmの深度までをそれと見なした。この層は、厳密な意味では、古墳築造時に露出していたとは断定できないもののそれに最も近い層位として考えた。

M2およびM3層は第1主体部への埋葬後の埋土の層である。この2つの層については連続する層であり、その分離はM1層直下約50cmについてM2層、それ以下（M4層まで）をM3層とした。

M4層は第1主体部設置時に露出していた面の層である。後述する7層とは一連の層とみなすことができ、ともに浅間C軽石を多量に含んでいる。

M5層は土手状盛り土を形作る土の層である。

本墳の盛土行為初期段階に盛られた土である。なお、M5層の表面土はM1層との区分が困難であるが、墳頂平坦面の範囲（→M1層）と墳丘傾斜面の範囲（→M5層）の基準で両者を区分した。

M6層は搬入路を閉塞した土の層のうちM4層や7層に接する最下層の粘質土である。

M7層は搬入路を閉塞した土

M8層第1主体部粘土床に用いた粘土層である。次に、盛土以外の分離層位について述べる。

1層は墳丘の周囲に堆積した土のうち、表面に露出した層（表土）である。

2層は、1層と同じく墳丘の周囲に堆積した土であるが、1層の下層にあたる。1層との分離は榛名山起源のテフラを含むことで認識した。

3層も、1・2層と同じく墳丘の周囲に堆積した土であるが、2層の下層にあたる。本層は墳丘盛土（特にM5層）の崩落土であり、このことを目安として分離を行った。

4層は、3層の下層にあたるが、浅間山起源のテフラを含む層であり、そのことで上下層との分離を行った。

5層は地山で、基本土層IX～XI層である。

6層も地山で基本土層XII～XIII層である。

7層は、古墳構築時の露出面に相当し、墳丘盛土範囲においてM4・M5層の直下に存在する層である。なお、前述したM4層とは一連の層とみなすことができ、ともに浅間C軽石を多量に含んでいる。

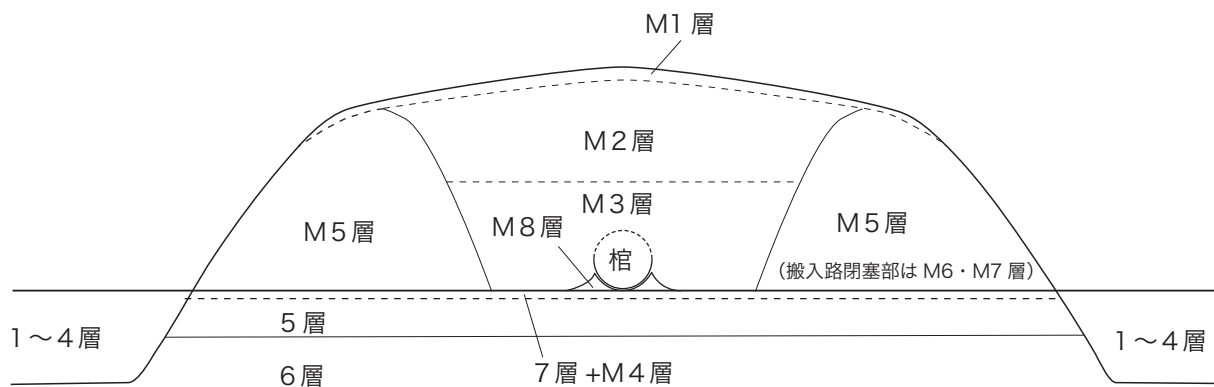


図 68 盛土および墳裾堆積土 土層分離模式図

墳丘上・墳裾からの遺物出土 (図69～71) 墳丘上からの出土は原位置でとらえられた資料は8点のみである。これに加えて、M1層の出土遺物も含めて、墳丘上からの出土遺物と考えることとする。

出土器種には、底部穿孔 or 二重口縁壺 (10・221～228・241～244)、折り返し口縁壺 (206～208)、壺 (241)、ヒサゴ壺 (119)、器台 or 小型高坏 (99・106)、小型埴 (24)、壺または甕の底部 (63・76) がある。

墳裾部からの出土は原位置でとらえられた資料は20点である。これに、1～4層の出土遺物も含め、墳裾からの出土遺物と考える。

出土器種には、底部穿孔壺および二重口縁壺破片 (3・229～240・245)、加飾壺 (261)、大型壺 (260)、

中型またはヒサゴ壺 (6・7・259)、無文、施甕 (12)、甕または壺の底部 (14・79～86)、小型器台 (111～115)、結合器台? (117)、小型埴 (145～147) がある。

遺物の集中は墳丘東裾の中央付近に2箇所 (墳裾エリア1・2) (図70)、南裾のやや東よりに1箇所 (墳裾エリア3) 認められる。このうち、墳裾エリア1では、平面規模が長軸1.65m×短軸0.65m、長方形プランを呈する、深さ0.20mの土坑 (落ち込み) を伴い、その内部から二重口縁壺 (3) の口縁部のみが破損した状態で出土している (なお、この二重口縁壺の胴部は墳丘盛土直下から出土している (詳細は115・116頁参照)。また、墳裾エリア2では、複数器種が破砕された状態で出土している。

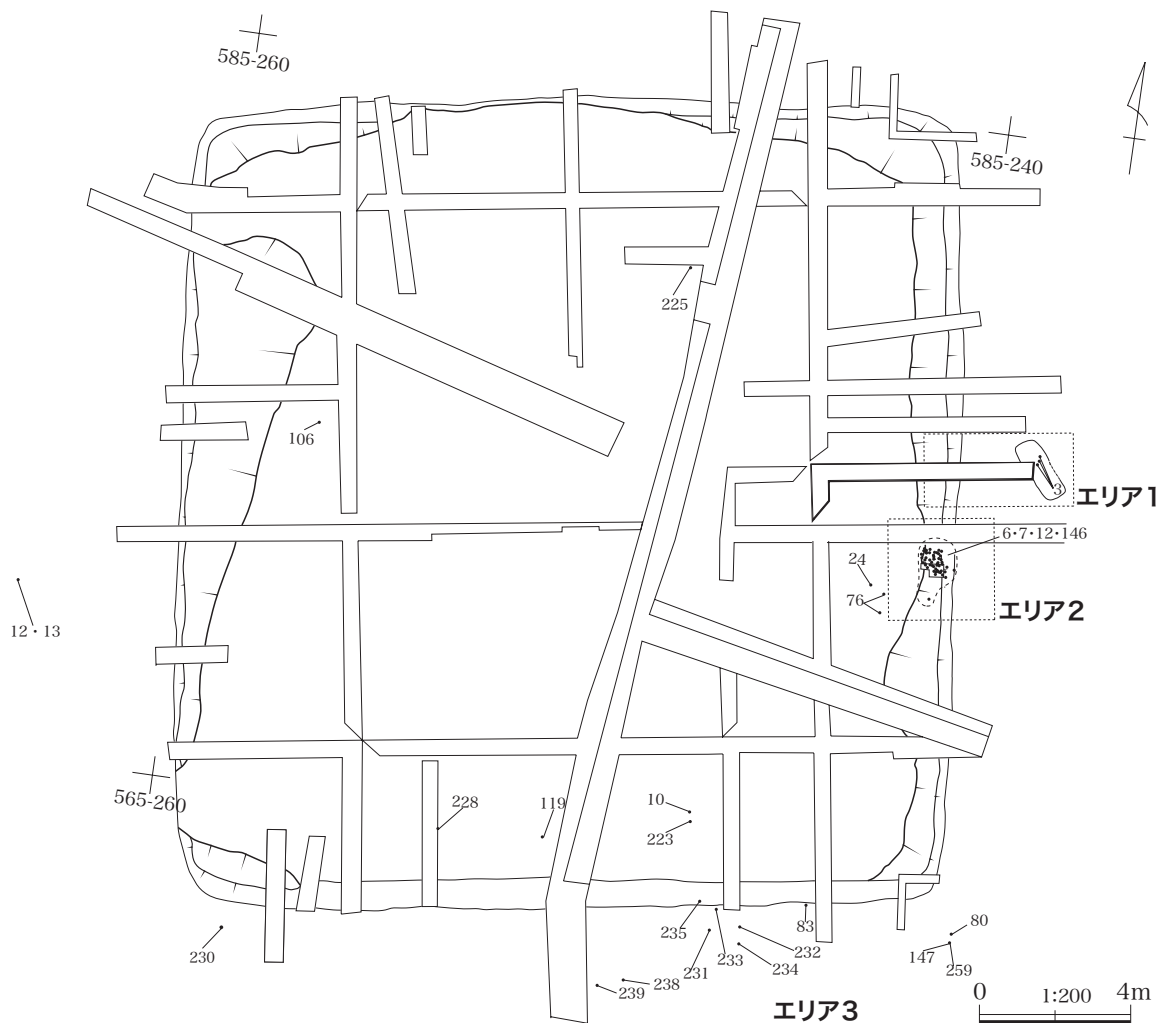
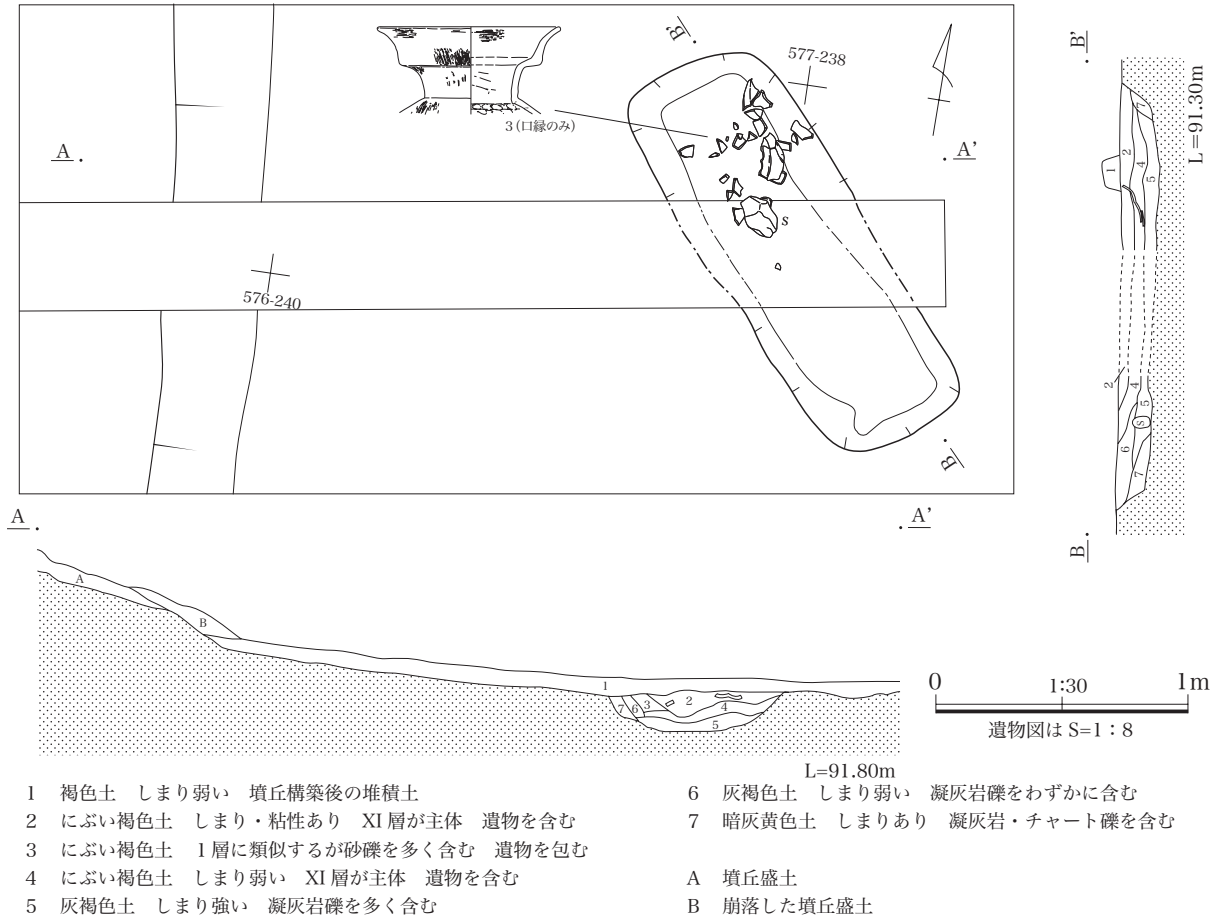


図69 墳丘盛土および墳裾 遺物出土図

墳裾エリア1



墳裾エリア2

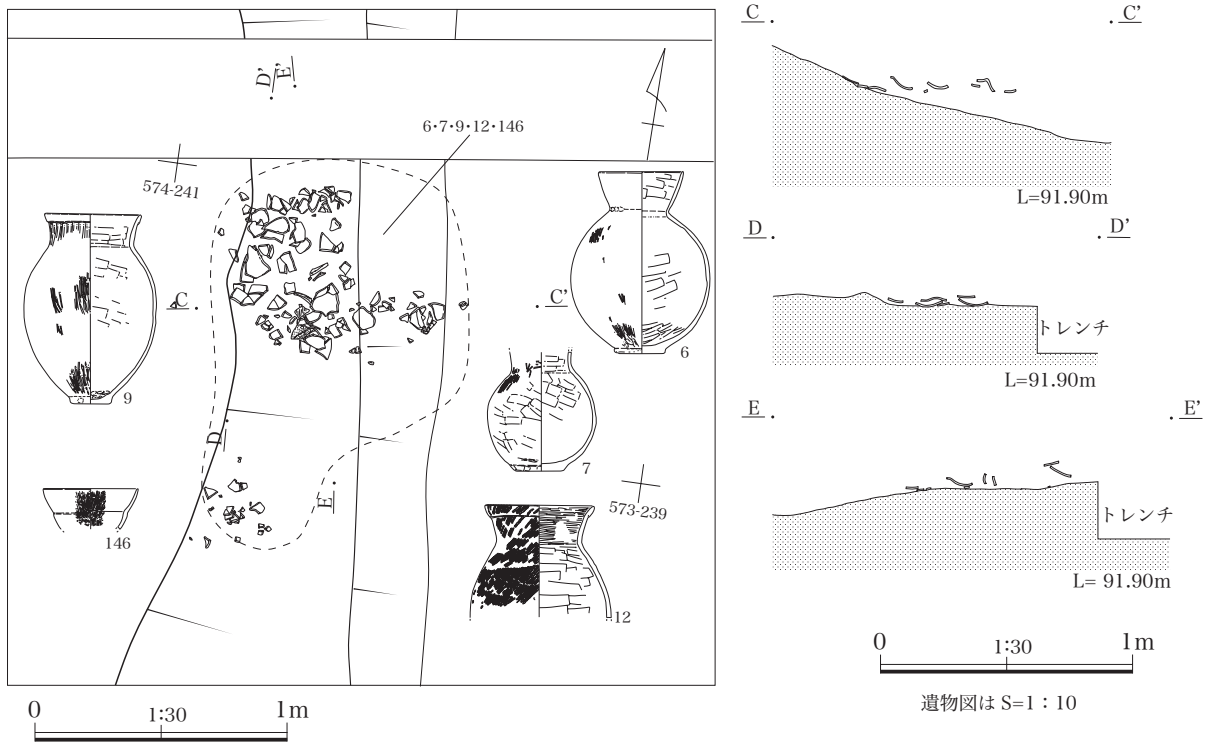


図 70 墳裾エリア1・2 遺物出土状況図

底部穿孔 or 二重口縁壺の出土状況 先述の出土状況に加えて、出土層位およびグリッド位置が判明している底部穿孔 or 二重口縁壺の小片の出土状況も加えて考えることとする。

これらの出土層位は全て墳丘表面 (=M1層) や墳裾埋土 (1~6層) であり、墳丘盛土内や盛土下からの層からの出土は1点 (3) を除いては認められない。また、平面分布を1m×1mのグリッド単位で区分する (図71) と、その分布は墳丘各辺の

中央付近 (東辺は不明) に集中する傾向にある。

こうした層位的および平面的分布状況の状況からは、底部穿孔 or 二重口縁壺においては、古墳機能時には墳丘上に存在し、それがその後転落して墳裾に散在したと考えられる。但し、二重口縁壺 (3) については、口縁部は墳裾に存在するものの、同一個体の胴部は明らかに墳丘盛土下に存在していることから、他の壺とは異なる機能をもってこの古墳に用いられたと思われる。

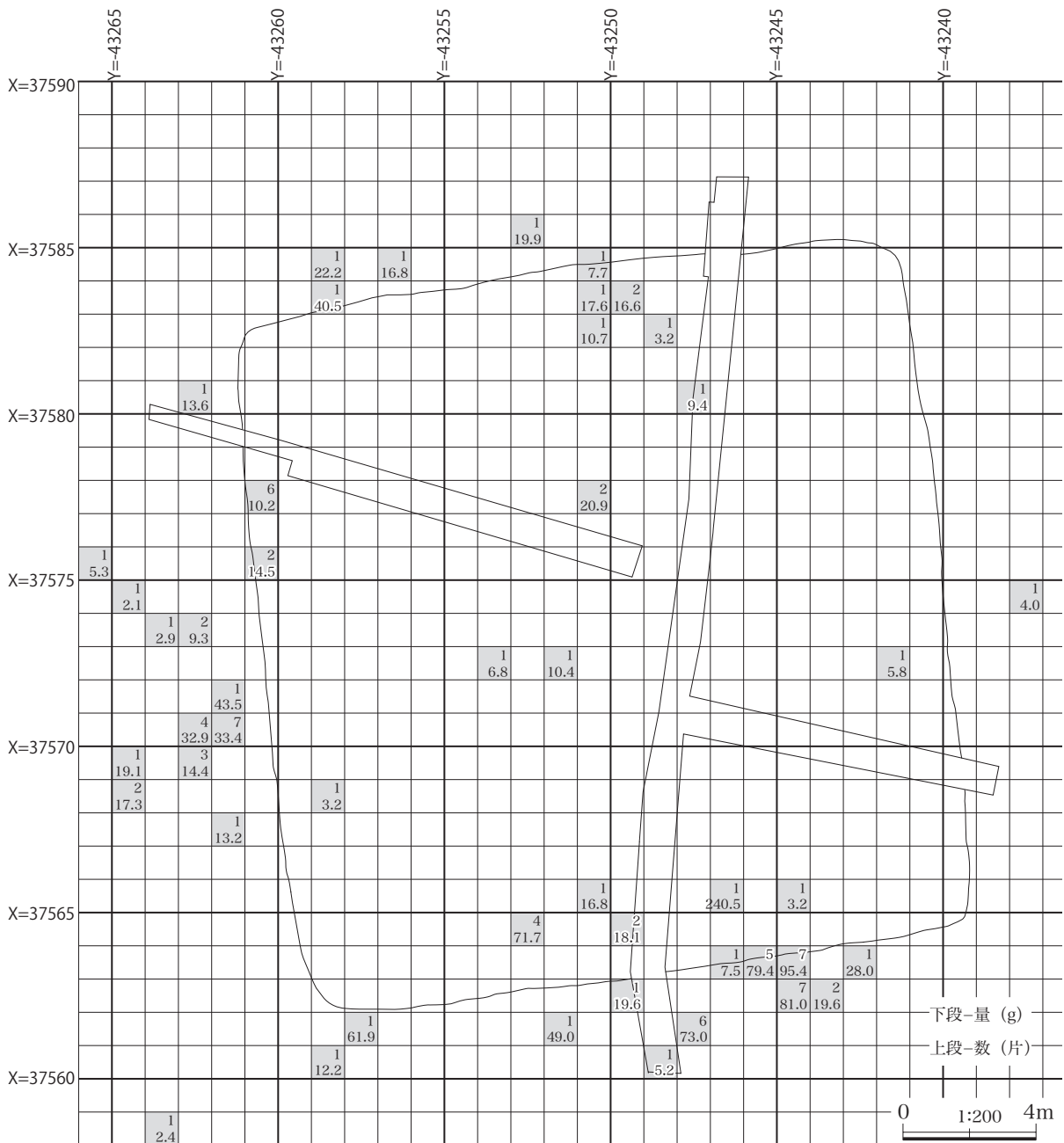


図71 底部穿孔 or 二重口縁壺のグリッド別分布状況図

墳丘表面・墳裾出土小破片遺物の傾向 先述した以外にも多く土師器破片が墳裾覆土（1～4層）や墳丘表面（M 1層）から出土している。これらはその大半が器種をも認定できない小破片ではあるが、辛うじて認識できるもので、器種等を基準に分類すると次の通りになる。（表 16）。

墳裾覆土（1～4層）からは、実測可能遺物を除いた破片資料総量は 5,298.9 g（1,298 片）である。

器種別にみると、甕片は 815.3 g（15.4%）ともっとも量が多く、壺片が 576.7 g（10.9%）、高坏・器台片が 231.9 g（4.4%）、鉢・片口片 15.2 g（0.3%）という量を示す。このうち、甕片については、縄文施文破片が約 44 g、S 字甕破片が約 12 g と少ない。壺については、総量 576.7 gのうち、加飾壺片が約 153 g の量を示している。高坏・器台については、231.9 g の破片資料を細別することができない。鉢・片口については 15.2 g しかなく、1 個体にも満たない量のみである。なお、器種不明破片は最も多く、3,659.8 g（69.0%）あるが、そのうち縄文施文破片が約 117 g、櫛描文施文破片が約 51 g、赤彩破片が約 55 g の量を示す。

墳丘表面（M 1層）からは、実測可能遺物を除いた破片資料総量は 2,672.1 g（567 片）である。

器種別にみると、壺片が 728.4 g（27.3%）ともっとも量が多く、以下、甕片が 385.2 g（14.4%）、高坏・器台片が 198.7 g（7.4%）という量を示し、鉢・片口片は皆無である。このうち、壺片については、二重口縁 or 底部穿孔壺破片が約 345 g と多い。甕片については、S 字甕破片が約 15 g と少なく、それ以外の約 370 g については不明である。高坏・器台については、198.7 g の破片資料を細別することができない。なお、器種不明破片は最も多く、1,359.8 g（50.9%）あるが、そのうち櫛描文施文破片が約 3 g、赤彩破片が約 41 g の量を示す。

墳裾覆土出土遺物とその層に存在する理由としては、①墳裾にもともと存在していた、②墳丘表面に存在した資料が転落した、③墳丘盛土中に存在したものが盛土崩落に伴って崩落した、の 3つが考えら

れる。また、墳丘表面出土がその層に存在する理由としては、①墳丘表面にもともと存在した、②墳丘盛土中に存在したものが表面にあらわれた、の 2つが考えられる。

各破片について、いずれの理由かを認定することは困難だが、壺については次のことが推測できる。

壺においては、二重口縁 or 底部穿孔壺片が墳丘表面出土に集中する傾向にあることから、本来的に墳丘上に存在していた可能性が高い。このことは、後述する盛土中の小破片において、この種類の破片が 1 片も存在しないことから裏付けられる。

表 16 墳丘表面及び墳裾出土遺物の傾向グラフ

1～4層				
遺物総重量 5,298.9g (1,298 片)	甕 15.4%	壺 10.9%	高坏・器台 4.4%	鉢・片口 0.3%
				器種不明 69.0%
甕 815.3g	縄文施文 5.4%	S 字甕 1.5%		不明 93.1%
壺 576.7g		加飾壺 26.5%		不明 73.5%
高坏・器台 231.9g				高坏 or 器台不明 100%
鉢・片口 15.2g			鉢 26.5%	片口 73.5%
器種不明 3,659.8g	縄文施文 3.2%	赤彩 1.5%	櫛描文施文 1.4%	不明 93.9%
M 1層				
遺物総重量 2,672.1g (567 片)	甕 14.4%	壺 27.3%	高坏・器台 7.4%	器種不明 50.9%
甕 385.2g		S 字甕 4.0%		不明 96.0%
壺 728.4g			二重口縁 or 底部穿孔壺 47.3%	不明 52.7%
高坏・器台 198.7g				高坏 or 器台不明 100%
器種不明 1,359.8g		赤彩 3.0%	櫛描文施文 0.2%	不明 96.8%

手焙形土器の出土状況 本墳より出土の手焙形土器は1個体が破片となった状態で出土している。これらの破片の分布状況は次の通りである。

平面的分布状況としては、墳丘東側中央付近の東西2.0m、南北1.0mの範囲内に限定して散在しており、この範囲外からは1片も出土していない。

また、垂直分布状況としては、墳丘盛土中に最も多く分布する。さらにいえば、墳丘盛土の中でも、(調査時における) 墳丘表面から深さ13~25cmの位置からの出土が最も多く、破片の中には墳丘盛土構築以前に設置された壺(115・116頁参照)の口縁部とほぼ同一レベルからの出土破片も存在する。無論、この他にも、墳丘盛土表層からの出土破片もあるが、例外的である。

ところで、このように1個体の手焙形土器が破片となって本墳に存在するに至った状況としては次の5つが考えられる。

状況1:「もともと完形品として墳丘上に置かれていた手焙形土器が、その後に破損して散在した」

状況2:「墳丘完成後に1個体の完形品がなんら

かの機能終了後に、破砕されて散在した」

状況3:「他所(例えば、隣接住居内)にあった1個体の手焙形土器が、墳丘盛土確保の掘削土に混ざり本墳盛土中に1.0m×2.0m範囲に散在した」

状況4:「1個体の完形品の手焙形土器が、盛土中に埋置され、それが後の土圧によって破片化した」

状況5:「本墳墳丘盛土構築時のどこかの段階で1個体の完形品である手焙形土器が破砕され、盛土中に散在させられた」

この想定される5つの状況のうち、もっとも妥当性の高い状況は状況5と考えられる。このように考えるに至ったのは、破砕行為がどのように行われたかを積極的に論じる根拠があったわけではなく、むしろ、出土した破片資料の垂直分布状況からは状況1・2の想定はしづらく、平面分布状況からは状況3・4の想定はしづらく、残る状況5がいずれの分布状況をも説明できるからである。なお、状況5であつたとしても、そこでどんな破砕行為が行われ、どのように散在させられたかについては、出土状況からだけでは、推測を及ぼすことはできない。

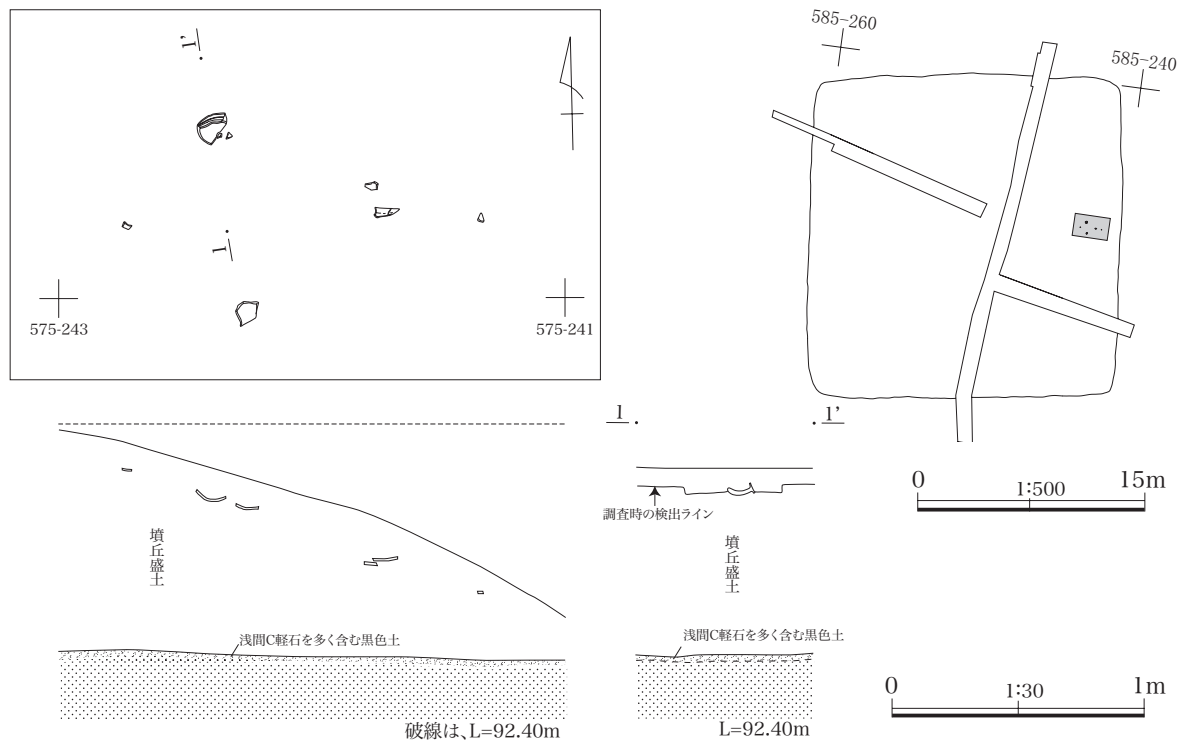


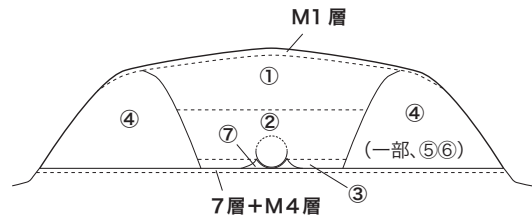
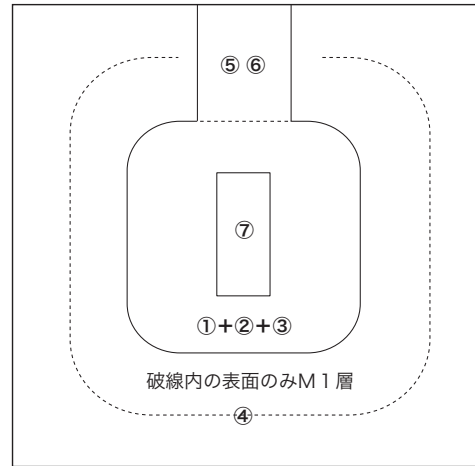
図72 手焙形土器片 出土状況図

墳丘盛土中出土の小破片遺物の傾向 墳丘表面層 (M1層) を除く盛土中からも 19,077.9 g (4,266 片) の土師器片が出土している。その大半は器種をも認定できない小破片ではあるが、辛うじて認識できるもので、器種等を基準に分類すると次の通りになる。(表 17)。なお、墳丘盛土はその築造工程毎に分層でき、出土遺物についても、その分層に基づいて分離した。

墳丘盛土の全層 (但し、M1層を除く) を総じ、器種別にみると、甕片は 7,284.3 g (28.1%) と最も量が多く、壺片が 2,551.0 g (13.4%)、高環・器台片が 742.6 g (3.8%)、鉢・片口片 7.8 g (0.1%) という量を示す。このうち、甕片については、縄文施文破片が約 663 g、器面内面にミガキを施す破片が約 124 g、器面外面にハケを施す破片が約 270 g である。壺については、総量 2,551.0 g のうち、縄文施文破片が約 38 g の量を示している。高環・器台については、総量 742.6 g のうち、高環は詳細が不明な破片が約 18 g、赤彩を施した破片が約 19 g の量を示している。破片資料を細別することができない。鉢・片口については 7.8 g (鉢破片 1 片のみ) のみである。なお、器種不明破片は 10,424.2 g (54.6%) あるが、そのうち縄文施文破片が約 573 g、櫛描文施文破片が約 198 g、赤彩破片が約 281 g の量を示す。

また、各層別での出土傾向 (表 18) では、各出土総量が異なるため、一律な比較はできないものの、各層毎の傾向が概ね盛土中全体の傾向と大きく異なる内容ではないことがわかる。

墳丘表面出土がその層に存在する理由としては、他所にあった土器 (片) が、墳丘盛土確保の掘削土に混ざり本墳盛土中に包含されたと考えることが妥当であり、他所とは具体的には、本墳の北西に隣接する住居群を想定できる。おそらく、墳丘盛土確保時に住居 (既埋没) の一部が削平され、その時に混ざったと思われる。(深澤)



- ①…M2層 (構築墓域内上層)
- ②…M3層 (構築墓域内下層)
- ③…M3(～4)層 (M3層中でM4層に近い部分)
- ④…M5層 (構築墓域形成土)
- ⑤…M6層 (搬入路閉塞土)
- ⑥…M7層 (搬入路閉塞土の最下層)
- ⑦…M8層 (木棺設置粘土床)

※なお、M1層は墳丘盛土だが墳丘表面のため、ここでは略。
また、M4層・7層は墳丘盛土下旧地表面のため、ここでは略。

図 73 墳丘盛土層位区分図

表 17 盛土中遺物出土傾向グラフ

盛土中全体

遺物総重量 19,077.9g (4,266片)	甕 28.1%	壺 13.4%	高環・器台 3.8%	鉢・片口 0.1%	器種不明 54.6%
甕 7,284.3g	縄文施文 9.1%	ハケ調整 3.7%	内面ミガキ 1.7%	不明 85.5%	
壺 2,551g	縄文施文 1.5%	不明 98.5%			
高環・器台 742.6g	不明高環 2.4%	赤彩不明 2.6%	高環 or 器台不明 95.0%		
鉢・片口 7.8g			鉢 100%		
器種不明 10,424.2g	縄文施文 5.5%	櫛描文施文 1.9%	赤彩 2.7%	不明 89.9%	

第4章 調査報告2

M2層

遺物総重量 10,609.2g (2,514片)	甕 28.5%	壺 12.2%	高環・器台 3.4%	鉢・片口 0.1%	器種不明 55.8%
甕 3,033.6g	縄文 施文 9.0%	ハケ 調整 6.5%	内面ミガキ 0.9%	不明 83.6%	
壺 1,294.7g	縄文施文 2.4%			不明 97.6%	
高環・器台 357.8g				高環 or 器台不明 100%	
鉢・片口 7.8g				鉢 100%	
器種不明 5,926.3g	縄文 施文 7.3%	櫛描文施文 2.2%		赤彩 1.9%	不明 88.6%

M3層

遺物総重量 5,286.0g (1,085片)	甕 25.5%	壺 17.1%	高環・器台 4.5%	器種不明 52.9%	
甕 1,349.3g	縄文施文 13.1%	ハケ調整 0.2%		不明 86.7%	
壺 903.5g				不明 100%	
高環・器台 236.6g	不明 高環 7.4%			高環 or 器台不明 92.6%	
器種不明 2,796.6g	縄文 施文 4.5%	櫛描文施文 1.8%		赤彩 1.9%	不明 91.8%

M3(～4)層

遺物総重量 1,877.0g (392片)	甕 37.3%	壺 17.1%	高環・器台 4.5%	器種不明 41.1%
甕 700.1g	内面 ミガキ 6.0%			不明 94.0%
壺 321.6g	縄文施文 2.6%			不明 97.4%
高環・器台 84.4g				高環 or 器台不明 100%
器種不明 770.9g	赤彩 11.5%			不明 88.5%

M5層

遺物総重量 889.0g (198片)	甕 20.4%	高環・器台 5.1%	器種不明 74.5%
甕 182g	縄文施文 20.5%	内面ミガキ 12.9%	不明 66.6%
高環・器台 44.9g	高環 or 器台 42.8%	赤彩	高環 or 器台 不明 57.2%
器種不明 662.1g	櫛描文施文 0.9%		不明 96.4%
	赤彩 2.7%		

M6層

遺物総重量 230.2g (38片)	甕 21.6%	壺 12.2%	器種不明 66.2%	
甕 49.7g			不明 100%	
壺 28.1g			不明 100%	
器種不明 5,926.3g	縄文 施文 6.4%	櫛描文施文 2.8%	赤彩 1.2%	不明 89.6%

M8層

遺物総重量 186.5g (39片)	甕 26.1%	高環・器台 10.1%	壺 1.7%	器種不明 62.1%
甕 48.6g				不明 100%
壺 3.1g				不明 100%
高環・器台 18.9g				高環 or 器台不明 100%
器種不明 115.9g	櫛描文 施文 7.4%	赤彩 9.1%		不明 83.5%

表 18 盛土中遺物層位別出土傾向グラフ

3 第1主体部の調査

(1) 第1主体部に関する概要

第1主体部は本墳における初葬埋葬施設である。

その設置位置は、墳丘のほぼ中央であり、軸をほぼ南北方向にとって設置されている。棺自体は検出できなかったが、粘土床と被覆土の状況からは木棺直葬と考えられる。なお、本施設には、所謂「棺設置に限定された墓壙」は存在しない。詳しくは後述するが、墳丘の構築と連動して木棺の設置・被覆がなされていたと推定している。

ところで、この施設は未盗掘の埋葬施設であり、初葬当時の状況を残している。だが、調査初動時において、盛土の一部を攪乱土と誤認して掘り下げたため、被覆に関する詳細情報は一切損なわれている。さらに、同じく調査初動時に状況確認と称して墳丘の一部を盛土下まで一気に掘削したために、その箇所については埋葬施設自体に関する情報についても一切損なわれている。(深澤)

(2) 規模・構造・形状について

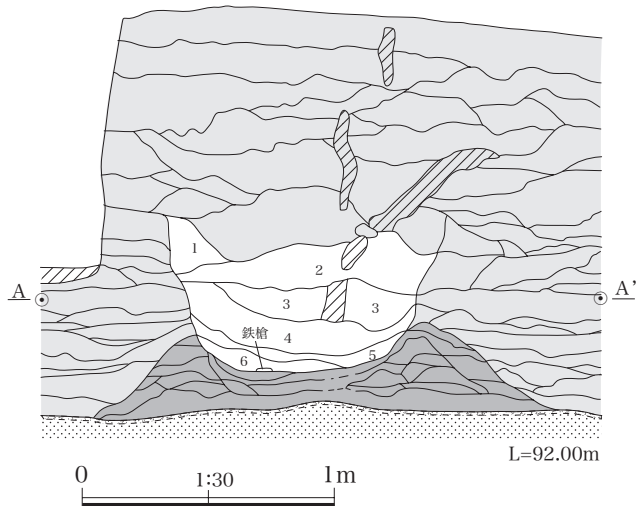
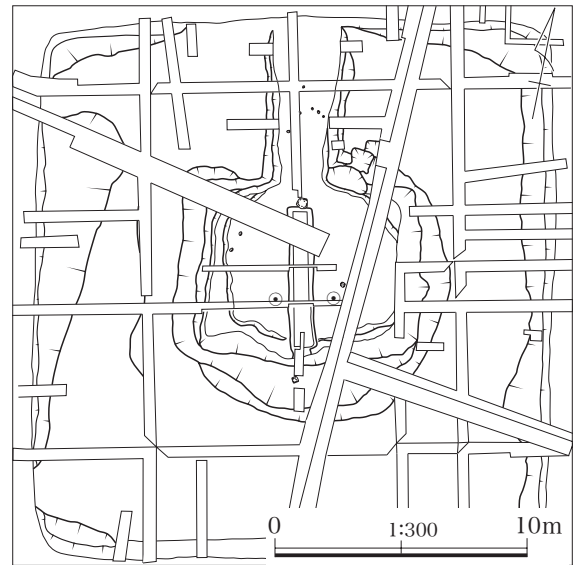
埋葬施設としては、木棺を想定する。木棺自体はすでに腐食喪失しているものの、棺設置のための粘土床の形状と規模からそのように判断した。

規模については、棺外形全長 5.45 m、外形幅約 0.80 ~ 0.90 m を計る。木棺の形状としては、断面船底状の木棺を想定する。粘土床の断面形状から考える限り、竹を割ったような明確な「U」字形にはなっておらず、非常に扁平な「U」字形を呈している。また、割竹形や板状の棺蓋が存在したか否かについては不明である。だが、埋葬施設部の上部の盛土(被覆土も含む)のみがそれ以外の盛土とは異なり、20 ~ 45cm ほど陥没している。この状況からは、棺蓋の腐食に伴い上部の土も陥没したと解釈でき、故に棺蓋が存在したと想定される。なお、細部構造を知る調査知見は得られず、近年調査事例が増加している、小口部の突起についても、その痕跡の有無には細心の注意を払いながら調査を試みたが、検出されることはなかった。(深澤)

(3) 掘り方・被覆土の有無とその認定

本埋葬施設は、棺そのものを埋置するための狭長な墓壙は存在せず、故に掘り方も有さない。おそらく、棺への土被覆は墳丘構築墓壙内への盛土の充填を一連の事業として行われた可能性が高い。

但し、埋葬施設上部に位置する土層に限っては、ローム土に灰白色粘土が比較的多く混入していることから、事業は一連でありつつも、その被覆部に関しては、意識的に異なる質の土を盛った(被覆した)と推定される。(深澤)



- 1 にぶい黄褐色土 粘性は弱い ロームが主体
- 2 黄褐色土 粘性は強い 灰色粘土をブロック状に含む
- 3 褐色土 粘性は弱い ローム粒を多く含む
- 4 にぶい黄褐色土 粘性は強い 灰色粘土を全体に多く含む
- 5 にぶい褐色土 粘性は強い 灰色粘土をブロック状に含む
- 6 灰褐色土 粘性は弱い 灰色粘土をわずかに含む

図 74 第1主体部被覆土 断面図

(4) 粘土床について

推定される木棺の設置に際して、その下部に粘土床の敷設が確認された。この粘土床はローム及び褐色粘質土(基本土層XI層)の混土を主体に構築され、棺被覆土と類似する同質の土といえる。

規模・構造 は長軸(南北方向)7.75m、短軸(東西方向)2.40m、最大高は0.24mを計る。

この粘土床は木棺の設置以前に敷設されており、棺位置の下部にも厚さ3.0～5.0cmの厚さで粘土がある。なお、粘土床の断面山形の部分は、土層断面の観察では各層が棺に向かってやや登り傾斜であるため、棺設置後、その安定を計るために充填したものであると思われる。また、南北の小口部では粘土床の層厚は0.25～0.31mと厚くなり、明らかに一段高く盛られており、棺の安定的な設置のために手厚く補強した痕跡と考えられる。さらに北小口端粘土床上には1石の安山岩が存在しており、意図して据え置かれたと考えられる。

なお、この粘土床は旧地表面に直接敷設されており、敷設のための掘り方は存在しない。また、粘土床直下やその周辺部にピットは認められない。

棺設置工程 上記の調査データから、この第1主体部についてはその設置工程が次のように考えられる。

第1段階 粘土床敷設以前 構築墓壇が構築されている状態にある

第2段階 粘土床の敷設 構築墓壇内部のほぼ中央に長さ7.75m・幅2.40mの範囲に粘土床が敷設される。この時の敷設には掘り方は存在せず、地表面に直に敷設する。

第3段階 棺の設置 粘土床の上に船底状木棺を設置する。設置の安定を計るために、棺下に粘土を追加充填させ、南北の小口部には一層の粘土をあてがい、北小口にはさらに石を設置する。

第4段階 棺の被覆 被覆は構築墓壇内への盛土充填と一連に行う。但し、棺の上位の箇所では土質が異なることから、棺の上位には特別な土を被覆したと推定される。(深澤)

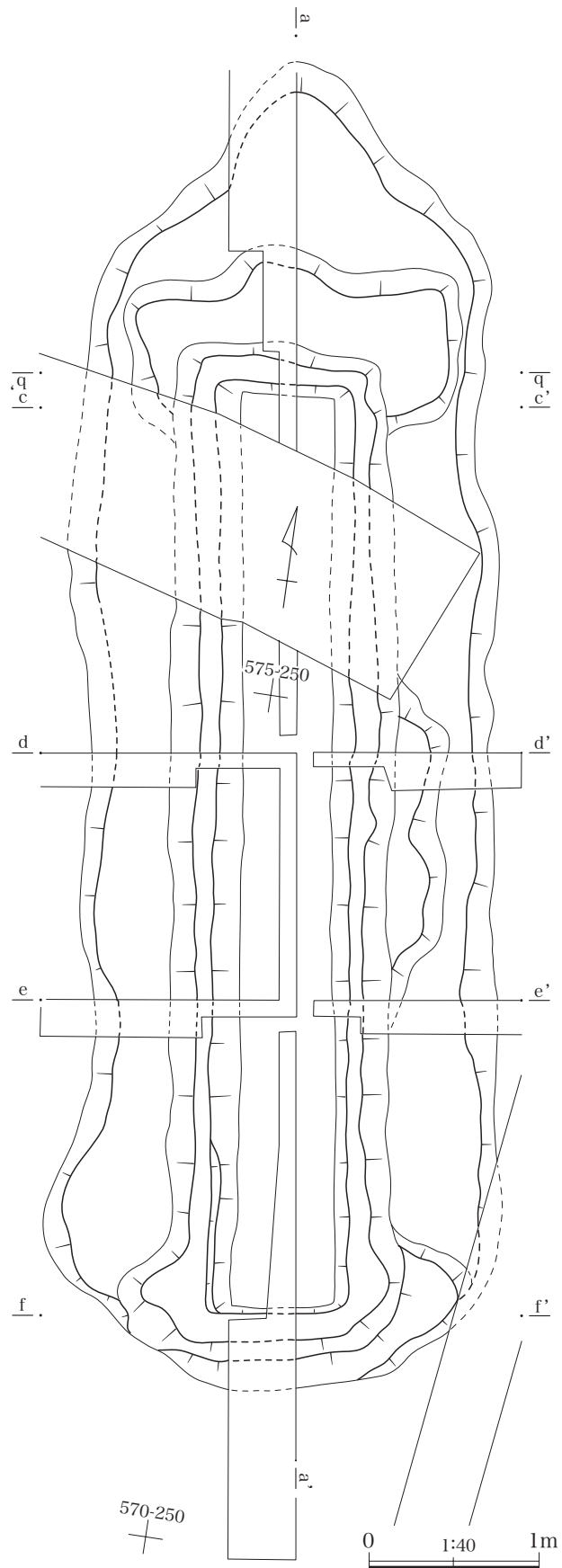


図75 第1主体部 平面図

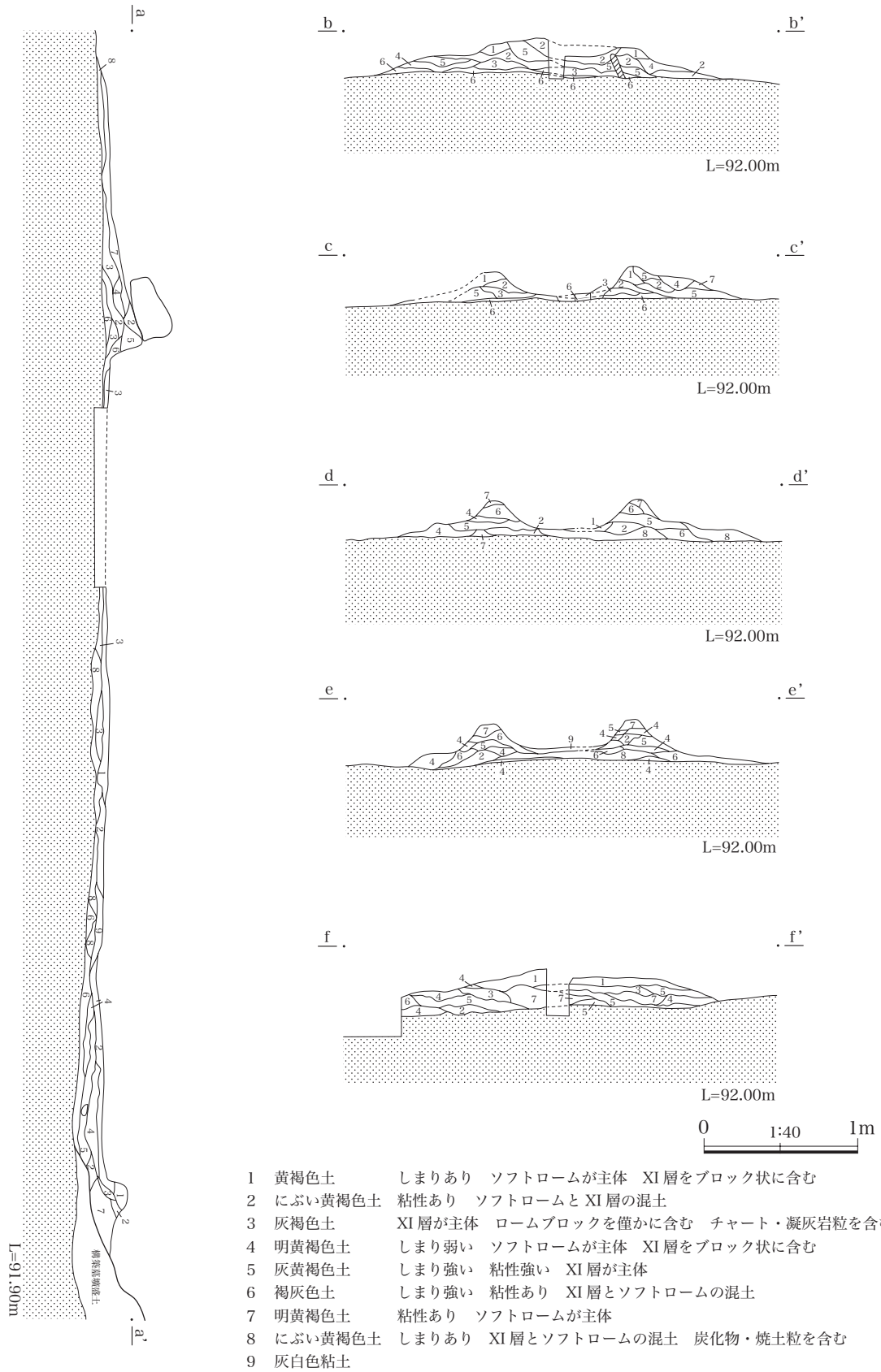


図 76 第1主体部 断面図

(5) 副葬品の出土状況

第1主体部は木棺と想定され、棺内からは鉄剣1点・鉄槍3点・鉄ヤリガンナ2点、銅鏃3点・ガラス玉124点・翡翠勾玉1点および微量の水銀朱・白色粘土が出土した。主体部範囲における後世作為は、主体部北部長さ1.2mの範囲（平成15年9月掘削トレンチ）のみであり、それ以外では埋葬時の状況をそのまま残しているものと考えられる。よって、以下に述べる出土状況は埋葬時の状況と考えられる。なお、人骨・歯の出土はない。

鉄剣の出土状況 鉄剣（剣1）は、被葬者頭部位置と推定される箇所（以下、頭部推定位置）の北側で切先を南に向けて出土した。刃部に僅かな木質が付着していることから、副葬時には木製鞘に収められていた可能性が高い。垂直位置状況は、ほぼ棺床推定面にはりつく状態であり、刃先部高が茎尻部高よりも0.8cm高い状態での出土である。

鉄槍の出土状況 3点の鉄槍は頭部推定位置の北側から2点（槍1・2）、被葬者の足部位置と推定される箇所（以下、足部推定位置）の西脇から1点（槍3）が出土した。槍1・2は切先を北方向に、槍3は切先を南方向に向けて出土した。垂直位置状況は、いずれもほぼ棺床推定面にはりつく状態であるが、槍1・2では刃先部高が茎尻部高よりも0.5～1.0cm高く、槍3では刃先部高が茎尻部高よりも1.0cm低い状態であった。それぞれの槍における鞘装着の有無については次の通りである。槍1については、刃部に僅かに木質が付着することから木製鞘に収められていた可能性が高い。槍2については、刃部に木質の付着は認められないが、柄装具の上に木質が認められることから、木製鞘を装着した状態であったと考えられる（「III-2-7(3)参照」）。槍3については、刃部に木質の痕跡が認められないことなどから、木製鞘装着の可能性は極めて低い。

ヤリガンナの出土状況 2点の鉄ヤリガンナは頭部推定位置の北側から1点（ヤリガンナ1）、足部推定位置の南側から1点（ヤリガンナ2）が出土した。ヤリガンナ1は刃部を北方向、ヤリガンナ2は

茎尻部を北方向に向けて出土した。垂直位置状況では、いずれもほぼ棺床推定面に張り付く状態だが、ヤリガンナ1では刃先部高が茎尻部高よりも0.3cm高く、ヤリガンナ2では刃部欠損部高が茎尻部高よりも0.4cm高い状態であった。この2点のヤリガンナにおける着柄状況については、次の通りである。ヤリガンナ1は、布・紐等の痕跡が認められないことから着柄されない状態、一方、ヤリガンナ2については柄の木質と革紐および繊維痕が明瞭に付着している状況から着柄された状態での副葬がそれぞれ考えられる。なお、ヤリガンナ1については刃部を僅かに欠損するのみでほぼ完形であるが、「く」の字に屈曲しての出土、一方、ヤリガンナ2については刃部を欠損した状態での出土であった。これらの変形および欠損は検出時にすでにその状態であったことから、これらの状況は副葬時にすでに認められたものと推測している。

銅鏃の出土状況 3点の銅鏃（銅鏃1～3）は足部推定位置の南側からまとまって出土した。いずれも刃先部を南方向に向けた状態で出土した。垂直位置状況では、いずれもほぼ棺床推定面に近い位置でほぼ水平状態での出土である。周囲には矢柄や靱の痕跡と思われる木質や漆膜片は認められなかった。

玉製品の出土状況 出土位置が把握された80点のガラス玉（玉1～78・80・81）と1点の翡翠勾玉（玉143）は頭部推定位置～胸部推定位置付近の範囲で出土した。垂直分布状況では高低差が最大3.2cmも認められた。なお、篩により出土した44点のガラス玉（玉79・82～114・146～155）も平面範囲においては全て同上範囲の土内からの発見であった。こうした出土状況からは出土玉製品が首飾り状態であったとは想定しづらく、むしろ撒布を経た状況であることの方が想定し易いと思われる。

水銀朱・白色粘土の出土状況 水銀朱・白色粘土は頭部推定位置の北側、鉄製品類の間から出土した。水銀朱は微量の粒状での散在し、白色粘土は10cm四方の範囲でブロック状に出土した。垂直分布位置は、いずれも棺床推定面より約3.0cm上位である。

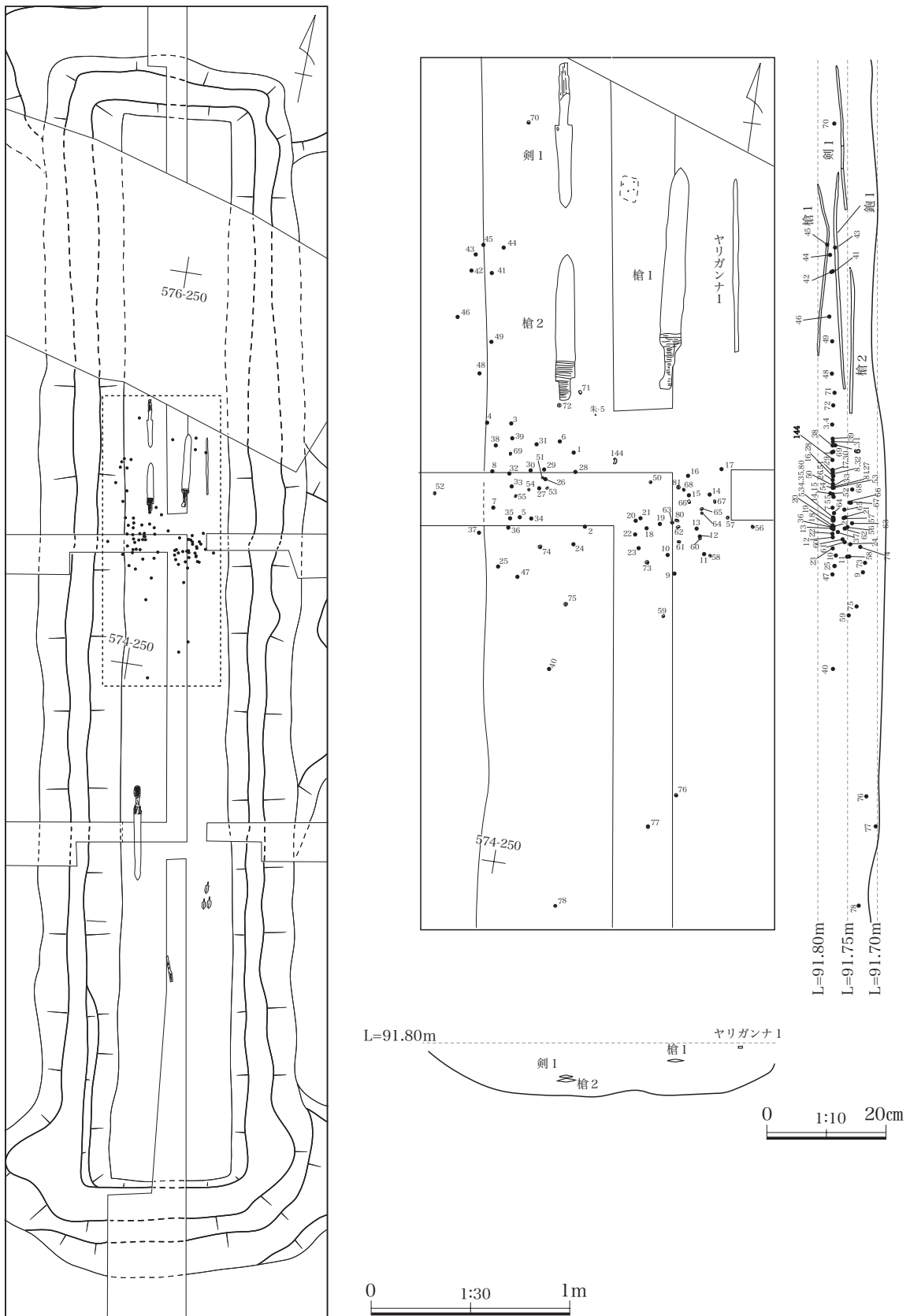


図77 第1主体部 遺物出土状況 平・断面図

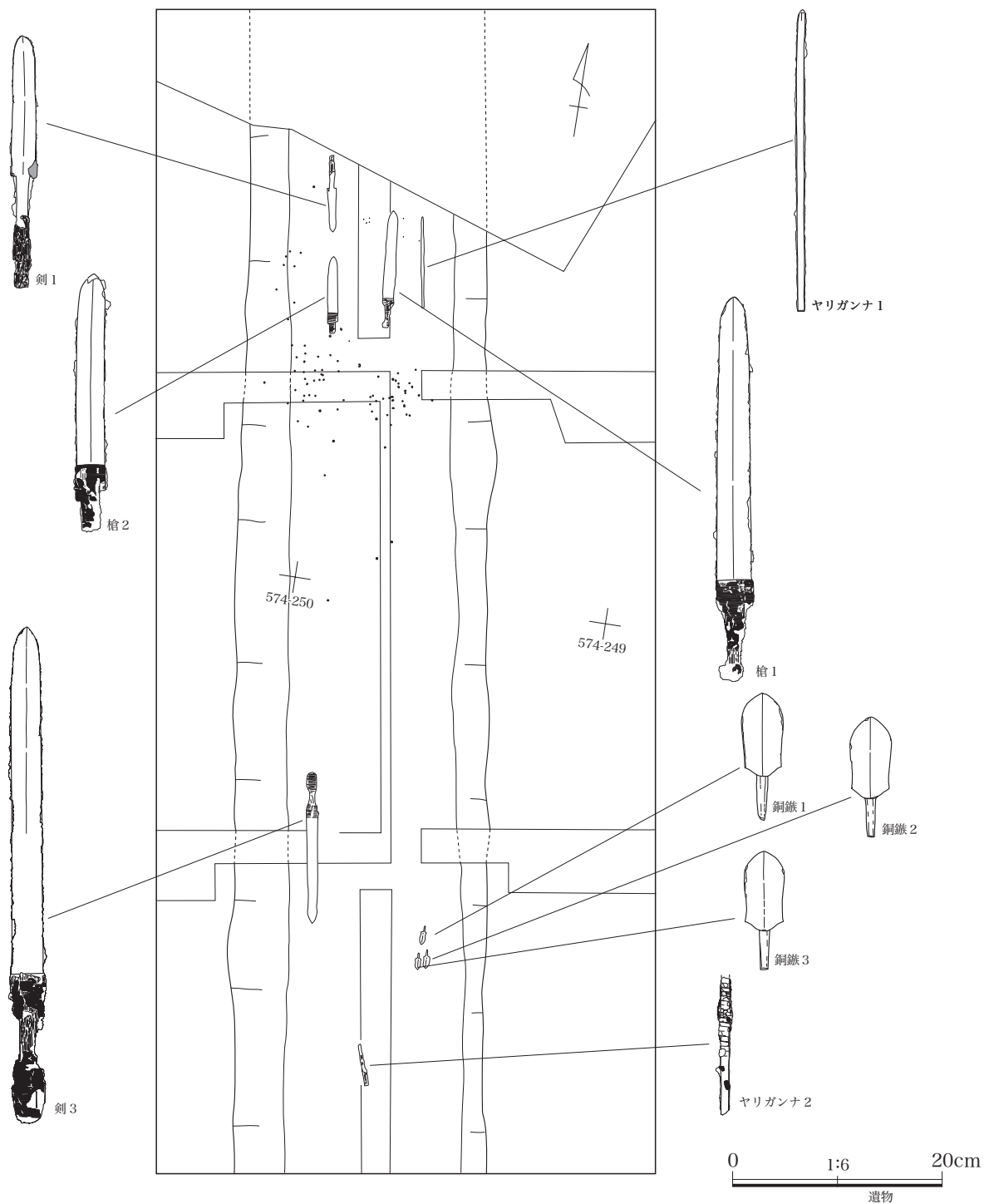


図78 第1主体部 副葬品出土状況 拡大図

なお、この第1主体部に関しては、平成15年10月14日以前の調査段階に、その一部が幅約1.0mのトレンチで地山面まで掘り下げられた。調査初動時での掘り下げであり、故にその箇所の埋葬施設に関する詳細な情報は得られていない。平成15年10月14日より本古墳群の調査担当に就いた編者は、

念のため、それ以前の状況について、調査当初からの調査担当者や発掘作業員に聞き取りを行った。その結果、①トレンチは手作業により掘り下げた、②その際、鉄製の刀剣等が出土しなかった、③掘り下げ途中で、鉄製品（報告時の剣1）が露出したので掘り下げを中断した、の3点を確認した。（深澤）

4 第2主体部の調査

(1) 構造・規模・形状について

第2主体部は追葬時の埋葬施設と考えられる。

この主体部は、明確な構造や平面規模・形状は不明である。だが、人歯および重圏文鏡・ガラス玉・滑石管玉がまとまって、しかもほぼ同一レベルからの出土であることから、人歯を被葬者のもの、各種遺物を副葬品とし、その出土範囲を主として埋葬施設と考えた。そして、断面観察による掘り込みが墳丘盛土を掘り込んで行われていたことが確認されたことから、追葬時の埋葬施設と考えた。(深澤)

(2) 人歯の出土状況

人歯は埋葬施設想定範囲内の北部から出土した。

形状が把握できるものは3本で、1本が上顎歯、2本が下顎歯である。うち、下顎歯1点は残存状況が良好であり、左下顎大臼歯と確認できた。また、周辺からは下顎と思われる骨も出土し、この出土状況からは、北方向に頭を向け、仰向けの状態で埋葬

された状況が推定される。(深澤)

(3) 副葬品の出土状況

第2主体部からは副葬品として、重圏文鏡1面、ガラス玉27点、滑石管玉1点が出土した。

重圏文鏡は、埋葬施設想定範囲内の北部からの出土であり、鏡面が上、文様面が下を、それぞれ向いた状態での出土であった。なお、出土時は繊維質が良好な状況で付着残存していた。なお、この重圏文鏡の直下からは上記の人歯が出土している。ガラス玉および滑石管玉は、重圏文鏡出土位置から南へ20～60cmの位置で集中出土した。分布は直径50cm程度の平面範囲に集中しているものの、糸等によって繋がれた状態ではなく、散在状況での出土であった。埋葬施設の詳細が不明瞭であるため、埋葬施設内におけるガラス玉の位置を正確に捉えることはできない。だが、出土位置が被葬者の頭部と想定される位置の南側20～70cmの位置であることから、これら玉類は被葬者の胸部付近に撒くようにして埋納された状況が推測できる。(深澤)

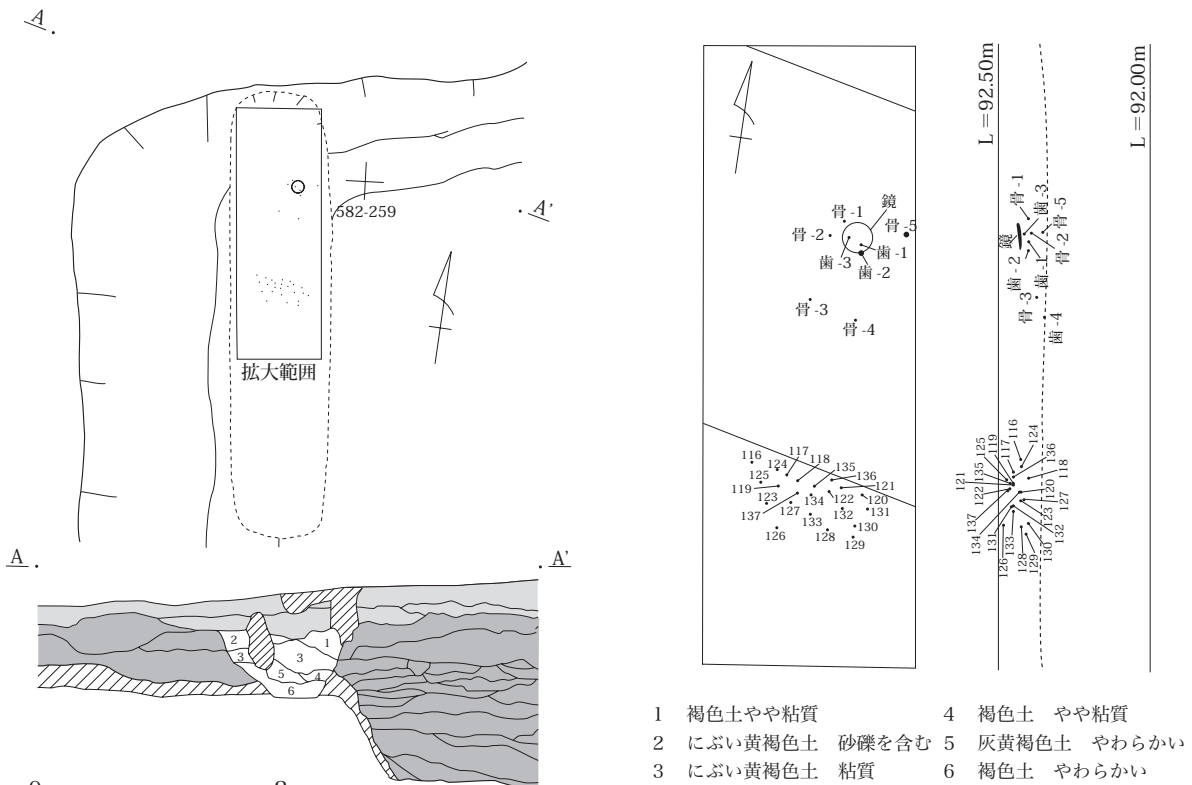


図79 第2主体部 位置図および遺物出土位置図

5 墳丘盛土下の状況

(1) 墳丘盛土下地表面に関する概要

成塚向山1号墳は墳丘盛土が良好な状況で残存していたため、その盛土に覆われた範囲では、盛土直下において、築造直前までの状況が包含していると推測した。そして、墳丘盛土を慎重に除去することにより、当初の推測どおり、比較的良好な情報を有する平坦面を検出した。なお、この面からはほぼ完形の土師器壺をはじめとする多くの土師器破片が出土したほか、既埋没の竪穴住居1軒（20号住居）も確認された。（深澤）

(2) 墳丘盛土下地表面の状況（図80）

墳丘盛土下平坦面（以下、平坦面）は、南西方向に下る、若干の傾斜（3.5 m / 100.0 m）を呈する。

この平坦面における人工造成の有無については本墳が丘陵の「馬の背状」平坦部への占地ということ、さらには周辺の自然地形との連続性を考慮してみても、非人為面とは考えられず、少なからず平坦化に際しては造成が行われたと思われる。なお、墳丘裾部においては、地表面を削平して、本墳の墳裾を形作っていると思われる（図56～58）。

ところで、平坦面の表面には炭化物が全体的に散在し、断面的には最も厚い箇所では層厚1～2mm程度であった。これらは、その形状からは草本類の炭化物と考えられる。また、焼土分布は3箇所で見られた。いずれも墳丘中心付近であり、うち2箇所は直径60cm程度の平面規模をもち、深さ10cm程度に浅く掘りくぼめた落ち込み内に焼土が充填されていた。また、もう1箇所は落ち込みはなく、直径70cmの範囲に焼土が分布していた。これらは、平坦面に密着するように存在し、かつ墳丘盛土で覆われていることから、成塚向山1号墳の盛土前（直前）の痕跡と考えられる。（深澤）

(3) 浅間C軽石・20号住居・墳丘盛土の関係

浅間C軽石と墳丘盛土の関係 平坦面の表面にはテフラを含む黒色土（＝1号墳7層）があり、その下には極めて純度の高い状態でテフラが存在する。

このテフラについては、分析の結果、浅間C軽石であることが判明した（「第8章8」参照）。したがって、墳丘盛土とこのテフラ（浅間C軽石）との時間的前後関係については、「浅間C軽石降下→成塚向山1号墳の墳丘盛土構築」と考えられる。

墳丘盛土と20号住居との関係 平坦面に存在する20号住居は、その平面面積の90%以上を1号墳の盛土によって覆われている。加えて20号住居を被覆する箇所の墳丘盛土土層断面（図80）から判断すると、20号住居は、完全に墳丘盛土によって覆われていることが明確に理解できる。したがって、20号住居と墳丘盛土との時間的前後関係については、「20号住居機能・埋没→成塚向山1号墳の墳丘盛土構築」と考えられる。さらに詳細にみると、20号住居の覆土においては覆土下層は軟質の黒色土を主体とするものであり、住居の自然体積を示唆する状況であるが、覆土上層に関しては墳丘盛土と一連の土の堆積が認められることから、「20号住居の廃絶後、その自然埋没は始まるが、完全に埋没しきらない段階、つまりは20号住居が廃絶後窪地化した段階において、成塚向山1号墳の盛土行為は開始されている。」という状況を推測できる。

20号住居と浅間C軽石の関係 20号住居の覆土中には浅間C軽石の堆積層は認められないが、竪穴を掘削した地山には浅間C軽石およびそれを多く含む層が認められる。したがって、20号住居と浅間C軽石との時間的前後関係については、「浅間C軽石の降下→20号住居の構築」と考えられる。

浅間C軽石・20号住居・墳丘盛土の先後関係 上記の検討からは、これら3者の先後関係については「浅間C軽石の降下→20号住居の構築と廃絶→成塚向山1号墳の盛土構築」という順であることが判る。さらにいえば、浅間C軽石の降下年代が3世紀後半～末とし、成塚向山1号墳の築造を4世紀のどこかとする立場にたてば、この連続する事象は長く見積もっても100年間の中での出来事と推測できる。（深澤）

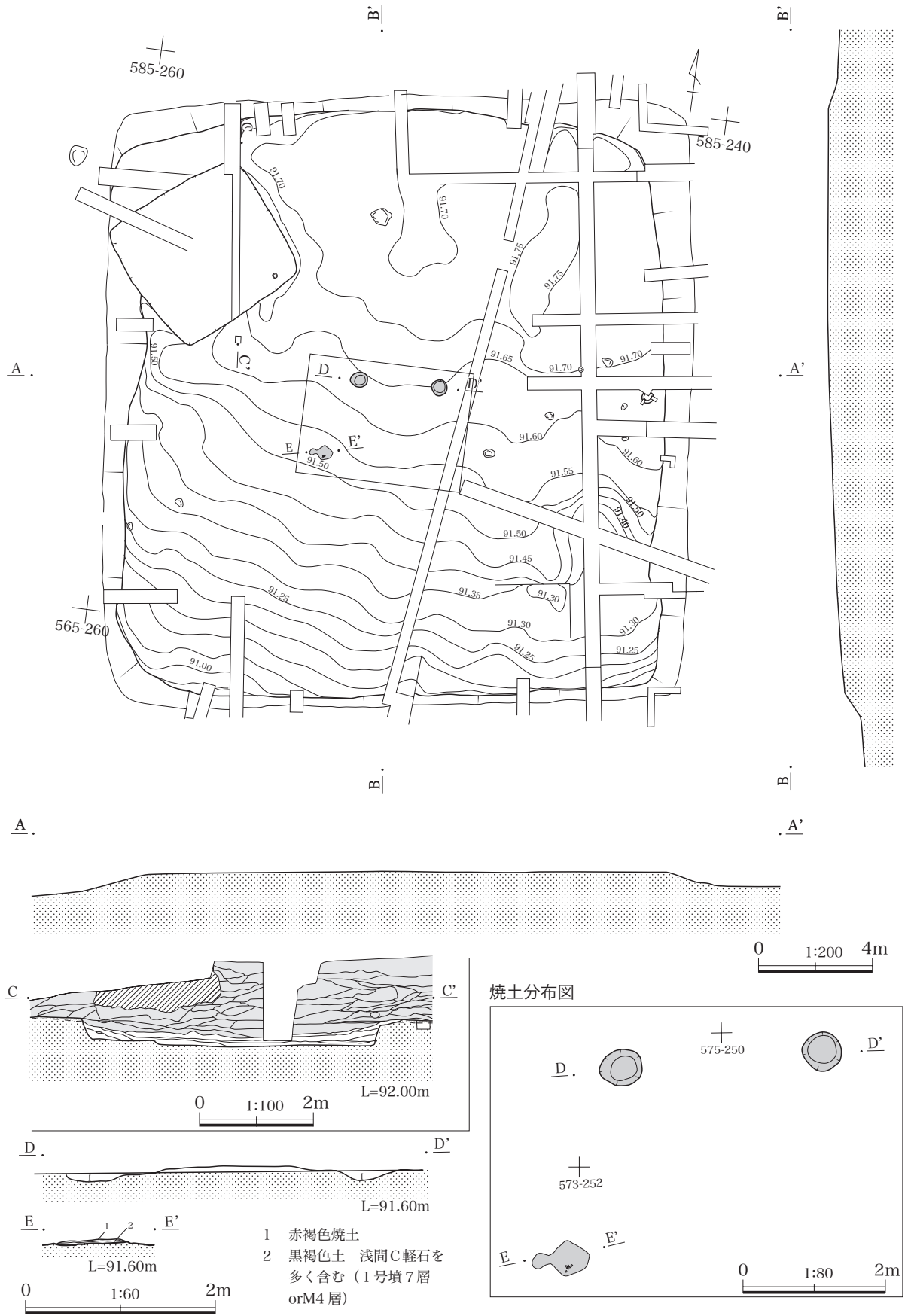


図80 墳丘盛土下 旧地表面 平・断面図

(4) 遺物の出土状況

平坦面からは多量の土師器片が出土している。これらは明らかに、盛土直下の旧地表面からの出土であり、墳丘盛土構築以前に存在したものと考え、記録化した。

出土遺物の破損状況 土師器壺1個体(土器1)が盛土填圧に同一箇所破片化している以外は、全てが小破片で出土している。そして、その多くは細片化しており、これらの状況からは土師器を意図的に割り砕いた状況が推測される。

出土遺物の種類とその比率 出土した破片資料の中で器種が判明しているものには、甕・壺・器台・高環・鉢・片口がある。しかし、これらの出土比率には大きな特徴が認められる。

まず、復元及び実測した遺物の数量比率(表19左)をみると、甕がほぼ50%を占め最も多く、さらにその中でも無文化・薄甕化した弥生系甕の存在が目立つ。次いで、外来系の小型高環や器台が多い。それに対し、壺・鉢・片口は少ない。勿論、完形に至るまで復元しておらず、当時の数量を的確に示しているわけではないが、壺の少なさは際立つ。このことは、未実測・未掲載となった小破片における遺物

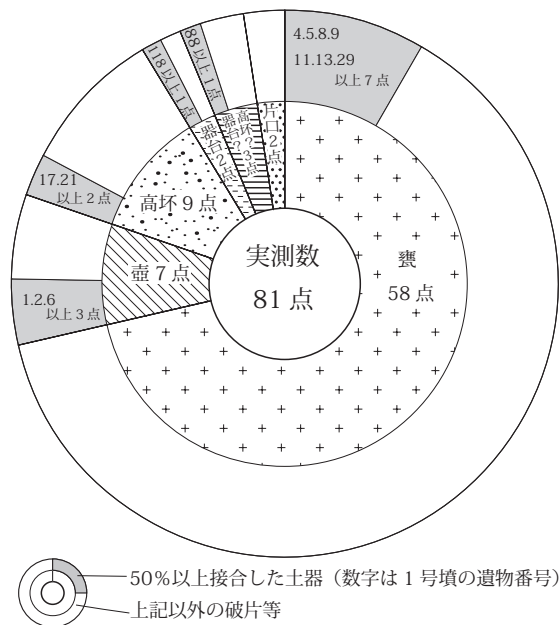
の重量比率(表19右)をみると、さらに追従される。甕片の総量比率は約40%と多く、縄文または櫛描文施文及び内面ミガキの破片数が圧倒的に多い。ところが壺片の総量比率は約10%と少ない。この壺片の総量は高環・器台の約6%と比較すると多いが、元来、壺と高環・器台の1個体あたりの重量は異なるため、対等な比較は意味をもたず、むしろ壺の存在比率の低さをここでも際立たせる状況となる。

平面分布状況 平面的には全域に散在するが、北半中央付近(図81エリアB)にややまとまりを見せる。また、東部中央付近(図81エリアA)では土師器壺(土器-1)が正置しており、唯一のほぼ完形品である(土器1の出土状況詳細は後述)。

垂直分布状況 いずれもM4層または7層からの出土であり、多少の高低差はあるもののほぼ同一レベルでの出土といえる。

盛土内出土土器との関係 なお、平坦面出土破片の中には盛土層(M2・M3・M5・M6層)出土破片と接合するものもあり、これらについては図82～84の表記において明記(番号下に下線)した。これらの破片が存在することから、それ以外の平坦部出土破片についても、盛土構築時にたまたま平坦

盛土下平坦面(実測資料)



盛土下平坦面

遺物総重量	甕	壺	高環・器台	器種不明
8,398.7g (1,903片)	37.3%	11.6%	6.2%	44.7%
	鉢・片口 0.2%			
甕 3,131.8g	縄文施文 8.4%	櫛描文施文 1.7%	内面ミガキ 48.4%	赤彩 1.4%
	ハケ調整 0.4%	S字襷 2.2%	不明 48.0%	
壺 975.1g	縄文施文 18.7%	赤彩 7.5%	不明 71.9%	
高環・器台 520.0g	在地弥生系高環 1.6%	東海系高環 10.5%	赤彩不明 15.4%	不明器台 1.5%
	不明高環 3.9%	高環 or 器台不明 67.1%		
鉢・片口 21.3g	鉢 or 片口不明 100%			
器種不明 3,750.5g	縄文施文 1.3%	内面ミガキ 7.9%	赤彩 4.8%	不明
	櫛描文施文 0.2%			

表19 墳丘盛土下平坦面出土遺物の傾向グラフ

面に接するように混入したのではないかという、憶測もたつ。しかし、前述の盛土内出土の出土量比率を平坦面出土破片の比率と比較すると、その頻度において明確な差異が認められることから、平坦面に存在する破片資料の多くが、盛土以前に平坦面に存在していたと考える。

正置された壺（土器1）の出土状況（図82）

この土師器壺は、盛土填圧によって潰れているが、ほぼ1個体が正置されていたと考えられる。

設置に際しては、平坦面を円形土坑状に掘り窪め、その中に胴部の下半が収まるようにしてある。さらに、そこに据えられた後には、何かを入れて密閉している。この行為までが盛土構築以前に終了しているといおうことが状況から判断できる。なお、この

壺の内容物としては、骨片や副葬品類の有形物は一切認められず、しまりがよわく、フカフカした土が半分くらい堆積しているのみであった。

ところで、この壺の出土状況には特質される状況が認められる。それは、三重閉塞に用いられた壺片についてである。三重閉塞のうち最下層の破片は壺の底部片である。この底部に接合する資料はなく、その出所については不明である。しかし、その上の二層の破片はいずれも壺の胴部片であり、これが、墳裾部の方形土坑内出土の二重口縁壺の口縁部と同一個体であることが判明した。つまり、墳裾部出土の二重口縁壺（土器3）は墳丘完成後に墳頂部に配置されるのではなく、墳丘盛土構築以前に破碎され、二次的利用がなされていたと考えられる。（深澤）



図81 墳丘盛土下地表面 遺物出土分布図

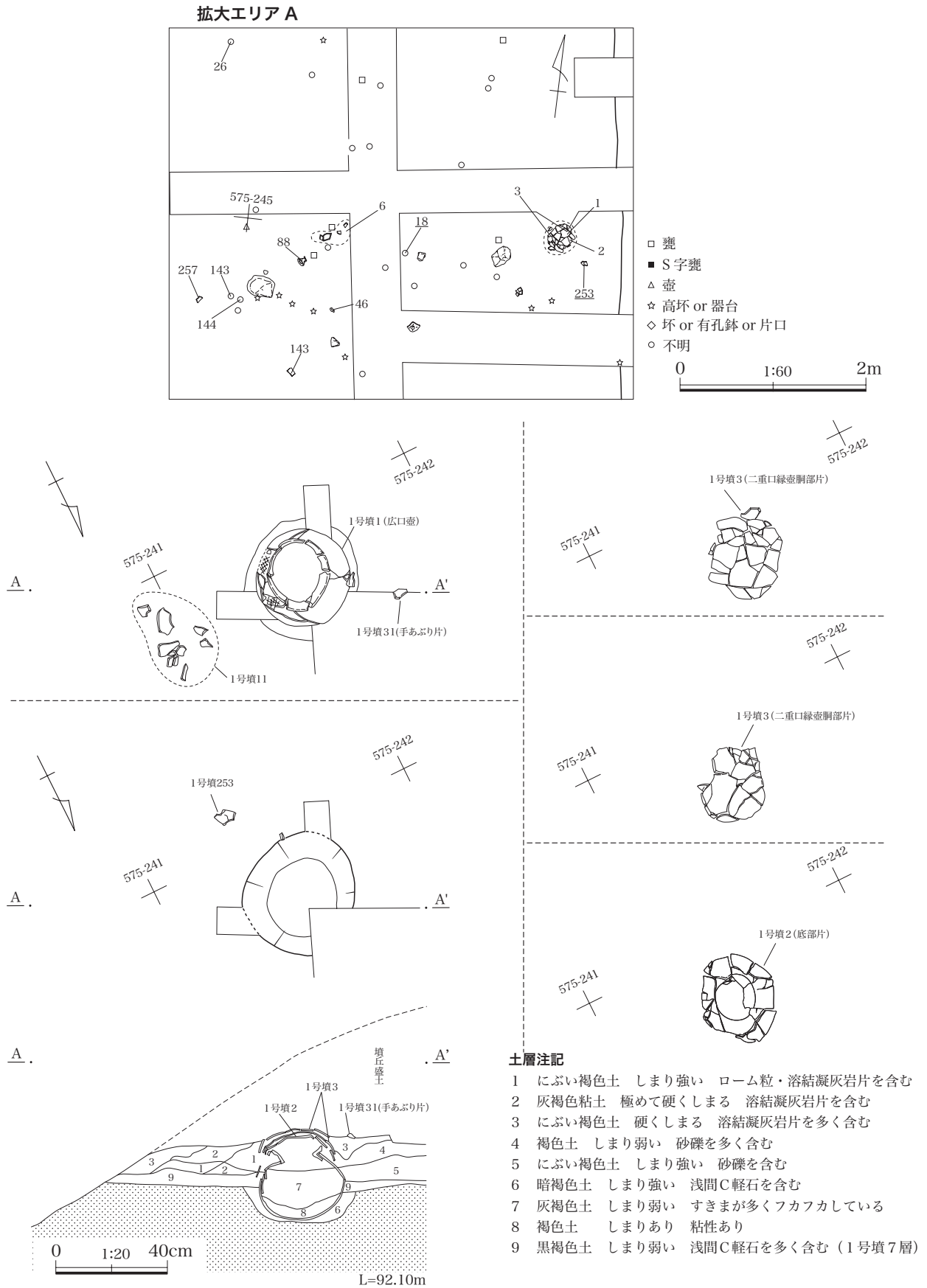


図 82 墳丘盛土下平坦面エリア A 拡大図及び据え置き壺 出土状況図



图 83 墳丘盛土下平坦面エリアB 拡大図

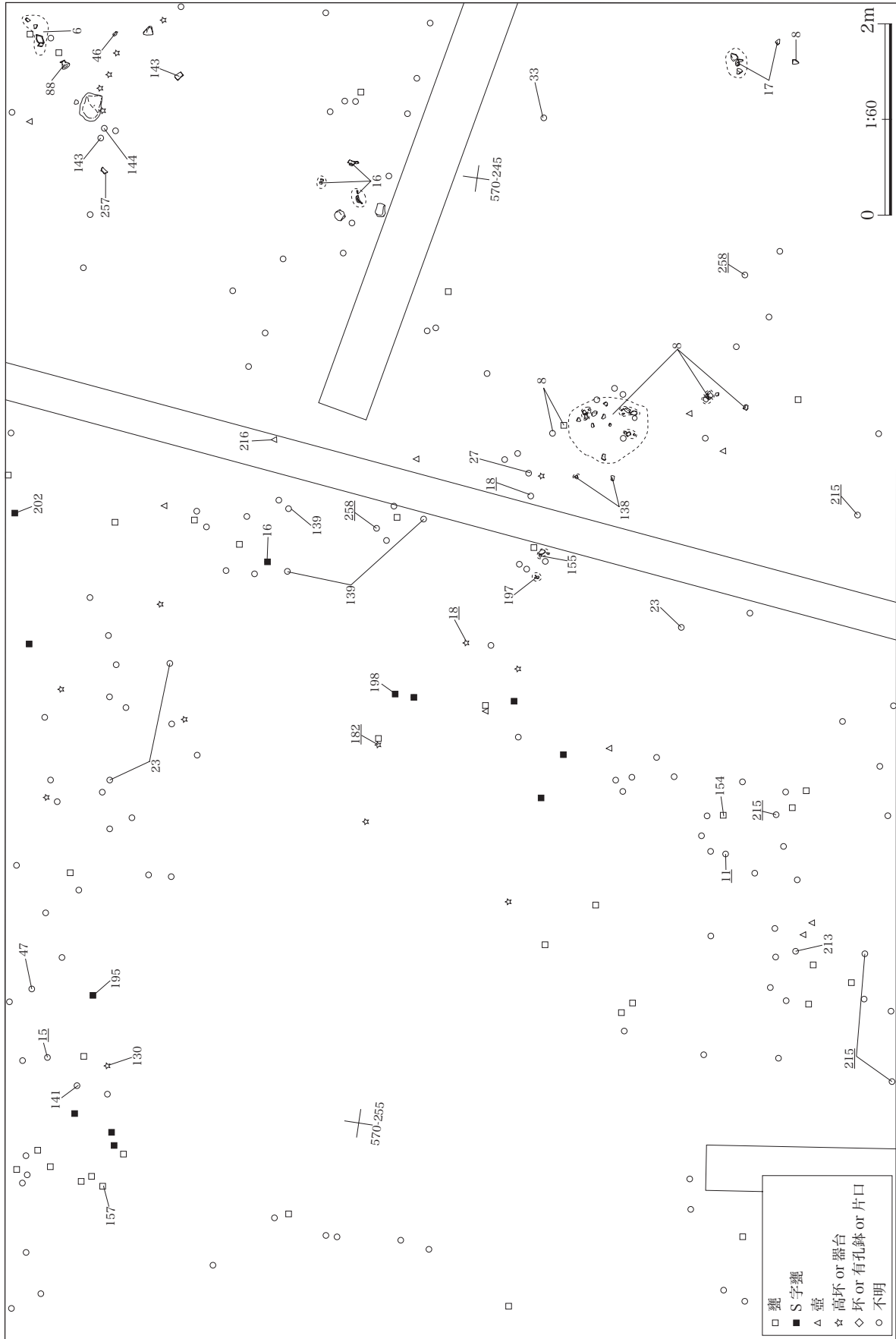


图 84 横丘盛土下平坦面エリアC 拡大図

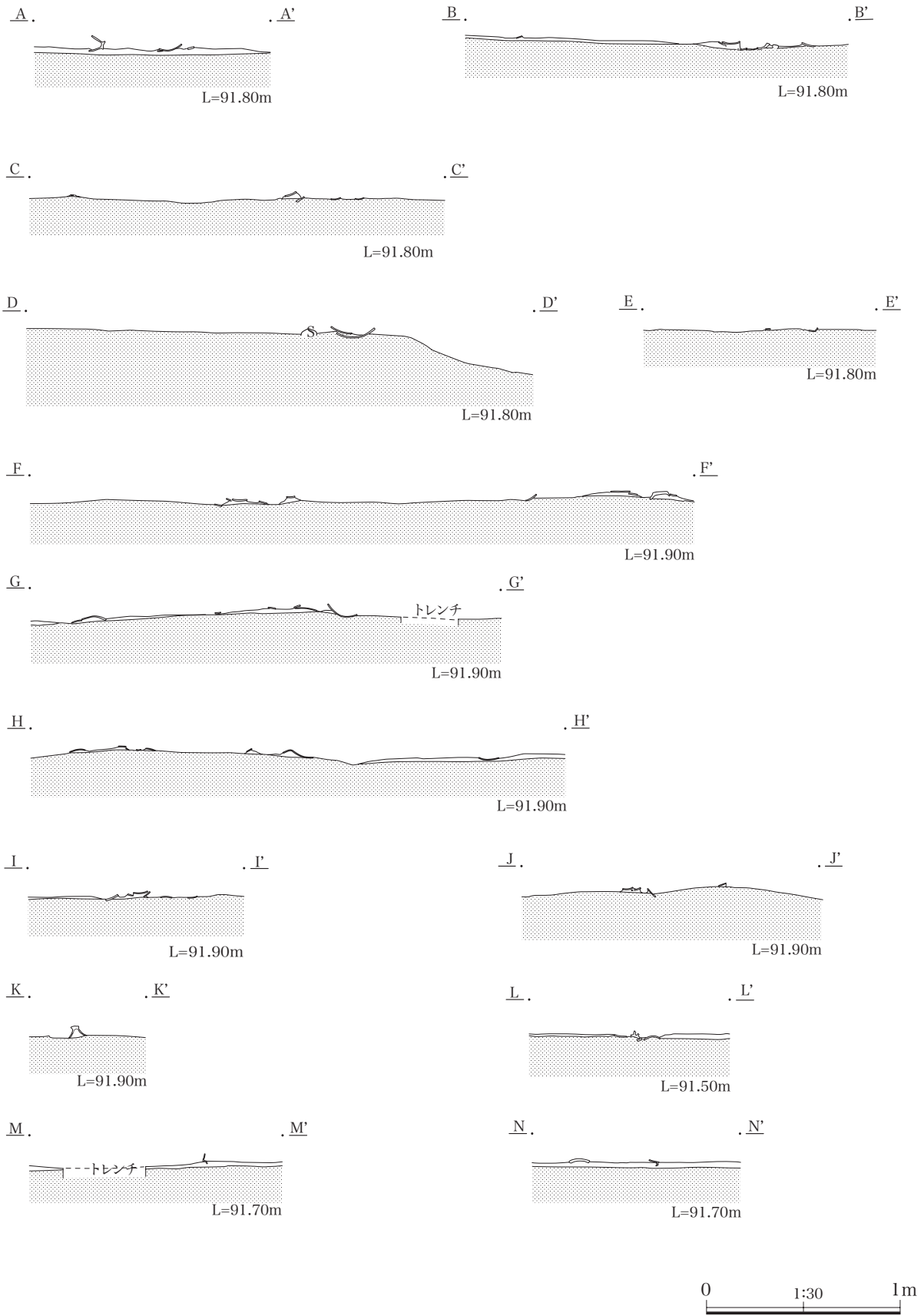


図 85 墳丘盛土下平坦面 エレベーション図

6 出土遺物について

(1) 鉄製品

a. 工具

鉋1 (図86-1)

現存長28.5cm、重量28g。刃部の錆が観察できる面(実測図左側)を表、その反対面を裏として記述する。刃部に比べて非常に長い茎部をもつ鉋で、刃部と茎部の境は明瞭でない。

刃部は先端部分をわずかに欠いており、現存長は1.5cmで、復元長は1.8cm程度と推測される。部刃表面の主軸にほぼ相当する位置に錆が認められる。また裏面には「裏すき」をもち、刃部横断面が「へ」の字状を呈する。

茎部はほぼ完存しており、長さ27.0cm、厚さ3mmを測る。木質がわずかに付着する以外に布・紐等は認められず、着柄されない状態で副葬された可能性がある。茎端から約7.5cmの位置で「く」の字状にゆるく屈曲している。この屈曲の原因を副葬後の土圧によると考えることもできるが、着柄状態でない可能性があることや、その曲がり方が1点に力のかかる原因にもとづく判断されることから、副葬前の意図的な折り曲げ行為の結果による可能性が高いと判断される。

鉋2 (図86-2)

現存長13.2cm、重量15g。柄巻が明瞭に残る面を表、その反対面を裏として記述する。刃部をまったく欠いており、その意味で別の鉄製品である可能性も皆無ではないが、各部位の特徴からこれを鉋とみるのが妥当と判断されることから、以下では鉋として記述する。破断部分のようすから欠損はほぼ刃部のみと判断でき、さらに不整な形状ではあるが茎端が残存していることから、鉋1とは異なり比較的短い茎部をもつ鉋であることがわかる。

茎部は厚さ4mmを測る。表面には柄巻が認められ、裏面には柄の木質が全面に残ることから、着柄状態で副葬されたことが明らかである。柄巻には幅4mmの帯状の有機質製品がもちいられており、織

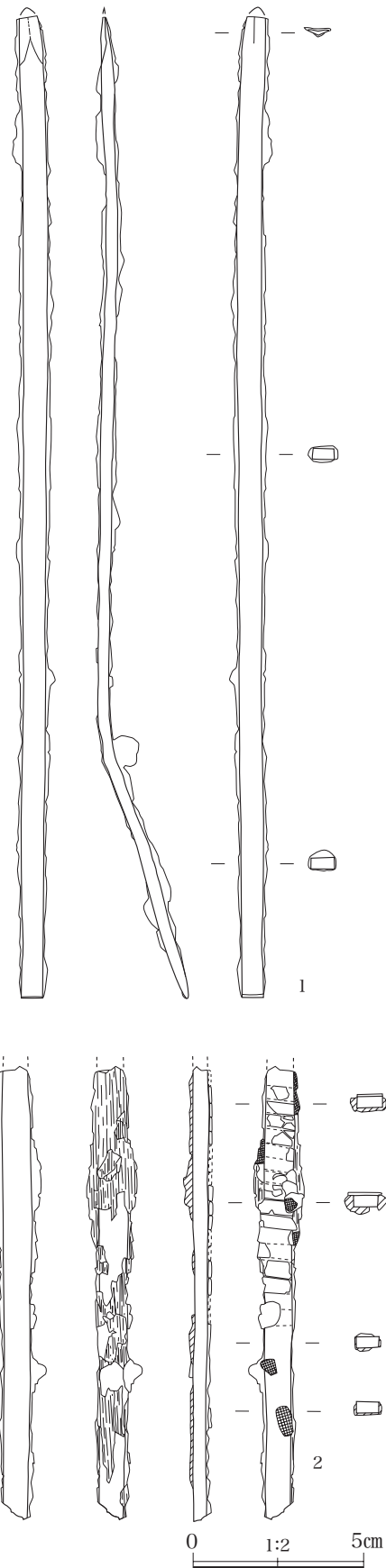


図86 第1主体部出土 鉋1・2

維が認められないことから革紐であった可能性が高い。茎端から 5.6cm の位置に柄巻の端部が観察でき、柄巻はここから刃部に向けて長さ 7.6cm にわたっておこなわれている。

なお、欠損部分の破断面には他の部位と同様の錆が形成されていること、および同じ埋蔵条件下にある鈍 1 では刃部がほぼ遺存していることをふまえれば、本資料の刃部の欠損は副葬後の錆化によるものではなく、副葬当時からのものであった可能性が高いと判断される。そして、当然このことは本資料を棺内に配置した者に認識されていたとみるのが自然である。

以上から、本資料の刃部の欠損は、何らかのやむをえない理由によるとみるより、意図的な行為の結果と理解するのが適当と考えられよう。

b. 武器

成塚向山 1 号墳から出土した 4 点の鉄製武器はいずれも剣形のものである。古墳時代の剣形武器には、把持して接近戦に使用する狭義の剣（以下「剣」とする）と、長柄をつける槍の 2 種類が存在することが知られているが、その区別は学界において必ずしも一致していない。以下では「剣」または「槍」とわけて記述してゆくが、その判断理由は個々の資料の文中にしめすとおりである。

剣 1 (図 87)

現存長 24.2cm、重量 63g。鉄製部分はほぼ全体が残る。比較的長い茎部を有し、4 点のなかでは最も刃部が短い。のちに述べる把付近の構造などから剣と判断される。

刃部は、長さ 13.6cm、元幅 2.5cm を測る。鑄は不明瞭で、刃部横断面は凸レンズ形を呈する。各所に木質が残着し、さらに鞘口付近に黒色膜が観察できることから、鞘口に黒漆が塗られた木製鞘が装着されていた可能性が高い。

茎部は、長さ 10.6cm、端部の幅 1.0cm を測り、関から端部（茎尻）までほとんど幅を変えない。茎尻は一直線状を呈する。茎尻から 6.8cm

の位置に直径 3mm の目釘孔が 1 箇所あり、木製目釘がもちいられる。関は、身の主軸にたいして双方がほぼ対称の位置にある直角関である。

茎部の全面に把の木質が付着しており、関を鋒側へわずかに 2.5mm 越えた位置に一直線の把端部（把縁）が観察できる。把の木質には明確な材の合わせ目が認められないが、茎の側辺の一部に周囲とはやや質感の異なる木質が観察できる。この部分は、X 線写真でみると明らかに周囲と木目の調子が異なるのにくわえ、周囲の木質と直線的に整然と画されていることから、別にはめ込まれた把材と判断されるにいたった。また、同様の部分が茎の主軸にたいして正対する位置にも観察できる。

すなわち、本資料の把構造は、一木の把材の片小口側から穴を掘り、ここに茎を差し込んで目釘で固

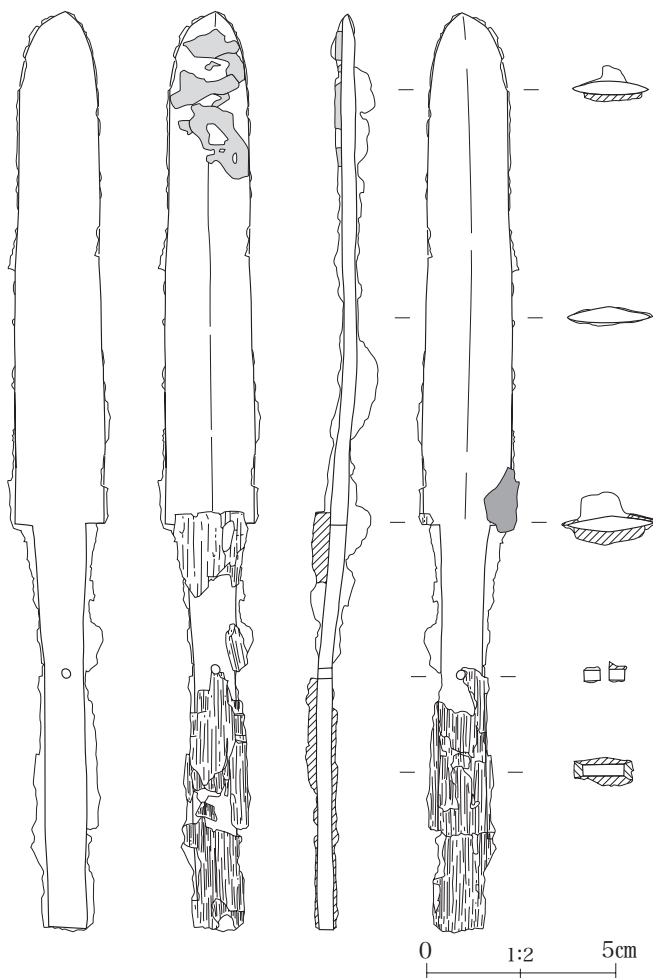


図 87 第 1 主体部出土 剣 1

定する方法を基本とするが、茎の長さに対応する深い穴を掘る必要から把材の途中に2箇所の補助孔を開け、ここからも掘り込みをおこなうことで容易かつ正確な茎納入穴を確保したのち、別材で補助孔を塞いだものと考えることができる。

このように、把をつくるにあたって製作が容易な二枚合わせの方法を取らず、あえて複雑な補助孔のある一木造りの構造が採用されたのは、使用の際の衝撃により把が割れることを防ごうとする実用上の理由にもとづくと理解される。同様の方法は、滋賀県東近江市雪野山古墳出土「剣3」などにみることができ(福永・杉井編1996)、さらに、明らかな剣の外装をもつ大阪府豊中市大塚古墳第2主体部西柳出土の石製把付剣にも採用されていることから(柳本ほか1987)、剣の多くに採用された把構造と理解できる。したがって、本資料が剣である可能性はきわめて高いと考えられよう。

この理解は、棺内中央付近に北頭位に安置されたと推定できる遺体との関連において、他の3点の剣形武器がすべて鋒を遺体の外側(頭部では北、足部では南)に向けて置かれたとみられるのにたいし、本資料のみは頭部付近で遺体中央の方向(南)に向けて置かれ、他と明確に異なる配置が取られていることも、成立の有力な傍証となる。

槍1 (図88)

現存長36.8cm、重量162g。刃部の一部が錆化により欠けるものの、鉄製部分はほぼ全体が残る。柄部品の残存によって本体の関が観察できず、X線写真により関の位置および形状を特定した。のちに述べる柄付近の構造から槍と判断される。

刃部は、長さ29.5cm、元幅3.4cmを測る。鏑は不明瞭で、刃部横断面は凸レンズ形を呈する。わずかに木質が残着することから木製鞘が装着されていた可能性が高い。

茎部は、長さ7.3cm、茎尻の幅1.1cmを測り、関から茎尻までほとんど幅を変えない。茎尻は一直線状を呈する。茎尻から4.3cmの位置に直径4.5mmの目釘孔があり、木製目釘がもちいられる。関は、

通常みられる左右対称の直角関ではなく、それぞれの位置がずれるうえ、片側が角の取れた鈍角状を呈する。これについては、当初から槍として使用することが想定されていたため関付近の整形にさほど強い意識がはらわれなかったという解釈と、製作中あるいは使用中に何らかの理由で片方の関が欠損したものに槍としての装具をつけたという解釈のいずれかがとられよう。

柄装具は比較的よく遺存し、柄の鋒側の端部(柄縁)は関を明確に越えた刃部上にあり、刃部主軸に直交する方向に一直線にのびる形態を呈する。柄の木質を観察すると、部材を合わせた接合線が茎の幅とほぼ一致する位置に2本認められ、反対面にも同様に2本の接合線が認められる。したがって柄は、茎の両面に合わせる2つの部品と、側面から合わせる2つの部品の4つを組み合わせていたことがわかる。筆者はこれを「4枚合わせ(技法)」と呼んでいるが、茎の両面にのる2つの部品については、音叉形を呈する一体の柄材であることが判明した実例が知られていることから、4枚合わせは、実際には3つの部品を組み合わせたものと理解される(菊地1996)。柄の茎尻側の端部(柄頭)は認められず、柄はなお先まで続くと推測される。柄材の上には細かい擦糸が密に巻かれ、さらにその上に黒漆が塗られている。

4枚合わせ技法でつくられた柄をもつ剣形武器は、古墳時代前期を中心とする時期の日本列島に広く分布するが、これらには、柄縁付近の横断面が菱形または杏仁形で握るのに適さず、柄頭が茎尻付近で確認されない、といった特徴が共通して認められる。このことと3つの部品をもちいる必然性を考慮すれば、本資料をはじめとする4枚合わせ技法が採用された剣は、長柄をつけた槍として使用されたと理解するのが適当と考えられる¹⁾。

槍2 (図89)

現存長23.9cm、重量97g。鋒が欠損するものの、鉄製部分はほぼ全体が残る。比較的短い茎をもつ。柄部品によって関が直接観察できず、X線写真によ

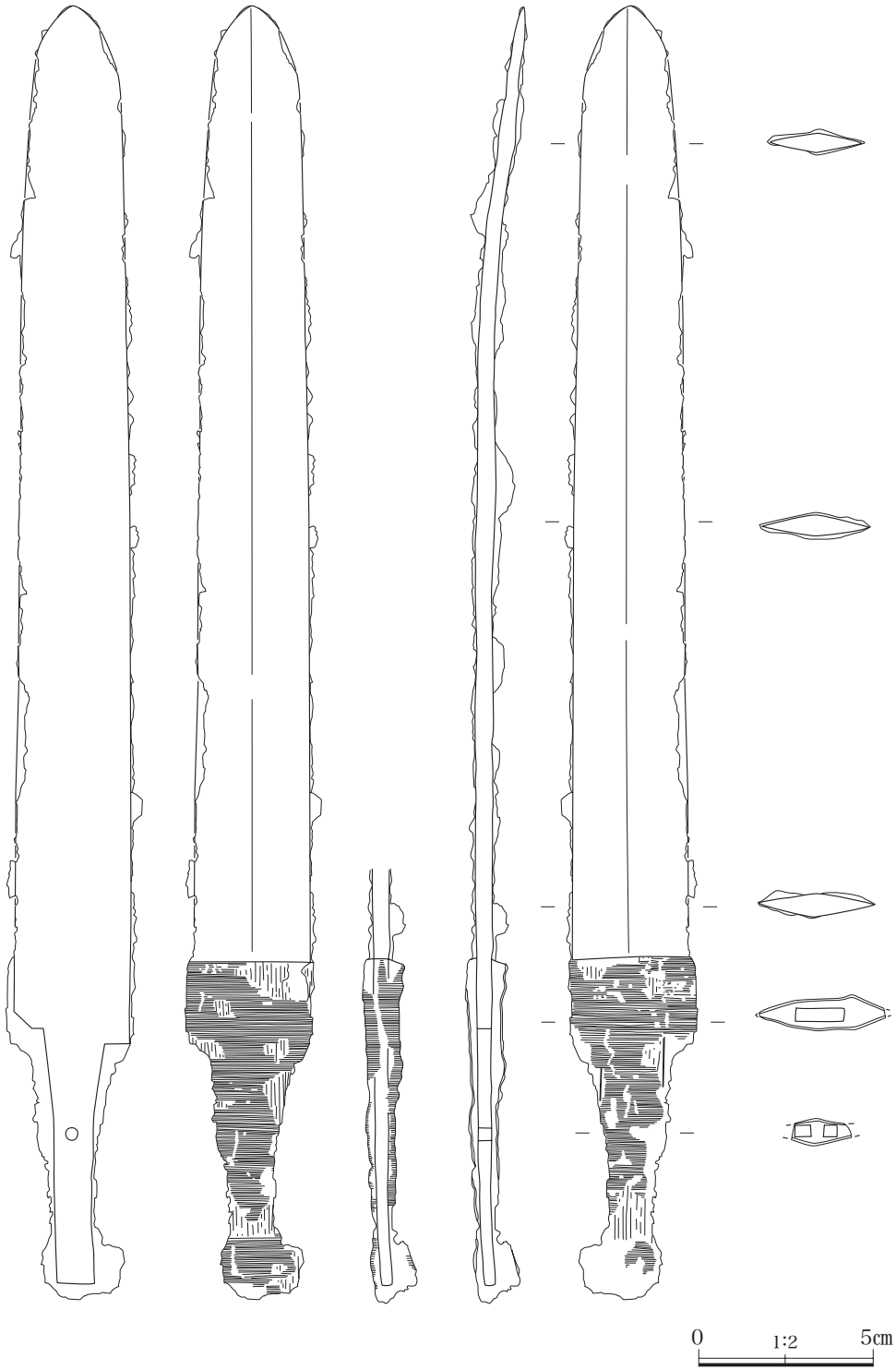


図 88 第1主体部出土 槍1

り関の位置および形状を特定した。柄付近の構造から槍と判断される。

刃部は、長さ19.1cm、元幅2.7cmを測る。刃部横断面はゆるい菱形を呈し、刃部に鑄がつくり出されていたと考えられるものの、これが明確でない部分もあり、シャープな鑄が刃部全体に形成されていたのではないと判断される。

身に明確な木質の付着は認められないが、後述する柄装具の上部に、明らかに本資料に付属するとみられる黒漆塗りの木製品がのることから、木製鞘が装着されていたとみるのが適当である。この鞘部品は関付近にのみ幅2.2cmにわたって観察でき、鞘への黒漆塗りは鞘口部分に限定しておこなわれたとみることができる。さらに鞘口端部をみると、ほかより1.5mm低い段が幅2mmにわたってつくり出され、この部分に非常に細い撚糸が巻かれたのち黒漆が塗られているのが観察できる。このような工作は、別づくりの二枚の材を合わせて鞘を製作した際に、鞘口端を補強するためおこなわれたと理解するのが適当であろう。したがってこの鞘は、別づくりの筒状の鞘口装具を鞘本体にはめ込むような比較的複雑な構造をもつものではなかったと考えられることになる。

茎部は、長さ4.8cm、茎尻の幅1.4cmを測り、関から茎尻までほとんど幅を変えない。茎尻は基本的に一直線状を呈する

方の角がやや欠けたような画像がとらえられる。茎尻から1.2cmの位置に直径3mmの目釘孔があり、木製目釘がもちいられる。関は双方がほぼ対称の位置にある直角関である。

鞘口の下から茎部のほぼ全体にわたって黒漆塗りの柄装具が遺存する。柄縁は、槍1と同様に関を明確に越えた刃部上で、刃部主軸に直交する方向に一直線にのびる形態を呈する。柄材の上全体に非常に細い撚糸が密に巻かれ、さらにその上に黒漆が塗られている。したがって柄材がよく観察できないが、破損部分の状況とX線写真から、槍1と同じ4枚合わせ技法が取られたものと推定される。したがって、本資料についても槍として使用されたと理解される。また、本資料は、鞘口が柄縁を呑むいわゆる



図89 第1主体部出土 槍2

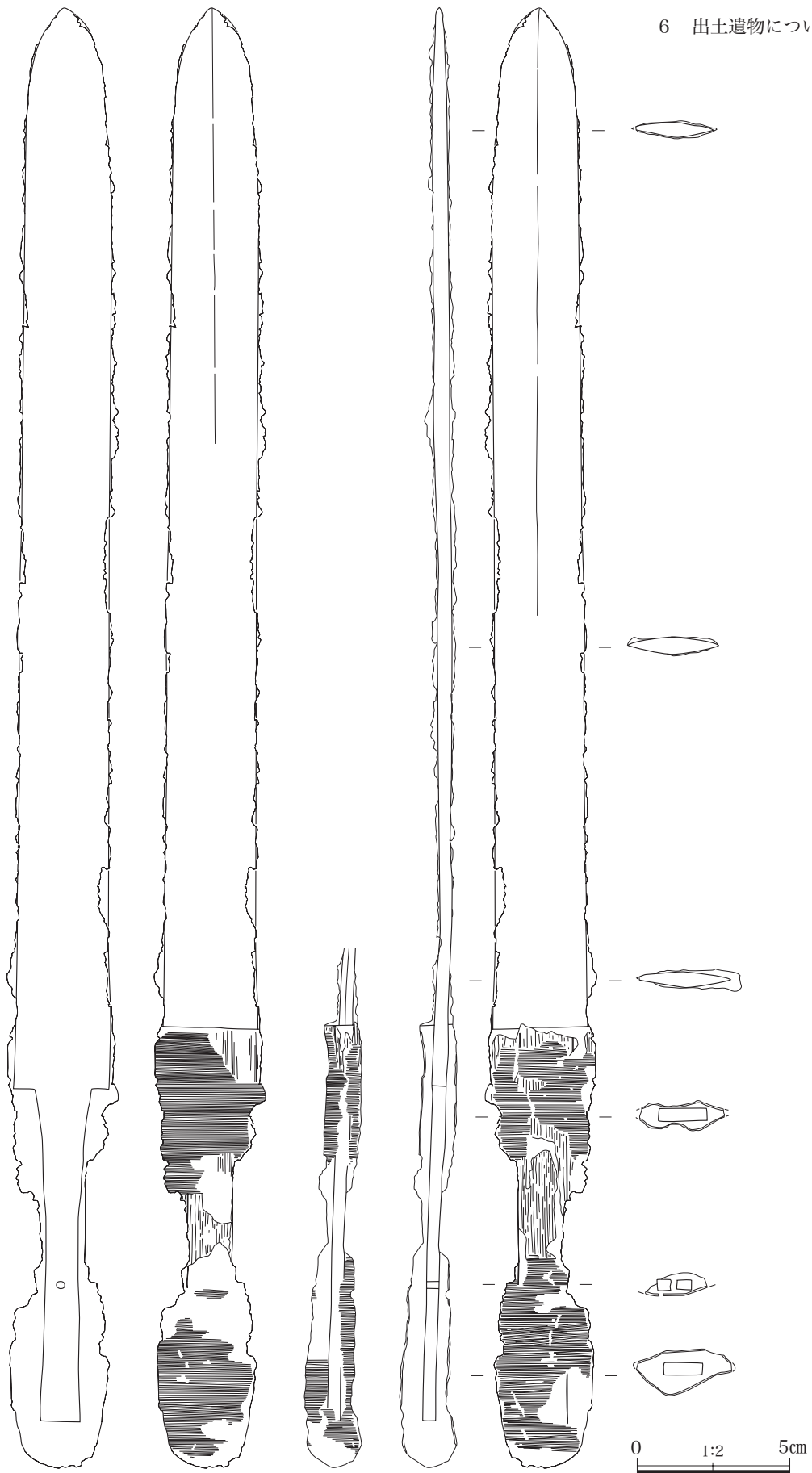


図90 第1主体部出土 槍3

呑口式の構造で、なおかつ鞘口端の位置や構造が判明した点でも、重要な情報を提供するものとなる。

槍3 (図90)

現存長46.7cm、重量198g。刃部の一部が錆化により欠けるものの、鉄製部分はほぼ全体が残る。4点のなかで最も長い刃部をもつ。柄付近の構造から槍と判断される。

刃部は、長さ35.7cm、元幅3.1cmを測る。刃部横断面はゆるい菱形を呈し、鑄がつくり出されていたと考えられる。明確な木質の付着が認められないことから、鞘を着装せずに副葬された可能性がある。

茎部は、長さ11.0cm、茎尻の幅1.3cmを測り、関から茎尻までほとんど幅を変えないが、幅の最も狭い部分は茎部の中程にある。茎尻は一直線状を呈する。茎尻から4.5cmの位置に直径2.5mmの目釘孔があり、木製目釘がもちいられる。関は双方がほぼ対称する位置にある直角関である。

茎部のほぼ全体にわたって黒漆塗りの柄装具が遺存し、部材の接着痕跡から4枚合わせ技法が明瞭に見て取れる。柄縁は槍1・槍2と同様に関を明確に越えた刃部上で一直線状を呈する。柄材の上全体に非常に細かい撚糸が密に巻かれ、さらにその上に黒漆が塗られている。以上から、本資料についても槍として使用されたと理解するのが適当である。

(菊地芳朗)

i) 菊地のこの考えにたいし、その蓋然性が高いことを認めつつも、最終的には長柄の存在が確認されなければ剣か槍か決定できないとする意見も一部に根強い。しかし、そのばあいでも、異なる把構造が同じ剣形武器に採用されることにたいする合理的な説明は管見に入らない。私はこれまで述べた理由から、剣の把構造の差異をその使用法の違い、すなわち一木造り技法もしくは二枚合わせ技法が採用されたものは剣として、四枚合わせ技法が採用されたものは槍として使用されたと解釈するのが最も合理的かつ適当と考え、長柄の存在を最終的な判定基準とする立場をとらない。

一方で、長柄がついたとは想定しにくい位置から4枚合わせ技法をもつ剣形武器が出土する実例が散見されることも事実であり、そのことが上記の消極的立場の根拠にあるように思われる。しかし、古墳では破砕鏡や折り曲げ鉄器などさまざまな破砕儀礼が認められるのにくわえ、鉄製品のなかには装具を外したうえで副葬されたと考えられる例もある。したがって、古墳における出土位置は器物本来の使用法を決定する最終的な根拠とはなりえず、やはり遺物そのものの型式的検討から使用法が導かれるべきものと考えている。

(2) 銅鏃 (図91)

銅鏃は、3点出土し、全て両鑄造柳葉式銅鏃である。以下、3点の銅鏃について記述する。

3点ともに、刃先よりふくらを有した後、内湾して関に至る緩やかなS字カーブを持つ外形を呈し、幅広である。ふくら部の幅より内湾部の幅のほうが小さく、関部の幅もふくら幅より狭い。刃の厚みも大きい。ふくら部の最大厚と内湾部の最小厚を比較するとふくら部のほうがほんの少し厚さが大きく、厚みの差があることが分かる。関部の厚みが最も大きい。

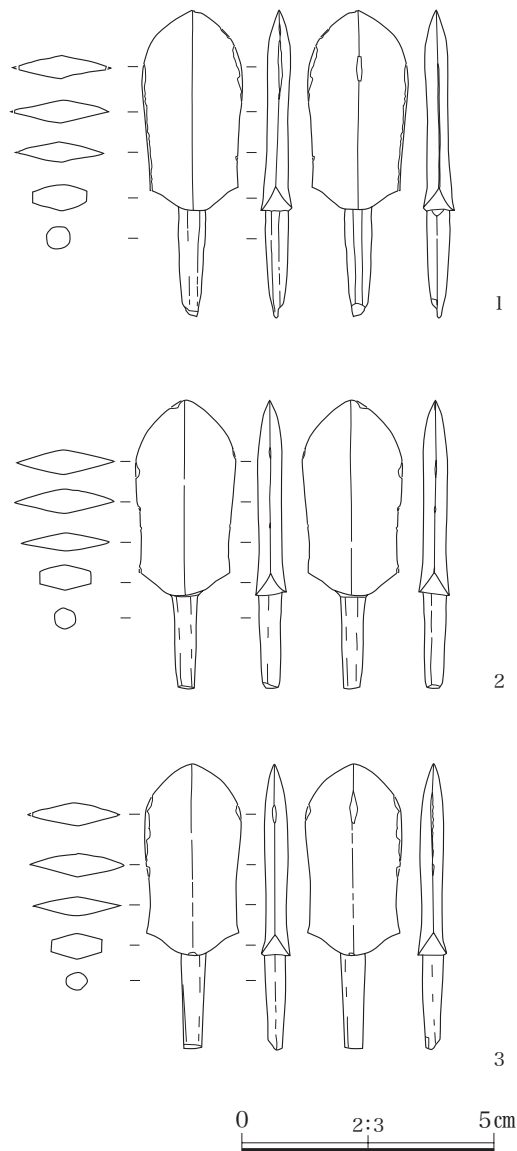


図91 第1主体部出土 銅鏃

茎は面取りが認められる。1は断面七面体でややいびつである。2・3は、面取りの面がはっきりしないが、断面多面体である。いずれも、茎端に断ち切りの痕跡を持つ。関を下から観察すると、茎基部を整形したものと思われる細い溝状の痕跡がある。

鍔身表面の研磨痕跡は不明瞭ではっきりしない。

表裏面ともに、鍔身の一部に凸状に内面からふくらんでいる部分があり、錆化が内面より少し進んでいたことを示しているものと思われる。

3点ともにほぼ同形同大で、同一の工人により製作されたものと考えて良いだろう。

1は、全長6.0cm、鍔身長3.9cm、茎長2.1cm、鍔身ふくら最大幅1.82 + cm、内湾最小幅1.71 + cm、関幅1.68 + cm、ふくら最大厚0.42cm、内湾最小厚0.41cm、関最大厚0.55cm、重量12.63 gである。

2は、全長5.67cm、鍔身長3.85cm、茎長1.82cm、鍔身ふくら最大幅1.93 + cm、内湾最小幅1.74cm、関幅1.78 + cm、ふくら最大厚0.45cm、内湾最小厚0.41cm、関最大厚0.58cm、重量12.83 gである。

3は、全長5.62cm、鍔身長3.78cm、茎長1.84cm、鍔身ふくら最大幅1.88 + cm、内湾最小幅1.71cm、

関幅1.77cm、ふくら最大厚0.43cm、内湾最小厚0.40cm、関最大厚0.54cm、重量10.17 gである。
(杉山秀宏)

(3) 重圏文鏡 (図92)

面径61×62mm、重量51.0gのやや歪んだ円形をなす青銅製の重圏文鏡(小型仿製鏡)である。縁部に小さな欠けが部分的にみられるもののほぼ完品といって良い状態で、腐食は縁部に若干みられる程度であるが、鏡面は二次的要因によるものか若干凹んでいるため、全体に歪な形状となっている。また、鏡面の1/2弱には織物(布)およびその痕跡(黒色に変化している)が残存している。

鏡背文様は外区の直行櫛歯文帯および内区の四重円圏文のみで構成されており、外区の各櫛歯文・内区の各圏線文ともに相互の間隔が不定で、シャープさに欠け、一部不鮮明な部分もみられる。

鏡面の厚さは1.5～2.0mm。縁は反りのある幅広の平縁で、幅は10～11mm、厚さは2.5～3.0mmである。鈕は径14×16mmの楕円形で、鏡背面からは6mm突出する面径に比して大型でしっかりとした半球形状のものである。孔はほぼ中央に開けられている。
(林原利明)

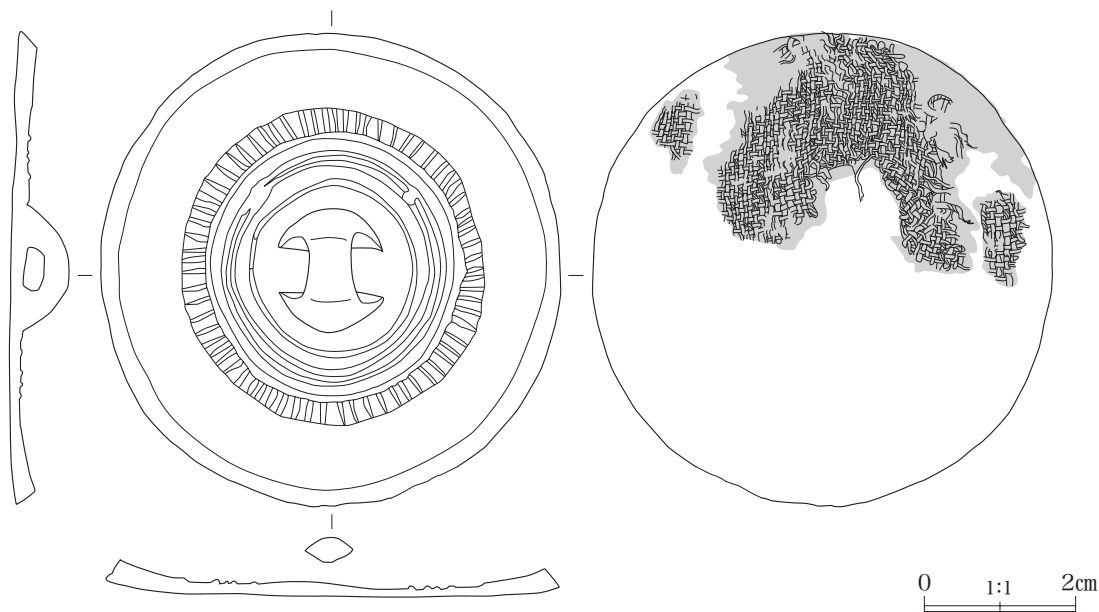


図92 第2主体部出土 重圏文鏡

(4) 玉製品

a. 翡翠勾玉

勾玉は1点(玉-143)であり、第1主体部からの出土である。

鮮やかな緑色を帯び、透明感の高い材質である。産地は産地分析の結果、糸魚川産の可能性が高いという結果が出ている(「第8章3」参照)。

寸法は長さ12.6mm、頭部の厚さ3.4mmを計り、重量は0.53gである。片面穿孔であるが、穿孔具の端部は鋭利ではないことが観察できる。

b. ガラス小玉

ガラス小玉は153点(玉-1~136・138~142・144~155)であり、第1主体部からの出土が124点(玉-1~114・146~155)、第2主体部からの出土が27点(玉-116~136・138~142・144)、主体部不明が2点(玉-115・145)である。

色調はすべてが淡青色透明を呈する。色調および材質分析の結果(「第8章4」参照)、材質はすべて

がカリガラスである。

個々の寸法は表20~22にあるが、これらの寸法は直径3.0~5.6mm、厚さは1.5~4.6mm、孔径1.0~3.0mmの範疇にある。重量は0.03~0.12gである。ほとんどの気泡は球状で散在するが、孔の壁面は平滑であり、引き伸ばし法によって製作されたことが判る。端部は明瞭に研磨されている。

c. 滑石管玉

滑石管玉は1点(玉-137)であり、第2主体部からの出土である。

色調は濃青灰色を呈するが、色むらが顕著で透明感に乏しい石材である。産地としては三波川帯の可能性が高い。

寸法は直径4.2mm、長さ13.4mm、孔径2.0mmを計り、重量は0.45gである。滑石製の管玉としては最も短小な法量である。

(本文：深澤・大賀／観察表：大賀)

表20 成塚向山1号墳 玉製品観察表(1)

玉番号	種類	材質	色調	製作技法	端面研磨	縦長(cm)	横長(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土位置	備考
1	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.56	0.53	0.39	0.30	0.12	第1主体	
2	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.44	0.43	0.30	0.25	0.08	第1主体	
3	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.43	0.40	0.39	0.10	0.10	第1主体	
4	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.46	0.45	0.30	0.15	0.09	第1主体	
5	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.37	0.34	0.15	0.08	第1主体	
6	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.32	0.31	0.41	0.20	0.06	第1主体	
7	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.39	0.37	0.20	0.09	第1主体	
8	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.44	0.43	0.34	0.20	0.11	第1主体	
9	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.36	0.25	0.15	0.05	第1主体	
10	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.30	0.20	0.06	第1主体	
11	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.47	0.46	0.32	0.20	0.11	第1主体	
12	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.53	0.52	0.23	0.25	0.09	第1主体	
13	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.28	0.20	0.05	第1主体	
14	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.45	0.42	0.33	0.20	0.09	第1主体	
15	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.46	0.45	0.28	0.20	0.08	第1主体	
16	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.36	0.34	0.28	0.15	0.04	第1主体	
17	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.36	0.33	0.24	0.10	0.05	第1主体	
18	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.44	0.41	0.26	0.15	0.07	第1主体	
19	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.42	0.40	0.30	0.15	0.07	第1主体	
20	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.38	0.28	0.15	0.07	第1主体	
21	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.36	0.34	0.37	0.20	0.07	第1主体	
22	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.25	0.10	0.05	第1主体	
23	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.25	0.20	0.05	第1主体	
24	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.34	0.31	0.28	0.20	0.03	第1主体	
25	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.30	0.15	0.06	第1主体	
26	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.48	0.47	0.27	0.20	0.09	第1主体	
27	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.21	0.20	0.05	第1主体	
28	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.51	0.49	0.29	0.20	0.10	第1主体	
29	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.44	0.41	0.23	0.15	0.06	第1主体	
30	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.38	0.29	0.15	0.07	第1主体	

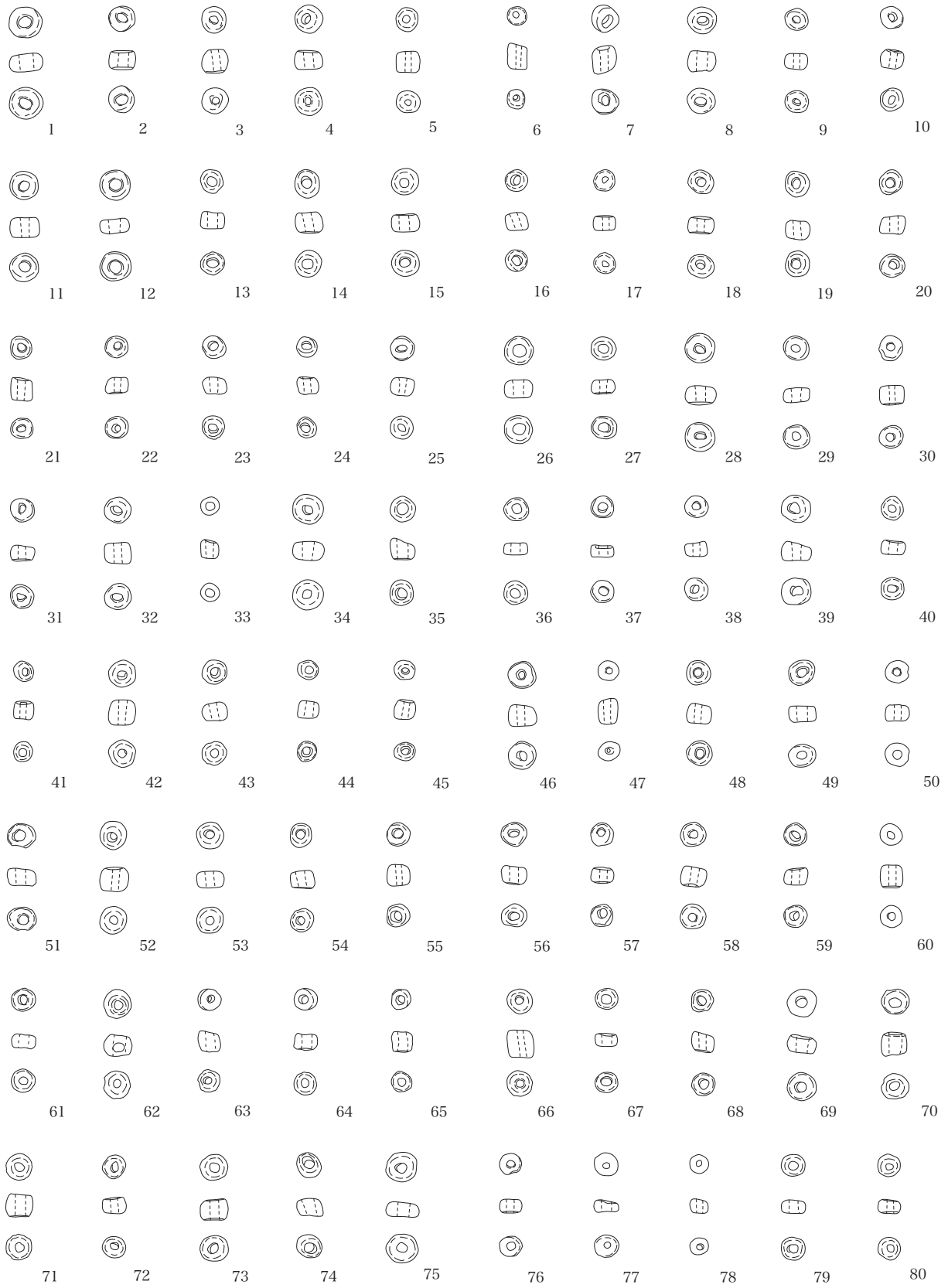
表 21 成塚向山1号墳 玉製品観察表(2)

玉番号	種類	材質	色調	製作技法	端面 研磨	縦長 (cm)	横長 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	出土位置	備考
31	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.37	0.23	0.10	0.05	第1主体	
32	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.46	0.45	0.36	0.20	0.10	第1主体	
33	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.32	0.30	0.31	0.15	0.04	第1主体	
34	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.51	0.50	0.31	0.20	0.12	第1主体	
35	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.42	0.40	0.35	0.20	0.07	第1主体	端面研磨弱い
36	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.19	0.20	0.04	第1主体	
37	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.17	0.15	0.04	第1主体	
38	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.25	0.15	0.05	第1主体	
39	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.49	0.46	0.30	0.20	0.10	第1主体	
40	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.37	0.24	0.15	0.06	第1主体	
41	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.32	0.31	0.30	0.15	0.05	第1主体	
42	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.45	0.44	0.42	0.15	0.11	第1主体	
43	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.37	0.31	0.20	0.07	第1主体	
44	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.33	0.32	0.28	0.15	0.05	第1主体	
45	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.35	0.34	0.29	0.10	0.05	第1主体	
46	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.46	0.45	0.35	0.20	0.10	第1主体	
47	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.33	0.31	0.40	0.10	0.07	第1主体	
48	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.32	0.25	0.08	第1主体	
49	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.43	0.41	0.27	0.20	0.07	第1主体	
50	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.26	0.15	0.05	第1主体	
51	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.47	0.45	0.29	0.25	0.07	第1主体	
52	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.46	0.45	0.37	0.15	0.11	第1主体	
53	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.45	0.44	0.27	0.15	0.08	第1主体	
54	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.30	0.20	0.06	第1主体	
55	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.35	0.35	0.20	0.07	第1主体	
56	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.29	0.15	0.06	第1主体	
57	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.24	0.20	0.05	第1主体	
58	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.31	0.20	0.08	第1主体	
59	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.26	0.10	0.06	第1主体	
60	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.37	0.15	0.07	第1主体	
61	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.39	0.22	0.15	0.06	第1主体	
62	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.47	0.46	0.34	0.20	0.10	第1主体	
63	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.32	0.15	0.07	第1主体	
64	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.27	0.15	0.07	第1主体	
65	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.34	0.33	0.35	0.20	0.06	第1主体	
66	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.45	0.42	0.46	0.10	0.12	第1主体	
67	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.19	0.20	0.03	第1主体	
68	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.36	0.31	0.20	0.05	第1主体	
69	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.48	0.47	0.29	0.20	0.09	第1主体	
70	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.45	0.42	0.36	0.30	0.09	第1主体	
71	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.44	0.43	0.29	0.20	0.10	第1主体	
72	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.27	0.15	0.05	第1主体	
73	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.46	0.43	0.35	0.20	0.10	第1主体	
74	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.32	0.30	0.26	0.25	0.04	第1主体	
75	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.53	0.52	0.22	0.20	0.08	第1主体	
76	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.21	0.15	0.04	第1主体	
77	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.15	0.10	0.04	第1主体	
78	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.31	0.30	0.22	0.10	0.03	第1主体	
79	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.37	0.21	0.15	0.04	第1主体	
80	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.24	0.15	0.05	第1主体	
81	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.28	0.15	0.06	第1主体	
82	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.44	0.42	0.27	0.20	0.06	第1主体	
83	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.26	0.15	0.05	第1主体	
84	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.31	0.10	0.07	第1主体	
85	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.49	0.47	0.34	0.25	0.10	第1主体	
86	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.36	0.35	0.33	0.15	0.07	第1主体	
87	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.36	0.21	0.20	0.04	第1主体	
88	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.43	0.40	0.26	0.25	0.06	第1主体	
89	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.43	0.42	0.26	0.15	0.07	第1主体	
90	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.42	0.40	0.32	0.20	0.08	第1主体	
91	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.36	0.34	0.28	0.15	0.05	第1主体	
92	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.31	0.20	0.07	第1主体	
93	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.26	0.20	0.05	第1主体	

第4章 調査報告2

表 22 成塚向山1号墳 玉製品観察表(3)

玉番号	種類	材質	色調	製作技法	端面 研磨	縦長 (cm)	横長 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	出土位置	備考
94	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.35	0.29	0.20	0.05	第1主体	
95	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.30	0.15	0.06	第1主体	
96	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.51	0.49	0.30	0.30	0.10	第1主体	
97	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.31	0.10	0.06	第1主体	
98	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.42	0.40	0.23	0.20	0.06	第1主体	
99	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.39	0.31	0.20	0.07	第1主体	
100	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.39	0.35	0.20	0.08	第1主体	
101	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.30	0.15	0.06	第1主体	
102	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.23	0.15	0.05	第1主体	
103	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.35	0.34	0.28	0.15	0.05	第1主体	
104	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.25	0.15	0.05	第1主体	
105	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.39	0.22	0.20	0.05	第1主体	
106	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.37	0.28	0.10	0.06	第1主体	
107	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.34	0.15	0.07	第1主体	
108	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.35	0.20	0.08	第1主体	
109	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.26	0.10	0.05	第1主体	
110	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.24	0.15	0.05	第1主体	
111	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.29	0.20	0.06	第1主体	
112	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.43	0.42	0.22	0.20	0.06	第1主体	
113	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.42	0.40	0.28	0.20	0.07	第1主体	
114	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.21	0.20	0.05	第1主体	
115	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.24	0.10	0.06	不明	
116	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.52	0.51	0.29	0.20	0.10	第2主体	
117	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.36	0.10	0.07	第2主体	
118	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.33	0.10	0.07	第2主体	
119	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.34	0.33	0.22	0.15	0.04	第2主体	
120	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.22	0.15	0.04	第2主体	
121	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.23	0.20	0.06	第2主体	
122	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.39	0.46	0.10	0.11	第2主体	
123	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.20	0.20	0.04	第2主体	
124	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.42	0.41	0.30	0.10	0.07	第2主体	
125	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.27	0.15	0.05	第2主体	
126	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.39	0.38	0.24	0.15	0.06	第2主体	
127	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.36	0.30	0.15	0.06	第2主体	
128	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.37	0.34	0.20	0.07	第2主体	
129	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.39	0.27	0.20	0.06	第2主体	
130	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.34	0.33	0.39	0.20	0.07	第2主体	
131	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.34	0.33	0.26	0.20	0.04	第2主体	
132	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.35	0.34	0.25	0.20	0.04	第2主体	
133	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.31	0.30	0.31	0.10	0.05	第2主体	
134	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.35	0.19	0.15	0.04	第2主体	
135	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.36	0.35	0.24	0.10	0.05	第2主体	
136	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.36	0.35	0.27	0.10	0.05	第2主体	
137	管玉	滑石	濃青灰色		-	0.43	0.42	1.34	0.20	0.45	第2主体	
138	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.47	0.43	0.34	0.20	0.10	第2主体	
139	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.36	0.35	0.20	0.15	0.03	第2主体	
140	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.35	0.30	0.20	0.05	第2主体	
141	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.41	0.40	0.26	0.15	0.06	第2主体	
142	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.43	0.42	0.22	0.10	0.05	第2主体	
143	勾玉	翡翠	緑色透明		-	1.26	0.75	0.34	0.10	0.53	第1主体	
144	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.48	0.42	0.32	0.17	0.10	第2主体	
145	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	(0.42)	-	0.28	(0.13)	0.04	不明	
146	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.37	0.33	0.28	0.10	0.07	第1主体	
147	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.35	0.32	0.19	0.11	0.05	第1主体	
148	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.31	0.29	0.11	0.06	第1主体	
149	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.40	0.37	0.25	0.09	0.06	第1主体	
150	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.31	0.30	0.40	0.11	0.07	第1主体	
151	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.32	0.30	0.30	0.08	0.05	第1主体	
152	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	0.38	0.36	0.31	0.11	0.05	第1主体	
153	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	-	(0.40)	0.33	(0.12)	0.03	第1主体	
154	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	(0.33)	-	(0.35)	(0.1)	0.01	第1主体	
155	小玉	カリガラス	淡青色透明	引き伸ばし	○	(0.32)	-	(0.30)	(0.1)	0.01	第1主体	
156	管玉	グリーンタフ	緑色		-	0.20	0.18	0.76	0.07	0.05	墳丘盛土	



第1主体部出土 1~80

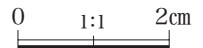


図93 1号墳出土玉製品(1) 1~80

第4章 調査報告2

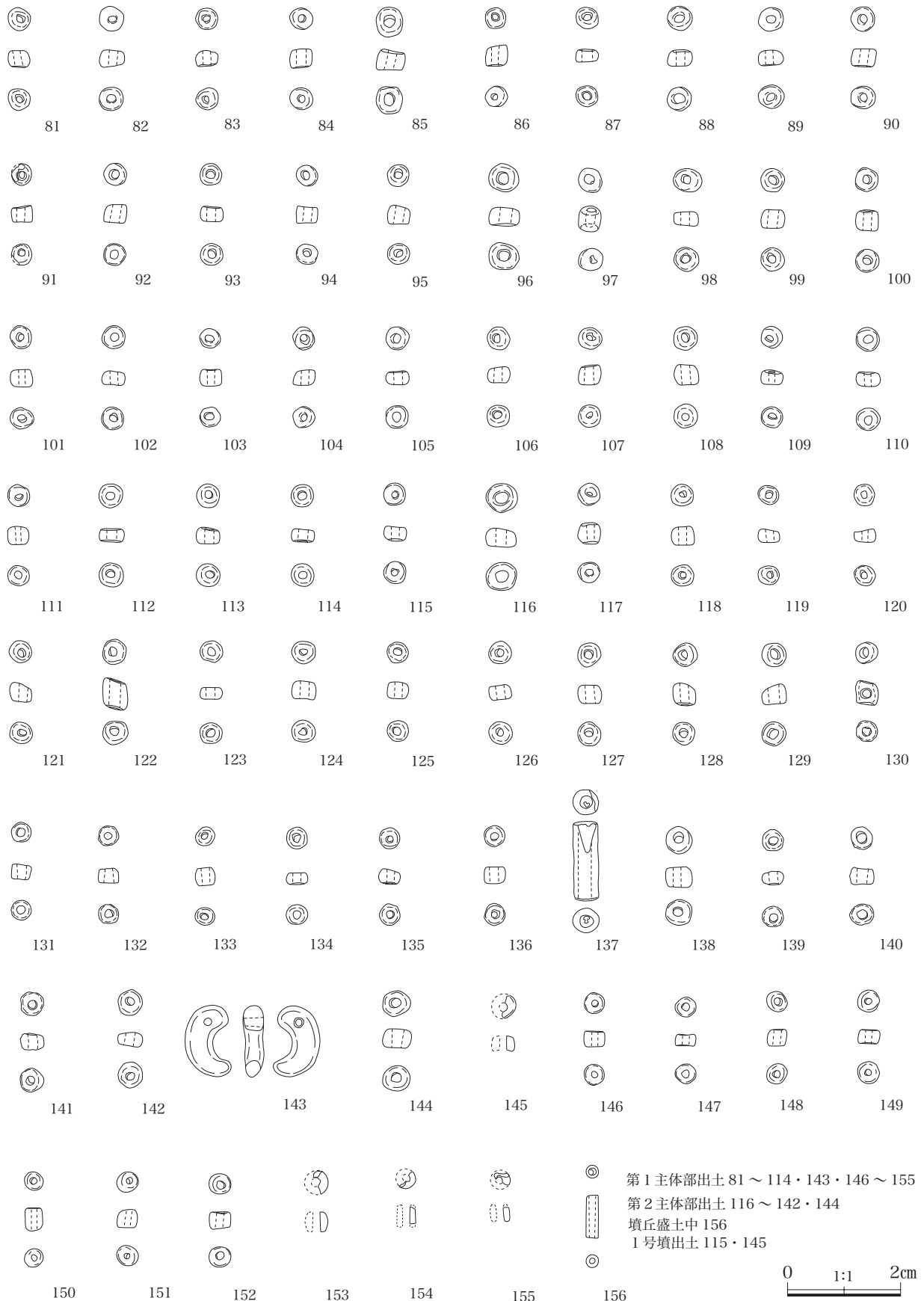


图94 1号墳出土玉製品(2) 81 ~ 156

(5) 顔料

顔料は第1主体部から出土した。色調は明赤褐色で、直径1.0～2.0mmの粒状を呈する。材質分析の結果、水銀朱と判明した（「第8章11」参照）。

(6) 土師器

本墳に関連しては、土師器のほかに、墳丘盛土中より縄文土器や弥生土器も出土している。だが、それらについては別途報告（第6章）することとし、ここでは土師器のみを報告する。出土遺物は総量にして50kgを超える。そのうち、250点を掲載する。

成塚向山1号墳からは、墳丘表面および盛土内・墳裾部・墳丘盛土下のそれぞれから古式土師器が出土している。各土師器に関する詳述は観察表に記載することにする。ここでは、その表凡例という意味合いで、各項目についての説明を記述する。

遺物番号…成塚向山1号墳での遺物番号を示す。本来の番号記載は「1号墳土器+番号」だが、ここでは「1号墳土器」の名称を略した。

図版番号…上段の記載は本文図版番号を示す。下段のPL番号は写真図版のPL番号を示す。

器種…形式としては甕・壺・高坏・器台・鉢・有孔鉢・片口・手焙形土器がある。

出土層位…各遺物の出土した層位を記載した。各層位はいずれも成塚向山1号墳関連の層であり、その内容は第4章2（8）に詳述してある。なお、複数の層位名称が記述されているものに関しては、複数層位の破片資料が接合したものである。

残存…各遺物の残存部位を記載した。

法量…各計測値を記載した。なお、口径・頸径・胴径・体径・裾径・底径の数値表記が斜字の場合は復元推定値を示す。また、器高の数値表記が斜字の場合は残存高の値を示す。

形態の特徴…各遺物の形態的特徴を記載する。なお、各器種における部位名称は図95の通りである。

技法の特徴…各遺物の技法的特徴を「外面」「内面」「底部」に分けて記載する。

成塚向山1号墳出土土師器において確認できる技法には次のものがある。

櫛描文…櫛歯工具によって施された文様である。

縄文…単節縄文・0段多条縄文が確認できる。

輪積み装飾…成形時の輪積みではなく、整形時に意図して残す輪積みのことを示す。

ミガキ…棒状工具による器面整形に採用された技法で、特に外面のミガキは器面の研磨効果が顕著である。

ナデ…ユビによるものと、ヘラ状工具を用いてのものがあ。前者は器面外面や内面の一部（口縁～頸部）に採用されることが多いのに対し、後者は器面内面に採用されることが多い。

ハケ…櫛歯状と思われる工具での器面調整で、器面外面の整形時に採用されることが多い。内面にも時折、認められる。

ケズリ…板状と思われる工具での器面調整で、器壁が十分乾燥する前に施した調整である。調整面における胎土中砂礫の移動が明確に認められる箇所について認定した。

ユビオサエ…指頭圧で、器面を押さえつけた痕跡が認められるものを示す。

穿孔…器壁にあいた孔を示す。特に記載のない限り、焼成前穿孔とする。

赤彩…器面にその痕跡があるについて記載した。

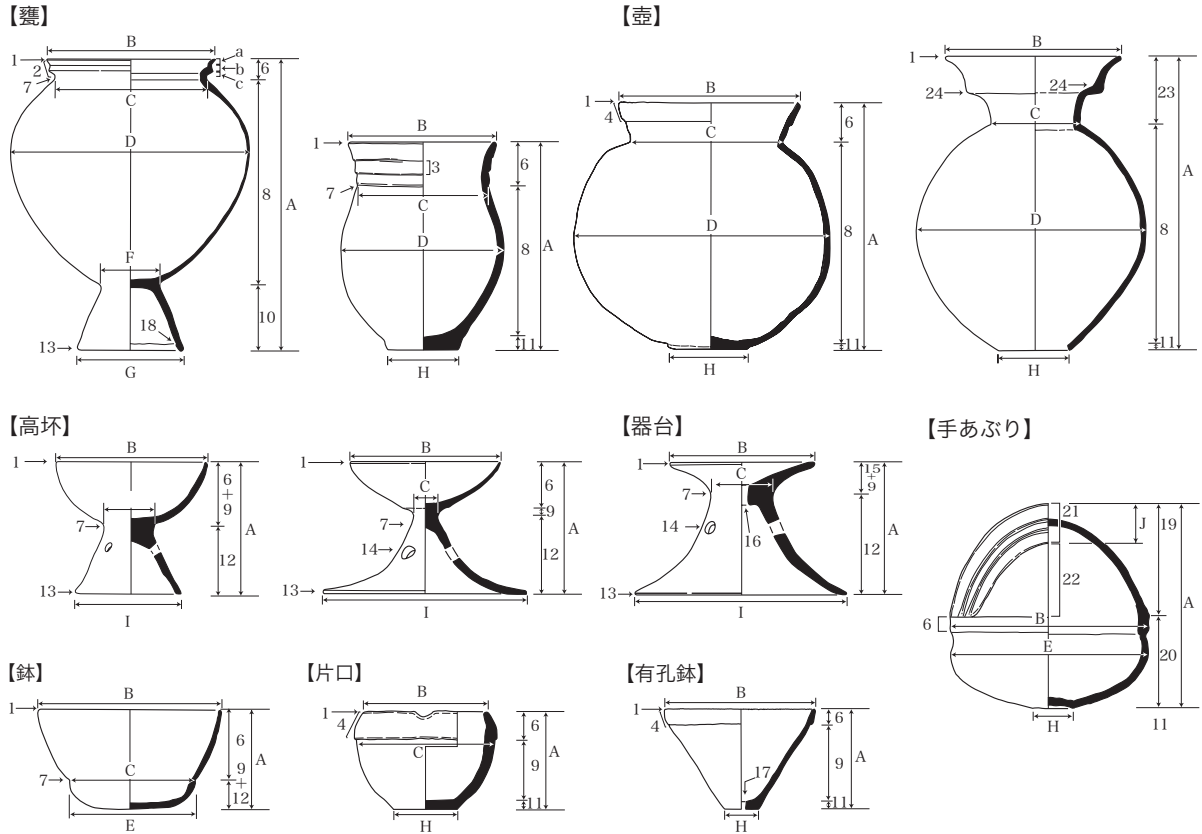
色調…色調は外面において主体を占める色調を記載した。なお、表記基準は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1993年度版に準拠した。

焼成…焼成は、「良→やや良→やや不良→不良」の4段階を設定し、識別して記載した。

胎土…胎土については、「緻密→やや緻密→やや砂質→砂質」の4段階を設定し、識別して記載した。さらに胎土に関しては、肉眼において目立つ混入物がある場合は併記した。なお、混入物記載に関しては、本地域の胎土中混入物として特徴的な、チャートや凝灰岩の有無を重視した。

その他…その他については、土器自体に特記内容がある場合はそれを記載したが、それ以外にも、胎土分析資料の場合は、それも記載した。（深澤）

《部位の名称・計測の位置》



1. 口縁端部 2. S字状口縁 (a. 上段 b. 中段 c. 下段) 3. 輪積み 4. 折り返し部 5. 棒状浮文 6. 口縁部 7. 頸部 8. 胴部
 9. 体部 10. 台部 11. 底 12. 脚部 13. 裾部 14. 脚部孔 15. 受け部 16. 受け部孔 17. 底部孔 18. 裾部内面折り返し
 19. 覆部 20. 鉢部 21. 面 22. 開口部 23. 二重口縁 24. 段
 A. 器高 B. 口縁部径 C. 頸部径 D. 胴部径 E. 体部径 F. 台部底径 G. 台部裾径 H. 底部径 I. 裾部径
 J. 面幅

《技法の表現》

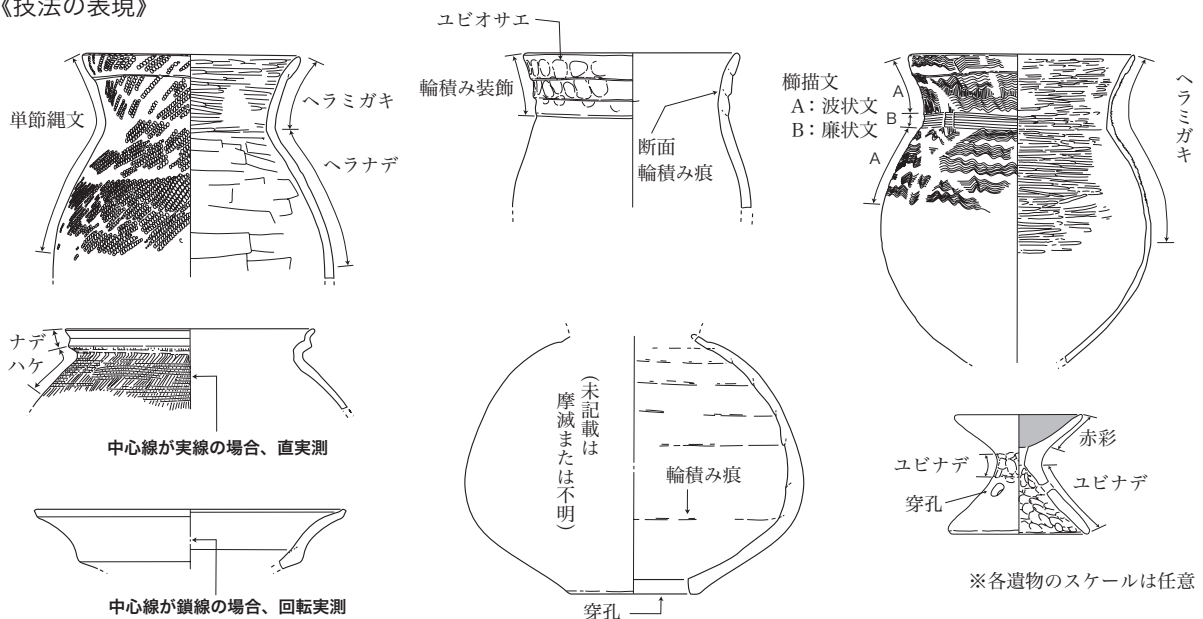


図95 古墳時代土器 実測図凡例

表 23 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(1)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
1	図 96 PL64	壺	7	口縁部 と 底部	口径 22.3 胴径 32.0 底径 10.2 器高 30.7	・口縁部は短く、直立気味に外斜する。折り返し口縁であり、端部には稜をもつ。頸部は明確に屈曲する。胴部は球胴で、中位に最大径をもつ。底部は平底である。	(外面) 口縁部はナデ後、ユビオサエを施す。胴部はナデ後、斜縦位ハケを施す。底部底面はナデを施す。(内面) 口縁部は横位ハケを施す。胴部上位はハケ、同中下位はヘラナデを施す。頸部と底部付近には指頭圧痕がある。	(色調) 明褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質胎土で、凝灰岩・輝石の混入が目立つ。(備考) 胎土分析 No.28
2	図 96 PL64	壺	7	底部	底径 16.1 残高 6.1	・底部は平底であり、体部は球胴と推定。	(外面) 胴部はヘラケズリ後、横斜位ミガキを施す。底部はナデ調整を施す。(内面) 胴部はヘラナデ及びユビナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色(焼成) やや良。(胎土) 砂質胎土で、凝灰岩・輝石の混入が目立つ。(備考) 蓋として転用。
3	図 96 PL64	壺	2 7	口縁部 と 胴部	口径 19.7 胴径 25.7 残高 30.4	・口縁部は二重口縁を呈する。頸部はほぼ直立するが頸部上端径が同下端径を僅かに上回る。頸部下端から胴部にかけての屈曲は明確である。胴部はほぼ球胴を呈し、中位に最大径をもつ。底部は欠損のため不明。	(外面) 口縁上端部には横位ミガキ、頸部には縦位ミガキを施す。胴部は縦位ミガキを施す。(内面) 口縁上端部は横位ミガキを施す。頸部はナデを施す。胴部は斜横位ナデを施す。なお、胴部内面上端には頸部との接合粘土が一部突出し、その箇所には指頭圧痕が顕著に認められる。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質胎土で、石英・輝石・凝灰岩の混入が目立つ。(備考) 胎土分析資料 No.23。胴部は1号墳土器1の閉塞蓋として転用。
4	図 96 PL64	甗	M 4	口縁部 と 胴部	胴径 21.7 底径 8.5 残高 23.8	・口縁部は欠損。頸部から胴部へは緩やかな屈曲を呈す。胴部は球胴で、中位やや上に最大径をもつ。底部は平底である。	(外面) 頸部から胴部にかけては、斜位ケズリ後、斜横位ミガキを施す。また底部に近い胴部にはユビオサエを施す。(内面) 胴部はナデ後、横位ミガキを施す。底面はナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質胎土で、チャート・凝灰岩の大粒片が目立つ。
5	図 96 PL64	甗	7 M 4	口縁部 と 胴部	口径 15.6 胴径 18.7 底径 - 器高 22.5	・口縁部は短く外反し、端部は折り返される。頸部は緩く、くの字に屈曲する。胴部は球胴で中位に最大径をもつ。底部は欠損のため不明。	(外面) 口縁部には縦位ハケ、頸部から胴部にかけては斜位ハケを施した後、頸部に右回りの二連止め籐状文を施し、その後口縁から胴部上半にかけて右回りの波状文をラフに施す。胴部下半は縦位ミガキを施している。(内面) ほぼ全面に横位ミガキを施す。なお、器厚が薄い(2~4mm) ことから、ケズリが成形時に行われた可能性がある。	(色調) 褐色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質胎土で、チャート・凝灰岩の大粒片が目立つ。(備考) 胎土分析 No.21
6	図 97 PL64	壺	2 3 M 4	復元 完形	口径 11.3 胴径 18.6 底径 6.8 器高 24.4	・口縁部は直立気味に開くが、やや内湾する。頸部は明確に屈曲する。胴部は球胴を呈し、中位に最大径をもつ。底部は平底である。	(外面) 口縁部はナデ、頸部はユビオサエ、胴部は縦位ミガキを施す。底部は貼り付けで底面ナデ調整を施す。(内面) 口縁部から胴部全面にわたり、斜位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質胎土で、チャート・凝灰岩、赤色鉱物片が目立つ。(備考) 胎土分析 No.30
7	図 97 PL64	壺	1 2 3 M 3	頸部 と 底部	口径 - 胴径 14.5 底径 6.6 器高 16.4	・口縁部は直立気味に開くと推測。頸部は緩やかな屈曲を呈する。胴部は球胴で、中位に最大径をもつ。底部は平底である。	(外面) 口縁部から胴部にかけてはナデ後、斜横位ミガキを施す。なお、胴部には赤彩も施す。底部は貼り付けで底面ナデ調整を施す。(内面) 胴部はナデ後、斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質胎土で、チャート・凝灰岩片が目立つ(備考) 器面外面に赤彩。
8	図 97 PL64	甗	7 M 4	復元 完形	口径 9.8 胴径 10.0 底径 5.5 器高 14.1	・口縁部は僅かに外反気味に直立する。頸部の屈曲は極めて弱い。胴部は中位で最大径となるが、球胴らしい張りはない。底部は平底である。	(外面) 口縁上位と頸部～胴部上位にかけて2箇所R L単節斜縄文の帯縄文をラフに施す。胴部下半の外面には縦位ミガキを施す。(内面) 全面に横位ミガキを施す。底部は貼り付けで底面ナデ調整を施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) 砂質胎土で、チャート・凝灰岩片が目立つ。(備考) 器面外面に赤彩。
9	図 97 PL64	甗	1 2 7 M 4	口縁部 と 底部	口径 17.6 胴径 24.0 底径 7.5 器高 34.0	・口縁部は短く、外反しながら開く。口縁端部は折り返す。頸部は緩やかに屈曲する。胴部は縦長の球胴を呈し、中位に最大径をもつ。底部は平底である。	(外面) 口縁端部は横ナデを施す。口縁部から頸部にかけては縦位ケズリを施し、胴部はケズリ後、縦位ミガキを施す。底部は貼り付けで底面ナデ調整を施す。(内面) 剥落が激しく、不明瞭だが、ナデ痕が認められる。	(色調) にぶい褐色。(焼成) 良。(胎土) 砂質胎土で、チャート・凝灰岩片が目立つ。
10	図 97 PL64	底部 穿孔 壺	M 1	頸部 と 底部	口径 - 胴径 16.6 (6.5) 底径 12.6	・口縁部は欠損。胴部は縦につぶれた球胴を呈し、最大径は中位やや下にある。底部は焼成前穿孔である。	(外面) 胴部は剥落が激しく不明瞭だが、ナデ痕跡は認められる。(内面) 胴部上位には斜位ナデとユビオサエを施し、胴部中位以下内面には斜位ハケを施す。なお、内面では輪轆み痕が明瞭に認められる。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質胎土で、凝灰岩・輝石・長石・石英の混入が目立つ。(備考) 胎土分析 No.31

表24 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(2)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
11	図97 PL64	甕	7 M4	頸部 底部	口径 - 胴径 21.5 底径 6.8 器高 23.0	・口縁部は欠損。頸部は緩やかに屈曲する。胴部は球胴で中位に最大径をもつ。底部は平底である。	(外面) 器面の摩耗が激しく不明瞭。胴部は斜位ケズリ後、斜縦位ミガキを施す。底面にはケズリを施す。(内面) 胴部は横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) 砂質胎土で、凝灰岩・輝石の混入が目立つ。
12	図98 PL65	甕	2 3	口縁部 胴部	口径 14.3 胴径 18.5 底径 - 器高 14.5	・口縁部は短く、直立気味に外反する。折り返し口縁。頸部は緩やかに屈曲する。胴部は球胴と思われる。最大径も中位にあると思われる。底部は欠損。	(外面) 口縁端部から胴部上半にかけて、LR単節斜縄文を施す。また口唇部にも縄文を施す。胴部中位以下はミガキを施したと思われる。(内面) 口縁部から頸部は横位ミガキを施す。胴部にはヘラナデ後、粗い横位ミガキを施す。輪積み痕も残存する。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) 砂質胎土で、凝灰岩・赤色鉱物の混入が目立つ。(備考) 胎土分析No.32
13	図98 PL65	甕	7 M4	胴部 底部	口径 - 胴径 13.9 底径 5.3 器高 10.1	・胴部は球胴と推定される。底部は平底である。	(外面) 器面の摩耗が激しく不明瞭。胴部は斜横位ケズリが認められる。底部はナデ調整を施す。(内面) 胴部は斜横位ナデが認められる。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。凝灰岩・チャートを多量に含む。
14	図98 PL65	甕	2	胴部 底部	口径 - 底径 7.8 器高 7.6	・胴部はやや縦長の球胴を呈する可能性があり。底部は平底である。	(外面) 胴部は縦位ケズリ後、縦位ミガキを施す。胴部の底部付近には横位ナデを施す。底部には木葉痕あり。(内面) 胴部は不定ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) 砂質。凝灰岩・赤色粒子の混入が目立つ。
15	図98 PL65	甕	M2 M3 M4	復元 完形	口径 12.5 胴径 12.7 底径 5.2 器高 13.6	・口縁部は短く外斜する。頸部は緩やかにくの字に屈曲する。胴部は球胴を呈し、中位やや上に最大径をもつ。底部は平底である。	(外面) 口縁部から頸部までは横位ナデを施す。胴部は縦位ミガキを密に施す。なお、頸部から胴部上半にはナデ・ミガキ後に変形斜格子状線刻を施す。(内面) 口縁部は横位ナデを施す。胴部は横位ミガキを施す。	(色調) にぶい褐～橙色。(焼成) 良。(胎土) 凝灰岩の混入がわずかに目立つ。
16	図98 PL65	S字甕	M4	口縁部 肩部	口径 18.3 胴径 - 底径 - 器高 5.0	・S字状口縁の下段は水平気味に、上段は斜め上位に開き、口縁端部は丸く収める。口縁内面にも屈曲をもつ。なお、口縁外面形状はS字屈曲というより極めて短い二重口縁の屈曲部が断面三角形に突出した形状に近い。頸部外面はくの字状に屈曲し、内面に幅8mmの面をもつ。胴部は球胴で、上位に最大径をもつものと思われる。	(外面) 口縁部は横位ナデを施す。頸部は棒状工具による沈線を部分的に施す。胴部は右上がりのハケ目を施した後、肩部のみに短いピッチの横位ハケを施す。(内面) 口縁部は横位ナデを施す。頸部は横ミガキを施す。胴部はナデを施し、頸部に近い部分のみにはユビオサエを施す。	(色調) 橙色。(焼成) とても良。(胎土) 凝灰岩の混入がわずかに目立つ。(備考) 胎土分析No.19
17	図98 PL65	高坏	7 M4	坏部	口径 13.5 頸径 3.2 裾径 - 器高 6.0	・坏部は頸部から口縁端部にかけてやや内湾気味に外斜する。脚部は欠損。	(外面・内面) 坏部口縁部は横位ナデを施す。坏部体部には横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) 砂質胎土だが、チャート・凝灰岩片は目立たない。
18	図98 PL65	有孔鉢	7 M2 M3 M4	復元 完形	口径 18.8 底径 4.3 器高 12.5	・折り返し口縁であり、胴部は直線的に開く。底部は平底で、底部中央に直径1.1cmの孔が1つ開く。	(外面) 折り返し口縁部にはLL反撚(または0段多条) 縄文を施し、口唇部にも縄文を施す。胴部は縦位ミガキを密に施す。底部もミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) 石英が僅かに目立つ。(備考) 胎土分析No.33
19	図98 PL65	高坏	M2 M3	坏部	口径 15.8 頸径 2.9 裾径 - 器高 5.3	・坏部は体部下位に明確な稜を有し、そこから上位はやや内湾気味に外反する。口縁部は弱く屈曲し、僅かに内斜する。	(外面) 坏部は横位ミガキを施し、坏部下端の稜以下(=頸部) はユビナデを施す(内面) 坏部は上半では横位ミガキ、下半では斜縦位ミガキをそれぞれ施す。	(色調) にぶい黄橙色(焼成) 良。(胎土) 石英・赤色粒子が僅かに目立つ。(備考) 胎土分析No.34
20	図98 PL65	高坏	1 7 M2 M3 M5	脚部	口径 - 頸径 3.1 裾径 18.8 器高 7.9	・坏部は欠損。脚部は頸部から裾部にかけて外反して開く。脚部中位に直径1.3～1.4cmの孔がほぼ等間隔に4孔あく。	(外面) 裾部は上半で斜縦位、下半では斜横位にミガキを施す。(内面) 裾部は頸部に近い部分のみ、ユビナデを施し、それ以外の部分では斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) 石英・チャート・凝灰岩の粒子が目立つ。(備考) 胎土分析No.35
21	図98 PL65	高坏	7	復元 完形	口径 9.4 頸径 3.3 裾径 6.6 器高 8.2	・坏部は内湾気味に外斜し、碗形を呈する。脚部は僅かに外反気味に開く。脚部中位に6～7mmの孔がほぼ等間隔に3孔あく。	(外面) 坏部はナデ後、ミガキを施す。頸部はユビオサエを施す。脚部は上半で縦ミガキ、下半で横位ミガキをそれぞれ施す。(内面) 坏部は横ミガキを施す。脚部はユビナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) 石英・凝灰岩の粒子がやや目立つ。(備考) 胎土分析No.36

表 25 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(3)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
22	図 98 PL65	不明 土製品	M 2	半損?	長 4.8 幅 4.7	・匙状を呈する。匙側部には対位置に角状の短い突起が2つ付く。なお、匙端部は欠損。	(表裏面) ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) 凝灰岩・チャートの混入が僅かに目立つ。(備考) -
23	図 98 PL5	甕	7 M 2 M 3 M 4 M 5	胴部	口径 - 胴径 (18.5) 底径 - 器高 10.0	・胴部は球胴を呈す。	(外面) 器面の剥落が激しく、不明瞭。胴部はケズリ後、ミガキを施すものと思われる。(内面) 器面の剥落が激しく、不明瞭。胴部はナデを施すと思われる。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質胎土で、凝灰岩の混入が僅かに目立つ。
24	図 98 PL65	鉢	M 1	口縁部 底部	口径 9.3 頸径 6.3 底径 3.8 器高 5.1	・口縁部はやや内湾気味に外反する。頸部は僅かに屈曲する。体部は高さ短く、最大径は上位にある。底部は平底である。	(外面) 口縁部はミガキを施す。体部は上半には横位ミガキを施し、下半には斜位ヘラケズリを施す。底面はヘラケズリによって形作られている。(内面) 口縁部は横位ミガキを施す。内部はナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) 石英の混入が僅かに目立つ。(備考) 外面に赤彩。
25	図 99 PL65	甕	7 M 4	胴部	胴径 (26.0) 器高 17.0	・球胴を呈する。	(外面) 横位ミガキを密に施す。(内面) 横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) チャート片の混入が目立つ。
26	図 98 PL65	器台	7 M 4	脚部	頸径 (2.5) 底径 10.6 器高 5.4	・脚部はハの字状に開き裾部付近で僅かに内湾する。脚部上位に直径1.0cmの孔が3つ開く。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) ユビナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) 砂質胎土で、凝灰岩片の混入がやや目立つ。
27	図 99 PL65	甕	7 M 4	胴部	頸径 - 器高 5.4	・球胴を呈すると思われる。	(外面) 横位ミガキを密に施す。(内面) 横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) チャートの混入が目立つ。
29	図 99 PL65	甕	M 4	口縁部 胴部	口径 13.7 胴径 (23.5) 底径 - 器高 15.3	・口縁部は僅かに外反気味に直立する。頸部は緩やかに屈曲する。胴部は球胴を呈し、最大径を中位にもつ。底部は不明。	(外面) 口縁部から頸部にかけては横位ナデを施す。胴部はナデ後、横位ミガキを施す。(内面) 口縁部は横位ミガキを施す。頸部から胴部にかけてはナデ後、横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) チャート片の混入が目立つ。
31	図 99 PL65	手焙形 土器	M 1 M 2	覆部 底部	覆高 (9.7) 鉢高 7.1 器高 (16.8) 面幅 3.0 口径 15.9 体径 16.0 底径 3.1	・覆部は鉢部の1/2程度の範囲に存在し、面下端は鉢部のほぼ中心付近で口縁部と接合する。面は覆部の上下に突出し、その外面に2条の隆帯が貼付する。口縁部は受口状体径が退化したような形状を呈す。体部はやや上位に最大径をもち、底部は僅かな上げ底である。	(接合) 面と覆部との接合は、覆部端部に面を貼り付け、接合部の上下を粘土でおさえている。覆部と体部の接合は、覆部下端と口縁部を設置させ、その設置部の内外面を別粘土でおさえることで、固定している。(外面) 覆部はナデ後、斜横位にヘラ描状の沈線が数条施される。口縁部は横位ナデを施す。体部は斜横位ナデ後、部分的にハケを施す。(内面) 全面、斜横位ナデを施す。	(色調) オリーブ黄色。(焼成) やや良。(胎土) 白色粒子・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 胎土分析 No.18
32	図 99 PL65	甕	4	胴部 底部	残高 7.4 底径 8.2	・平底で、体部は直線的に開く。	(外面) 胴部はナデ後、ミガキを施す。底部はナデを施す。(内面) 胴部はナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
33	図 100 PL65	甕	7 M 4	底部	底径 6.7 残高 2.2	・平底で、胴部からはやや突出する。	(外面) 縦位ハケを施し、底部付近はナデ。(内面) 斜位ナデ。(底面) ナデ・周縁部のみケズリを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。
34	図 100 PL65	甕	M 3	底部	底径 5.9 残高 3.3	・平底で、胴部からの突出は弱い。	(外面) 横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ケズリを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャートの混入あり。
35	図 100 PL65	甕	7	底部	底径 7.2 残高 2.0	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) 剥離のため不明。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。
37	図 100 PL65	甕	M 4	底部	底径 5.9 残高 1.2	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ミガキを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 明黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫を含む。
38	図 100 PL65	甕	4 M 3	胴部 底部	底径 5.5 残高 4.2	・胴部は直線的に開く。底部は上げ底風の平底で胴部からの突出は弱い。	(外面) 縦位ミガキ、底部付近のみナデを施す。(内面) 横位ミガキを施す。(底面) ケズリを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) 緻密。
39	図 100 PL65	甕	7 M 4	底部	底径 5.6 残高 1.5	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデ後、横位ミガキを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。
40	図 100 PL65	甕	3 7	底部	底径 8.8 残高 1.2	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) 剥離のため不明。(底面) ナデを施す。	(色調) 黒褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。

表 26 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(4)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
41	図 100 PL65	甕	3 M3	底部	底径 6.1 残高 2.2	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) 横位ミガキを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) 砂礫の混入が目立つ。
42	図 100 PL65	甕	7	胴部 底部	底径 6.3 残高 4.7	・胴部は僅かに外反して直立気味に開く。やや丸底風の平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質で、凝灰岩の混入が目立つ。
43	図 100 PL65	甕	7	底部	底径 3.9 残高 1.7	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) 斜横位ケズリを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。
44	図 100 PL65	甕	M2 M3	底部	底径 6.0 残高 2.1	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質胎土。
45	図 100 PL65	甕	M4	底部	底径 6.0 残高 1.3	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) 剥離のため、不明。(底面) ナデを施す。	(色調) 赤褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質胎土。
46	図 100 PL65	甕	M4	底部	底径 5.4 残高 2.0	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ケズリを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫混入が目立つ。
47	図 100 PL65	甕	M4	底部	底径 5.0 残高 1.3	・平底で、胴部からの突出は弱い。器厚が薄い。	(外面) ナデを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良好。(胎土) 緻密。
48	図 100 PL65	甕	M4	底部	底径 7.0 残高 1.3	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) 剥離のため、不明。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや不良。(胎土) チャート混入が目立つ。
49	図 100 PL65	甕	M3	底部	底径 6.0 残高 1.8	・平底で、胴部からの突出は弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 明褐色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質、砂礫の混入が目立つ。
50	図 100 PL65	甕	M3	底部	底径 6.1 残高 1.3	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) 斜位ケズリを施す。(内面) 斜位ミガキを施す。(底面) ケズリを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。
51	図 100 PL65	甕	M4	底部	底径 6.1 残高 1.8	・平底で、胴部からの突出は弱い。	(外面) ナデ・ミガキを施す。(内面) ナデを施す。(底面) 不明。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) チャートの混入が目立つ。
52	図 100 PL65	甕	M3	底部	底径 6.6 残高 1.9	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。(底面) ケズリを施す。	(色調) 灰黄褐色。(焼成) 良。(胎土) 緻密。
53	図 100 PL65	甕	M3	底部	底径 7.0 残高 1.9	・平底で、胴部から突出する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。(底面) ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャートの混入が目立つ。
54	図 100 PL65	甕	M4	底部	底径 5.6 残高 1.3	・平底で、胴部からの突出は極めて弱い。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) 不明。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。砂礫を多く含む。
55	図 100 PL65	甕	M4	底部	底径 8.0 残高 2.4	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) 不明。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。砂礫を多く含む。
56	図 100 PL65	甕	M5	底部	底径 5.7 残高 2.4	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) 横位ミガキを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。
57	図 100 PL65	甕	7	底部	底径 5.7 残高 2.0	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデ・縦位ミガキを施す。(内面) ナデ・ハケを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。砂礫を多く含む。
58	図 100 PL65	甕	M5	底部	底径 6.0 残高 2.2	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。
59	図 100 PL65	甕	M3	底部	底径 5.0 残高 1.7	・平底で、胴部から突出する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。(底面) ケズリを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。
60	図 100 PL65	甕	M4	底部	底径 5.0 残高 1.7	・平底で、胴部から突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質で、凝灰岩の混入が目立つ。
61	図 100 PL65	甕	M1 M2	胴部 底部	底径 6.5 残高 3.1	・胴部は球胴を呈すると思われる。底部は平底で、僅かな上げ底であり、胴部から明確に突出する。	外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 浅黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。チャートの混入が目立つ。

表 27 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(5)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
62	図 100 PL65	甕	3 M2	底部	底径 8.8 残高 2.1	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) 木葉痕あり。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。チャートの混入が目立つ。
63	図 100 PL65	壺? 甕?	M1	底部	底径 8.2 残高 2.4	・平底で、胴部から突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) 不明。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。
64	図 100 PL65	甕	M2	底部	底径 4.9 残高 1.5	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) 木葉痕あり?	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。
65	図 101 PL65	甕	M2	底部	底径 7.8 残高 3.5	・平底で、胴部から突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) 不明。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
66	図 101 PL65	甕	M2	底部	底径 8.8 残高 1.9	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) 木葉痕あり。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。凝灰岩の混入が目立つ。
67	図 101 PL65	甕	M2	底部	底径 6.7 残高 1.9	・平底で、胴部から突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) 不明。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) 緻密。
68	図 101 PL65	甕	M2	底部	底径 4.4 残高 2.0	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫を多く含む。
69	図 101 PL65	甕	M2	底部	底径 5.8 残高 2.6	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。
70	図 101 PL65	甕	M2	底部	底径 6.0 残高 1.3	・平底。	(外面) 不明。(内面) 不明。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。凝灰岩の混入が目立つ。
71	図 101 PL65	甕	M2	胴部 底部	底径 6.6 残高 3.3	・胴部は球胴状に開くと推定。平底で、胴部からの突出がある。	(外面) 胴部は横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキ・ナデを施す。(底面) 不明。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。チャートの混入が目立つ。
72	図 101 PL65	甕	M3	底部	底径 6.0 残高 1.7	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫を多く含む。
73	図 101 PL65	甕	M3	底部	底径 5.4 残高 1.9	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) 不明。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩が混入。
74	図 101 PL65	甕	M3	底部	底径 6.6 残高 2.9	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) 不明。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩が混入。
75	図 101 PL65	甕	M2	底部	底径 6.2 残高 0.9	・平底。	(外面) 不明。(内面) 不明。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。
76	図 101 PL65	甕	M1	底部	底径 7.2 残高 2.5	・平底で、胴部から明確に突出する。	(外面) ケズリを施す。(内面) ナデを施す。(底面) 不明。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。
77	図 101 PL65	甕	M2	底部	底径 6.4 残高 1.3	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) 不明。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。
78	図 101 PL66	甕	M2	胴部 底部	底径 6.4 残高 5.1	・胴部は球胴状に開くと推定。平底で、胴部からの突出が僅かにある。	(外面) 胴部は縦位ミガキを施す。(内面) 胴部は斜横位ミガキを施す。(底面) 不明。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。
79	図 101 PL66	甕	2	胴部 底部	底径 7.0 残高 3.1	・胴部は球胴状に開くと推定。平底で、胴部からの突出が僅かにある。	(外面) 胴部は縦位ミガキを施す。(内面) 胴部は横位ミガキを施す。(底面) ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャートの混入がやや目立つ。
80	図 101 PL66	甕	3	底部	底径 6.8 残高 2.0	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) 不明。(内面) 不明。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 不良。(胎土) 砂質。
81	図 101 PL66	甕	2 3	底部	底径 6.0 残高 2.6	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデ。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。
82	図 101 PL66	甕? 壺?	1	底部	底径 8.0 残高 2.5	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) ヘラナデを施す。(内面) ハケ(6~7本/2cm)を施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫が目立つ。
83	図 101 PL66	甕	3	底部	底径 6.0 残高 1.4	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。
84	図 101 PL66	甕	2	底部	底径 6.5 残高 1.9	・平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。
85	図 101 PL66	甕	1	底部	底径 7.6 残高 3.2	・平底で、胴部から明確に突出する。	(外面) ナデを施す。(内面) ナデを施す。(底面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。

表 28 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(6)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
86	図 101 PL66	甕	1	底部	底径 8.6 残高 3.1	・平底で、胴部からの突出はない。	(外面)ヘラナデ・ヘラケズリを施す。(内面)ナデを施す。(底面)木葉痕あり。	(色調)にぶい黄橙色。(焼成)良。(胎土)やや緻密。
87	図 101 PL66	甕	4	胴部 底部	底径 5.2 残高 4.1	・胴部は長球胴状に開くと推定。底部はやや丸底気味の平底。	(外面)ヘラナデを施す。(内面)ハケ状工具(28~30本/2cm)によるナデを施す。(底面)木葉痕あり。	(色調)にぶい橙色。(焼成)良好。(胎土)やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
88	図 101 PL66	器台	M 4	坏部 脚部	頸径 3.5 裾径 8.8 残高 6.5	・坏部は下端に明確な稜をもって屈折する。脚部は僅かに外反しながらハの字状に開く。脚部の中位やや上に径1.2cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面)坏部は横位ミガキを施す。脚部は斜横位ミガキを密に施す。(内面)坏部はミガキを施す。脚部はナデを施す。	(色調)にぶい黄橙色。(焼成)良。(胎土)やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が極めて目立つ。
89	図 101 PL66	器台? 高坏?	M 4	脚部	頸径 2.7 裾径 - 残高 5.2	・脚部は外反しながらハの字状に大きく開く。脚部の上位に径1.2cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面)脚部は上半では斜縦位ミガキを、同下半では斜横位ミガキをそれぞれ密に施す。(内面)脚部はナデを施す。	(色調)淡黄色。(焼成)良。(胎土)やや緻密。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
91	図 101 PL66	高坏	M 3	坏部 脚部	頸径 2.6 裾径 - 残高 3.9	・坏部は碗形に開くと推定。頸部は緩やかに屈曲し、脚部はハの字状に開くと推定。	(外面)坏部は不明。脚部は縦位ミガキを施す。(内面)坏部は斜横位ミガキを施す。脚部はナデを施す。	(色調)にぶい褐色。(焼成)やや良。(胎土)砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
92	図 101 PL66	器台? 高坏?	M 3	脚部	裾径 18.0 残高 2.2	・脚部は外反しながらハの字状に大きく開く。	(外面)斜横位ミガキを施す。(内面)ナデを施す。	(色調)にぶい橙色。(焼成)やや良。(胎土)砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。(備考)外面赤彩。
93	図 101 PL66	器台?	M 3	坏部?	口径 - 残高 2.0	・坏部と推定されるが中位に幅0.7cmの粘土帯を突帯状にめぐらす。	(外面)斜横位ミガキを施す。(内面)ナデ?	(色調)黄橙色。(焼成)やや良。(胎土)砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
94	図 101 PL66	器台? 高坏?	M 3	脚部	裾径 20.0 残高 2.1	・脚部は外反しながらハの字状に大きく開く。	(外面)斜横位ミガキを施す。(内面)斜横位ミガキ・ナデを施す。	(色調)黄橙色。(焼成)良。(胎土)やや緻密。チャート・凝灰岩混入が目立つ。
95	図 101 PL66	器台? 高坏?	M 3	脚部	裾径 13.0 残高 5.1	・脚部は下半で大きく外反しながらハの字状に開く。	(外面)斜縦位ミガキを施す。(内面)上位はナデ、下位はハケを施す。	(色調)橙色。(焼成)良。(胎土)やや緻密。凝灰岩の混入がやや目立つ。
96	図 101 PL66	器台? 高坏?	M 3	脚部	頸径 3.5 裾径 8.1 残高 6.5	・脚部はやや内湾しながら直立気味に開く。脚部の中位には径1.0cmの孔が等間隔に4孔あく。	(外面)頸部はナデを施す。脚部は剥落が不明瞭だが、ミガキを施したと推定。(内面)坏部はミガキを施す。脚部はナデを施す。	(色調)橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
97	図 102 PL66	器台? 高坏?	M 3	脚部	頸径 3.3 残高 4.3	・脚部は外反しながらハの字状に開く。脚部の上位には径1.3cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面)剥落がひどく不明瞭。(内面)ナデを施す。	(色調)にぶい黄橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
98	図 102 PL66	器台?	M 3	受け部 脚部	頸径 3.8 裾径 10.6 残高 7.2	・受け部は不明。脚部は僅かに外反しながらハの字状に開く。脚部の上位に径1.1cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面)受け部は不明。頸部はナデを施す。脚部は剥落がひどく不明瞭だが、ミガキを施したと推定。(内面)受け部は不明。脚部はナデを施す。	(色調)橙色。(焼成)やや不良。(胎土)やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が極めて目立つ。
99	図 102 PL66	器台? 高坏?	M 1	脚部	頸径 3.2 残高 5.2	・脚部は外反しながらハの字状に開く。脚部上位に径1.4cmの孔が2孔あく。(もう1孔を推定)	(外面)剥落がひどく不明瞭だが、ミガキを施したと推定。(内面)ナデを施す。	(色調)にぶい橙色。(焼成)やや良。(胎土)やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
100	図 102 PL66	器台	M 2	受け部	口径 8.0 残高 2.6	・口縁部は直線的に開き、下位で稜をもって屈曲する。内面には弱い稜を持つ。	(外面)剥落がひどく不明瞭だが、ナデを施したと推定。(内面)剥落がひどく不明瞭だが、ナデを施したと推定。	(色調)にぶい橙色。(焼成)やや不良。(胎土)やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
101	図 102 PL66	器台? 高坏?	M 2	脚部	裾径 12.6 残高 4.3	・脚部はハの字状に開き、裾部近くで僅かに内湾する。	(外面)剥落がひどく不明瞭だが、ミガキを施したと推定。(内面)斜縦位ミガキ・ナデを施す。	(色調)にぶい橙色。(焼成)やや不良。(胎土)やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
102	図 102 PL66	器台	M 2 M 3	受け部	口径 6.4 残高 1.6	・口縁部は開き、端部で屈曲する。屈曲位置より上は幅0.5cmの面取りを施す。内面には稜を持たない。	(外面)口縁端部は横位ナデ、それ以下は斜横位ミガキを施す。(内面)斜横位ミガキを施す。	(色調)にぶい赤褐色。(焼成)やや良。(胎土)やや緻密。

表 29 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(7)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
103	図 102 PL66	器台	M2 M3	受け部	口径 8.6 残高 2.2	・口縁部はやや内湾気味に開く。下位の稜は弱い。内面には稜を持たない。	(外面) 斜横位ミガキを施す。稜以下はナデを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
104	図 102 PL66	器台? 高坏?	M2 M3	脚部	裾径 12.0 残高 4.2	・脚部はハの字状に開き、裾部近くで僅かに外屈する。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) ナデを施す。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。チャートの混入が目立つ。
105	図 102 PL66	器台? 高坏?	M3	脚部	裾径 9.0 残高 3.6	・脚部はハの字状に開き、裾部近くでほんの僅かに内湾する。孔の痕跡あり。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
106	図 102 PL66	器台? 高坏?	M1	脚部	裾径 12.0 残高 4.0	・脚部はハの字状に開き、裾部近くで僅かに外屈する。孔の痕跡あり。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) ナデを施す。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。砂礫の混入が目立つ。
107	図 102 PL66	器台? 高坏?	M2	脚部	裾径 10.8 残高 6.0	・脚部はハの字状に開き、裾部近くで僅かに外屈する。孔の痕跡あり。	(外面) 剥落がひどく不明瞭だが、ミガキを施したと推定。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
108	図 102 PL66	器台? 高坏?	M3	脚部	頸径 3.1 残高 2.2	・脚部はやや直立気味にハの字状に開くと推定。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
111	図 102 PL66	器台	1	頸部 脚部	頸径 3.0 残高 3.7	・頸部は屈曲し、脚部はハの字状に開く。頸部芯部には径1.3cm、長さ2.9cmの孔があく。脚部には3孔があく。	(外面) 剥落がひどく不明瞭だが、ナデまたはミガキを施したと推定。(内面) 頸部芯部にはケズリを施し、脚部にはナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
112	図 102 PL66	器台	2	受け部 脚部	頸径 2.9 残高 4.9	・頸部は屈曲し、脚部はハの字状に開く。頸部芯部には径1.1cm、長さ0.5cmの孔があく。脚部には3孔があくと推定。	(外面) 受け部は不明。脚部は斜縦位ミガキを施す。(内面) 受け部は斜横位ミガキを施す。頸部芯部から脚部にかけてはナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) 緻密。
113	図 102 PL66	器台	2	受け部 脚部	頸径 2.7 残高 4.4	・頸部は屈曲し、脚部はハの字状に開く。頸部芯部には径1.3cm、長さ1.1cmの孔があく。脚部には3孔があくと推定。	(外面) 受け部は不明。脚部は斜縦位ミガキを施す。(内面) 受け部は斜横位ミガキを施す。頸部芯部から脚部にかけてはナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫がやや目立つ。
114	図 102 PL66	器台	1	受け部 脚部	頸径 3.1 残高 4.2	・頸部は屈曲し、脚部はやや外反気味にハの字状に開く。頸部芯部には径1.1cm、長さ1.1cmの孔があく。脚部には3孔があくと推定。	(外面) 受け部は不明。脚部は斜縦位ミガキを施す。(内面) 頸部芯部はケズリ、脚部はナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫がやや目立つ。
115	図 102 PL66	器台	3	脚部	頸径 3.0 残高 3.3	・頸部は屈曲し、脚部はハの字状に開く。頸部芯部には径1.0cm、長さ1.6cmの孔があく。脚部には3孔があく。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) 頸部芯部から脚部にかけてはナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫がやや目立つ。
116	図 102 PL66	器台? 高坏?	M3	脚部	裾径 8.4 残高 3.2	・やや直立気味にハの字状に開く。孔の痕跡がある。	(外面) 縦横位ミガキを施す。裾端部の横位ミガキを施す。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
117	図 102 PL66	器台?	2	受け部	口径 18.6 残高 3.1	・口縁部は外反し大きく開き、中位に弱い稜が2条ある。口縁下端は屈曲をもち、扁平な受け部となる。内面も屈曲をもつ。	(外面) 口縁部は横位ナデを施す。(内面) 口縁部は横位ナデを施す。受け部はナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 結合器台の一部か?
118	図 102 PL66	器台	7	受け部 脚部	口径 8.0 頸径 3.5 残高 6.0	・受け部は外反し、口縁端部～頸部に稜はない。頸部は緩やかに屈曲する。脚部はハの字状に開くが、下位でやや内湾すると推定。頸部芯部には径0.8cm、長さ1.1cmの孔があく。脚部の上位には径0.8cmの孔が等間隔に3孔あく。	(外面) 受け部は斜横位ミガキを密に施す。頸部から脚部にかけては斜縦位ミガキを密に施す。(内面) 受け部は斜横位ミガキを密に施す。頸部芯部は縦位ナデ、脚部は横位ナデを施す。なお、外面全体と受け部内面に赤彩を施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。

表30 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(8)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
119	図102 PL66	小型壺	M1	口縁部	口径 - 頸径 5.9 残高 2.9	・口縁部はほぼ直立し、頸部まで至ると推定。	(外面) 縦位ミガキを施す。(内面) 縦位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩の混入が目立つ。
120	図102 PL66	赤彩高坏	M2	口縁部	口径 16.0 残高 1.5	・口縁部はほぼ直線的に開くと推定。	(外面) 横位ミガキ後、赤彩を施す。(内面) 横位ミガキ後、赤彩を施す。	(色調) 明黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩の混入が目立つ。
121	図102 PL66	甕?	M2	口縁部	口径 14.0 残高 2.6	・口縁部は直立気味に開く。外面には輪積み装飾を施す。	(外面) ミガキ後、赤彩を施す。(内面) 横位ミガキ後、赤彩を施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
122	図102 PL66	壺	M2	底部	底径 7.1 残高 1.8	・体部は直線的に開く。底部は平底でわずかに突出する。	(外面) 胴部はナデ後、赤彩を施す。(内面) ナデを施す。(底部) ナデ調整。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
123	図102 PL66	甕	M3	口縁部	口径 14.8 残高 2.5	・口縁部は直立気味に開く。外面には輪積み装飾を施す。	(外面) ミガキ後、赤彩を施す。(内面) 横位ミガキ後、赤彩を施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
124	図102 PL66	高坏	M3	坏部	口径 13.0 残高 3.0	・坏部はやや内湾気味に開く。	(外面) ナデ後、ミガキを施したと推定。(内面) 横位ミガキ後、赤彩を施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫混入が目立つ。
125	図102 PL66	壺	M3	胴部	胴径 -残 高 3.0	・球胴を呈すると推定。	(外面) 胴部上半には単節LR縄文を施す。その下位には横位ミガキを施した後、赤彩を施す。(内面) 斜横位ナデ後、粗いミガキを施す。	(色調) 浅黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
126	図102 PL66	甕	M3	胴部	胴径 -残 高 2.6	・球胴を呈すると推定。	(外面) 横位ミガキを施した後、赤彩を施す。(内面) 斜横位ナデ後、粗いミガキを施す。	(色調) 浅黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
127	図102 PL66	壺	M3	胴部	胴径 -残 高 6.3	・球胴を呈すると推定。	(外面) 胴部上半には単節LR縄文を施す。その下位には横位ミガキを施した後、赤彩を施す。(内面) 斜横位ナデ後、粗いミガキを施す。	(色調) 浅黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
128	図102 PL66	高坏	M3	坏部	口径 17.3 残高 2.2	・直線的に開く。内面の口縁付近に輪積み起因する突出が1条ある。	(外面) 横位ミガキを施した後、赤彩を施す。(内面) 口縁部には横位ミガキを施し、それ以下はナデを施した後、赤彩を施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
130	図102 PL66	高坏	M4	坏部	口径 12.0 残高 3.5	・坏部はやや内湾気味に開く。口縁端部で僅かに内屈する。	(外面) 横位ミガキを施し、その後、赤彩を施す。(内面) 口縁部には横位ミガキを施した後、赤彩を施す。	(色調) 浅黄色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
131	図103 PL66	甕	2	口縁部	口径 15.8 残高 2.6	・口縁部は直立気味に開く。外面には輪積み装飾を施す。	(外面) ミガキ後、赤彩を施す。(内面) 横位ミガキ後、赤彩を施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。凝灰岩の混入が目立つ。
132	図103 PL66	甕	2	口縁部	口径 15.0 残高 2.3	・口縁部は直立気味に開く。外面には輪積み装飾を施す。	(外面) ミガキ後、赤彩を施す。(内面) 横位ミガキ後、赤彩を施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。凝灰岩の混入が目立つ。
133	図103 PL66	高坏	M3	坏部	口径 19.0 残高 5.3	・坏部はやや内湾気味に大きく開く。口縁端部で僅かに内屈する。	(外面) 横位ミガキを施す。(内面) 横位ミガキを極めて密に施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) 緻密。砂礫の混入は少ない。
134	図103 PL66	高坏	M3	坏部	口径 17.5 残高 3.4	・坏部はやや内湾気味に大きく開く。口縁端部で弱く内屈する。	(外面) 横位ミガキを施す。(内面) 横位ミガキを極めて密に施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) 緻密。砂礫の混入あり。
135	図103 PL66	高坏	M3	坏部	口径 17.0 残高 4.0	・坏部はやや内湾気味に大きく開く。口縁端部で僅かに内屈する。	(外面) 斜横位ケズリ後、口縁部付近では斜横位、それ以外では斜縦位ミガキを施す。(内面) 縦横位ミガキを極めて密に施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャートが混入。
136	図103 PL66	高坏	M3	坏部	口径 22.0 残高 5.0	・坏部はやや内湾気味に大きく開く。口縁端部で幅5mmで面取りがある。	(外面) 口縁端部は横位ナデ、それ以下は横位ミガキを施す。(内面) 口縁端部は横位ミガキ、それ以下は斜縦位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・凝灰岩が混入。
137	図103 PL66	高坏	M3	坏部	口径 18.0 残高 4.3	・坏部はやや内湾気味に大きく開く。	(外面) 斜横位ケズリ後、斜縦位ミガキを施す。(内面) 口縁端部は縦横位ミガキ、それ以下は斜縦位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・凝灰岩が混入。
138	図103 PL66	高坏	M4	坏部	口径 12.4 残高 4.4	・坏部はやや内湾気味に開く。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 縦横位ミガキを極めて密に施す。	(色調) 浅黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。砂礫の混入が目立つ。

表 31 成塚向山1号墳 出土遺物観察表(9)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
139	図 103 PL66	高坏	7 M4	坏部	口径 12.8 残高 3.8	・坏部はやや内湾気味に開く。口縁端部でほんの僅かに内屈する。	(外面) ミガキを施す。(内面) ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。砂礫が混入。
140	図 103 PL66	高坏	M3	坏部	口径 17.0 残高 3.5	・坏部はやや内湾気味に開く。口縁部近くで弱い稜をもち、僅かに内屈する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
141	図 103 PL66	高坏	M4	坏部	口径 13.7 残高 3.8	・坏部はやや内湾気味に開く。口縁端部で弱い稜をもち、僅かに内屈する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
142	図 103 PL66	高坏	M4	頸部	頸径 4.1 残高 2.3	・坏部は大きく開くと推定。頸部は緩やかに屈曲する。	(外面) ナデを施す。(内面) 不明。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。
143	図 103 PL66	高坏	7 M4	坏部	口径 16.0 残高 5.0	・坏部はやや内湾気味に大きく開く。口縁端部で僅かに内屈する。坏部下端には脚部との貼り付け粘土が僅かに残存する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・凝灰岩・砂礫が混入。
144	図 103 PL66	高坏	7	坏部	口径 14.0 残高 2.5	・坏部はやや内湾気味に大きく開く。口縁端部で僅かに内屈する。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
145	図 103 PL66	鉢	2	口縁部 └ 体部	口径 - 頸径 9.1 残高 3.1	・口縁部は開き、頸部で明確に稜をもって屈曲する。体部が張りのない偏球形を呈する。	(外面) 口縁部は斜縦位ミガキを施す。体部はナデ(ミガキ?)を施す。(内面) 口縁部から体部まで斜縦位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。凝灰岩・砂礫が混入。
146	図 103 PL66	鉢	3	口縁部 └ 体部	口径 12.7 頸径 9.8 残高 5.4	・口縁部はやや内湾気味に開き、頸部で稜を有し屈曲する。体部は張りのない偏球形を呈する。	(外面) 口縁部は斜縦位ミガキ、体部は斜横位ミガキを施す。(内面) 口縁部から体部まで斜縦位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。凝灰岩・砂礫が混入。
147	図 103 PL66	鉢	3	口縁部 └ 体部	口径 - 頸径 10.8 残高 4.2	・口縁部は開き、頸部で明確に稜をもって屈曲する。体部は張りのない偏球形を呈する。	(外面) 口縁部は斜縦位ミガキ、体部は斜横位ミガキを施す。(内面) 口縁部から体部まで斜縦位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。凝灰岩・砂礫が混入。
149	図 103 PL66	甕	M2	口縁部	口径 - 残高 3.8	・口縁部はやや外反して直立気味に開くと推定。口縁端部は折り返す。	(外面) 櫛描波状文を乱雑に施す。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
150	図 103 PL66	甕	M2	口縁部	口径 - 残高 4.0	・口縁部は直立気味に開くと推定。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや不良。(胎土) 砂質。砂礫の混入が目立つ。
151	図 103 PL66	甕	M3	頸部	頸径 - 残高 3.0	・口縁部は直立気味に開くと推定。頸部は緩やかに屈曲。	(外面) 櫛描波状文を乱雑に施す。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
152	図 103 PL66	甕	M3	口縁部	口径 - 残高 2.6	・口縁部は直立気味に開くと推定。	(外面) 縦位ハケの後、櫛描波状文を施す。(内面) ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
153	図 103 PL66	甕	M3	胴部?	胴径 - 残高 2.2	・胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
154	図 103 PL66	甕	M4	頸部	頸径 - 残高 3.2	・頸部は極めて緩やかに屈曲すると推定。	(外面) 頸部には櫛描文廉状文を施し、その上下には櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
155	図 103 PL66	甕	M4	頸部	頸径 - 残高 3.2	・頸部は明確な屈曲を呈さない。	(外面) 頸部には櫛描文廉状文を施し、その上には櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) 砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
157	図 103 PL66	甕	M4	胴部	胴径 - 残高 3.5	・胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。

表 32 成塚向山1号墳 出土遺物観察表 (10)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
158	図 103 PL66	甕	7	胴部	胴径 - 残高 3.1	・胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
159	図 103 PL66	甕	7	胴部	胴径 - 残高 2.3	・胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。(備考) 器厚が薄い。
160	図 103 PL66	甕	7	胴部	胴径 - 残高 3.0	・胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 櫛描波状文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 淡赤橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
161	図 103 PL66	甕	M2	口縁部	口径 16.1 残高 3.9	・口縁部は直線的に開く。外面には輪積み装飾を施す。	(外面) 輪積み痕上にユビオサエを施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデ又はミガキを施すと推定。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
162	図 PL66	甕?	M2	口縁部	口径 16.7 残高 2.3	・口縁部はごくわずかだが内湾気味に開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 折り返し口縁部分には単節RL縄文を施文し、それ以下には横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを密に施す。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャートが混入。
163	図 103 PL66	甕	M2	口縁部	口径 - 残高 3.9	・口縁部は外反して開くと推定。口縁端部は折り返す。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、RL縄文を施文したと推定。なお、口唇部にも縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
164	図 103 PL66	甕	M2	口縁部	口径 - 残高 5.3	・口縁部は直線的に開くと推定。口縁端部は折り返す。	(外面) 折り返し口縁部分には単節LR縄文を施文し、それ以下には縦位ケズリを施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。チャートが混入。
165	図 103 PL66	甕	M2	口縁部	口径 - 残高 3.1	・口縁部は直線的に開くと推定。口縁端部は折り返す。	(外面) 単節LR縄文を施文する。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
166	図 103 PL66	甕	M2	口縁部 と 頸部	口径 13.3 頸径 10.0 残高 5.2	・口縁部は短く外反して開く。外面には2段の輪積み装飾を施す。頸部は緩やかな屈曲を呈する。	(外面) 輪積み痕上に横位ミガキを施す。それ以下にはナデを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
167	図 104 PL66	甕	M2 M3 M4	口縁部 と 頸部	口径 15.0 頸径 13.6 残高 7.9	・口縁部は直立気味に外反する。外面には6段の輪積み装飾を施す。頸部は寸胴で屈曲は弱い。	(外面) 輪積み痕上に、単節LR縄文を施す。それ以下はナデを施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫の混入は目立たない。
168	図 103 PL66	甕	M2 M3	口縁部	口径 14.3 残高 3.8	・口縁部は短く外反して開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、RL縄文を施すと推定。口唇部にも同じ縄文を施すと推定。(内面) ミガキを施すと推定。	(色調) 灰オリーブ色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
169	図 104 PL66	甕	M3	口縁部 と 頸部	口径 18.0 頸径 15.6 残高 5.7	・口縁部は外反して開く。外面には4段の輪積み装飾を施す。頸部は明確に屈曲する。	(外面) 輪積み痕上に、単節RL縄文を施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを密に施すと推定。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
170	図 104 PL66	甕	M3	口縁部 と 頸部	口径 - 頸径 - 残高 5.4	・口縁部は短く外反して開く。口縁端部は折り返す。頸部の屈曲は弱いと推定。	(外面) 折り返し口縁部分には0段多条RL縄文を施文し、それ以下は0段多条LR縄文を施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
171	図 104 PL66	甕	M3	口縁部	口径 - 残高 3.2	・口縁部は外反して開くと推定。口縁端部は折り返す。	(外面) 0段多条LR縄文を施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫が混入。
172	図 104 PL66	甕? 坏?	M3	口縁部	口径 - 残高 2.6	・口縁部はごくわずかに内湾気味に開くと推定。口縁端部は折り返す。	(外面) 単節LR縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。その後、赤彩を施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
175	図 104 PL66	甕	M4	口縁部	口径 16.0 残高 5.6	・口縁部は外反して開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、RL縄文を施すと推定。なお、口唇部にも同じ縄文を施した可能性あり。(内面) 斜横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。

表 33 成塚向山1号墳 出土遺物観察表 (11)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
176	図 104 PL66	甕	M 4	口縁部	口径 16.0 残高 5.6	・口縁部は外反して開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、R L 縄文を施すと推定。なお、口唇部にも同じ縄文を施したと推定。(内面) 斜横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
177	図 104 PL66	片口	M 4	口縁部 と 胴部	口径 7.7 残高 3.1	・口縁部は短く内湾する。口縁端部は折り返す。口部は1箇所認められる。	(外面) 折り返し部に0段多条LR縄文を施す。胴部は斜横位ナデを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
178	図 104 PL66	片口	M 4	口縁部	口径 - 残高 3.2	・口縁部は短く内湾する。口縁端部は折り返す。口部は未確認だが形状から片口と判断。	(外面) 折り返し部に0段多条LR縄文を施す。胴部は斜横位ナデを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
179	図 104 PL67	甕	M 4	胴部	胴径 22.6 残高 12.8	・球胴を呈し、中位に最大径をもつと推定。	(外面) 胴部上半は単節RL縄文を施し、下半は斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
180	図 104 PL67	甕	M1 M2	口縁部 と 胴部	口径 10.9 頸径 10.0 胴径 11.9 残高 9.9	・口縁部は直立気味に外反する。口縁端部は折り返す。頸部は寸胴で屈曲は弱い。胴部は縦長球胴で、中位に最大径をもつ。	(外面) 単節LR縄文を施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、斜横位ナデを施すと推定。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
182	図 104 PL67	甕	7 M 3	口縁部 と 胴部	口径 14.7 頸径 14.1 胴径 - 残高 9.5	・口縁部は直立気味に開く。口縁端部は折り返す。頸部は緩やかに屈曲する。胴部は球形を呈すると推定。	(外面) 折り返し部に0段多条RL縄文、それ以下は胴部に至るまでは0段多条LR縄文をそれぞれ施す。なお、口唇部にも同じ縄文を施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫が混入。
183	図 104 PL67	甕	7 M 4	胴部	胴径 - 残高 4.6	・球形を呈すると推定。	(外面) 胴部上位には0段多条LR縄文を施す。中位には斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。チャートが混入。
184	図 104 PL67	甕	M 4	口縁部 と 胴部 (肩部)	口径 14.0 頸径 13.0 残高 3.3	・S字状口縁の下段は外斜、上段はやや外反気味に開く。また、口縁内面にも弱い屈曲をもつ。口縁端部は単純に丸く収める。頸部外面の屈曲は不明確で、丸みをもつ。頸部内面は幅5~6mmの面をもつ。胴部は肩部が張る球胴形と推定。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部内面には弱い横位ミガキが施されている。胴部外面には右上がりのハケが施されており、肩部にのみに短いピッチの横位ハケが施されている。胴部内面、頸部には斜位ケズリ・ナデが施されている。	(色調) にぶい褐色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩の混入が目立つ。(備考) 摩滅している。
185	図 104 PL67	甕	M 4	口縁部 と 頸部	口径 18.0 頸径 16.0 残高 2.2	・S字状口縁の下段は水平気味に外斜、上段はほぼ直立気味に開く。また、口縁内面に明確な屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まると推定。頸部外面は比較的明確な屈曲をもつ。頸部内面は幅5~6mmの面をもつ。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部内面には横位ミガキが施されている。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。凝灰岩の混入がやや目立つ。(備考) 摩滅している。
186	図 104 PL67	甕	M 4	口縁部 と 頸部	口径 14.2 頸径 12.5 残高 3.1	・S字状口縁の下段は外斜し上下段境で丸みを有し屈曲し、上段は短く外反して開く。口縁内面は弱い屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まると推定。頸部外面はやや明確な屈曲をもつ。頸部内面は幅5~6mmの面をもつ。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部内面は器面の荒れがひどく不明。胴部外面には右上がりのハケが施されている。胴部内面、頸部に近い部分には斜位ナデが施されている。	(色調) 褐色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。白色鉱物がやや目立つ。(備考) 胎土がやや異質。
187	図 104 PL67	甕	M 4	口縁部 と 胴部 (肩部)	口径 14.7 頸径 13.0 残高 3.0	・S字状口縁の下段は外斜し上下段境で屈曲し、上段は短く外斜する。口縁内面には弱い屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まるが、内面には弱い条線1条めぐる。頸部外面は丸みをもった屈曲をもつ。頸部内面は幅5~6mmの面をもつ。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部外面は幅2mmの沈線をまわし、頸部の屈曲を明確にする。頸部内面は弱い横位ハケを施す。胴部外面は右上がりのハケが施され、肩部にのみに短いピッチの横位ハケが施されている。胴部内面、頸部に近い部分には斜位ナデが施されている。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。(備考) 胎土がやや異質。

表 34 成塚向山1号墳 出土遺物観察表 (12)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
188	図 104 PL67	甕	M 4	台部	台裾径 7.7 残高 3.5	・直線的に僅かに開く。	(外面) 斜位ハケを施した後、部分的にナデ消す。(内面) ナデを施し、台端部は折り返す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 摩滅激しい。
189	図 104 PL67	甕	M 4	口縁部 頸部	口径 16.2 頸径 14.5 残高 2.4	・S字状口縁の下段は外斜し、上下段境で丸みをもって屈曲し、上段は短く直立し、上端部に屈曲して開く。口縁内面に弱い屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まると推定。頸部外面は丸みのある屈曲をもつ。頸部内面は幅5~6mmの面をもつ。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部内面は器面の荒れがひどく、不明。胴部外面には右上がりのハケを施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。(備考) 摩滅している。
190	図 104 PL67	甕	M 4	台部	台底径 - 残高 3.5	・胴部との境は明確に屈曲する。台部はやや内湾して直立気味に開く。	(外面) 斜位ハケを施した後、部分的にナデ消す。(内面) ナデを施す。台部上面には砂礫を多く含む粘土がなでつけられている。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。凝灰岩・砂礫が混入。
191	図 104 PL67	甕	M 4	台部	台裾径 8.7 残高 4.0	・直線的に僅かに開く。	(外面) 斜位ハケを施した後、部分的にナデ消す。(内面) ナデを施し、台端部は折り返す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。凝灰岩・砂礫が混入。
193	図 104 PL67	甕	7 M 4	口縁部 胴部 (肩部)	口径 14.1 頸径 12.5 残高 3.5	・S字状口縁の下段は外斜し、上下段境で屈曲、上段は短く外斜する。口縁内面に弱い屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まるが、内面上端に面を持つ。頸部外面は緩やかに屈曲し、頸部内面は面をもつと推定。胴部は肩部が張る球形と推定。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部内面は不明瞭だが、ナデを施すと推定。胴部外面には右上がりのハケが施され、肩部のみに短いピッチの横位ハケが施されている。胴部内面は斜位ナデを施すが、頸部に近い部分にはユビオサエを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
194	図 104 PL67	甕	M 4	口縁部 頸部	口径 18.2 頸径 15.9 残高 2.1	・S字状口縁の下段は水平気味に外斜し、上段はほぼ直立し、上端で弱く屈曲して開く。口縁内面にも明確な屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まる。頸部外面は丸みをもって屈曲する。頸部内面には幅7~8mmの面をもつ。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部内面には横位ミガキが施されている。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
195	図 105 PL67	甕	M 4	口縁部 頸部	口径 18.0 頸径 15.2 残高 1.6	・S字状口縁の下段は水平気味に外斜し、上段はほぼ直立し、上端で弱く屈曲して開く。また、口縁内面にも明確な屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まる。頸部外面は明確に屈曲すると思われ、頸部内面には面をもつ。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部内面には横位ミガキが施されている。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。凝灰岩・砂礫が混入。
196	図 105 PL67	甕	M 4	口縁部 頸部	口径 14.7 頸径 12.7 残高 2.6	・S字状口縁の下段は外斜し上下段境で屈曲し、上段は短く外斜する。口縁内面に弱い屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まり、内面上端は面を持つ。頸部外面は丸みのある屈曲をもつ。頸部内面には幅5~6mmの面をもつ。	・口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部外面は幅2mmのよわい沈線をまわし、頸部の屈曲を明確にする。頸部内面は弱い横位ハケを施す。胴部外面には右上がりのハケが施される。胴部内面には斜位ナデとユビオサエが施されている。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。(備考) 胎土がやや異質。187と同一か？
197	図 105 PL67	甕	7 M 4	台部	台裾径 - 残高 4.8	・胴部は肩部の張る球形を呈すると推定。胴部との境は明確に屈曲する。台部はやや直立気味に開く。	(外面) 胴部は斜縦位ハケを施す。台部は斜縦位ハケを施す。(内面) 胴部はナデを施す。台部もナデを施し、上面には砂礫を多く含む粘土がなでつけられている。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入がやや目立つ。
198	図 105 PL67	甕	M4 7	台部	台裾径 8.1 残高 4.0	・台部は直線的に開き、裾部で僅かに外反する。	(外面) 斜位ハケを施した後、部分的にナデ消す。(内面) ナデを施し、台端部は折り返す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫が目立つ。

表 35 成塚向山1号墳 出土遺物観察表 (13)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
199	図 105 PL67	甕	7	口縁部 と 胴部 (肩部)	口径 14.3 頸径 12.8 残高 4.5	・ S 字状口縁の下段は外斜し上下段境で屈曲、上段は僅かに内斜し、上端で明確に屈曲し外斜する。口縁内面に屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まるが、内面上端には明確な面を持つ。頸部外面は緩やかに屈曲する。頸部内面は幅 5～6 mm の面をもつ。胴部は肩部が張る球胴形と推定。	・ 口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部内面は横位ミガキを施す。胴部外面には右上がりのハケを施し、肩部にのみに短いピッチの横位ハケが雑に施されている。胴部内面は斜位ナデを施すが、頸部に近い部分にはユビオサエを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 極めて良。(胎土) 緻密。砂礫が混入。
200	図 105 PL67	甕	7	口縁部	口径 15.5 頸径 13.3 残高 1.9	・ S 字状口縁の下段は外斜し上下段境で屈曲し、上段は短く外斜する。口縁内面は弱い屈曲をもつ。口縁端部は丸く収まる。頸部外面は丸みのある屈曲をもつ。頸部内面は幅 5～6mm の面をもつ。	・ 口縁部は内外面とも横位ナデを施す。頸部外面は幅 2mm のよわい沈線をまわし、頸部の屈曲を明確にする。頸部内面は不明瞭。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。(備考) 196 と類似。
201	図 105 PL67	甕	7	頸部	頸径 13.0 残高 1.4	・ 頸部外面には緩やかに屈曲する。頸部内面には面をもつ。	(外面) 胴部には右上がりのハケを施す。胴部内面には斜位ナデとユビオサエを施す。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
202	図 105 PL67	甕	7 M4	台部	台底径 - 残高 2.6	・ 胴部との境は明確に屈曲する。台部はやや直立気味に開く。	(外面) 左上がりのハケを施す。(内面) ナデを施す。台部上面には砂礫を多く含む粘土がなでつけられている。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
204	図 105 PL67	甕	7	胴部	胴径 - 残高 3.6	・ 肩部の張る球胴を呈すると推定。	(外面) 上位には右上がりのハケを施した後に、横位ハケを施す。下位には左上がりのハケを施す。胴部内面には斜位ナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。凝灰岩・砂礫が混入。
205	図 105 PL67	甕	7	台部	台裾径 7.8 残高 3.0	・ 台部はやや直立気味に開く。	(外面) 斜位ハケを施した後、部分的にナデ消す。(内面) ナデを施し、台端部は折り返す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
206	図 105 PL67	壺	M1	口縁部	口径 17.9 残高 5.8	・ 直線的に開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 折り返し口縁部は横位ナデを施す。それ以下は斜縦位ケズリを施す。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫が混入。
207	図 105 PL67	壺	M2	口縁部	口径 17.0 残高 2.9	・ 直線的に大きく開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 折り返し口縁部はハケ工具による横位ナデを施す。それ以下はナデを施すと推定。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。(備考) 208 と同一?
208	図 105 PL67	壺	M2	口縁部	口径 17.0 残高 2.4	・ 直線的に大きく開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 折り返し口縁部は工具を用いての横位ナデを施す。それ以下はナデを施すと推定。(内面) 横位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。(備考) 207 と同一?
209	図 105 PL67	壺	7 M2	胴部 と 底部	胴径 - 底径 8.0 残高 4.2	・ 胴部は球胴を呈すると推定。底部は平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) 胴部は横位ミガキを施す。底部はミガキを施す。(内面) 斜横位ケズリを施し、底部付近のみユビオサエを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
210	図 105 PL67	壺	M2 M3	口縁部	口径 26.0 残高 6.5	・ 外反して大きく開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 横位ミガキを施す。(内面) ナデ後、斜横位ミガキを施す。	(色調) 灰白色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
211	図 105 PL67	壺	M3	頸部	頸径 14.0 残高 4.7	・ 頸部は緩やかなくの字状に屈曲する。	(外面) 口縁部はケズリ後、縦位ミガキを施す。体部は斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャートの混入が目立つ。
212	図 105 PL67	壺	M3	口縁部 と 頸部	口径 18.8 頸径 11.3 残高 7.4	・ 口縁部は外反して開く。口縁端部は折り返す。頸部は明確に屈曲する。	(外面) 口縁部は縦位ミガキを施す。頸部直下の体部には列点文が施される。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) 橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入がやや目立つ。
213	図 105 PL67	壺	M4	口縁部 と 胴部 (肩部)	口径 - 頸径 11.0 残高 5.8	・ 口縁部は外反して開く。頸部はくの字に屈曲する。胴部は球胴を呈すると推定。	(外面) 口縁部は縦横位ハケを施す。肩部に単節 LR 斜縄文を施した後、頸部に横位ナデを施す。(内面) 口縁部はナデ後、斜横位ミガキを施す。胴部はナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。砂礫が混入。(備考) 215 と同一?

表 36 成塚向山1号墳 出土遺物観察表 (14)

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
214	図 105 PL67	壺	M1 M2 M3 M4 7	胴部 (肩部)	胴径 - 残高 7.6	・球胴を呈すると推定。	(外面) 単節 LR 斜縄文を施した後、その下位に横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 浅黄色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 218 と同一?
215	図 105 PL67	壺	M2 M4	胴部	胴径 28.7 残高 14.7	・胴部は球胴を呈する。	(外面) 肩部には単節 LR 斜縄文を施した後、その下位の胴部全体には斜横位ミガキを施す。(内面) 胴部は斜横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) 良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫が混入。(備考) 213 と同一?
216	図 106 PL67	壺	7	口縁部	口径 10.4 残高 2.8	・外反して開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 折り返し口縁部は横位ナデを施す。それ以下は縦位ハケ後、横位ナデを施す。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
217	図 106 PL67	甕?	7	口縁部 胴部 (肩部)	口径 8.5 頸径 6.8 残高 3.7	・口縁部は短く開く。頸部は緩やかに曲がり、胴部にいたる。	(外面) 口縁部は横位ナデを施す。縦それ以下は、縦位ナデを施す。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
218	図 106 PL67	壺	7	胴部 (肩部)	胴径 - 残高 4.3	・球胴を呈すると推定。	(外面) 単節 LR 斜縄文を施した後、その下位に横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ナデを施す。	(色調) 褐灰色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 214 と同一?
219	図 106 PL67	壺	7 M5 20住3	底部	底径 7.6 残高 2.4	・底部は平底で、胴部から突出する。	(外面) 胴部は斜位横位ミガキを施す。底部はナデを施す。(内面) ナデ後、斜横位ミガキを施す。(底部) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。(備考) 20号住居資料と接合。
220	図 106 PL67	壺	M2 M3 M4 7	底部	底径 8.0 残高 3.2	・胴部は開く。底部はやや丸みをもつ平底で、胴部から僅かに突出する。	(外面) 胴部は斜位横位ミガキを施す。底部付近では横位ナデを施す。(内面) ナデ後、斜横位ミガキを施す。(底部) ケズリを施す。	(色調) 淡黄色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
221	図 106 PL67	壺	M 1	口縁部	口径 17.0 残高 2.5	・二重口縁。口縁部は段をもつて開く。口縁端部内面は僅かに内屈する。	(外面) ナデを施す。(内面) 端部は横位ナデを施し、それ以下は縦位ミガキを施す。	(色調) 明黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
222	図 106 PL67	壺	M 1	口縁部	口径 - 残高 2.8	・口縁部は欠損するが、頸部は外反し、大きく開く。	(外面) 縦位ハケを施す。(内面) 横位ハケを施す。	(色調) 明黄褐色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
223	図 106 PL67	底部穿孔壺	M 1	底部	底径 7.4 残高 1.8	・底部は焼成前穿孔であり、胴部から僅かに突出する。孔内面に面をもつ。	(外面) 横位ミガキを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
224	図 106 PL67	底部穿孔壺	M 1	底部	底径 6.4 残高 2.1	・底部は焼成前穿孔であり、胴部からの突出は弱い。孔内面に面をもつ。	(外面) ナデまたはミガキを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
225	図 106 PL65	底部穿孔壺	M 1	底部	底径 8.4 残高 1.2	・底部は焼成前穿孔であり、胴部から僅かに突出する。底面は明確な面をもつ。	(外面) 斜横位ミガキを施す。底面にはナデを施す。(内面) 擬口縁状に剥離しているため、不明。穿孔面にはユビナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良。(胎土) やや緻密。チャート・砂礫の混入があり。
226	図 106 PL67	底部穿孔壺	M 1	底部	底径 6.6 残高 1.9	・底部は焼成前穿孔であり、胴部からの突出は弱い。孔内面に面をもつ。	(外面) ナデまたはミガキを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫が混入。
227	図 106 PL67	底部穿孔壺	M 1	底部	底径 6.4 残高 1.7	・底部は焼成前穿孔であり、胴部からの突出は弱い。孔内面に面をもつ。	(外面) ナデまたはミガキを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入があり。
228	図 106 PL67	壺	M 1	口縁部	口径 17.2 残高 3.0	・二重口縁。口縁部は段をもつて開く。口縁端部は丸く収まる。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭。	(色調) 浅黄褐色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
229	図 106 PL67	底部穿孔壺	1	胴部 底部	胴径 - 底径 6.0 残高 3.0	・胴部は球胴と推定。底部は焼成前穿孔であり、胴部からの突出は弱い。孔内面に面をもつ。	(外面) ナデ後、斜横位ミガキを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
230	図 106 PL67	二重口縁壺	2	口縁部	口径 21.0 残高 5.2	・二重口縁。口縁部は内外面とも段をもつて開く。口縁端部は僅かにつまみ上げる。	(外面) 縦位ミガキを密に施し、端部には列点文が施される。(内面) ナデ後、段上部では縦位ミガキを施し、段下部では横位ハケを施す。	(色調) にぶい黄褐色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。

表 37 成塚向山1号墳 出土遺物観察表 (15)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
231	図 106 PL67	二重 口縁壺	3	口縁部	口径 20.2 残高 3.9	・二重口縁。口縁部は段をもって開く。口縁端部は僅かにつまみ上げる。	(外面) 縦位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデまたはミガキを施したと推定。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。砂礫混入が目立つ。
232	図 106 PL67	二重 口縁壺	3	口縁部	口径 - 残高 3.1	・二重口縁。口縁部は内外面とも段をもって開く。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
233	図 106 PL67	二重 口縁壺	3	口縁部	口径 18.1 残高 2.7	・二重口縁。口縁部は段をもって開く。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭。(内面) 縦位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや砂質。凝灰岩・砂礫の混入が目立つ。
234	図 106 PL67	二重 口縁壺	3	口縁部	口径 - 残高 2.3	・二重口縁。口縁部は突帯状の段をもって開く。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
235	図 106 PL67	二重 口縁壺	3	口縁部 頸部	口径 - 頸径 8.2 残高 4.5	・二重口縁。口縁部は内外面に段を有し開く。頸部は直立気味に開く。頸部は明確に屈曲する。	(外面) 縦位ナデまたはミガキを施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、斜縦位ミガキを施したと推定。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
237	図 106 PL67	底部 穿孔壺	3	胴部 底部	胴径 - 底径 5.4 残高 2.7	・胴部は球胴を呈すると推定。底部は焼成前穿孔であり、胴部からの突出は弱い。孔内面には面をもつ。	(外面) 胴部はナデ後、斜横位ミガキを施す。なお、底部付近のみ斜位ハケ後、ケズリを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
238	図 106 PL67	底部 穿孔壺	3	底部	底径 6.5 残高 2.3	・底部は焼成前穿孔であり、胴部からの突出は弱い。孔内面に面をもつ。	(外面) ナデまたはケズリを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
239	図 106 PL67	底部 穿孔壺	3	底部	底径 6.6 残高 1.5	・底部は焼成前穿孔であり、胴部からの突出は弱い。孔内面に面をもつ。	(外面) ナデまたはケズリを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
240	図 106 PL67	底部 穿孔壺	1~3	胴部 底部	胴径 - 底径 7.2 残高 2.7	・胴部は球胴と推定。底部は焼成前穿孔であり、胴部から僅かに突出する。孔内面に面をもつ。	(外面) 胴部はナデ後、斜横位ミガキを施す。(内面) 横位ハケ(6~7本/2cm)を施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良好。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
241	図 106 PL67	壺	M1	口縁部	口径 16.0 残高 2.3	・口縁部は外反して開く。端部は内外面ともほぼ直立気味に屈曲し、幅1.2cmの面をつくる。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、口縁端部には横位ナデを施したと推定。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入がやや目立つ。
242	図 106 PL67	壺	M1	口縁部 頸部	口径 - 頸径 7.2 残高 4.1	・二重口縁。頸部はやや外反して開く。頸部は明確に屈曲する。	(外面) 縦位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、斜横位ハケまたはミガキを施したと推定。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
243	図 106 PL67	底部 穿孔壺	M1	胴部 底部	胴径 - 底径 7.0 残高 3.1	・底部は焼成前穿孔であり、胴部から僅かに突出する。孔内面には面をもつ。	(外面) 胴部は斜縦位ハケ(10~12本/2cm)を施し、底部付近にはナデを施す。(内面) 斜横位ハケ(5~7本/2cm)を施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
244	図 106 PL67	底部 穿孔壺	M1	底部	底径 5.9 残高 2.1	・底部は焼成前穿孔であり、胴部からの突出は弱い。孔内面に面をもつ。	(外面) 斜横位ミガキとナデを施す。(内面) 横位ハケを施す。穿孔面には横位ナデを施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
245	図 107 PL67	底部 穿孔壺	3	底部	底径 7.6 残高 1.8	・底部は焼成前穿孔であり、胴部から僅かに突出する。底面は明確な面をもつ。	(外面) 斜横位ナデを施す。底面にもナデを施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデを施したと推定。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
246	図 107 PL67	甕	M2	胴部	胴径 - 残高 7.0	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜位タタキ調整を施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデを施したと推定。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。黒色粒子の混入が目立つ。
248	図 107 PL67	甕	M2	胴部	胴径 - 残高 5.3	・球胴を呈すると推定。	(外面) 斜縦位ミガキを施す。(内面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデを施したと推定。	(色調) 橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。黒色粒子の混入が目立つ。
253	図 107 PL67	甕	2 M3 M4	口縁部	口径 13.5 残高 5.5	・口縁部は直立気味に外反して開く。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭だが、ナデを施したと推定。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい褐色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。

表 38 成塚向山1号墳 出土遺物観察表 (16)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土 層位	残存	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土
255	図 107 PL67	甕	M 2	口縁部	口径 15.5 残高 4.1	・口縁部は外反気味に開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 器面の荒れがひどく不明瞭。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや不良。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
256	図 107 PL67	甕	M 2	口縁部 と 頸部	口径 13.0 頸径 11.4 残高 3.7	・口縁部は短く外反して開く。口縁端部は帯状に肥厚する。	(外面) ナデ後、斜横位ミガキを施す。(内面) 口縁部は斜横位ミガキを施す。頸部以下はナデ(またはケズリ)を施す。	(色調) にぶい赤褐色。(焼成) 良好。(胎土) やや砂質。チャート・砂礫の混入が目立つ。
257	図 107 PL67	甕	M 4	頸部 と 胴部	頸径 10.6 残高 4.7	・頸部は緩やかにくびれ、胴部に至る。	(外面) 不定方向の短いピッチのハケを施す。(内面) 横位ミガキを施す。	(色調) にぶい褐色。(焼成) 良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
258	図 107 PL67	甕	2 7 M3 M4	胴部	頸径 - 残高 5.8	・球胴を呈し、中位に最大径をもつと推定。	(外面) 斜横位ミガキを施す。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) にぶい褐色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。チャート・の混入が目立つ。
259	図 107 PL67	小型壺	3	胴部 と 底部	胴径 - 底径 1.2 残高 3.6	・胴部は球胴を呈すると推定。底部は小さく、僅かに上げ底状を呈する。	(外面) ナデ後、斜横位ミガキを施す。(内面) 斜縦位ミガキを施す。	(色調) にぶい橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや緻密。砂礫が混入。
261	図 107 PL67	壺	2	胴部 (肩部)	胴径 - 残高 2.2	・球胴を呈すると推定。	(外面) 頸部直下に3段の列点文を鋸歯状に施文する。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良好。(胎土) 砂質。砂礫の混入目立つ。
262	図 107 PL67	壺	M 3	口縁部	口径 20.0 残高 2.5	・短く開く。口縁端部は折り返す。	(外面) 折り返し面に横位ミガキを施す。(内面) 横位ミガキを密に施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) 良好。(胎土) やや砂質。チャートの混入がやや目立つ。
263	図 107 PL67	小型壺	7	口縁部	口径 7.6 残高 4.3	・口縁はやや外反しながら直立し、端部で僅かに内湾する。	(外面) 器面荒れがひどく不明瞭だが、赤彩を施す。(内面) 器面荒れがひどく不明瞭だが、赤彩を施す。	(色調) にぶい黄橙色。(焼成) やや良好。(胎土) 砂質。砂礫の混入が目立つ。
264	図 107 PL67	?	3	胴部 (肩部)	胴径 - 残高 1.5	・球胴を呈すると推定。	(外面) 2段の列点文を鋸歯状に施文する。(内面) ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良好。(胎土) 砂質。砂礫の混入目立つ。
265	図 107 PL67	甕	M 5	台部	台径 - 残高 3.2	・台部は直線的に開く。	(外面) 縦位ミガキを施す。(内面) 斜位ハケを施す。	(色調) 浅黄橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。
266	図 107 PL67	器台? 高坏?	M 4	脚部	裾径 12.2 残高 6.4	・脚部はハの字状に開き、裾部近くで僅かに屈曲し端部で内湾する。孔の痕跡あり。	(外面) 斜縦位ミガキを施し、裾端部では横位ミガキを施す。(内面) 斜位ナデを施す。	(色調) 橙色。(焼成) やや良好。(胎土) 砂質。砂礫の混入が極めて目立つ。
267	図 107 PL65	甕	3	口縁部 と 胴部	口径 22.3 頸径 20.6 胴径 22.5 残高 16.8	・口縁は短く、僅かに外反する。口縁端部には弱い指突が連続して施されている。頸部の括れは極めて弱く、寸胴に近い。胴部は中位やや上に最大径をもつが、張りは弱い。	(外面) 口縁部から胴部上半までは斜位ケズリ後、単節LR斜縄文を施す。胴部中位以下は斜位ケズリのみを施す。(内面) 口縁部は横位ナデを施し、それ以下は斜位けずりを施す。	(色調) 黄橙色。(焼成) やや良好。(胎土) やや砂質。砂礫の混入が目立つ。

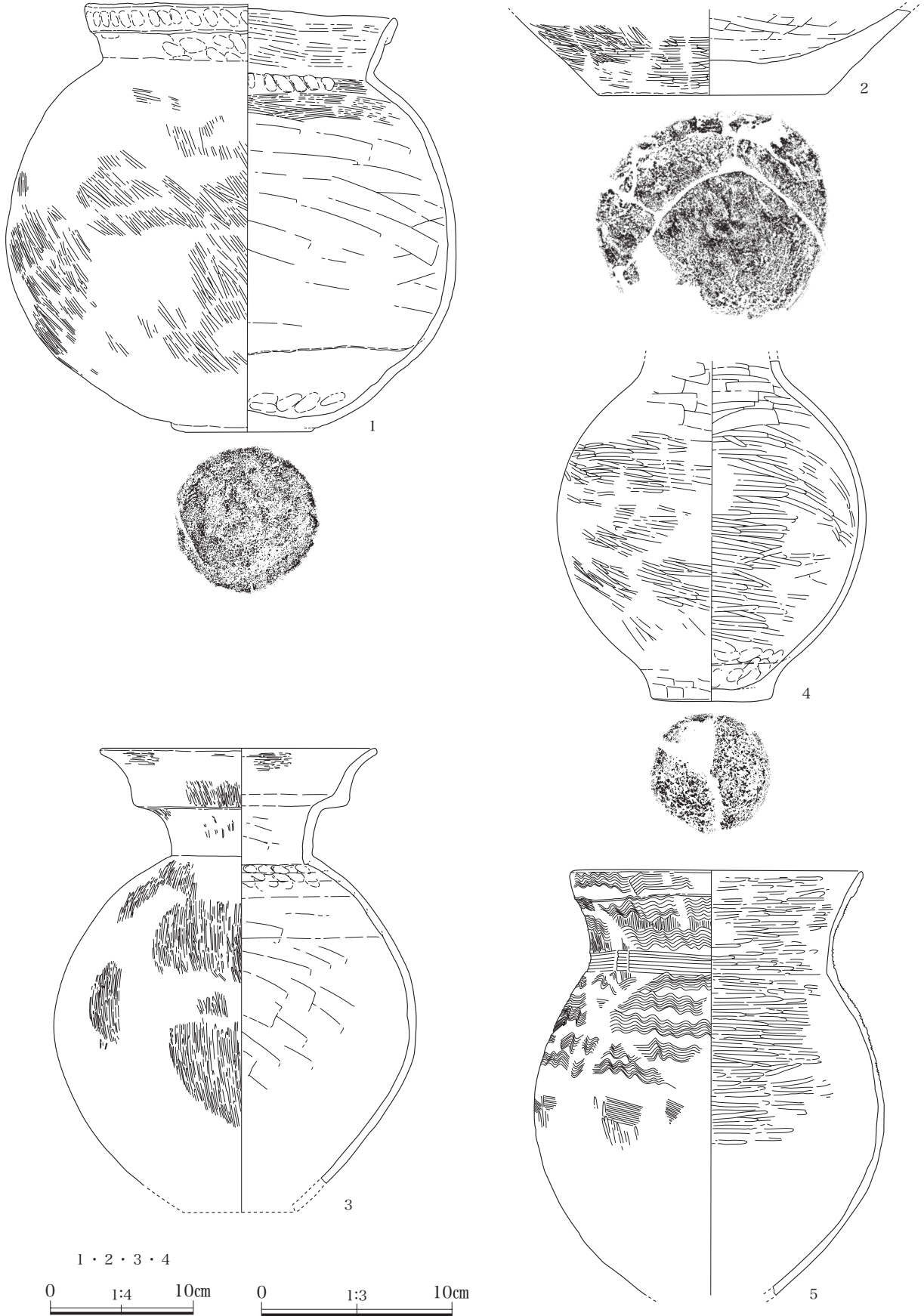


図96 成塚向山1号墳 出土土器(1)

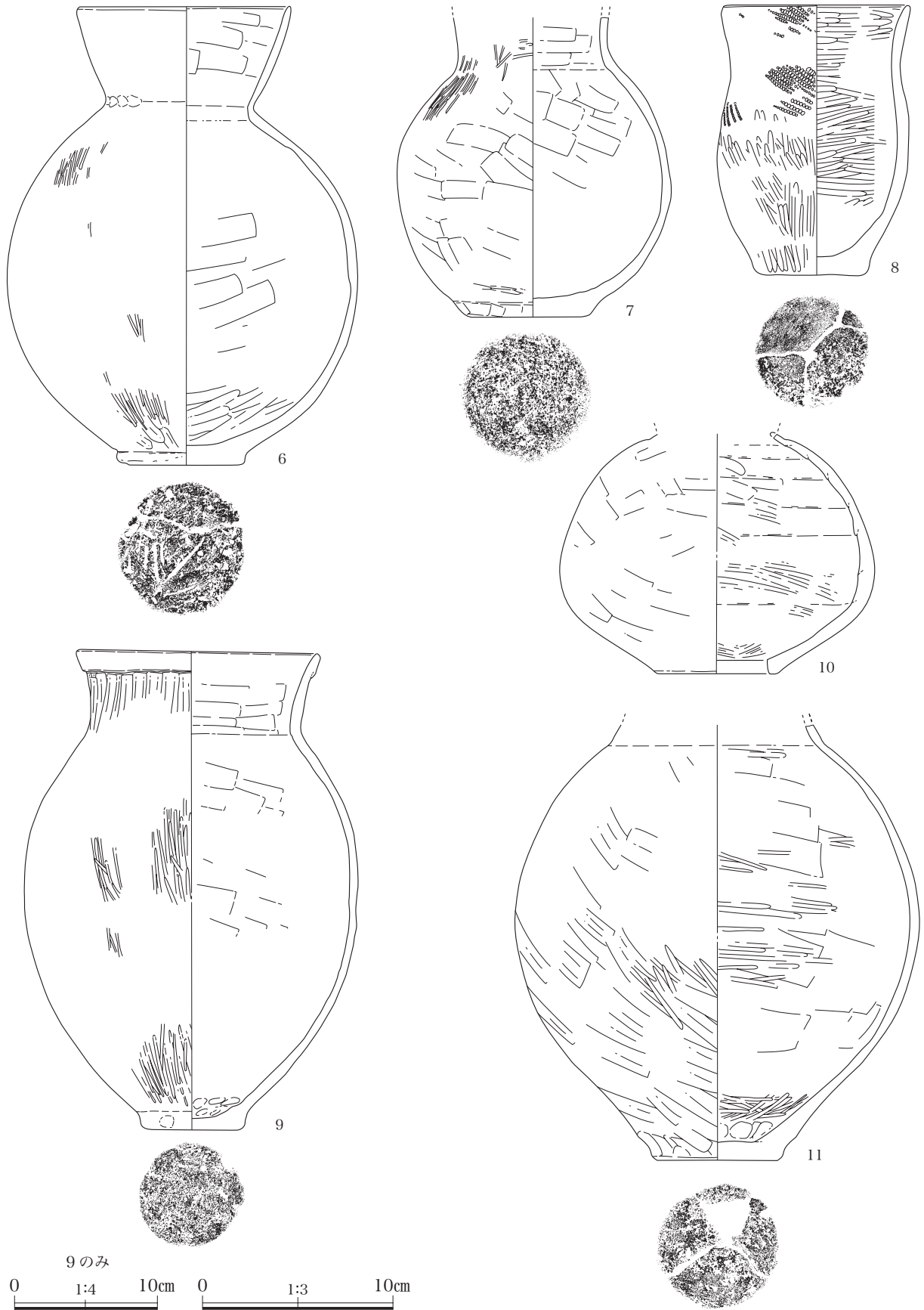


図97 成塚向山1号墳 出土土器(2)

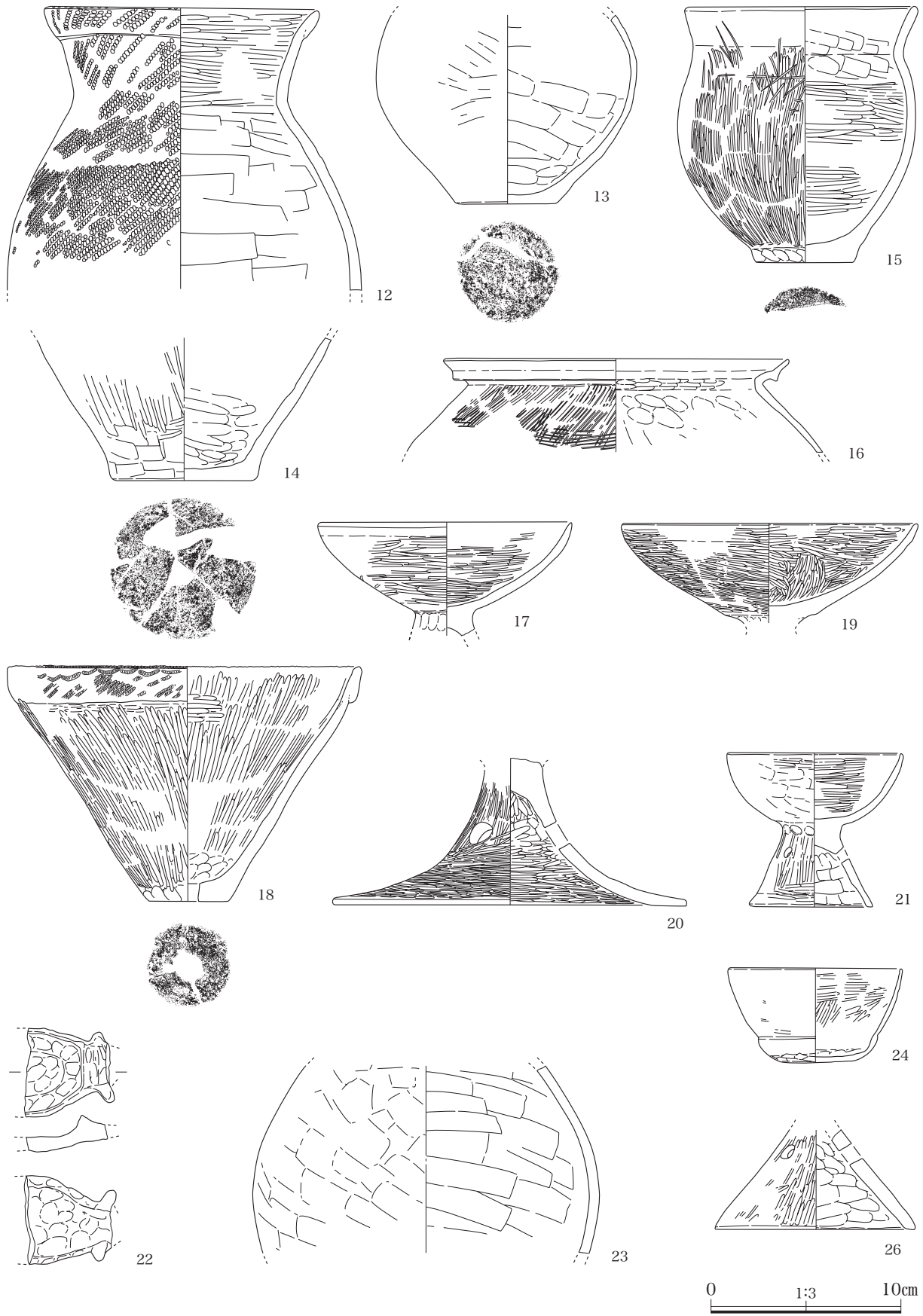


図 98 成塚向山1号墳 出土土器 (3)

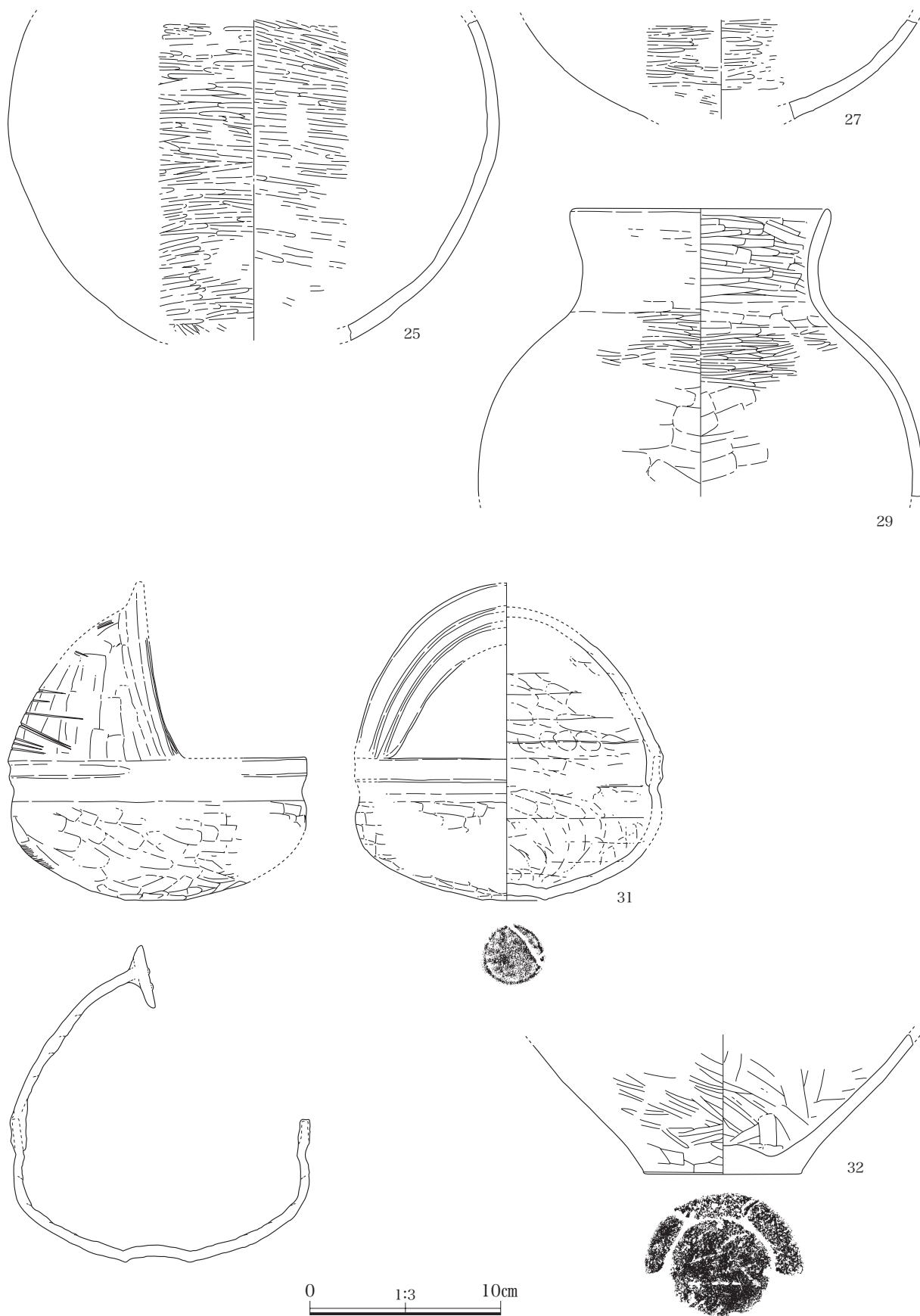


图 99 成塚向山1号墳 出土土器(4)

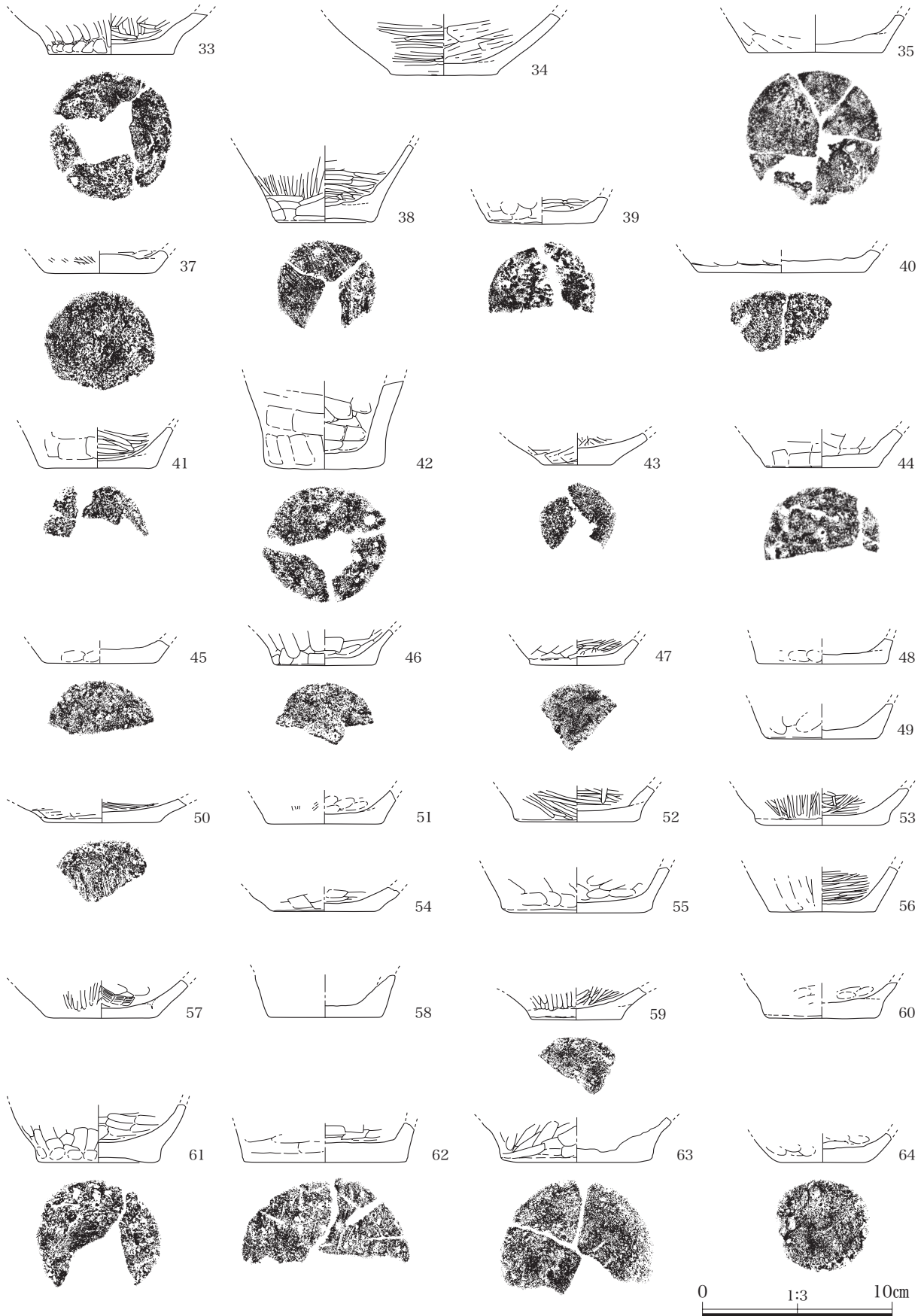


图 100 成塚向山1号墳 出土土器 (5)

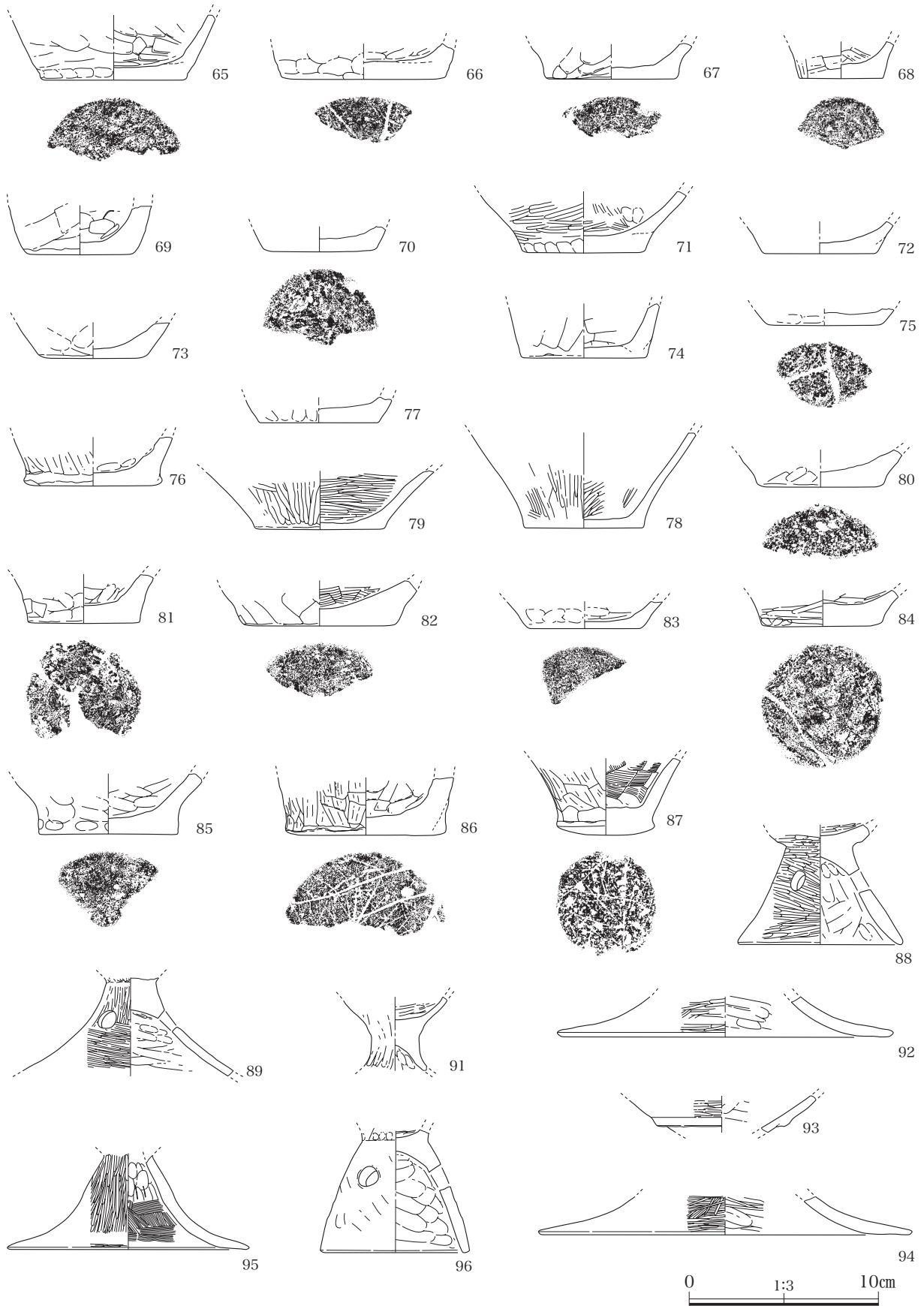


图101 成塚向山1号墳 出土土器(6)

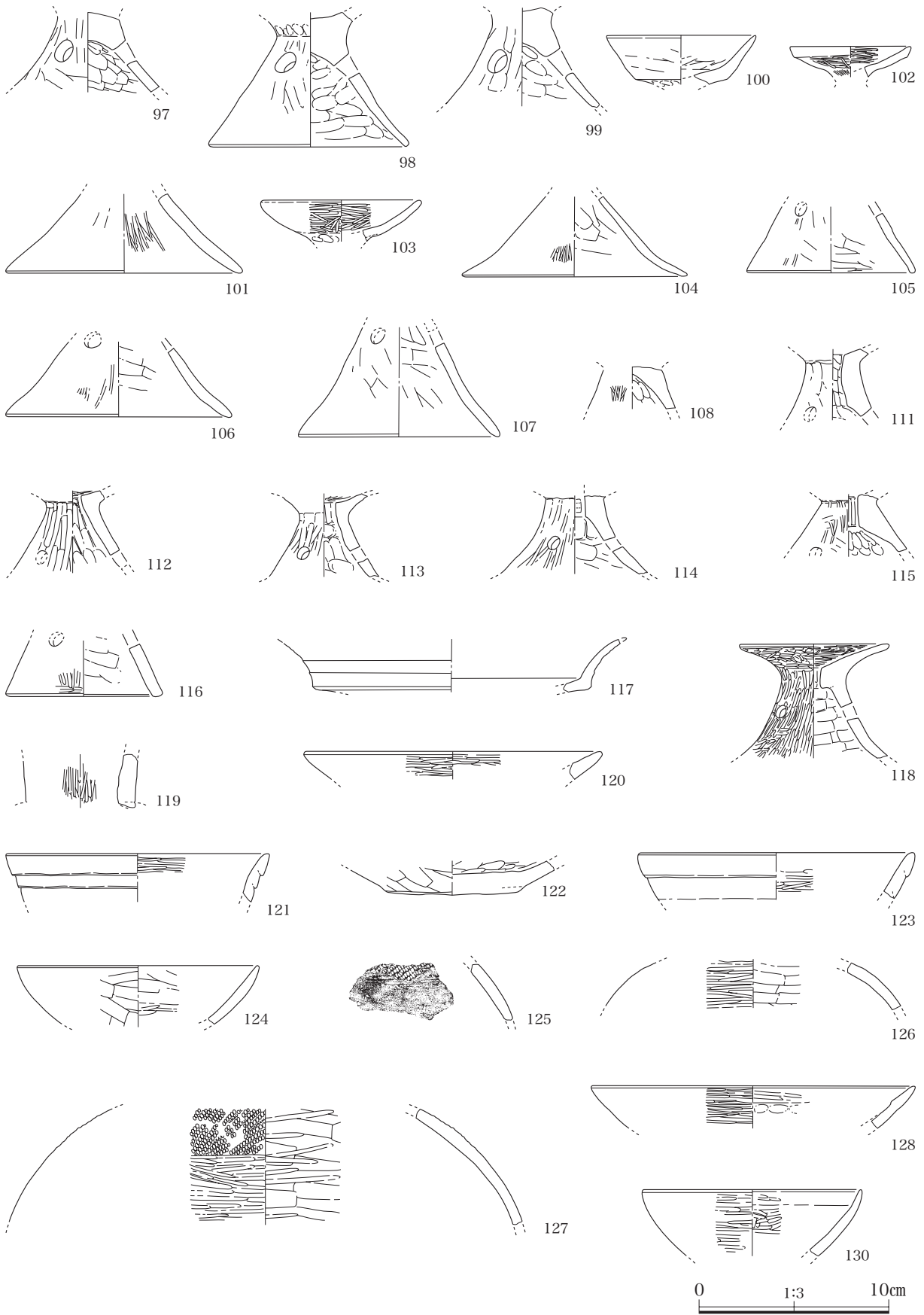


图 102 成塚向山1号墳 出土土器 (7)

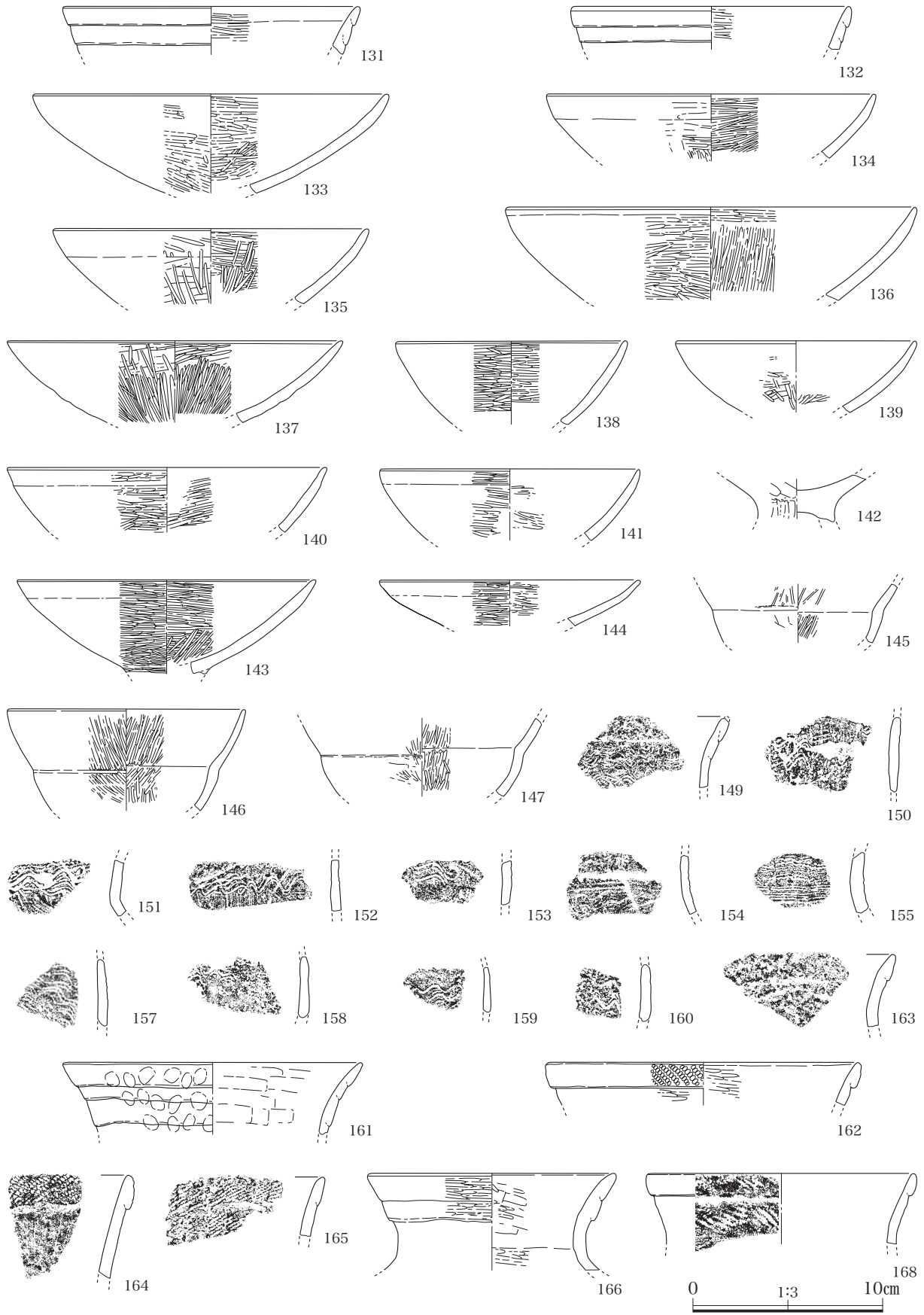


图 103 成塚向山1号墳 出土土器 (8)

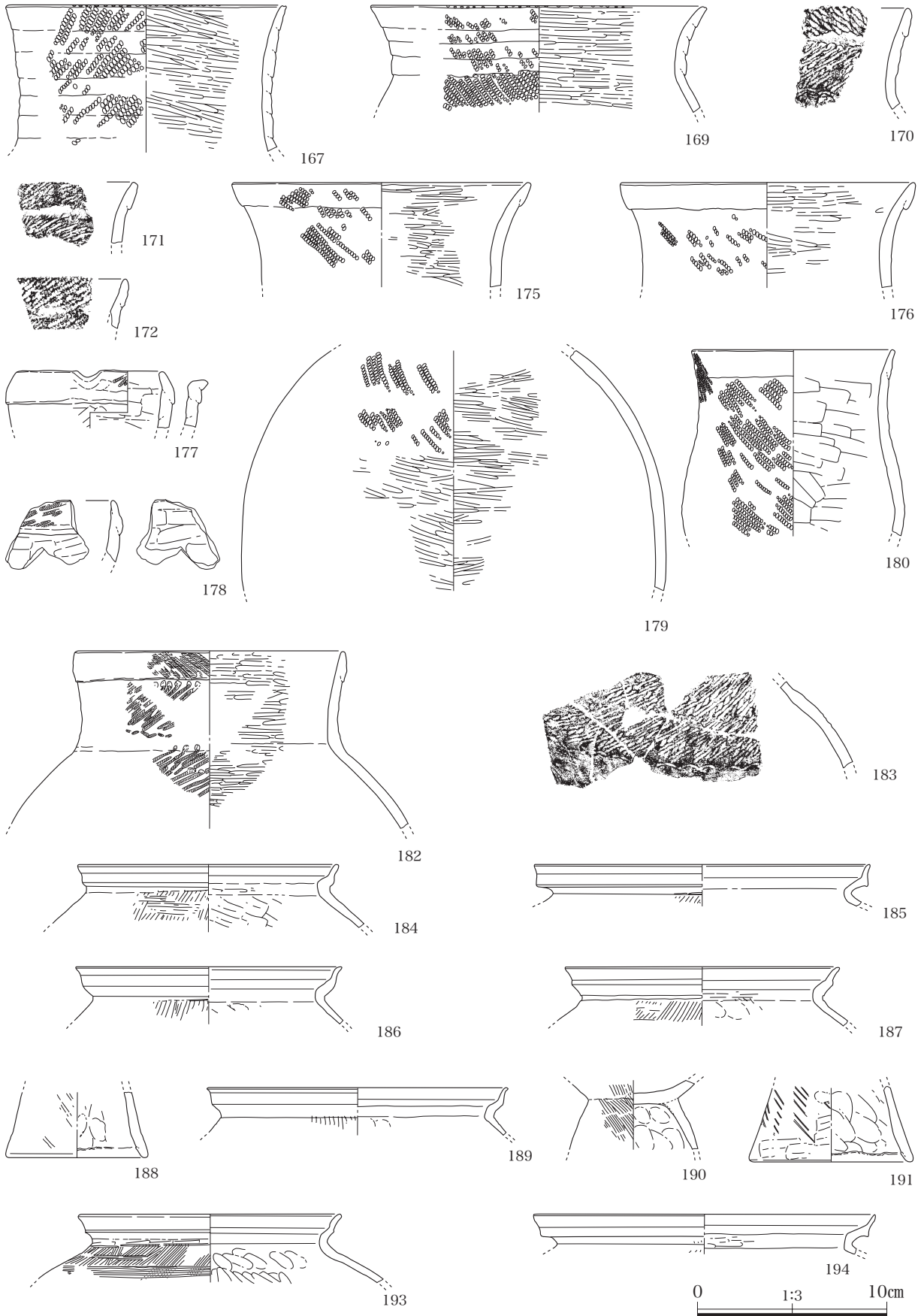


图 104 成塚向山1号墳 出土土器 (9)

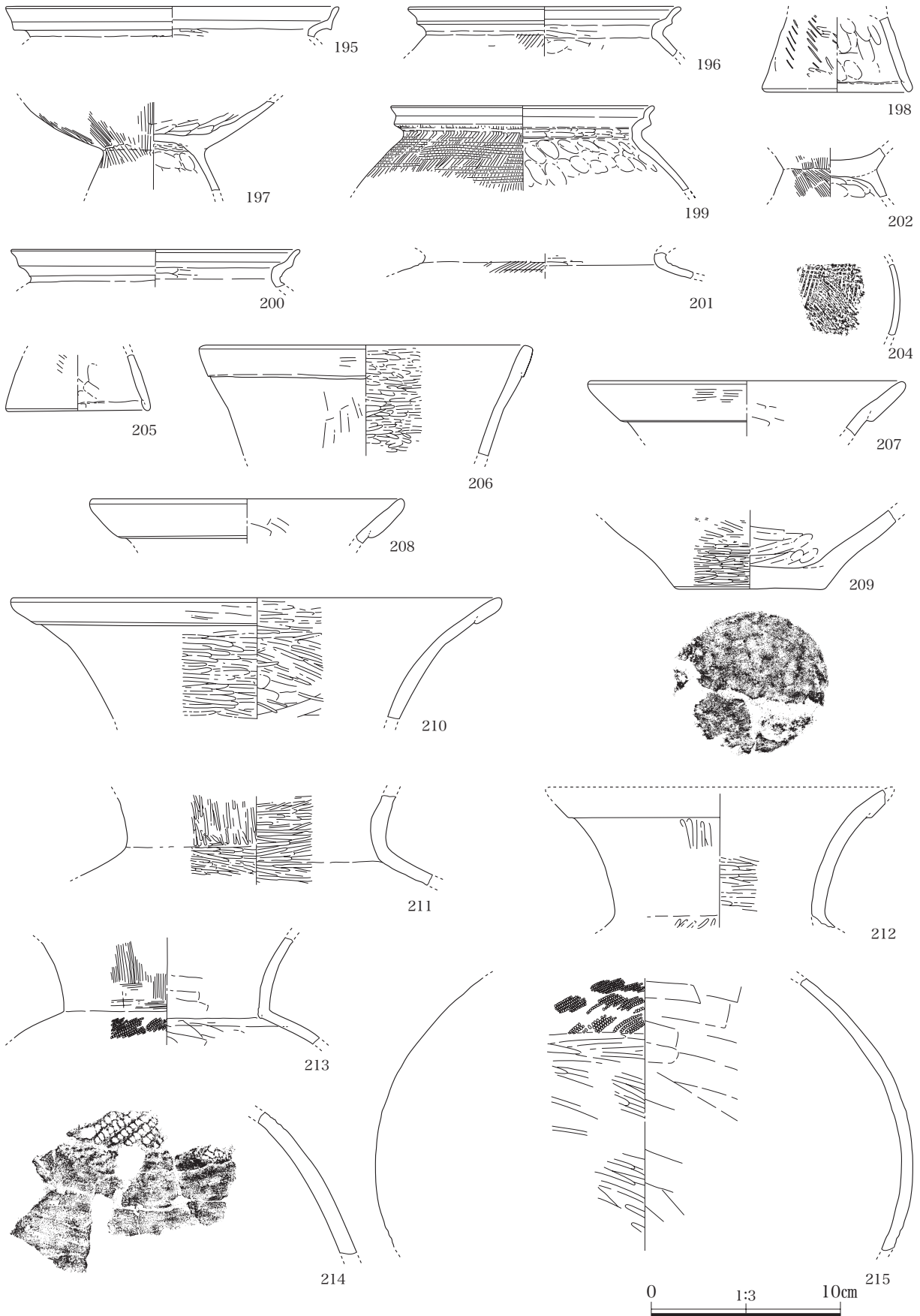


图 105 成塚向山1号墳 出土土器 (10)

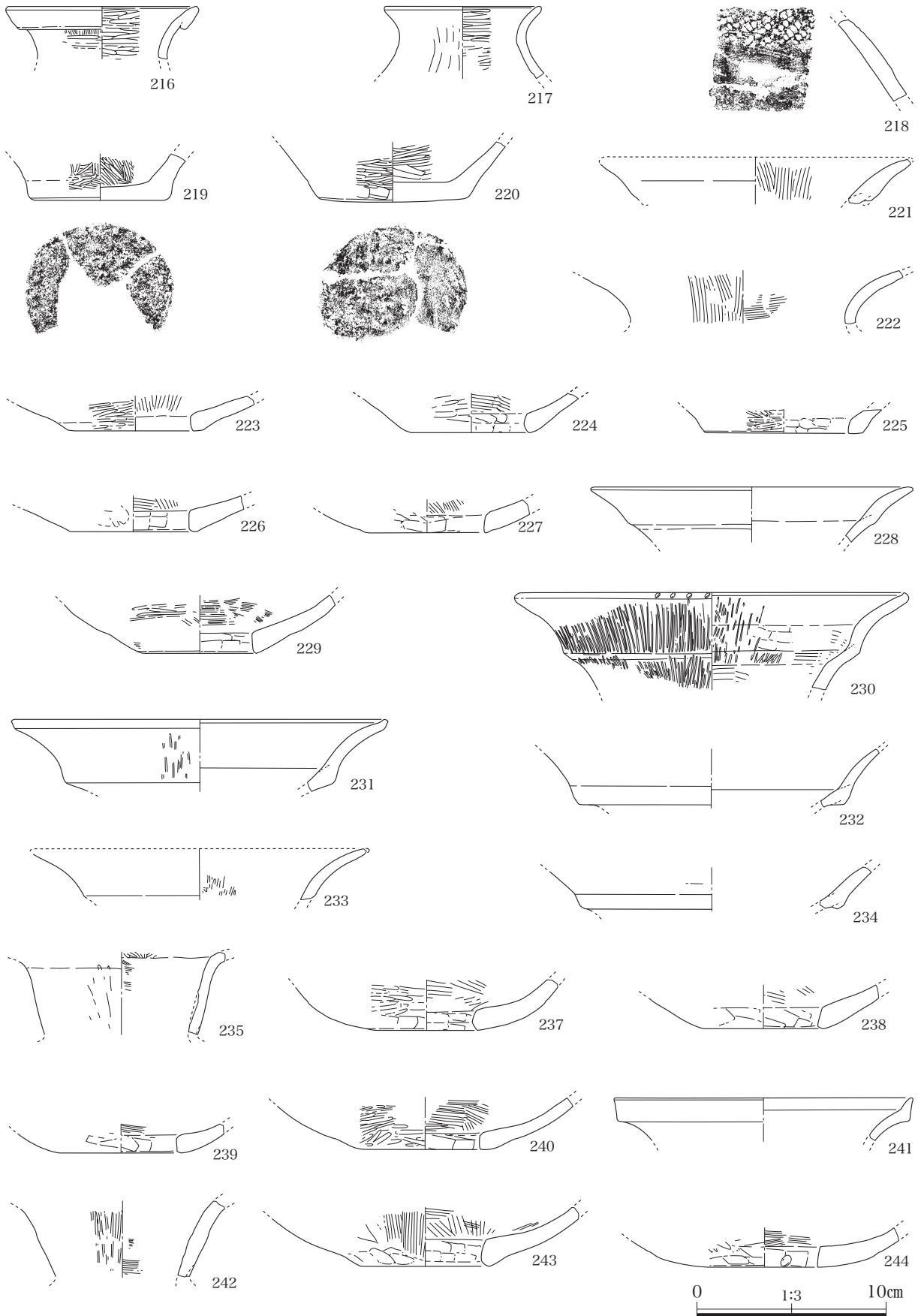


图 106 成塚向山 1号墳 出土土器 (11)

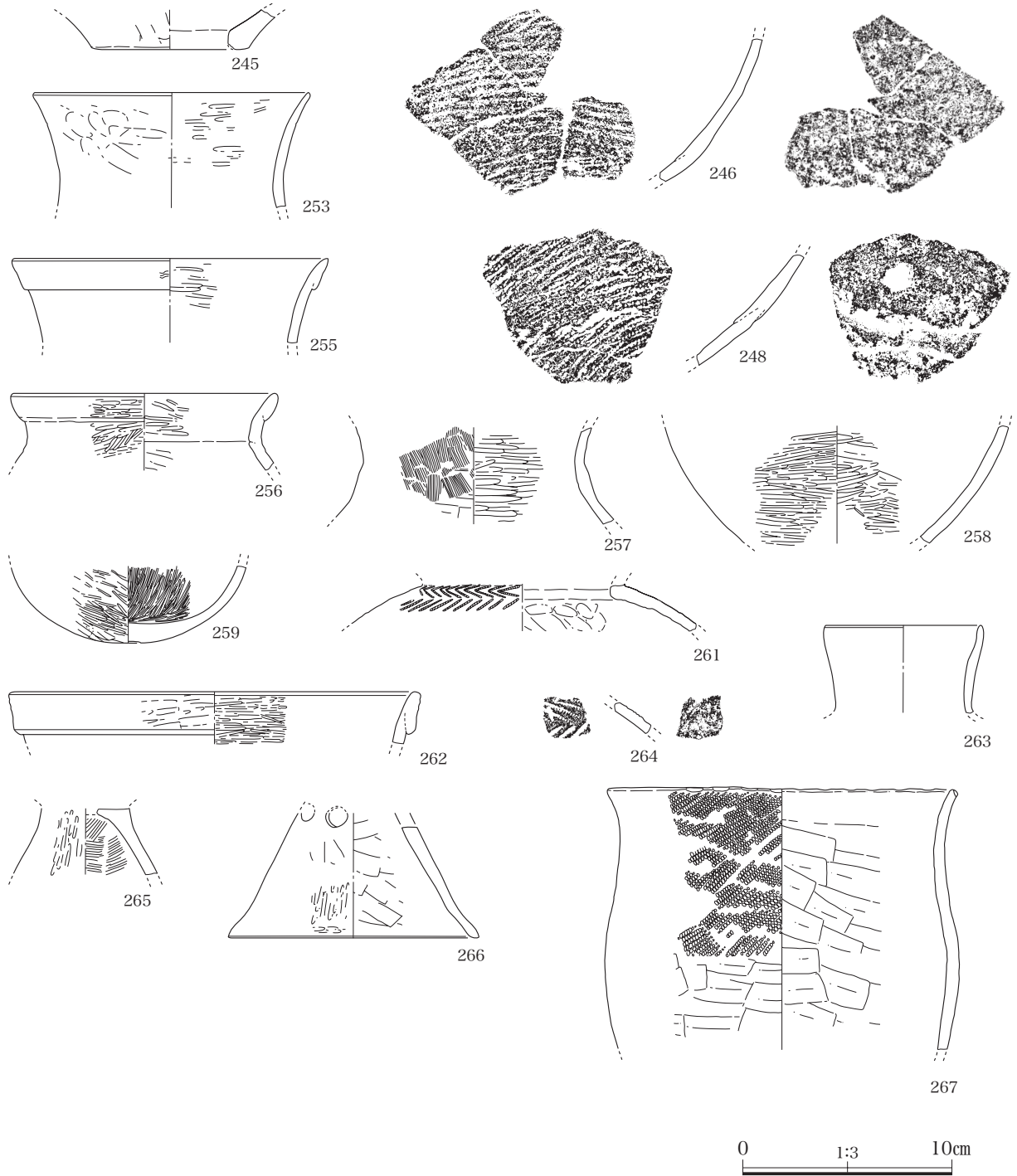


图 107 成塚向山1号墳 出土土器 (12)

第5章 調査報告3

成塚向山2号墳

- 1 調査前の状況
 - (1) 本調査前の状況
 - (2) 太田市教育委員会による試掘の成果
- 2 墳丘・周堀
 - (1) 墳丘について
 - (2) 周堀について
- 3 墳丘における埴輪樹立
 - (1) 概要
 - (2) 円筒埴輪の樹立状況
 - (3) 形象埴輪の樹立状況
- 4 墳丘に伴う遺物の出土状況
 - (1) 概要
 - (2) 円筒埴輪片の出土傾向
 - (3) 形象埴輪片の出土傾向
- 5 横穴式石室
 - (1) 概要
 - (2) 石室の閉塞状況
 - (3) 石室内の遺物出土状況
 - (4) 石室床面
 - (5) 石室床面下
 - (6) 石室壁面
- 6 墳丘・石室の解体
 - (1) 墳丘・石室の解体
 - (2) 石室壁面石材
 - (3) 石室根石
 - (4) 石室掘り方
 - (5) 墳丘盛土下の地山面
- 7 出土遺物について
 - (1) 出土遺物に関する概要
 - (2) 円筒埴輪
 - (3) 形象埴輪
 - (4) 鉄製品
 - (5) 玉製品
 - (6) 土器

1 調査前の状況

(1) 本調査前の状況

本墳は、八王子丘陵南端の支丘が南西方向に舌状に飛び出た部分、通称「八丁岡山」の南斜面中腹に位置する。標高では84～87 m附近に占地している。この斜面は古墳を築造するための面としては急斜面であり、9°40'～10°50'（勾配17～19%）の傾斜度がある。

本墳は、すでに太田市教育委員会による平成11年度の試掘調査により、その存在は確認されていたが、当事業団による平成15年8月の調査着手時においても、周囲の地形に比べて僅かに高く、横穴式石室の石材も露出していることから、そこに墳丘があることは容易に認識できた。

なお、本墳は「上毛古墳総覧」記載漏れの古墳である。（深澤）

(2) 太田市教育委員会による試掘の成果

本墳は、平成11年度に太田市教育委員会が実施した試掘調査によって、その存在が明らかになった古墳である。その調査報告については、太田市教育委員会編 2000『市内遺跡 XVI』（以下『平成11年度報告』、と略）にまとめられている。

今回の平成15～16年度の発掘調査報告に先立つ、『平成11年度報告』に基づく既知の調査内容・成果については次の通りである。

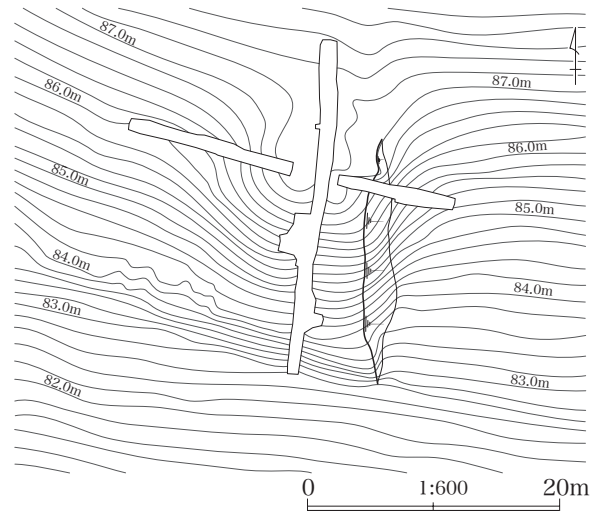


図108 調査着手前の現況地形図

①本墳は、墳丘規模が18～19 mの円墳と考えられる。

②主体部については、横穴式石室と考えられる。部分的なトレンチ調査のため、全貌は把握していないが、入口部周辺は破壊され羨道残存長は約2 m、玄室長は3 mを計測することが判明した。

③本墳より出土した古墳時代遺物は、円筒埴輪片と形象埴輪片である。前者はもともと墳丘裾に立てられていたものと考えられ、後者は墳頂部から転落したものと考えられる。なお、形象埴輪片の種類としては、家・人物・大刀・鞆?がある。

④本墳の築造時期については、主体部に横穴式石室を有し、墳頂部に形象埴輪を置いており、出土した円筒埴輪の特徴から見ても6世紀後半に位置づけられる。（深澤）



写真10 調査前状況（東→）（太田市教育委員会提供）



写真11 調査前状況（北→）

1 調査前の状況

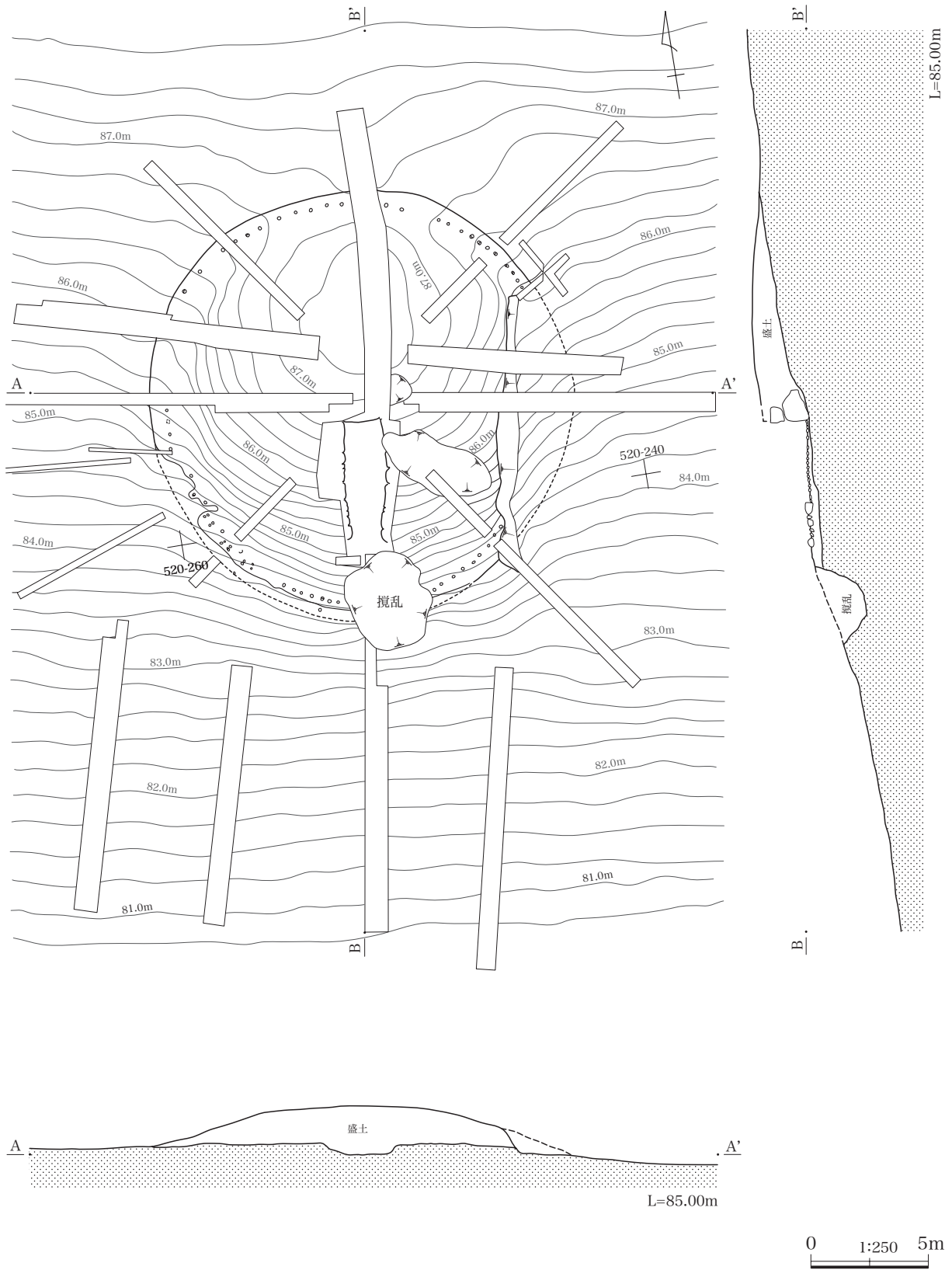


図 109 墳丘 平・断面図

2 墳丘・周堀

(1) 墳丘について

墳丘規模 本墳は墳丘直径18mの円墳と考える。

本墳の場合、詳しくは後述するが、明確な周堀が存在しない。ゆえに、上記のうち規模については盛り土の施されている範囲を墳丘規模として考えた。

葺石の有無 本墳は葺石を有しない。

墳裾の認定 (図110) 本墳の場合、葺石が存在せず、地山と盛土の土質がほぼ同一のため、盛土の施されている範囲を外観から判断することは困難であった。そのため、適所にトレンチを設定し、土層断面観察によって、墳裾の認定を行うこととした。

2トレンチは墳丘北側に設置した。断面観察を行った結果、図中の1～4層が盛土であることが確認された。1層は褐色粘質土と暗褐色粘質土の互層であり、2・3層は暗褐色粘質土、4層は褐色粘質土であり、いずれもしまりは極めて強く、墳丘盛土に相応しい土質を呈していた。一方、6層は暗褐色土であり、この層には地山に含まれる凝灰岩粒を含むものの、盛土のような強いしまり具合も認められないことから、盛土ではないと判断した。

4トレンチは墳丘南東部に設置した。断面観察を行った結果、図中の3層が盛り土であることを確認した。6層は暗褐色土であるが盛土のようなしまりは認められず、7層もしまりのない褐色土であり、表土と思われる土層であった。ゆえに、この6・7層を盛土と認定することはしなかった。

5トレンチは墳丘南西部に設置した。断面観察を行った結果、図中の1層が褐色粘質土と暗褐色粘質土の互層、2層は暗褐色粘質土であり、いずれもしまりは極めて強く、盛土と判断した。

6トレンチは、墳丘北西部に設置した。断面観察を行った結果、図中の1層が硬くしまった褐色粘質土であり、盛土と判断した。6層は暗褐色土であり、盛土のようなしまりは認められず、この層を盛土と認定することはしなかった。

7トレンチは墳丘北東部に設置した。断面観察を行った結果、図中の1層が硬くしまった褐色粘質土であり、盛土と判断した。

なお、上記5つのトレンチにおいて、地山最上位層はいずれも榛名二ツ岳パミスを含む黒色土であったため、盛土と地山の識別は容易にでき、誤認をすることはなかった。(深澤)

(2) 周堀について

存在の有無 本墳は、周堀存在の明確な痕跡が認められなかった。

周堀の確認調査 (図110) 本墳の立地する箇所は、地山にチャート礫層が存在し、その層までの深さは表土面から15～40cmほどであった。そして、それは自然堆積と判断された(「第8章 6」参照)ため、この層を確実な地山と判断し、周堀の確認調査においても、この礫層に到達するまで、トレンチを掘削した。

1トレンチは墳丘南側、石室開口部正面位置に設置した。断面観察を行った結果、推定される墳裾部より南に3mの位置に、幅1.8m、深さ0.2mの落ち込みを確認した。この落ち込みの覆土は、埴輪片を含む黒褐色土であったが、周堀ではないと判断した。その理由は、このトレンチの東西に設置した4・9～11トレンチでは同様の落ち込みが確認できず、連続しないことが確認されたからである。

13トレンチは、墳丘東側に設置し、断面観察を行った。断面観察の結果、周堀に相当する落ち込みは確認されなかった。

14～16トレンチは、墳丘西側に設置し、断面観察を行ったが、他と同様、周堀に相当する落ち込みは確認されなかった。

上記の断面観察の結果を考慮すると、墳丘の内と外とを明確に区分するような周堀の存在は肯定できない。ただし、墳丘盛土に用いられた土は、明らかに立地する周辺の土質(基本土層X・XI層に相当)を呈していることから、本墳では、盛土確保のために、浅く梳くように地山を削り、盛土用の土を確保したと思われる。(深澤)

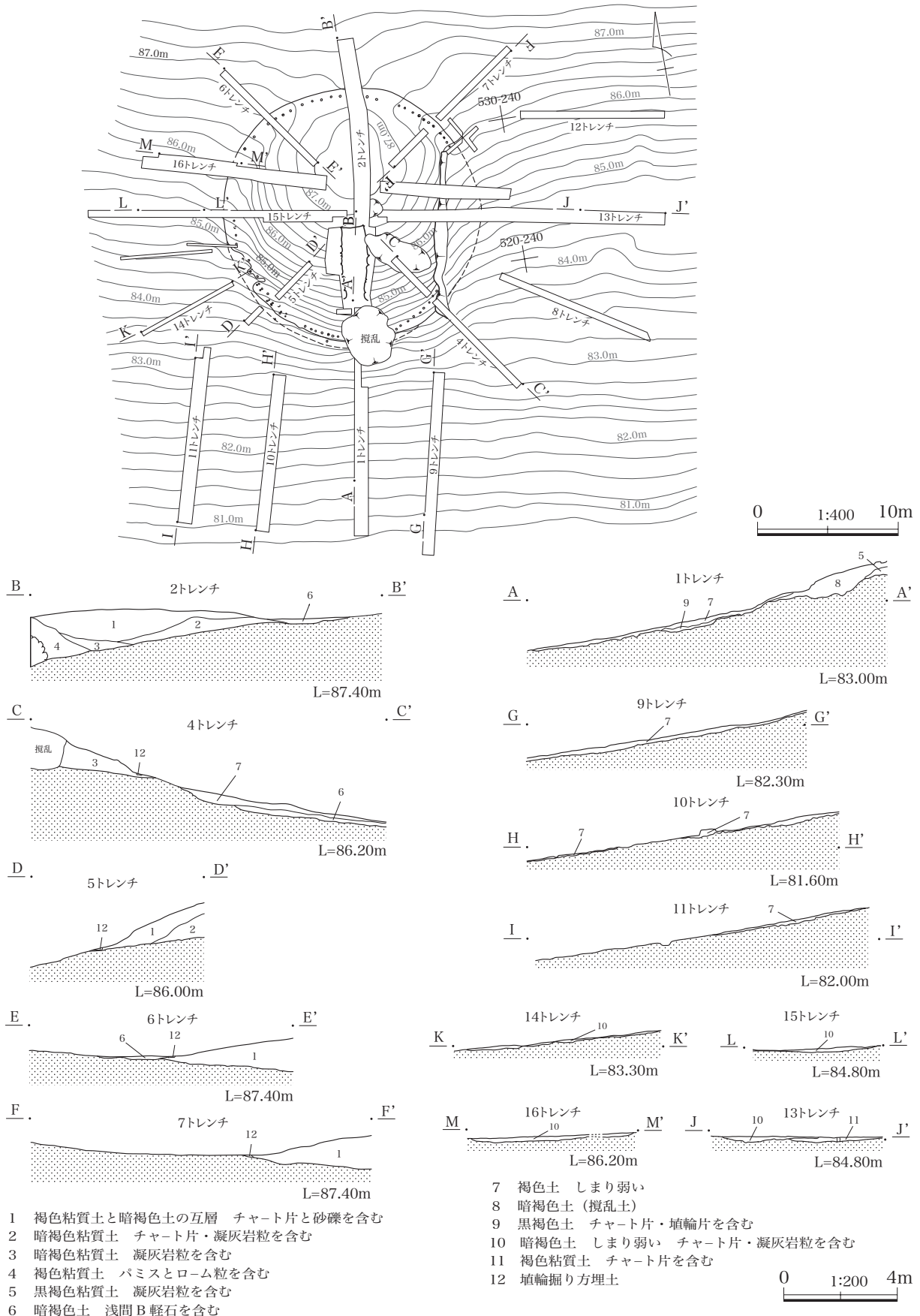


図 110 墳丘裾・周堀 確認トレンチ・平・断面図

3 墳丘における埴輪樹立

(1) 概要

本墳の場合、墳丘盛土が東側と南側の一部で削平を受けてはいるものの、それ以外の大半では墳丘裾部まで比較的良好的に残存している。ゆえに、埴裾廻りに設置された埴輪列は比較的良好的な状態でその樹立状況が確認できた。ただし、墳丘頂部付近では盛土崩落が激しく、埴輪樹立の痕跡は全く認められなかった。

埴裾廻りから検出された埴輪列は一重の弧を呈して配列されており、一部抜き取られている箇所があるものの、円筒（または朝顔形）埴輪36本、馬4体分、馬以外の形象埴輪11本が原位置で確認された。ただし、いずれの埴輪も、上半が欠損した状態で検出されており、特に馬以外の形象埴輪については形式特定を容易に行うことができない出土状態であった。

このような樹立状態が確認された埴輪列であるが、ここから考えられる配列特徴としては、次の通りである。

平面的特徴としては、1つめは、形象埴輪の位置である。馬及び原位置が確認できる全ての形象埴輪基部はいずれも、墳丘南西部、石室開口部西側に限定して、その樹立を確認できるということである。そして、2つめは、一重の弧状に展開する埴輪列は形象埴輪も円筒（朝顔形を含む）埴輪も同一列で配列されていることである。

断面的特徴としては、全ての埴輪について、掘り方が墳丘盛土を掘り込んでいるということである。

さらに立面的特徴としては、埴輪列は墳丘傾斜に即して樹立されているということである。すなわち、確認された埴輪列のうち、埴輪列26～52までは石室床面レベルよりも高い位置に樹立しており、逆に埴輪列3～25までは石室床面レベルよりも低い位置に樹立している。特に石室南側においては、石室床面レベルよりも約1.0m低い位置に埴輪列が存在する状況が判明した。 (深澤)

(2) 円筒埴輪の樹立状況

樹立状況が確認された円筒埴輪は34本、朝顔形埴輪は2本（うち1本は高い可能性のもの）である。

円筒埴輪34本（円04～11・27・28・30～52・59）はいずれも上半を欠損し、口縁部までの情報を得られるものはない。しかし、残存具合から、2条3段構成の円筒埴輪であることが分かる。これらのうち、2段目の透孔が確認できる資料は8本（円04～06・08～10・35・41）である。これらの樹立状況をうかがうと、透孔の方向は一定していない。円筒埴輪列08～10などは、弧状ラインを繋ぐような方向性をもっているようにみえるが、円筒埴輪列04～06・35・41はそうした規則性のある方向性をもっておらず、総体としては樹立時に透孔の方向に規制をかけていた状況は見受けられない。

樹立位置の間隔については、ほぼ50～70cmの間隔をもって連続する状況が確認できる。一部に、この間隔を逸脱する箇所があるが、これらについては本来的には樹立埴輪が存在したと考えたいところである。例えば円筒埴輪列29と呼称した箇所は掘り方のみの検出であるが、本来は樹立していた円筒埴輪列30から31の間については、墳丘盛土の削平から、本来は存在したものが喪失してしまった可能性が高い。その一方で、円筒埴輪列34と35の間、円筒埴輪列39と40の間、円筒埴輪列41と42の間については明確な盛土が確認できながらも、調査の結果ではその掘り方すら検出することができなかった。

掘り方についてはいずれも円形または不整円形を呈する。その平面規模は直径20～30cmを呈する。本墳の円筒埴輪の基部直径が概ね12～14cmのものであることから、それより一回り大きな掘り方を掘削しその中に埴輪を樹立させたものと考えられる。なお、掘り方はいずれも盛土を削り込んでいることから、盛土形成後に樹立を行ったことがうかがい知れる。

朝顔形埴輪（円03・12）も上記円筒埴輪と同様であり、一連の樹立が想定される。 (深澤)

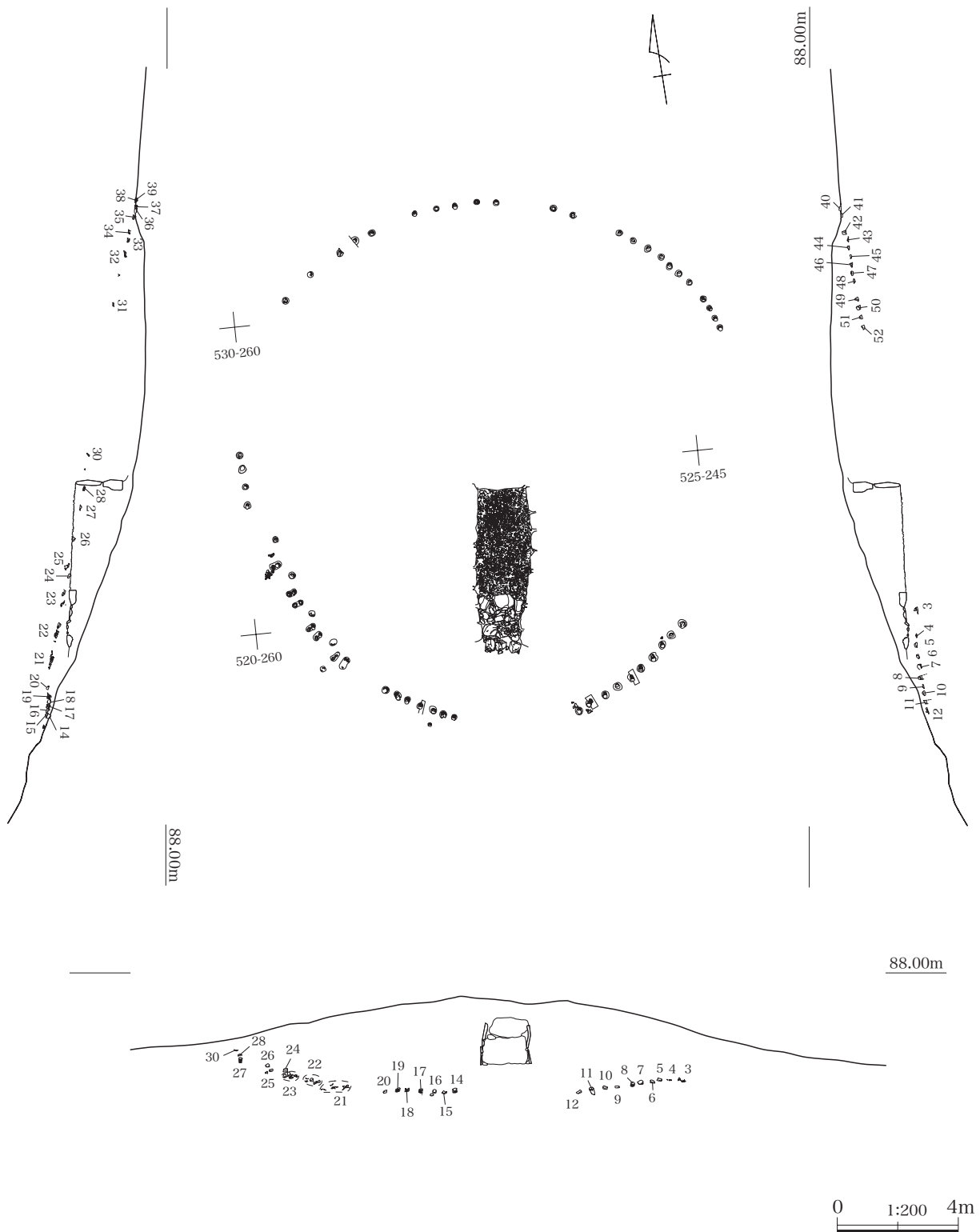
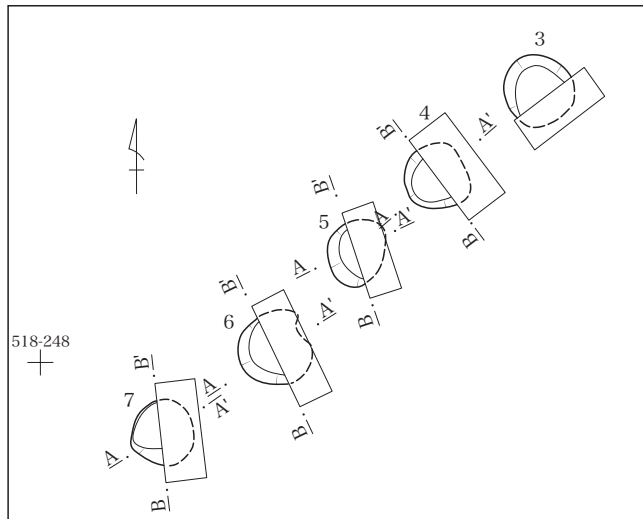
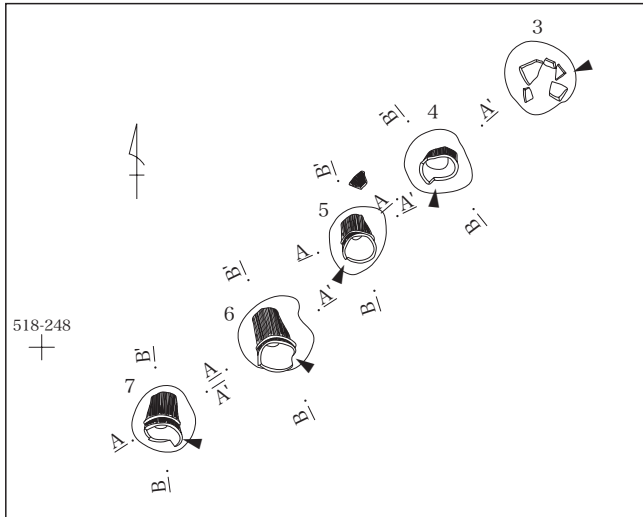
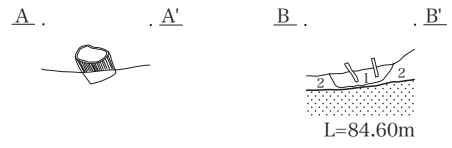


図 111 埴輪樹立状況 平面・見通し図

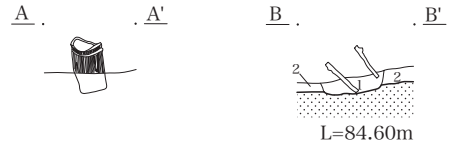


0 1:30 1m

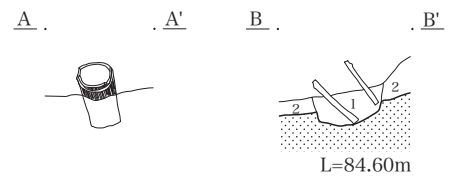
埴輪列4



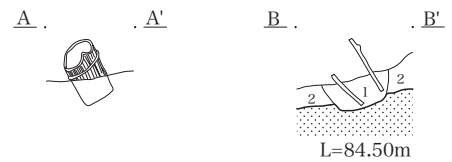
埴輪列5



埴輪列6



埴輪列7



- 1 褐色粘質土 (埴輪埋土)
- 2 暗褐色粘質土 (埴丘盛土)

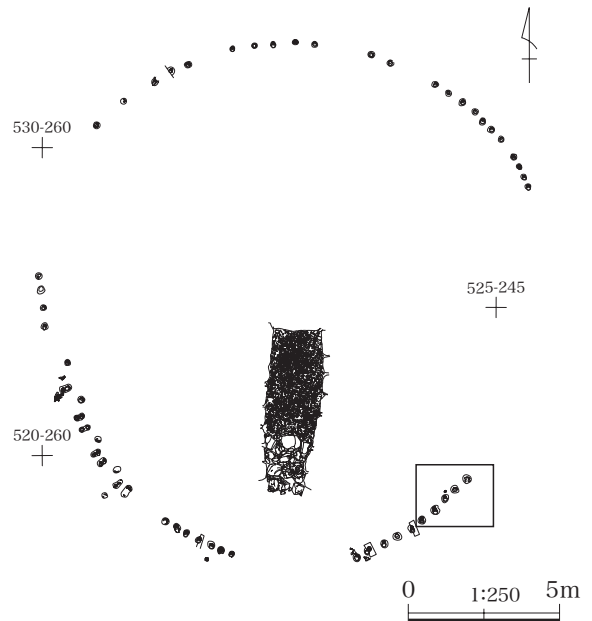
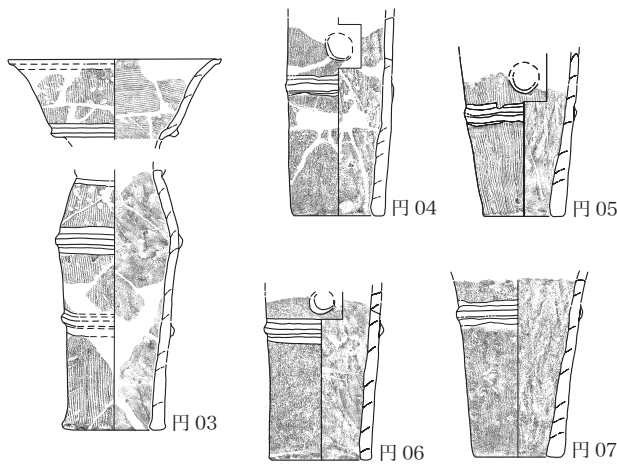
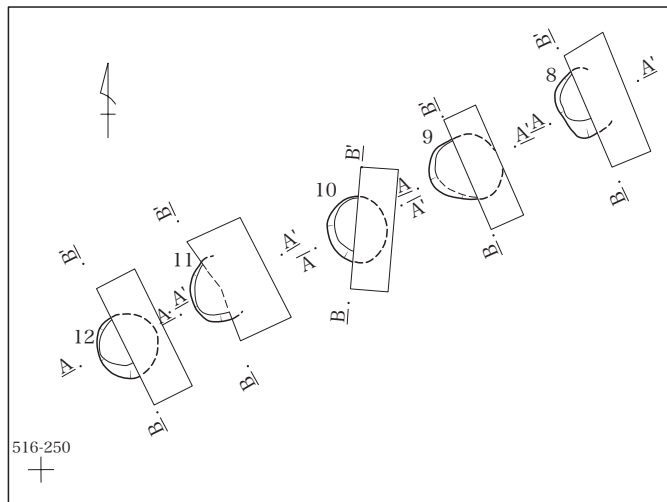
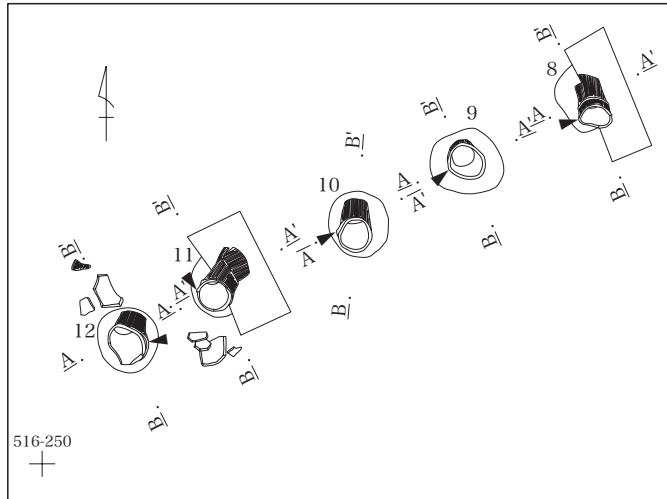


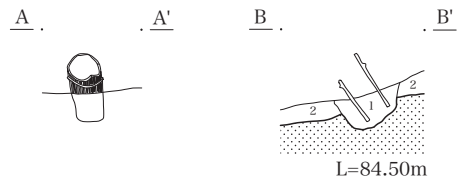
図112 円筒埴輪樹立状況 平・断面図(1) 埴輪列3~7

3 墳丘における埴輪樹立

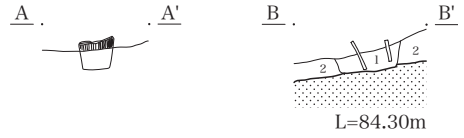


0 1:30 1m

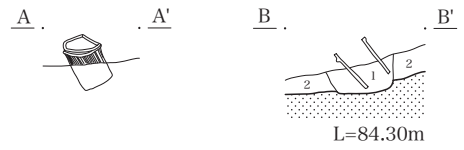
埴輪列8



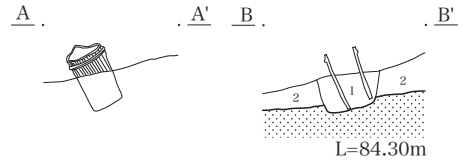
埴輪列9



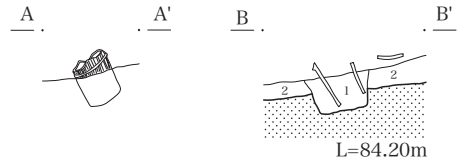
埴輪列10



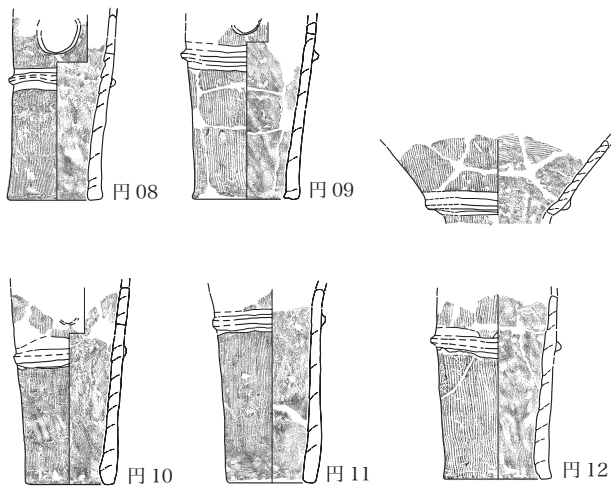
埴輪列11



埴輪列12



- 1 褐色粘質土 (埴輪埋土)
- 2 暗褐色粘質土 (墳丘盛土)



0 1:10 20cm

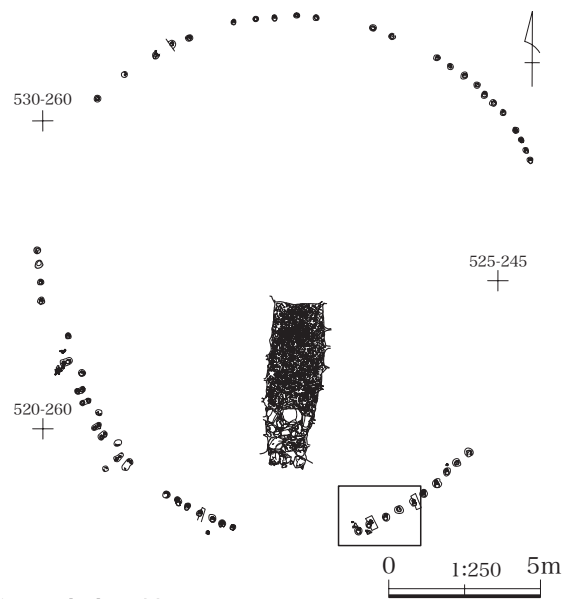


図 113 円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (2) 埴輪列8~12

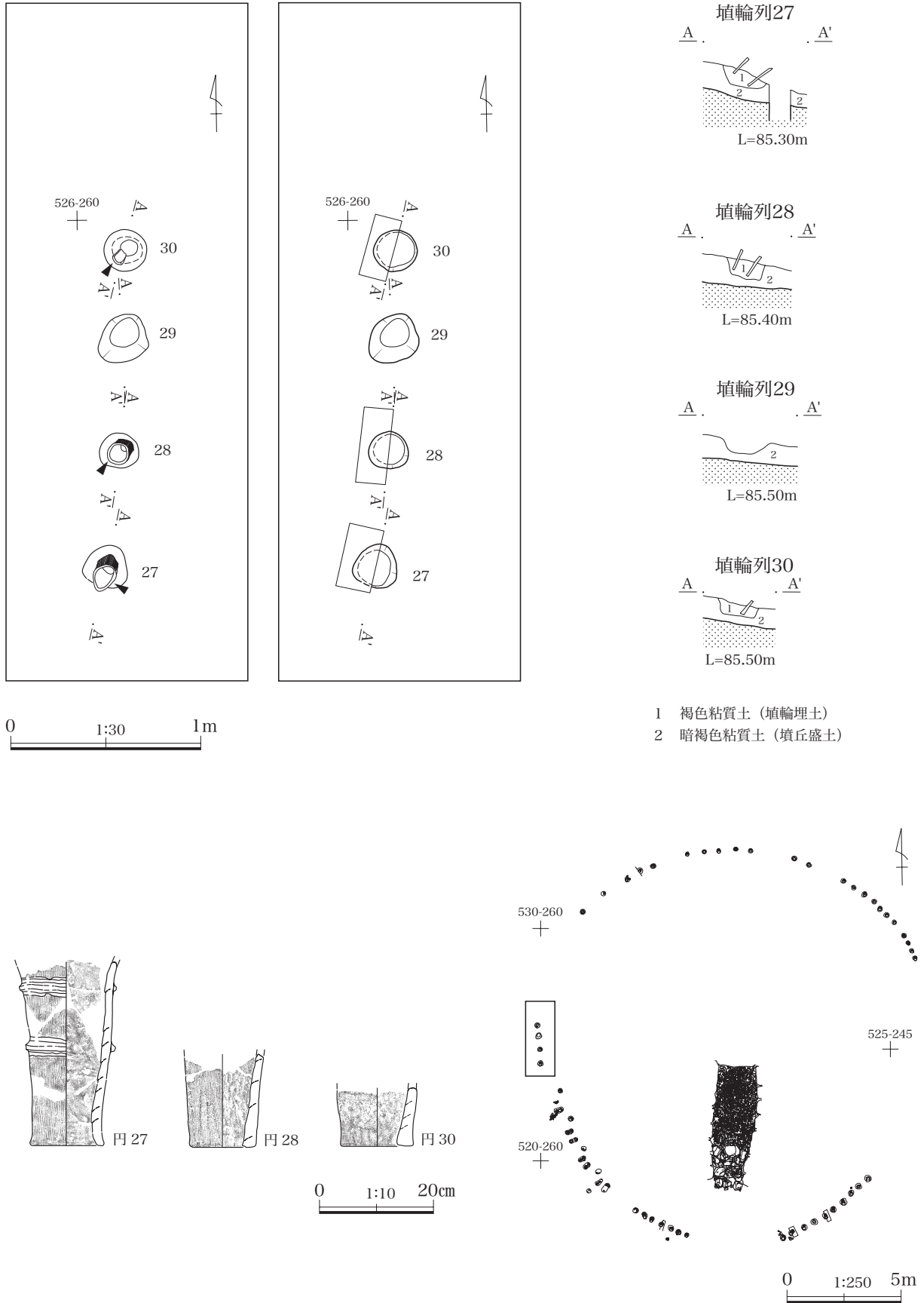


図114 円筒埴輪樹立状況 平・断面図(3) 埴輪列27~30 (29は掘り方のみ)

3 墳丘における埴輪樹立

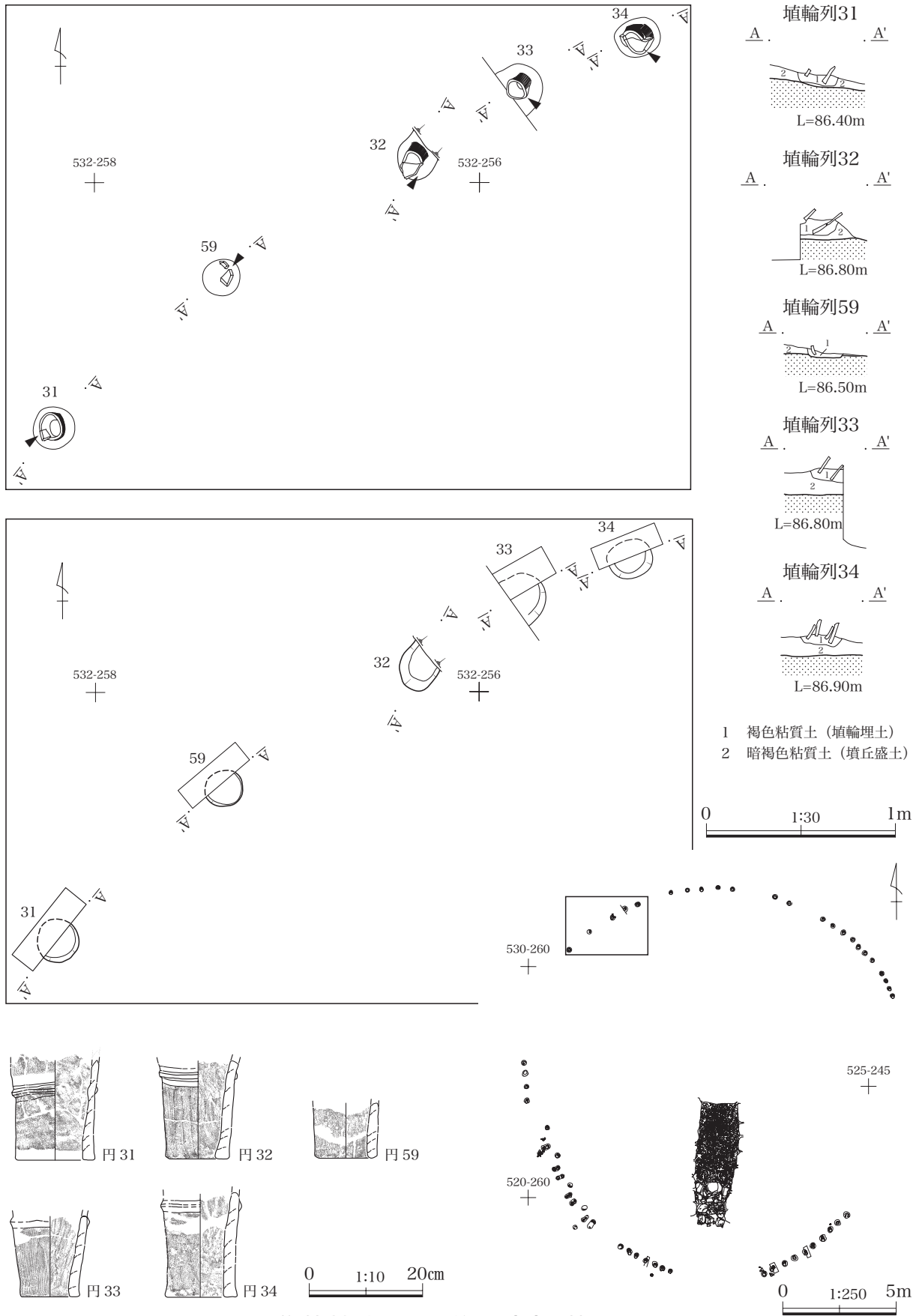


図 115 円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (4) 埴輪列 31 ~ 34・59

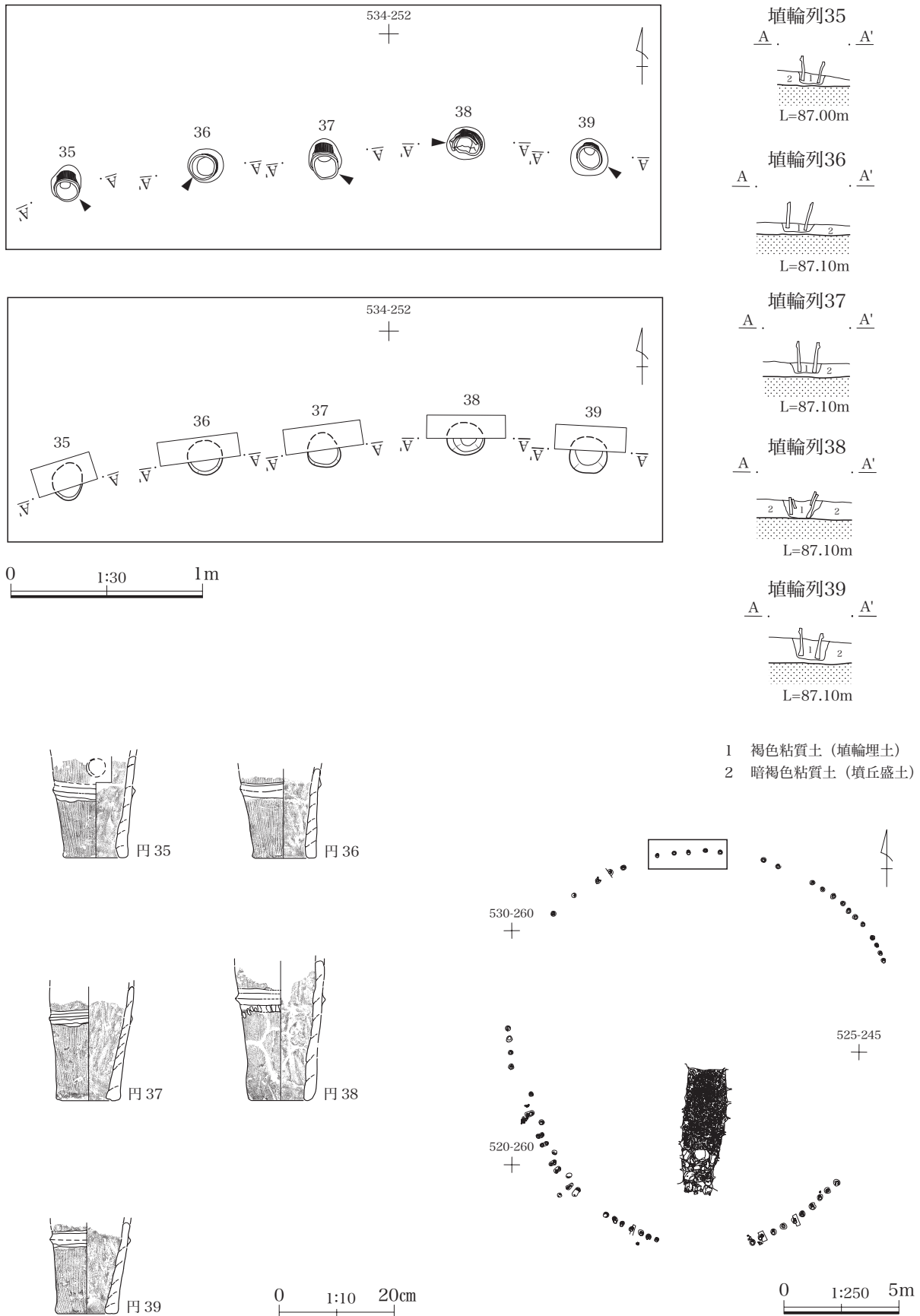
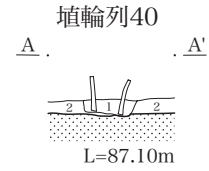
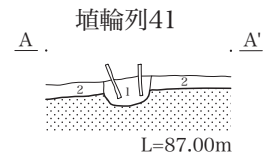
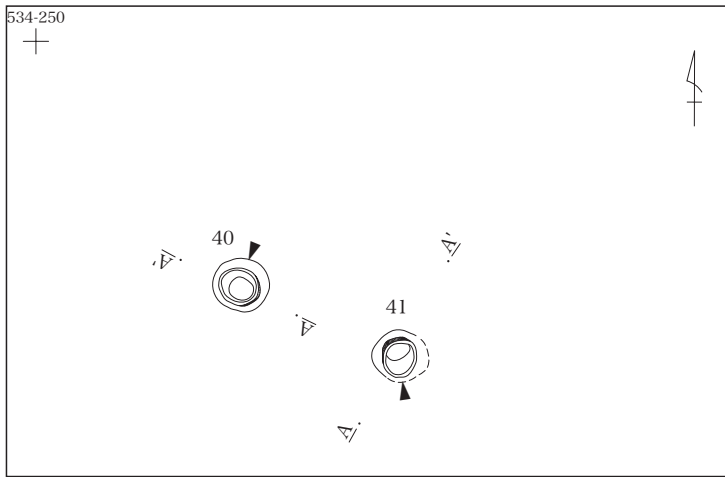


図 116 円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (5) 埴輪列 35 ~ 39

3 墳丘における埴輪樹立



- 1 褐色粘質土 (埴輪埋土)
- 2 暗褐色粘質土 (墳丘盛土)

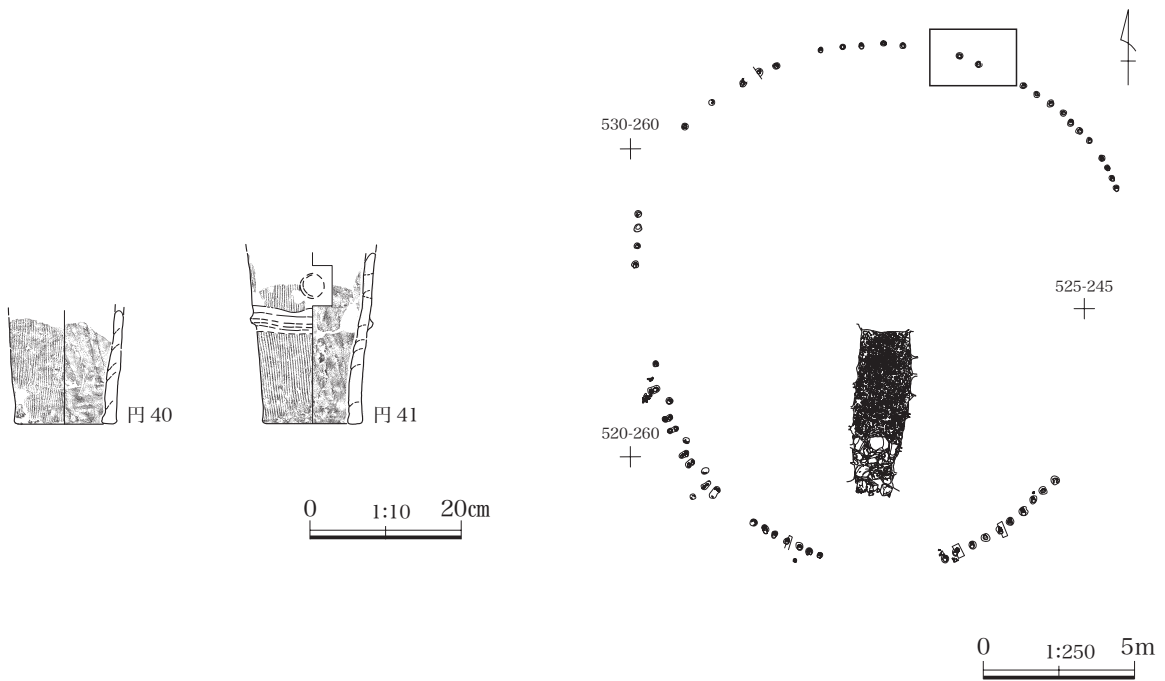
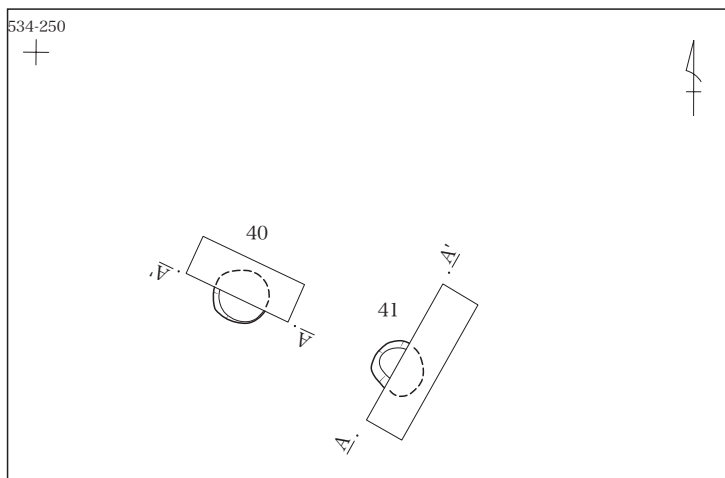
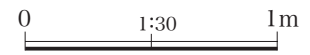
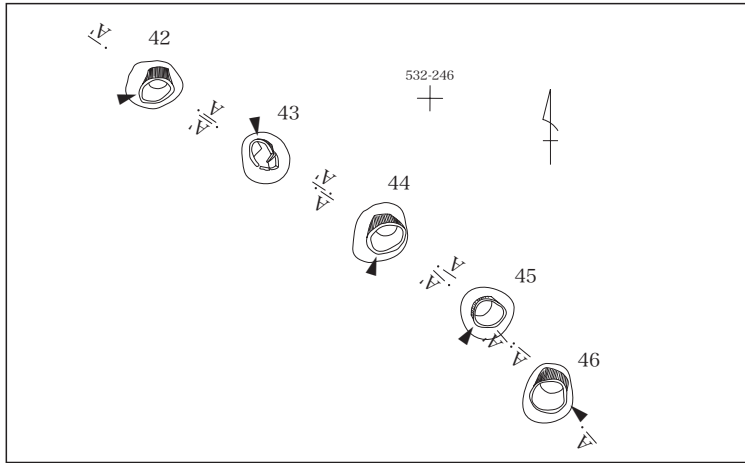
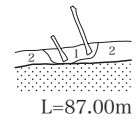


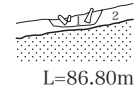
図 117 円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (6) 埴輪列 40・41



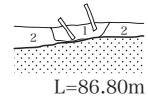
埴輪列42
A . . A'



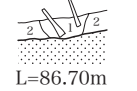
埴輪列43
A . . A'



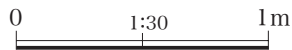
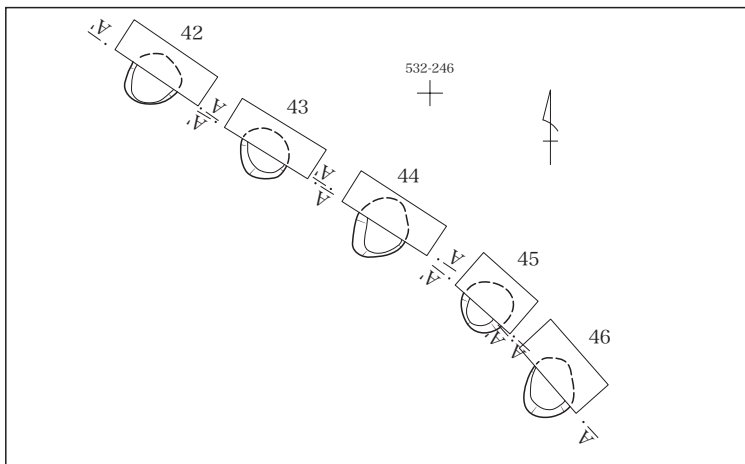
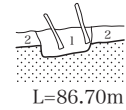
埴輪列44
A . . A'



埴輪列45
A . . A'



埴輪列46
A . . A'



- 1 褐色粘質土 (埴輪埋土)
- 2 暗褐色粘質土 (埴丘盛土)

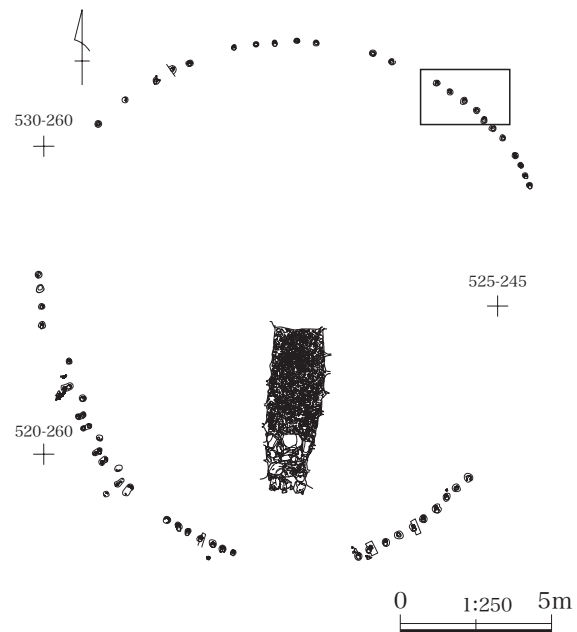
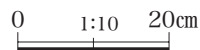
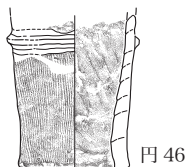
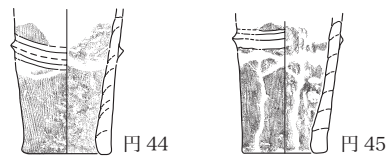
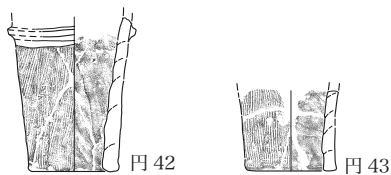
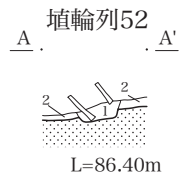
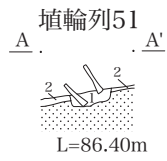
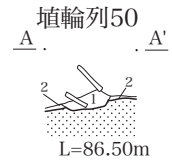
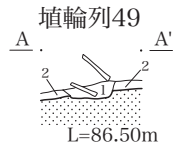
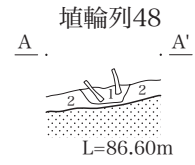
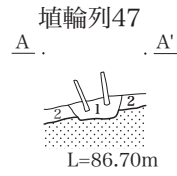
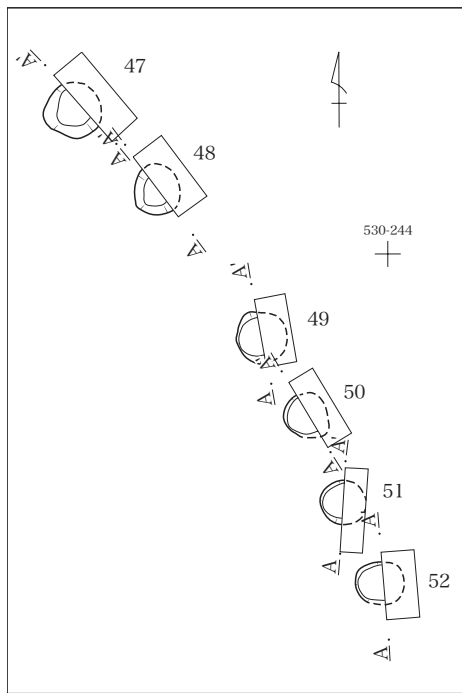
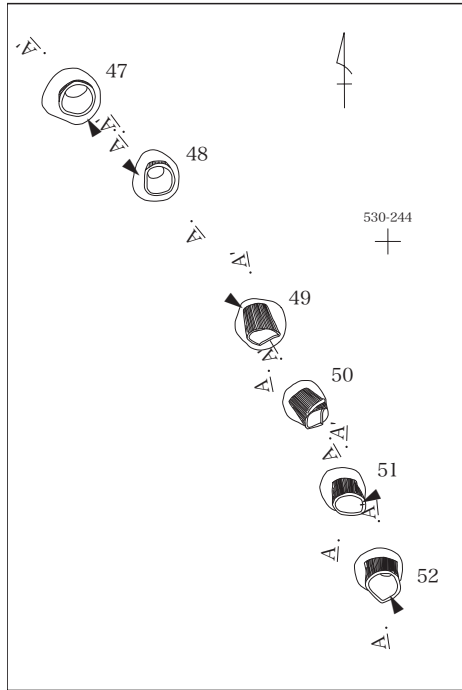


図118 円筒埴輪樹立状況 平・断面図(7) 埴輪列42~46

3 墳丘における埴輪樹立



- 1 褐色粘質土 (埴輪埋土)
- 2 暗褐色粘質土 (墳丘盛土)

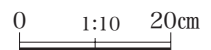
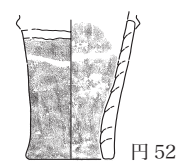
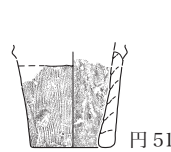
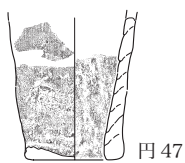
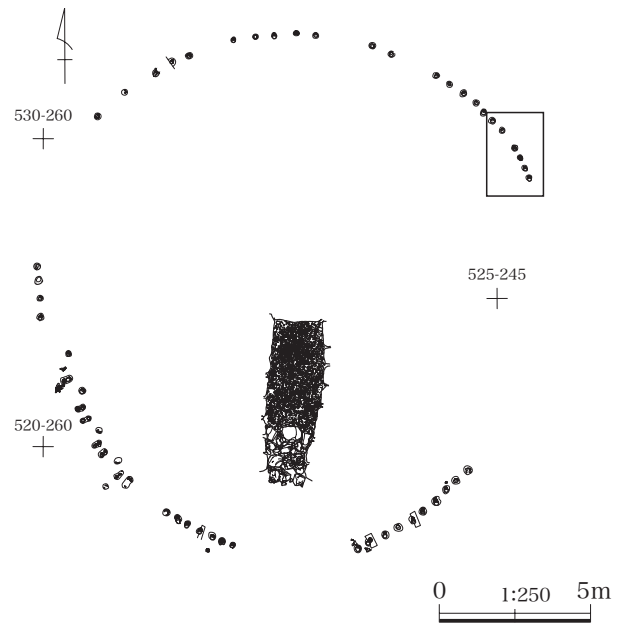


図 119 円筒埴輪樹立状況 平・断面図 (8) 埴輪列 47 ~ 52

(3) 形象埴輪の樹立状況

形象埴輪は15個体分が原位置にて検出された。いずれも基部のみであり、馬形埴輪4体分、馬以外の形象埴輪11本が原位置にて検出された。基部のみの検出であるため、馬4体については形態の特徴からそれと断定できたものの、それ以外の個体については、出土資料自体からはその形式を特定できるものはなかった。

馬以外の形象埴輪基部については、円筒埴輪と同様に、弧状列に配列するもの7本(埴輪列14～20)と、馬形埴輪の斜め前に位置するもの4本(埴輪列24・26・54・58)とに分離することができる。

弧状列に配列する7本は、石室入口部の南西に連続して配列する。透孔が確認できる資料は1本(埴輪列14)のみであり、その方向はほぼ南北方向を向いている。樹立位置の間隔については、40～50cmの間隔をもっており、先述の円筒埴輪列に比べてわずかに狭い間隔であることが認められる。掘り方については平面・円形または楕円形を呈し、その平面規模は直径20～25cmを計る。いずれも墳丘盛土を掘削していることから、墳丘盛土構築後に樹立したものといえる。

馬形埴輪の斜め前に位置する4本は4体の馬形埴輪1体につき1個体ずつ存在する(埴輪列24→埴輪列23・埴輪列26→埴輪列25・埴輪列54→埴輪列22・埴輪列58→埴輪列21)。それぞれの馬形埴輪との距離間隔は40～45cmを計り、共通性が高い。掘り方の規模形状については、前述の弧状列の7本と同様である。

馬形埴輪4体は、墳丘の南西部分、先述の7本の弧状配列する形象埴輪列の北西位置から検出された。いずれも足部分のみの検出であり、これらは全てが、円筒埴輪やその他の形象埴輪の基部同様に、弧状配列する位置関係がみとめられる。それぞれの個体は残存状況に差異があり、4本足分が原位置で確認できるもの(埴輪列22・23)、辛うじて3本分の原位置が確認できるもの(埴輪列21・25)がある。ただし、後者の場合においても、欠落する1足の存在が推定される位置は墳丘斜面下位に位置することから、本来は存在していたものが斜面下に崩落したと思われる、樹立時には4本足が全て存在していたといえる。検出された足に表現された蹄叉はいずれも個体単位においては同一方向を向いており、その方向からは4体の馬は北西～北方向を向いていたことがうかがい知れる。馬形埴輪の間隔は75～90cmを計る。また、個体単位での足の間隔は左右足間隔は20cm、前後足間隔は40cmであり、いずれもほぼ同一である。掘り方については前足・後足単位で長さ35～43cm、幅18～22cmの、平面・長楕円形を呈している。いずれも墳丘盛土を掘削していることから、墳丘盛土構築後に樹立したものといえる。

馬形埴輪以外の11体はいずれも基部のみの検出であり、その種類の特定は個体単独ではできない。しかし、樹立の位置関係から、馬形埴輪の斜め前に位置するもの4本(埴輪列24・26・54・58)については、「馬曳」と考えられる人物埴輪の可能性が極めて高いことが推測される。(深澤)

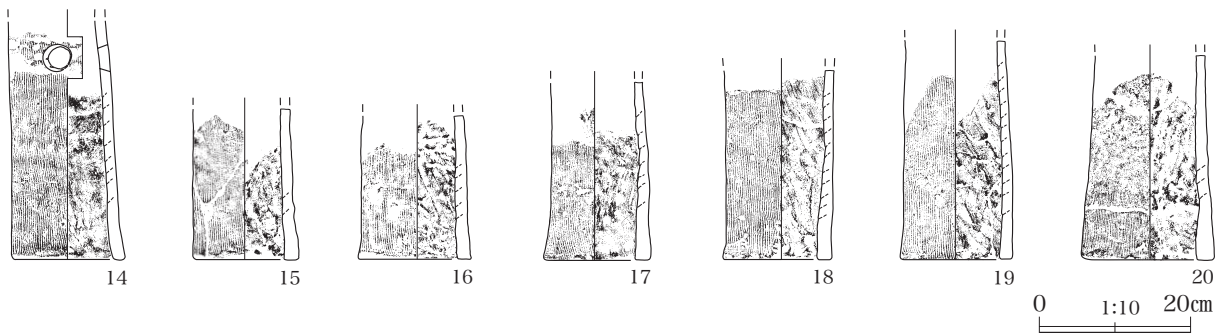
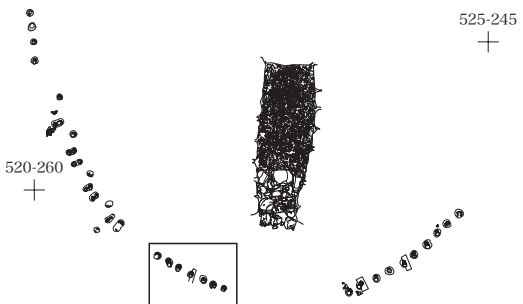
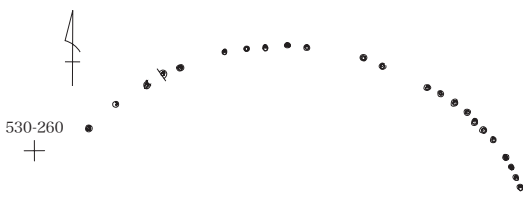
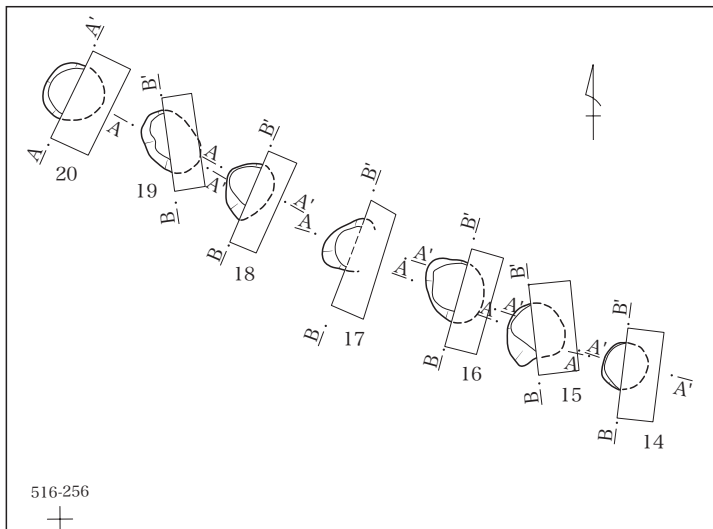
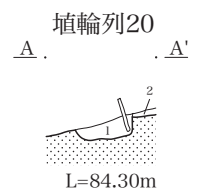
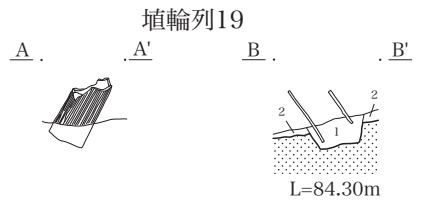
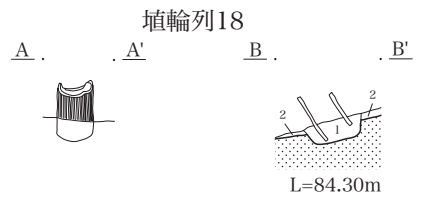
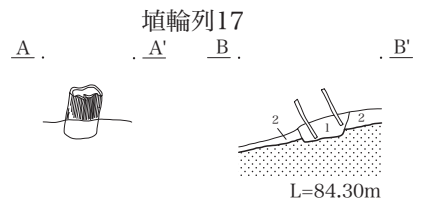
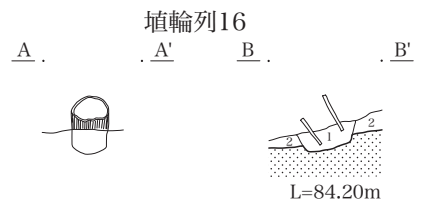
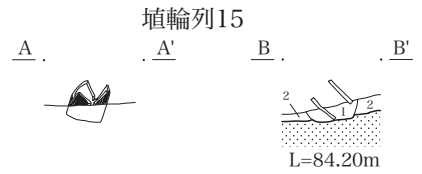
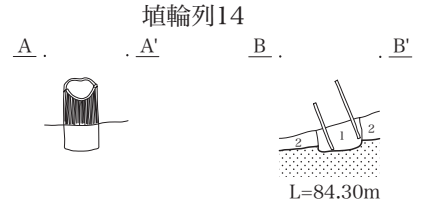
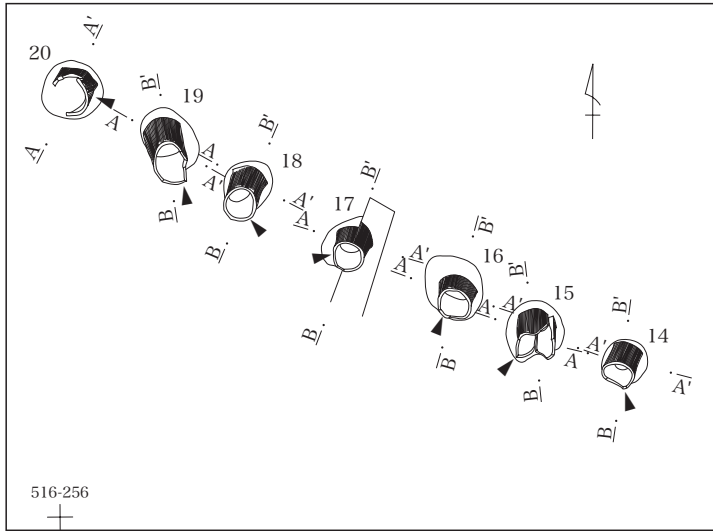


図120 人物と想定される形象埴輪基部 埴輪列14～20

3 墳丘における埴輪樹立



- 1 褐色粘質土 (埴輪埋土)
- 2 暗褐色粘質土 (墳丘盛土)

0 1:250 5m

0 1:30 1m

図 121 人物 (?) 埴輪樹立状況 平・断面図 埴輪列 14 ~ 20

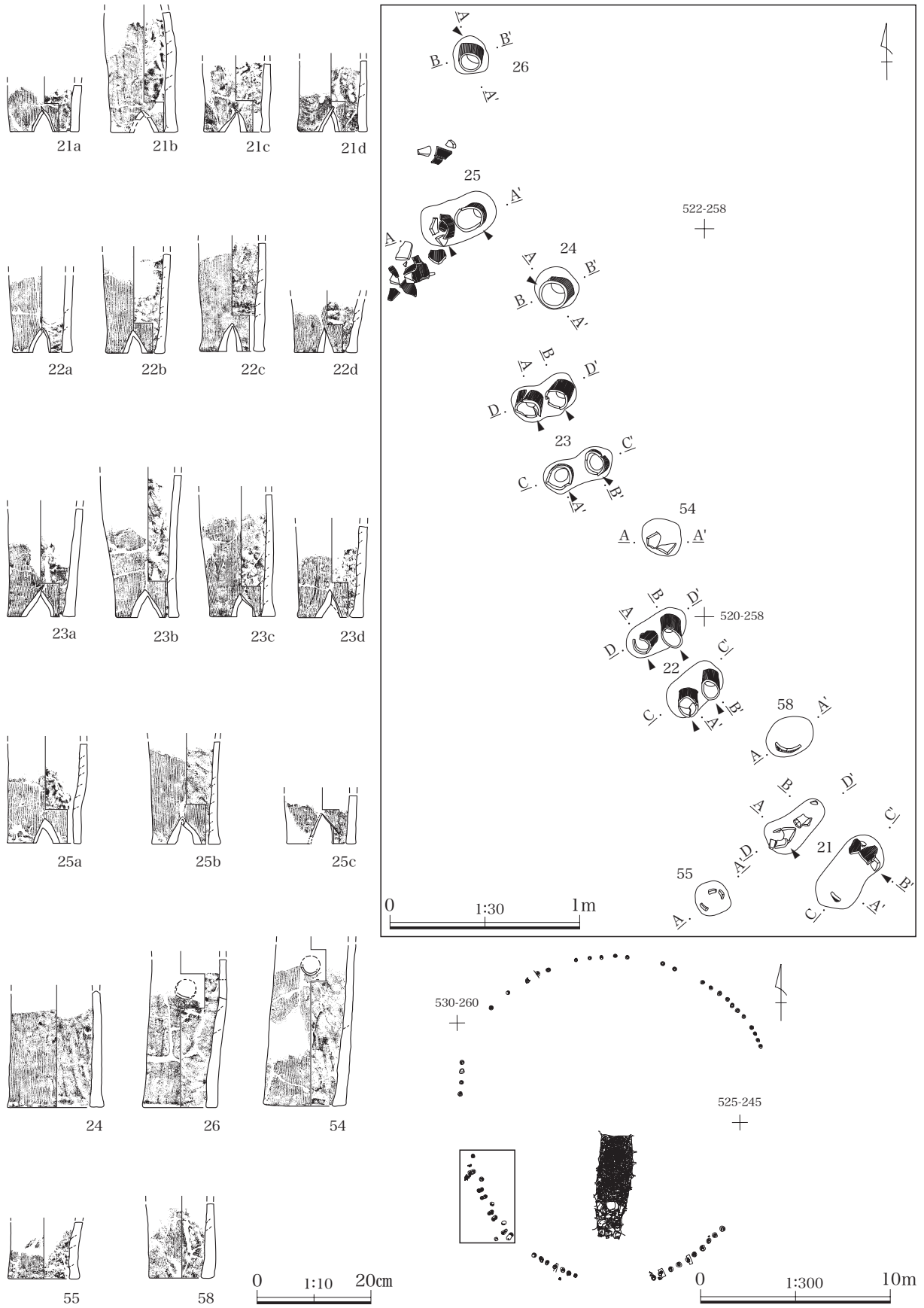
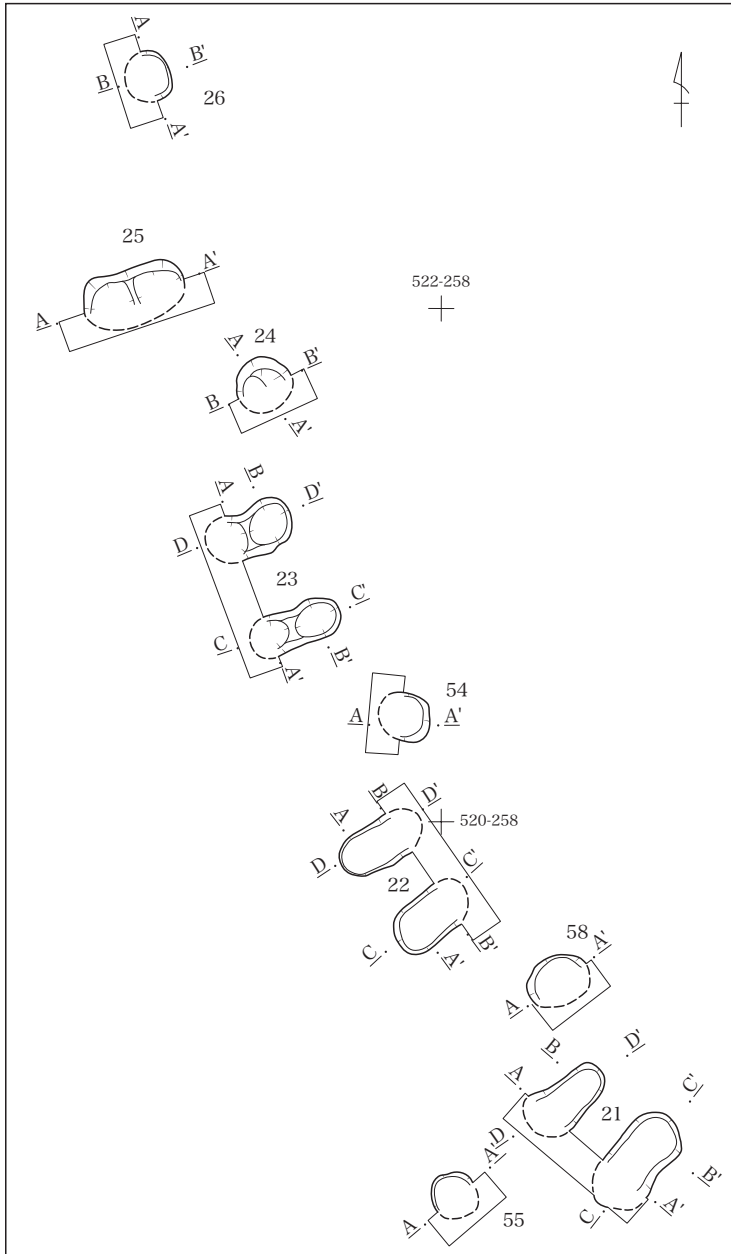
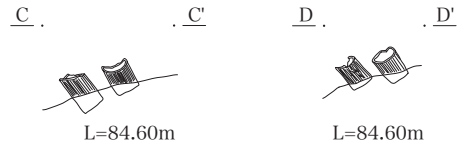
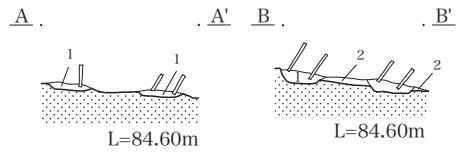


図122 馬形埴輪および人物(?)埴輪基部樹立状況 平・断面図(1) 埴輪列21~26・54・55・58

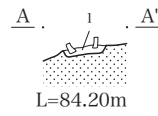
3 墳丘における埴輪樹立



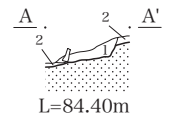
埴輪列22



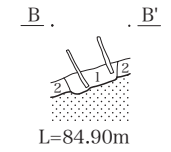
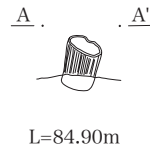
埴輪列55



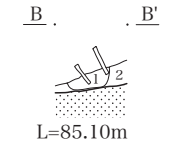
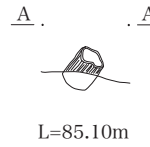
埴輪列58



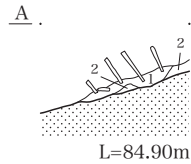
埴輪列24



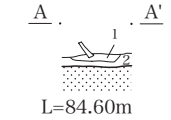
埴輪列26



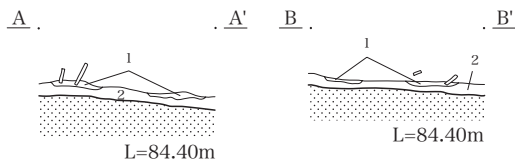
埴輪列25



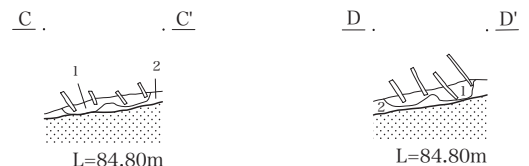
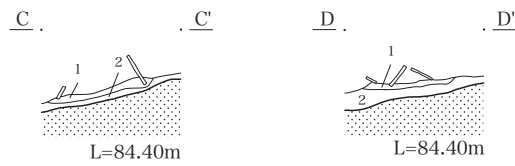
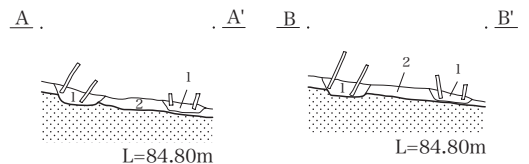
埴輪列54



埴輪列21



埴輪列23



1 褐色粘質土 (埴輪埋土) 2 暗褐色粘質土 (墳丘盛土)

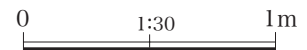


図 123 馬形埴輪および人物(?)埴輪基部樹立状況 平・断面図(2) 埴輪列 21~26・54・55・58

4 墳丘に伴う遺物の出土状況

(1) 概要

本墳においては、墳丘および墳丘周辺より多量の埴輪片が出土した。その総量は166.2kgであり、普通円筒および朝顔形埴輪片は123.6kg、形象埴輪(不明も含む)片は42.6kgである。これらは、いずれも元来の樹立位置に存在するものではないが、その分布傾向を把握することによって、埴輪樹立状況復元の重要な情報となる分析先例(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1992『神保下條遺跡』など)を参考として、1m×1mグリッド単位での埴輪片の分布状況の把握を実施した。

その結果、埴輪片の分布状況は、「墳丘南半分に多く分布する」という傾向をもつことが理解できる。こうした傾向を示す最大の要因としては、埴輪が石室開口方向である南側に多く樹立していたことが考えられる。さらには、本墳の占地地形が約10度の南方向に下る傾斜面に存在することも、この傾向をより顕著に示す要因として、考えられよう。(深澤)

(2) 円筒埴輪片の出土傾向

円筒埴輪については、樹立埴輪の状況からみて、ほぼ墳丘全周に存在していたことが明らかである。そして、そのことを補強するように埴輪片についても、量の多少差はあるものの、墳丘四方からその出土が認められる。石室内(523-252付近)や墳丘削平部(522-246付近)に多く出土が認められることは、後世の所作と思われる。(深澤)

(3) 形象埴輪片の出土傾向

形象埴輪については、樹立埴輪の状況からみて墳丘南側に集中していることが想定された。なお、取り上げ遺物においても後世の盛土の可能性が高いグリッド(510-246～516-252付近)については後世の移動である可能性も十分考えられる。

人物埴輪片は、墳丘南西(アナログ時計での35～40分の位置、以下では位置のみ表記)に分布が集中する。その顕著なあり方からは、埴輪列14～20・24・26・54・58を人物埴輪と推定する傍証

とも成り得る。ちなみに出土した人物埴輪のうち個体識別が容易に可能な腕片の状況から考えると、識別可能最低個体は10個体である(「第5章7(3)」参照)。したがって、上記の11本の埴輪列がいずれも人物埴輪の可能性が高い。さらに、埴輪列24・26・54・58が人物埴輪の可能性が高いということを示せば、4体の馬形埴輪(埴輪列21～23・25)との相関性から「馬曳」の可能性がさらに高まることとなる。

馬形埴輪片は、墳丘南西(40～45分の位置)にその分布が集中する。そのあり方は、馬形埴輪と認定した埴輪列21～23・25の存在性を補強するものである。

家形埴輪片は墳丘南側からの出土は認められるものの、人物や馬のような集中分布は認められない。だが、その一方で、石室内崩落土中からまとまって出土する傾向をもつ。この出土の傾向は、他の形象埴輪片では認められない特徴であり、家形埴輪が墳丘上、しかも石室直上付近に存在していた可能性を示唆するものと考えられる。

靱形埴輪片は墳丘南側からの出土が認められ、墳丘南西(30～40分の位置)にややまとまった出土傾向をしめす。しかし一方で、墳丘南東(15～20分の位置)にも存在が認められ、総じて集中した分布傾向を示さない。

軛形埴輪片は墳丘南側からの出土が認められ、わずかに南西側にまとまった出土傾向を示すものの、顕著な分布特徴を有さない。

盾形埴輪片は、墳丘南側からのみの出土だが、出土数も6点のため傾向を把握するにいたらない。

大刀形埴輪片は、墳丘南側からの出土が多く認められるものの、その中でも集中傾向は認められない。

鈴片は、墳丘南西側(35～40分の位置)にまとまって出土している。この位置からの出土であれば、馬形埴輪の一部である蓋然性が高く、そうでなければ人物埴輪の装飾品片であると考えられる。

不明埴輪片は墳丘の南側、とりわけ南西側(35～40分の位置)に集中する傾向がある。(深澤)

4 墳丘に伴う遺物の出土状況

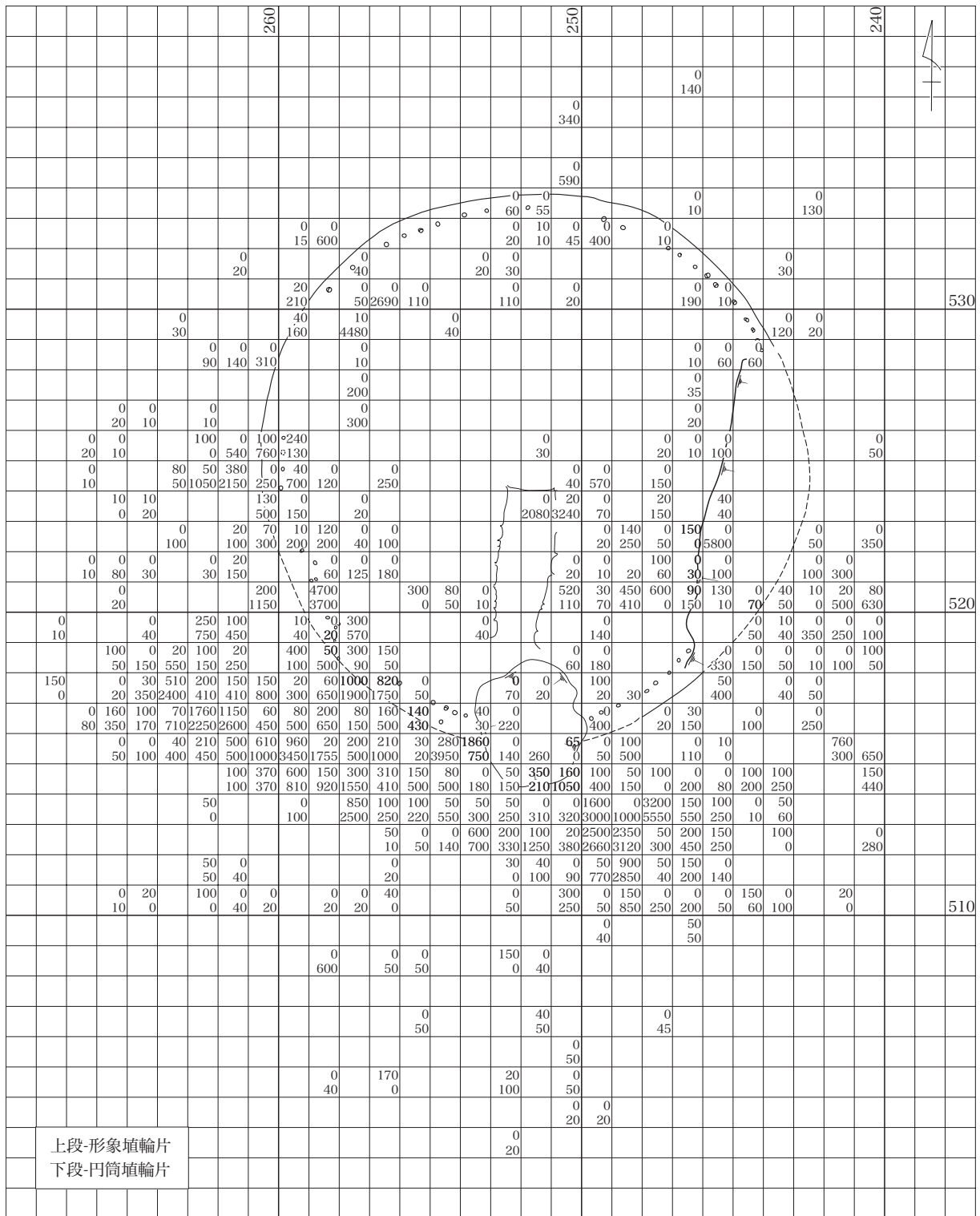
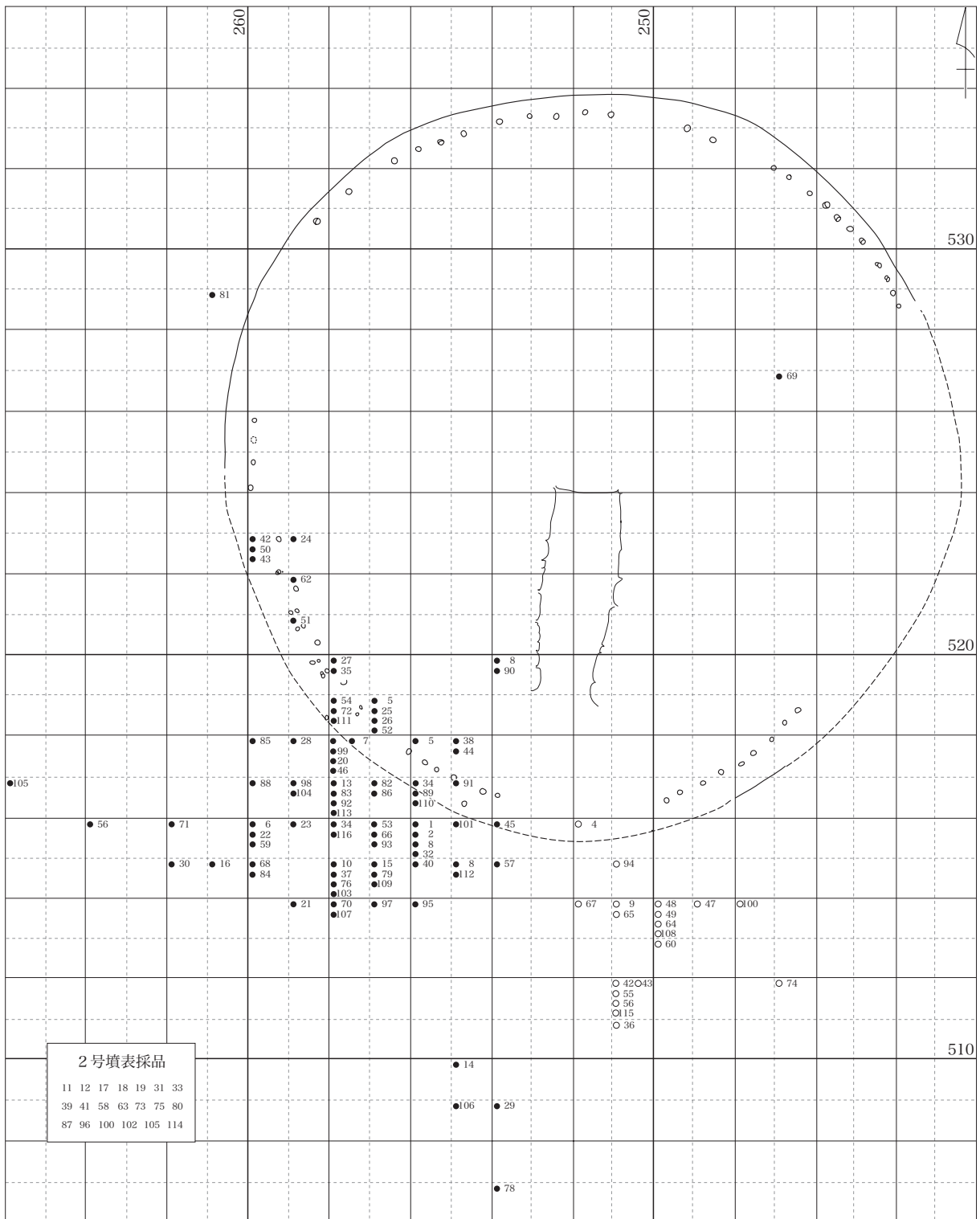


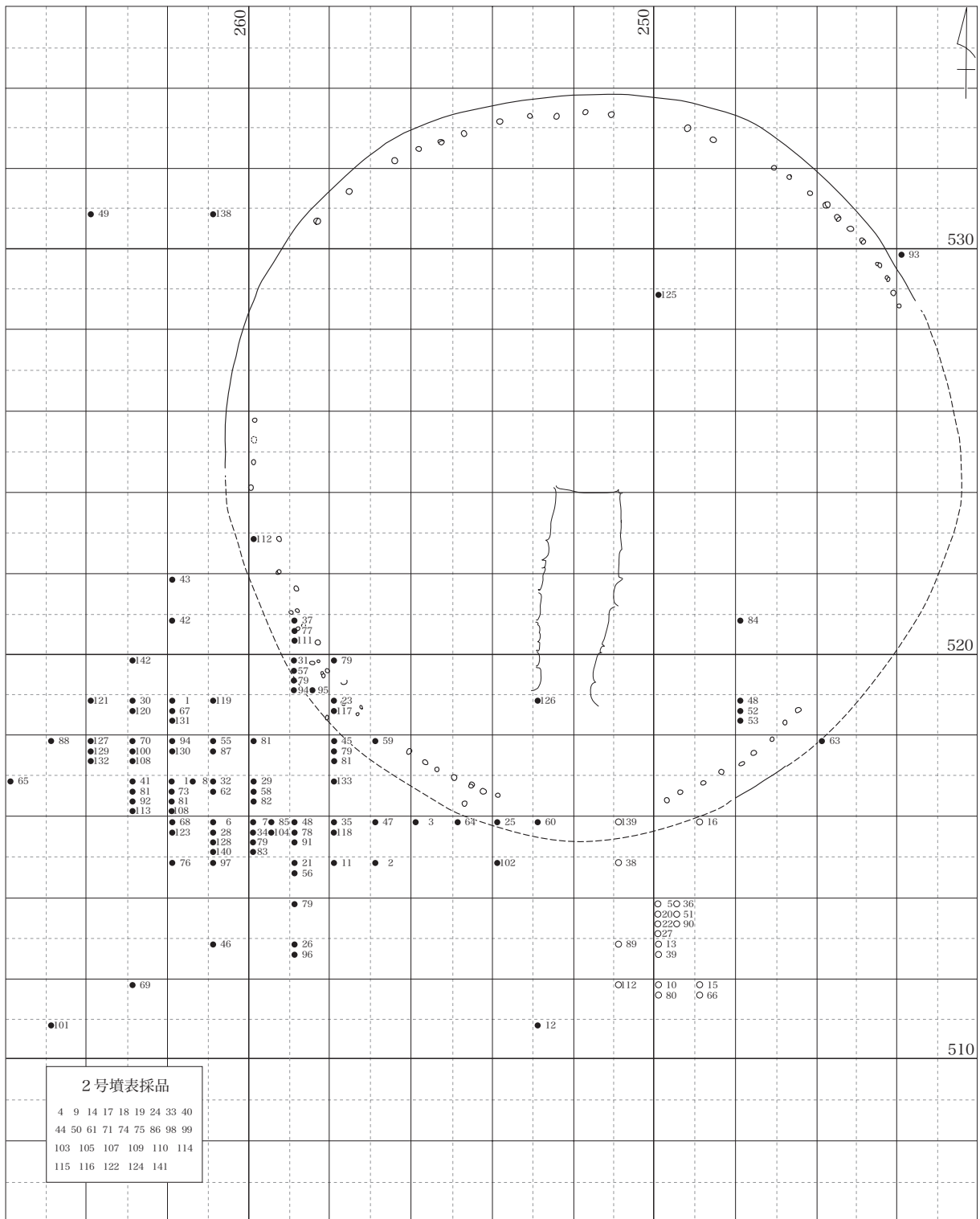
図 124 グリッド別 埴輪出土量



※図中番号は全て人物埴輪片の番号。なお○は攪乱土中出土

0 1:150 4m

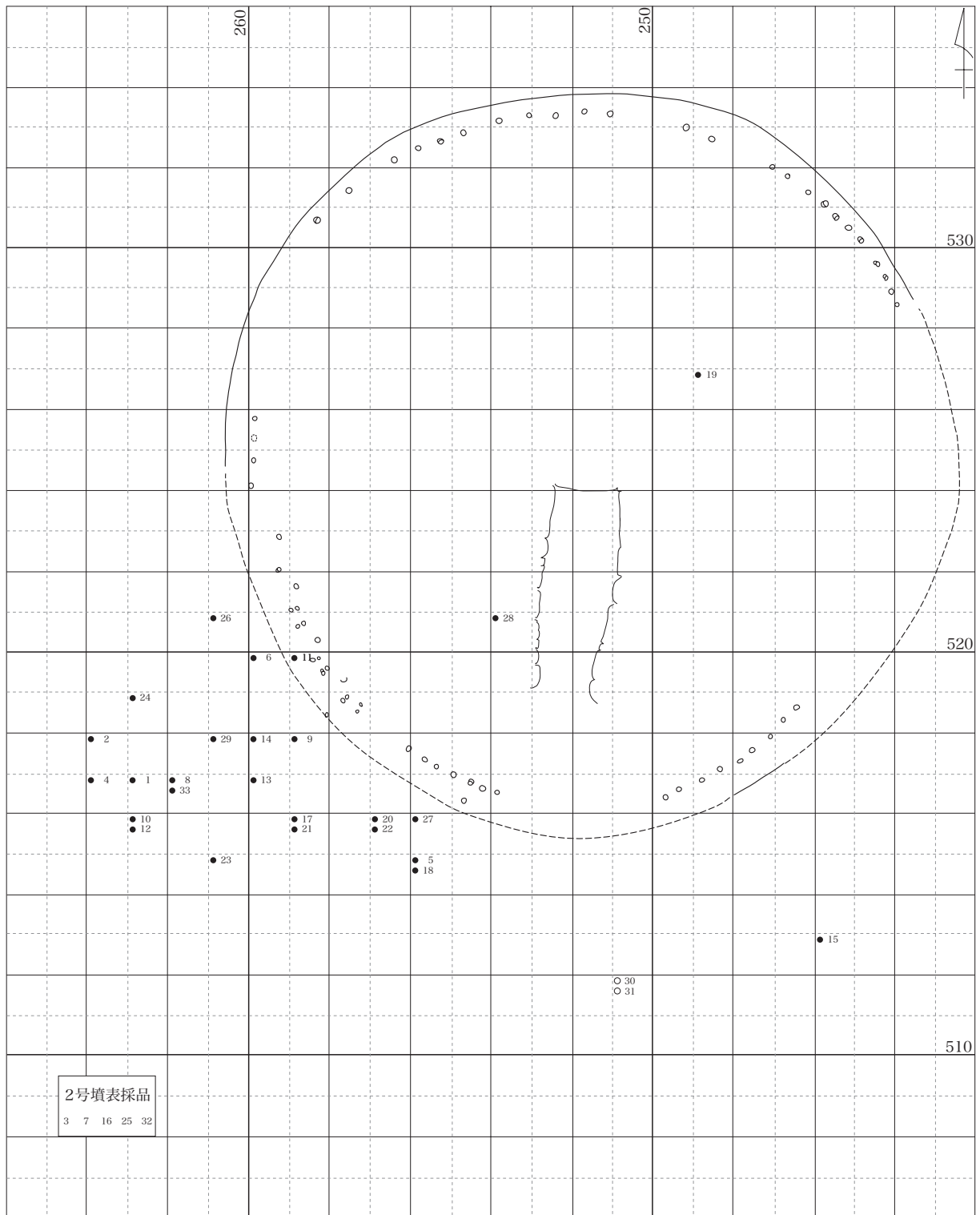
図 125 人物埴輪片 グリッド別分布図



※図中番号は全て馬形埴輪片の番号。なお○は攪乱土中出土

0 1:150 4m

図 126 馬形埴輪片 グリッド別分布図

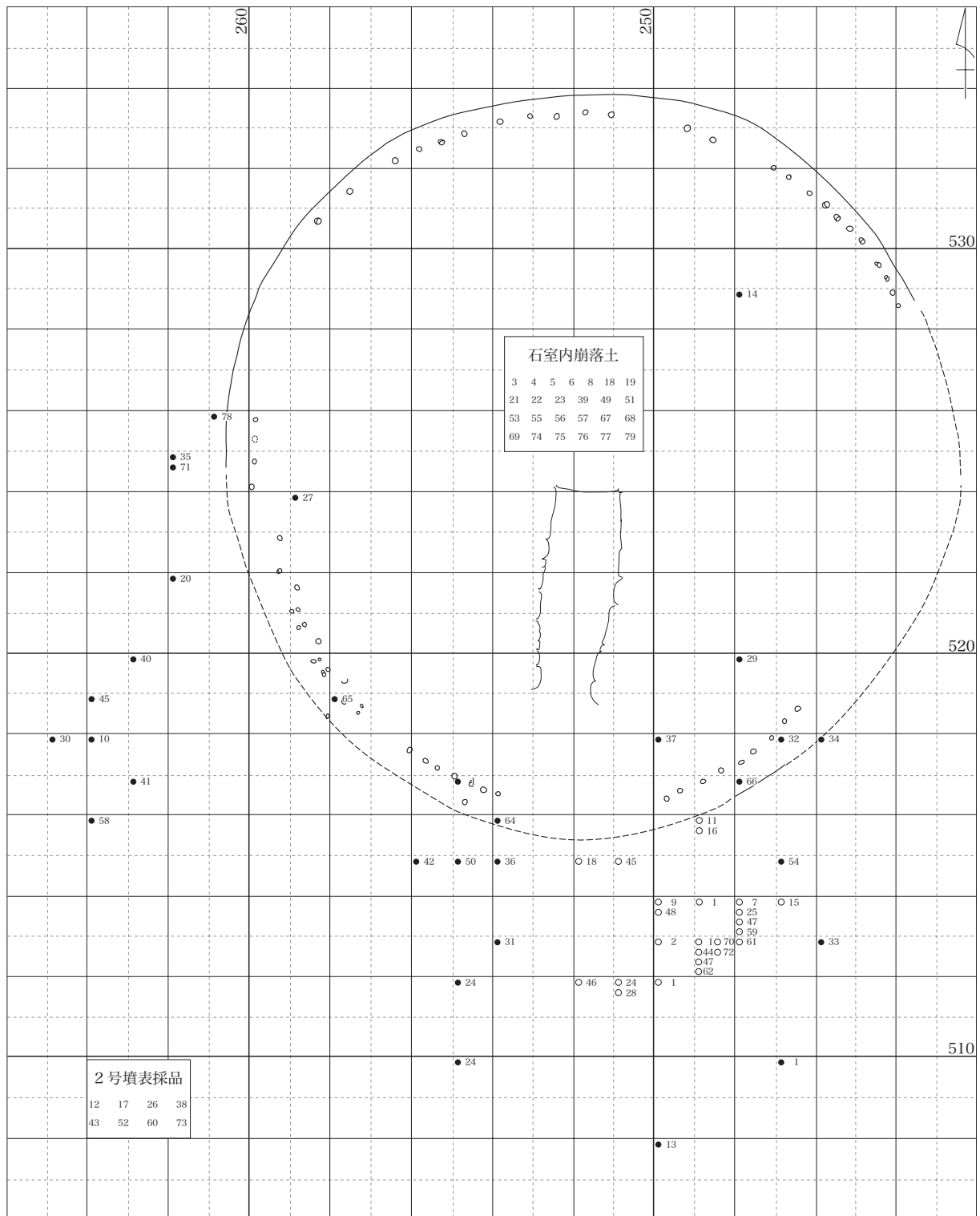


※図中番号は全て鈴片の番号。なお○は攪乱土中出土

0 1:150 4m

図127 形象埴輪（鈴片）グリッド別分布図

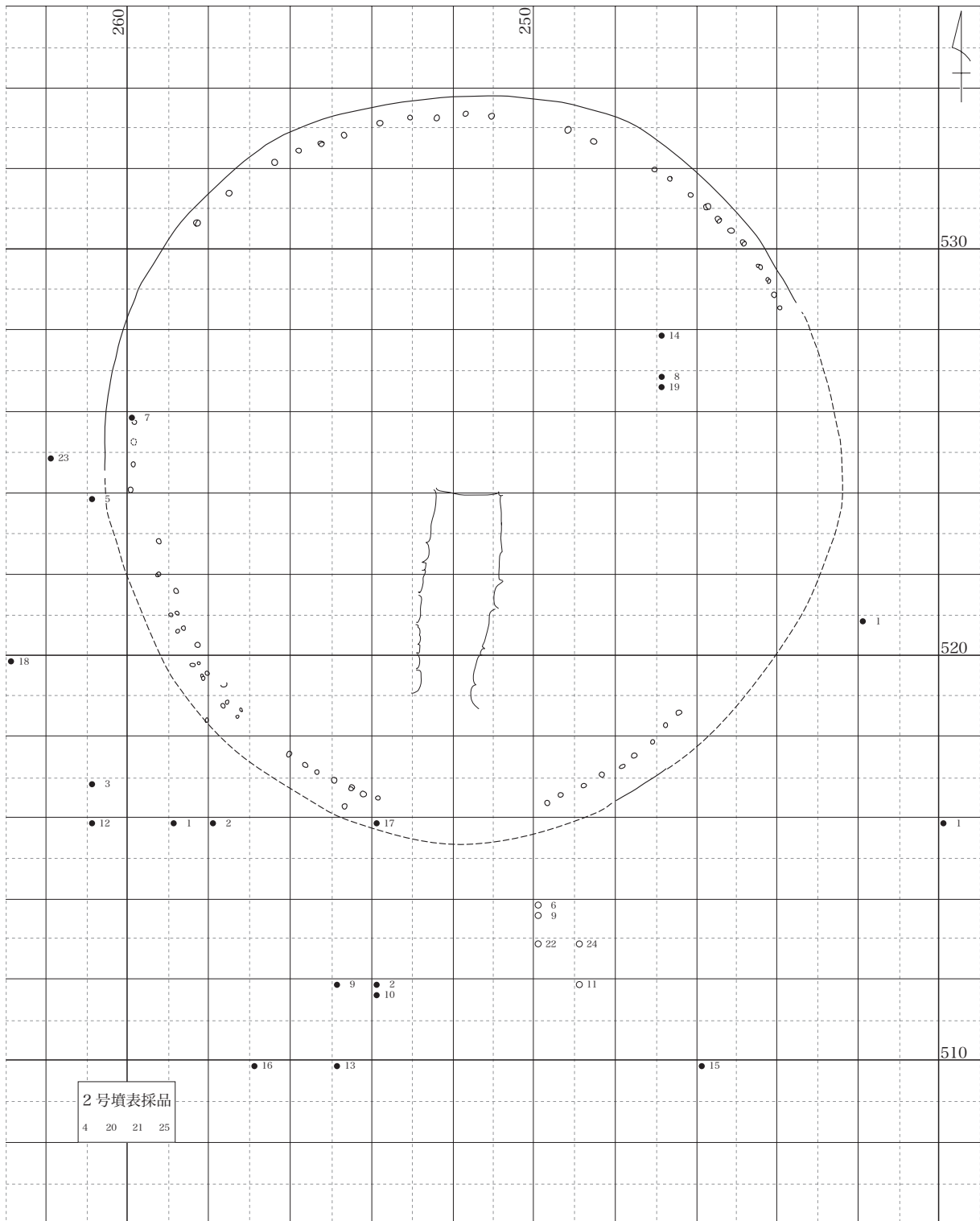
4 墳丘に伴う遺物の出土状況



※図中番号は全て家形埴輪片の番号。なお○は攪乱土中出土

0 1:150 4m

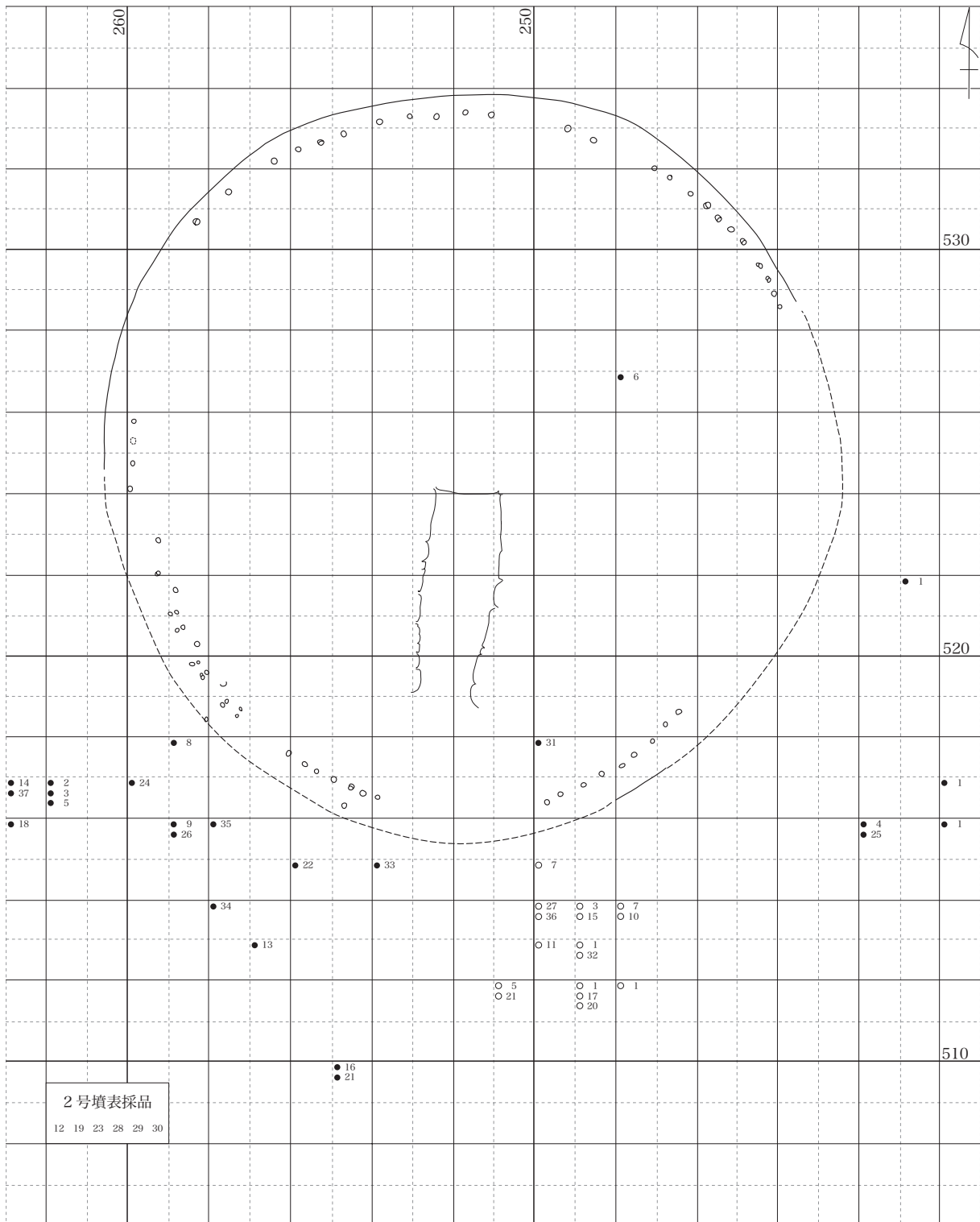
図 128 家形埴輪片 グリッド別分布図



※図中番号は全て轆形埴輪片の番号。なお○は攪乱土中出土

0 1:150 4m

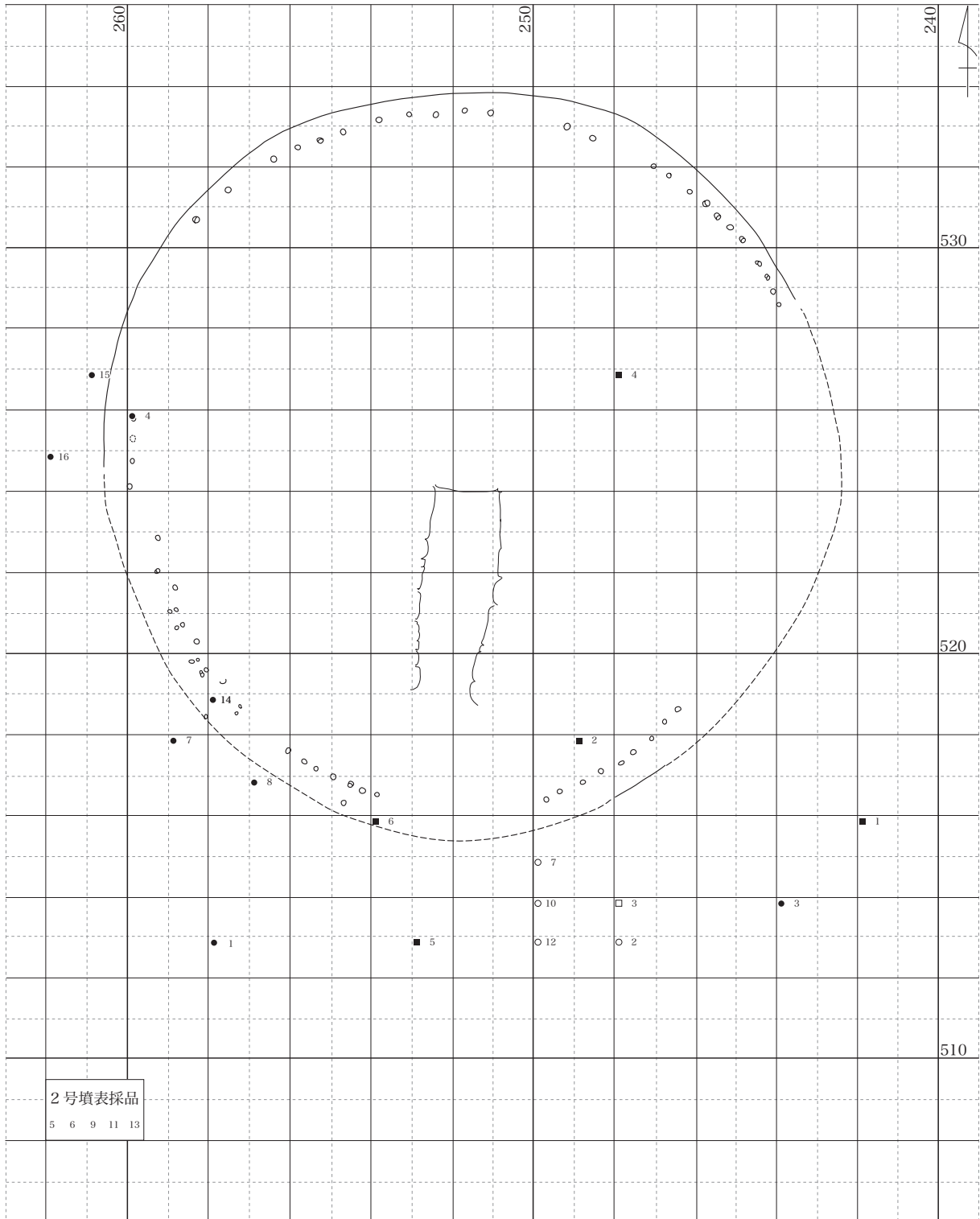
図 129 轆形埴輪片 グリッド別分布図



※図中番号は全て靱形埴輪片の番号。なお○は攪乱土中出土

0 1:150 4m

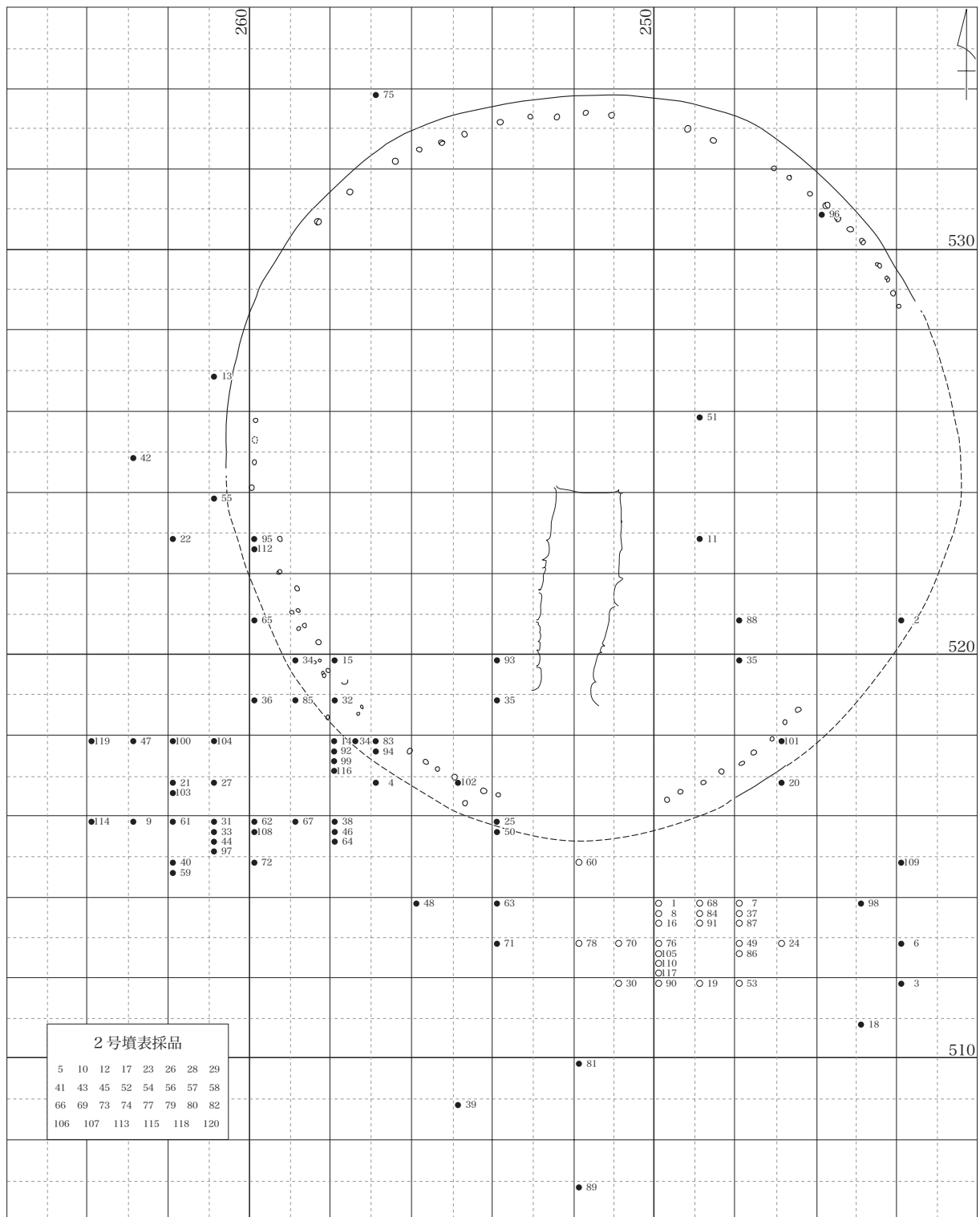
図 130 靱形埴輪片 グリッド別分布図



※図中番号□は大刀・■は盾形埴輪片 なお○・●は攪乱土中出土

0 1:150 4m

図131 盾および大刀形埴輪片 グリッド別分布図



※図中番号は全て不明埴輪片の番号。なお○は攪乱土中出土

0 1:150 4m

図 132 不明埴輪片 グリッド別分布図

5 横穴式石室

(1) 概要

石室は、無袖型横穴式石室である。石室長は5.12mである。玄室長は主軸位置で3.44m、玄室幅は中央位置で1.76mである。羨道長は主軸位置で1.68m、羨道幅は中央位置で1.36mである。

玄室側壁の最高残存高は1.40m、羨道側壁の最高残存高は0.92mである。

天井石は玄室・羨道ともに一石も原位置を保持していない。また側壁の欠損も著しく、特に玄室東側壁では後世に攪乱を受けた跡がみられ原型を止めていない。玄室は床面の乱れはほとんどみられず、遺物の出土量は多かった。羨道は、攪乱の痕跡がわずかに認められたが、閉塞状況はほぼ完存していた。また、羨道入り口部に関しては後世の攪乱が著しく、その形態等詳細は不明である。(山田)

(2) 石室の閉塞状況

羨道部は、天井石が崩落していたが、内部の石材には著しい乱れが認められないことから、閉塞の一部は当時の状況を止めていると考えられる。

閉塞は羨道部のほぼ全体にわたり行われていた。一辺2～40cm程度の溶結凝灰岩（一部チャートを含む）の角礫・亜角礫を25～45cmほどの高さに積み上げていた。閉塞の形態は、所謂「間詰め」またはそれに類する形態であり、大振りの石材を積み上げ、その間に小振りの石材を詰め込むものであった。なお、詰め込まれた状態においては、特に顕著な規則性は確認できなかった。また石材はかなり詰め込まれており、石材と石材のかみ合わせは強固な状態にあった。(山田)

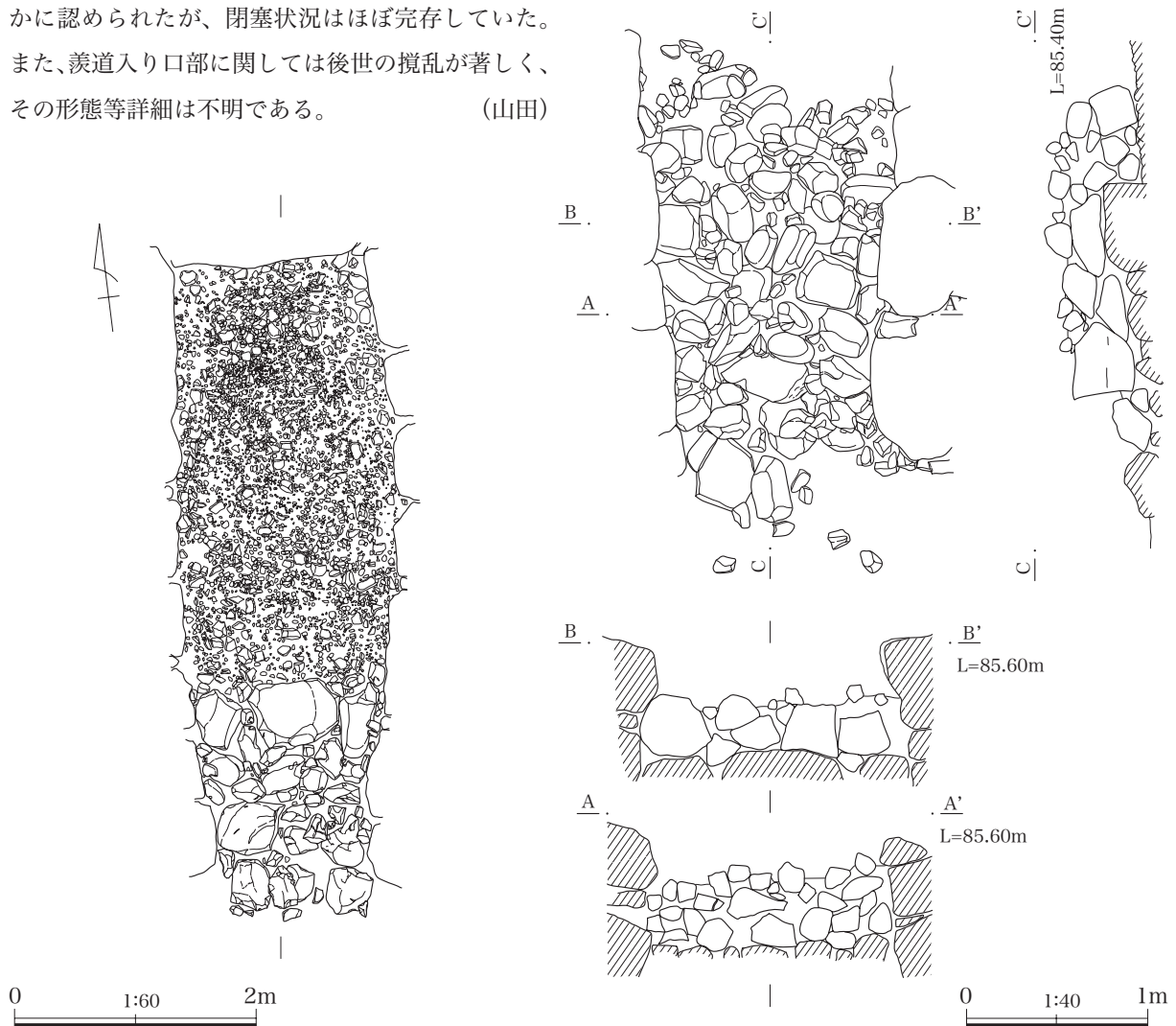


図 133 石室平面図および羨道部閉塞状況平・断面図

(3) 石室内の遺物出土状況

石室床面では多くの遺物が出土した。

石室内部には多量の土砂が流れ込んでいる状況にあったが、それらを除去すると、比較的良好な状態で床面が検出された。

羨道内においては、顕著な攪乱は認められなかったものの、遺物は検出されなかった。一方、玄室内においては、多くの鉄製品と玉製品が出土された。

玄室床面より出土の鉄製品は32点である。また石室床面下からは、鉄製品5点、玉製品96点が出土した。なお、鉄製品3点(43・50・51)は、玄室覆土からの出土のため、詳細な出土地点は不明である。

る。玄室床面より出土した鉄製品は、鍬(片刃鍬・柳葉鍬・長三角形鍬)と大刀(鐔)である。そのうち形式確認できるのは半数ほどであり、他は形式が不明である。鉄製品が出土した位置は、奥壁から1.6m程までの範囲、また奥壁から2~2.8mの西側壁付近に集中している。

石室床面下より出土した鉄製品は鍬で、形式が確認できるのは2点である。それ以外の鉄製品は残存状況が良好ではないため形式は不明である。また同様に、完形で出土したものは認められなかった。

玉製品はガラス玉と管玉がある。これらは奥壁より2.6~2.8mの東壁付近に集中する。(山田)

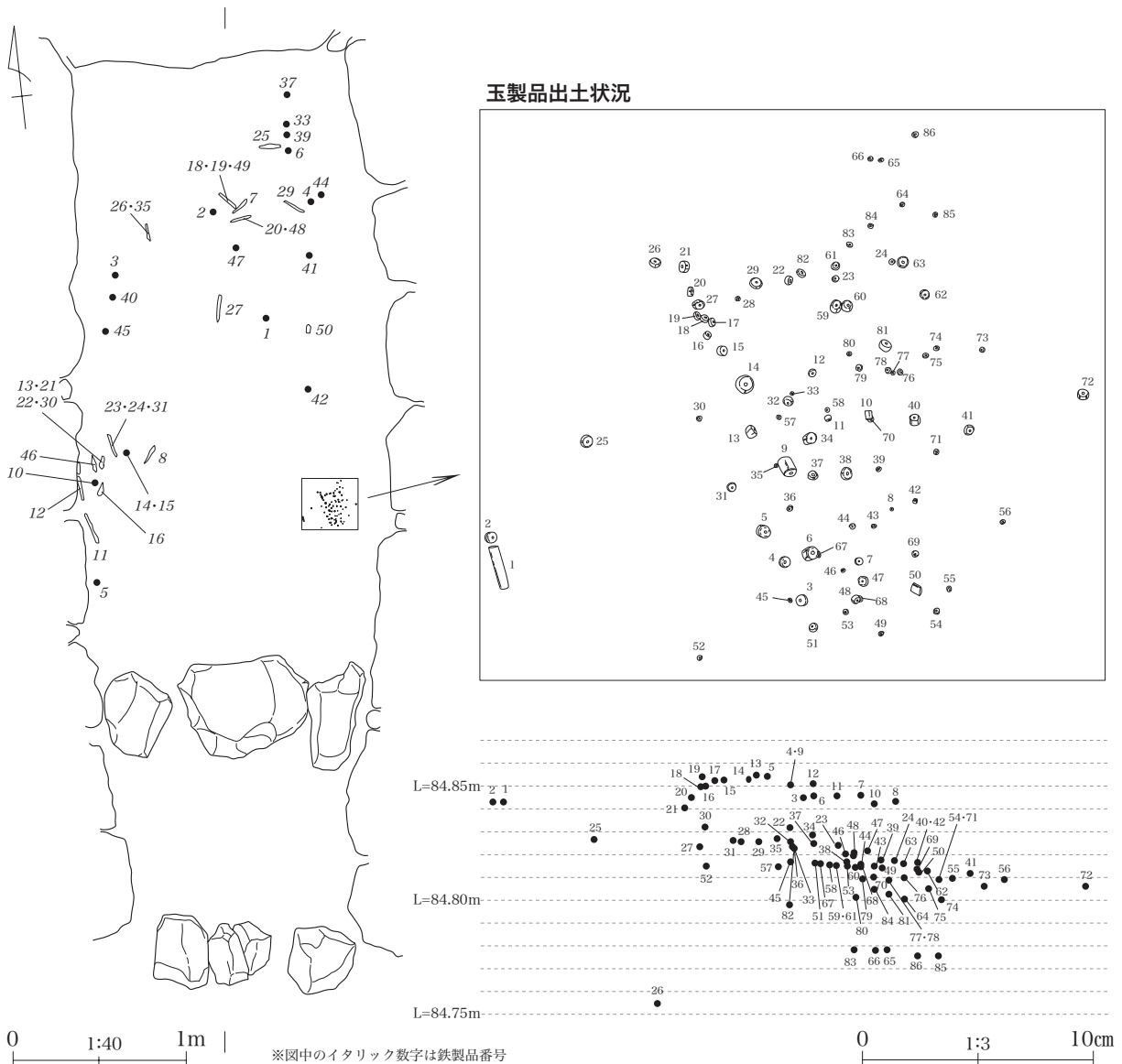


図 134 石室内遺物出土状況図

(4) 石室床面

玄室では東側壁の一部で後世に攪乱を受けた跡がみられたが、そのことによる床面の著しい改変は考えがたいと判断した。また羨道は攪乱の痕跡がわずかに認められたにも関わらず、閉塞石がほぼ完存していたことから、床面は完存していると判断した。

玄室の床面は、全面にわたり直径1～15cmの主にチャート、溶結凝灰岩の円礫が敷き詰められていた。一方、羨道の床面は4～40cm程の溶結凝灰岩(一部、チャートも含む)の垂角礫が敷いていた。また柵石は、長辺約76cm・同40cm・同41cmの3石によって構成され、うち最も長大で中央に位置する石材のみ砂岩であり、残りの2石は溶結凝灰岩の角礫となっていた。また、石室南端には同じく溶結凝灰岩の角礫が3石、設置されていた。大きさはいずれも長辺32～38cmである。

なお、玄室の床面レベルはほぼ水平であり、段差はもたない。一方、羨道の床面レベルは、柵石と石室南端部はほぼ同レベルで、その間は柵石頂部より12～18cm程低いレベルとなっている。(山田)

(5) 石室床面下

玄室・羨道ともに、床下までは後世の攪乱の影響は及んでいなかった。

玄室においては、床下に舗石に相当する石材が存在した。この石は直径2～25cm程のチャート・溶結凝灰岩の垂角礫である。割合はチャートの方が多い。なお、玄室の全面にわたり舗石を敷き詰めているという状態ではない。奥壁周辺と柵石北側周辺の一部では、12～25cm程の石材を多用し、密に敷き詰められている様子を見ることができ、その他の場所では、床面下の土が露出している部分も若干見受けられる。

また、本墳が傾斜地に位置する構造上、石室構築時に、床面の水平保持を意図した地山を削り込みが確認された。その際、削り込んだ地山の上を、数種の土で敷きならし、水平を調整した様子が見受けられる。そうした調整の作業を経た後に舗石が設置され、床面が整形された状況が認められた。(山田)

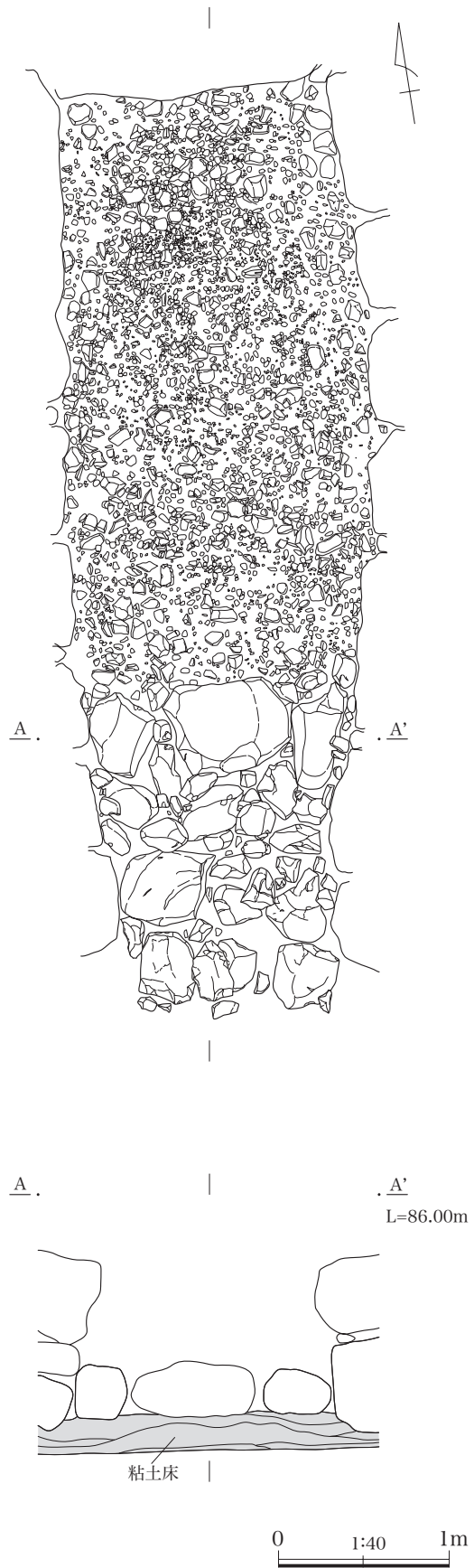


図135 石室床面 平・断面図

5 横穴式石室

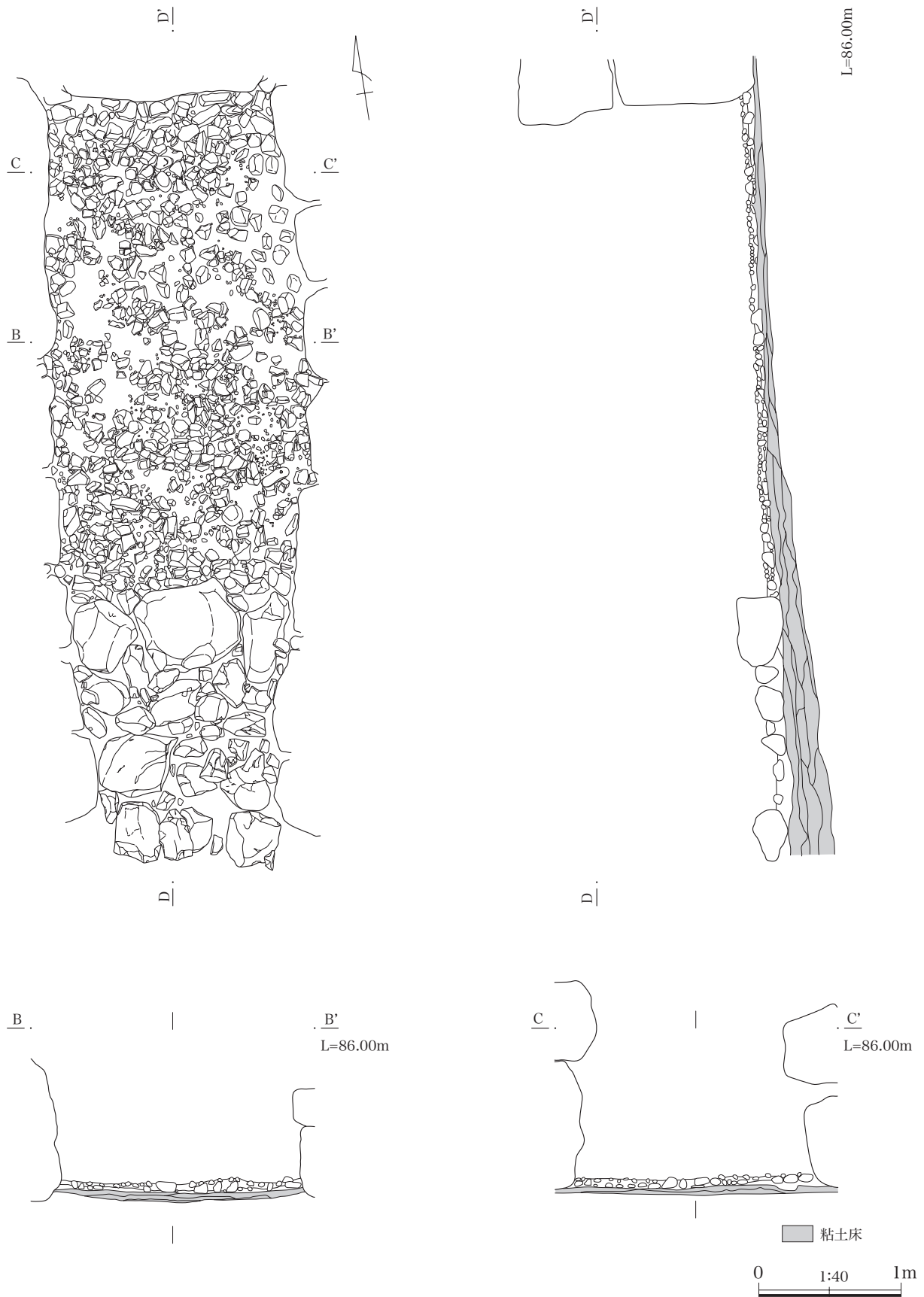


图 136 石室鋪石面 平·断面图

(6) 石室壁面

石室が5.12mの無袖型横穴式石室である。本石室の平面・立面の詳細状況は次の通りである。

石室開口方向 S-8°-Eである。

平面規模 細部規模は次の通りである。

玄室長は主軸位置で3.44m、西側壁際位置で3.40m、東側壁際位置で3.48mである。玄室幅は奥壁付近で1.56m、中央位置で1.76m、梱石付近で1.64mである。羨道長は主軸位置で1.68m、西側壁際位置で1.72m、東側壁際位置で1.72mである。羨道幅は梱石付近で1.40m、中央付近で1.36m、南端で1.32mである。

平面形状 石室全体はほぼ矩形と考えられる。しかし玄室の両側壁の形状に若干の相違がみられ、西側壁に関しては奥壁より梱石付近にいたるまでほぼ直線で構成されているが、東側壁に関しては、外側に弧状に張り出している傾向がみられる。

立面規模 玄室・羨道ともに天井石は存在しない。また、側壁の欠損も著しく、特に東側壁に関しては石材の崩落及び後世の削平によって原型を止めておらず、立面構造を理解するにはやや困難である。計測値は、いずれも残存最高値である。

玄室高は、奥壁位置で1.60m、西側壁で1.40m、東側壁で1.28mである。

羨道高は、南端部で0.44m、西側壁で0.92m、東側壁で0.88mである。

上記の数値から考えられる推定立面規模は、玄室高が $1.60\text{m} + \alpha$ 、羨道高が $0.92\text{m} + \alpha$ である。

立面形状 玄室は僅かに転びがみられ、その状況は西側壁の奥壁付近が顕著である。

羨道はほぼ垂直であるが、僅かな転びが認められ、その状況は梱石南側付近が顕著である。

主軸方向の立面形状は、天井については後世の攪乱により残存状況が極めて悪く、現状より推定することは不可能である。また、床構造については、羨道入り口部付近は残存状況が悪くその詳細については不明であるが、羨道部と玄室部には段を認めることができる。つまり、羨道より玄室に出入りする際

には、竪穴内に入るような構造になっている。

壁面の構成 奥壁は隅丸に加工された溶結凝灰岩2枚によって、面を構成している。下段の石材の長辺2.16m、同じく上段の石材は1.36mと、規模の差異が大きく、不整形である。なお、下段の石材の下部と、2枚の石材の中間に石を詰め込み、安定性を図っている状況が見受けられる。

側壁については、残存する石材2～3段の石積みを確認できる。

本石室の構築過程に関してみると、玄室から羨道に至るまで、概ね一連の造作と考えられる。そのことを良く示しているのが、両側壁の梱石付近の石の置き方である。この部分の石は、梱石を境に配置形態の転換等、顕著な特色を認めることができず、このことから考えられることは、側壁造作に際しては、玄室と羨道を区分しようという意思が制作者には窺えない、ということである。

側壁は20cm～200cmの溶結凝灰岩(一部チャート・輝石安山岩を含む)の割石で構成されている。下1段において西側壁の南端部より3.20m程の間では、明確に横方向の通目積が認められる。同様に東側壁に関しては、欠損している石が多く詳細を知ることは困難であるが、南端部より4.44m程の間では、同様に横方向の通目積を窺いすることができる。2段目については、両側壁ともにより一層、石の欠損の度合いが激しいため、当時の構築状況を知ることは困難であるが、玄室～羨道の間で概ね横方向の通目積が推測される。3段目以上については、奥壁にかかる一石のみを残し他はすべて欠損しているため、詳細を知ることは不可能である。

なお、石積みには積み方BとD(図141参照)が多用されており、加えて、それぞれの石積みの際に生じる隙間には、溶結凝灰岩を間詰めしている。

石材の種類 溶結凝灰岩が主体であるが、チャート・輝石安山岩をわずかに含む(201頁に詳述)。

石材の加工 切石は認められなかった。また工具を用いての仕上げ加工を施したと考えるものも認められなかった。(山田)

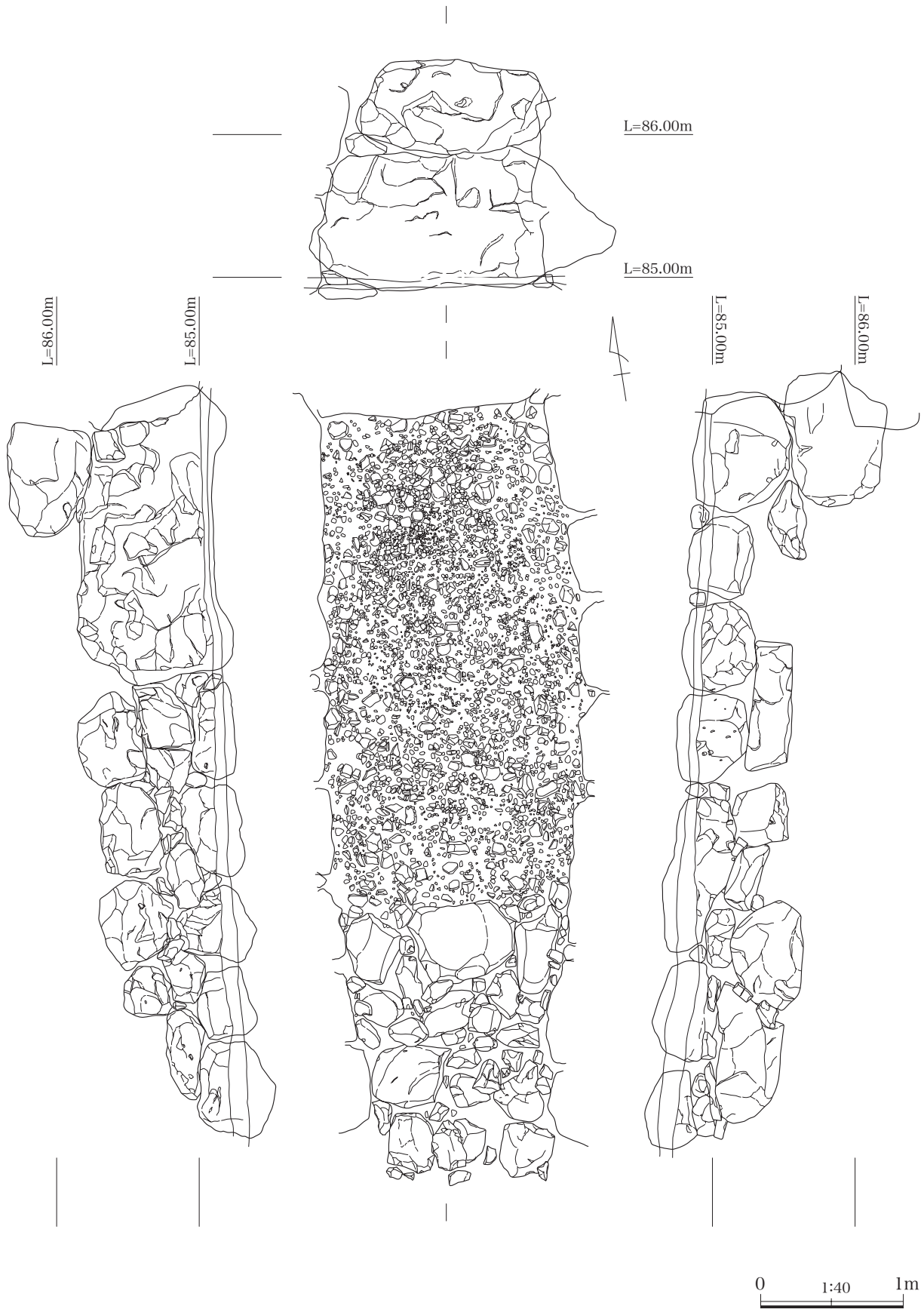


图 137 石室 展開図

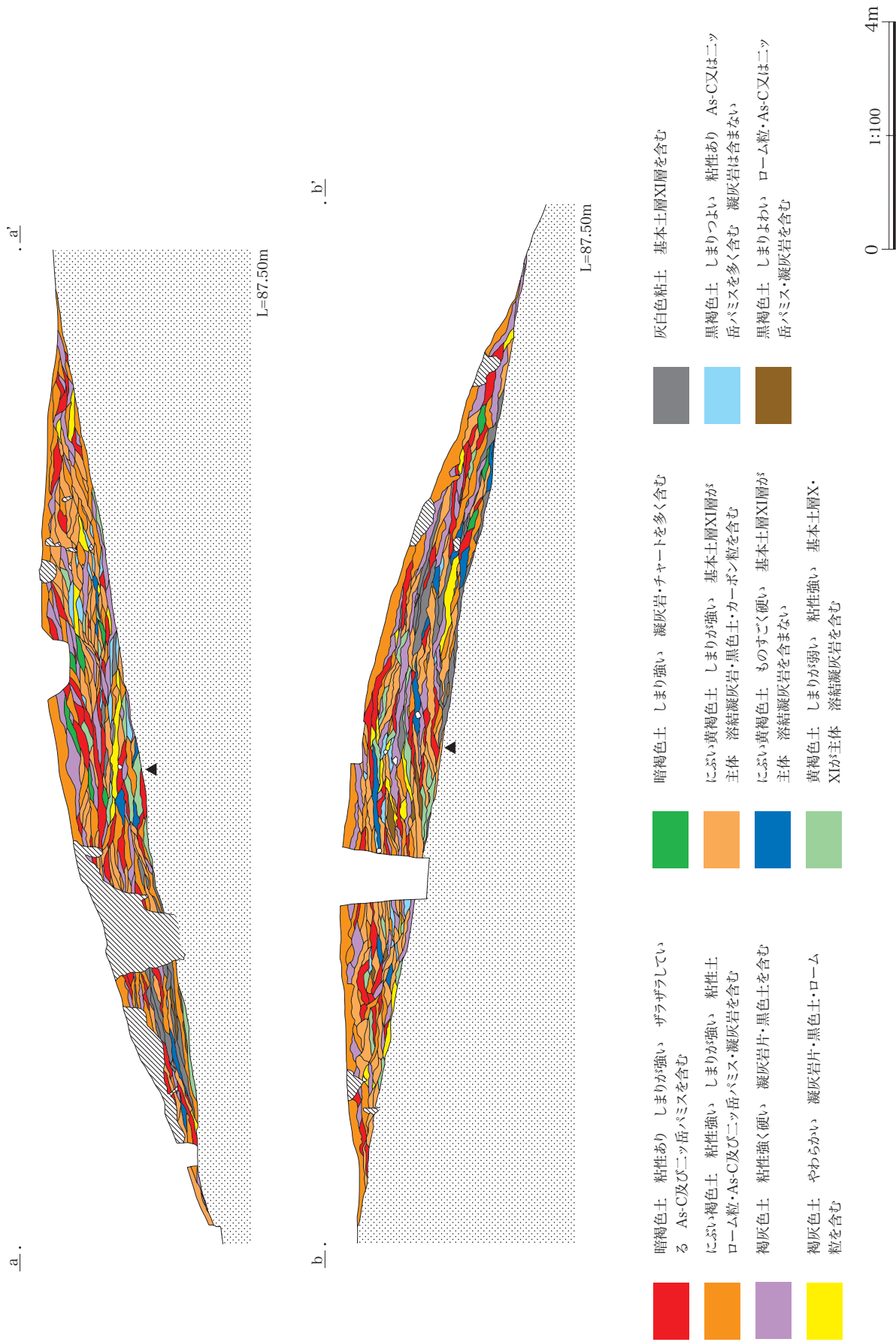


図 138 墳丘断ち割り断面図 (1)

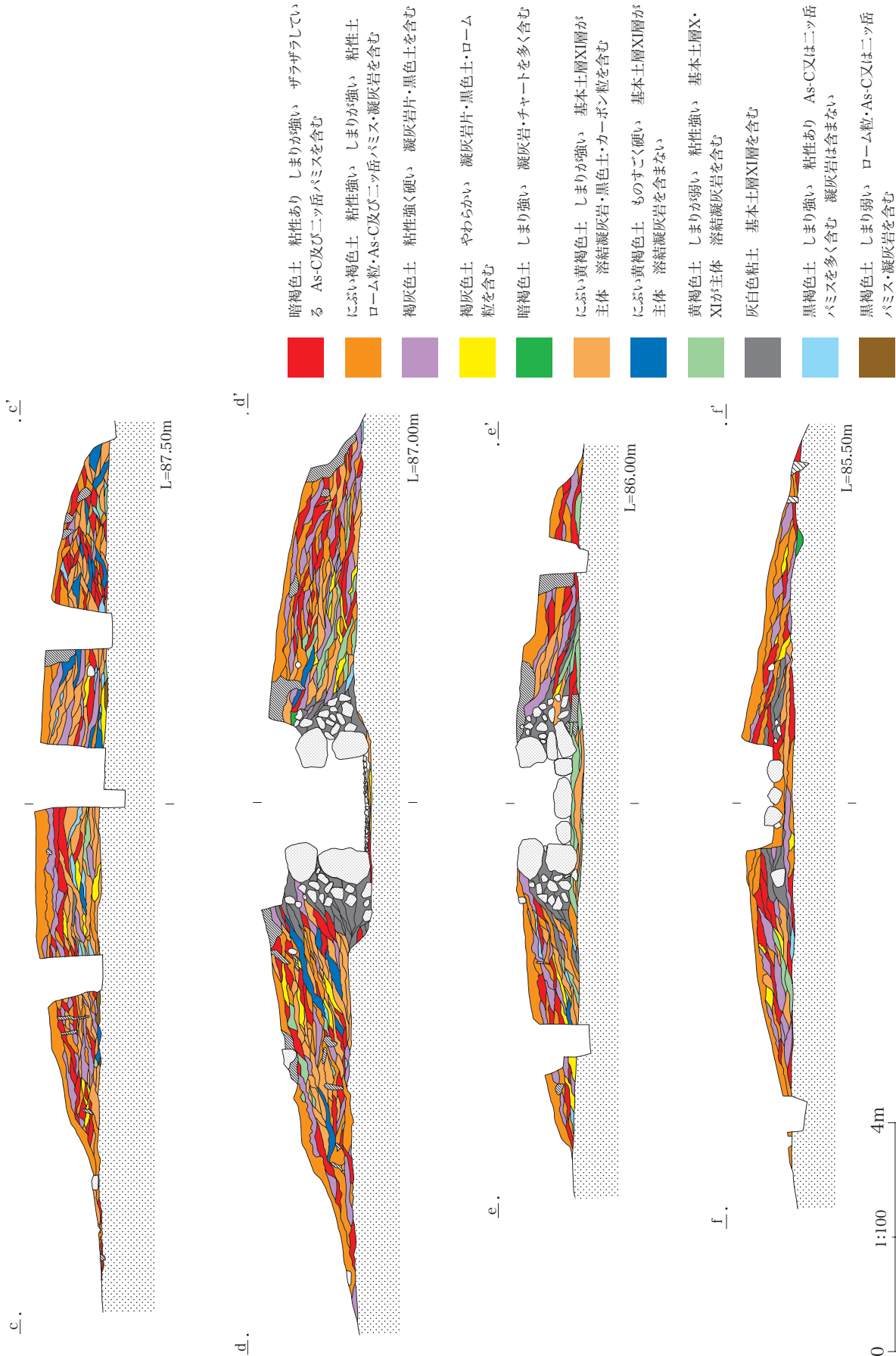


図 139 墳丘断ち割り断面図 (2)

6 墳丘・石室の解体

(1) 墳丘・石室の解体

墳丘・石室の解体に際しては、石室の主軸方向に2カ所（a-a'・b-b'）、石室主軸の直交方向に4カ所（c-c'～f-f'）の断ち割りを入れ、断面観察を行った。その結果、石室の構築を基軸に盛土構築がなされている状況が判明した。

土の種類 色調は「黒褐色土」「褐灰色土」「暗褐色土」「にぶい褐色土」「黄褐色土」「にぶい黄褐色土」「灰白色粘土」に分離でき、さらに土質の硬軟具合も加えると11層に分離できた。これらの土はいずれも地山に存在するものであり、周辺地の掘削土を用いたと思われる。

盛土の単位 一単位は3～20cm程度の層厚をもつ。盛土の単位は細かいものの、版築的な工法は認められない。土層断面で確認できる一単位あたりの幅は、10cm以下のものから、100cm以上ものまでと様々である。なお、土嚢を用いた痕跡は認められなかった。

盛土の順序 盛土は、盛土セクションd～fの様相から次の順序が理解できる。

第1段階…石材設置以前における、粘土床を敷設。

第2段階…積み上げた石室石材の養生。石室石材の背面を灰白色粘土でしっかりと養生する。

第3段階…石室部分の完全被覆。天井石まで設置した段階において、石室を被覆するように盛土を行う。その範囲は、石室壁面から北東西の各方向に2.0m程度の範囲に限られる。盛土層厚は2～10cm程度である。なお、この範囲は石室掘り方の平面範囲（次項で詳述）とほぼ一致し、このことは盛土セクションa・b（図139の▲が掘り方立ち上がり位置）でもよく把握できる。

第4段階…墳丘全体の盛土。設計した墳丘形状・規模を形成するために盛土を行う。この盛土は層厚5～20cm程度の単位で盛られている。

裏込石・粘土の有無 溶結凝灰岩等の石室石材と同種の割石が多量に裏込めとして用いられていた。また、白色粘土も多量に存在し、石材の間にはまるでパテのように用いられていた。

石材チップの有無 盛土中にはほとんど認められなかった。（深澤）

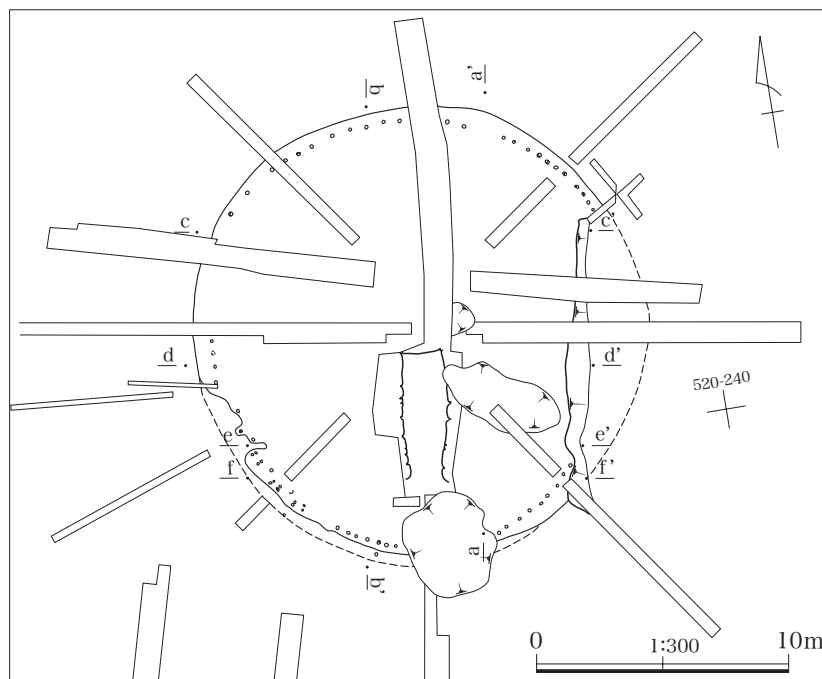


図140 墳丘断ち割り位置ポイント図

(2) 石室壁面石材

石室を形成する石材の特徴は次の通りである。

石材種類 天井石と推定される崩落石(1・3・4)はいずれも溶結凝灰岩である。また壁面を構成する壁材は溶結凝灰岩が主体であり、砂岩(16)・チャート(26)・輝石安山岩(34・35・45)が極めて客体的に用いられている。

石材規模 重量は11～2,809kgの範疇にある。このうち、100kgを超える壁面石材は27石あり、壁面の大半は大ぶりの石材で構成されている。また大きさは、一辺30～60cm程度のものが大半であり、1辺が100cmを超えるものは数石のみである。

石材形状 大半の石材は直方体を呈する。

石材加工 石面を平滑化するための加工痕はなかった。但し、荒割のための工具痕は認められた。

積み方の特徴 石材の大きさを問わず、積み方BまたはDを採用している。これらはいずれも石材の最広面を下に置く積み方である。しかし、西側壁の1石(46)のみは、1,759kgもありながら、石材の最広面を石室内面にむける積み方Cを採用しており、他との差異をうかがわせる。(深澤)

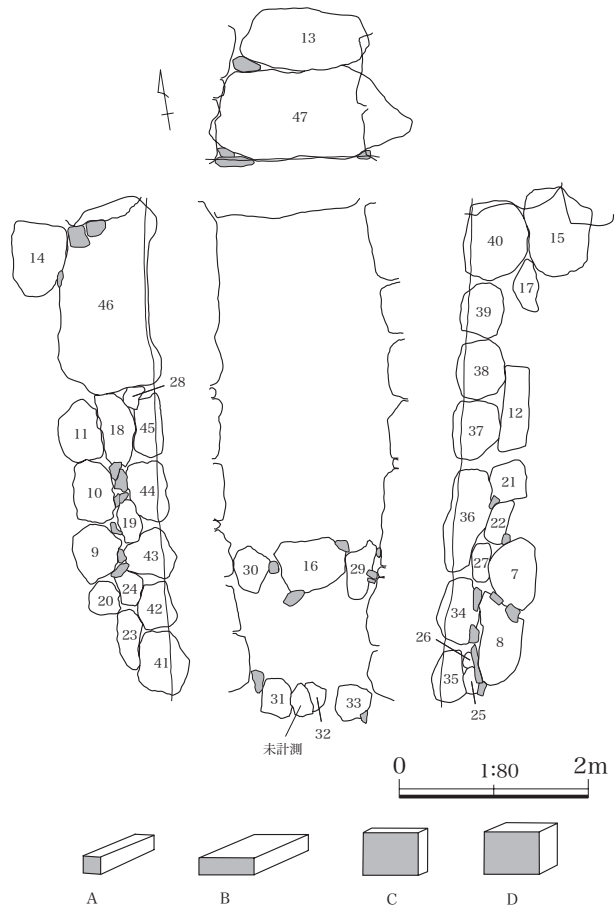


図 141 石材番号・積み方模式図

表 39 石室石材 計測表

番号	重量	長軸	短軸	厚み	積み方	石質	備考	番号	重量	長軸	短軸	厚み	積み方	石質	備考
	(kg)	(cm)							(kg)	(cm)					
1	800	120	80	65	-	溶結凝灰岩	天井?	25	15	15	20	28	D	溶結凝灰岩	
2	140	70	60	20	-	砂岩	破損	26	11	12	13	38	A	チャート	
3	610	112	112	85	-	溶結凝灰岩	破損	27	61	25	48	50	B	溶結凝灰岩	
4	1020	130	90	65	-	溶結凝灰岩		28	18	14	25	30	B	溶結凝灰岩	
5	155	70	55	50	-	凝灰岩		29	63	25	35	40	D	溶結凝灰岩	
6	90	60	48	27	-	凝灰岩		30	69	40	41	31	-	溶結凝灰岩	
7	215	40	75	55	D	溶結凝灰岩		31	58	33	38	30	-	溶結凝灰岩	
8	380	35	90	60	D	溶結凝灰岩		32	35	36	38	24	-	溶結凝灰岩	
9	250	40	60	75	B・D	溶結凝灰岩		33	47	32	24	25	-	溶結凝灰岩	
10	160	40	58	52	D	溶結凝灰岩		34	252	40	72	61	D	輝石安山岩	
11	355	42	68	95	D	溶結凝灰岩		35	184	33	52	75	B・D	輝石安山岩	
12	440	28	85	75	B	溶結凝灰岩		36	366	48	110	63	B・D	溶結凝灰岩	
13	890	67	108	100	D	溶結凝灰岩		37	356	46	70	78	D	溶結凝灰岩	
14	630	55	95	70	D	溶結凝灰岩		38	274	53	63	80	B・D	溶結凝灰岩	
15	800	65	100	90	D	溶結凝灰岩		39	306	42	57	78	B・D	溶結凝灰岩	
16	175	76	54	32	B	砂岩		40	546	63	88	59	D	溶結凝灰岩	
17	100	18	57	65	B	溶結凝灰岩		41	262	53	60	67	B・D	溶結凝灰岩	
18	190	40	75	50	B・D	溶結凝灰岩		42	142	38	48	70	B・D	溶結凝灰岩	
19	100	20	42	80	B	溶結凝灰岩		43	184	58	47	60	D	溶結凝灰岩	
20	60	32	32	40	D	溶結凝灰岩		44	214	42	68	71	B・?	溶結凝灰岩	
21	60	35	40	35	D	溶結凝灰岩		45	2015	33	66	60	B	輝石安山岩	
22	80	25	45	47	B	溶結凝灰岩		46	1759	108	200	78	C・D	溶結凝灰岩	
23	70	30	64	46	B	溶結凝灰岩		47	2809	102	200	157	D	溶結凝灰岩	
24	50	23	34	46	B	溶結凝灰岩									

(3) 石室根石

石室根石は、掘り方内に敷設された層厚2～30cmのローム混じりの粘土床の上に設置されていた。なお、粘土床は斜面地に形成された掘り方底面を水平面に修正する意図をもって敷設された可能性も考えられる。

根石は、奥壁（石-47）と奥壁に接する西側壁（石-46）2石では2トン前後の大きな溶結凝灰岩を用い、それ以外根石では、200～300kg程度のやや小ぶりの凝灰岩と輝石安山岩を用いていた。いずれ

の根石も切石ではないが、石室内面に向かう面には平坦面を形成しようと意図した荒い削り面が確認された。

根石は奥壁（石-46）と西側壁（石-47）がそれぞれの角部で接し、ほぼ直角の位置関係を呈しており、これらの2石が石室構築の設置基準石材になった可能性がある。また、根石の設置状況を見る限りでは、玄室と羨道の明確な区別は認めづらく、その区別は、根石設置後に設置されたと考えられる柵石によって行われたと考えられる。（深澤）

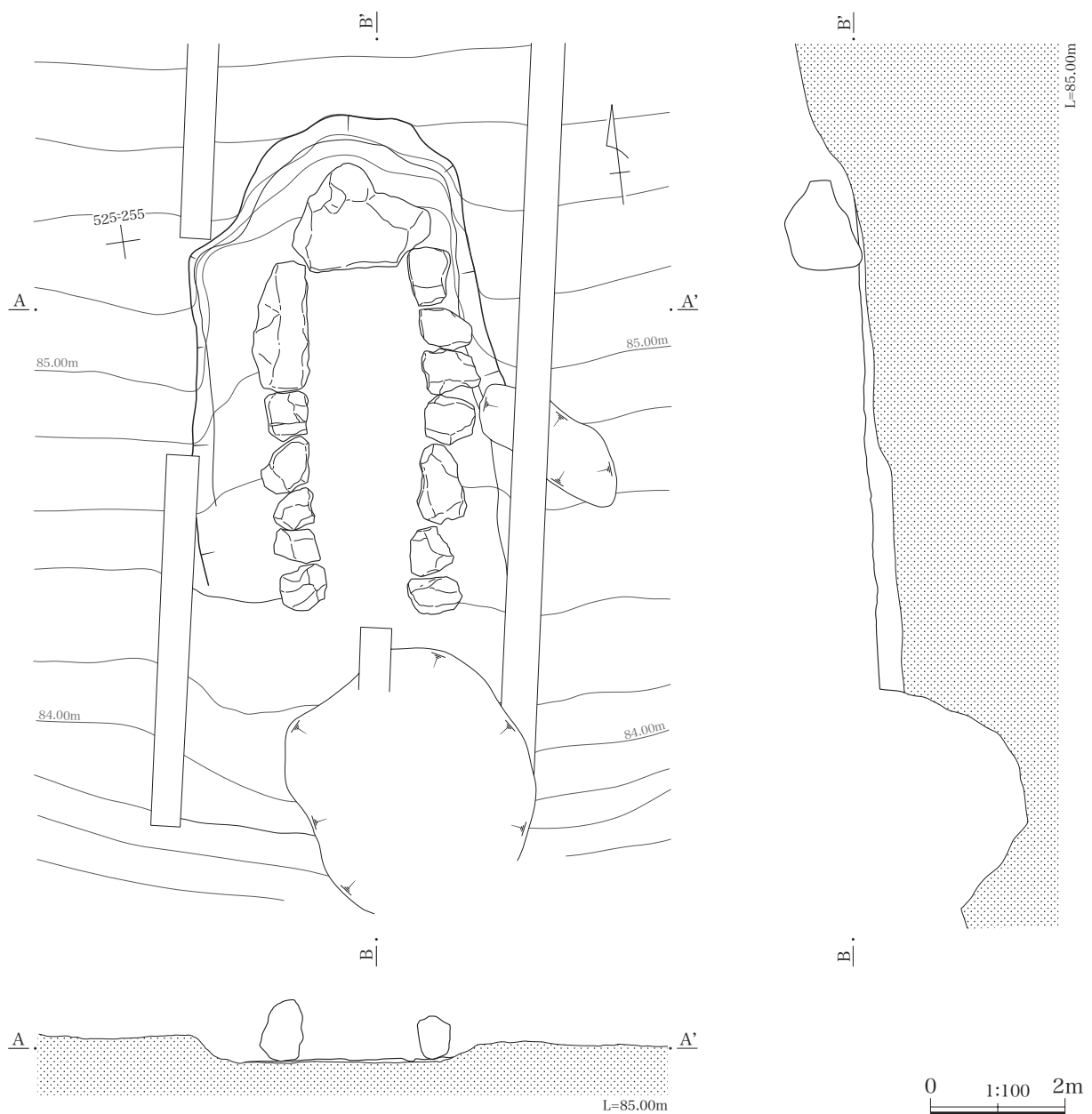


図142 石室根石 平・断面図

(4) 石室掘り方

石室掘り方は、その明確な掘り込みが確認されたのは石室構築範囲の北半分のみである。その規模は南北長約4.0m、東西長約4.3m、深さ0.1～0.5mを測り、平面プランが不整な矩形を呈している。床面の凹凸は、設置された石材の圧痕以外は目立たず、比較的平坦である。

掘り方が石室設置範囲全域に存在しない要因としては、本墳が斜面地に構築されていることが考えられる。掘り方が未確認の石室南半分については元来

の地表面が石室設置レベルよりも低くなっているため、掘り方を掘削する必要がなかったと考えられる。なお、掘り方が存在しない南半分の範囲では粘土床の層厚が徐々に厚くなっていることも掘り方の存否と相関性があるものと思われる。

奥壁下からは奥壁を安定させるための小礫が多く存在していたが、その裏込土中から埴輪片（土1）が出土した。さらに奥壁直下からは棘関片刃鏃（鉄9・17・28）が出土した。特に後者の鉄鏃については、意図的に置かれたものと想定される。（深澤）

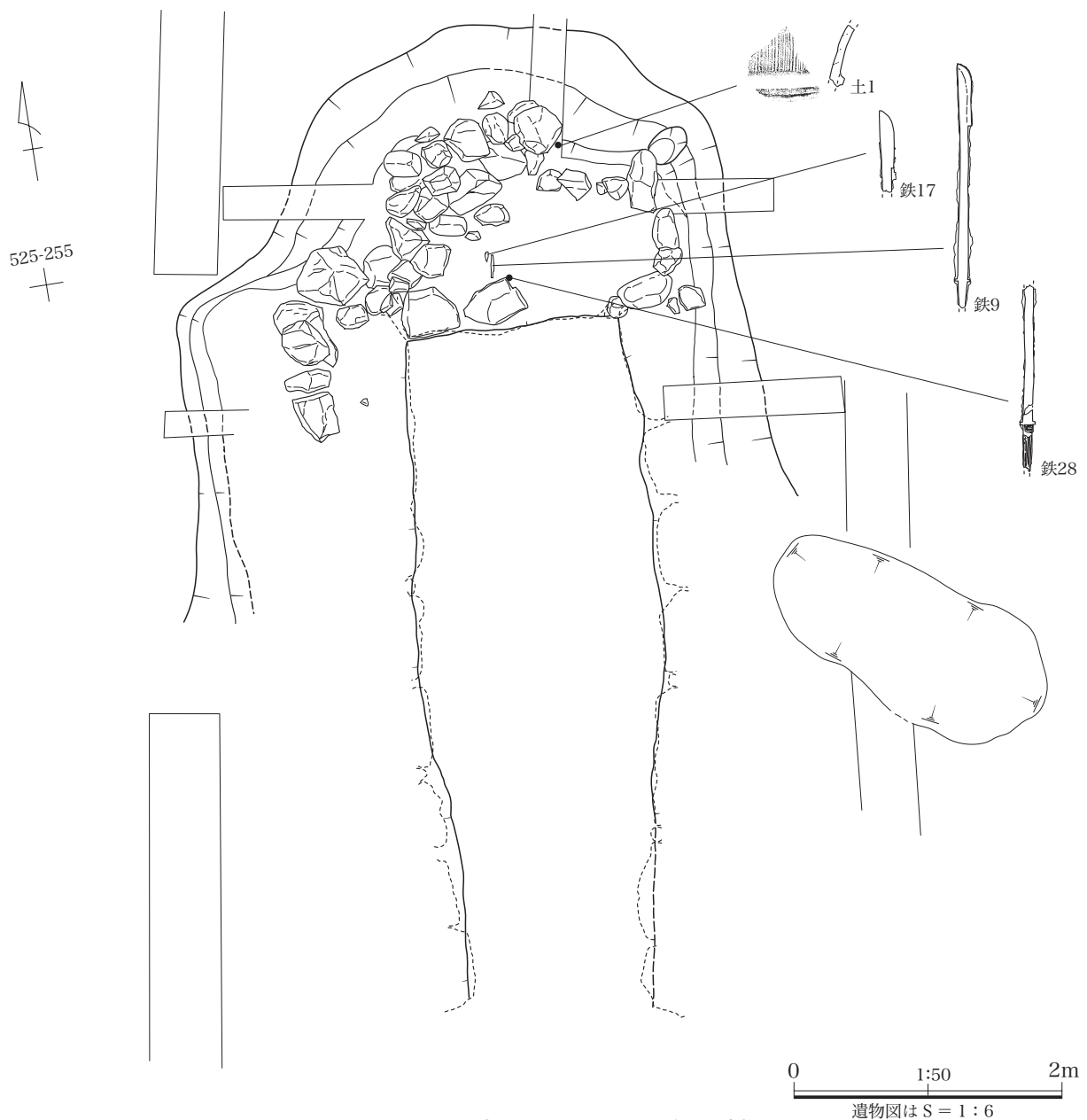


図 143 石室掘り方平面図および出土遺物

(5) 墳丘盛土下の地山面

墳丘盛土を除去すると、地山面が検出された。その検出範囲は南北約17.0m、東西約14.0mの範囲である（墳丘東裾は想定墳丘を3.0mほど削平）。そして、石室掘り方は、この地表面検出範囲のほぼ中央に位置する。

検出された地山面では、その周辺地形と大差のない規則的な等高線が認められ、加えて、墳丘盛土範囲を規定するような掘り込みなど明確な整地事業を施した痕跡も認められない状況からは、この面が自

然地形（＝地表面）であると考えられる。なお、この地山面上には焼土や炭化物等が面的に存在する状況は認められなかった。

墳丘盛土下地山面の出土遺物としては、土師器片（土-1～5：図200）ある。但し、これらは散在していることとわずかな破片での出土、さらには明らかに時期の異なる遺物（土-2）であることから、盛土施工に関連する遺物とは考えることはできない。（深澤）

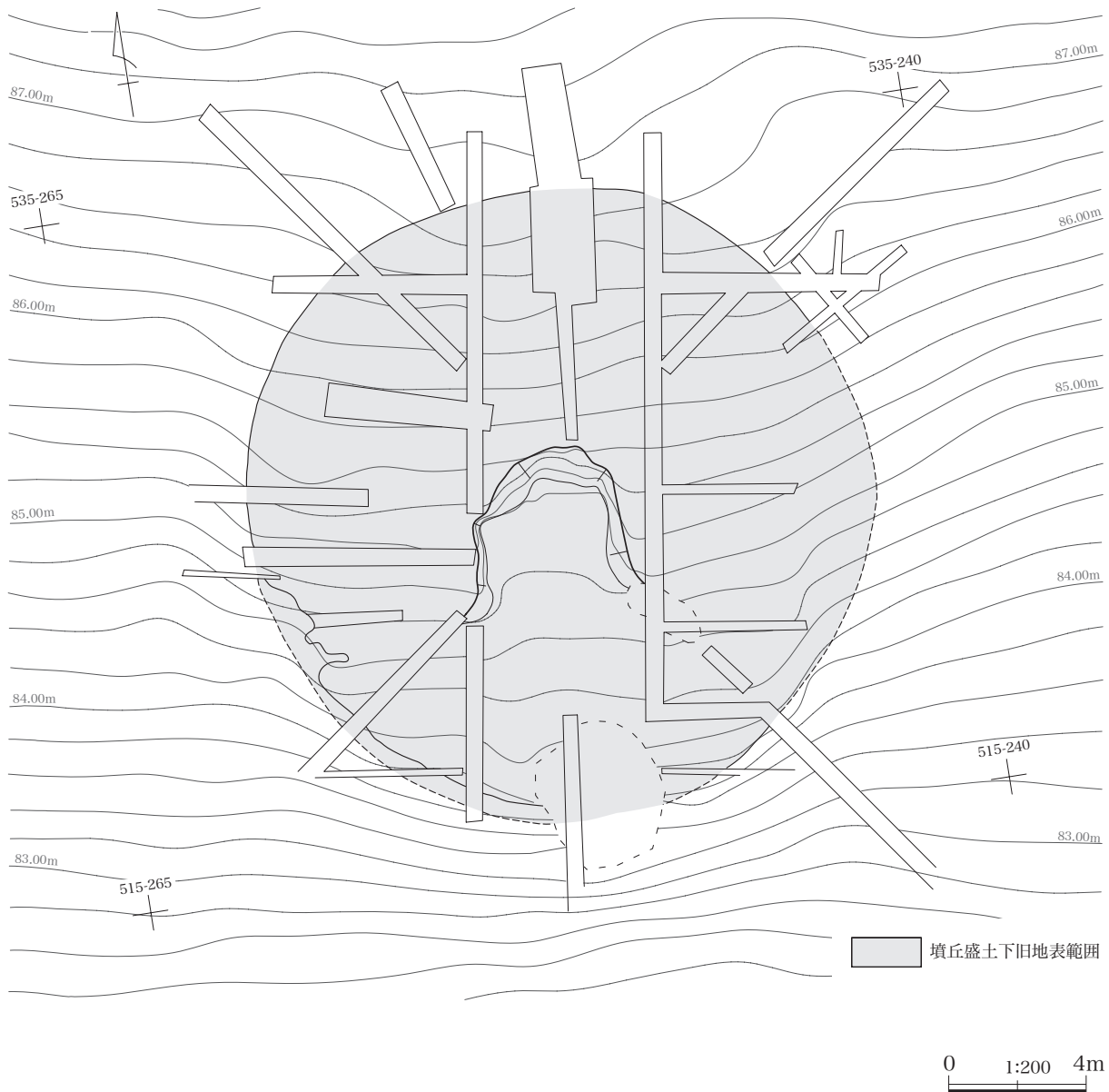


図144 墳丘下地山面 平面図

7 出土遺物について

(1) 出土遺物に関する概要

成塚向山2号墳では、円筒埴輪・形象埴輪・土師器・須恵器・鉄製品・玉製品が出土している。以下、種類毎にその概要についてを記述する。(深澤)

(2) 円筒埴輪

a. 普通円筒埴輪

規格 口縁部から底部までの完存資料はないものの、残存状況から2条3段構成と考えられる。

法量 器高は、完存資料がないため不明である。しかし、底部から1条目突帯までの高さは11.4～21.5cmの範囲(計測資料37点)にあり、特に14～16cm前後(平均15.1cm)のものが多い。また、底部から2条目突帯までの高さは26.3～27.8cmの範囲(計測資料3点)にあり、平均27.3cmとなる。さらに、2条目突帯から口縁端部までの高さは、4.7～7.5cmの範囲内(計測資料8点)にあり、6.4cm前後(平均6.1cm)のものが多い。このように考えると、本墳の普通円筒埴輪の器高は33cm前後が平均的資料であるということが推測できる。

口径は、20.0～23.0cmの範囲内にあるが、20cm前後(平均20.9cm)の資料が多い。

底径は、9.9～16.8の範囲内にあるが、11～12cm前後(平均12.2cm)の資料が多い。

技法の特徴 外面調整は、全てが「タテハケ後、口縁のみにヨコナデを施す」ものであり、加えて底部調整を施すものが客体的にある。

内面調整は共通工程として「タテナデを施し、仕上げに口縁端部をヨコナデする」工程があることが認められる。そして、その中間工程に「全面に雑なタテハケを施す工程」や「口縁付近に密なハケを施す工程」を付加させるものがある。なお、輪積み痕が明瞭に確認できるものが極めて多い。

刷毛目の単位は概ね3種類が認識でき、幅2cmあたり約7本のもの、約12～14本のもの、約20本のものに大別できる。

突帯 断面形には、「台形」「三角形」「扁平な

台形」の3種類があり、後2者が主体をなす。但し、これらは1個体中においても混在することが多い。

透孔 「円形」または「楕円形(不整形円形)」を呈すると考えられる。

線刻 口縁部外面に記されるものと口縁部内面に記されるものがある。前者の線刻は少なく、「∨」といった形状を呈する。一方、後者における線刻は複数資料における共通性が認められ、「ㄨ」といった形状が、それぞれの破片の中において確認できる。

混入鉱物 胎土中にはチャートや凝灰岩の混入が極めて目立つ。

特記事項 上記の属性内容の資料の他、外面にヨコハケを施す破片(189)、胎土緻密で焼成良好である破片(190・191)があり、異質な存在である

b. 朝顔形埴輪

規格 全体規格がわかる完存資料はないが、残存状況からは円筒部を2条3段構成、朝顔部には1条突帯が貼付されることが規格として考えられる。

法量 完存資料がないため不明であり、必要部位の計測可能な資料も2点のみである。この2点のうち、基部～1条目突帯の高さは13.5cmと15.4cmである。また、基部～2条目突帯の高さは25.2cmと26.3cmである。このように考えると、本墳の普通円筒埴輪の器高は33cm前後が平均的資料であるということが推測できる。

口径は、計測可能な資料が1点のみであり、28.2cmであり、底径は、13.7cmと13.8cmである。

技法の特徴 外面調整は「タテハケ後、口縁のみにヨコナデを施す」工程をとる。なお、底部調整は確認できない。内面調整は円筒部においては「タテナデを施す」工程のみで、口縁部において、「ナデ後、ハケを密に施す」工程をとる。刷毛目の単位は、幅2cmあたり約7本である。

突帯 断面形は「台形」を呈する。

透孔 「円形」を呈すると考えられる。

線刻 残存資料の中においては認められない。

混入鉱物 胎土中にはチャートや凝灰岩の混入が極めて目立つ。(深澤)

第5章 調査報告3

【円筒埴輪観察表 凡例】

遺物番号…成塚向山2号墳円筒埴輪(図145～155)での遺物番号を示す。本来の番号記載は「2号墳円筒埴輪+番号」だが、ここでは「2号墳円筒埴輪」の名称を略した。

図版番号…上段の記載は本文図版番号を示す。下段のPL番号は写真図版のPL番号を示す。

種類…普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪がある。

出土位置…各遺物の出土した位置を記載した。原位置で検出された埴輪については「埴輪列番号」を記載した。また、それ以外のものについては次の通りの表記とした。グリッド名で取り上げたものにはXY座標の下3桁のみで表記した数値を記入した(例:X=37600、Y=-43300の場合は600-300と表記)。グリッドの位置も不明で、埴輪周辺から出土したものには「埴輪周辺」と表記した。石室崩落土中から出土したものには「石室崩落土」と表記した。

法量…残存高・底径または口縁径を表記した。なお破片資料のため、口縁径・底径が測定不能の資料については、残存高のみ表記した。器面調整…「外面調整」と「内面調整」にわけて表記した。

ハケ本数…「外面」と「内面」に分けて、2cmあたりの本数を表記した。

透孔…透孔の形状を表記した。

色調…色調は外面において主体を占める色調を記載した。なお、表記基準は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1993年度版に準拠した。

備考…その他については、円筒埴輪のものに特記すべき内容がある場合はそれを記載したが、それ以外にも、胎土分析資料の場合は、それも記載した。

表40 円筒埴輪 観察表(1)

円筒番号	図版番号	種類	出土位置	法量	器面調整	ハケ本数 (本数/2cm)	透孔	色調	備考
3	図145 PL68	朝顔	埴輪列03	器高 49.0 口径 28.2 底径 13.7	外:タテハケ。口縁のみヨコナデ。 内:朝顔部のみヨコハケ。頸部以下はタテナデ。	外:7 内:口縁のみ10	-	橙	同一と推定。胎土分析No.17
4	図145 PL68	普通	埴輪列04	残高 26.2 底径 11.7	外:タテハケ。底部調整あり。 内:タテナデ後、部分的にタテハケ。	外:10 内:10	円形	橙	
5	図145 PL68	普通	埴輪列05	残高 21.5 底径 10.8	外:タテハケ。 内:タテナデ後、部分的にタテハケ。	外:9 内:12	円形	橙	
6	図145 PL68	普通	埴輪列06	残高 22.2 底径 13.5	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:6 内:-	円形	橙	
7	図145 PL68	普通	埴輪列07	残高 23.4 底径 11.2	外:タテハケ。底部調整あり。 内:タテナデ後、部分的にタテハケ。	外:9~11 内:9~11	-	橙	
8	図145 PL68	普通	埴輪列08	残高 24.5 底径 12.0	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:9~10 内:-	円形	明赤褐	
9	図146 PL68	普通	埴輪列09	残高 23.4 底径 14.1	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:7 内:-	円形	橙	
10	図146 PL68	普通	埴輪列10	残高 26.0 底径 11.7	外:タテハケ。底部調整あり。 内:タテナデ後、部分的にタテハケ。	外:9~10 内:9~10	円形か	橙	
11	図146 PL68	普通	埴輪列11	残高 25.6 底径 11.3	外:タテハケ。底部調整あり。 内:タテナデ後、部分的にタテハケ。	外:11 内:12	-	橙	
12	図146 PL68	朝顔	埴輪列12	器高 - 残高 24.3 底径 14.2	外:タテハケ。口縁のみヨコナデ。 内:朝顔部のみヨコハケ。頸部以下はタテナデ。	外:胴6/口縁7 内:口縁のみ8	-	橙	未接合だが、同一と推定。
13	図146 PL68	朝顔	埴輪列13	残高 30.1 底径 13.8	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:7 内:-	円形	橙	
27	図146 PL68	普通	埴輪列27	残高 32.2 底径 12.7	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:8 内:-	-	橙	
28	図147 PL68	普通	埴輪列05	残高 16.3 底径 11.2	外:タテハケ。 内:タテナデ後、部分的にタテハケ。	外:12 内:12	-	橙	
30	図147 PL68	普通	埴輪列30	残高 10.2 底径 12.4	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:11 内:-	-	橙	胎土分析No.14
31	図147 PL68	普通	埴輪列31	残高 17.6 底径 14.0	外:タテハケ。 内:タテナデ後、部分的にタテハケ?	外:8 内:不明	-	橙	
32	図147 PL68	普通	埴輪列32	残高 17.3 底径 11.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:17~18 内:-	-	橙	
33	図147 PL68	普通	埴輪列33	残高 14.2 底径 10.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:16 内:-	-	にぶい橙	
34	図147 PL68	普通	埴輪列34	残高 18.2 底径 12.7	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:13 内:6	-	にぶい橙	底部内面に底部板目圧痕。
35	図147 PL68	普通	埴輪列35	残高 17.6 底径 11.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:7 内:-	円形か	にぶい褐	
36	図147 PL68	普通	埴輪列36	残高 15.5 底径 11.0	外:タテハケ。 内:タテナデ後、部分的にタテハケ?	外:7 内:14?	-	橙	

表 41 円筒埴輪 観察表 (2)

円筒 番号	図版 番号	種類	出土 位置	法量	器面調整	ハケ本数 (本数/2 cm)	透孔	色調	備考
37	図 147 PL68	普通	埴輪列 37	残高 19.8 底径 11.1	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にタテハケ。	外: 8~9 内: 11	-	にぶい橙	
38	図 147 PL69	普通	埴輪列 38	残高 24.3 底径 9.9	外: タテハケ。底部調整あり。 内: タテナデ後、部分的にタテハケ。	外: 12~13 内: 12	-	橙	
39	図 147 PL69	普通	埴輪列 39	残高 15.8 底径 10.2	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にタテハケ。	外: 8~9 内: 18~20	-	にぶい赤 褐	
40	図 147 PL69	普通	埴輪列 40	残高 15.0 底径 13.6	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 6 内: -	-	橙	
41	図 148 PL69	普通	埴輪列 41	残高 22.6 底径 13.2	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 7 内: -	円形 か	橙	
42	図 148 PL69	普通	埴輪列 42	残高 20.4 底径 11.5	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 7 内: -	-	にぶい橙	
43	図 148 PL69	普通	埴輪列 43	残高 10.6 底径 11.8	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 6~7 内: -	-	橙	
44	図 148 PL69	普通	埴輪列 44	残高 18.0 底径 11.8	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 8 内: -	-	橙	
45	図 148 PL69	普通	埴輪列 45	残高 17.4 底径 11.2	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 10 内: 13	-	橙	
46	図 148 PL69	普通	埴輪列 46	残高 20.2 底径 14.7	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 7~8 内: -	-	橙	
47	図 148 PL69	普通	埴輪列 47	残高 18.8 底径 12.9	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 15~19 内: -	-	橙	
48	図 148 PL69	普通	埴輪列 48	残高 15.7 底径 12.0	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 6~9 内: -	-	にぶい橙	
49	図 148 PL69	普通	埴輪列 49	残高 15.3 底径 9.9	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 10~12 内: -	-	暗赤灰~ 橙	
50	図 148 PL69	普通	埴輪列 50	残高 17.8 底径 11.8	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にタテハケ。	外: 6~7 内: 8?	-	灰褐~橙	
51	図 148 PL69	普通	埴輪列 51	残高 12.6 底径 11.0	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 8 内: -	-	橙	胎土分析 No.15
52	図 148 PL69	普通	埴輪列 52	残高 18.4 底径 11.6	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 16~17 内: -	-	橙	
56	図 149 PL69	普通 ?	513-248 513-253	残高 21.6 底径 10.7	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にタテハケ。	外: 7 内: 10	円形 か	橙	
57	図 149 PL69	普通 ?	512-248	残高 6.2 底径 11.2	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 10 内: -	-	灰褐	
59	図 149 PL69	普通 ?	512-248	残高 9.7 底径 11.0	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 7 内: -	-	灰褐	
60	図 149 PL69	普通	525-245	残高 29.3 底径 12.2	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 18 内: -	円形 か	橙	
61	図 149 PL69	普通	519-245	残高 18.3 底径 13.8	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 7 内: -	円形 か	橙	
62	図 149 PL69	普通	532-254	残高 18.8 底径 12.0	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にタテハケ。	外: 7 内: 15~16	-	橙	
63	図 149 PL69	普通	529-257 531-257	残高 16.0 底径 12.5	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にタテハケ。	外: 7~8 内: 11	-	灰褐	
64	図 149 PL69	普通	532-258	残高 15.7 底径 11.9	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 8 内: -	-	褐灰	
65	図 149 PL69	普通 ?	512-249 536-243	残高 7.2 底径 11.5	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 6 内: -	-	明赤褐	
66	図 149 PL69	普通 ?	埴丘周辺	残高 8.2 底径 13.3	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 6 内: -	-	明赤褐	
67	図 149 PL69	普通	529-258	残高 13.3 底径 11.9	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 18~21 内: -	-	明赤褐	
68	図 149 PL69	普通	509-252 513-248	残高 17.3 底径 11.9	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 7 内: -	-	にぶい 赤褐	
69	図 150 PL70	普通 ?	519-258	残高 10.6 底径 12.4	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 9 内: -	-	にぶい 赤褐	底部内面 にシワ痕 あり。
70	図 150 PL70	普通 ?	529-258	残高 11.5 底径 12.7	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 18 内: -	-	にぶい赤 褐	
71	図 150 PL70	普通 ?	埴丘周辺	残高 30.5 底径 11.7	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 19 内: -	円形	橙	
72	図 150 PL70	普通	505-251 506-249	残高 18.1 底径 12.3	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 7 内: -	円形 か	橙	

表42 円筒埴輪 観察表(3)

円筒 番号	図版 番号	種類	出土 位置	法量	器面調整	ハケ本数 (本数/2cm)	透孔	色調	備考
73	図150 PL70	普通	525-260	残高 19.2 底径 12.1	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:10 内:-	円形 か	橙	
74	図150 PL70	普通 ?	505-253	残高 17.7 底径 -	外:タテハケ? 内:タテナデ。	外:摩耗不明 内:-	円形 か	にぶい褐	
75	図150 PL70	普通	511-242	残高 17.0 底径 13.4	外:タテハケ? 内:タテナデ。	外:摩耗不明 内:-	-	にぶい橙	
76	図150 PL70	普通 ?	511-248 517-257	残高 14.2 底径 16.4	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:6~8 内:-	-	にぶい橙	
77	図153 PL71	朝顔 ?	516-248	残高 3.9	外:タテハケ。 内:ナナメナデ。	外:5 内:-	-	橙	
78	図153 PL71	朝顔	墳丘周辺	残高 8.9	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:7	-	明赤褐	
79	図153 PL71	朝顔 ?	517-248	残高 5.3	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナナメナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:6 内:-	-	橙	
80	図153 PL -	普通	512-251	残高 7.1	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:6	-	橙	内面に線 刻あり。
81	図153 PL68	朝顔	516-248 517-248	残高 9.6	外:タテハケ。 内:ヨコナナメナデ。	外:6 内:-	-	橙	
82	図153 PL -	朝顔	527-260	残高 6.1	外:タテハケ。 内:ナナメナデ後、ナナメハケ。	外:7 内:5	-	にぶい橙	
83	図153 PL -	朝顔	510-248	残高 5.5	外:タテハケ。 内:ナデ後、ナナメハケ。	外:6~8 内:8~11	-	にぶい褐	
84	図153 PL -	朝顔	517-245	残高 7.3	外:タテハケ。 内:ナナメナデ後、部分的にナナメハケ。	外:6~7 内:5	-	にぶい褐	
85	図153 PL -	朝顔	513-249	残高 7.2	外:タテハケ。 内:ナナメナデ。	外:7 内:-	-	にぶい橙	
86	図153 PL -	朝顔	517-248	残高 6.7	外:タテハケ。 内:ナナメナデ。	外:7 内:-	-	橙	
87	図154 PL -	朝顔	517-246	残高 7.5	外:タテハケ。 内:ナナメナデ。	外:7 内:-	-	橙	
88	図154 PL -	朝顔	511-248	残高 5.7	外:タテハケ。 内:ナデ。	外:- 内:-	-	にぶい橙	
89	図154 PL -	朝顔	532-249	残高 7.7	外:タテハケ。 内:ナナメナデ。	外:6 内:-	-	橙	
90	図154 PL -	朝顔	522-245	残高 14.2	外:タテハケ。 内:ナナメナデ。	外:7 内:-	-	橙	
91	図154 PL -	朝顔	513-257	残高 11.1	外:タテハケ。 内:ナナメナデ。	外:7 内:-	-	橙	
92	図151 PL68	普通	520-240 522-245	残高 11.8 口径 23.0	外:タテハケ。 内:ヨコナナメナデ。	外:18 内:-	円形 か	橙	
93	図151 PL -	普通	532-253 533-253	残高 4.7 口径 22.0	外:タテハケ。 内:ナナメハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:-	-	橙	
94	図151 PL -	普通	513-249	残高 3.3 口径 20.4	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナナメハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:8~10 内:10~12	-	橙	
95	図152 PL -	普通	513-249	残高 5.4	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナナメハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:9 内:10	-	橙	
96	図152 PL -	普通	513-259	残高 6.3	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:9 内:10	-	にぶい褐	
97	図152 PL -	普通	533-252	残高 11.4	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナナメハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:6~8 内:10~12	-	橙	
98	図152 PL -	普通	529-244	残高 7.7	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:タテナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:9~10 内:-	-	にぶい赤 褐	
99	図152 PL -	普通	511-251	残高 6.8	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナナメハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:6 内:10	-	橙	
100	図152 PL -	普通 ?	516-241	残高 4.9	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:13 内:13?	-	橙	内面に線 刻あり。
101	図152 PL -	普通 ?	510-249	残高 4.3	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ・ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:5	-	にぶい橙	
102	図152 PL -	普通	533-251	残高 8.2	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ・タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:12 内:10	-	橙	
103	図152 PL -	普通 ?	511-250	残高 4.2	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ・ナナメハケ後、口唇部のみヨコ ナデ。	外:7 内:7	-	橙	
104	図152 PL -	普通	522-263	残高 10.3	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:-	-	にぶい赤 褐	

表 43 円筒埴輪 観察表 (4)

円筒 番号	図版 番号	種類	出土 位置	法量	器面調整	ハケ本数 (本数/2 cm)	透孔	色調	備考
105	図 152 PL -	普通 ?	531-247	残高 4.2	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナナメナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:6 内:-	-	橙	
106	図 151 PL68	普通	532-249	残高 14.4 口径 20.2	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ・ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:8?	楕円 形	橙	内面に線 刻あり。
107	図 152 PL -	普通	510-262	残高 5.7	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:-	-	橙	
108	図 152 PL -	普通	514-260	残高 5.8	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:タテナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:-	-	橙	
109	図 152 PL -	普通 ?	511-248	残高 4.3	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナナメナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:-	-	橙	
110	図 152 PL -	普通	石室崩落土	残高 5.5	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ・ナナメハケ後、口唇部のみヨコ ナデ。	外:7 内:7	-	橙	
111	図 153 PL -	普通	532-249	残高 7.3	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ・ナナメハケ後、口唇部のみヨコ ナデ。	外:7 内:7	-	明赤褐	
112	図 153 PL -	普通 ?	591-245	残高 3.8	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナナメナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:6 内:-	-	橙	
113	図 153 PL -	普通	墳丘周辺	残高 4.9	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:タテナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:6 内:-	-	橙	
114	図 153 PL -	普通	石室崩落土	残高 8.1	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ・ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:7	-	橙	
115	図 153 PL -	普通 ?	511-249	残高 5.3	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:7	-	橙	
116	図 153 PL -	普通 ?	墳丘周辺	残高 3.6	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:タテナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:-	-	橙	
117	図 153 PL -	普通	石室崩落土	残高 3.7	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外:7 内:-	-	にぶい赤 褐	
118	図 154 PL -	普通 ?	531-247	残高 7.6	外:タテハケ。 内:タテナデ後、部分的にナナメハケ。	外:6 内:-	-	橙	
119	図 154 PL -	普通 ?	531-247	残高 8.5	外:タテハケ。 内:タテナナメナデ。	外:7 内:-	-	橙	
120	図 154 PL -	普通 ?	石室崩落土	残高 8.0	外:タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内:ナヨコナナメハケ後、口唇部のみヨコ ナデ。	外:7 内:8	-	橙	内面に線 刻あり。
121	図 154 PL -	普通 ?	524-260	残高 10.5	外:タテハケ。 内:タテナデ?	外:11~12 内:-	-	橙	
122	図 154 PL -	普通 ?	506-250 507-250	残高 11.4	外:タテハケ。 内:ナナメナデ後、部分的にヨコハケ。	外:6 内:7	-	橙	
123	図 154 PL -	普通 ?	515-242 515-253	残高 9.6	外:タテハケ。 内:タテナナメナデ。	外:7 内:-	-	明赤褐	
124	図 154 PL -	普通 ?	519-245	残高 8.5	外:タテハケ。 内:ナナメナデ。	外:7~8 内:-	-	橙	
125	図 154 PL -	普通 ?	516-259	残高 9.1	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:9~10 内:-	-	明赤褐	
126	図 154 PL -	普通 ?	514-252	残高 9.9	外:タテハケ。 内:タテナナメナデ。	外:6~7 内:-	-	橙	
127	図 154 PL -	普通 ?	527-260	残高 7.2	外:タテハケ。 内:タテナナメナデ。	外:6~7 内:-	-	橙	
128	図 154 PL -	普通 ?	517-259	残高 7.5	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:10 内:-	-	橙	
129	図 154 PL -	普通 ?	524-261	残高 7.0	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:6 内:-	-	橙	
130	図 154 PL -	普通 ?	512-249	残高 7.7	外:タテハケ。 内:タテナナメナデ。	外:6? 内:-	-	橙	
131	図 154 PL -	普通 ?	527-261	残高 5.7	外:タテハケ。 内:タテナデ後、部分的に粗いハケ。	外:10 内:-	-	橙	
132	図 154 PL -	普通 ?	524-262	残高 11.3	外:タテハケ。 内内:タテナデ後、部分的にヨコハケ。	外:18 内:11	-	にぶい橙	
133	図 154 PL -	普通 ?	517-248	残高 11.4	外:タテハケ。 内:タテナナメナデ。	外:6~7 内:-	-	橙	
134	図 151 PL -	普通 ?	512-249 531-247	残高 8.6	外:タテハケ。 内:タテナナメナデ。	外:7 内:-	円形 か	橙	
135	図 155 PL -	普通 ?	511-255	残高 9.8	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:8 内:-	-	明赤褐	

表44 円筒埴輪 観察表(5)

円筒 番号	図版 番号	種類	出土 位置	法量	器面調整	ハケ本数 (本数/2cm)	透孔	色調	備考
136	図155 PL -	普通 ?	513-246	残高 10.8	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:6~7 内:-	-	橙	
137	図155 PL -	普通 ?	514-251	残高 10.5	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:6~7 内:-	-	橙	
138	図155 PL -	普通 ?	512-251	残高 8.4	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:9~10 内:-	-	橙	
139	図155 PL -	普通 ?	521-240	残高 8.9	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:11 内:-	-	橙	
140	図155 PL -	普通 ?	512-249	残高 5.5	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:7 内:-	-	橙	
141	図155 PL -	普通 ?	524-251	残高 11.6	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:摩滅不明 内:-	-	橙	
142	図155 PL -	普通 ?	石室崩落土	残高 9.5	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:20~21 内:-	-	橙	
143	図151 PL -	普通 ?	513-247	残高 17.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:7 内:-	-	にぶい橙	
144	図155 PL -	普通 ?	石室崩落土	残高 12.8	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:7 内:-	-	橙	
145	図155 PL -	普通 ?	514-256	残高 11.3	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:7 内:-	-	橙	
146	図155 PL -	普通 ?	507-247	残高 8.4	外:タテハケ。 内:ヨコナメナデ。	外:6~7 内:-	-	橙	
147	図155 PL -	普通 ?	520-258	残高 8.9	外:タテハケ。 内:タテナメナデ。	外:7 内:-	-	橙	
148	図155 PL -	普通 ?	512-256	残高 8.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:20 内:-	-	にぶい橙	
149	図151 PL -	普通 ?	520-258	残高 12.4 底径 11.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:20~21 内:-	-	橙	
150	図151 PL -	普通 ?	513-247 513-248	残高 11.3 底径 12.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:18~20 内:-	-	橙	
151	図151 PL -	普通 ?	513-240 515-258	残高 12.5 底径 12.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:17~18 内:-	-	にぶい赤 褐	
152	図151 PL -	普通 ?	517-257	残高 13.0 底径 -	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:18~19 内:-	-	黒褐	
153	図151 PL -	普通 ?	500-251	残高 7.2 底径 10.2	外:タテハケ。底部調整あり? 内:タテナデ。	外:摩滅不明 内:-	-	橙	
154	図151 PL -	普通 ?	513-247 513-248	残高 11.5 底径 11.3	外:タテハケ。底部調整あり? 内:タテナデ。	外:17~ 18? 内:-	-	橙	
155	図151 PL -	普通 ?	513-241 513-257	残高 8.4 底径 12.6	外:タテハケ。底部調整あり? 内:タテナデ。	外:摩滅不明 内:-	-	橙	
156	図151 PL -	普通 ?	513-247 513-248	残高 9.0 底径 13.4	外:タテハケ。底部調整あり? 内:タテナデ。	外:摩滅不明 内:-	-	橙	
157	図151 PL -	普通 ?	514-257	残高 10.5 底径 13.2	外:タテハケ? 内:タテナデ。	外:摩滅不明 内:-	-	橙	
158	図151 PL -	普通 ?	511-249 512-249	残高 10.6 底径 12.4	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:11 内:-	-	橙	
159	図151 PL -	普通 ?	515-240 516-248	残高 12.1 底径 11.8	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:11 内:-	-	橙	
160	図151 PL -	普通 ?	511-250 513-249	残高 10.6 底径 15.6	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:6 内:-	-	橙	形象埴輪 片?
161	図152 PL -	普通 ?	515-254	残高 7.2 底径 11.6	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:9 内:摩滅不明	-	橙	
162	図152 PL -	普通 ?	514-238	残高 8.5 底径 11.2	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:7~8 内:-	-	橙	
163	図152 PL -	普通 ?	513-249 513-257	残高 8.0 底径 17.4	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:10 内:-	-	橙	
164	図152 PL -	普通 ?	513-247 515-249	残高 8.7 底径 14.1	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:6 内:-	-	橙	
165	図152 PL -	普通 ?	512-249 513-249	残高 6.8 底径 11.4	外:タテハケ。 内:タテナデ。	外:9~10 内:摩滅不明	-	明赤褐	
166	図152 PL -	普通 ?	505-250	残高 14.2 底径 13.1	外:タテハケ。底部調整あり? 内:タテナデ後、部分的にタテハケ。	外:摩滅不明 内:9	-	橙	
167	図152 PL -	普通 ?	517-245	残高 6.1 底径 11.8	外:タテハケ。底部調整あり? 内:タテナデ。	外:6? 内:-	-	橙	

表 45 円筒埴輪 観察表 (6)

円筒 番号	図版 番号	種類	出土 位置	法量	器面調整	ハケ本数 (本数/2 cm)	透孔	色調	備考
168	図 153 PL -	普通 ?	512-250	残高 3.1	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ナメハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 9 内: 9	-	灰褐	内面に線刻あり。
169	図 153 PL -	普通 ?	515-258	残高 2.9	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ナデ・ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 11 内: 15?	-	橙	内面に線刻あり。
170	図 153 PL -	普通 ?	墳丘周辺	残高 3.1	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 10 内: 19~20	-	にぶい赤 褐	内面に線刻あり。
171	図 153 PL -	普通 ?	520-240	残高 2.8	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 11 内: -	-	橙	内面に線刻あり。
172	図 153 PL -	普通 ?	528-260	残高 3.3	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 8 内: 7	-	橙	内面に線刻あり。
173	図 153 PL -	普通 ?	墳丘周辺	残高 2.5	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 不明 内: -	-	橙	内面に線刻あり。
174	図 153 PL -	普通 ?	531-247	残高 3.6	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 6 内: -	-	橙	内面に線刻あり。
175	図 153 PL -	普通 ?	532-249	残高 3.4	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 10? 内: 8	-	橙	内面に線刻あり。
176	図 153 PL -	普通 ?	531-247	残高 3.1	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 不明 内: -	-	明赤褐	内面に線刻あり。
177	図 153 PL -	普通 ?	石室崩落土	残高 3.7	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 8 内: 7~8	-	橙	内面に線刻あり。
178	図 153 PL -	普通 ?	524-242	残高 2.6	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 7 内: -	-	橙	内面に線刻あり。
179	図 153 PL -	普通 ?	514-255	残高 3.3	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ナデ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 摩滅不明 内: -	-	橙	内面に線刻あり。
180	図 153 PL -	普通 ?	519-258	残高 4.5	外: タテハケ後、口唇部のみヨコナデ。 内: ヨコハケ後、口唇部のみヨコナデ。	外: 8 内: 8	-	にぶい橙	内面に線刻あり。
181	図 155 PL -	普通 ?	516-258	残高 5.6	外: タテハケ。 内: ナデ・ヨコナメハケ。	外: 摩滅不明 内: 10	-	橙	内面に線刻あり。
182	図 155 PL -	普通 ?	509-252	残高 5.5	外: タテハケ。 内: タテナメナデ。	外: 7 内: -	-	橙	内面に線刻あり。
183	図 155 PL -	普通 ?	墳丘周辺	残高 5.3	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にヨコハケ。	外: 21~22 内: 18~19	-	橙	内面に線刻あり。
184	図 155 PL -	普通 ?	513-247	残高 2.8	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にヨコハケ。	外: 8? 内: 9?	-	橙	内面に線刻あり。
185	図 155 PL -	普通 ?	511-250	残高 4.0	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 17~18 内: -	-	橙	内面に線刻あり。
186	図 155 PL -	普通 ?	509-250	残高 3.2	外: タテハケ? ナデ? 内: タテナデ。	外: - 内: -	-	橙	外面に線刻あり。
187	図 155 PL -	普通 ?	524-261	残高 3.1	外: タテハケ。 内: タテナデ、部分的にタテハケ。	外: 14 内: -	-	橙	外面に線刻あり。
188	図 155 PL -	普通 ?	524-238	残高 2.7	外: タテハケ。 内: タテナデ。	外: 10 内: -	-	橙	内面に線刻あり。
189	図 155 PL -	普通 ?	515-254	残高 9.7	外: タテハケ後、ヨコハケ。 内: タテナデ。	外: 13~15 内: -	-	にぶい橙	
190	図 155 PL -	普通 ?	石室奥壁 裏込土中	残高 7.4	外: タテハケ。 内: タテナデ後、部分的にヨコハケ。	外: 9~10 内: 8~10	-	橙	樹立埴輪とは異質。
191	図 155 PL -	普通 ?	石室奥壁 裏込土中	残高 9.7	外: タテハケ後、ヨコハケ。 内: タテナデ。	外: 13~15 内: -	-	にぶい橙	

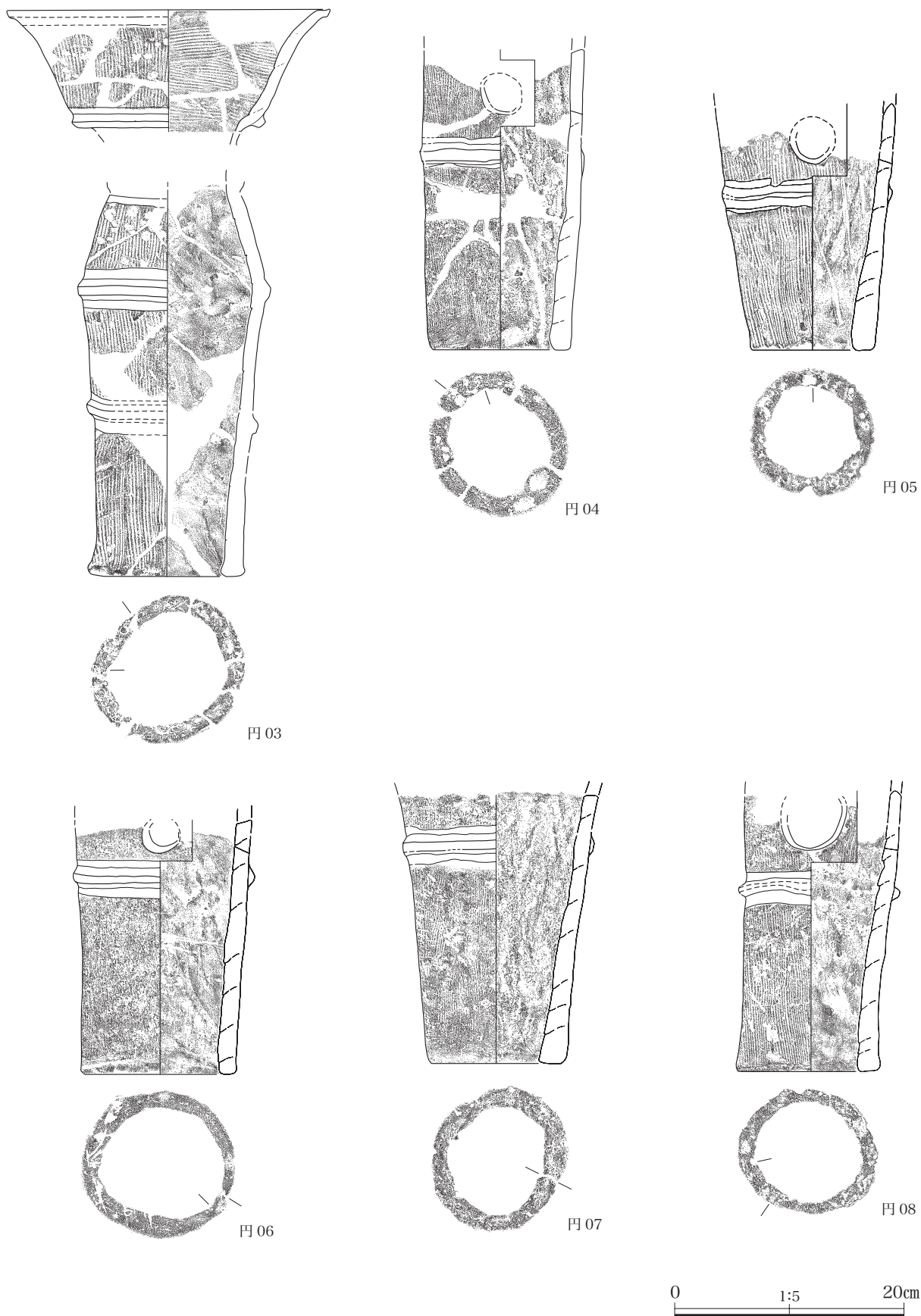


図 145 埴裾部出土 円筒埴輪 (1)

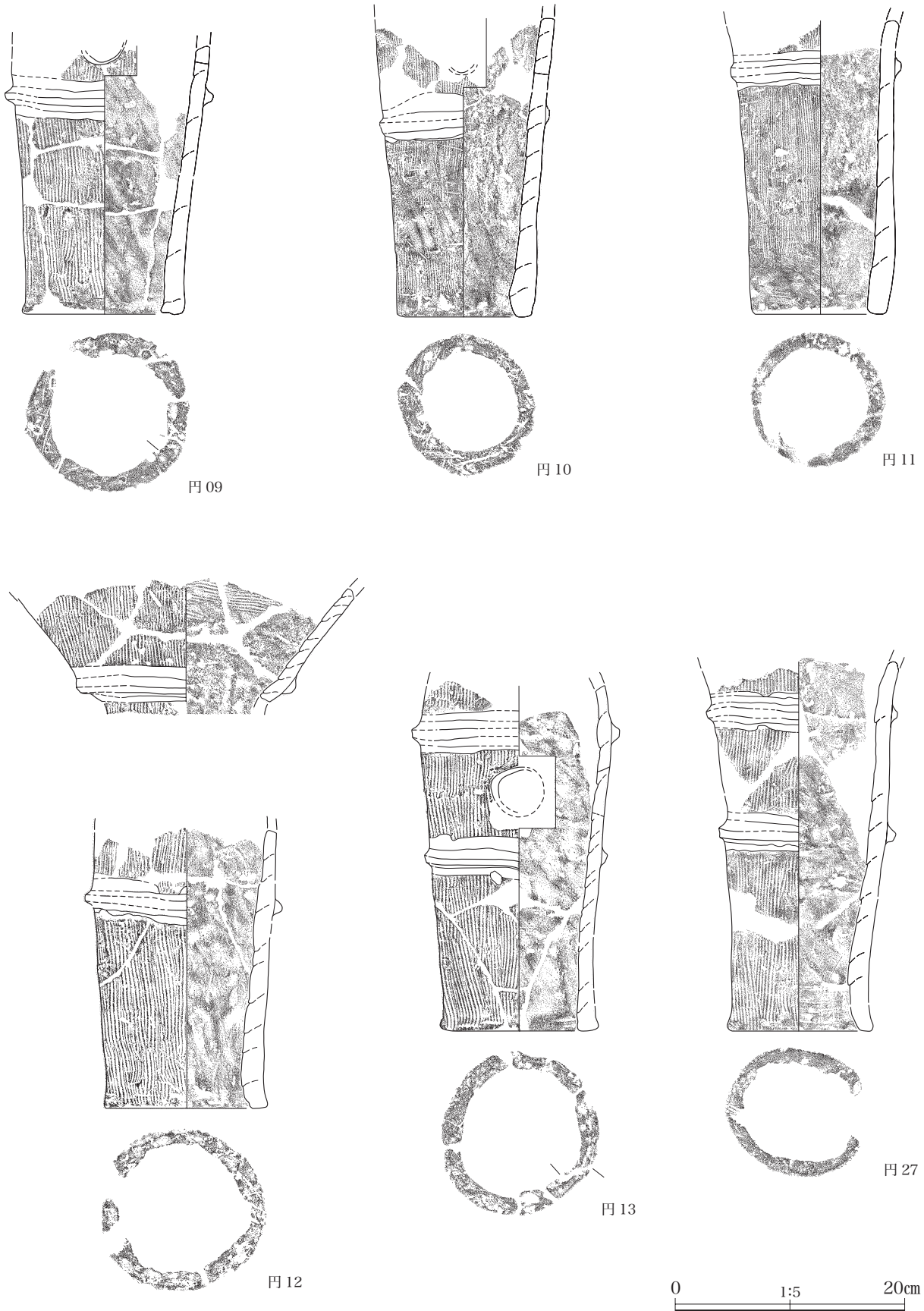


図 146 墳裾部出土 円筒埴輪 (2)

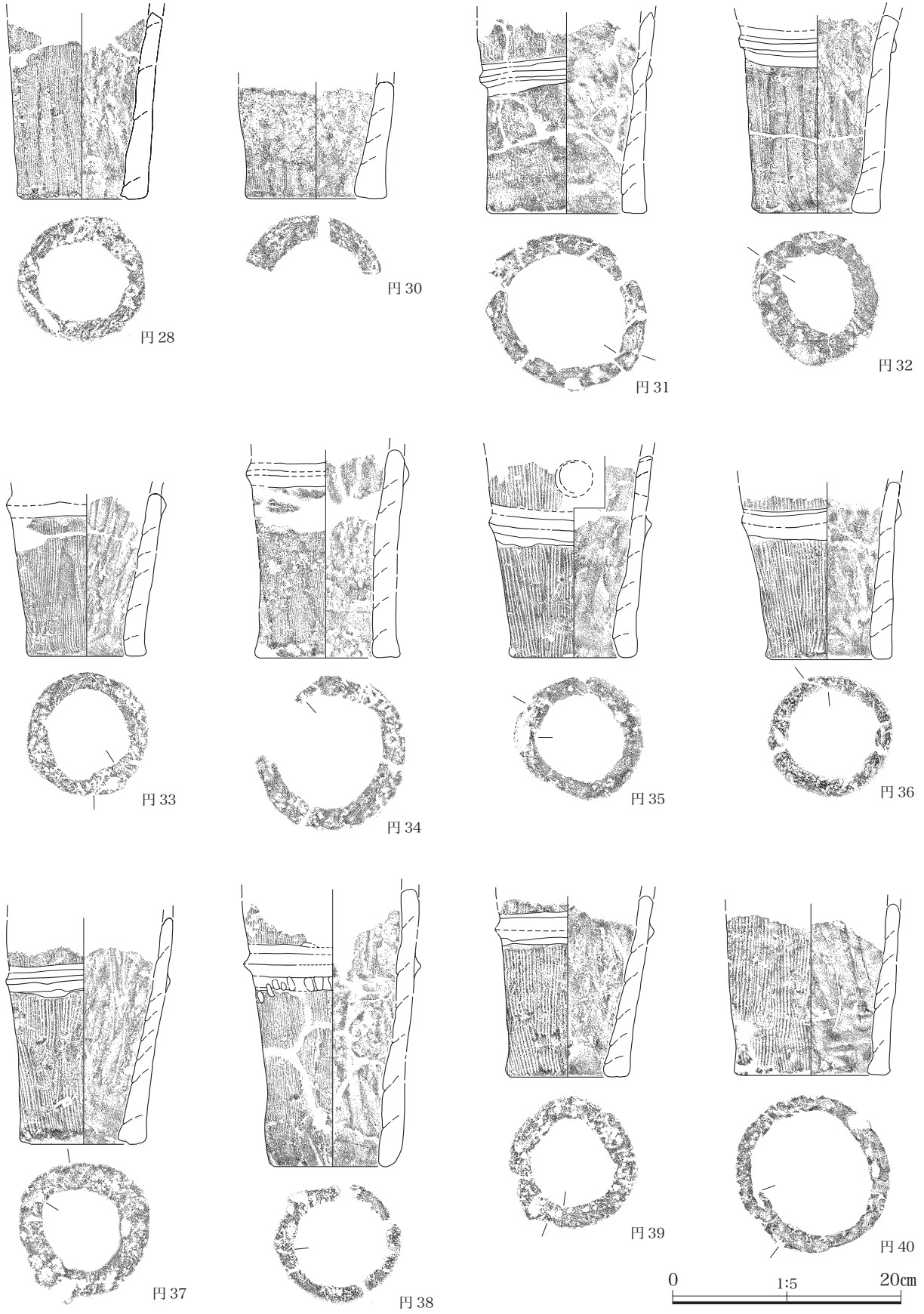


図 147 墳裾部出土 円筒埴輪 (3)

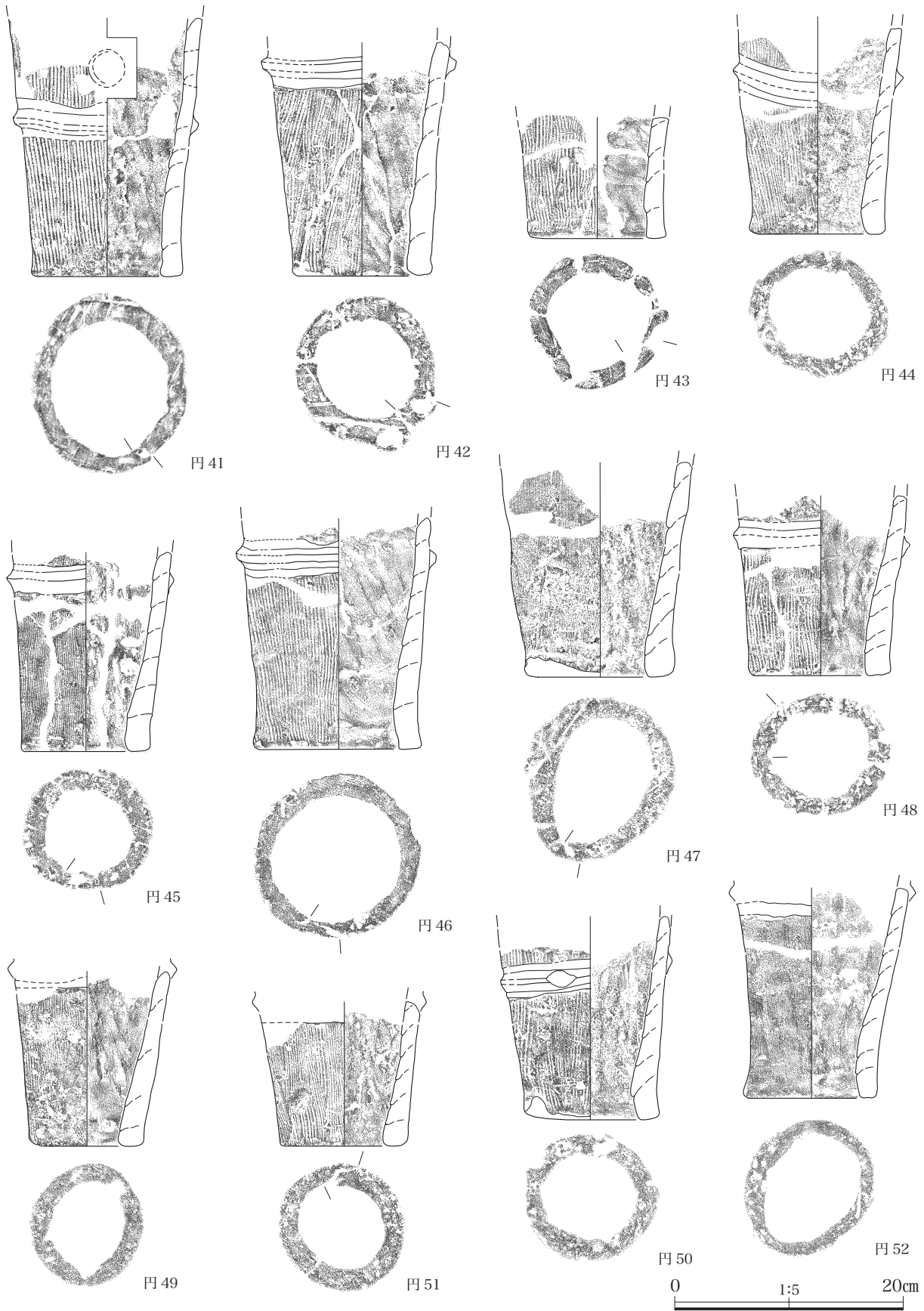


图 148 墳裾部出土 円筒埴輪 (4)

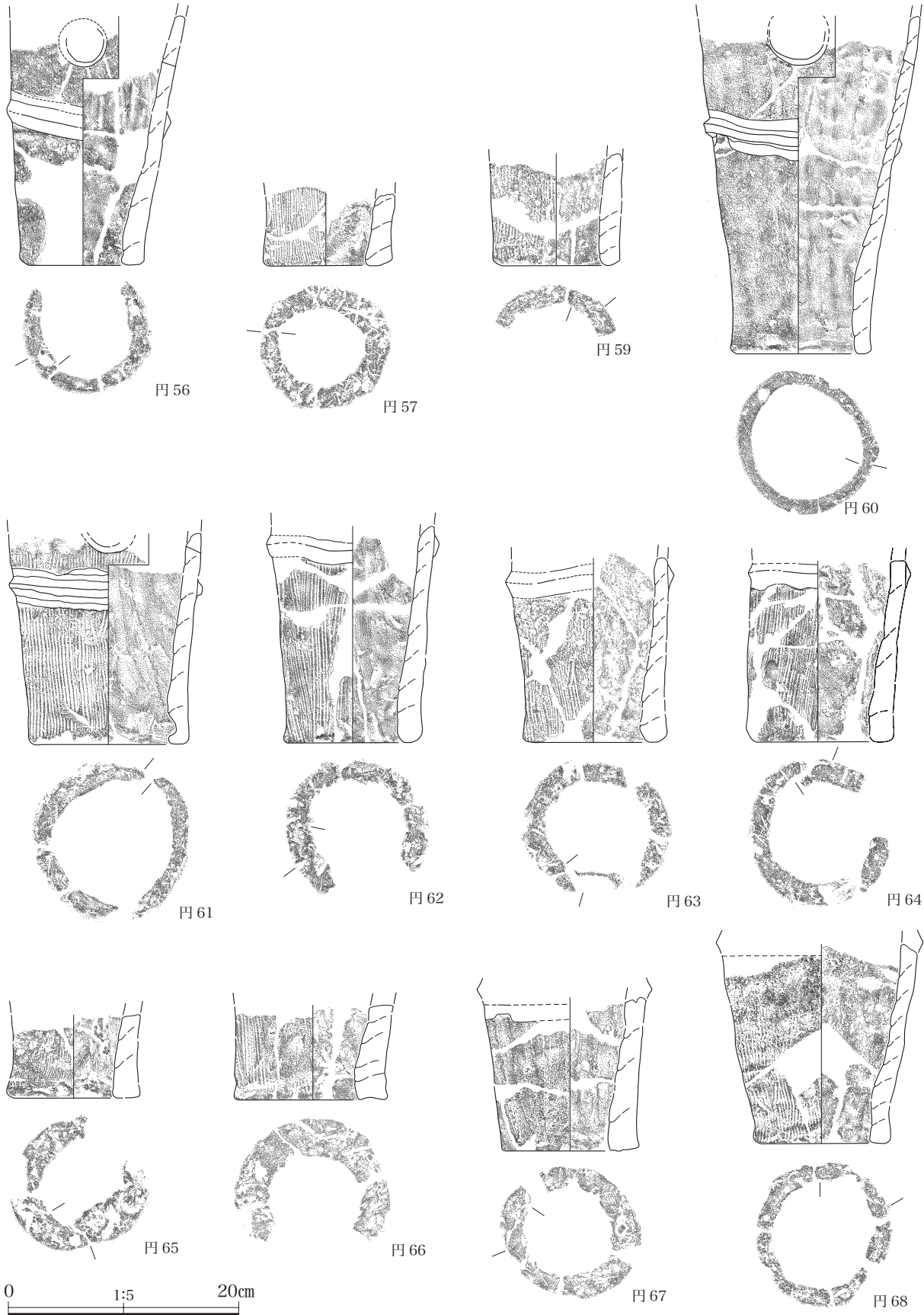
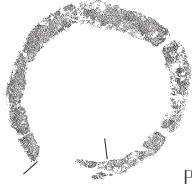
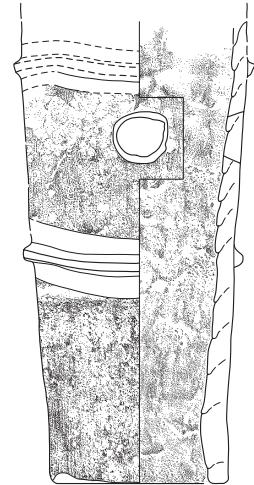
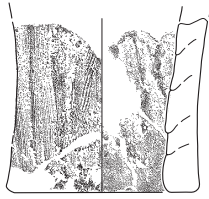
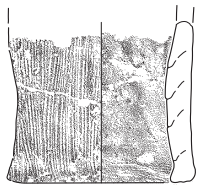
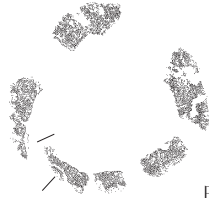


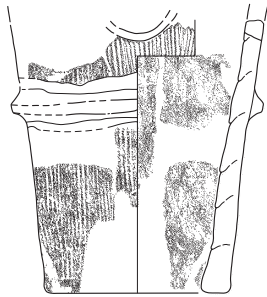
図149 墳裾周辺部出土 円筒埴輪(1)



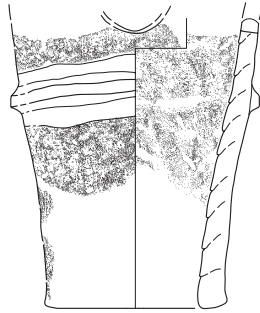
円 69



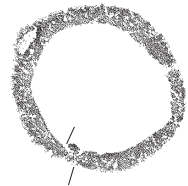
円 70



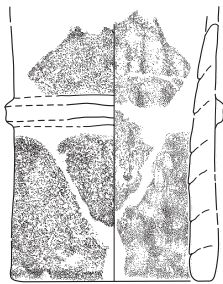
円 72



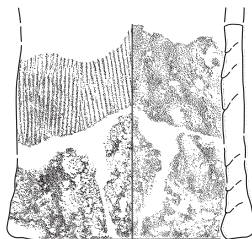
円 73



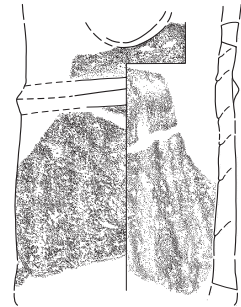
円 71



円 75



円 76



円 74

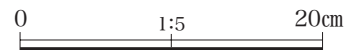
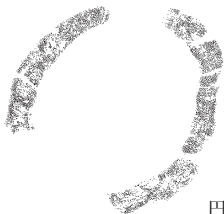


図 150 墳裾周辺部出土 円筒埴輪 (2)

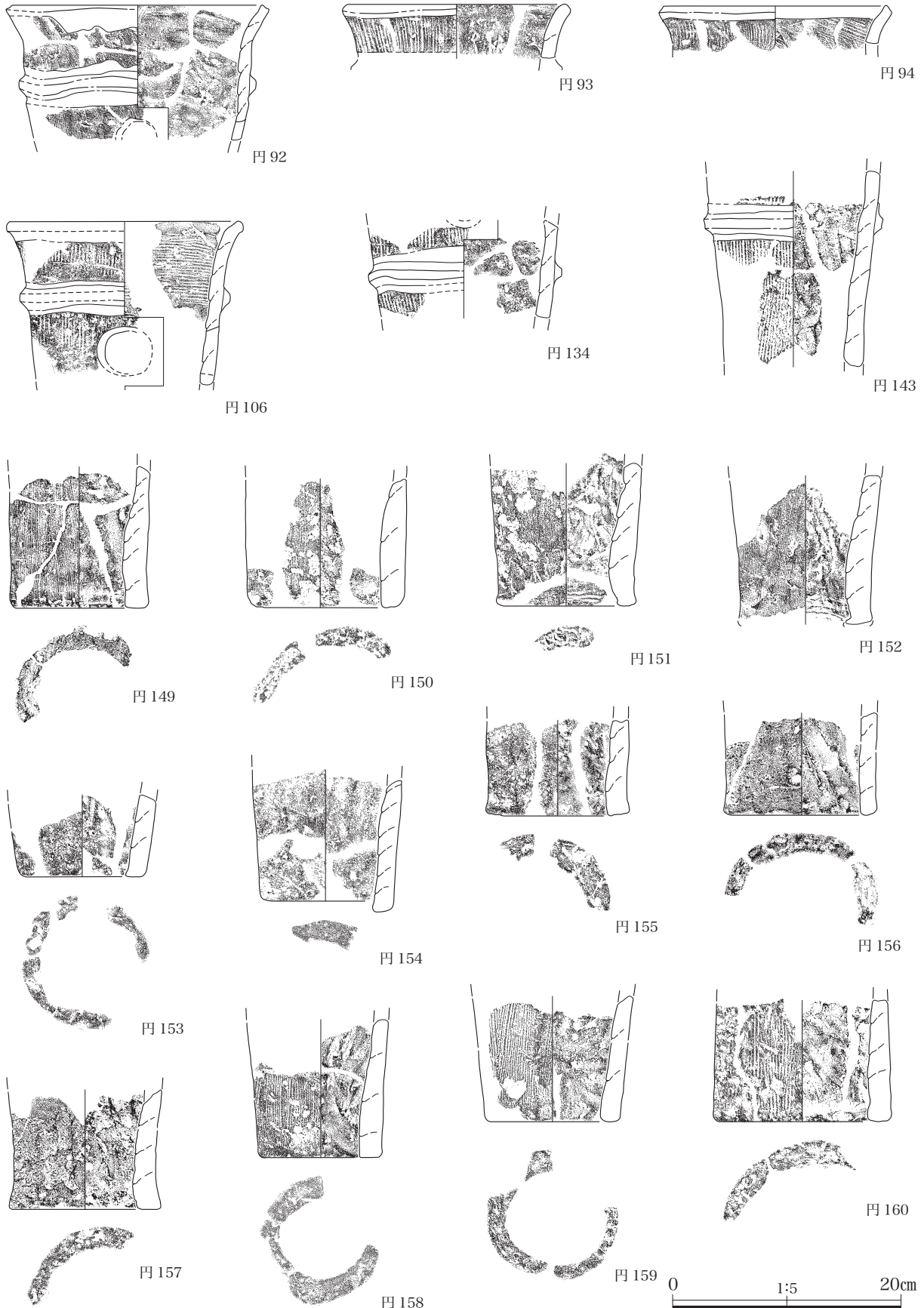


図151 墳裾周辺部出土 円筒埴輪(3)



図 152 墳裾周辺部出土 円筒埴輪 (4)

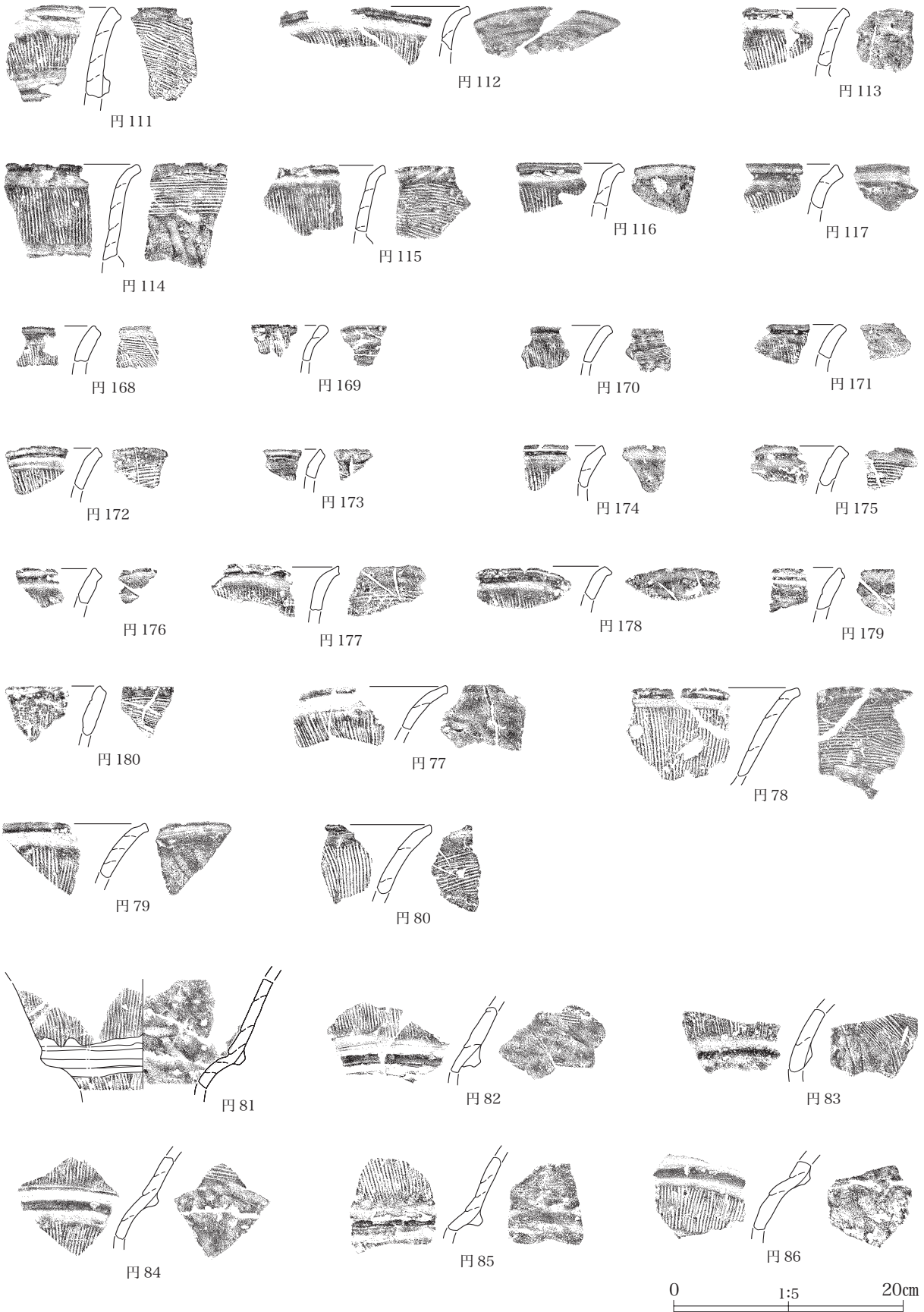


図153 埴裾周辺部出土 円筒埴輪(5)

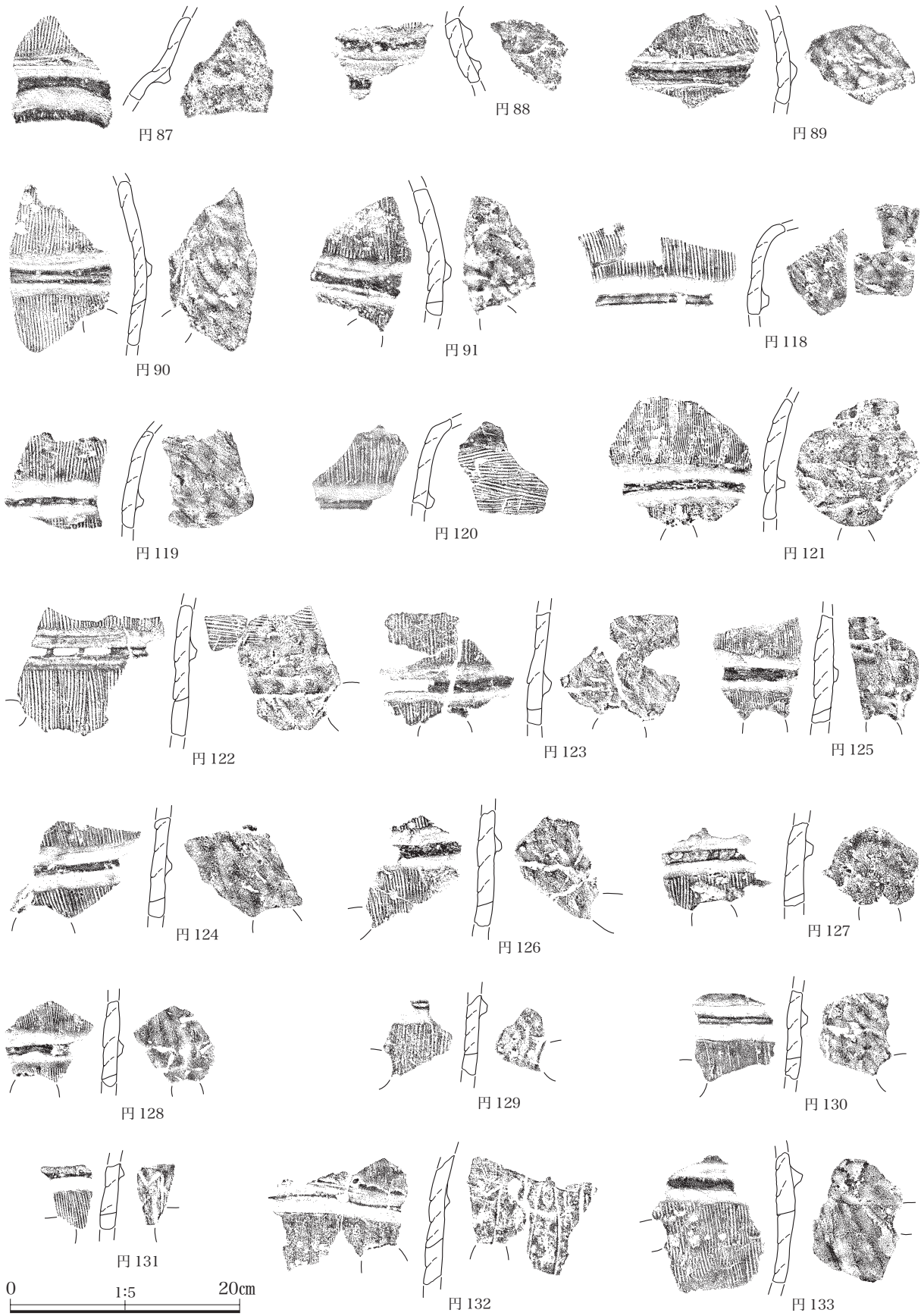


図 154 墳裾周辺部出土 円筒埴輪 (6)

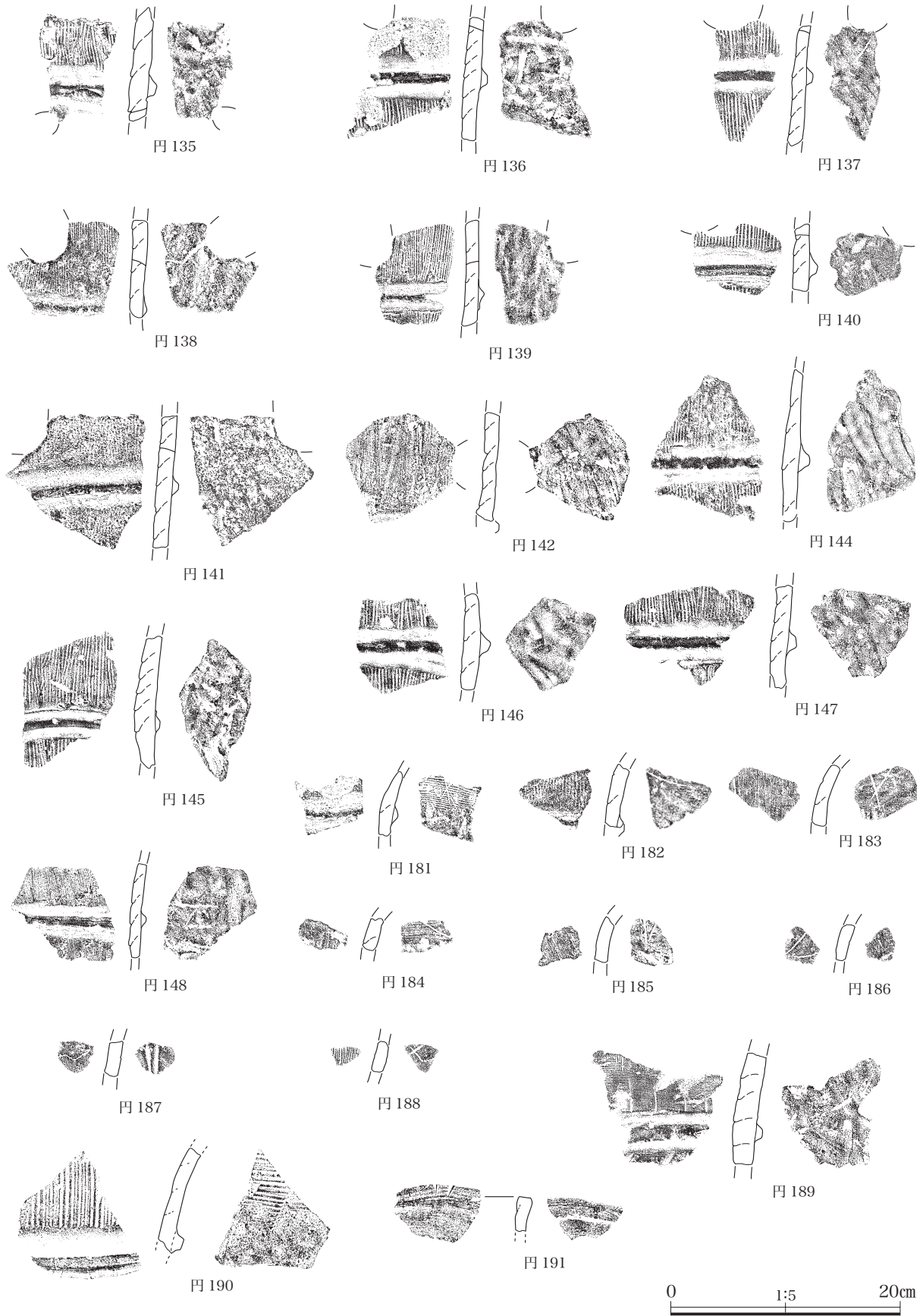


図 155 埴裾周辺部出土 円筒埴輪 (7)

(3) 形象埴輪

a. 形象埴輪基部

形態的特徴 出土円筒埴輪の中には円筒形状が底部から寸胴状に立ち上がり、底部から 20cm 程度上の位置においても突帯がない資料がある。また、残存高が 10～15cm 程度であるものの、底部に山形の切り込みを有する資料もある。これらの形態的特徴は普通・朝顔形円筒埴輪とは明らかに異なるものであり、形象埴輪の基部と考えた。但し、その種類については 21 (a～d)・22 (a～d)・23 (a～d)・25 (a～c) が馬形の足、77 が人物の基部と考えられる以外は、形式は不明である。

法量 器高は不明である。底部径は 10.2～17.4cm の範囲で認められるが、① 10～12cm、② 14.5～15.5cm、③ 17.0cm の 3 種類に分別できる。なお、1 条目の突帯位置はそれが確認できる資料を見る限りは、底部から 28.0cm 程度上で認められる。

技法の特徴 外面調整は、全てが「タテハケを施す」ものであり、底部調整を施すものはない。内面調整は、全てが「タテナメナデを施す」ものであり、その後底部位置にのみヨコナデを施す資料が極めて客体的に認められる。なお、内面に輪積み痕が明瞭に確認できるものは多い。

刷毛目の単位には概ね 3 種類が認識でき、幅 2cm あたり約 7～9 本のもの、約 18～20 本のもの、約 25～27 本のものに大別できる。

突帯 突帯が確認できる資料は 1 点のみであるが、それによれば、断面形は「扁平な台形」である。

透孔 「円形」を呈すると考えられる。

線刻・切り込み 線刻は認められない。切り込みについては、底部付近に山形の切り込みを入れている資料がある。この切り込みは比較的雑で、刀子等で切り取った痕跡が明瞭に認められる。

混入鉱物 胎土中にはチャートや凝灰岩の混入が極めて目立つ。(深澤)

b. 人物埴輪

人物埴輪は頭部から基部までが個体として復元可

能となった資料はない。但し、個体数把握が可能な部位破片で、識別できる個体数は次のとおりである。口で 6 (または 7) 個体、垂飾付き耳で 5 個体、美豆良で 5 個体、つぶし島田髷で 3 個体、鼻で 4 個体、目で 9 (または 10) 個体である。したがって、垂飾付耳 5 個体+美豆良 5 個体で、最低 10 個体の人物埴輪が存在したことが考えられる。

髷 (人 4～7・24～31) 人 4～7 は「つぶし島田」を表現したと推定される。平面形は一对辺が括れる長方形を呈するものといえ、いずれの資料にも片面に頭部との接合箇所の剥離痕が認められる。人 4 では結び紐を表現した粘土紐の貼付が、人 6 では櫛表現が形骸化した粘土帯の貼付が、それぞれ認められる。なお、人 4 と人 7 は同一個体の可能性がある。人 24・29～31 は上げ美豆良であり、人 25～28 は下げ美豆良である。うち、人 24・26・28 は結髪の表現もある。

技法的には人 4・5・7 はハケを施し、人 6・24～31 はナデを施す。なお、人 29～31 には幅 1.5cm ほどの扁平板を差し込んだ状痕跡がある。色調はいずれも橙色。焼成はやや良好である。胎土はやや砂質であり、チャートや凝灰岩片の混入が目立つ。

頭 (人 8・9) 人 8 は被り物を表現した頭部である。頭頂部から線刻による直線文が放射状に垂下すると考えられる。人 9 は詳細部位は不明である。

技法的には、いずれも外面にはハケを施し、内面にはナデを施す。焼成はやや不良である。胎土はやや砂質であり、チャートや凝灰岩片の混入が目立つ。

顔 (人 1～3・10～23) 人 1 は女子埴輪の頭部片で、頭部から顎部までが残存する。頭部の表現として頭髪は残存していないものの額部上端の形状から、本来はつぶし島田髷が存在したものと考えられる。顔部の表現としては、眉は細眉表現され、目は右目尻の痕跡が認められる程度、鼻は欠損のために不明である。口は横長水平に表現され、顎はやや丸みを帯びつつもシャープに表現されている。耳は環状に表現され、その直下には、ほぼ同規模の耳環が

表 46 成塚向山2号墳出土 形象埴輪・基部 観察表

【形象埴輪・基部 観察表 凡例】各項目については【円筒埴輪観察表 凡例】に準ずる。

円筒 番号	図版 番号	種類	出土 位置	法量	器面調整	ハケ本数 (本数/2cm)	透孔	色調	備考
0	図 156 PL70	形象 基部	墳頂部 攪乱土内	残高 33.2 底径 14.5	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	円	橙	胎土分析 No.16
14	図 156 PL70	形象 基部	埴輪列 14	残高 31.0 底径 15.0	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	円	橙	胎土分析 No.1
15	図 156 PL70	形象 基部	埴輪列 15	残高 19.6 底径 14.5	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	黄橙	
16	図 156 PL70	形象 基部	埴輪列 16	残高 18.7 底径 15.0	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	黄橙	
17	図 156 PL70	形象 基部	埴輪列 17	残高 21.6 底径 14.5	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	黄橙	
18	図 156 PL70	形象 基部	埴輪列 18	残高 24.5 底径 15.0	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	黄橙	
19	図 156 PL70	形象 基部	埴輪列 19	残高 26.8 底径 15.3	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。後、底部のみヨコナデ。	外：7～8 内：-	-	橙	
20	図 156 PL70	形象 基部	埴輪列 20	残高 25.3 底径 17.4	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。後、底部のみヨコナデ。	外：7～8 内：-	-	橙	
21a	図 157 PL70	馬形	埴輪列 21a	残高 8.2 底径 12.2	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：8～9 内：-	-	黄橙	
21b	図 157 PL70	馬形	埴輪列 21b	残高 20.3 底径 11.8	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	橙	胎土分析 No. 5
21c	図 157 PL70	馬形	埴輪列 21c	残高 12.0 底径 11.6	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：9～10 内：-	-	黄橙	
21d	図 157 PL70	馬形	埴輪列 21d	残高 11.8 底径 12.2	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	黄橙	
22a	図 157 PL70	馬形	埴輪列 22a	残高 13.7 底径 10.5	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：6～7 内：-	-	橙	胎土分析 No. 6
22b	図 157 PL70	馬形	埴輪列 22b	残高 17.3 底径 10.2	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：8～9 内：-	-	にぶい 黄橙	
22c	図 157 PL70	馬形	埴輪列 22c	残高 18.3 底径 11.6	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。底部調整？	外：7～8 内：-	-	黄橙	
22d	図 157 PL70	馬形	埴輪列 22d	残高 9.2 底径 11.0	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナデ。	外：7～8 内：-	-	黄橙	
23a	図 158 PL71	馬形	埴輪列 23a	残高 13.6 底径 12.1	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	明黄褐	胎土分析 No. 7
23b	図 158 PL71	馬形	埴輪列 23b	残高 34.0 底径 11.2	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：8～9 内：-	-	明黄褐	
23c	図 158 PL71	馬形	埴輪列 23c	残高 21.4 底径 11.4	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	黄橙	
23d	図 158 PL71	馬形	埴輪列 23d	残高 15.4 底径 11.8	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	黄橙	
24	図 158 PL71	形象 基部	埴輪列 24	残高 18.8 底径 17.2	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	橙	
25a	図 159 PL71	馬形	埴輪列 25a	残高 21.5 底径 13.2	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	浅黄	胎土分析 No. 8
25b	図 159 PL71	馬形	埴輪列 25b	残高 16.5 底径 12.5	外：タテハケ。山形の切り込み有 (細かい刷毛と粗い刷毛を併用) 内：タテナメナデ。	外：7～8 :18～20 内：-	-	浅黄	
25c	図 159 PL71	馬形	埴輪列 25c	残高 7.0 底径 12.1	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。	外：8～9 内：-	-	明黄褐	
26	図 158 PL71	形象 基部	埴輪列 26	残高 24.3 底径 13.2	外：タテハケ。山形の切り込み有 内：タテナメナデ。後、底部のみヨコナデ。	外 25～27 内：-	-	明黄褐	胎土分析 No. 3
54	図 159 PL71	形象 基部	埴輪列 54	残高 24.6 底径 13.2	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	円	明黄褐	胎土分析 No. 4
55	図 159 PL71	形象 基部	埴輪列 55	残高 9.9 底径 12.6	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：24～26 内：-	-	明赤褐	
58	図 159 PL71	形象 基部	埴輪列 58	残高 12.0 底径 11.6	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：9～10 内：-	-	橙	
77	図 159 PL71	人物	516-255	残高 17.5	外：タテハケ後、幅約2.0cmの粘土紐を貼付。 内：タテナメナデ。	外：8～9 内：-	-	橙	
78	図 159 PL71	形象 基部	525-243	残高 20.4	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：7～8 内：-	-	橙	
79	図 159 PL71	形象 ?	515-248 518-257	残高 8.8	外：タテハケ。 内：タテナメナデ。	外：8～11 内：-	-	黄橙	

存在していたものと考えられる。なお、人23の耳片はその形状特徴を考慮すると人1と同一個体の可能性がある。

技法的には、頭部は幅0.9～1.5cmの粘土紐を積み上げることにより卵形の頭部を形作り、その後、外面はナデで丁寧に整形されているが、内面はわずかなナデ調整が施されているのみである。顔面は卵形の頭部に顎部を表現するための粘土塊を貼り付け、丁寧に撫で付けることによって、丸みを帯びたフェイスラインを作り出している。目・口・耳は外面からの穿孔によってつくられている。色調は赤褐色。焼成はやや硬質。胎土中には石英・赤褐色粒子・輝石が確認できるが、特に輝石の混入具合が目立つ。

人2は女子埴輪の頭部片で、頭部から顎部までが残存する。頭部の表現として頭髪は残存していないものの額部上端の形状から、本来はつぶし島田髷が存在したのと考えられる。目は横長水平の目が表現されている。眉と鼻は欠損のため不明である。頬は丸みがなく平面的であり、顎はやや丸みを帯びているが、その輪郭は弱いシャープさをもって表現されている。耳は環状で、真ん中には縦長の耳穴が表現されている。さらに、その直下には、ほぼ同規模の耳環が存在していたものと考えられる。顎部には首飾りの表現がある。

技法的には頭部は幅1.0～2.0cmの粘土紐を積み上げることにより縦長卵形の頭部を形作り、輪積み後は、外面顔面部はナデで丁寧に整形され、外面後頭部および側面部はタテハケのみの調整である。内面はわずかなナデ調整が施されているのみである。顔面は卵形の頭部に顎部を表現するための粘土塊を貼り付け、丁寧に撫で付けることによって、丸みを帯びたフェイスラインを作り出している。目・口・耳は外面からの穿孔によってつくられている。色調は橙色。焼成はやや良好。胎土はやや砂質であり、チャートや凝灰岩片の混入が目立つ。

人3は女子埴輪の頭部片で、眉間付近と右顎～耳部のみが残存する。顔部の表現としては、眉は細眉

に表現されている。耳は環状に表現され、さらにその直下にはほぼ同規模の耳環が表現されている。顎はやや丸みをもった輪郭が表現されている。また、少ない残存部分からではあるが、目は横長水平であることが、鼻は高い鼻であったことが推測される。

技法的には、頭部は粘土紐を積み上げることにより卵形の頭部を形作り、その後、外面はナデで丁寧に整形され、内面はわずかなナデ調整が施されている。顔面は卵形の頭部に顎部を表現するための粘土塊を貼り付け、丁寧に撫で付けることによって、丸みを帯びたフェイスラインを作り出している。目・口・耳は外面からの穿孔によってつくられている。色調は橙色。焼成はやや良好。胎土はやや砂質であり、チャートや凝灰岩片の混入が目立つ。

人10・12・16・21は額部の破片であり、人12は櫛・眉・目、人16は眉・目、人21は鼻頭の表現がそれぞれ残存する。人11・13～15・17～20・22は顔面部の破片であり、人15では眉・目・鼻、人19では目・鼻・口、人17では目・口・耳・顎、人14では口・顎、人13では口と顎、人11・18では口・顎・耳飾り、人22では耳の表現が認められる。なお、人20は顔面と思われるが、表現されたものが目か口かは判断しづらい。

技法的には外面は丁寧なナデを施し、内面は粗いナデを施すことを基本としている。但し、人11・17については外面の顎～首筋にかけてはハケが施されている。各部位は人11・13・14・17～19・21はいずれ板状粘土を貼りつけることで、顔面部を形作っており、眉・鼻・耳・耳飾り等も粘土塊または粘土紐の貼り付けによる。また、目・口・耳孔は穿孔による。色調はいずれも橙色。焼成は人10～19・21ははやや良好で、人20のみがやや不良である。胎土はやや砂質であり、チャートや凝灰岩片の混入が目立つ。

首・肩・胸（人32～41） 人32～39は首から胸・肩部にかけての破片であり、うち人32～36・39には首位置に首飾りの表現がある。加えて、人32は左腕の付け根部分までが残存する。人40

は胸部の破片であり、乳房の表現がある。人41はうなじ部の破片であり、垂髪表現の粘土帯が剥離した痕跡が認められる。

技法的にはいずれも外面はナデ後ハケを施しており、首飾り表現のあるものは円形粘土を、乳房表現のあるものは粒状粘土をそれぞれ貼付している。内面はナデを施している。なお、人32での腕は棒状粘土を胴部に差し込む、中実技法を用いている。色調は橙色。焼成はやや硬質。胎土はやや砂質であり、凝灰岩片・長石・輝石・チャートの混入が目立つ。

腕・手(人42～66) 人42・43は肩から手までが残存しており、その所作が明確である。人42は胸部の乳房の表現もあり、その乳房に右手を添える所作が確認できる。また、人43は肩部に襷表現が残存し、右手の形状から腰帯に手を添える所作が確認できる。人44も肩から手までが残存しており、右手の五指表現も明確である。さらに、その手には棒状(円弧状?) 器物を握りしめる表現が認められる。人45は左腕の曲げた状態の所作を想定できるが、手の部分が欠損しており詳細は不明である。人46はかなり太めの左二の腕部分のみの残存であり、曲げた表現が想定される。人47は短い腕で、左腕の曲げた状態の所作を想定できる。手の甲までは残存しているが五指部分は欠損している。但し、剥離痕や五指の欠落状況からは、腰に手をあてた所作が想定できる。人48も短い腕で、右腕と想定できるが、手は欠損している。人49は腕の付け根から手の甲までが残存している。長い腕であり、右腕の曲げた状態が確認できる。剥離痕や五指の欠落状況からは、手を腰にあてた所作が想定できる。人50は襷表現が認められる、かなり太めの右二の腕部分のみの残存であり、曲げた表現が想定される。人51は短い腕で、五指は欠損しているものの、左腕と想定できる。人52は腕の付け根から手の甲までが残存している。長い腕であり、左腕の曲げた状態が確認できる。剥離痕や五指の欠落状況からは、手を腰にあてた所作が想定できる。人53は左腕の付け根から脇にかけてが残存しており、手を前に差

し出す所作が推定される。人54～56はかなり太めの二の腕部分のみの残存であり、左腕と推定されるが、右腕かもしれない。人57・58は右手首から甲にかけての破片であるが、五指は欠損している。人59は短い腕の破片で、腕の付け根から手の甲までが残存しており、五指の欠損状況から左腕と推定される。人60も短い腕の破片であり、五指は欠損しているものの、その破片形状から右腕と推定される。人61は短い腕の破片で、五指の欠損しているが、残存状況から左腕と推定される。人62は右手首から甲にかけての破片である。人63は右手の破片であり、短く幅広の形状を呈している。親指部分は欠損しているものの、他の4指の表現は線刻で明確になされている。人64も右手の破片であるが、何か器物を握るような、手をまるめた表現がなされている。人65は棒状器物を握りしめた表現がなされた左手の破片である。人66は左手と推定される破片であり、短く幅広の形状を呈している。親指部分は欠損しているものの、他の4指の表現は線刻で明確になされている。

技法的にはいずれもナデを施しており、人44・46・47・54・55・60ではハケも施されている。なお、人42・53の胴部にもナデに加えて、ハケが施されている。胴部への腕の接合部が残存する資料は、人42～46・49・52・53・55・56(32も相当)であるが、全て中実技法を採用している。人43・50に認められる襷表現や人42にみとめられる乳房表現は、いずれも粘土紐や粘土粒の貼付によるものである。色調はいずれもにぶい赤褐色～橙色を呈する。焼成はやや良好であるが、器面の荒れがひどいものは著しく不良に感じられる。胎土はやや砂質であり、凝灰岩片や大粒のチャートが極めて目立つ。

腰・裾(人67～116) 人67・73・75・102・103・115は腰部の表現のある破片である。67・73・75・102は幅1.0～1.5cmの腰帯表現がなされており、うち人73については結び緒の表現もされている。人103は幅3.0cmの紐端表現の破片と思われるが、馬具の繫表現の可能性もある。人115

は幅 2.0cm ほどの逆 C 字形を呈しており、腰に装着した鎌の表現と思われる。人 68・72・74・76・80・84・105・106・108 は裾部表現のあるもののうち、円筒部のとの接合状況が確認できる資料である。うち人 74 については幅 3.5cm ほどの装着物が認められる。裾部の表現はその形状が良好に分かるものの中においても 3 分類できる。1 つめは、体部からの突出が断面長三角形を呈するものであり、人 71・77・78・80・84・105・108 がそれに相当する。2 つめは、体部からの突出が断面正三角形に近い形状を呈するものであり、人 68・79 がそれに相当する。3 つめは、体部から裾部のみ断面長四角形状に局部的に突出するものであり、人 70・76・106 がそれに相当する。人 81・83・85・101・104・107・109・114・116 はいずれも体部から剥離した裾部表現の破片である。

技法的にはその状況が把握できる資料については、いずれも円筒状の体部に裾部表現の粘土を貼り付けており、外面はナデ後タテハケを施して、内面はナデを施している。色調はいずれもにぶい赤褐色～橙色を呈する。焼成はやや良好であるが、器面の荒れがひどいものは、著しい不良に感じられる。胎土はやや砂質であり、凝灰岩片や大粒のチャートが極めて目立っている。(深澤)

c. 馬形埴輪

頭(馬 1～21) 馬 1 は同一個体と考えられる頭部片を復元したものである。形状的特徴としては次の通りである。鬣は板状であり、断面は上端部が僅かに肥厚化する。鬣先端の突起は明確に表現されていないものの、板状の先端部が僅かに肥大する。頭部の断面は「逆 U 字」形であるが、口先部分のみ筒形を呈している。鼻は穿孔によって鼻孔が表現されており、目は削り抜きによって表現されている。口は、口先の側面に切り込みを入れることによって表現されている。馬具表現は次の通りである。鏡板・面繫・引手の表現があるが、鏡板は素環鏡板であり、巾約 1.0cm の粘土帯を弧状に貼付することで表現している。面繫は巾 2.5cm の粘土帯を貼付

することで表現されており、辻金具の表現も認められる。引手は巾約 1.0cm の粘土紐を貼付することで表現されており、端部は粘土紐を弧状に纏めることにより、引手壺を表現している。技法的特徴としては次の通りである。頭部外面は丁寧なナデ調整が施されている。鬣部分のみはハケ調整を施している。内面は不定方向のナデ調整を施している。この頭部はまず、断面「逆 U 字」形の頭部本体部分を輪積みで形作り、両頬部は板状粘土を貼付させることで形成し、その後、鬣や馬具を表現する粘土板や粘土紐を貼付したものと考えられる。赤彩の有無は器面全体の剥落が多く、確認できない。馬 2～5 は板状に表現された鬣と考えられる。いずれも先端の突起の明確な表現はないものの、馬 2・5 では板状の先端部を僅かを肥大させ、膨らんだ表現がなされている。また、馬 2・5 では上端部が単純な弧状を呈するのではなく、段を有する形状を呈している。馬 6 は鼻先と考えられる。形状は曲面を呈し、表現としては直径 1.0cm ほどの孔(鼻孔)が並列して 2 つあく。馬 7・8・11・13 は目と考えられる。いずれも器面は極めて緩やかな曲面を呈し、直径 2.0～3.0cm の孔があく。なお、馬 13 は、面繫と思われる表現が伴うことから、目と考えて問題ないが、馬 7・8・11 は耳孔の可能性も残している。馬 9・10・12 は顔の頬部分である。馬 9 では引手(引手壺を含む)を表現した幅 1.0cm の粘土紐を貼付する。また、馬 12 では、鏡板・面繫・引手と思われる粘土帯の貼付と剥離痕が認められる。馬 14 は顔の右側面と思われ、目を表現した孔と、面繫および引手(引手壺を含む)を表現した粘土紐を貼付する。馬 15～18 は面繫の表現をもつ頭部である。いずれも幅 2.5cm 程度の粘土紐を貼付することで、面繫を表現している。なお、馬 15 では繫の上に 2.5cm×3.0cm の方形板の剥離痕が認められ、馬 16 では面繫表現の脇に目孔と思われる表現が認められる。また、馬 17・18 では、辻金具表現の粘土塊を貼付(または剥落の痕)している。馬 19～21 は頭部と思われる破片である。馬 19 は頭の口先部と推定で

き、面繫と思われる巾2.5cmの粘土帯が貼付する。馬20は左目付近と推定でき、緩やかな曲面を呈する。馬21は目と思われる直径約3.0cm程度の孔があく痕跡があり、外面には粘土帯の剥離痕が認められる。

技法的には、いずれもナデによる整形を行っているが、馬2・3・5・6・9・12・14・19・20では外面に6～8本/2cmのハケを、さらに馬9・20では内面にも同種のハケを部分的に施している。また、面繫や引手などの馬具の表現するための粘土紐等の貼付に際しては弱いナデを施す程度である。なお、赤彩は、馬13において面繫表現の粘土周辺に施されているのみである。

色調は橙色～黄橙色を呈する。焼成はやや不良のものが多い。胎土も砂質っぽいものも多く、含有鉱物としては、白色粒子（凝灰岩片?）・チャート・輝石が目立つ。

頸～胸 (22～52) 馬22・26は面繫表現のある首部片を考えられる。緩やかな曲面を呈し、外面には巾約1.5～2.0cmの粘土帯が貼付する。馬24・29・31・34・35は手綱表現のある首部片と考えられ、緩やかな曲面を呈し、手綱を表現する巾1.5cm程度の粘土帯を貼付する。馬23・25・27・28・30・36は手綱の表現がある背部片である。緩やかな曲面を呈し、手綱を表現する巾1.5cm程度の粘土帯を貼付する。馬32・33は体のどの部位かは特定できないものの、手綱を表現する粘土帯の貼付が認められる。馬37は、手綱または胸繫の表現のある体部片である。馬38は何らかの馬具の表現が施されていた背部片と思われる。馬39～52は、胸繫の表現のある胴部片である。いずれも胸繫を表現する幅3.0～3.5cm程度の扁平な粘土帯を貼付し、あるいはその剥離痕が認められる。このうち、馬39では、緩やかな曲面を呈する胴部の外面に貼付された胸繫の一部に、垂下する飾り具が剥落した痕跡が認められる。馬40では胸繫上に鈴が剥落した痕跡が認められる。馬42では、巾3.5cmの粘土帯が2条あり（内1つは剥離痕）、さらにその1

本からは直交する方向に粘土帯が連続している。馬45は、胸繫表現の粘土上に別の粘土帯が貼付されており、その形状からは、鞍部との連結部またはそれに近い部分と考えられる。

技法的には、外面においてはナデ後、6～8本/2cmのハケを施し、内面においてはナデを施す。但し、馬31では内面にもナデ後、部分的にハケを施している。胸繫を表現するための粘土紐の貼付に際しては弱いナデを施す程度である。なお、赤彩は認められない。

色調は橙色～黄褐色を呈する。焼成はやや不良のものが多い。胎土も砂質っぽいものも多く、含有鉱物としては、白色粒子（凝灰岩片?）・チャート・輝石が目立つが、馬43・44においては片岩も認められる。

胴～腹部 (53～68) 馬53・55は胴部片であり、緩やかな曲面を呈する。馬54・56～60・63・64・66～68は腹部片である。扁平な面をもち、端部で緩やかに屈曲する形状を呈する。うち、馬54・57は足の付け根に近い部分の腹部と思われる、破片が複雑に屈曲している。馬59は断面観察において、2枚の板状粘土が貼り付けてある状況が確認できる。馬66・67は馬具の表現と思われる帯状粘土帯の貼付が認められる。馬62・65・68は腹部と思われる体部片である。いずれにも、馬具を表現する粘土帯の剥離痕が認められる。馬61は断面V字に屈曲する形状を呈しており、おそらく股部の破片ではないかと考えている。

技法的には、外面においてはナデ後、6～8本/2cmのハケを施し、内面においてはナデを施す。但し、馬60・64・66・67では外面のハケが明確には認められず、馬57・60・66では内面にもナデ後、部分的にハケを施している。胸繫を表現するための粘土紐の貼付に際しては弱いナデを施す程度である。なお、赤彩は認められない。

色調は橙色～黄橙色を呈する。焼成はやや不良のものが多い。胎土も砂質っぽいものも多く、含有鉱物としては、白色粒子（凝灰岩片?）・チャート・

輝石が目立つが、馬 55・66 においては片岩も認められる。

背・鞍 (69～102) 馬 69～78 は障泥片、またはそれと推定できる破片である。馬 69～70・72・75・77・78 は障泥縁金具を表現する粘土帯が貼付しており、さらにその粘土帯の上には縫い目の表現の連続刺突が認められる。馬 74・76 は縫い目表現の連続刺突がみとめられるのみである。馬 73 のみは、破片形状が曲面を呈しており、その下部に縫い目表現の連続刺突がみとめられる。

馬 79～81 は同一個体と思われる破片から復元した鞍部である。馬 79 は前輪・後輪と居木の表現・関係が把握できるものがある。前輪・後輪は上端部が弧状を呈し、後輪の背面には尻繫の一部が貼付したまま残存する。居木は 4 本あり、いずれも刺突表現が認められる。馬 80 は鬣・前輪・障泥の一部の表現・関係が把握できるものがある。鬣は板状を呈し、手綱表現が僅かに認められる。前輪は僅かな残存のみであるが、上端部が弧状を呈し、障泥に連続するものと考えられる。障泥は下辺が内反しかつやや大きくなる台形であり、四辺には障泥金具を表現する粘土帯と連続刺突の表現がある。馬 81 は後輪・居木・障泥の一部の表現・把握ができるものである。居木は 1 本あり、刺突表現がある。障泥は上端のみであるが、障泥金具を表現する粘土帯と連続刺突の表現があり、輪籠表現の粘土紐が剥落した痕跡も認められる。さらに障泥端には胸繫表現の粘土帯もみとめられる。

馬 82～95 は前輪または後輪片である。なお、馬 88 は胴部との接合関係が把握できるものとおもわれるが、胴部に居木等の表現が認められないことが気に掛かる。馬 82 は前輪であり、板状の鬣が接合された状態であり、その接合部には手綱端の突起状表現もある。馬 83～87・90～92・94 は板状で、上端は弧状を呈する。馬 89 は後輪であり、背面に尻繫表現と思われる巾約 3.0cm の粘土帯が貼付される。馬 93 は首から前輪にかけてであり、破片は緩やかな曲面を呈し、前輪の剥離痕が認められる。

馬 95 は前輪または後輪の下部と背部の接合部分と思われる。

馬 96～102 は鞍部のうち、上記以外の部位と思われるものである。と思われる。馬 96 は居木、馬 100・101 は障泥縁金具と思われ、ともに粘土紐を貼付し、その上に縫い目の表現の連続刺突が認められる。馬 97～99 は緩やかな曲面を呈し、背部片と思われる。馬 97 は居木表現の粘土紐が剥離した痕跡が認められる。馬 98・99 は居木表現とおもわれる刺突が認められる。馬 102 は板状の破片で、剥離痕が認められる。

技法的には、外面・内面ともにナデを施す。但し、馬 70・71～75・79～81・83・88・97・98・100 では 6～8 本/2cm のハケを、馬 93 では 18～20 本のハケを外面に施し、さらに馬 69・80・81 では 6～8 本/2cm のハケを内面にも施している。障泥や居木などの馬具表現の粘土紐はナデによって貼付されている。なお、赤彩は認められない。

色調は橙色～黄橙色を呈する。焼成はやや不良のものが多い。胎土も砂質っぽいものも多く、含有鉱物としては、白色粒子（凝灰岩片?）・チャート・輝石が目立つが、馬 87 では片岩も認められる。

尻 (103～114) 馬 103～106 は尻繫の表現がある尻部片であり、幅 2.5～3.4cm の扁平な粘土紐で尻繫の表現がなされている。うち馬 105 では V 字状に 2 本の尻繫表現（1 本は剥離痕のみ）があり、馬 106 では逆 T 字状に 2 本の尻繫表現がある。なお、馬 107～109 では尻繫表現は残存せず、その剥落痕のみが残存している。

馬 110～114 は尻尾・尻孔表現のある尻部片であり、尻尾はいずれも中空である。馬 110・111 は尻部と尻尾が連続するものであり、尻尾は上向きである。うち馬 111 では尻尾周りに尻繫の表現が伴っている。馬 112・113 はいずれも尻尾先端のみの破片である。馬 114 は尻孔が表現されている。

技法的には、外面はナデ後、6～8 本/2cm のハケを施し、内面はナデのみを施す。但し、馬 114 では外面のハケが明確には認められない。尻繫を表

現するための粘土紐の貼付に際しては弱いナデを施す程度である。なお、赤彩は認められない。

色調は橙色～黄橙色を呈する。焼成はやや不良のものが多い。胎土も砂質っぽいものも多く、含有鉱物としては、白色粒子（凝灰岩片?）・チャート・輝石が目立つ。

雲珠・辻金具・帯先金具・繫（115～142）

馬115～118は雲珠片で、直径約4.0cmの半球形中空品である。馬115は、縁辺部が緩やかに屈曲し、巾0.5cm程度の粘土紐が貼付されている。馬116・117は縁辺部は緩やかに屈曲しているのみである。なお、馬117・118は半分のみが残存する。馬119～121・137は辻金具片である。馬119は巾2.5cmの繫に、2.5cm×3.0cmの方形板が貼付されており、方形板の四隅には粘土粒の剥離痕が認められる。馬120は2.5cm×3.5cmの方形板であり、四隅には粘土粒の剥離痕が認められる。馬121は2.0cm×3.0cmの方形板であり、二隅には粘土粒の剥離痕が認められる。馬137は2.5cm×3.5cmの方形板であり、方形板の四隅には粘土粒の貼付と剥離痕が認められる。馬122は帯先金具と考えられる2.5cm×4.5cmの粘土板であり、三箇所粘土粒が貼付する。馬123～136・138～142は繫片と考えられる。いずれも幅2.0～3.0cmの範囲に収まる扁平な破片である。なお、馬125・127・141は破片自体が緩やかな弧を呈する。

技法的には、内外面ともナデを施す。なお、明確に赤彩痕跡が確認できるものはない。

色調は橙色～黄橙色を呈する。焼成はやや不良のものが多い。胎土も砂質っぽいものも多く、含有鉱物としては、白色粒子（凝灰岩片?）・チャート・輝石が目立つ。

鈴（1～33） 鈴片は馬具に付属するものと考えられるが、明確にそのことが接合関係によって判明した資料はない。したがって、厳密にいうならば、馬具の一部の可能性をもつ鈴片といえる。

いずれも球形を呈している。直径は2.0～3.5cmの範囲に収まるが、3.2cm前後のものが多い。鈴

口の表現が多くの場合されているが、鈴8・24・26・27ではそれが認められない。いずれも一方に剥落痕跡が認められるが、馬19では繫片（または胴片）と思われる部分もともに認められる。

技法的には、ナデを施し、鈴口を沈線で表現している。色調は橙色～にぶい赤褐色を呈する。焼成はやや不良のものが多い。胎土も砂質っぽいものも多く、含有鉱物としては、白色粒子（凝灰岩片?）・チャート・輝石が目立つ。（深澤）

d. 家形埴輪

家形埴輪については、棟部から基部までが残存し、全長が把握できる個体は存在しない。いずれも破片資料であるが、家形の破片と識別できたものは大小合わせて79点である。そして、資料の状況からは、入母屋造家2個体（またはそれ以上）の識別が可能である。その根拠は、屋根の棟部の表現に2種が確認できるからである。なお、「一体成型型」か「分離成型」かについては不明であった。

屋根・堅魚木（1～62・64・79） 家1・2は屋根下部から身舎にかけての大型破片である。屋根は入母屋構造の下部のみの残存であり、流れの斜度は約30°と急である。残存する壁体の形状からは、長胴化し、隅丸長方形を呈する身舎であると考えられる。窓の表現は未確認である。なお、家1では身舎のコーナー部には巾2.0cmの突帯の貼付が認められる。家3は屋根の流れ部の大型の破片である。障泥板の表現がある。また、文様として横位の直線文とその上下に連続三角文が2段、線刻されている。家4～8は棟部（流れ部の一部を含む）の破片である。軒部には堅魚木が貼付されていたと考えられる剥落痕と、堅魚木を接合させる際にあけた直径0.5cm以下の孔が認められる。また、軒部と流れ部の変換部には巾1.5cmほどの突帯を貼付させている。家9～19・21は屋根の流れ部で障泥板の貼付された破片である。うち、家9には「T」字状、家11には横位の直線文、家14には連続三角文、家19には連続三角文の一部、家12・13・18には横位の直線文とその上下に連続三角文、家20

には縦位の直線文が、それぞれ線刻されている。また、家 19 には棟表現粘土帯の剥落痕が認められる。さらに、家 21 には棟表現の粘土帯が一部残存する。家 22～48 は屋根の流れ部の破片である。いずれも線刻が認められ、家 28・29・42・45 では横位の直線文、家 30・35・40 では「T 字状」文、家 20 では横位あるいは縦位の直線文、家 23～27・31・33・37～39・41・43・44・46～48 で横位の直線文と連続三角文が、それぞれ線刻されている。また、家 29 では、棟部と流れ部の境目にある巾 2.0cm ほどの粘土帯が認められ、家 20 では棟表現の粘土帯に加えて堅魚木を差し込むための孔が認められ、家 22 では棟表現の粘土帯が剥落した痕跡が認められる。さらに家 24・32・46 には内面に下部部位との接合痕跡が認められる。家 49～61 は堅魚木片である。いずれも中央に直径 0.5cm 以下の孔が堅魚木片のほぼ中央に穿孔されている。なお、形状は 2 大別でき、家 49～51・59 は長さ 8～9 cm で、上面が平坦であるのに対し、家 52～58・60・61 は長さ 5～6 cm で、上面が凹面を呈している。なお、家 62 は形状と孔のあり方から堅魚木片と考えられるが、同様のものが出土していない。家 64・79 は屋根の軒先部の破片である。ともに流れ部に巾 2.0cm ほどの縦方向の剥落痕があることから、突帯状のものが貼付されていたと推測される。

技法的には、外面にはナデ後、6～9 本/2 cm のハケを施し、内面にはナデを施すものが多い。また、家 9・10 では障泥板と流れ部の接合箇所の内面においてナデ後にハケを施している。家 39 のみは外面に 18～20 本/2 cm の細かいハケを施している。堅魚木はナデ調整のみで成形させている。なお、特に家形埴輪片については、器面の摩滅が著しく、本来の調整が観察できなかつたものが多い。

色調は全て橙色～にぶい橙色。焼成は家 1～3・13・19・23・44・55 は良好であったが、それ以外の資料は、多少なりとも砂っぽく、良好な焼成具合とはいえない。含有鉱物としては白色粒子（凝灰岩片?）・チャート片・褐鉄鉱・砂礫を多く含み、

輝石類をごく微量含んでいる。

身舎・台 (63・65～78) 家 63・65～72 は身舎部の破片である。家 68 は窓と思われる方形孔の一部が認められる。家 66・71・72 は壁体の一部であるが、コーナー部に貼付する縦方向の突帯が一部認められる。家 69 も壁体の一部、コーナー部の破片であるが、縦横方向に巾 1.5cm ほどの突帯が貼付されている。家 67 は曲面を呈することから壁体のコーナー部の破片と考えられるが、突帯の貼付（その剥離痕も含む）は認められない。なお、家 78 も壁体の一部と思われる。家 73～77 は台部の破片である。いずれも、底部から上 2～3 cm の位置に巾 2.0cm ほどの突帯を巡らしており、家形埴輪の台部と認識できた。うち、家 77 はコーナー部にかかる破片であり、コーナー部には縦方向の突帯が貼付していたと思われる剥離痕が認められた。

技法的には、外面はナデ後に 6～8 本/2 cm をハケを施し、内面はナデのみを施している。台部は内外面ともナデのみを施している。

色調は全て橙色～にぶい橙色。焼成は家 67・68 は良好であったが、それ以外の資料は、多少なりとも砂っぽく、良好な焼成具合とはいえない。含有鉱物としては白色粒子（凝灰岩片?）・チャート片・褐鉄鉱・砂礫を多く含み、輝石類をごく微量含んでいる。（深澤）

e. 靱形埴輪

靱形埴輪については、本体部と基部の構成が復元でき、全長が把握できる個体は存在しない。本体部が復元できた個体は 2 個体であり、いずれも「6 の字」の側面形状を呈するものである。このほかは小片 23 点が個体識別できたので、掲載した。（以下の記載の中においては便宜的に「手」の先端が右を向く面を本体の「正面」として記述することにす。）なお、破片部位の特徴から、靱は 3 個体が識別できる。靱 1 と靱 2、加えて靱 3 については、明らかに靱 1・2 とは別個体と考えられるため、3 個体（またはそれ以上の可能性もあり）と考えた。

靱 1 は本体部のみの残存である。本体高（復元

部を含む)は約25cm、最大幅は22cm、最大厚は16.5mである。正面形は「6の字」を呈する。「手」部分は残存していないものの、板状の「手」が装着していたものと推測できる。本体は正面をはじめすべての面に線刻による文様が施されている。文様は左側面(「背」)中央に「帯」が表現されているほか、全ての面に「6の字」形状にあわせた複数の弧が施され、さらにその弧間に鋸歯文をランダムに施している。本体上端部には結び緒の表現が一部残存している。本体部下部には、1条の突帯がめぐり、これ以下が基部と考えられる。基部は残存しないが、この突帯部直下の推定直径が11cmであることから、これが基部の直径に相当すると思われる。

技法的には、本体部は中空であり、幅1.2～2.0cmの粘土帯の輪積みによって作り出されている。また、「手」は残存していないものの、それに近接する本体部の剥離痕跡から、板状の「手」が本体部に差し込まれていたことが確認できる。外面調整はナデによる成整形後、部分的にハケを施している。内面調整はナデのみである。

色調は橙色で、焼成はやや良好である。白色粒子(凝灰岩片?)・チャート片・輝石片・褐鉄鉱を含む。

軛2は本体部のみの残存である。本体高(復元部を含む)は約20cm、最大幅は18cm最大厚は13.6mである。正面形は「6の字」を呈する。「手」部分は残存していないものの、本体上端の剥離痕跡からは板状の「手」が装着していたものと推測できる。本体は正面をはじめすべての面に線刻による文様が施されている。文様は左側面(「背」)中央に「帯」が表現されているほか、全ての面に「6の字」形状にあわせた複数の弧が施され、さらにその弧間に鋸歯文をランダムに施している。本体部下部には、1条の突帯がめぐり、これ以下が基部と考えられる。基部は残存しないが、この突帯部直下の推定直径が11cmであることから、これが基部の直径に相当すると思われる。

技法的には、本体部は中空であり、幅0.8～1.4cmの粘土帯の輪積みによって作り出されている。また、

「手」は残存していないものの、それに近接する本体部の剥離痕跡から、板状の「手」が本体部に差し込まれていたことが確認できる。外面調整はナデによる成整形後、部分的にハケを施している。内面調整はナデのみである。

色調は橙色、焼成はやや良好である。白色粒子(凝灰岩片?)・チャート片・輝石片を含む。

軛3～25はいずれも小破片である。これらのうち軛3を除く22点については、軛1・2の個体の一部の可能性もあるものの、接合関係や破片位置等が不明確であったため、軛1・2の復元に用いることを避けた。軛3・4は手の部分の破片である。軛5・8は本体の破片であるが、緒の部分を表現したものである。軛6・7・9～23は本体部の破片である。いずれの破片資料も、本体外面相当箇所に弧状と鋸歯文の線刻が施されている。軛24・25は突帯部であるが、鋸歯文状の線刻が施されており、本体下部の破片と考えられる。

色調は橙色、焼成はやや良好である。白色粒子(凝灰岩片?)・チャート片・輝石片を含む。(深澤)

f. 鞞形埴輪

鞞形埴輪については、全長が把握できる個体は存在しない。本体部が辛うじて復元できた個体は1個体である。このほかは小片36点が個体識別できたので掲載した。いずれも、円筒の台部に、奴舩形背負い板が取り付け、鏃表現のある方形板が上部に取り付くタイプのものである。なお、破片部位の特徴から、鞞は4個体が識別できる。軛1、加えて軛2～4がいずれも鏃を表現した方形板であり、別個体として認識できるため、4個体(またはそれ以上の可能性もあり)と考えた。

軛1は残存する本体部の破片から辛うじて復元可能となった個体である。本体残存高は約35cm、背負い板部最大幅(復元を含む)は31.0cm、方形板高は11.5cm、同左幅9.6cmである。方形板には粘土紐によって逆刺を有する長頸鏃6本が表現されており、その下端部にはボタン状の粘土が貼付されている。本体部には粘土帯によって背負い紐が表現さ

れており、その下端部はリボン状の結び目が2つ表現されている。なお、この背負い紐は背面にある透孔の上端まで連続している。背負い板は上端部（肩部）に線刻による鋸歯文が表現され、加えて背負い板正面から本体部に連続しては同じく線刻による直線斜文が表現されている。

技法的には次の通りである。成形は、まず本体を幅1.0～2.0cmの輪積みによって形作り、その後、鏃表現のある方形板と本体を連結する。この連結は方形板を本体粘土が前後から挟み込むようになっている。なお、連結された方形板はその背面で幅2.0～2.5cmの棒状粘土塊によりその左右両端が支えられている。背負い板と本体の連結は本体両側面に、厚さ1.0～1.5cmの背負い板を接合し、さらに両者の接点の前後に粘土塊を充填させ、接合部を補強している。器面調整としては、外面は本体部正面のみに17～20本/2cmのタテハケが施されているが、他の箇所はナデが施されているのみである。内面は、輪積み痕が残る程度の粗いナデが施されているのみである。

色調は橙色、焼成はやや良好である。白色粒子（凝灰岩片?）・チャート片・輝石片を含む。

靱2～4は鏃表現のある方形板の破片である。靱2は平面形が僅かに逆長台形状になるものと推測され、粘土紐によって6本の曲刃の長頸鏃が表現されている。靱3は平面形が長方形になるものと推測され、粘土紐によって5本の逆刺をもつ長頸鏃が表現されている。靱4も平面形が逆台形状になるものと推測され、粘土紐によって逆刺をもつ長頸鏃が表現されている。また、これら3点の方形板片背面には幅2.0cm程度の棒状粘土塊の貼付やその剥離痕跡が認められる。靱29は方形板と本体部の連結部の破片と考えられる。外面には幅1.5cmの粘土帯が貼付されている。靱25も方形板との連結部に近い本体部である。外面前面には幅1.3cm粘土紐によって背負い紐が表現されており、外面側面には接合された背負い板の一部が残存している。靱5～15・18・22・24は背負い板片である。靱5・6・

8・9・14・18はいずれも背負い板の肩部片であり、線刻による区画文と鋸歯文（X文?）が施されている。靱10・12には線刻による斜位文が施されている。なお、靱5・6・9・10・13・15・24は左背負い板片、靱7・8・11・12・14・18は右背負い板片と考えられる。また、靱5・14は本体部の一部が付着したままである。靱17・19・20・26・27・31～34は背負い板の接合痕が付着したままの本体部片である。靱21は背負い板と、幅4.0cmの带状突帯を貼付した本体部片である。背負い板正面から本体部に連続する部分には線刻による直線斜文が表現されている。靱28・30は本体部破片であり、粘土紐によるリボン状の結び目が2つ表現されている。靱16・35～37は小翼部片である。靱35では下端部に線刻による直線区画文とその中を充填するように斜文は施されている。靱23は小翼部と、幅3.2cmの带状突帯を貼付した本体部片である。

技法的には、靱2～4ではナデ後にハケを施し、その後に粘土紐を貼付している。靱2～15・18・22・24では表裏面に8～10本/2cmのハケを施しており、その後、縁部にナデを施している。靱26・32では8～10本/2cmのハケを、靱27・28・40では約20本/2cmのハケを施し、靱16・17・19・20・31・33～37ではナデのみ施している。靱21では本体部から背負い板部にかけては8～10本/2cmのハケを施し、带状突帯にはナデを施している。本体への接合は、背負い板を接合の後、带状突帯を貼付している。靱23では外面調整はナデを施し、本体への接合は小翼部を接合の後、带状突帯を貼付している。内面調整は、いずれもナデ調整のみである。

色調は靱2・4・19・20・22・26・31～34が橙色、靱3・17・27が黄橙色である。焼成はいずれもやや良好。含有鉱物としては、靱1・2・4・17・19・20・22・26・27・31～34では白色粒子（凝灰岩片?）・チャート片・輝石片であり、靱3では白色粒子・輝石片である。（深澤）

g. 盾形埴輪

盾形埴輪については、全長が把握できる個体は存在せず、小片6点が識別できたので、掲載した。

盾1・5・6は盾面を表現する板部分（以下、盾板）の接合痕が付着したままの本体部片であり、盾板正面から本体部に連続しては同じく線刻による直線斜文が表現されている。盾2～4は盾板片である。盾2では正面に線刻で斜文が施され、盾3には線刻による斜位文が施されている。また、盾3で本体部の一部がごく僅かに付着したままである。

技法的には、盾1・2・4では表裏面には8～10本/2cmのハケを施しており、その後、縁部にナデ調整を施している。盾3・5・6では8～10本/2cmのハケを施している。盾1・3・5・6での本体部内面調整は、いずれもナデのみである。

色調はいずれも橙色、焼成はいずれも良好である。含有鉱物としては、白色粒子（凝灰岩片?）・チャート片・輝石片がある。（深澤）

h. 大刀形埴輪

大刀形埴輪については、把部から円筒台部までが残存し、全長が把握できる個体は存在しない。辛うじて、把部から鞘部までが推定復元できた個体は1個体である。このほかは小片15点が大刀形の破片と識別できた。資料の状況からは、2個体（またはそれ以上）の識別が可能である。

大刀1は平面台形の板状柄頭である。柄頭板の上面に振り環がつく痕跡は認められず、孔が1つ認められる。勾金は幅4.0～4.5cmの带状粘土を把頭から把縁に架して表現されている。勾金装飾としては、粘土塊貼付による三輪玉の表現がある。勾金上端部の形状は直線的に水平になっている。また、把頭と勾金の接点には幅約1.0cmの粘土紐によって結び紐の表現がなされている。勾金下端部の形状も直線的に水平になっている。把縁は、1条の突帯で表現されている。鞘部側面への稜表現については、該当部位が残存していないため不明である。また、鞘の付属品としては紐の表現が想定される。この表現については資料自体に紐を表現した粘土帯はわずかしか残存していないものの、円筒部における剥離

痕跡からは、双環状粘土を貼付し、さらに、その真ん中から紐端を垂下させた表現があったものと思われる。

技法的には、柄間～鞘部は外面が7～8本/2cmのタテハケ、内面がナデをそれぞれ施している。勾金部は表裏側面ともにナデを施し、表裏面には7～8本/2cmのタテハケを加えて施している。勾金上・下端部は、板状粘土の背面を粘土塊で補強・充填している。

色調は橙色、焼成はやや良好である。含有鉱物としては白色粒子（凝灰岩片?）・チャート片・輝石片を含む。

大刀2・3は板状柄頭と推測される破片であり、大刀2は別作り、大刀3は一体型の板状柄頭と推測される破片である。柄頭板の形状は、大刀2については端部が欠損しているため不明であり、大刀3の方形板は平面が僅かに台形状の方形を呈し、本体部に接合する位置内に孔が1つ開く。大刀4・6～12は勾金の破片である。いずれも粘土塊による三輪玉を貼付する。大刀4・10は裏面に補強用粘土塊が付着しているため、柄頭か柄縁に近い部分の破片と考えられる。大刀8は結び緒を表現した粘土紐が貼付していることから、柄頭か柄縁に接する部分の破片と考えられる。大刀6は勾金下部の破片、大刀11は勾金上部の破片であり、ともに背面に補強粘土が貼付されている。大刀5は三輪玉の破片と思われる。大刀13は鞘の破片である。断面形状は僅かに裾広がりになる形状である。外面には粘土紐貼付による結び紐の表現がある。なお、鞘部側面の稜はない。大刀14～16は鞘尻の破片である。1条の高い突帯が巡らされている。

技法的には、大刀2は器面の荒れが激しく不明瞭だが、内外面ともナデを施したと推定できる。大刀3では方形板の表裏面には7～8本/2cmのハケを施したのち縁部をナデ、さらに本体部との接合粘土帯部分はナデを施している。大刀4・6・10・11では内外面ともナデ、大刀5・8では外面にはナデを施しているが、内面は不明である。大刀7・

9は内外面とも7～8本/2cmのハケを施している。大刀12では外面は不明であるが、内面は7～8本/2cmハケを施している。なお、勾金片の側面はいずれもナデである。大刀13～16では外面は8～10本/2cmタテハケを施し、内面はナデを施している。

色調は全て橙色、焼成は全てやや良好である。含有鉱物としては白色粒子(凝灰岩片?)・チャート片・輝石片を含む。(深澤)

i. 形式不明の形象埴輪

上記以外に、形式が不明確な形象埴輪片がある。これらについては可能性が考えられる形式毎にその内容を記載する。なお、以下の内容は、全て可能性の示唆である。

人物埴輪と推定される形象埴輪片 不明4・37はともにうしろ首と思われ、幅3.0cm程度の粘土帯(垂髪?)の剥離痕跡が認められる。不明5・104は耳と思われる破片で、不明5は半円形の破片であり、不明104は括れをもつ筒状粘土塊である。不明10・32・81は顔と思われ、不明10には目と思われる幅0.5cm程度の切り込みがあり、不明32には円形粘土が貼付され、不明81には眉と思われる幅0.7cm程度の粘土帯が横位に貼付する。不明11・70は島田髻と思われる板状の破片で、不明11には片面に剥離痕がある。不明48・88は裾部の破片と思われる。

馬形埴輪と推定される形象埴輪片 不明6・23・24・59は顔の一部と思われ、鏡板・轡等の馬具表現の粘土帯が貼付、またはその剥離痕が認められる。不明14・41・107・108は首から胸にかけての一部と思われ、不明14・41・108では手綱表現の幅0.7～0.8cmの粘土紐が、不明107では胸繫表現の幅3.5cm程の粘土帯がそれぞれ貼付している。不明49・98・102・109・116は繫表現の粘土帯が貼付する胴部であり、不明49・109では粘土帯の上に線刻が入る。不明39は鞍の表現と思われる粘土帯が貼付する背部である。不明34は胴部で、障泥の表現と思われる粘土帯が貼付する。不明17・72は

繫表現のある胴部と思われる。不明98は繫の一部と思われる。不明76は背部と思われ、幅3.0cm以上の粘土帯の剥落痕がある。不明68・101は鎧と思われ、中空の卵形を呈し、端部に剥落痕がある。不明28は腹部、不明35は胴部と思われ、緩やかに屈曲する破片である。不明18は尻尾と思われる直径3.0cm、長さ9.0cmほどの角状破片で、先端は先細る。不明8は足の付け根と思われ、緩やかな弧を描きながら、L字状に屈曲する。

家形埴輪と推定される形象埴輪片 不明2・3は壁体につく柱表現の粘土帯と思われる幅3.0cm程の突帯である。不明119は屋根の棟付近の破片と思われ、線刻が入る。不明12・56は屋根の破片と思われ、鋸歯状線刻の一部が認められる。不明71・89は屋根軒先部の破片と思われる板状の破片で、破片の一端が別粘土塊の貼付により肥厚化している。不明112・113は堅魚木と思われ、不明113では縦位の穿孔が認められる。不明25・47・50・103・111・118は壁体と思われ、不明25では縦位、不明47では横位の突帯が貼付する。

器財形埴輪と推定される形象埴輪片 不明13・22・27・105は鞆の背板と思われ、不明27は断面三角を呈すことから円筒部との接点に近い部分と考えられ、また、不明105は鋸歯状の線刻がある。不明44は鞆の円筒部と思われ、背板の一部が付着する。

不明40は大刀の円筒部と思われ、外面に幅0.7cmほどの粘土帯が貼付する。不明58は大刀の結び紐と思われ、幅1.9cmの粘土帯が貼付する。不明95は刀の勾金背面の充填粘土と思われ、棒状粘土塊が幾重にも重ねられている。

不明63・117は盾と思われる破片で、不明63は外形面が弧状を描き、鋸歯状の線刻があり、不明117はT字状線刻があり、内面には円筒部との接合痕跡がある。

不明1・21・36・57・64・67・92～94・110・115は形式特定ができないものの器財埴輪片と思われる。不明1は直径10cm程度の円筒片であり、

突帯と矩形粘土板が貼付する。不明21は円筒片だが面取り痕跡あり、基部と思われる。不明36はわずかに弧状を呈する破片で、幅1.0cm程の横位の粘土帯が貼付する。不明57は弧状を呈する破片で、幅2.0cmと1.0cm程の粘土帯が貼付する。不明64は湾曲板状粘土帯が貼付しており、線刻がある。不明67は板状の破片で、幅1.2cmの粘土紐が貼付する。不明92・94・110は細い円筒部の破片で、幅0.7cm程度の粘土が格子状に貼付する。不明93・115は細い円筒部の破片で、粒状粘土を貼付した幅1.0cm程度の粘土帯が横位に張り付く。

形式が推定できなかった形象埴輪片 不明15・16・20・29・33・45・62・65・83は横位の突帯が貼付する破片であり、不明15・45・62・83・87では幅1.0～2.0cmの突帯、不明16・20・29・33・65・77では幅2.5cmまたはそれ以上の幅の突帯が貼付する。なお、不明29では突帯上への線刻が認められ、不明45では突帯の貼付は縁部になされている。また、不明87は普通円筒埴輪の口縁のような形状だが、突帯直下に円形透孔とは異なる切り込みがあり、やや特異に思える。不明30・46・69は突帯の剥落痕が認められる破片である。不明84は横位に幅3.0cm程度の扁平な粘土帯が貼付し、線刻が入る。不明86は幅3.0cm程度の扁平な粘土帯がT字状に貼付する。

不明42・60・74・97は剥落した棒状粘土帯であり、不明42は幅3.0cm、不明60・74・97は幅1.0～1.5cmの突帯である。また、不明82は幅0.8cmの弧状を呈する棒状粘土帯である。

不明114は堅魚木に類似する粘土帯で、径3.0cm程度の瘤状粘土塊が貼付する。

不明9は円形と思われる透孔痕跡が認められる。

不明19・38・73・75・78・80・99は破片自体がわずかに弧状を呈する破片であり、不明19・38は器壁厚が2.0cm程度、不明73・75・78・80・99は器壁厚が1.0～1.3cm程度である。なお、不明73・75には外面に剥離痕、不明80・99には内面全体に剥落痕が認められる。

不明96はわずかに弧状を呈する破片に、直径3.0程度の粘土塊が突起状に貼付する。不明26もわずかに弧状を呈する破片だが、顎状に突出する粘土帯の貼付がある。

不明43は、器面外面に直径2.0cm程の円形粘土粒が貼付する。不明51・54は直径3.5cmの円形粘土板であり、不明54の背面には貼付された粘土塊がつく。

不明55は小型の匙状を呈する破片である。

不明31・52・61・79・91・100・106は板状の破片であり、不明52では内外面ともに別粘土が貼付され、不明61では線刻と思われる刻みが連続し、不明91では内面の一部には別の粘土塊が貼付し、肥厚化しており、不明106では透孔があく。

不明66・90は外反する破片であり、不明90では一端が別粘土塊の貼付により肥厚化している。

不明7・53・85は円筒形を呈する破片であり、不明7には縦方向の剥離痕があり、不明53は直径12.0cm程度の基部と思われる。

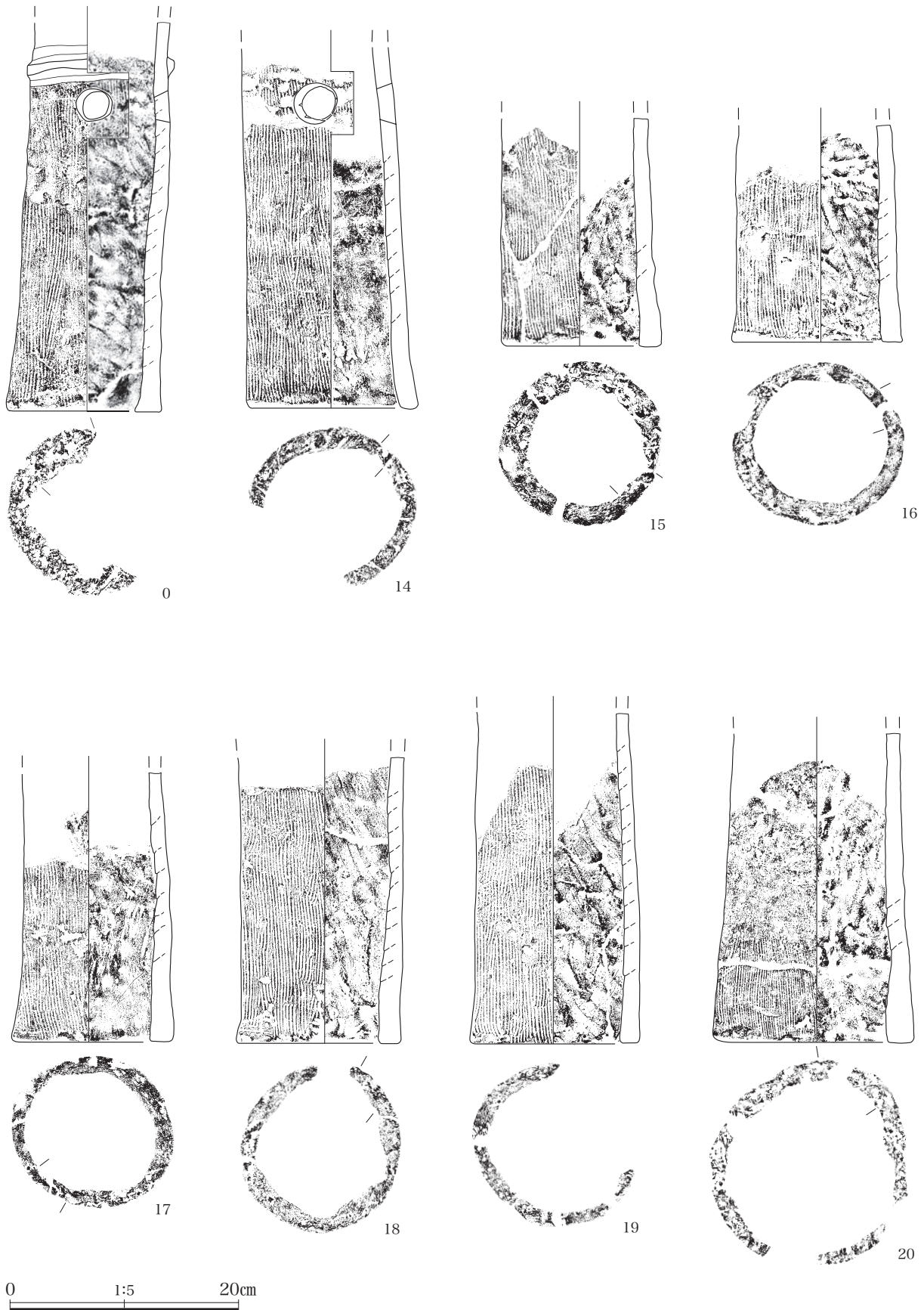


図 156 墳裾部出土 形象埴輪基部 (1)



図 157 墳裾部出土 形象埴輪基部 (2)

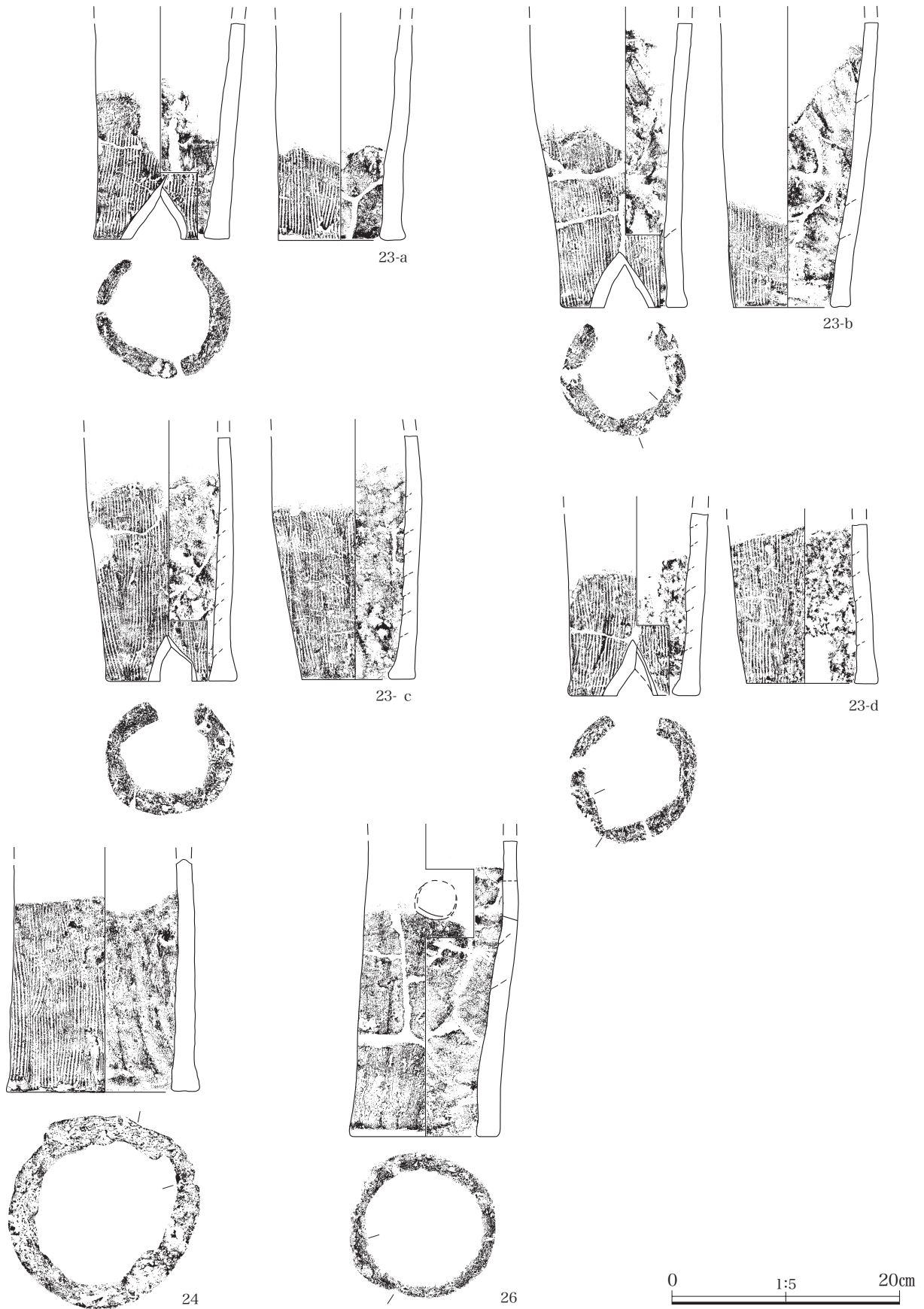


図 158 墳裾部出土 形象埴輪基部 (3)

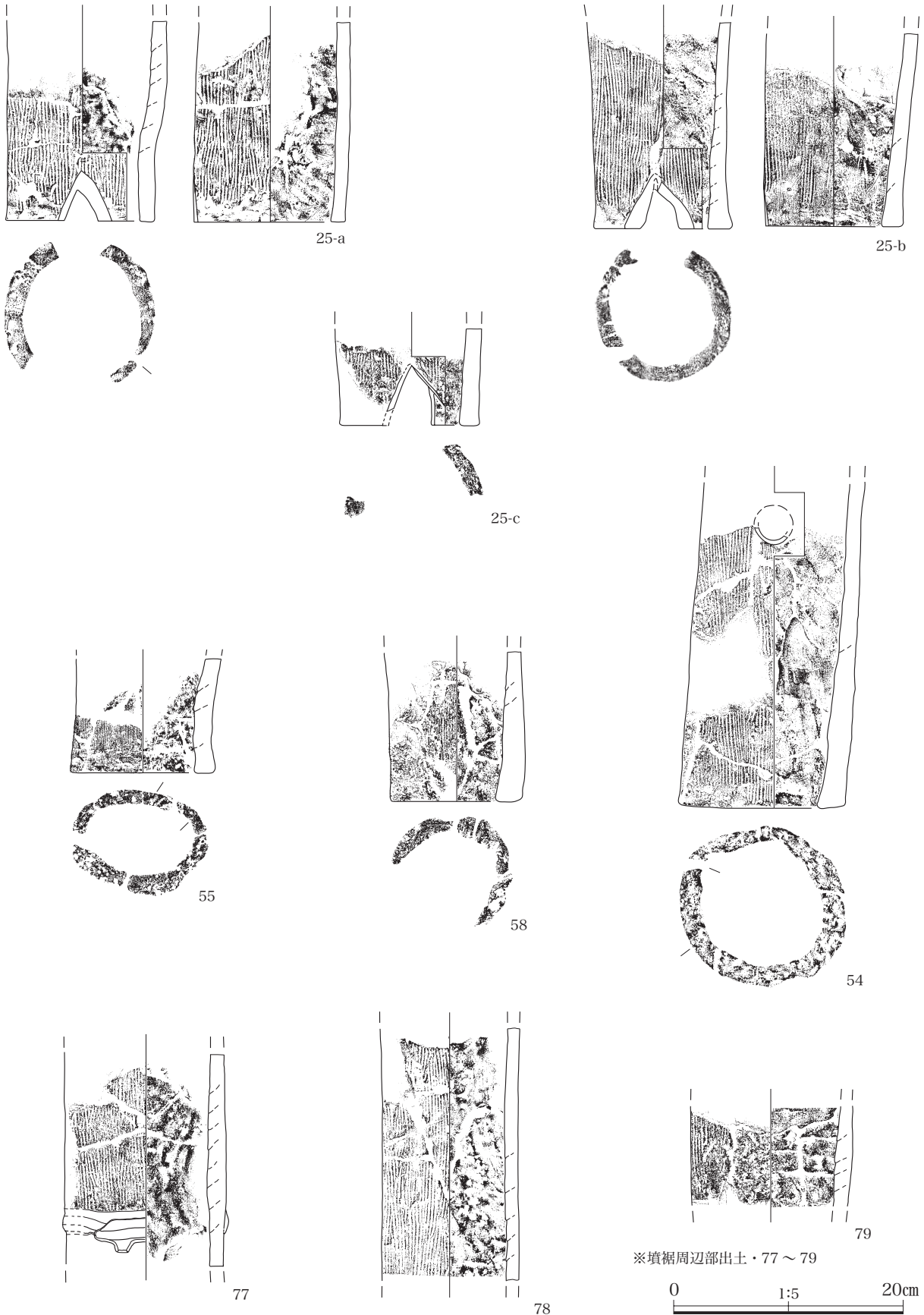


図159 墳裾部および墳裾周辺部出土 形象埴輪基部



図 160 墳裾部および 墳丘周辺部出土 人物埴輪 (1)



図 161 墳裾部および 墳丘周辺部出土 人物埴輪 (2)

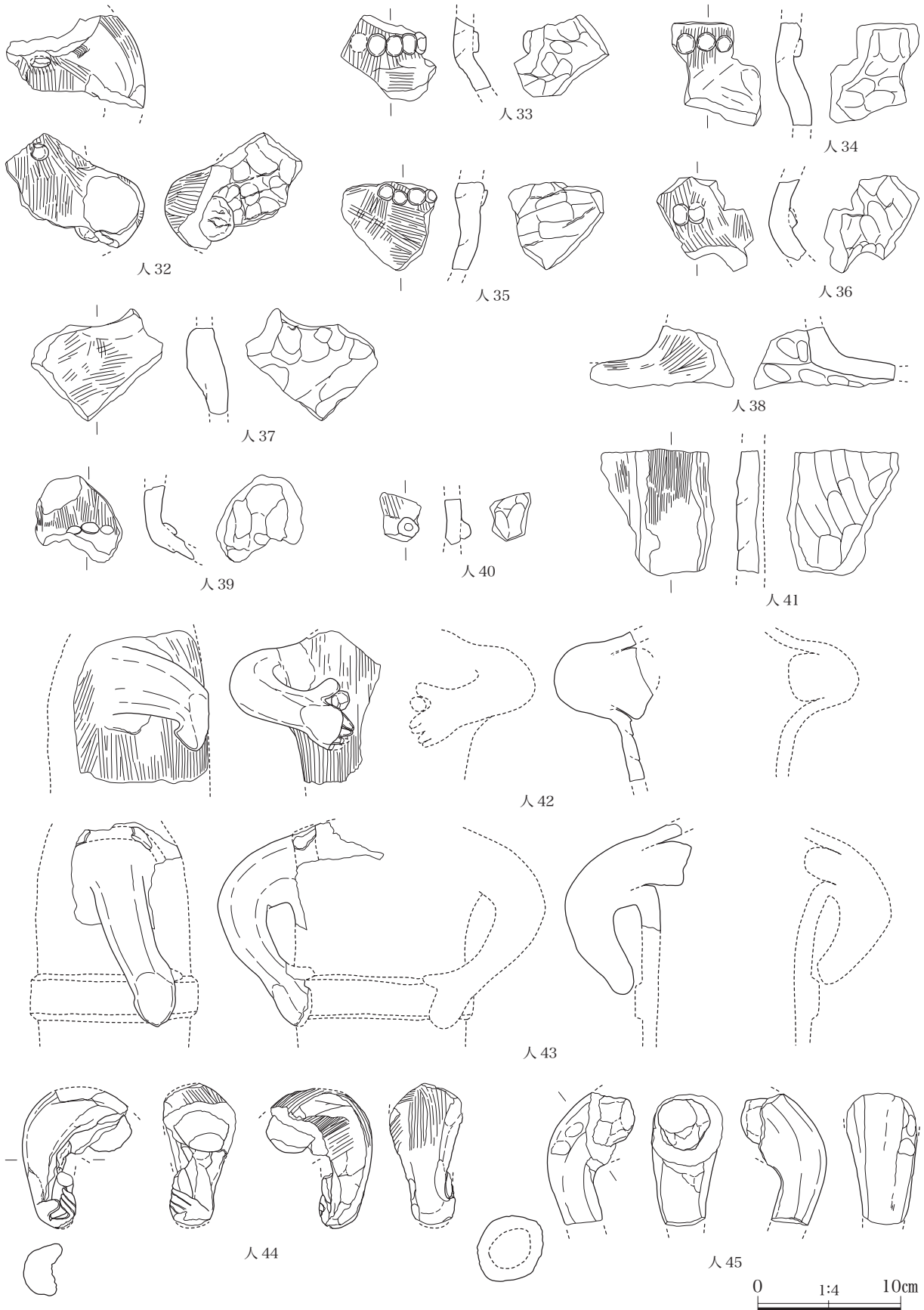


図 162 墳裾部および 墳丘周辺部出土 人物埴輪 (3)

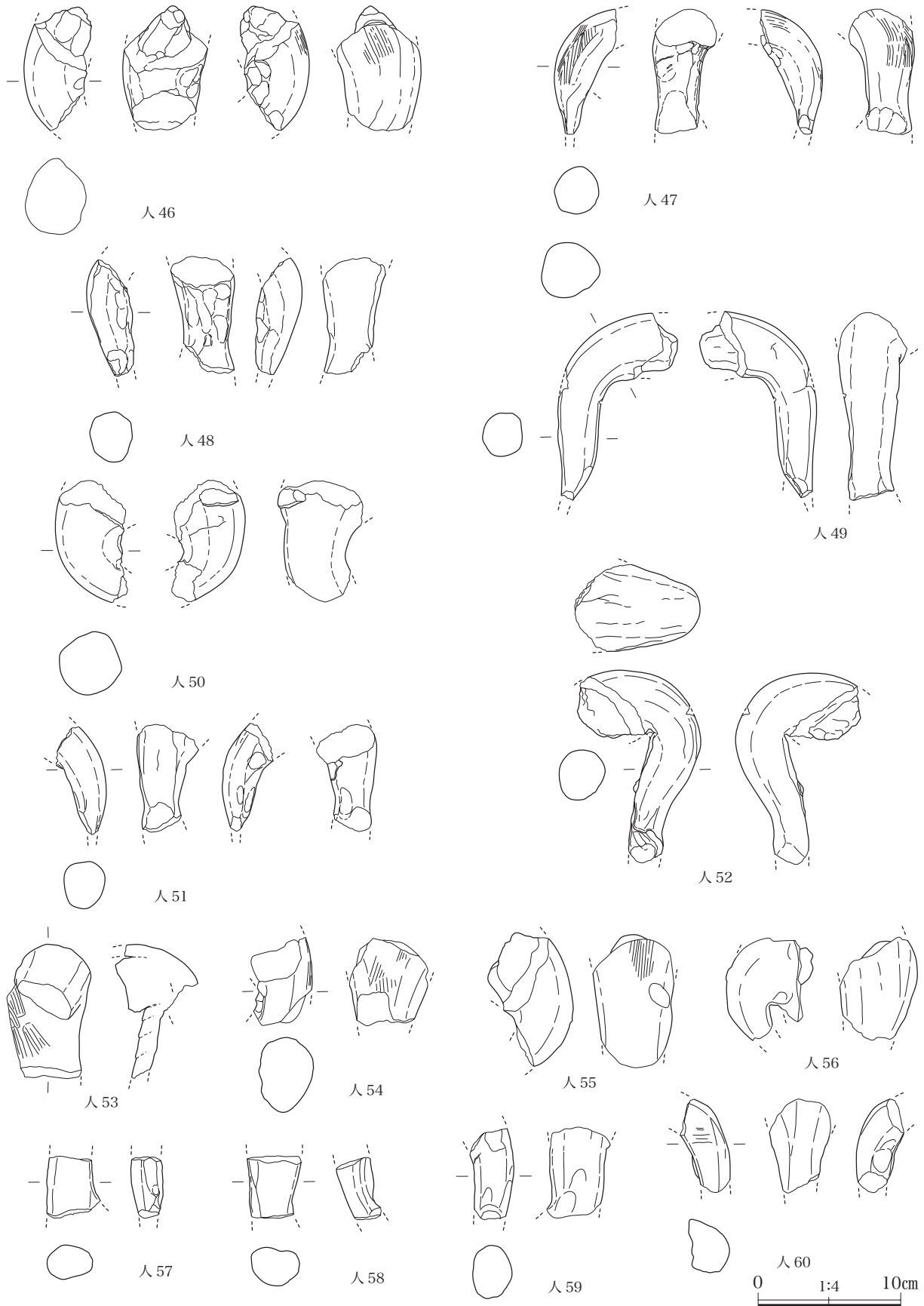


図163 墳裾部および 墳丘周辺部出土 人物埴輪 (4)

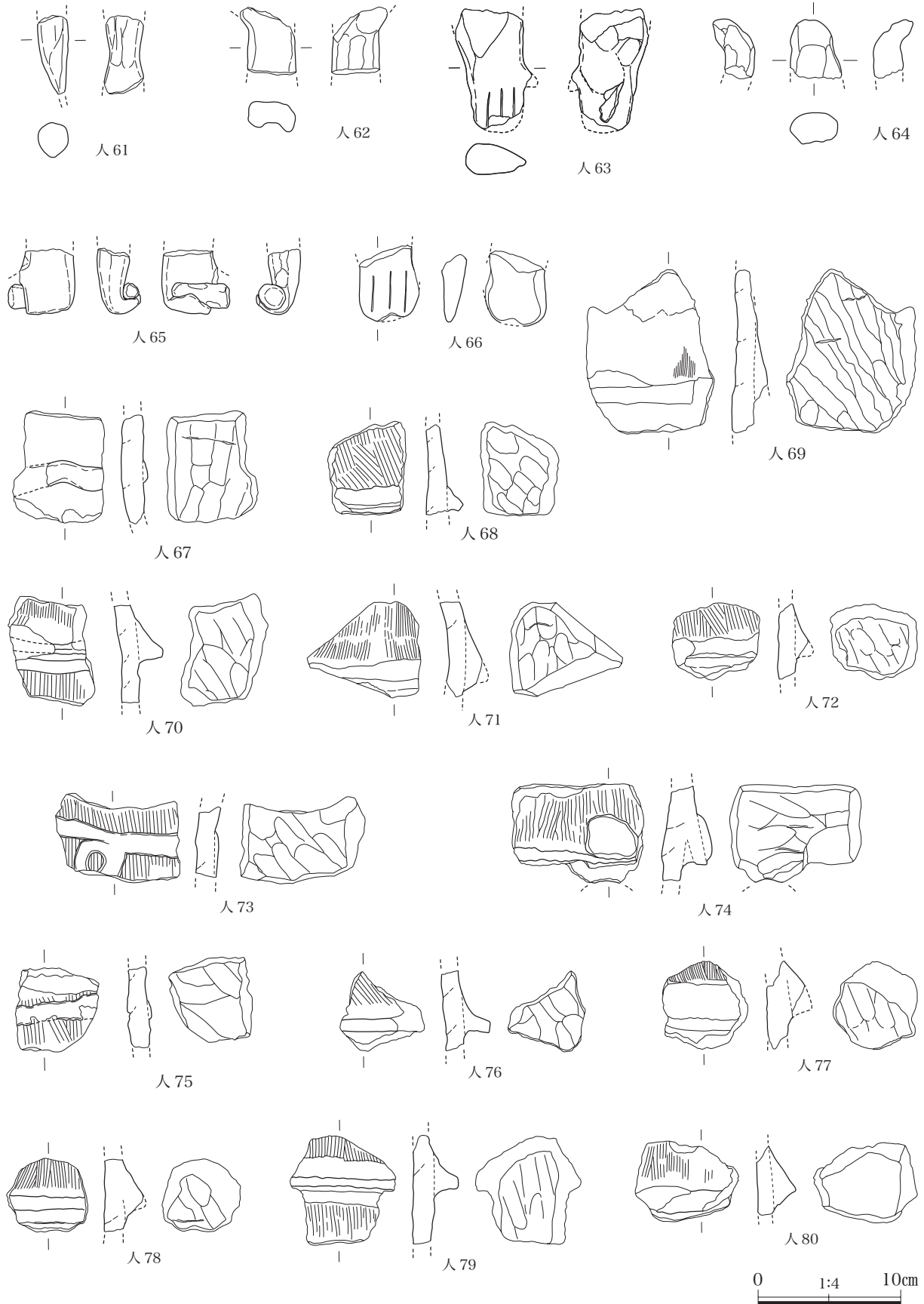


図 164 墳裾部および 墳丘周辺部出土 人物埴輪 (5)

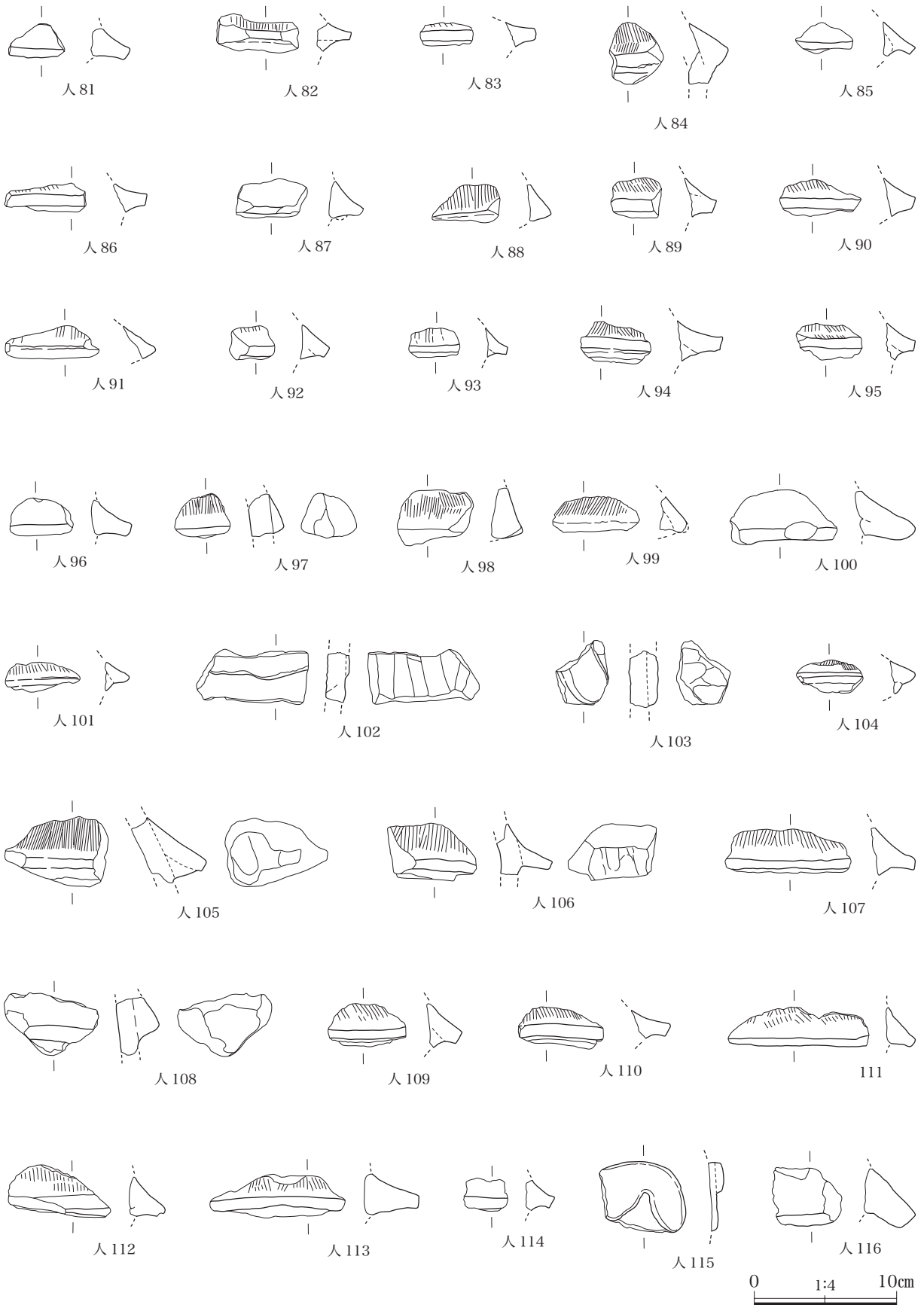


図 165 墳裾部および 墳丘周辺部出土 人物埴輪 (6)

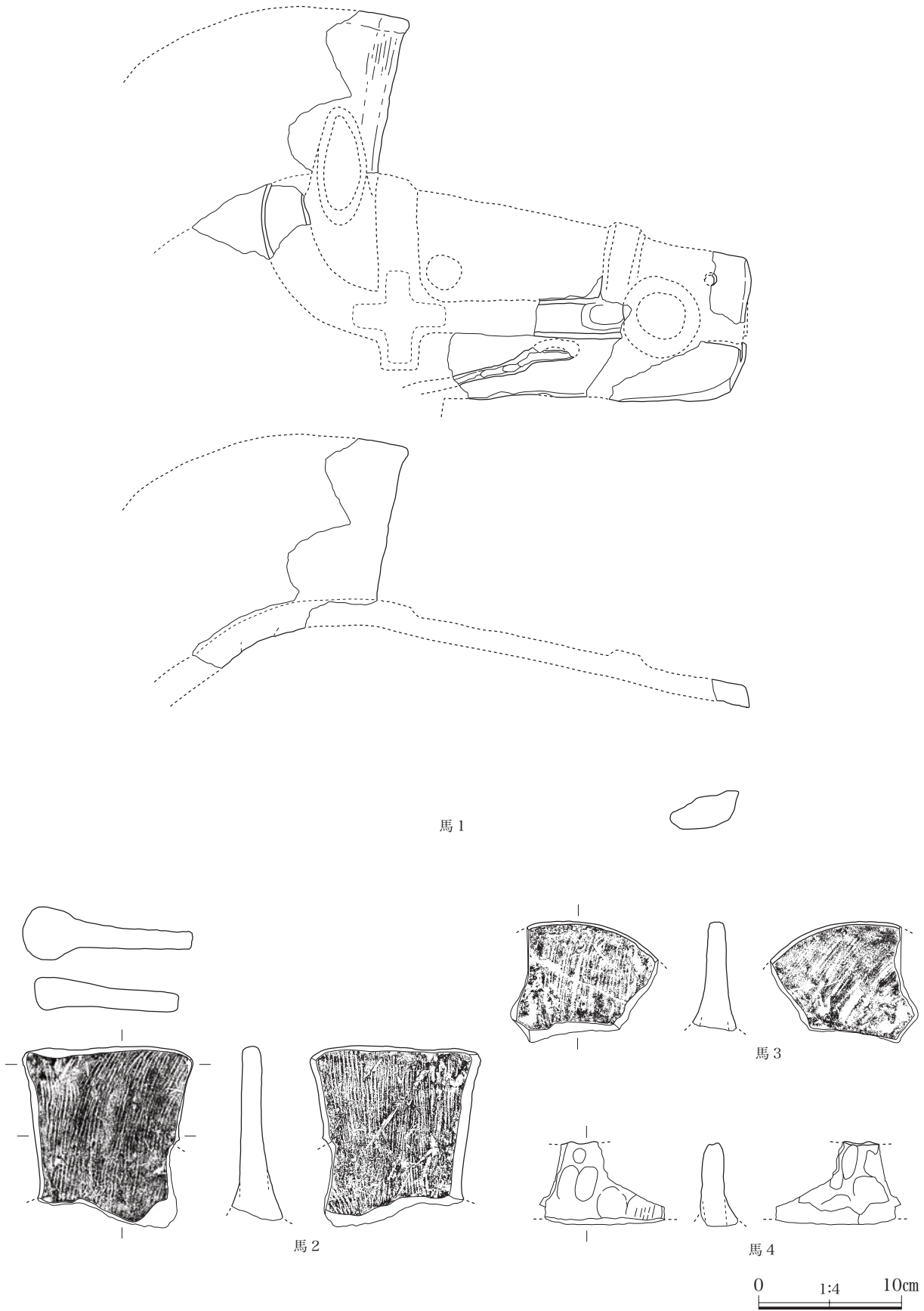


図 166 馬形埴輪 (1)

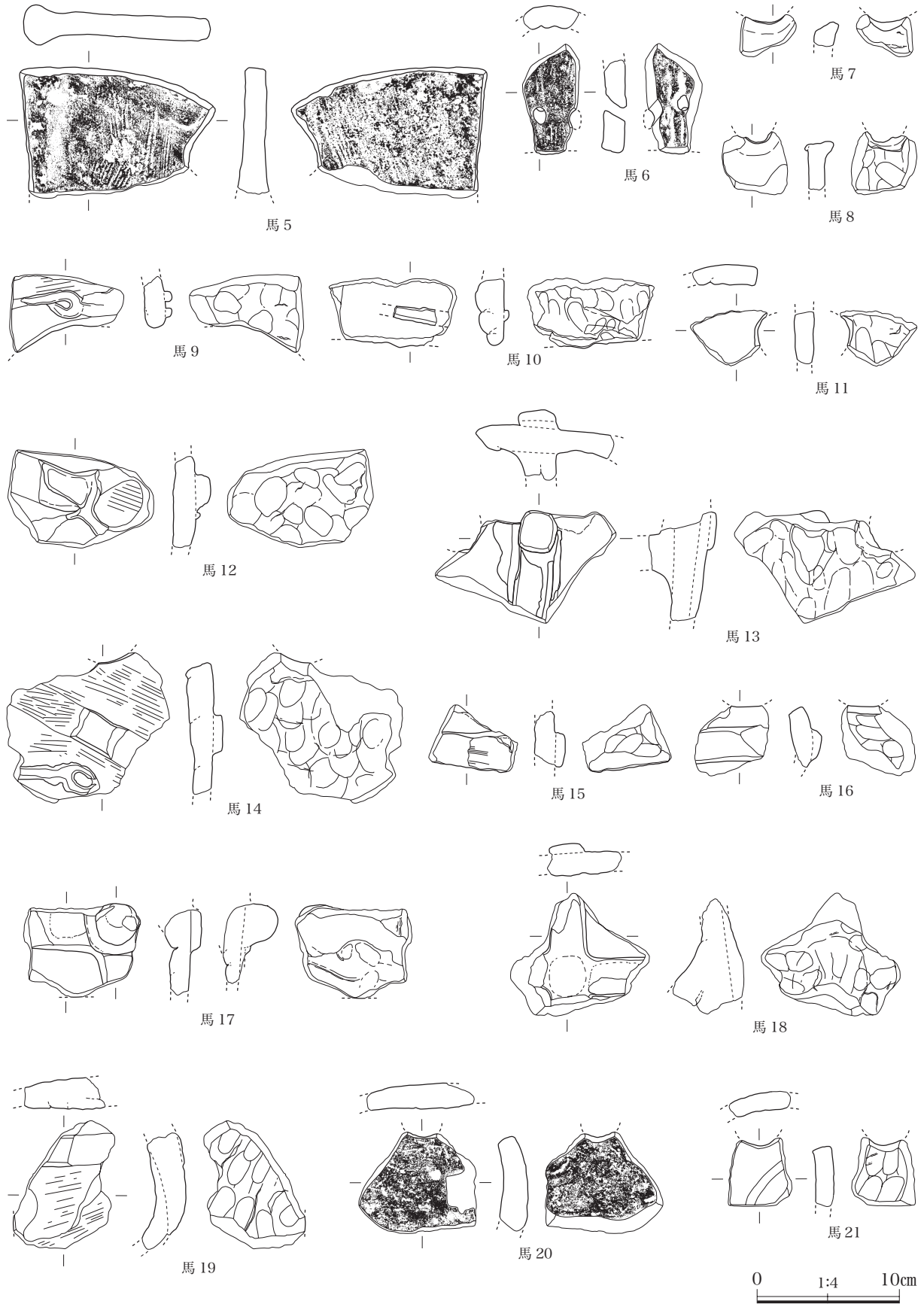


図167 馬形埴輪(2)

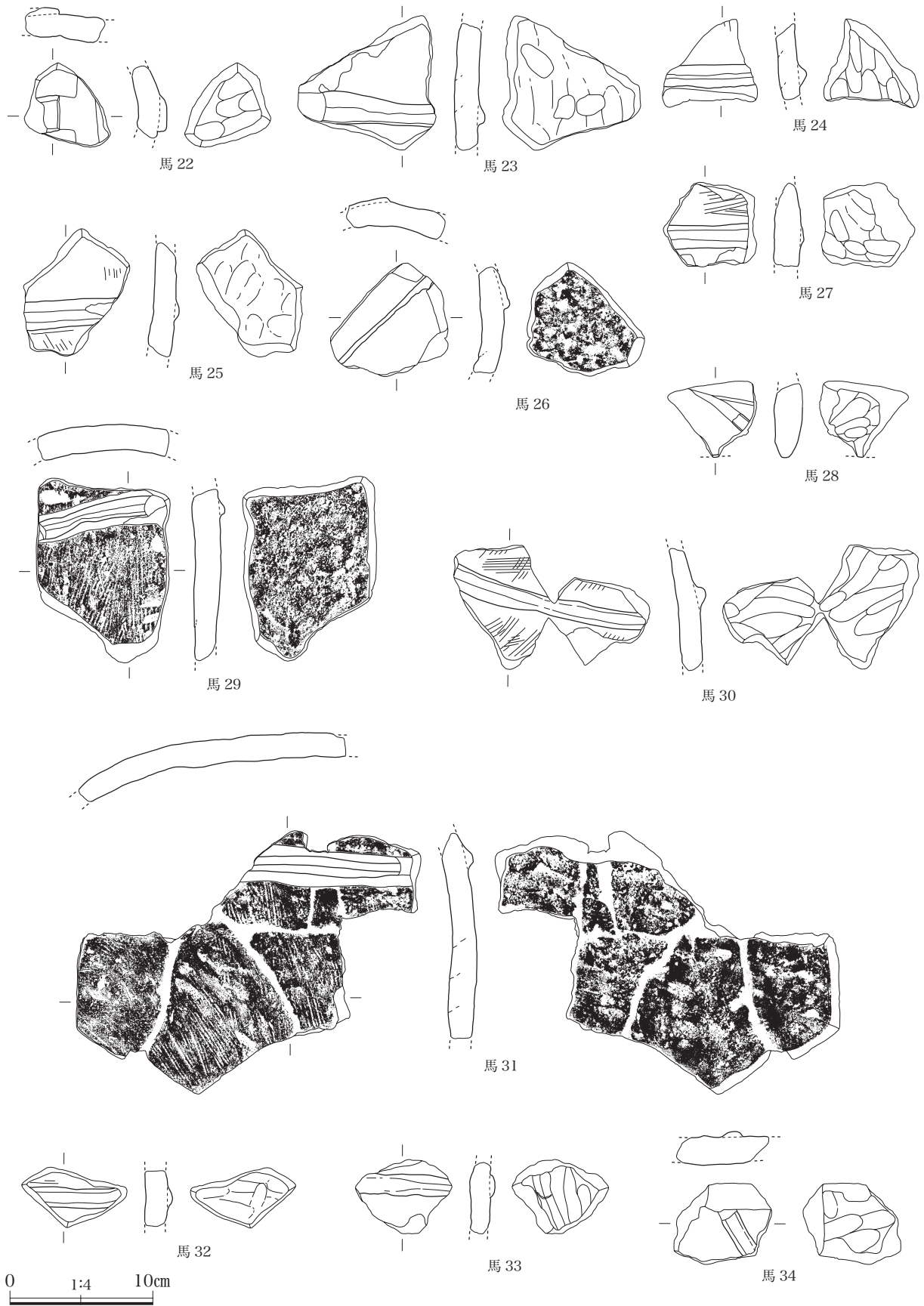


図168 馬形埴輪(3)

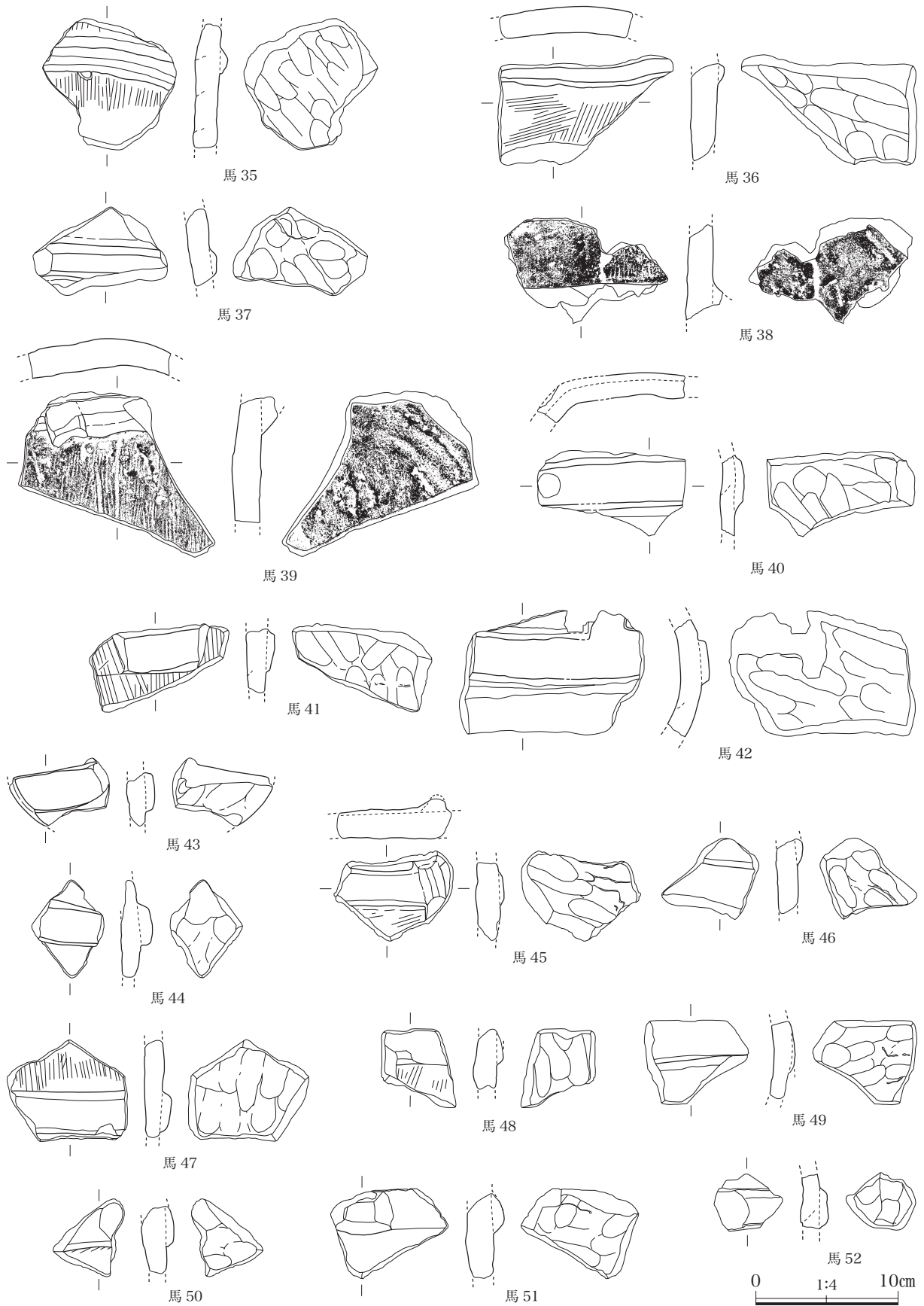


図 169 馬形埴輪 (4)

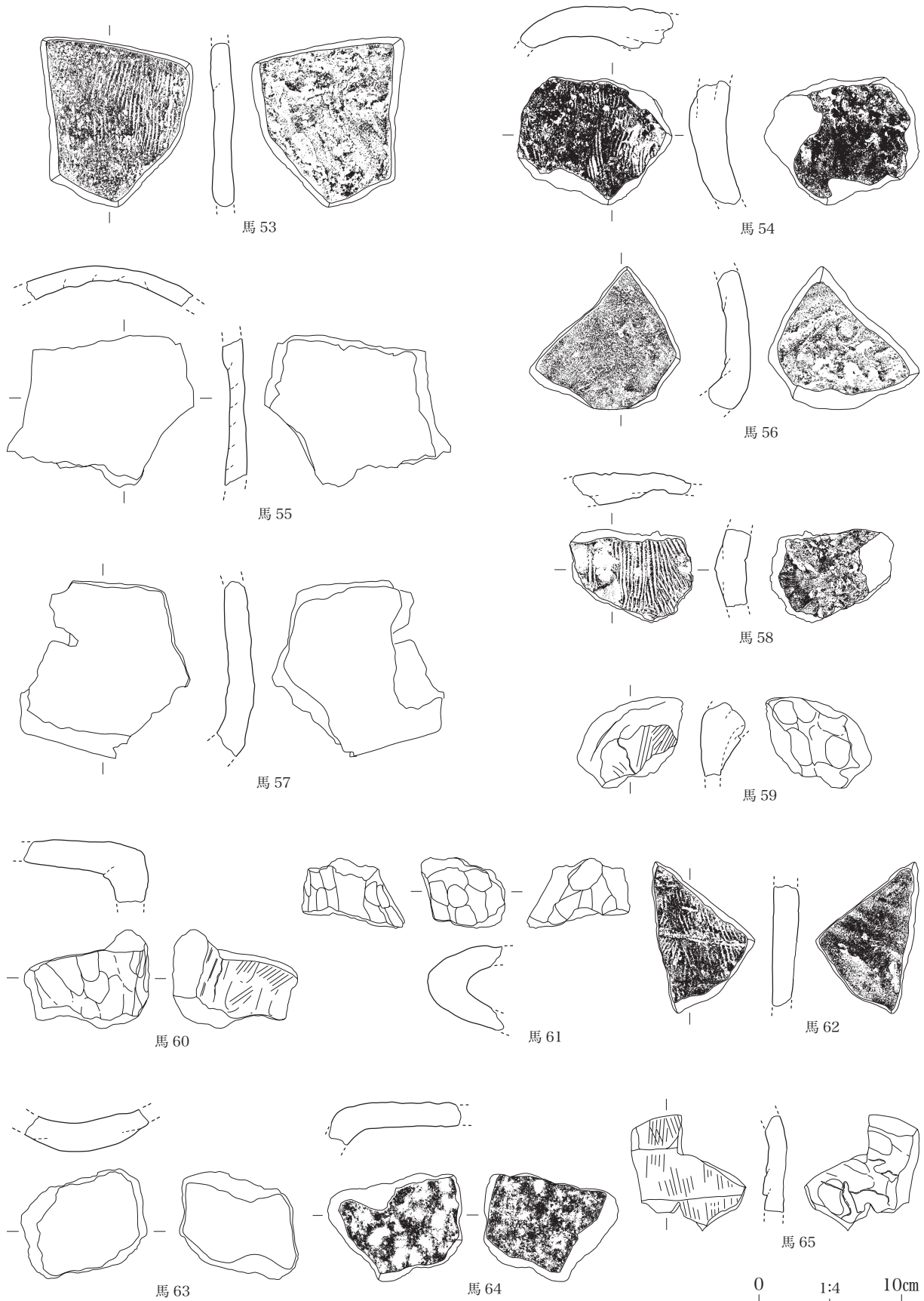


図170 馬形埴輪 (5)

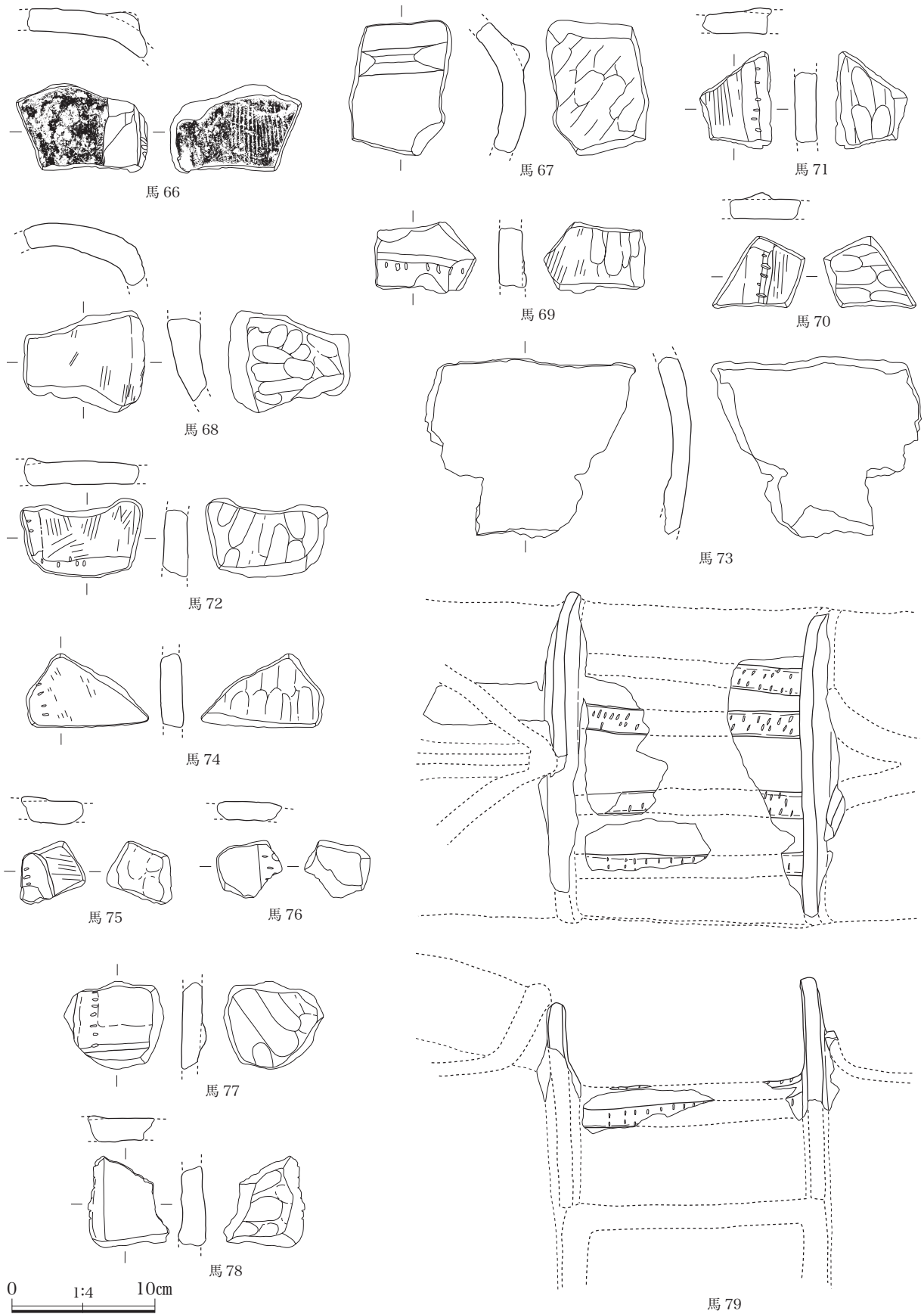
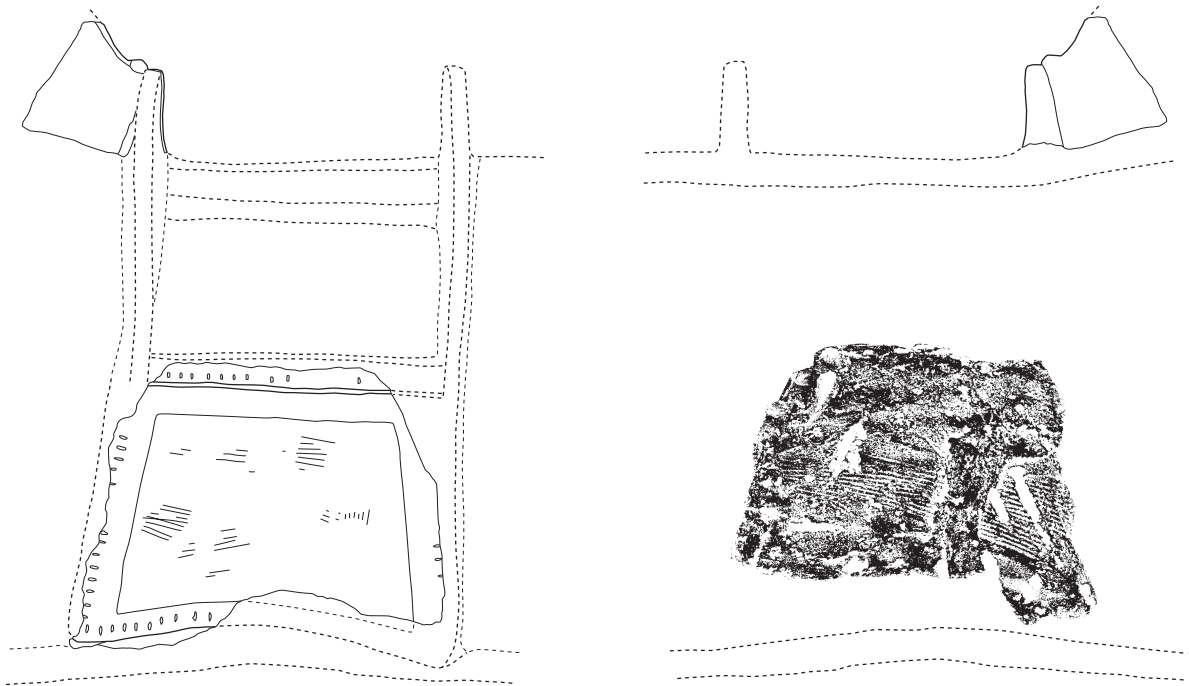
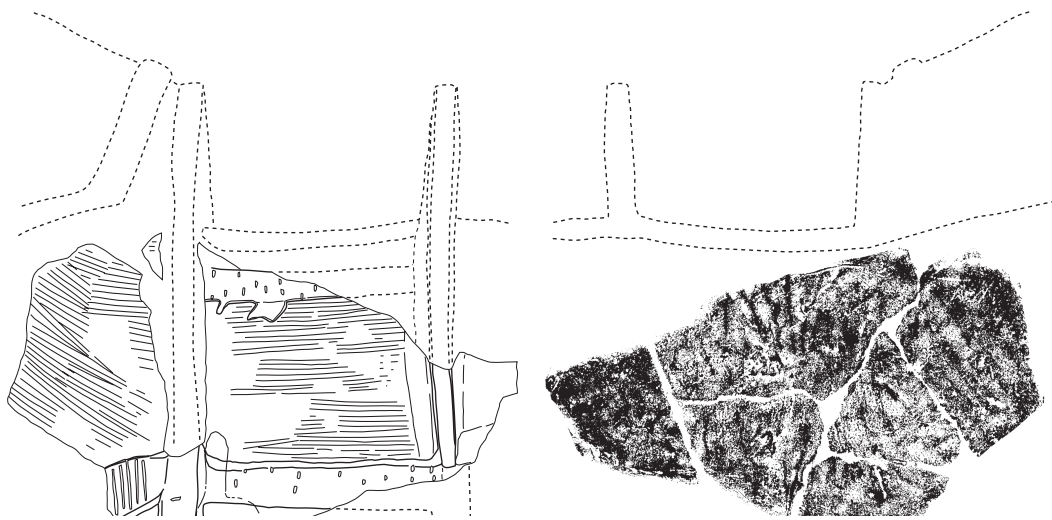


图 171 馬形埴輪 (6)



馬80



馬81

0 1:4 10cm

図172 馬形埴輪(7)

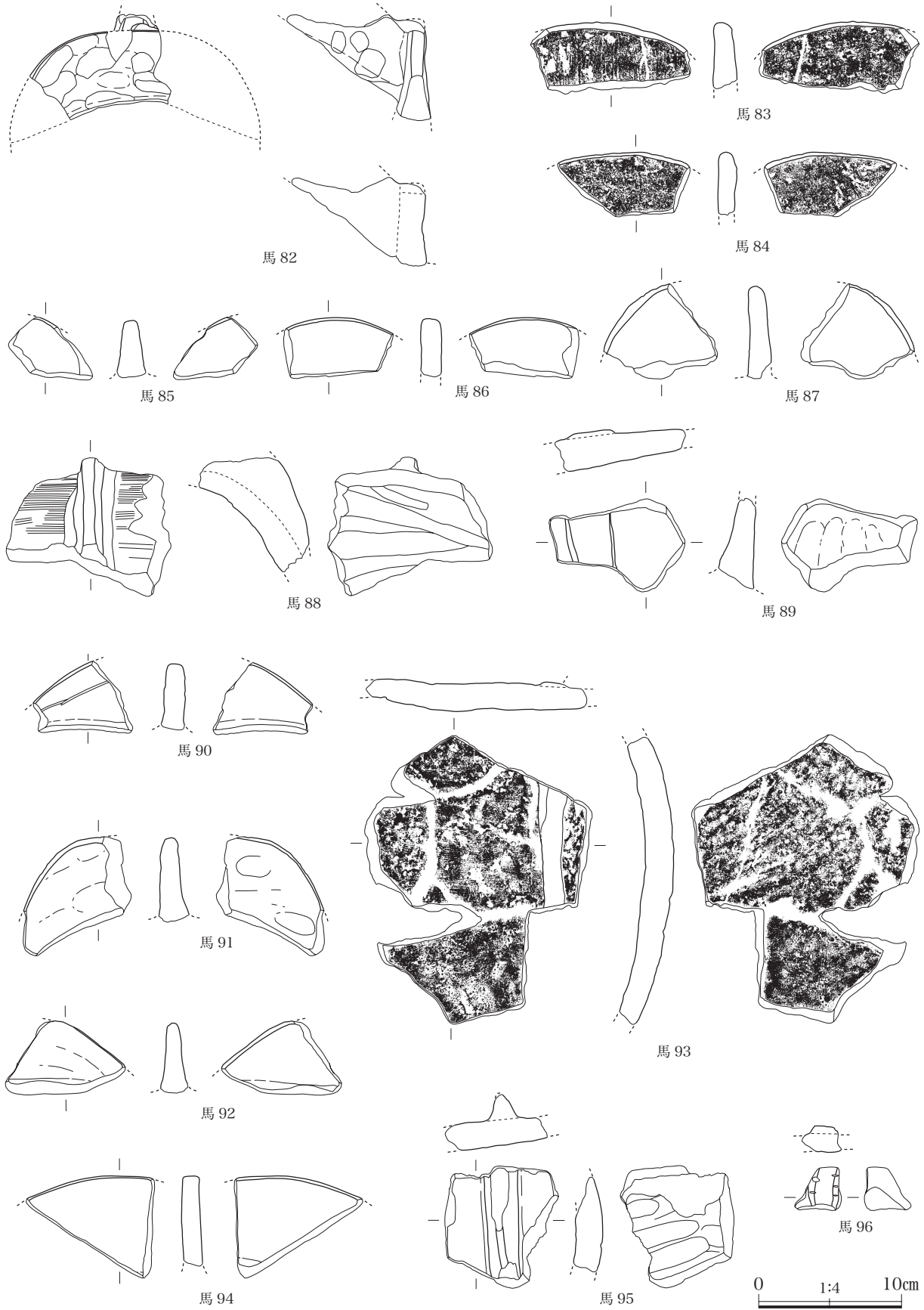


图173 馬形埴輪 (8)

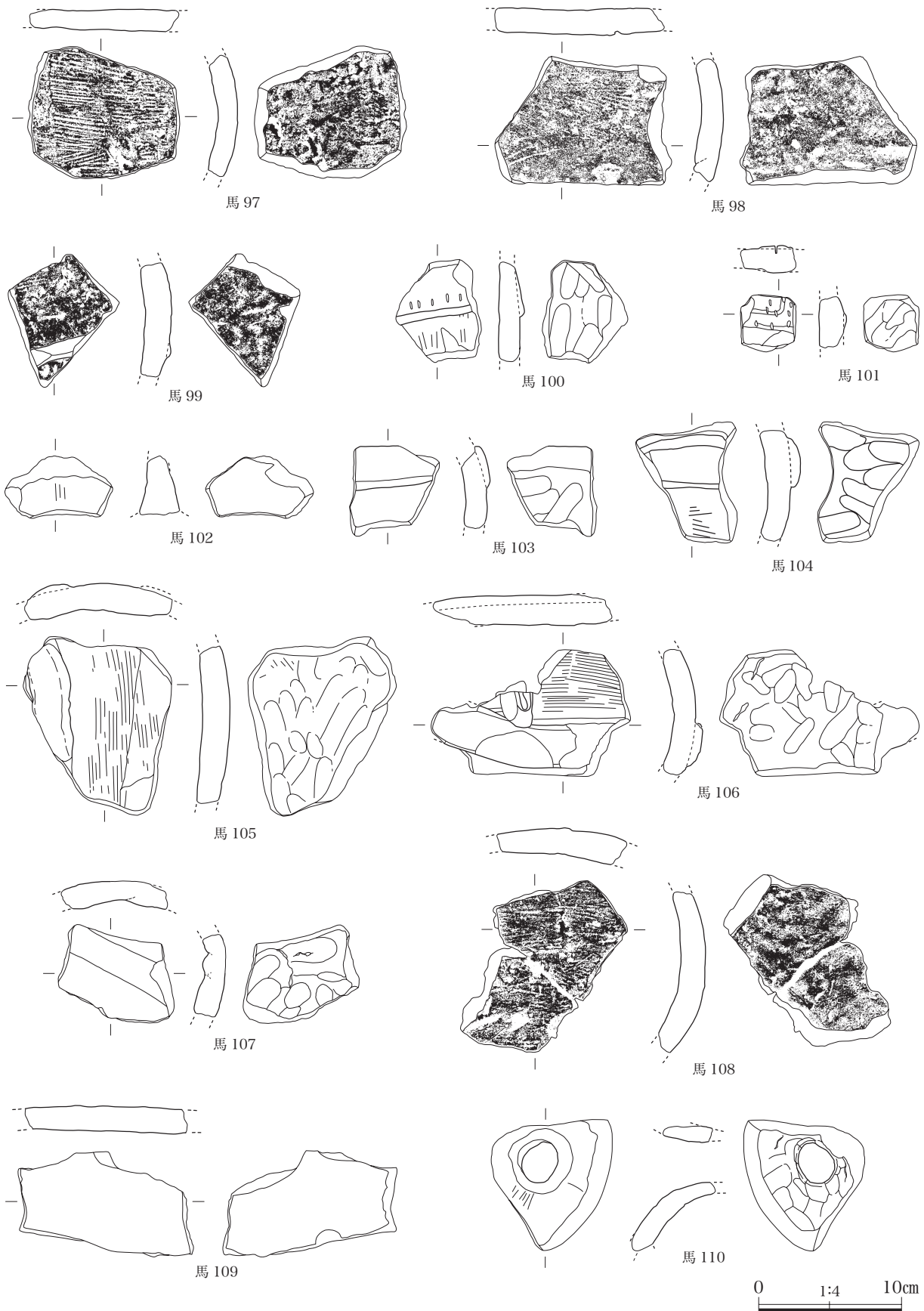


図 174 馬形埴輪 (9)

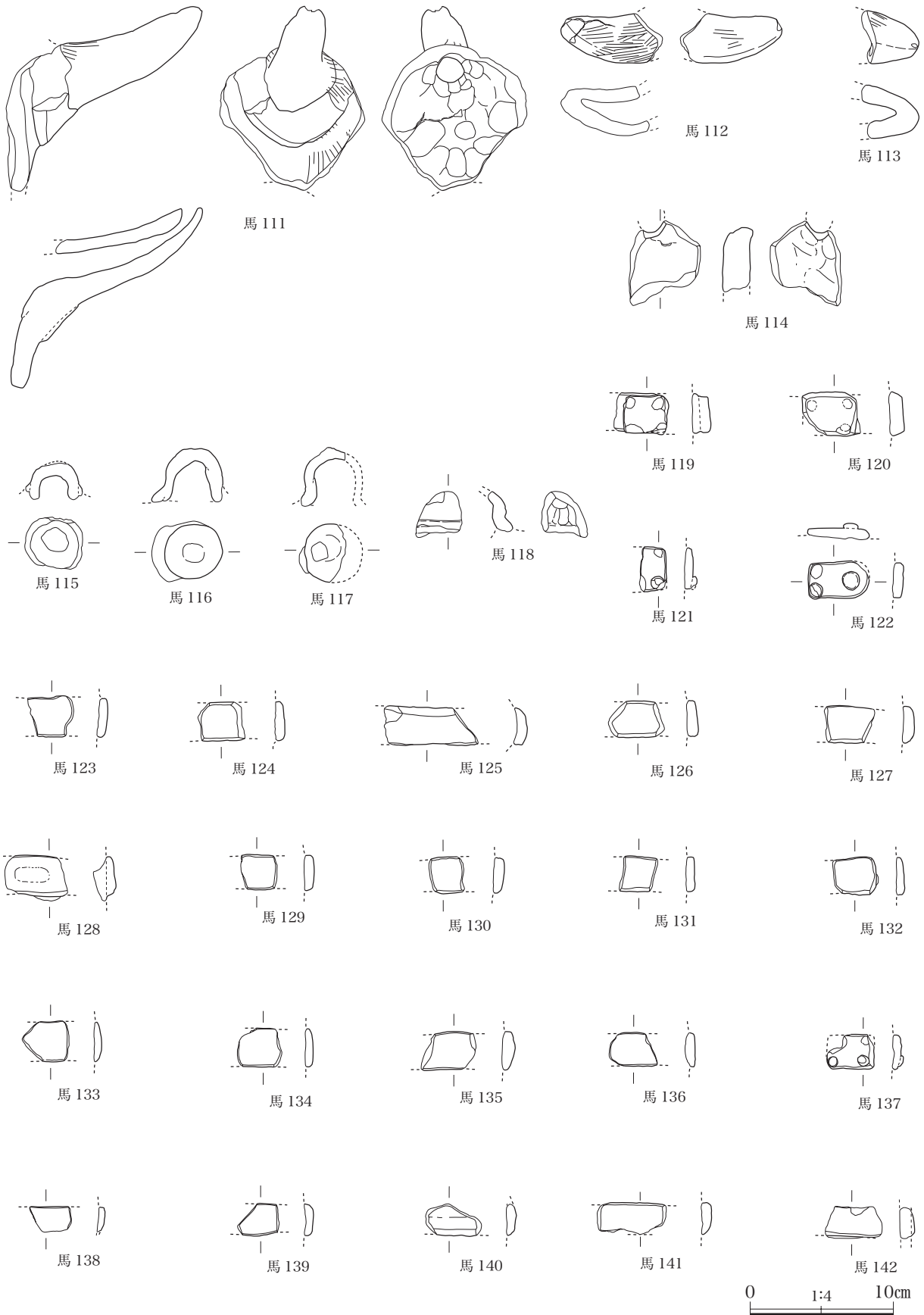


圖 175 馬形埴輪 (10)

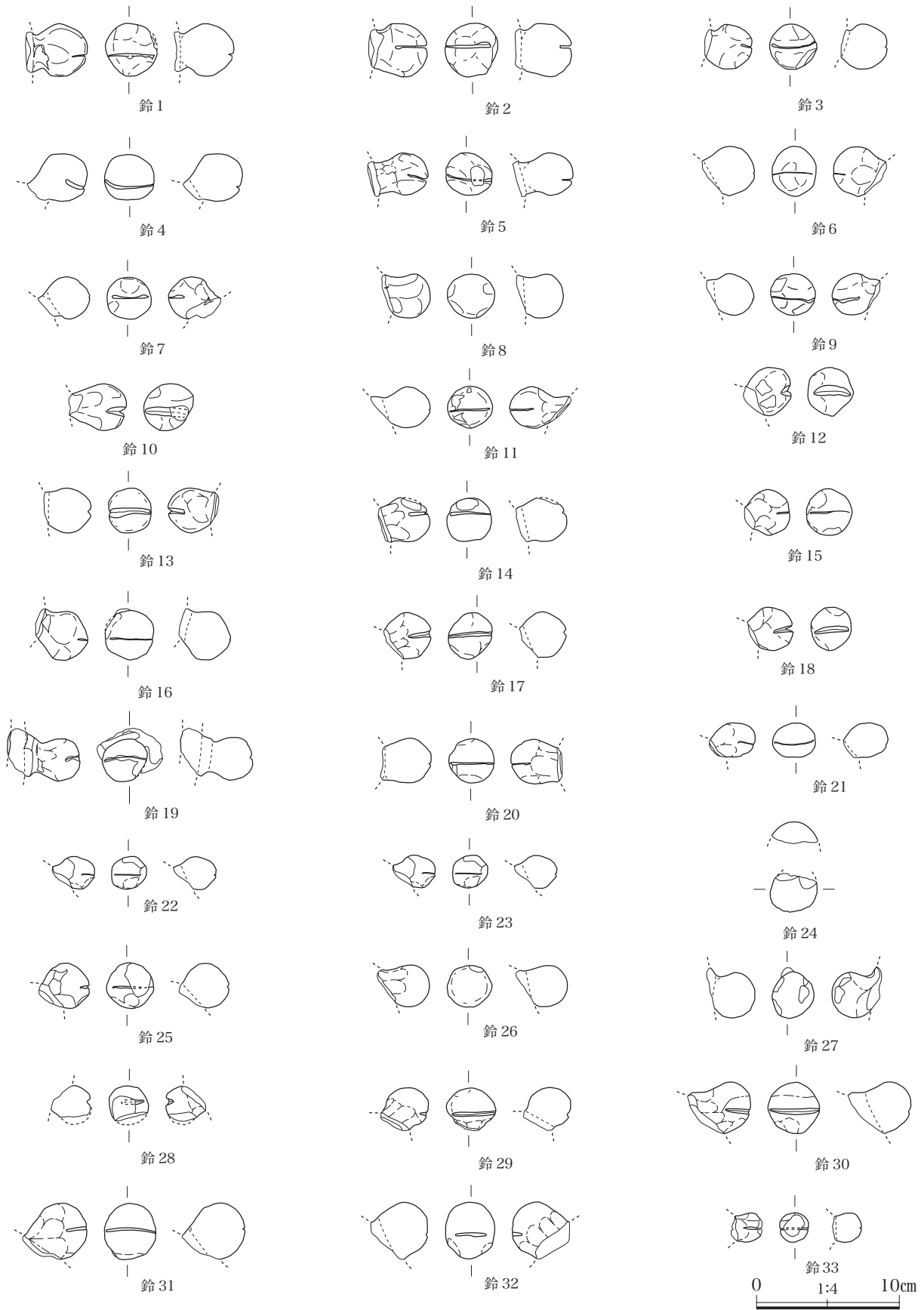


図 176 形象埴輪 (鈴片)

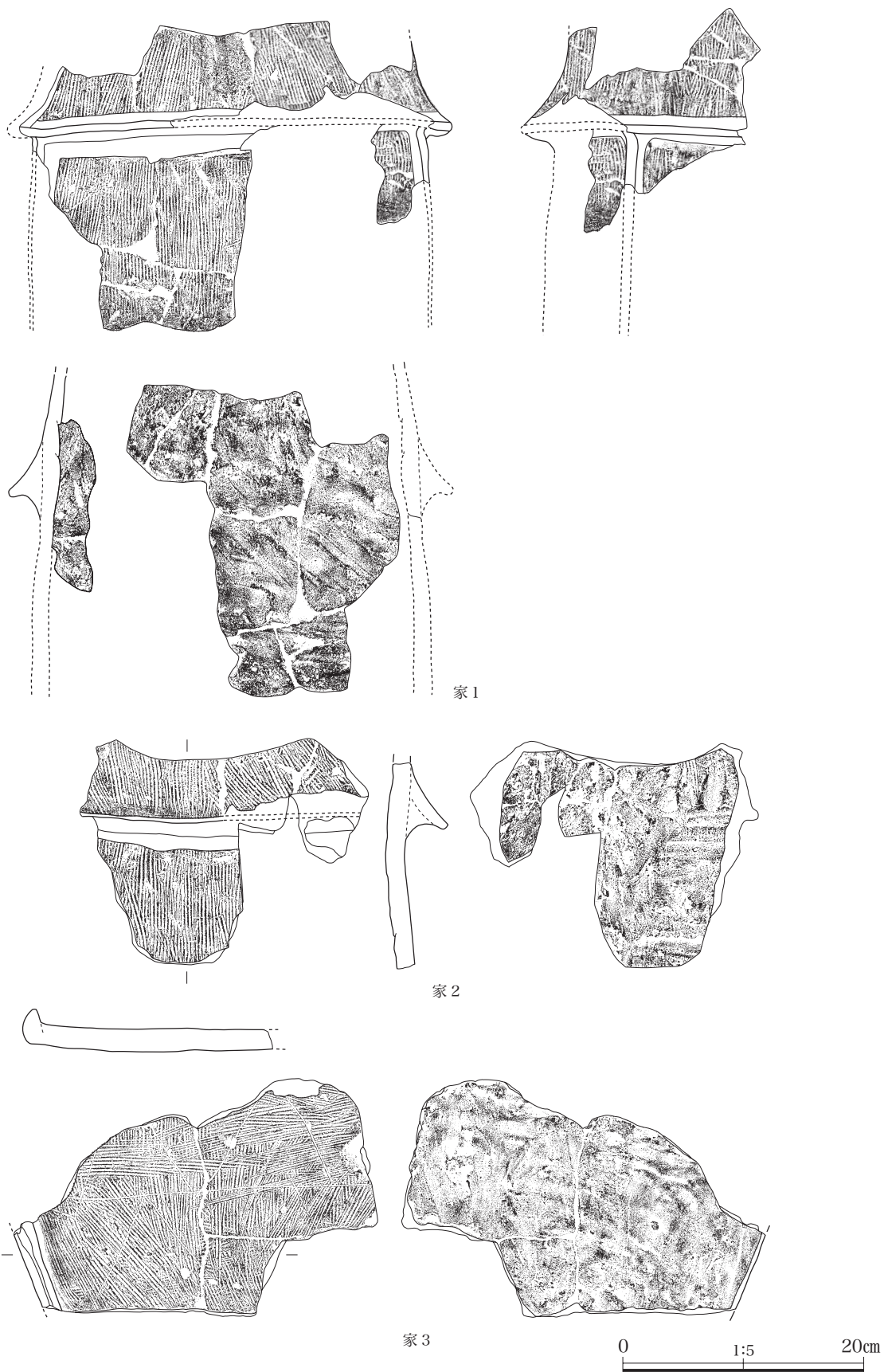


图 177 家形埴輪 (1)

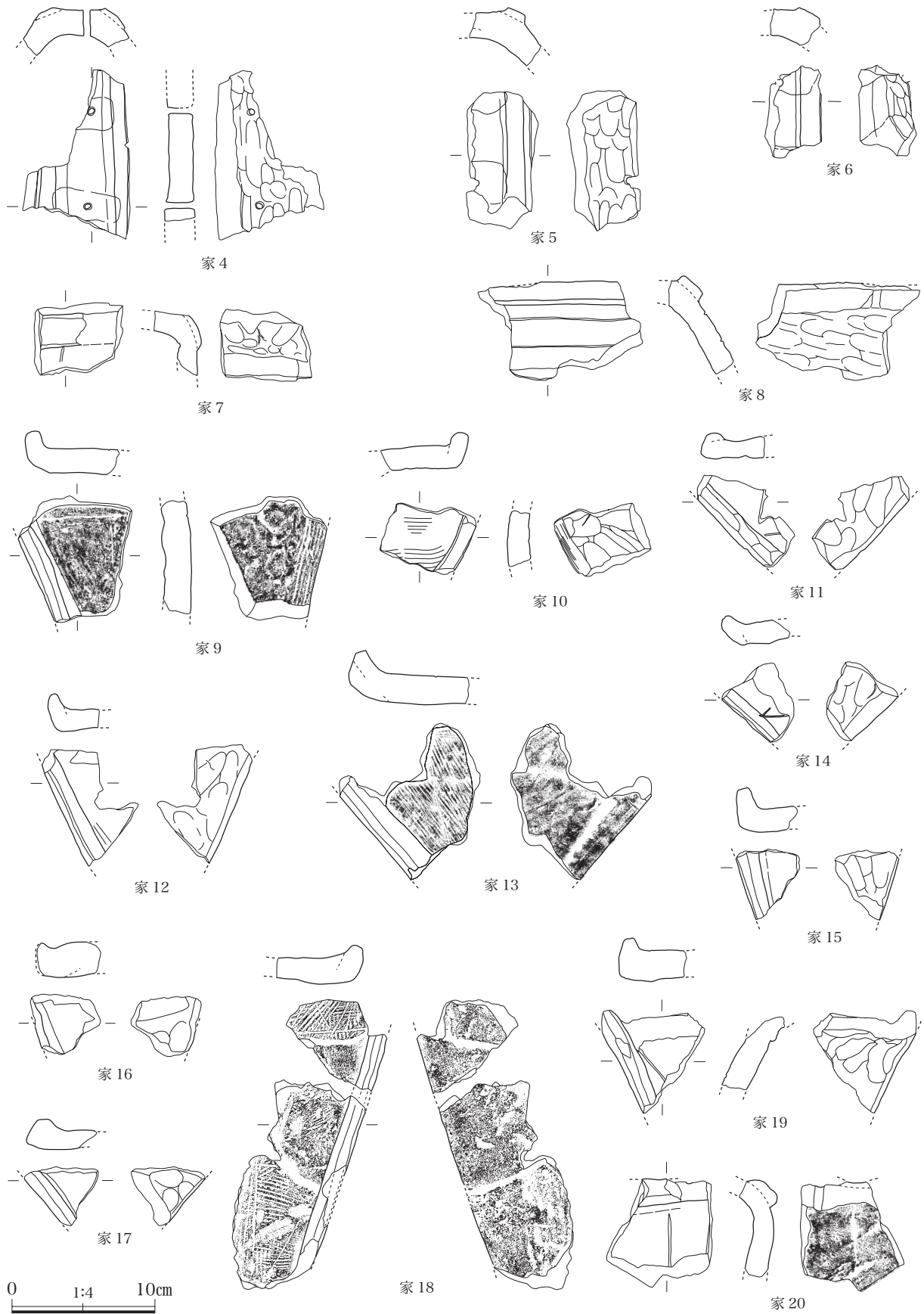


图 178 家形埴輪 (2)

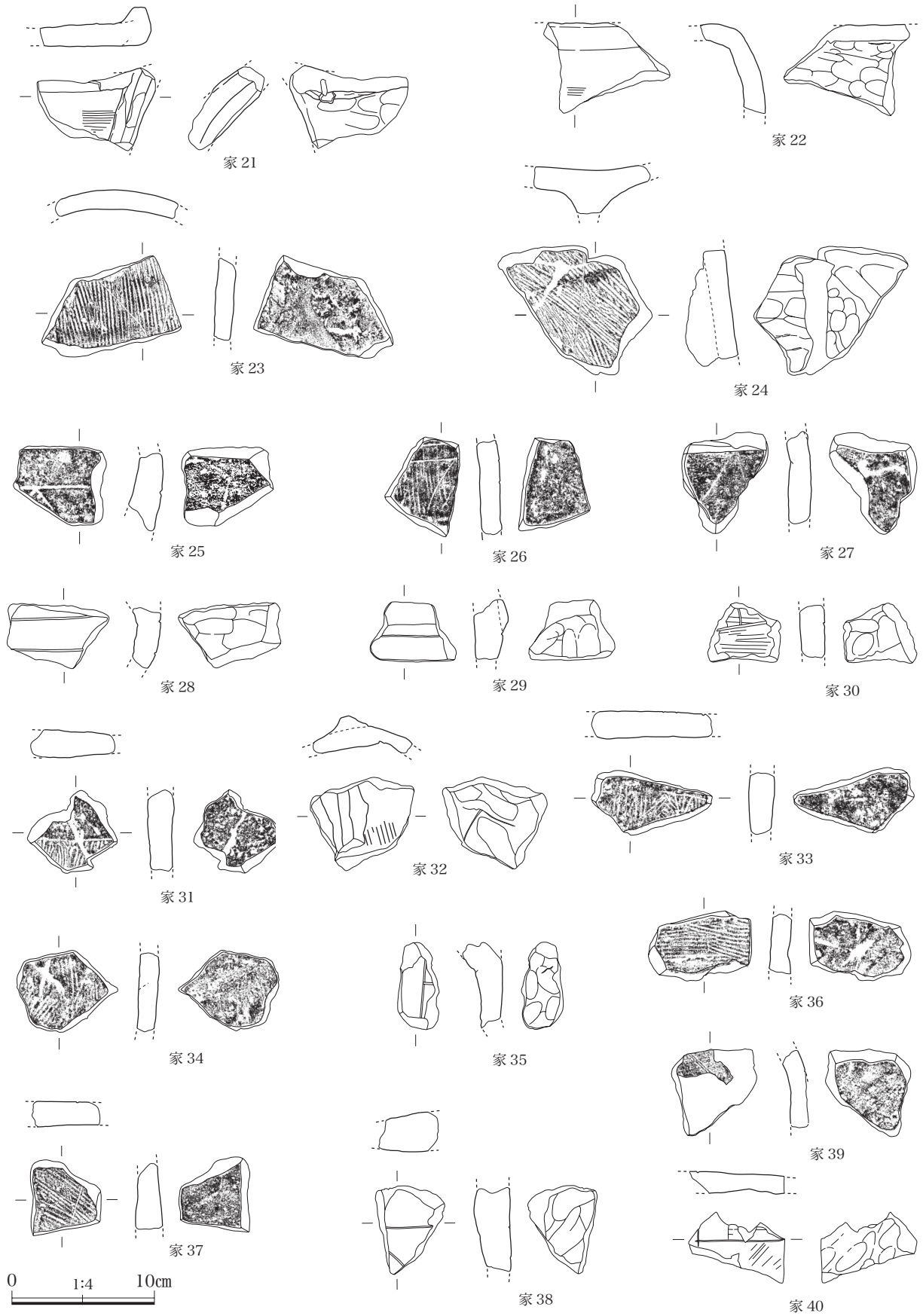


图 179 家形埴輪 (3)

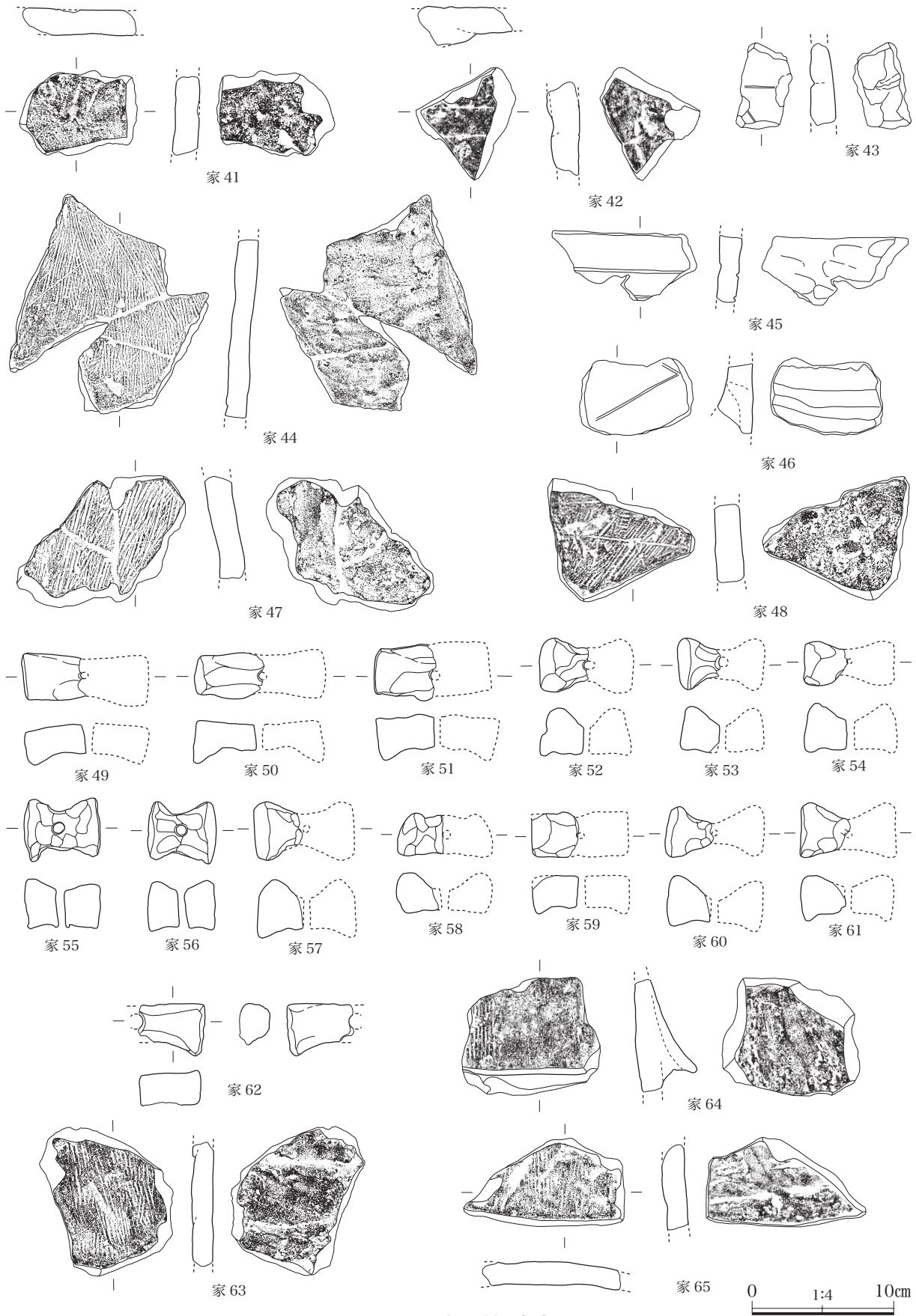


图 180 家形埴輪 (4)

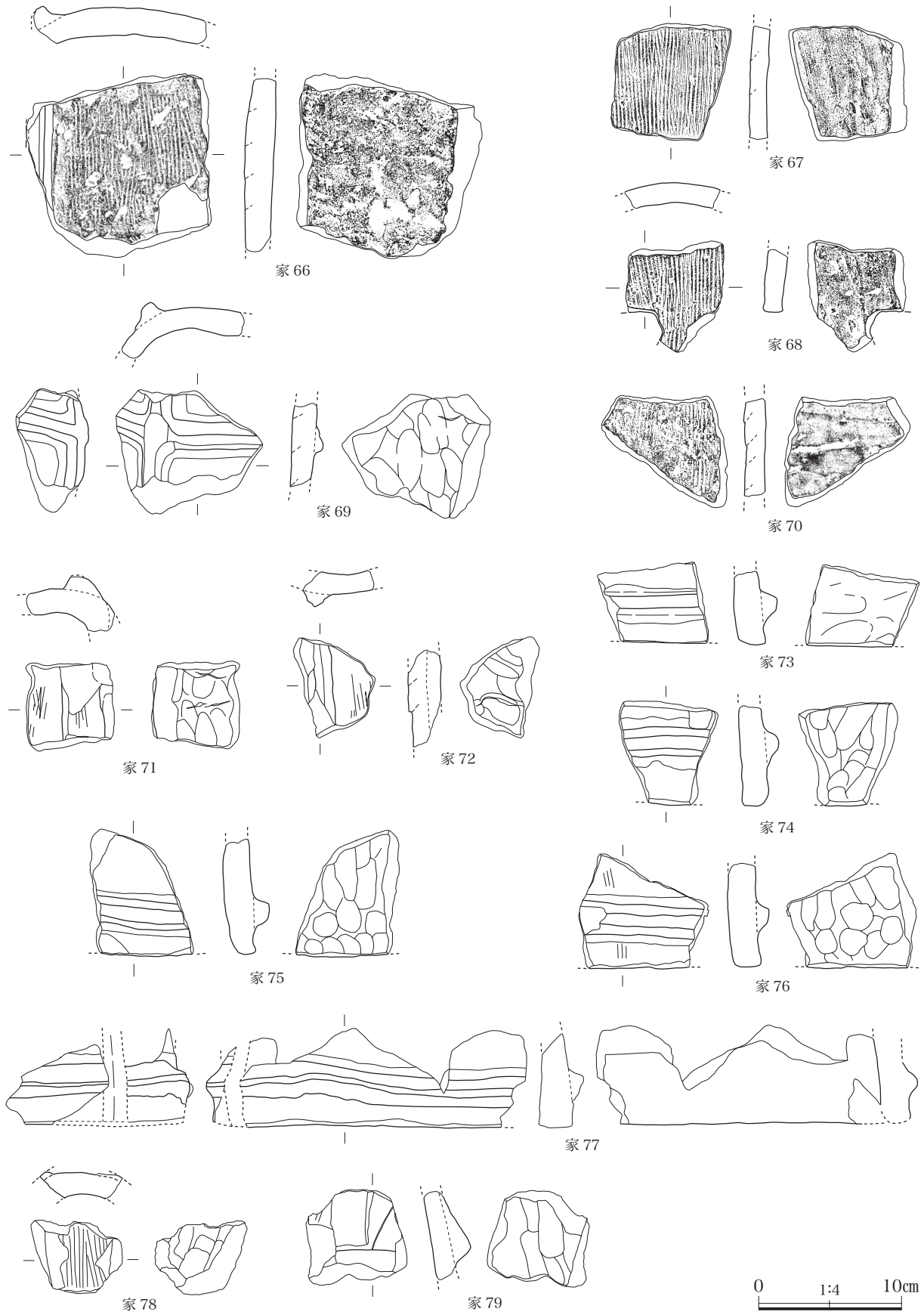


图 181 家形埴輪 (5)

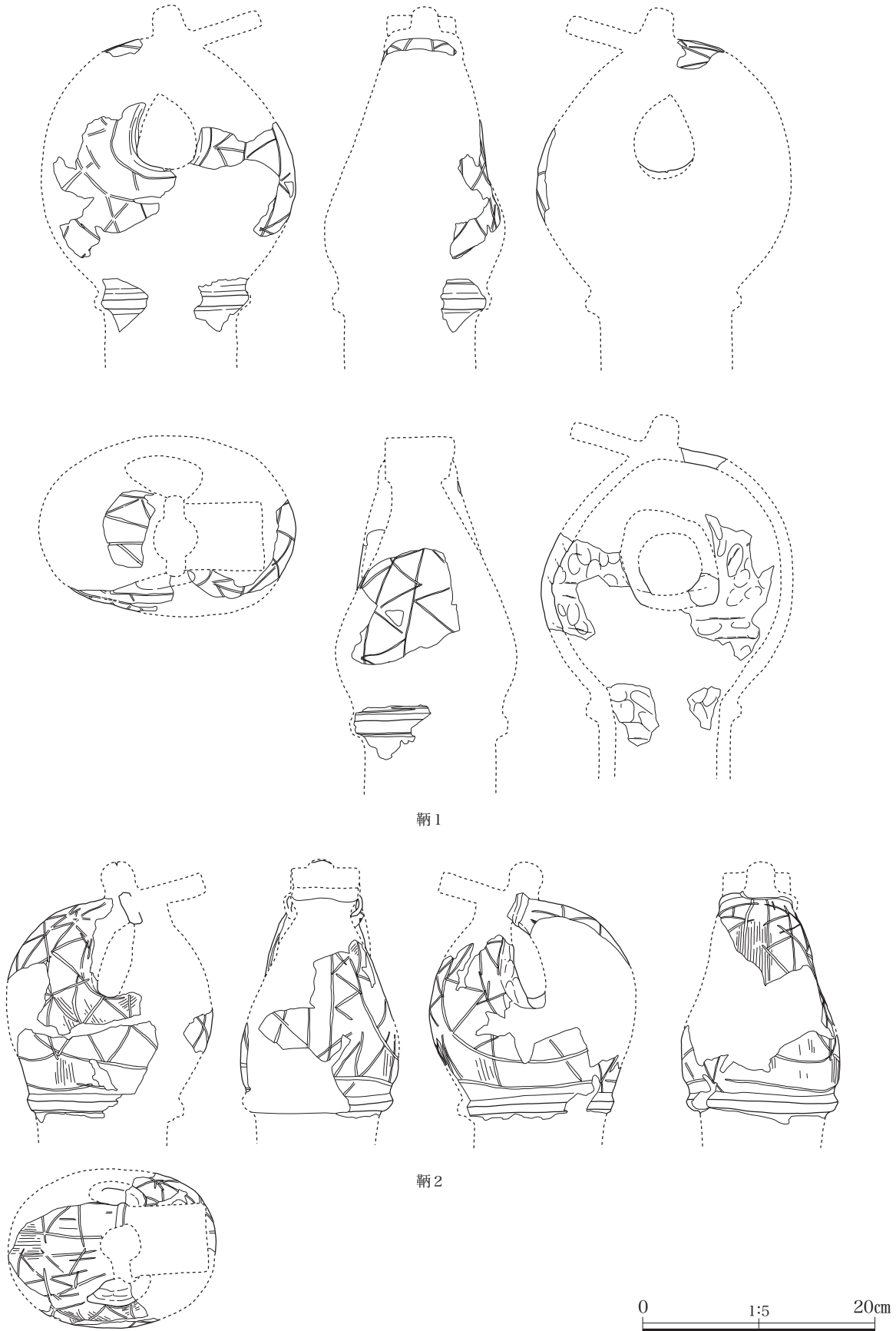


图 182 轆形埴輪 (1)

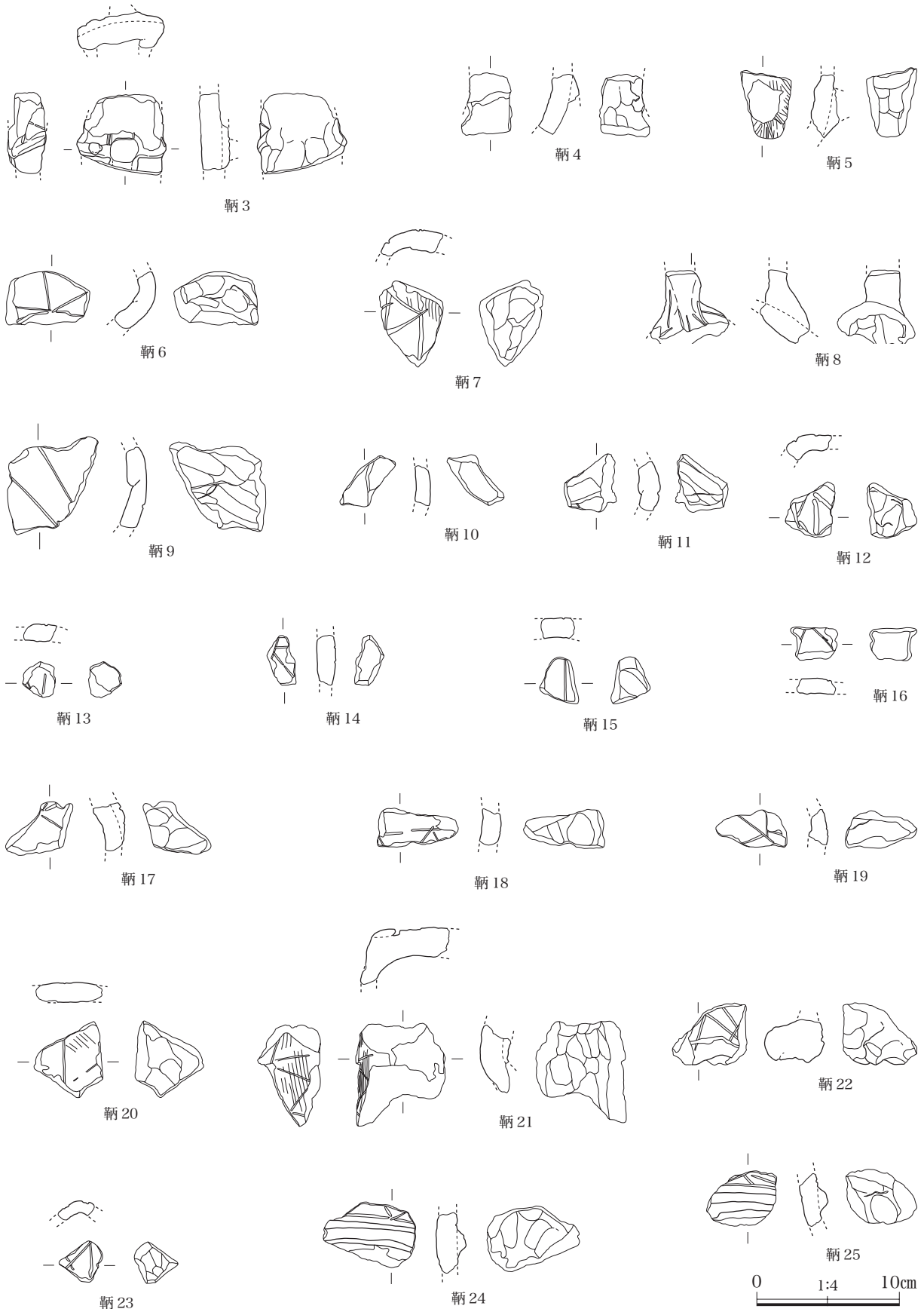


图 183 車形埴輪 (2)

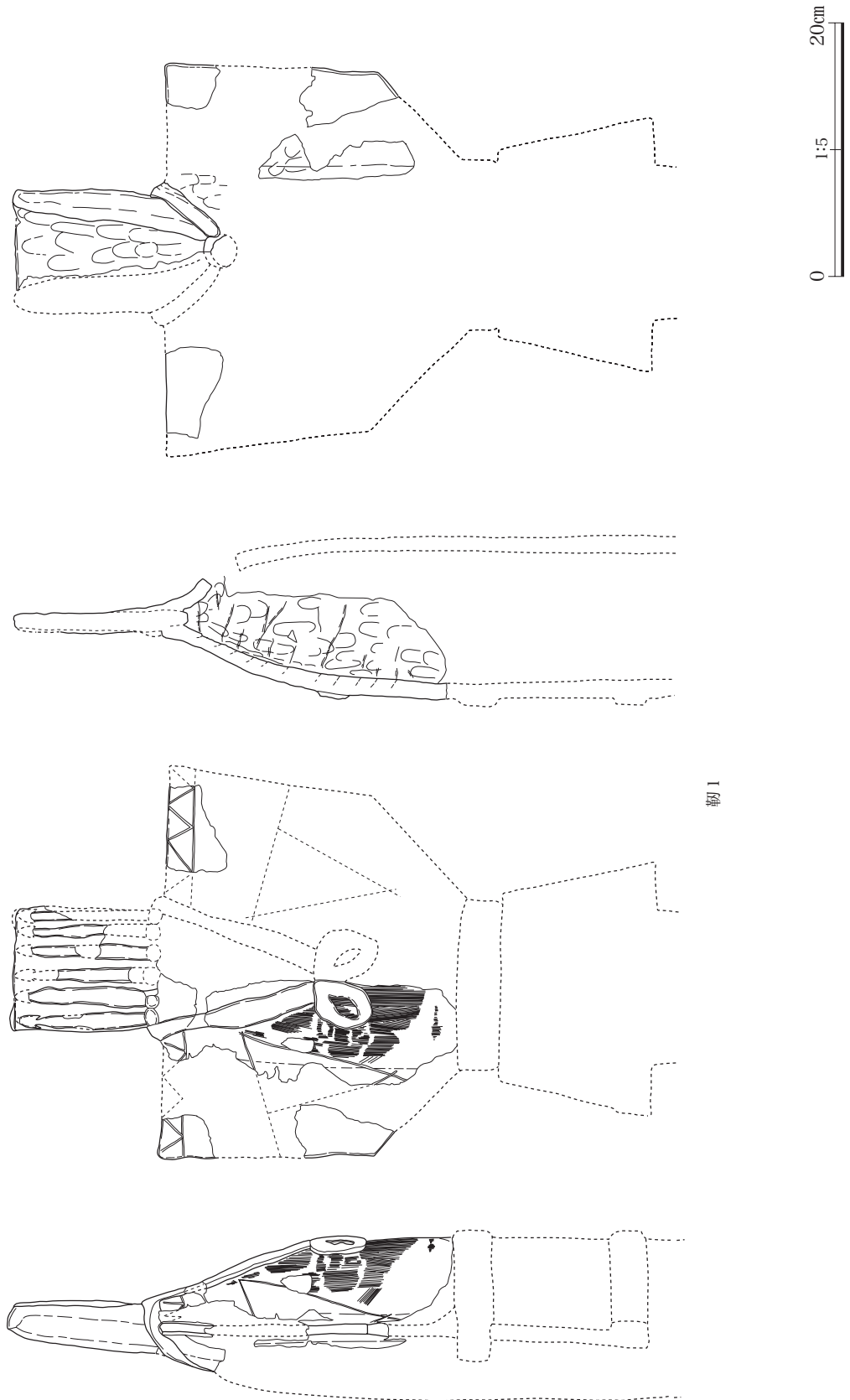


図 184 鞆形埴輪 (1)

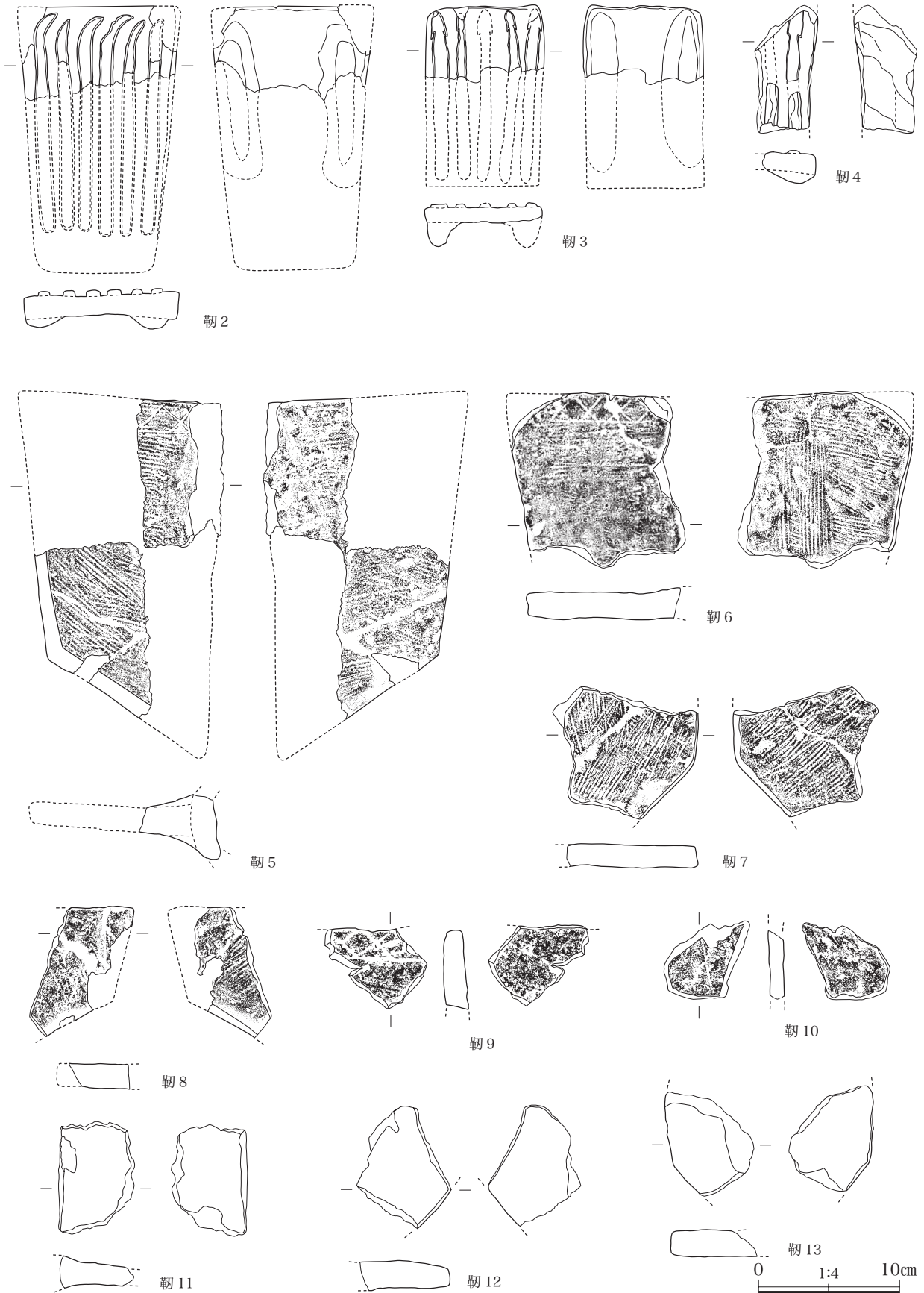


图 185 韃形埴輪 (2)

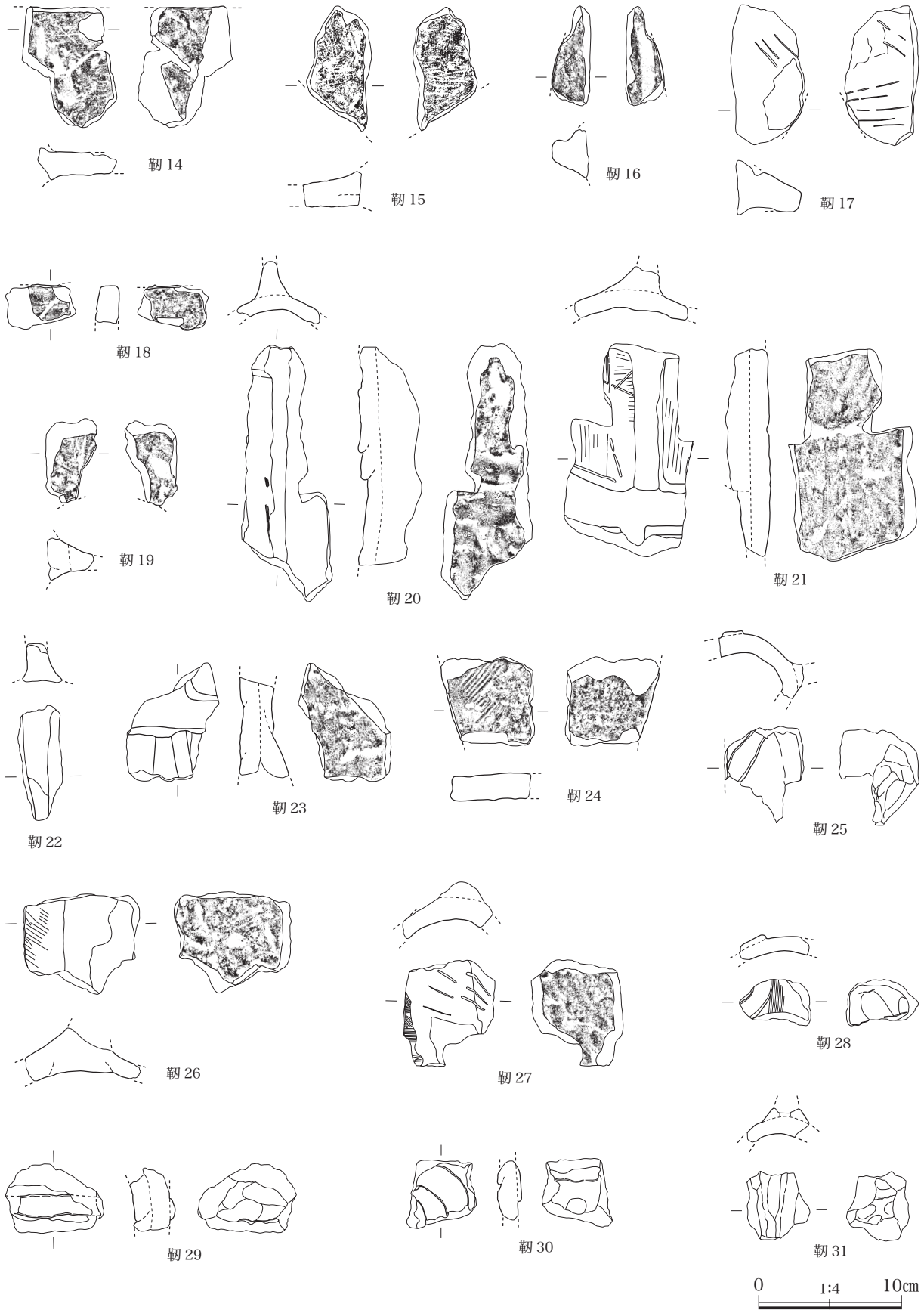


図 186 鞆形埴輪 (3)

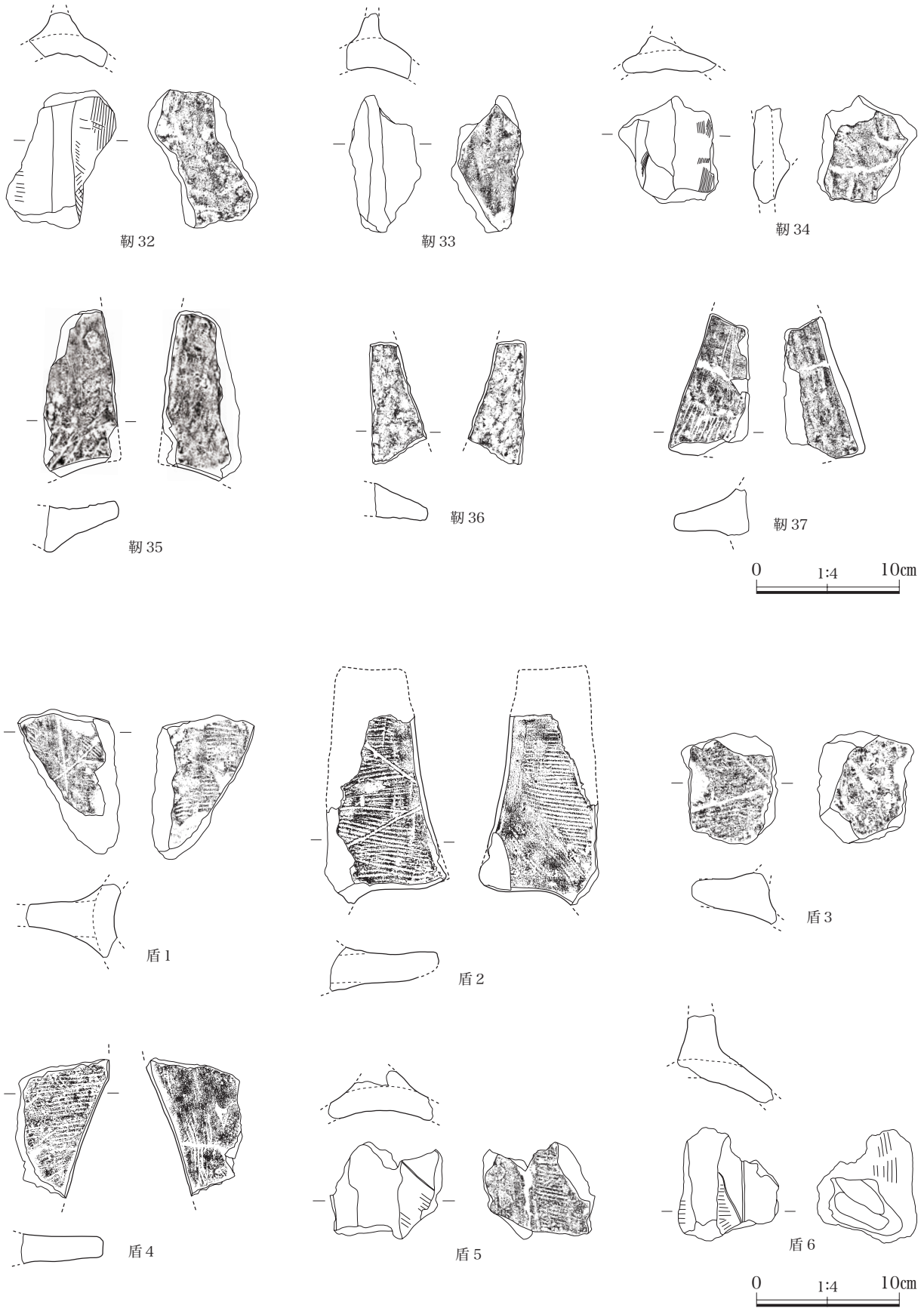
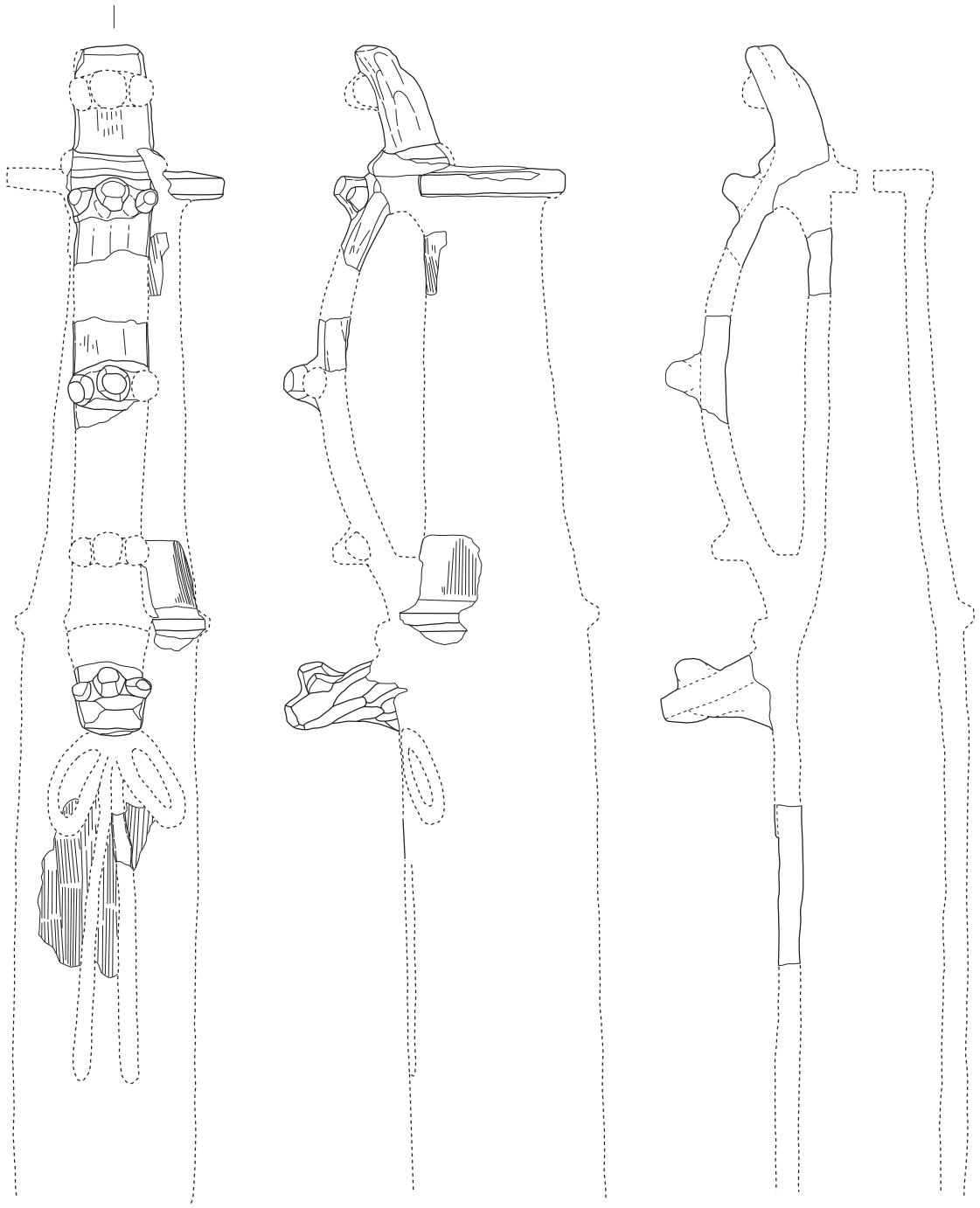


図 187 靴形埴輪・盾形埴輪



大刀1

0 1:4 10cm

図188 大刀形埴輪(1)

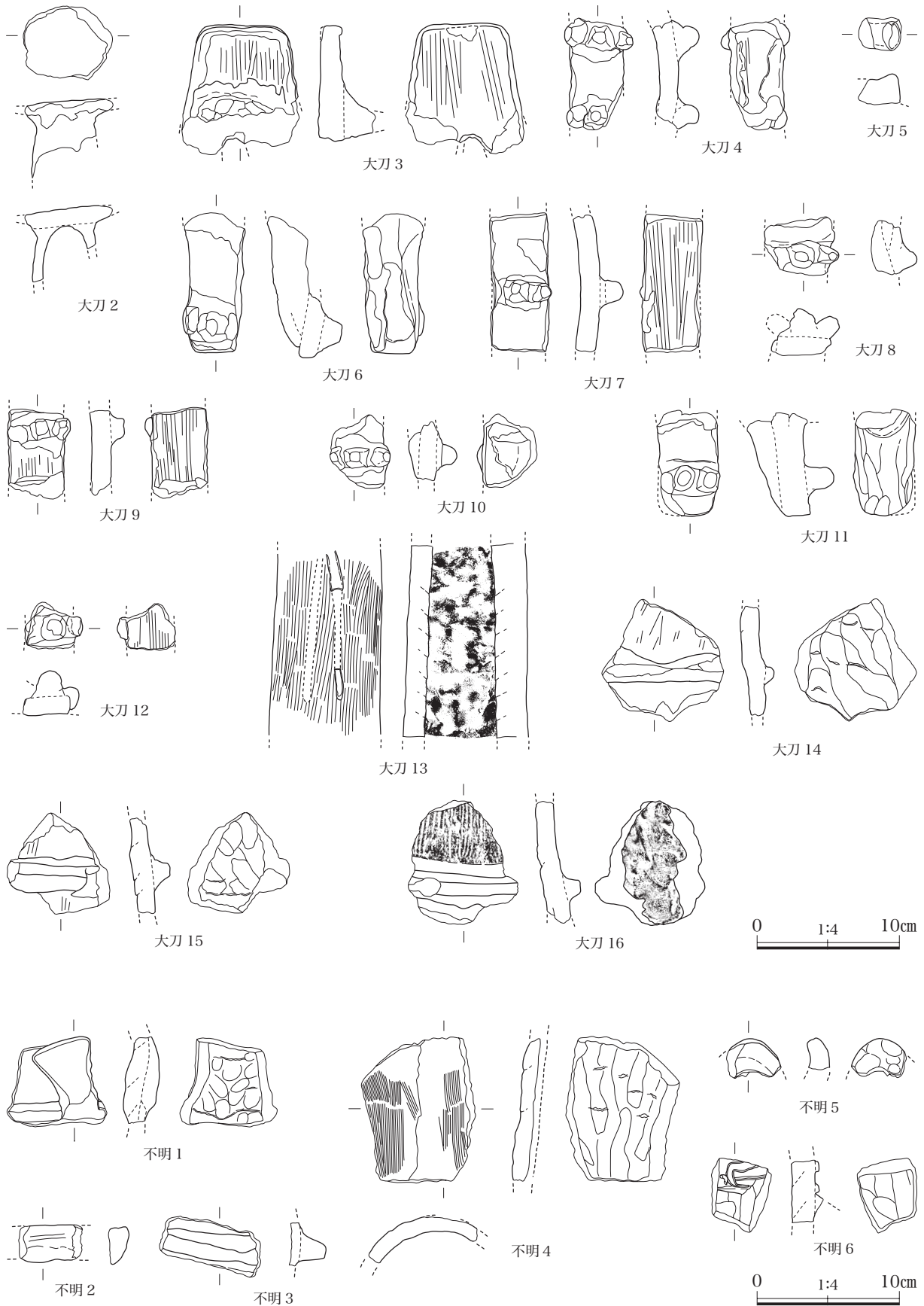


图 189 大刀形埴輪 (2)・形式不明形象埴輪 (1)

7 出土遺物について

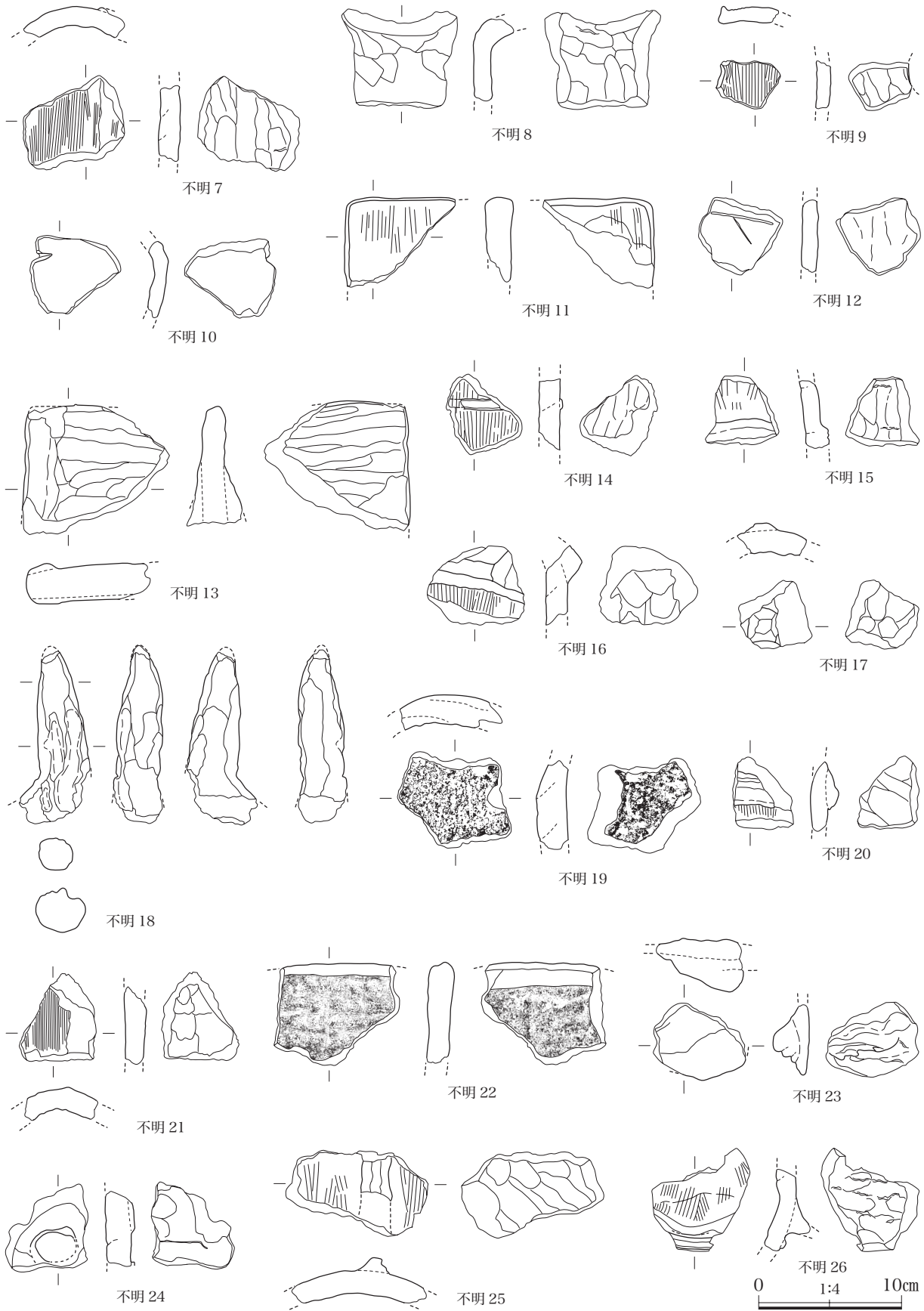


图 190 形式不明形象埴輪 (2)

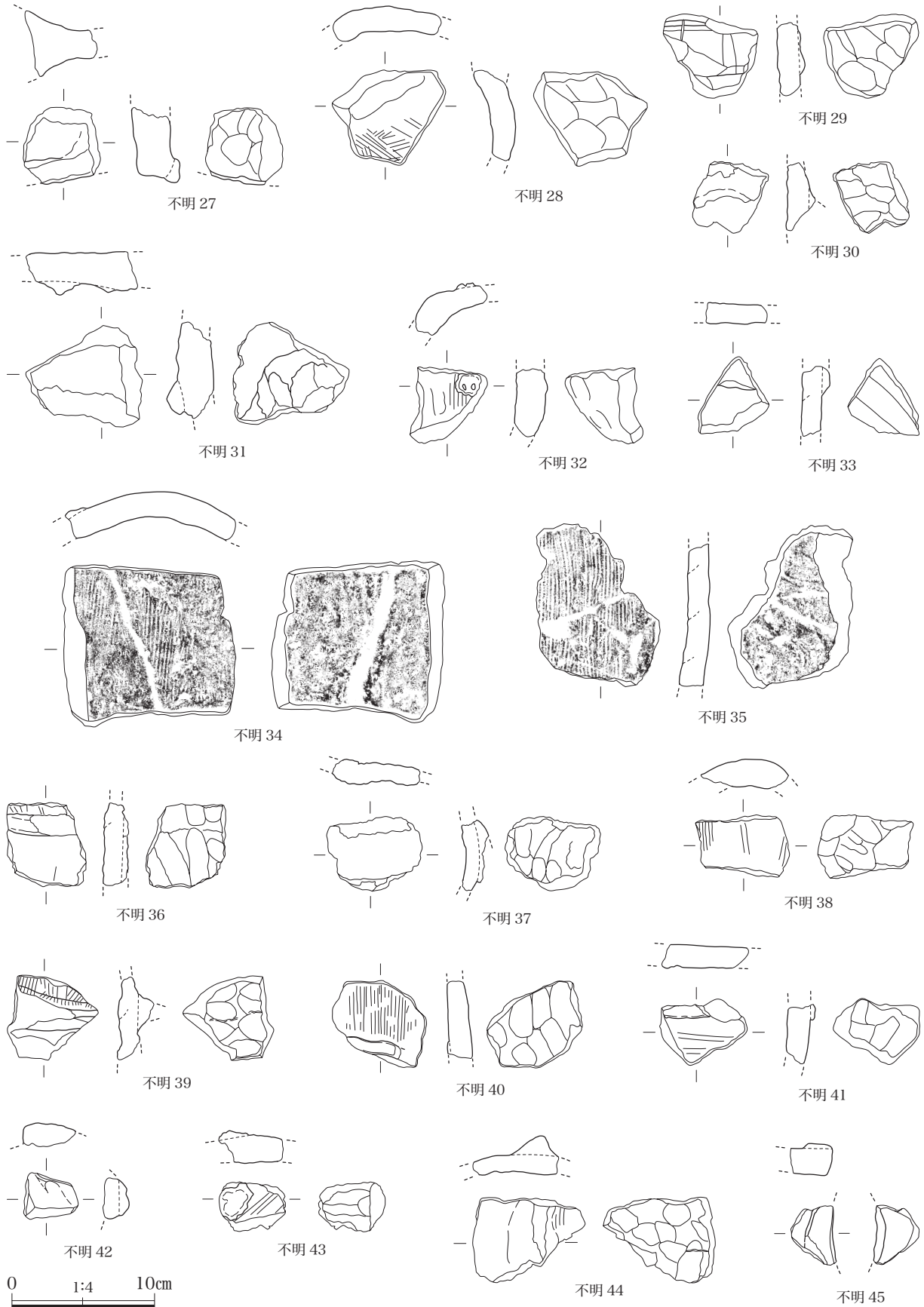


图 191 形式不明形象埴輪 (3)

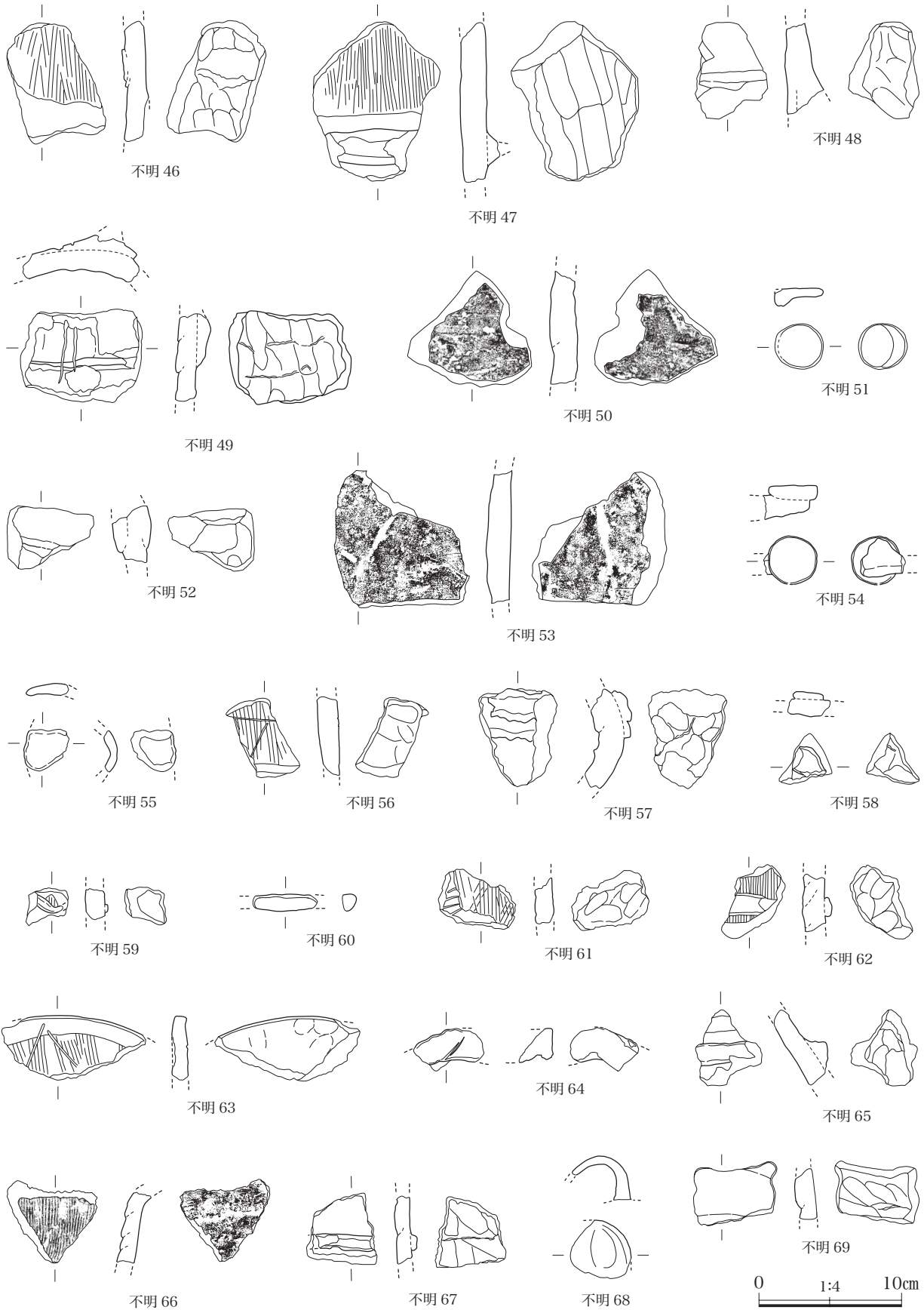


图 192 形式不明形象埴輪 (4)

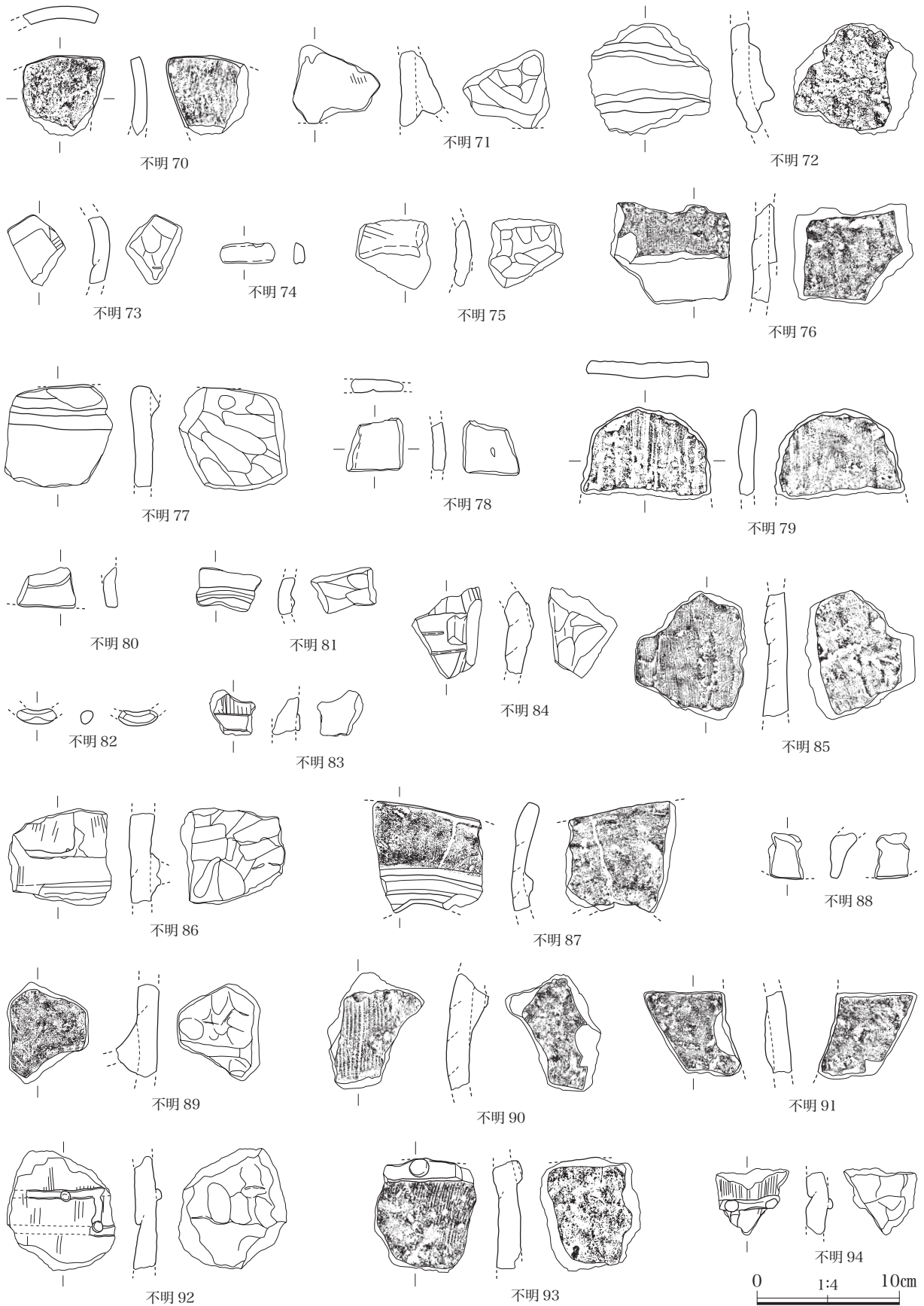


図 193 形式不明形象埴輪 (5)

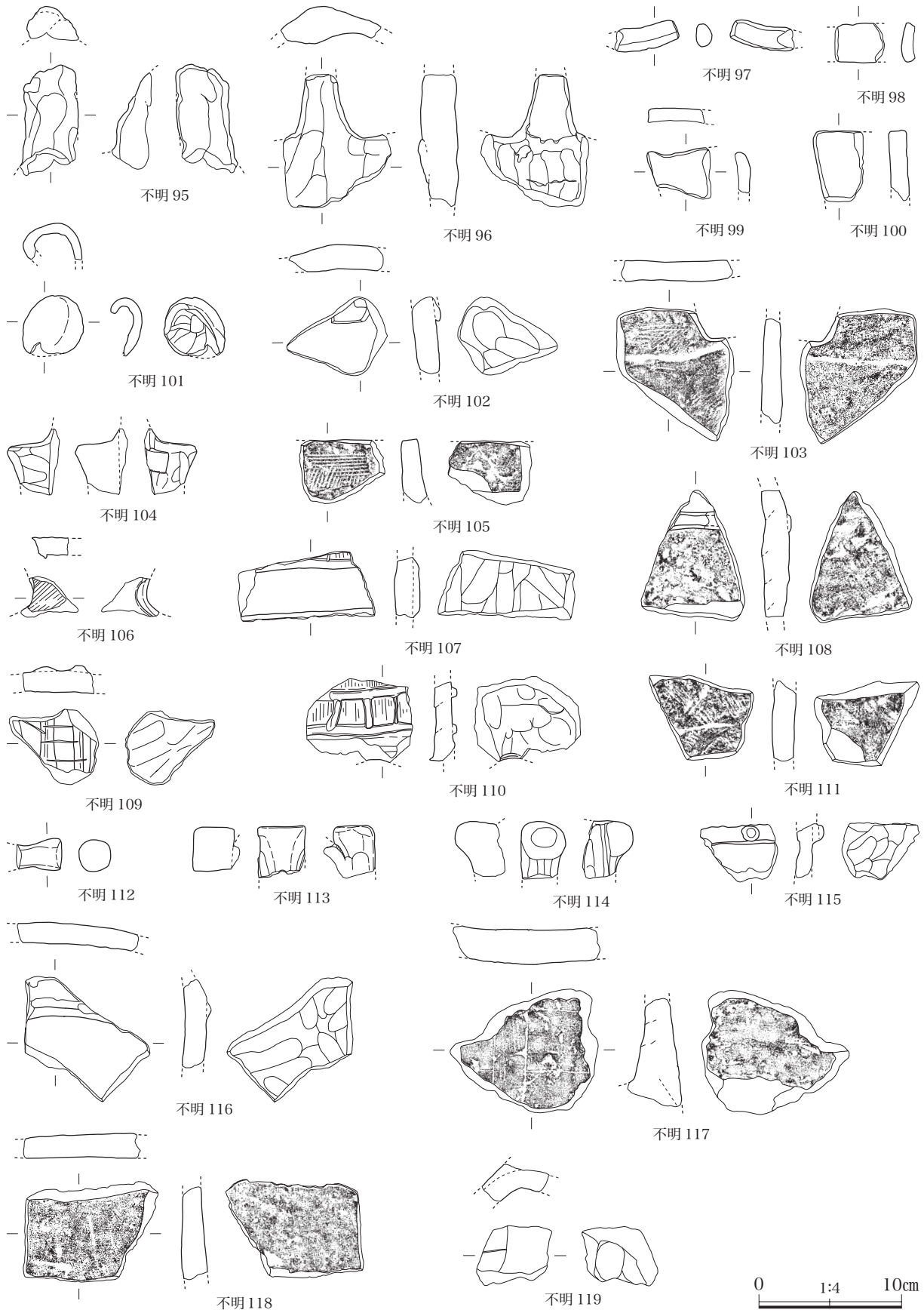


図 194 形式不明形象埴輪 (6)

(4) 鉄製品

鉄鏃は、鏃身片のカウントから計21本の存在したと考えられる。その内訳は、長頸柳葉鏃3、長頸鋸歯状鏃身関柳葉鏃1、長頸片刃鏃16、無茎腸挟長三角形鏃1である。

長頸柳葉鏃（鉄1・3・4）は、全体が把握できる資料（鉄1）を見る限り、棘を持たず、鏃身・頸部もしっかりとした造りである。

長頸鋸歯状鏃身関柳葉鏃（鉄2）は、明瞭な棘を持っており、鏃身・頸部もしっかりとした造りである。

長頸片刃鏃（鉄6～21）は、すべて棘をもつもので鏃身関もしっかりとした角関であり、関は明瞭な棘を持つものである。

無茎腸挟長三角形鏃（鉄5）は形態的にはやや浅い逆刺を持つことが特徴といえる。（深澤）

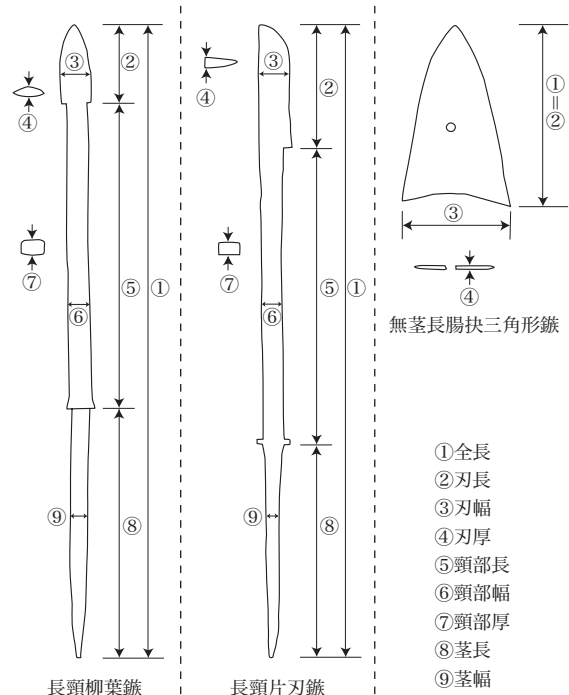


図195 鉄鏃計測位置 凡例

表47 成塚向山2号墳出土 鉄鏃計測表(1)

遺物番号	種類	重量(g)	①全長(cm)	②刃長(cm)	③刃幅(cm)	④刃厚(cm)	⑤頸部長(cm)	⑥頸部幅(cm)	⑦頸部厚(cm)	⑧茎長(cm)	⑨茎幅(cm)	備考
1	鉄鏃	17.76	16.8	1.8	0.8	0.15~0.20	8.1	0.55	0.3	6.0	0.3~0.4	台形関・柳葉鏃
2	鉄鏃	14.08	15.2	2.6	0.9	0.3	8.7	0.6	0.35	3.7	0.45	柳葉棘関鏃
3	鉄鏃	5.17	4.0	2.95	1.05	0.2	1.2	0.6	0.4	-	-	長頸柳葉鏃・片丸造り
4	鉄鏃	4.49	4.1	2.3	1.0	0.25	1.3	0.6	0.4	-	-	長頸柳葉鏃・片丸造り
5	鉄鏃	6.57	4.3	4.3	3.2	0.1	-	-	-	-	-	無茎浅逆刺長三角形鏃
6	鉄鏃	8.17	5.3	3.6	0.9	0.3	1.6	0.8	0.4	-	-	長頸片刃鏃。片平造りに近い作り方をしている
7	鉄鏃	10.97	8.5	3.2	0.8	0.25	5.2	0.50~0.65	0.35	-	-	長頸片刃鏃・片平造りに近い作り
8	鉄鏃	23.52	14.8	3.7	0.7	0.2~0.25	9.5	0.5~0.65	0.35~0.4	1.6	0.35~0.6	明瞭な棘状関・長頸片刃鏃
9	鉄鏃	17.42	14.6	3.7	0.8	0.2	9.3	0.5~0.6	0.35~0.4	1.6	0.4~0.55	明瞭な棘状関・片平造りに近い作り・長頸片刃鏃
10	鉄鏃	12.76	15.2	3.5	0.75	0.2	9.3	0.5~0.55	0.30~0.35	2.5	0.35~0.55	明瞭な棘状関・片平造りに近い作り・長頸片刃鏃
11	鉄鏃	25.01	17.2	3.3	0.75	0.25	8.9	0.5	0.3	4.6	0.3~0.4	片刃棘関鏃
12	鉄鏃	40.94	18.6	3.6	0.9	0.35	8.6	0.6	0.4	6.3	0.25~0.35	片刃棘関鏃・中茎に木質
13	鉄鏃	6.29	10.0	3.65	0.8	0.25	6.2	0.5	0.3	-	-	片刃

表 48 成塚向山2号墳出土 鉄鏃計測表(2)

遺物 番号	種類	重量 (g)	①全長 (cm)	②刃長 (cm)	③刃幅 (cm)	④刃厚 (cm)	⑤頸部長 (cm)	⑥頸部幅 (cm)	⑦頸部厚 (cm)	⑧茎長 (cm)	⑨茎幅 (cm)	備 考
14	鉄鏃	14.97	5.5	3.6	0.75	0.3	1.8	0.6	0.4	—	—	片刃鏃
15	鉄鏃	(14+15)	5.3	3.5	0.8	0.3	1.8	0.6	0.4	—	—	片刃鏃
16	鉄鏃	16.07	6.0	4.0	0.85	0.2	2.1	0.5	0.35	—	—	片刃鏃
17	鉄鏃	4.81	4.9	3.5	0.8	0.3	1.4	0.55	0.35	—	—	片刃鏃
18	鉄鏃	4.01	3.6	2.8	0.85	0.3	0.8	0.7	0.25	—	—	片刃鏃
19	鉄鏃	13.16	11.3	1.2	0.75	0.25	8.5	0.5	0.4	1.5	0.45	長頸片刃棘関鏃
20	鉄鏃	14.91	14.0	2.0	0.65	0.35	9.1	0.5	0.35	2.8	0.4	片刃・棘関鏃・ 茎部に木質残存
21	鉄鏃	11.67	8.3	1.2	0.8	0.35	5.9	0.5	0.3	0.9	0.25	片刃棘関
22	鉄鏃	(21+22)	5.4	—	—	—	2.4	0.5	0.3	2.9	0.3	棘関
23	鉄鏃	21.91	10.8	—	—	—	7.8	0.55	0.35	0.3	0.3～0.4	棘関
24	鉄鏃	(23+24)	7.4	—	—	—	6.2	0.5	0.35	1.1	0.35	棘関
25	鉄鏃	11.35	9.0	—	—	—	9.0	0.65	0.5	—	—	鏃茎のみ
26	鉄鏃	8.90	8.7	—	—	—	4.7	0.55	0.35	3.8	0.3～0.45	棘関
27	鉄鏃	16.40	12.9	—	—	—	8.7	0.5	0.35	4.2	0.3～0.4	棘関・茎部に有 機質
28	鉄鏃	11.98	11.1	—	—	—	8.1	0.55	0.35	3.0	0.35～0.45	棘関・茎部に木 質・糸巻き
29	鉄鏃	7.87	10.6	—	—	—	4.7	0.5	0.3	5.9	0.35	棘関・茎部には 木質と糸巻痕が 残存する
30	鉄鏃	6.03	8.8	—	—	—	6.3	0.45	0.35	3.1	0.3～0.4	棘関・中茎に木 質
31	鉄鏃	3.96	6.6	—	—	—	1.6	0.55	0.35	4.9	0.3～0.35	棘関・茎部に木 質
32	鉄鏃	5.20	5.4	—	—	—	2.1	0.55	0.35	3.2	0.3～0.45	棘関・茎部には 木質と糸巻痕が 部分的に残存す る
33	鉄鏃	2.97	3.7	—	—	—	0.4	0.7	—	3.3	0.5～0.6	棘関・茎部には 木質と糸巻痕が 部分的に残存す る
34	鉄鏃	3.97	2.5	—	—	—	1.6	0.55	0.35	0.9	0.45	棘関
35	鉄鏃	4.99	3.8	—	—	—	3.2	0.55	0.35	0.6	0.45	棘関
36	鉄鏃	1.78	2.8	—	—	—	1.6	0.55	0.3	1.2	0.45	台形関
37	鉄鏃	2.55	2.6	—	—	—	2.6	0.7	0.5	—	—	鏃茎のみ
38	鉄鏃	3.81	3.3	—	—	—	3.3	0.65	0.5	—	—	鏃茎のみ
39	鉄鏃	4.84	4.2	—	—	—	4.2	0.7	0.6	—	—	鏃茎のみ
40	鉄鏃	6.97	4.9	—	—	—	4.9	5.0	4.0	—	—	鏃茎のみ
41	鉄鏃	1.31	2.5	—	—	—	—	—	—	2.5	0.4	茎部に有機質
42	鉄鏃	0.93	3.0	—	—	—	—	—	—	3.0	0.25～0.4	茎のみ・木質残 存
43	鉄鏃	0.93	2.4	—	—	—	—	—	—	2.4	0.25～0.4	中茎のみ・木質 あり
44	鉄鏃	0.97	2.7	—	—	—	—	—	—	2.7	0.3	茎部のみ
45	鉄鏃	1.08	3.1	—	—	—	—	—	—	3.1	0.3～0.35	中茎のみ・木質 残存
46	鉄鏃	1.46	3.8	—	—	—	—	—	—	3.8	0.25～0.4	中茎のみ
47	鉄鏃	0.27	1.4	—	—	—	—	—	—	1.4	0.25	木質残存
48	鉄鏃	0.35	2.1	—	—	—	—	—	—	2.1	0.3	茎部のみ・樹皮 巻き痕あり
49	鉄鏃	0.74	1.9	—	—	—	—	—	—	1.9	0.3	茎部のみ・樹皮 巻き痕残存
50	鏹	7.09	4.6	—	—	0.3	—	—	—	—	—	ティアドロップ 形と推定・無窓 鏹

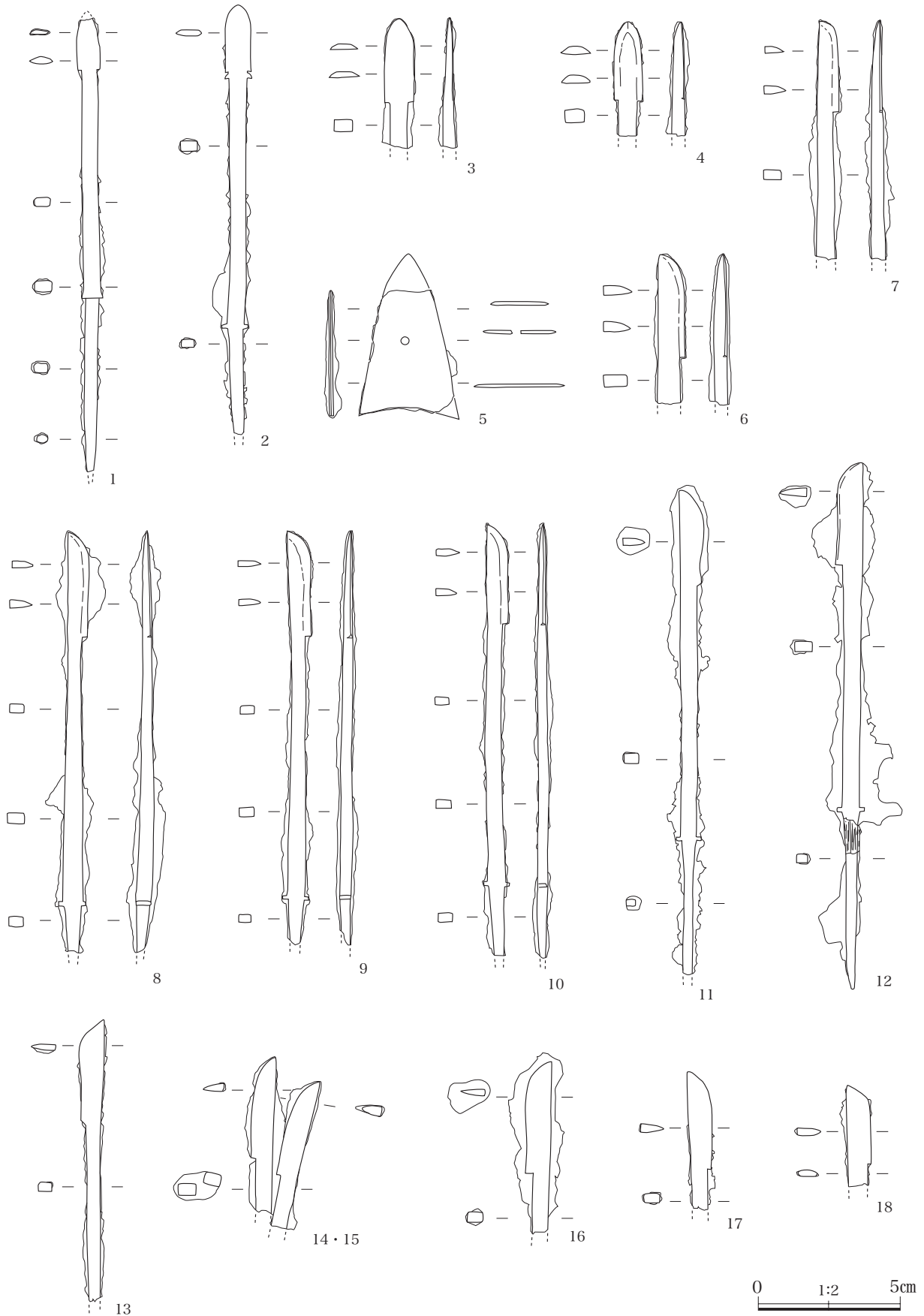


図196 石室内出土 鉄製品(1)

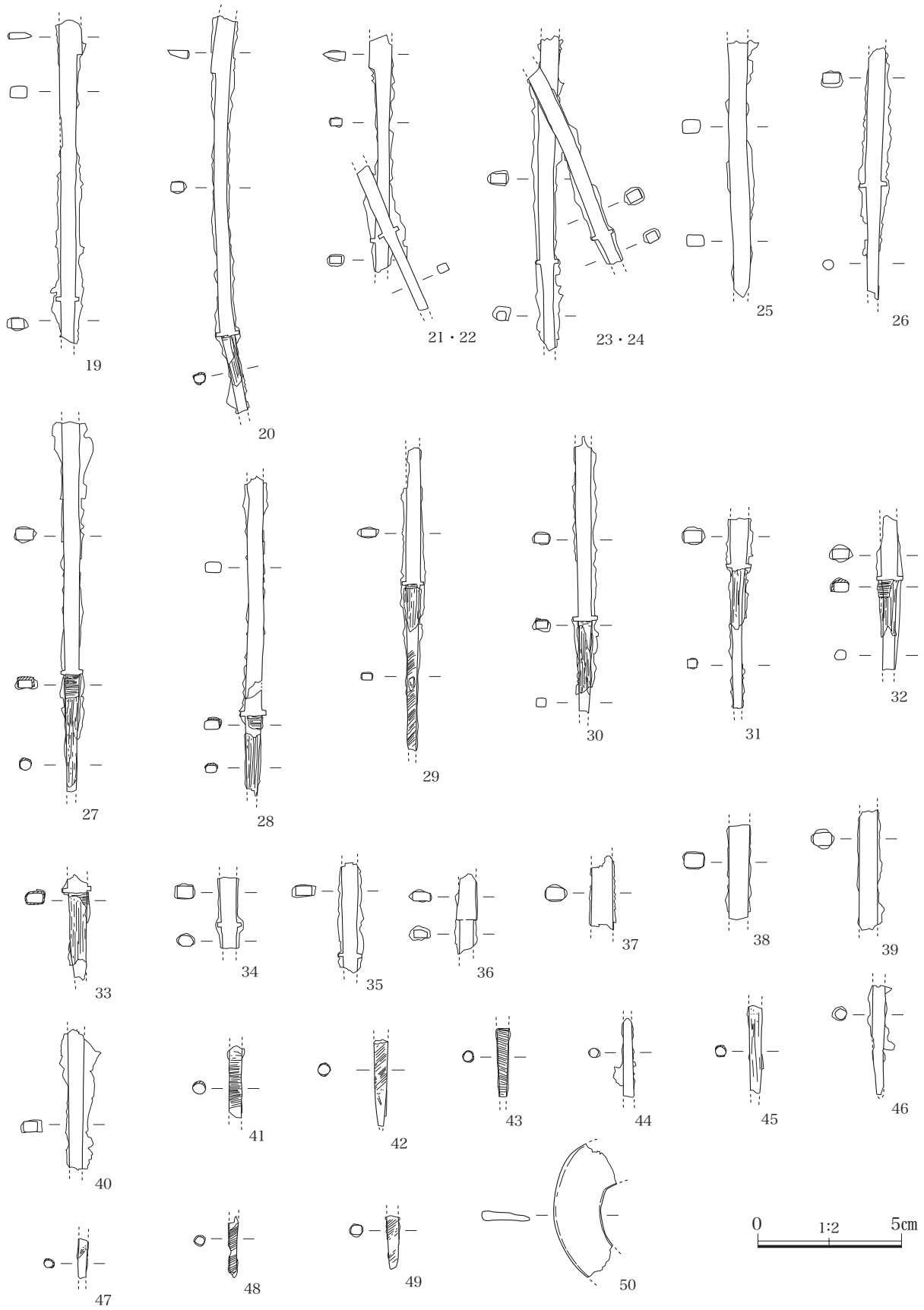


図 197 石室内出土 鉄製品 (2)

(5) 玉製品

碧玉製管玉1点とガラス小玉95点(+10点分ほどの破片)があるが、全て玄室床面(または舗石面)からの出土である。

a. 碧玉製管玉

管玉(玉-1)は濃緑色を帯びた石材であり、鳥根県花仙山産の碧玉と考えられる。

寸法は長さ2.0cm、断面径は0.54~0.55cmを計り、重量は1.13gである。片面穿孔で、鉄製錐を用いたと考えられる。

b. ガラス小玉

ガラス小玉(玉2~96)は色調においてコバル

ト発色の紺系と銅発色の青系の2種類が認められる。目視および材質分析の結果(「第8章4」参照)、材質が明確なものにはカリガラスとソーダ石灰ガラスがある。

個々の資料の寸法は表49・50にあるが、これらの寸法は直径0.26~0.96cm、厚さは0.17~0.90cm、孔径0.10~0.30cmの範疇にある。重量は0.03~1.07gである。製作技法には引き伸ばし法と鋳型法の2種類が認められる。

(本文:深澤・大賀/観察表:大賀)

表49 成塚向山2号墳出土 玉製品観察表(1)

玉番号	種類	材質		色調	製作技法	縦長(cm)	横長(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
		材質名	Al ₂ O ₃ 含有量								
1	管玉	碧玉	-	濃緑色		0.55	0.54	2.00	0.20	1.13	花仙山産
2	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.70	0.68	0.52	0.20	0.39	材質調査有
3	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.78	0.77	0.66	0.20	0.63	
4	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.74	0.69	0.54	0.20	0.42	
5	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.67	0.66	0.61	0.20	0.40	材質調査有
6	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.78	0.72	0.86	0.20	0.84	
7	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.57	0.55	0.46	0.20	0.22	緑味強・材質調査有
8	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.40	0.38	0.31	0.20	0.07	材質調査有
9	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.94	0.86	0.90	0.25	1.07	
10	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.50	0.47	0.50	0.15	0.20	白状・材質調査有
11	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.73	0.67	0.48	0.20	0.39	
12	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.72	0.70	0.36	0.15	0.27	
13	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.87	0.84	0.57	0.20	0.66	
14	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.96	0.94	0.76	0.20	1.00	
15	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.65	0.61	0.51	0.15	0.33	
16	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.67	0.60	0.46	0.20	0.29	
17	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.65	0.61	0.52	0.20	0.31	
18	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.66	0.64	0.43	0.20	0.26	孔径やや大
19	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.67	0.65	0.60	0.15	0.42	
20	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.78	0.70	0.42	0.15	0.35	
21	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.68	0.66	0.53	0.10	0.39	
22	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.63	0.62	0.48	0.10	0.32	
23	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.58	0.57	0.36	0.30	0.16	材質調査有
24	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.55	0.54	0.34	0.15	0.17	
25	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.67	0.63	0.40	0.20	0.27	
26	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.66	0.62	0.36	0.30	0.19	
27	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.76	0.59	0.54	0.10	0.39	
28	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.36	0.34	0.23	0.15	0.04	小型・材質調査有
29	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.72	0.69	0.41	0.15	0.32	
30	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.40	0.39	0.30	0.10	0.07	
31	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.61	0.58	0.44	0.20	0.21	材質調査有
32	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.61	0.55	0.45	0.20	0.19	材質調査有
33	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.34	0.33	0.23	0.10	0.04	小型
34	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.80	0.77	0.70	0.10	0.71	
35	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.34	0.26	0.22	0.10	0.03	小型
36	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.41	0.39	0.31	0.10	0.09	
37	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.65	0.61	0.30	0.30	0.16	

表 50 成塚向山2号墳出土 玉製品観察表(2)

玉番号	種類	材質		色調	製作技法	縦長 (cm)	横長 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
		材質名	Al ₂ O ₃ 含有量								
38	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.72	0.70	0.39	0.10	0.31	
39	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	鋳型	0.40	0.39	0.28	0.10	0.06	材質調査有
40	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	淡青色半透明	引き伸ばし	0.55	0.48	0.43	0.20	0.20	古相・材質調査有
41	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.66	0.62	0.40	0.20	0.24	大型・材質調査有
42	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.39	0.38	0.26	0.15	0.06	
43	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.41	0.40	0.23	0.10	0.05	
44	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.47	0.45	0.25	0.15	0.07	
45	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.33	0.32	0.19	0.15	0.03	小型
46	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.37	0.36	0.24	0.10	0.05	
47	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.61	0.59	0.34	0.15	0.19	
48	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	淡青色半透明	引き伸ばし	0.56	0.52	0.34	0.20	0.14	古相
49	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.34	0.33	0.21	0.10	0.04	
50	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.57	0.50	0.48	0.20	0.24	
51	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.65	0.63	0.40	0.15	0.25	
52	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.42	0.41	0.34	0.20	0.08	
53	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.44	0.41	0.28	0.15	0.06	
54	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.41	0.39	0.30	0.10	0.07	
55	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.38	0.37	0.27	0.10	0.06	
56	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.34	0.33	0.23	0.10	0.04	小型
57	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.38	0.31	0.20	0.15	0.04	小型
58	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.37	0.36	0.23	0.10	0.05	
59	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.69	0.64	0.40	0.20	0.29	
60	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.59	0.58	0.67	0.25	0.38	
61	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.53	0.50	0.40	0.15	0.17	
62	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.60	0.57	0.46	0.15	0.27	
63	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.68	0.65	0.39	0.20	0.25	材質調査有
64	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.41	0.40	0.24	0.15	0.06	
65	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.41	0.39	0.26	0.10	0.06	
66	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.38	0.36	0.27	0.15	0.05	
67	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.43	0.42	0.31	0.10	0.09	
68	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.40	0.39	0.28	0.10	0.07	
69	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	淡青色透明	引き伸ばし	0.37	0.36	0.19	0.10	0.04	緑味強・材質調査有
70	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.38	0.37	0.21	0.10	0.05	
71	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.36	0.33	0.21	0.10	0.04	
72	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.52	0.50	0.37	0.15	0.15	
73	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.36	0.34	0.20	0.10	0.03	小型
74	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.36	0.35	0.22	0.15	0.04	小型
75	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.38	0.37	0.22	0.10	0.05	
76	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.42	0.41	0.24	0.15	0.06	材質調査有
77	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.33	0.32	0.17	0.10	0.04	
78	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.46	0.45	0.29	0.10	0.09	
79	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.43	0.42	0.29	0.15	0.08	小型・材質調査有
80	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.36	0.35	0.28	0.10	0.05	
81	小玉	ソーダ石灰ガラス	多い	濃青色透明	引き伸ばし	0.65	0.64	0.48	0.20	0.33	緑味強
82	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.56	0.52	0.30	0.15	0.14	
83	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.41	0.40	0.25	0.10	0.06	
84	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.40	0.39	0.24	0.15	0.05	
85	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.37	0.35	0.19	0.10	0.03	
86	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.40	0.38	0.24	0.10	0.05	
87	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.53	0.51	0.38	0.15	0.16	
88	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.38	0.36	0.23	0.10	0.04	
89	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.40	0.39	0.20	0.15	0.04	
90	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.41	0.39	0.30	0.10	0.07	
91	小玉	ソーダ石灰ガラス	少ない	紺色	引き伸ばし	0.42	0.40	0.30	0.15	0.07	材質調査有
92	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.36	0.34	0.26	0.10	0.05	
93	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.37	0.36	0.26	0.10	0.05	
94	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.62	0.60	0.52	0.20	0.28	
95	小玉	★	-	紺色	鋳型	0.42	0.41	0.28	0.10	0.04	
96	小玉	カリガラス	-	紺色	引き伸ばし	0.52	0.48	0.36	0.15	0.14	

※ 表 49・50 の「材質名」欄中の★印は「異なった材質のガラスが混合している可能性がある」ことを示す。

第5章 調査報告3

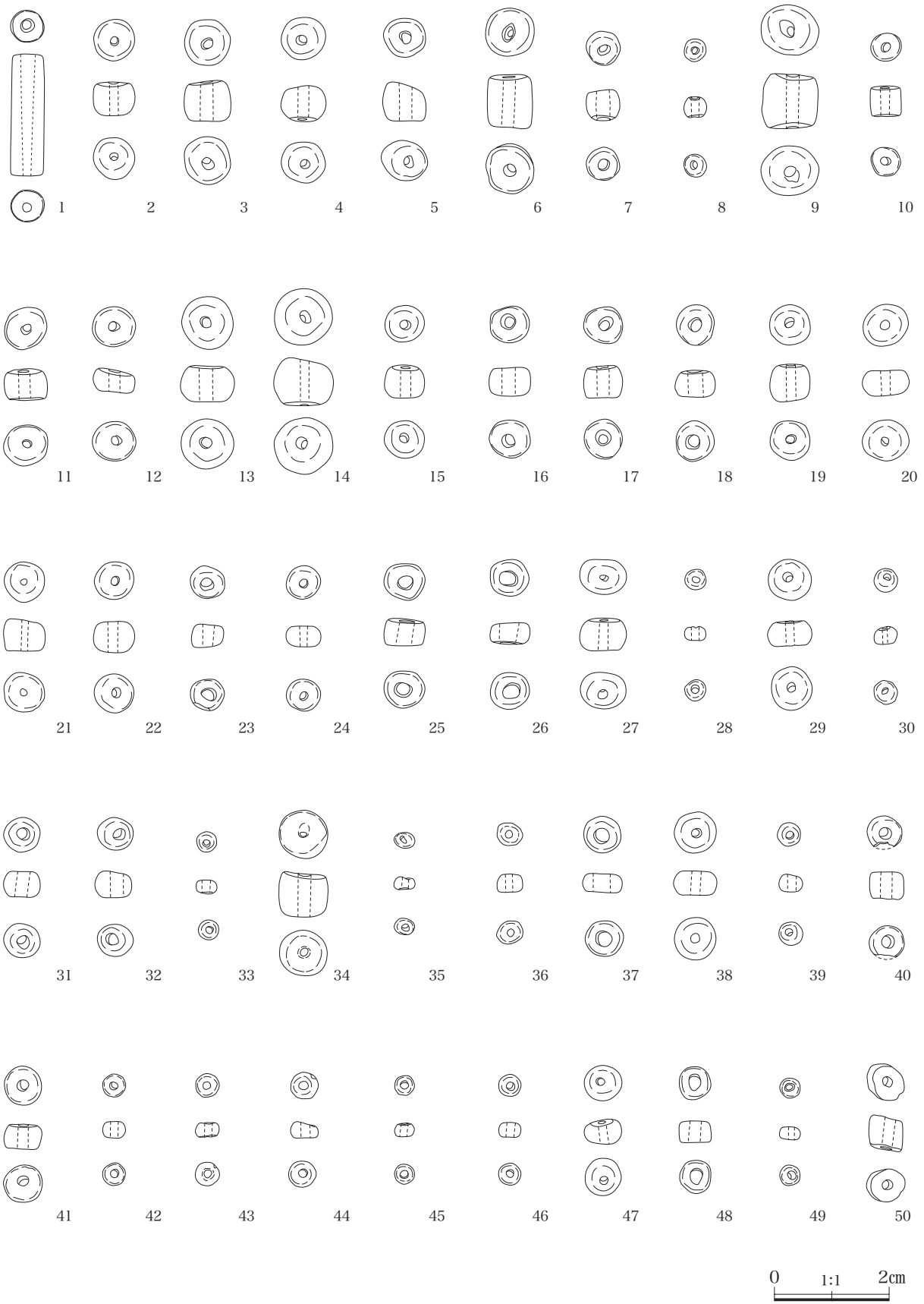


図198 石室内出土 玉製品(1) 1~50

7 出土遺物について

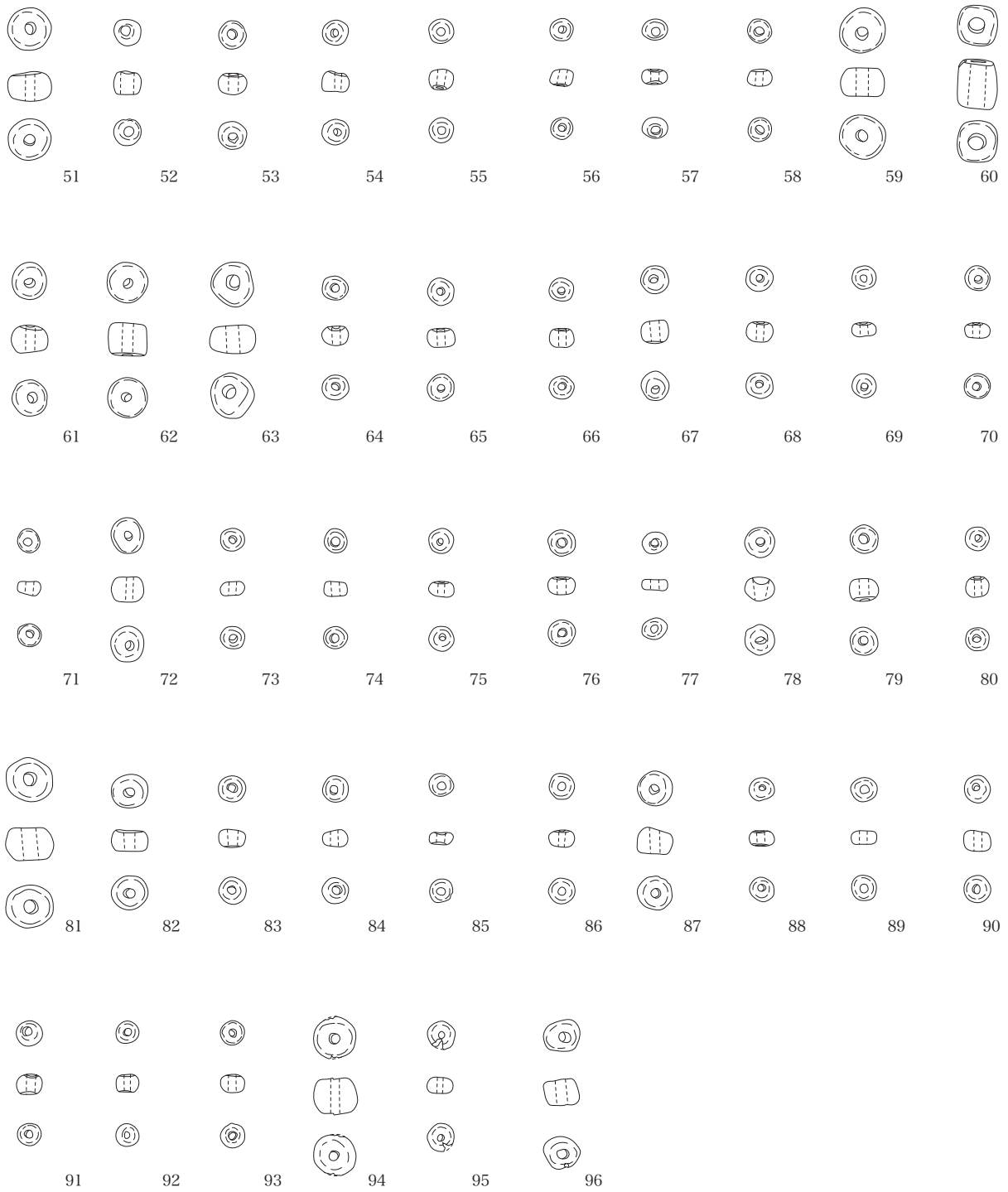


図 199 石室内出土 玉製品 (2) 51 ~ 96

(6)土器

土師器および須恵器があるが、いずれも破片資料である。

土師器は6点あり、甕の底部が3点(土1・3・4)、高坏の脚部が1点(土2)、坏身が2点(土5・6)の6点である。このうち、5点(土1~5)は墳丘盛土下の旧地表面からの出土で、1点(土6)は石室南側の攪乱土中からの出土である。

須恵器は1点あり、小型壺または埴瓶の口縁(土7)と思われる。

これらの土器のうち、時期特定が可能な資料は土師器2点(土5・6)、須恵器1点(土7)であるが、いずれも6世紀後半の帰属が妥当と思える。(深澤)

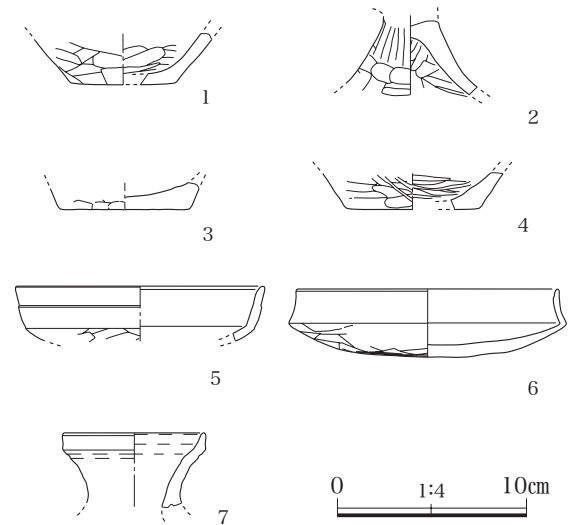


図200 墳丘盛土下および周辺部

表51 成塚向山2号墳出土土器観察表

遺物番号	図版番号	器種	出土層位	残存	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・焼成・胎土・その他
2号墳1	図200 PL80	土師器 甕	墳丘盛土下 地表面	底部	底径 6.0 残高 2.6	・底部は平底であり、胴部からは明確に突出はない。	(外面) 胴部は斜横位のナデを施す。底部もナデまたはケズリによって平底化する。(内面) 斜横位のナデを施す。	(色調) 褐灰色。(焼成) 酸化焰焼成。やや良。(胎土) やや緻密。
2号墳2	図200 PL80	土師器 高坏?	墳丘盛土下 地表面	脚部	頸径 2.8 残高 4.3	・脚部はやや外反気味に開く。中位に穿孔はない。	(外面) 器面の摩滅のため不明瞭であるが、脚部上位には縦位ミガキを施し、それ以下には斜横位ナデを施したと観察できる。(内面) 丁寧な斜横位ヘラナデを施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) 酸化焰焼成。やや良好。(胎土) やや砂質。チャート・凝灰灰片の混入がやや目立つ。
2号墳3	図200 PL80	土師器 甕?	墳丘盛土下 地表面	底部	底径 6.9 残高 1.3	・底部は平底。	(外面) 底部はナデを施す。(内面) 器面剥落のため不明。	(色調) 明黄褐色。(焼成) 酸化焰焼成。やや良。(胎土) やや緻密。
2号墳4	図200 PL80	土師器 甕	墳丘盛土下 地表面	底部	底径 7.0 残高 1.9	・底部は平底であり、胴部からは明確に突出はない。	(外面) 胴部は斜横位のナデ後、粗い斜位ミガキを施す。底部もナデまたはケズリによって平底化する。(内面) 斜横位ミガキを施す。	(色調) ぶい黄橙色。(焼成) 酸化焰焼成。やや良。(胎土) やや緻密。
2号墳5	図200 PL80	土師器 坏身	墳丘盛土下 地表面	口縁部 体部	口径 13.2 残高 2.9	・口縁部は短く開き、端部は丸く収まる。中位に弱い段を有する。口縁部と体部との境界は明確に屈曲し、稜が入る。体部は浅い丸底と思われる。	(外面) 口縁部はヨコナデを施す。体部は斜位ケズリを施す。(内面) 口縁部はヨコナデを施す。体部は不明。	(色調) 橙色。(焼成) 酸化焰焼成。やや良好。(胎土) やや砂質。
2号墳6	図200 PL80	土師器 坏身	石室南側 墳丘裾	口縁部 体部	口径 14.1 残高 3.8	・口縁部は短く、やや外反気味に内斜し、端部は丸く収まる。口縁部と体部との境界は明確に屈曲し、稜が入る。体部は浅い丸底を呈する。	(外面) 口縁部はヨコナデを施す。体部は斜位ケズリを施す。(内面) 口縁部はヨコナデを施す。体部は不明方向ナデを施す。	(色調) 灰黄褐色。(焼成) 酸化焰焼成。やや良好。(胎土) やや砂質。
2号墳7	図200 PL80	須恵器 壺	514-257	口縁部	口径 7.5 残高 4.0	・口縁部は短く、直立気味に外反して開く。口縁端部には幅0.8cmの面をもち、その直下には1条の沈線が廻る。	(内外面) 轆轤整形によるヨコナデを施す。	(色調) 灰色(焼成) 還元焰焼成。良好。(胎土) 緻密。